蕪村一代集

装幀 津田青楓

蕪村短册

（武藤一郎氏藏）

召波居士七周の追善に
招魂のこゝろを申侍る

いざ雪車にのりの旅人とく來ませ

蕪村拜

同

（嶋谷淳三氏藏）

桐火桶無絃の琴の撫ごゝろ

蕪村

蕪村筆三十六俳仙

（鈴木廉平氏藏）

序并解題

明治に於ける蕪村研究は作句の對象として、ひたすら其の摸倣に了つたかの如くであるが、これによつて俳句革新の道が開拓されたのだから、其の研究は偉大なる成功を告げた訣であつた。正岡子規氏の蕪村禮讃に對して、秋聲會諸氏の文献資料を提供した事業も亦看過し難いけれど、子規氏の提唱による『蕪村句集講義』が、輪講に際して考證的に甚しく不用意でこそあつたれ、秋聲會の仕事として『蕪翁句集』の飜刻及び『蕪翁句集拾遺』の編纂を見たのみと比較して、遂に多大の價値を持つことを否み難いのである。子規氏の遺圖を承けて高濱虚子・河東碧梧桐その他の諸氏が、『蕪村遺稿講義』を完了して、蕪村の俳句に關する評釋はほゞ一ト纏りを遂げたが、木村架空氏の『蕪村夢物語』の非難の道理ある事も認めなければならぬ。子規氏の系統の人々は文献的研究の面倒なるを以て、いく分故意にこれを輕視したかに見えるが、大阪の水落露石氏は或は『蕪村遺稿』の發見に、『春興帖(夜半樂)』の覆刻に、書翰の紹介に力を盡して此の方面の研究者として後人を示唆するところ尠少でなかつた。蕪村の傳記として大野洒竹氏の『與謝蕪村』は今日より見れば氣の毒なほど寡少な材料を以て、よくあれまでに纏め得たと思はるゝ點に於て敬服せしむるものがある。併し明治に於ける蕪村研究は、大正に至つて古俳書研究の勃興に伴つて發見、紹介された文献資料の豐富なるに比して同日の談でない。大正に於ける蕪村研究、主として資料の發見、紹介は河東碧梧桐、潁原退藏、乾猷平の三氏が互ひに理解して爭はず、然も別箇な方面に向つて其の研究を發展させた結果である事は特筆してよいと思ふ。碧梧桐氏は批判的態度を以て多くの論文を發表したが、現に『日本文學講座』にその主力を傾注した『蕪村研究』を掲載して居り、潁原氏は「蕪村全集」に全ゆる文献資料をまとめて發表し、乾氏は「蕪村の新研究」より引つゞき蕪村の[illegible]と稱さるゝ京

都寺村氏の諒解を得て、今人未見の遺文書に就き『蕪村と其周圍』を著述し、今後も續稿を刊行して傳記方面に資するところあらんとして居る。『俳書大系』の第八卷として『蕪村一代集』を豫定し、不敏其の編纂を擔當する事となつたが、前記三氏の發見、紹介以外には既に三氏に提供し了つて、今さら新資料とて持ち合せがないのであるから、編纂に着手する時期を逸し、漸く最後の配本に當つて坐右の諸資料を整理したので、内心忸怩たる点はあるが、幸ひ前記三氏の各研究の出發に於て、多少とも微力をいたした爲めに、本集への轉載及び質疑に對して快諾、回答された結果、ともかくも從來の蕪村全集とは體裁、内容を異にするものを編纂し得た次第である。標題は一代集であるが内容は蕪村全集と稱しても過言でないと思ふが、これ全く不敏一人の力のよくする處でない。川西和露氏の援助によるところ亦多大である。編纂の方針は蕪村一代を通じて其の俳句・連句・文章・書翰の現存するものを以て内編に充て、蕪村の著作、遺稿、追善の明治以前板行されたものを以て外編とし、此の内外二編は截然たる區別を設けずして、相關的に交渉を持たせ、これを以て一代集として新しい體裁を備へるように考慮したので、その点『一茶一代集』と同一の様式であるが、かれより此の方に多方面の色彩と特色を具備してゐる筈である。以下項目別にそれ〳〵の解題を試みるであらう。

蕪村俳句類聚

前に芭蕉・一茶の両一代集に採用した如く年代順及び類題の兩者を併用せしむる爲め、先づ蕪村の全俳句を季題別に分類し、作句年代を註すると共に、その句の引用書を記したのである。季題別に就いては時候・天文・人事・動物・植物の五要項により、現行歲事記の地理は時候に、宗教は――『一茶一代集』には別扱ひとしたが――人事に入れ、その

題毎に作句の年代順にならべ、年代考證の分は引用書の內容によつて順位を定めたのである。作句の年代別は寺村氏の藏する百池存稿の如く、明確な記錄でない限りは考證に困難であるが、引用書の編集年代より、又は書翰の內容より推定したので、穎原氏の全集、乾氏の『蕪村と其周圍』とを比較對照した結果に據る。年代考證とは薄弱な手がゝりさへ得られないもので、後日の考證によつて決定す可き意味である。引用書中二三の孫引もあるが、大體私の手抄して置いたもので、それに俳書大系編纂中の偶見を添へたのである。但し秋聲會編『蕪翁句集拾遺』は博引旁證とはいひ難く『新五子稿』の如きも覗いて居ないようであるから、特別の場合を除いて引用書名に擧げなかつた處が多い。

蕪村俳句異同考　芭蕉や一茶の俳句に異同の多い事は誰しも氣附くところであるが、蕪村の俳句にかほど多くの異同を發見しようとは豫期しなかつたのである。俳句類聚の編纂中一句づゝカードに寫させたものを整理する際、文字の異同ある分は別に存置し、それを更に一括したため、記載の順序に一定の方針を置かず、どんな句に異同があるかを索出するにはやゝ不都合であるかも知れない。異同の生じた理由は、蕪村の句に初案と後案があり『蕪村句集』から抄出した諸俳書の誤寫もあつて、一概にはいへないが、確に誤字と思はるゝものはこの異同考に收めなかつた。

蕪村句集　几董の編集した『蕪村句集』は甚だよく洗練されて居て、蕪村の傑出せる俳句はこれを以て選び盡されて了つたといつてよい。酒竹氏は『蕪村句集後篇』をその著『蕪村曉臺全集』に附載したが、露石氏の紹介した『蕪村遺稿』と共に、前集たる几董の編集には到底比較にならない。几董によつて蕪村の佳句は完全に蒐められて了つたからである。『蕪村俳句類聚』を編纂して几董の目こぼしの夥しきに驚いたが、句の價値に至つては何集の上に敢て加ふ可き何物もないのみか、逸句の拾輯されて却つて蕪村の技倆に對して、疑ひをさしはさましむる結果となりはし

ないかとさへ危ぶまれるので、一層几董編の句集を等閑に附し難いのを知つて、類聚とは重複するが特に此の『蕪村句集』を板本のまゝ再錄する事としたのである。俳書大系の俳書の字義に拘泥したのではないが、本集を再錄した事によつて讀者は决して蛇足の感を抱くものでない事を信ずる。

蕪村發句解　蕪村の發見者としての誇を明治の俳人から奪ふものは、此の一篇の『蕪村發句解』であらねばならぬ。蕪村の名は既に忘られて了つた筈の文政年中、海外の異國視せられた今の北海道函館の俳人梅窓吉田布席によつて、著述板行された事實が既に驚異を以て迎へられるであらう。松窓乙二說とある如く布席の師事した乙二に就いて、その句解を聞いて筆錄したのであるが、布席の蕪村に對しての深い理解がなかつたら、此の書のあらはる可き筈がない。乙二・布席の二人こそ、明治以前に於ける蕪村の發見者として記錄されて然るべきである。秋聲會の『蕪翁句集』の頭註に加へられ、その他二三の蕪村關係のものに收められてゐるが、こゝに復再錄した理由はこれ以上言葉を費す必要があるまい。

蕪村連句選集

流布本『蕪村七部集』は大方几董の選集で、蕪村几董七部集と呼ぶ事の適切なるを覺えるが、これによつても蕪村の著述の乏しく、其の俳句と比較して連句の甚だ尠かる可きを豫想せしむる處がある。潁原氏の全集が出版される前まで、蕪村の連句に關心するものは、研究者といへども絕無と云つてよかつた。然るに蕪村文献の新しい發見は、その連句の寧ろ多きに過ぐる數に接して、今後の蕪村の研究は斷じて其の連句を無視するを許さない事となつたのである。京都の寺村氏は乾氏の既に發表したものゝ外、なほ多くの蕪村出座の連句草稿を藏するさうであるが、本集には今日

まで發表又は紹介された連句の全部を收めて、蕪村の作は一句乃至二三句に過ぎない卷も全篇省略する處なく採錄し、蕪村の連句を通觀するに差閊なきよう種々手を廻したが、未發表の分に遠慮して選集の名を用ひたのである。芭蕉・一茶の一代集には集成と題して、連句の一卷ごとに解說を附したが、本集には同一年代のもので同一書中にあるものは數卷を合して解說を試み、又『此ほとり』一夜四歌仙及び『桃李』の如きは全篇を收めた爲め、單行本をそつくり飜刻したような結果となつた。

蕪村文集

奇警と可笑味の二つを秤にかける遊戲的氣分の俳文は、謹厚な蕪村のよくするところでない。或は世の俳文の如き故意に文章技巧を本位とするものは、蕪村のいさぎよしとしなかつた處でもあつたらう事は、眼前致景を以て唯一の藝術境とする蕪村の態度から當然な事實でもある。『新華摘』のような隨筆を見てもたゞ眞率に事を敍するのみで、巧みにうがちや落ちをとるような文章の覘ひを定めて居ない。文化丙子春の序ある『蕪村文集』の一半がその序跋をあつめたものに過ぎないのもこれが爲めである。本集には「蕪村文集」の春風馬堤曲が「夜半樂」にあるので除き、その他の文章及び現存の遺文を輯めて一々解說を附して置いたが、連句や書翰のような多くの收穫は最近の蕪村文獻發見者の手にもないようである。たとへば『妖怪書譜』とも見られるものも、その書の怪奇なのが珍とされるので、文章は單純な說明であり、『三俳僧の贊』もふざけてゐるが滑稽味といふほどのものではない。蕪村の俳席の掟「取句法」及び句評の類は文集に入れべきものでないかも知れないが、便宜こゝに附載したのである。

蕪村書翰集

蕪村の性格や生活のあからさまなる反映は、その書翰を通じて明瞭にあらはれて居る。現存の書翰だけで以て趣味のある新しい蕪村傳を述作し得るほど、多樣多方面のものが發見されてゐる。武藤氏の『蕪村書翰集』は筆蹟を其のまゝコロタイプ刷にしたのであるから、不用意の間にその筆癖が考察されて蕪村の手鑒と見てもよいもので、書翰そのものとしても亦充分の價値を持つて居る。碧梧桐氏の考證になる『蕪村書翰』、潁原氏の全集『書簡篇』及び乾氏の紹介されたものゝ孰れもが新しい發見であり、新しい資料であり、その搜索上の苦心亦傍人の窺知し得がたいものがあるので、これを年代又は宛名によつて無造作に排列しては發見者の勞苦を沒却する結果となる爲め、これらの書翰が發表された前後を考慮して、一ト纏めづゝ分載して行く方法を取る事とした。『俳書大系』の使命の上からも、かうした排列法は有意義であるであらう。コロタイプ刷のものは對照して私見により、その他同一書翰で別々に紹介されたものゝ、甚だしい異同は註記し、接續詞の「之」は「これ」と誤り易いのですべて「の」とし、片假名の「ハ」もまぎれ易いので、多くの場合「は」とした外は引用書所載の通りになつ居る。

蕪村著作集

『蕪村七部集』の中で『一夜四歌仙』及び『桃李』は蕪村の著作と見てよいものであるが、既に『蕪村連句選集』に收めてあり、又、『寫經社集』は蕪村板下の純然たる著作ながら『中興俳諧名家集』に載せたので、此の二篇は省き、その餘の著作、遺稿、遺墨の明治以前板行されたものを『蕪村一代集』外編の一として順次覆刻したのである。

夜半樂　安永六年の春興帖として、殊に蕪村の新意匠を以て彫琢に苦心した春風馬堤曲を收めてあるので名高い。『夜半樂』の外題は道立の文章中に見えるが、寺村氏所藏の原本題簽によつて最近確定したものである。板本の俤を存するため、罫線を以て圍ひ、字くばり、行間の如きも板本を臨摸して、活字の配置に相當注意したつもりである。原本の板下は蕪村の自筆である。

花鳥篇　天明二年の蕪村の自序によると同年の板行らしい。朝夕夜半亭の扉をくゞる人々の花さくらの發句をあつめて、それに梅翁の短冊に脇句を望まれて遂に一卷となつた郭公の脇起し歌仙を添へ、『花鳥篇』と題號したのであるといふ。『此ほとり』の再刷本『一夜四歌仙』（和露文庫本）の附錄によつたので、單行本は今以て發見された報に接しない。板下は彫くづされてゐるが、蕪村の書いたものに疑ひない。たゞその柱の文字に不審もあるが、單行本に接しない限りこれで完備したものとして置くより仕方がない。

新花摘　月溪の跋に「翁、ひとゝせ一夏中のほ句かいつくるとて」この稿を起したが、病懶これを果さず、後に旅行の思ひ出を書きさしたもので、物故のゝち月溪これにさし繪を描き、蕪村自筆のまゝ板行したのである。「翁、ひとゝせ」とあるは何年の事であるか。「米侯一周忌」の詞書が疑問の鍵とされて來たが、「几董遺稿」によつて米侯の安永四年四月歿した事が解り、その翌年卽ち安永五年の草稿といふ推定を得たのである。月溪の跋によると天明四年の開板らしいが、實際は寛政九年の出板であると吉澤義則氏は考證してゐる。月溪のさし繪は淡彩が施してあるので、和露文庫本により凸版に注意を加へたが手際よいとは云ひ難いものとなつた。

俳諧三十六歌僊　蕪村の俳書と稱するもので、此の蕉門三十六俳人の書贊ほど流布して居るものはあるまい。然もその多くは模寫である。板本には板表裝の『俳仙帖』、及び醫佛の序、一齋の跋がある文政十一年板『蕪村三十六歌

仙』その明治刷で共角堂什の『蕪村集』などがあるが、原板は寛政十一年板の此の『俳諧三十六歌僊』(和露文庫本)であらう。序文の筆者不二菴は蕪村の故人二柳で、大阪の書林猷可堂の開板に際し、俳仙集の題名を撰み与へたことを述べてゐる。板本の濃淡は凸版を以ては現はし難く、再度調製させたが思ふような出來榮を得なかつたのは殘念である。

反古瓢(十番左右合)　蕪村から不埒者と叱られた月居は果して俳諧的にも墮落したが、几董と共にその門下の俊秀であつた事は爭はれない。蕪村が右二子の發句を十番に配置した句合に對し、寓意的な評語を施したもので、多少詼諧を弄した文章ながら、莊重味をうしなはない處が蕪村の本格である。總評によると天明元年八月の執筆である。蕪村門人で京都の戯作者西村定雅の篋中に祕して居たものを、その著『反古瓢』二編(和露文庫本)に收めて文政七年板行したのである。

蕪村編集

同じ著作ながら全く編纂ものに屬するものは別箇に取扱ふ事として、『たまも集』及び『芭蕉翁附合集』の二書を『蕪村一代集』外編の二として採錄したのである。蕪村時代は古俳書の覆刻が行はれ、それが俳諧中興の動火線となつたので、曉臺、闌更は殊にその方で功績をなしたが、蕪村も時代の感化でかうした編纂に着手したのであらう。

たまも集　古今婦人の發句を四季に類別したもので、その發企の理由や選句の方針に就いては知り得ないが、序文は加賀の千代に、又樓川宛の書翰にその妻田女の作を「偕ミ不レ堪ニ感賞ニ、この方社中のものども甚下風をしたひ申事に御座候」と、お世辭かも知れないが推賛して居る田女に跋を托して安永三年開板したのである。碧梧桐氏が復製本に於て考證した如く、編輯者として杜撰の点があるが、作家蕪村の手際にさう行屆いた考證を求められない

訣で、蕪村の名に托した書肆の企てとはいへない。事實蕪村の出板したものであらう。

芭蕉翁付合集　江戸座の系統を承けて、然も師風を遵守する事を快よしとしなつた蕪村が、蕉門の俳諧を以て其の中心思想として居た事は遺文その他でも看取されるが、「三日、翁の句を唱へざれば、口むばらを生ずべし」とまで勵詣した蕪村に此の著あるは怪しむにあたらない。蓼太にも同名の編著あるが、蕪村の七部集本位なるに對して、蓼太の方が却つて引例豐富である。安永五年の出板で半紙二冊本、板下は筆耕の手をかりて居る。

蕪村行狀集

古俳人の傳記は其の追善集に載するものが詳しく且つ正確である。蕪村の傳、特に行狀は几董の『から檜葉』を以て正しい記錄としなければならぬ。京都金福寺の蕪村翁碑文は簡要を得てゐるが、『から檜葉』の夜半翁終焉記の情義をつくせるとは問題にならない。『蕪村一代集』外編の三として、これに紫曉の『常盤の香』を添へて、蕪村の行狀資料に充てた微意は蕪村愛好者の必らず喜ぶところであらう。

から檜葉　几董の泣血を濺いだ夜半翁終焉記は、『几董遺稿』で見ると推敲の痕あり〳〵として、蕪村の一生及び晩年の淋しい生活、其の病床に於ける狀況を詳記してゐるが、月溪の書翰では最期の水は門人中月溪一人でそゝいだらしく、几董の文章にその邊の潤色あるを免れないようである。天明三年十二月廿五日蕪村の故人となるや、翌る廿六日夜半亭で興行した追善の百韻發句「から檜葉の西に折るゝや霜の聲　几董」を外題として、上下二卷に知己、門人の追憶と俳諧をあつめてある。天明四年の開板である。

常盤の香　几董の春宵樓を嗣号した紫曉が、寛政十一年蕪村の十七回忌に追善の爲め編集したのである。蕪村の

行狀集として見る者は、全體に紫曉の個人色が強いので失望するだらうが、蕪村の追善集として故水落露石氏の紹介によつて始めて存在を知られたもので、まだ覆刻書が現はれない故、碧梧桐氏の露石文庫本を借用された時、一瞥筆寫して置いたものにより、更に校合の際、氏の自寫原稿を借覽する好意に浴してこゝに附載したのである。

『蕪村一代集』を編纂するに當つて、當初より蕪村に關する多數の藏本を隨時貸與された川西和露氏の恩惠によるは勿論、本書中屢々記した如く碧梧桐氏をはじめ、潁原、乾兩氏の好意に對して深甚の謝意を致さなければならぬ。

(勝峰晋風)

附言、本集の編纂につき文學士酒井清一氏及び鈴木虎之助氏は卷輸の排列と俳句の分類に、又小林源太郎、箕浦庄太郎兩氏は諸書より筆寫の勞にあたつて、私の編纂を容易ならしめた事をこゝに感謝したい。

日本俳書大系 第八巻 蕪村一代集 目次

筆蹟

蕪村筆短册・自畫賛・書翰

蕪村俳句類聚

蕪村俳句類聚

勝峰晉風編

新年之部

初日(はつひ)

日の光今朝や鰯のかしらより　【年代考證―句集】

祇園會のはやしものは不協秋風音律
蕉門のさびしをりは可避春興盛席
されはこの日の俳諧は、わか〳〵しき吾妻の人の口質にならはんとて

安永丁酉初會

歳旦(さいたん)

歳旦をしたり皃なる俳諧師　【安永六年―夜半樂】

安永乙未歳旦

老の春(おいのはる)

ほうらいの山まつりせん老の春　【安永四年―紫狐庵聯句集 五車反古】

花の春(はなのはる)

花の春誰ソやさくらの春と秋　【安永三年―紫狐庵聯句集 雁風呂】

歳旦

明の春　かづらきの帋子脱ばや明の春　【明和八年―明和辛卯春歳旦帖】

安永癸巳

門松　錦木やまことの男門の松　【安永二年―紫狐庵聯句集】

我門や松は二木をみつの朝　【年代考證―新五子稿・文集】

若水　若水や花のつぼみの一釣瓶　【安永元年―紫狐庵聯句集】

明和壬辰春

飾り藁　神風や霞に歸るかざり藁　【明和九年―紫狐庵聯句集】

雜煮　三椀の雜煮かゆるや長者ぶり　【年代考證―句集・狹蓑集】

初霞　殊更に唐人座敷初がすみ　【同　―新五子稿】

歲旦

初烏　己が羽の文字もよめたり初烏　【安永年中―津守舟】

三たりが初老を賀するに、三面の文字を立入、三始の吟を以す

福壽草　歲月日三のかほりや福壽草　【天明三年―摺物】

朝日さす弓師が店や福壽草　【年代考證―遺稿】

つちのとの亥をはじめとし、又もや松のみどり子にこまかへり、老行さきの千ゝの春風吹つた　て、つきせぬ宿のめでたさを、大和の國なる何來の主が本卦の賀に申侍る

一字借音

筆始(ふではじめ) 大和假名いの字を見の筆はじめ 〔安永八年―文集賀詞〕

凧(いかのぼり) 凧きのふの空のありどころ 〔年代考證―句集〕

やぶいりのまたいで過ぬ几巾の糸 〔同―句集〕

萬歳(まんざい) きのふ見し萬歳に逢ふや嵯峨の町 〔天明三年―書翰〕

入日

七種(なゝくさ) 七くさや袴の紐の片むすび 〔年代考證―句集・狹蓑集〕

延寶之句法

削り掛(けづりかけ) 餅旧苔の眹を削れば風新柳のけづりかけ 〔明和八年―明和辛卯春歲旦帖〕

烏帽子袴のさはやかなるは、よべ見し垢面郎歟。そも誰殿のむこがねにて御わたり候ぞ

太郎月(たらうづき) 罷出たものは物ぐさ太郎月 〔安永八年―ふたりづれ〕

藪入(やぶいり) やぶ入や浪花を出て長柄川 〔安永六年―夜半樂〕

やぶ入の宿は狂女の隣かな 〔安永年中―津守船〕

やぶ入は中山寺の男かな 〔年代考證―句集〕

養父入や鐵漿もらひ來る傘の下 〔同―句集〕

やぶ入の夢や小豆の煮るうち 〔同―句集〕

藪入やよそ目ながらの愛宕山 〔同―句集、發句手爾波草〕

やぶいりや守袋をわすれ草　〔年代考證―句集・發句手爾波草〕

やぶ入や鳩にめでつゝ男山　〔同　―遺　稿〕

養父入を守れ子安の地藏尊　〔同　―遺　稿〕

春之部

時候

余寒（よかん）　春寒（はるさむ）　雪解（ゆきげ）　水温む（みづぬるむ）　遲日（おそきひ）

關の戸の火鉢ちいさき余寒哉　〔年代考證―新五子稿・狹蓑集〕

池田から炭くれし春の寒さ哉　〔同　―遺　稿〕

雪解や妹が炬燵に足袋かたし　〔同　―遺　稿〕

雪どけやけふもよしのゝ片便　〔同　―全　集〕

水ぬるむ頭や女のわたし守　〔同　―全　集〕

遲き日や雉の下りゐる橋の上　〔天明二年―几董初懷紙〕

懷旧

遲き日のつもりて遠きむかしかな　〔年代考證―句集・狹蓑集〕

西山遲日

山鳥の尾をふむ春の入日哉　〔同　―句　集〕

くれかぬる日や山鳥のおとしざし　【年代考證―遺稿】

遲き日や草を草切る大手前　【同―遺稿】

遲き日や谺聞ゆる京のすみ　【同―遺稿】

遲き日や都の春を出てもどる　【同―全集】

春の宵

几董とわきのはまにあそびし時

筋違にふとん敷たり宵の春　【安永七年―句集】

公達に狐化たり宵の春　【年代考證―句集】

肘白き僧のかり寝や宵の春　【同―句集】

春の夕

等閑に香たく春の夕かな　【安永四年―春慶引】

春の夕たえなむとする香をつぐ　【年代考證―句集】

閉帳の錦たれたり春の夕　【同―句集・俳諧品彙】

燭の火を燭にうつすや春の夕　【同―新五子稿】

春の夕かの絹羽織きたりけり　【同―遺稿】

春の暮

三月七日發句會羅雲亭

春の暮家路に遠き人斗　【安永二年―百池遺稿】

誰ためのひくき枕ぞはるのくれ　【年代考證―句集】

にほひある衣も疊まず春の暮　【同―句集】

居風呂に棒の師匠や春のくれ　【同―遺稿】

春のくれ筑紫の人とわかれけり　〔年代考證―遺稿〕

うかぶ瀨に沓ならべけり春のくれ　〔同―遺稿〕

あち向に寢た人ゆかし春の暮　〔同―遺稿〕

日ぐれ〱春や昔のおもひ哉　〔同―遺稿〕

大門のおもき扉や春のくれ　〔同―遺稿〕

山彦の南はいづこ春の暮　〔同―遺稿〕

うたゝ寢のさむれば春も暮にけり　〔同―俳諧品彙〕

蛤にたゝれぬ鴫や春の暮　〔同―遺文〕

春(はる)の夜(よ)

春の夜に尊き御所を守身かな　〔明和六年―夏より・句集〕

三月十日召波亭

もろこしの詩客は一刻の宵をおしみ、我朝の哥人はむらさきのあけぼのを賞せり

春の夜や宵あけぼのゝ其中に　〔安永二年―明烏・句集〕

春の夜やたらいを捨る町はづれ　〔年代考證―新五子稿〕

春の夜や狐の誘ふ上童　〔同―遺稿〕

春(はる)の水(みづ)

春の水山なき國を流れけり　〔安永二年―新選〕

橋なくて日暮んとする春の水　〔年代考證―句集〕

春水や四條五條の橋の下　〔同―句集〕

足よはのわたりて濁るはるの水　〔年代考證―句集〕

春の水背戸に田作らんとぞ思ふ　〔同―句集〕

春の水にうたゝ鵜縄の稽古哉　〔同―句集〕

虵を追ふ鱒のおもひや春の水　〔同―句集〕

重箱を洗うて汲むや春の水　〔同―句集拾遺〕

烏帽子着て誰やらわたる春の水　〔同―題林集〕

小舟にて僧都送るや春の水　〔同―遺稿〕

立鴈の足あとよりぞ春の水　〔同―遺稿〕

湖や堅田わたりを春の水　〔同―遺稿〕

里人よ八橋つくれ春の水　〔同―遺稿〕

春の水すみれつばなをぬらしゆく　〔同―遺稿〕

畫舟に狂女のせたり春の水　〔同―遺稿〕

ながれ來て池に戻るや春の水　〔同―遺稿〕

ながれ來る清水も春の水にいる　〔同―遺稿〕

辨當にすくひあげけり春の水　〔同―全集〕

春の流（はるのながれ）

枕する春の流れやみだれ髪　〔同―全集〕

春の海（はるのうみ）

春の海終日のたり〱哉　〔寶暦十年―古選張題〕

帆虱のふどし流さん春の海　〔年代考證―文集夢說〕

暮(くれ)の春(はる)

ある人に句を乞れて

返哥なき青女房よくれの春　「年代考證—句集」

寢佛をきざみ仕舞ば春くれぬ　「同　—遺稿」

いとはるゝ身を恨寢やくれの春　「同　—遺稿」

行(ゆく)春(はる)

行春や撰者を恨む哥の主　「明和六年—平安廿歌仙・續明烏」

召波の別業に遊びて

行春や白き花見ゆ垣のひま　「明和年中—句集・題林集」

洗足の盥も漏りてゆく春や　「明和九年—其雪影」

きのふ暮けふ又くれてゆく春や　「安永九年—連句會草稿」

ゆく春やおもたき琵琶の抱ごゝろ　「天明三年—五車反古」

行春やむらさきさむる筑羽(波)山　「年代考證—句集」

暮春

ゆく春や逡巡として遲ざくら　「同　—句集」

ゆく春や横河へのぼるいもの神　「同　—句集・句艸紙」

ゆく春や歌も聞えず宇佐の宮　「同　—新五子稿・遺稿」

ゆく春や眼に逢はぬめがねうしなひぬ　「同　—遺稿」

行春のいづち去けんかゝり舟　「同　—遺稿」

行春やおもき頭をもたげぬる　「同　—遺稿」

行春の尻べた拂ふ落花哉　【年代考證―篝の畫賛】

春惜む

春をしむ座主の聯句に召れけり　【同　―句　集】

春惜しむ宿やあふみの置火燵　【同　―句　集】

春をしむ人や榎にかくれけり　【同　―遺　稿】

手燭して庭踏人や春おしむ　【同　―題苑集】

春の行方

歩行〳〵ものおもふ春の行衞哉　【同　―新五子稿】

春の限

まだ長ふなる日に春の限りかな　【同　―句　集】

彌生盡

色も香もうしろ姿や彌生盡　【同　―全　集】

春

けふのみの春を歩行て仕廻けり　【明和七年―日発句集・新選】

美角、世を去て非年猶聲有がごとし

うつぼ木の春をあはれむ木魚哉　【天明二年―はなとのみ】

折釘に烏帽子かけたり春の宿　【天明二年―句　集】

春うたゝ犬君が膝の犬張子　【年代考證―全集畫賛】

天文

東風

のうれんに東風吹いせの出店哉　【年代考證―句　集】

河内路や東風吹送る巫女が袖　【同　―句　集】

陽炎（かげろふ）

かげろふや簀に土をめづる人　【安永三年―句集・書簡】

郊外

陽炎や名もしらぬ虫の白き飛　【年代考證―句集・題林集】

陽炎やひそみもあえず土龍　【同　―遺稿】

霞（かすみ）

高麗船のよらで過行霞哉　【安永二年―新選・句集】

指南車を胡地に引去ル霞哉　【安永三年―句集】

野望

草霞み水に聲なき日ぐれ哉　【天明二年―句集・題林集】

春のひくき馬に乗る日の霞哉　【年代考證―新五子稿】

干網

海越て霞の網へ入日哉　【同　―全集】

鐘（かね）霞（かすむ）

山寺や撞そこなひの鐘霞む　【同　―題苑集】

朧（おぼろ）

辛崎の朧いくつぞ與謝の海　【寶暦年中―橋立の秋】

朧夜や人彳るなしの園　【安永二年―新選】

春夜小集探題得　峩眉山月歌

朧（おぼろ）月（づき）

うすぎぬに君が朧や峩眉の月　【明和八年―明和辛卯春歳旦帖】

朧月大河をのぼる御舟哉　【明和九年―紫狐庵聯句集・遺稿】

さしぬきを足でぬぐ夜や朧月　【年代考證―句集】

よき人を宿す小家や朧月　【年代考證―句集】
薬盗む女やは有おぼろ月　【同―句集】

春夜聞琴

瀟湘の鴈のなみだやおぼろ月　【同―句集】
女倶して内裏拝まんおぼろ月　【同―句集】
手枕に身を愛す也おぼろ月　【同―新五子稿】
草臥て物乞ふ宿や朧月　【同―新五子稿】
おぼろ月蛙に濁る水や空　【同―新五子稿・遺稿】
伽羅臭き人のかりねや朧月　【同―題苑集】
月おぼろ高野の坊の夜食時　【同―遺稿】

春の月

春月や印金堂の木のまより　【天明二年―名所小鏡・句集】

春の風

春風や堤長うして家遠し　【安永六年―夜半楽】
野ばかまの法師が旅や春のかぜ　【年代考證―句集】
片町にさらさ染るや春の風　【同―句集】
春風のつまかへしたり春曙抄　【同―遺稿】
春風に阿闍梨の笠の匂哉　【同―遺稿】

無爲庵會

曙のむらさきの幕や春の風　【同―句集】

筏士

春風のさす手ひく手や浮人形　【同―全集】

春風や浪を二見の筆がへし　【同―鬼子句集】

西の京にばけもの栖て、久しく荒はてたる家ありけり。今はそのさたなくて

春雨（はるさめ）

春雨や人住て煙壁を洩る　【安永二年―新選・五車反古】

蓴生ふ池のみかさやはるの雨　【安永四年―津守舟・句集】

春雨やゆるい下駄借す奈良の宿　【安永九年―はるのあけぼの】

春雨や鶴の七日を降くらす　【天明二年―臥央初懐紙】

春の雨日暮むとしてけふも有　【天明二年―几董初懐紙・句集】

雛見世の灯を引ころや春の雨　【年代考證―句集】

はるさめや綱が袂に小でうちん　【同―句集】

春雨やいざよふ月の海半　【同―句集】

柴漬の沈みもやらで春の雨　【同―句集】

春雨やものがたりゆく簑と傘　【同―句集】

瀧口に燈を呼聲や春の雨　【同―句集】

物種の袋ぬらしつ春のあめ　【同―句集】

春雨や身にふる頭巾着たりけり　【同―句集】

夢中吟

春雨やもの書ぬ身のあはれなる　【年代考證―句集】

小原にて

春雨の中におぼろの清水哉　【同―句集】

春雨や小磯の小貝ぬるゝほど　【同―句集】

春雨にぬれつゝ屋根の手毬かな　【同―新五子稿・遺稿】

春雨や同車の君がさゞめごと　【同―遺稿】

春雨の中を流るゝ大河かな　【同―遺稿】

春雨や珠數落したる潦　【同―遺稿】

池と川ひとつになりぬ春の雨　【同―遺稿】

栗島へはだし參りや春の雨　【同―遺稿】

春雨に下駄買ふ初瀨の法師哉　【同―遺稿】

春雨にぬるゝ磬の背中哉　【同―遺稿】

春雨や蛙の腹は未だぬれず　【同―遺稿】

春の雨穴一のあなにたまりけり　【同―遺稿】

栗飯一椀の爲に、五十年の歡樂をむなしくせんよりは、
葉に遊び花に戯れ、さめて後うらみなからんには

春雨や菜めしにさます蝶の夢　【同―句集拾遺】

書にいはく待人遲し春の雨　【年代考證―書簡】

股立の佐々田雄ちぬ雄春の雨　【同　―全集】

人事

爐塞(ろふさぎ)

爐ふさぎや床は維摩に掛替る　【年代考證―句集】

春夜廬會

爐塞て南阮の風呂に入身哉　【同　―句集】

爐塞てたち出る旅のいそぎ哉　【同　―遺稿】

初午(はつうま)

初午やその家〳〵の袖だゝみ　【明和七年―日發句集】

初午や物種賣に日の當る　【天明二年―都枝折】

はつ午や鳥羽四塚の鷄の聲　【天明三年―五車反古】

出代(でかはり)

出代や春さめ〳〵と古葛籠　【年代考證―句集】

正月廿七日田福亭

御忌詣(ぎよきまうで)

難波女や京を寒がる御忌詣　【明和六年―夏より・句集】

御忌の鐘ひゞくや谷の氷迄　【安永四年―紫狐庵聯句集・句集】

御忌のかね時なき京のうねり哉　【年代考證―新五子稿】

ある人のもとにて

彼岸(ひがん)　命婦よりぼた餅たばす彼岸哉　【年代考證—句集・題林集】

正月廿七日夜發句會不藏庵

涅槃會(ねはんゑ)　涅槃會や曉を月夜と成に鳬　【安永二年—百池遺稿】

壬生念佛(みぶねぶつ)　永き日をいはでくるゝや壬生念佛　【年代考證—遺稿】

上巳　二句

雛(ひな)　たらちねの抓までありや雛の鼻　【天明三年—五車反古・題林集】

古雛やむかしの人の袖几帳　【年代考證—句集】

箱を出る皃わすれめや雛二對　【同　—句集】

雛祭る都はづれや桃の月　【同　—句集】

雛の灯にいぬきが袂かゝるなり　【同　—遺稿】

ころも手は露の光や紙ひゝな　【同　—遺稿】

彌生三日ある人のもとにいたりて

草餅(くさもち)　草餅に我苔衣うつれかし　【寶暦年中—俳諧百歌仙】

種浸し(たねひたし)　古河の流引つゝ種ひたし　【安永九年—連句會草稿】

種俵(たねだはら)　よもすがら音なき雨や種俵　【年代考證—句集・猿蓑集】

題老農

種俵ひと夜は老がまくらにも　【同　—全集】

苗代(なはしろ)　苗代や鞍馬の櫻散にけり　【安永二年—明烏・句集】

苗代にうれしき鮒の行衛哉　【年代考證―新五子稿】
櫻ちる苗代水や星月夜　【同―遺稿】
苗代や立ゆがめても伊勢の神　【同―蓼亭書讀集附錄】

燒野

野とゝもに燒る地藏のしきみ哉　【同―句集】
しのゝめに小雨降出す燒野哉　【同―句集】
もの焚た乞食の火より燒野哉　【同―新五子稿】

耕

耕や鳥さへ啼ぬ山かげに　【安永五年―續明烏・狹蓑集】
耕や五石の粟のあるじ皃　【年代考證―句集】

畑打

はた打よこちの在所の鐘が鳴　【同―句集】
畑打や木間の寺の鐘供養　【同―句集】
畑うちや法三章の札のもと　【同―句集】

芭蕉菴會

畑うつやうごかぬ雲もなくなりぬ　【同―句集】
畑打や細きながれをよすがなる　【同―新五子稿】
畑打や我家も見えて暮かぬる　【同―新五子稿】
畑うつや道問人の見えずなりぬ　【同―遺稿】
畑打の目にはなれずよ摩耶が嶽　【同―遺稿】
畑打や耳うとき身の唯一人　【同―遺稿】

畑打や峯の御坊の鶏の聲　【年代考證―遺稿】

鋤の賛

畑に田に打出の鍬や小槌より　【同―句集拾遺】

接木（つぎき）

垣越にものうちかたる接木哉　【同―句集】

茶畠にきせる忘るゝ接木哉　【同―遺稿】

茶摘（ちやつみ）

一とせの茶も摘にけり父と母　【同―新五子稿】

動物

鶯（うぐひす）

正月廿七日田福亭

うぐひすの枝ふみはづす初音哉　【明和六年―夏より・遺稿】

春興　追加

鶯の麁相がましき初音かな　【明和八年―明和辛卯春歳旦帖 句集】

鶯を雀歟と見しそれも春　【明和八年―明和辛卯春歳旦帖 句集】

鶯やかしこ過たる軒のむめ　【明和九年―春慶引・句集】

鶯の二聲はなく枯木かな　【安永二年―春慶引】

我宿の鶯聞ん野に出て　【安永三年―春慶引・遺稿】

鶯の日枝をうしろに高音哉　【安永三年―句集】

うぐひすの枝末を摑む力哉　【安永三年―書簡】

篁にうぐひす啼やわすれ時　【安永五年―遺稿・書簡】

老鶯兒

春もやゝあなうぐひすよむかし聲　【安永六年―夜半樂・新五子稿】

うぐひすや茨くゞりて高う飛　【安永九年―几董初懷紙・連句會草稿】

撞木町鶯西へ飛さりぬ　【安永九年―連句會草稿・遺稿】

うぐひすの二聲耳のほとり哉　【安永九年―連句會草稿・新五子稿】

離落

鶯のあちこちとするや小家がち　【安永二年―續明烏・新選】

うぐひすの鳴やちいさき口明て　【天明二年―はなこのみ・俳諧品彙】

うぐひすの鳴やうどのゝ河柳　【天明二年―名所小鏡・新五子稿】

鶯に終日遠し畑の人　【天明三年―雪中庵且暮帖・新五子稿】

鶯の聲遠き日も暮にけり　【年代考證―句集】

うぐひすや家内揃ふて飯時分　【同　―句集】

留主守て鶯遠く聞夜かな　【同　―新五子稿・遺稿】

鳥來て鶯余所へいなしぬる　【同　―新五子稿】

低き木に黄鳥啼や晝下り　【同　―題苑集・書簡】

家にあらで鶯聞かぬひと日哉　【同　―遺稿】

啼あへてうぐひす飛や山おろし 【年代考證―遺稿】
うぐひすや笠縫の里の里はづれ 【同―遺稿】
鶯や梅ふみこぼすのり盥 【同―遺稿】
うぐひすや柏峠をはなれかね 【同―遺稿】
うぐひすはやよ宗任が初音哉 【同―遺稿】
鶯や野中の墓の竹百竿 【同―遺稿】
うぐひすの啼やあち向こちら向 【同―遺稿】
けさ來つる鶯と見しになかで去る 【同―遺稿】
鶯や堤を下りて竹の中 【同―遺稿】
うぐひすのわするゝばかり引音哉 【同―書翰】

乙鳥

燕啼て夜蛇をうつ小家かな 【安永六年―新虚栗集・句集】
大津繪に糞落しゆく燕かな 【年代考證―句集・題林集】
つばくらや水田の風に吹れ皃 【同―句集】
大和路の宮もわらやもつばめ哉 【同―句集】
乙鳥や去年も來しと語るかも 【同―新五子稿】
わりなしやつばめ巣つくる塔の前 【同―新五子稿】
細き身を子により添る燕哉 【同―遺稿】
ふためいて金の間を出る燕哉 【同―遺稿】

飛魚となる子育るつばめ哉　【年代考證―遺稿】

花に啼聲としもなき燕哉　【同―全集】

雲雀(ひばり)

泥障しけ爰ぞひばりの間所　【同―九一年・新五子稿】

舞雲雀鐵の袖をかざしかな　【同―全集】

ひへ鳥を廿チかさねて雲雀哉　【同―全集】

親雀(おやすゞめ)

飛かはすやたけ心や親すゞめ　【安永九年―連句會草稿・句集】

雉子(きじ)

兀山や何にかくれてきじの聲　【明和七年―俳諧家譜拾遺集・日發句集】

正月廿七日夜發句會探題不藏庵

きじ啼や草の武藏の八平氏　【安永二年―百池遺稿・句集】

きじ鳴や坂を下りの驛舎　【安永三年―句集・書簡】

雉打て歸る家路の日は高し　【天明三年―五車反古・新五子稿】

日ぐるゝに雉子うつ春の山邊かな　【年代考證―句集】

柴刈に砦を出るや雉の聲　【同―句集】

龜山へ通ふ大工やきじの聲　【同―句集】

むくと起て雉追ふ犬や寶でら　【同―句集】

木瓜の陰に皃類ひ住ムきゞす哉　【同―句集】

雉鳴やこゝいなのめの朝日山　【同―遺稿】

きじ啼や御里御坊の苣畠　【同―遺稿】

歸雁（かへるかり）

河内女の宿にゐぬ日や雉の聲　〔年代考證―遺稿〕
きのふ去ニけふいに鴈のなき夜哉　〔明和七年―發句集・句集〕
雁行て門田も遠くおもはるゝ　〔安永五年―さびしをり・句集〕
歸る鴈田ごとの月の曇る夜に　〔年代考證―句集・水薦苅〕
花に去ぬ雁の足あとよめかぬる　〔同―遺稿〕

若鮎（わかあゆ）　鮎汲（あゆくみ）

わか鮎や谷の小笹も一葉行　〔同―新五子稿〕
鮎汲の終日岩に翼かな　〔同―新五子稿〕

蛙（かはづ）

苗代の色紙に遊ぶかはづかな　〔天明二年―句集〕
日は日くれよ夜は夜明ケよと啼蛙　〔天明五年―句集・新雜談集〕

几董が蛙合催しけるに

月に聞て蛙ながむる田面かな　〔年代考證―句集〕
閣に座して遠き蛙をきく夜哉　〔同―句集〕
獨鈷鎌首水かけ論のかはづかな　〔同―句集〕
連哥してもどる夜鳥羽の蛙哉　〔同―句集・新蛙合〕
およぐ時よるべなきさまの蛙かな　〔同―新五子稿〕
うかれ出て背〱の蛙かな　〔同―新五子稿〕
風なくて雨ふれとよぶ蛙哉　〔同―新五子稿〕
彳めば遠くも聞ゆかはづかな　〔同―遺稿〕

蜆

むき蜆石山の櫻ちりにけり　【年代考證―遺稿】

田螺

三月十日召波亭

拾ひのこす田螺に月の夕べかな　【明和六年―夏より・題苑集】

そこ〳〵に京見過しぬ田にし賣　【年代考證―句集】

なつかしき津守の里や田螺あへ　【同―句集】

靜さに堪えて水澄たにしかな　【同―句集】

鴈立て驚破田にしの戸を閉る　【同―句集】

揚土の小雨つれなき田にしかな　【同―新五子稿】

鍬そゝぐ水や田螺の戸々による　【同―遺稿】

蝶

正月廿七日夜發句會不藏庵

うつゝなき抓ミごゝろの胡蝶哉　【安永二年―百池遺稿・句集】

伊勢武者のしころにとまるこ蝶哉　【年代考證―新五子稿】

島原の中履にちかきこてふかな　【同―新五子稿】

釣鐘にとまりて眠る胡てふ哉　【同―遺稿・題苑集】

蜂

蜂蜜に根はうるほひて老木哉　【明和七年―孝婦記】

山蜂や木丸殿の雨の中　【年代考證―遺稿】

出舟や蜂うち拂ふみなれ棹　【同―遺稿】

蠶

神棚の灯は怠じ蠶時　【天明二年―都枝折】

今年より歪はじめぬ小百姓　【年代考證―新五子稿・遺稿】

植物

梅(うめ)

正月十日山吹亭

野邊の梅白くも赤くもあらぬ哉　【明和六年―夏より・遺稿】

風鳥の喰ラひこぼすや梅の風　【明和八年　明和辛卯春歳旦帖・遺稿】

松下の障子に梅の日影哉　【安永二年―紫狐庵聯句集】

うめ折て皺手にかこつ薫かな　【安永三年―句集】

塊に笞うつ梅のあるじ哉　【安永三年―遺稿・書翰】

八月十日夜半亭探題

梅が香に夕暮早き麓哉　【安永三年―月並發句帖】

みのむしの古巣に添て梅二輪　【安永四年―紫狐庵聯句集・五車反古】

鳴瀧の植木屋が梅咲にけり　【安永五年―寶晋齋陸元集、新五子稿】

むくつけき僕倶したる梅見哉　【安永六年―書翰】

梅がゝやひそかにおもき裘　【安永六年―書翰】

水に散て花なくなりぬ岸の梅　【安永六年―遺稿・書翰】

舞〳〵の場もふけたり梅がもと　【安永六年―句集】

梅遠近南すべく北すべく　【安永六年―句集・書簡】

源八をわたりて梅のあるじかな　【安永九年―几董初懷紙】

下駄かりてうら山道を梅見哉　【安永九年―連句會草稿】

庵の梅屁ひりて立て徘徊す　【安永九年―連句會草稿】

舟よせて塩魚買ふや岸の梅　【安永九年―連句會草稿】

梅咲て小さくなりぬ雪丸げ　【安永九年―連句會草稿】

散梅に髣髴として霰降　【安永九年―連句會草稿】

江の梅に龜の甲干す晝間哉　【安永九年―連句會草稿】

傀儡の赤き頭巾やうめの花　【天明三年―書簡】

草庵

二もとの梅に遲速を愛す哉　【年代考證―句集】

出べくとして出ずなりぬうめの宿　【同―句集】

宿の梅折取ほどになりにけり　【同―句集】

摺子木で重箱を洗ふがごとくせよとは、政の嚴刻なるをいましめ給ふ、賢き御代の春にあふて

隈〳〵に殘る寒さやうめの花　【同―句集】

うめ散や螺鈿こぼるゝ卓の上　【同―句集】

梅咲て帶買ふ室の遊女かな　【同―句集】

燈を置ヵで人あるさまや梅が宿　【年代考證—句集】
　あらむつかしの假名遣ひやな。字儀に害あらずんばアヽ
　まゝよ
梅咲ぬどれがむめやらうめじややら　【同—句集】
小豆賣小家の梅のつぼみがち　【同—句集】
具足師が古きやどりや梅の花　【同—新五子稿】
御勝手に春正が妻か梅の月　【同—新五子稿】
梅薗に褌引づるあるじかな　【同—梅双紙・題苑集】
一羽來て寢る鳥は何梅の月　【同—遺稿】
さむしろを畠に敷て梅見哉　【同—遺稿】
かはほりのふためき飛や梅の月　【同—遺稿】
梅が香の立のぼりてや月の暈　【同—遺稿】
散るたびに老行梅の梢かな　【同—遺稿】
一輪を五つにわけて梅ちりぬ　【同—全集】
無緣寺の日をなつかしみ梅花　【同—全集】
莚帆に香をうつし飛岸のうめ　【同—全集】
こちの梅も隣の梅も咲にけり　【同—書簡】

白梅（しらうめ）

しら梅のかれ木に戻る月夜哉　【明和七年—日發句集・句集】

庭梅

白梅や鶴裳を着てうたゝ對す　【安永六年―几董丁酉句帖・句集】

初春

しら梅に明る夜ばかりとなりにけり　【天明三年―から檜葉・常盤の香】

から檜葉に――しばらくありて又、しら梅に明る夜ばかりとなりにけり　こは初春とかゝ置べしとぞ。

しら梅や北野の茶店にすまひ取　【年代考證―句集】

白梅や墨芳しき鴻臚館　【同―句集】

しら梅や誰むかしより垣の外　【同―句集】

白梅やわすれ花にも似たる哉　【同―遺稿】

紅梅

紅梅や比丘より劣る比丘尼寺　【安永三年―句集・書簡】

紅梅の落花燃らむ馬の糞　【天明三年―几董初懐紙・句集】

紅梅や入日の襲ふ松かしは　【年代考證―遺稿】

紅梅や黄鳥とまる第三枝　【同―書簡】

柳

一筋も捨たる枝なき柳かな　【明和四年―春慶引・新五子稿】

三月廿七日田福亭

風吹ぬ夜はもの凄き柳哉　【明和六年―夏より・遺稿】

春興　追加

出る杭を打うとしたりや柳哉　【明和八年―明和辛卯春歳旦帖・句集】

一軒の茶見世の柳老にけり　【安永六年―夜半樂・新五子稿】

若草に根をわすれたる柳かな　【年代考證―句　作】

梅ちりてさびしく成しやなぎ哉　【同　―句　集】

捨やらで柳さしけり雨のひま　【同　―句　集・俳諧品彙】

朝來道歸客　復是長河湄
立馬折楊柳　更無前日枝

君ゆくや柳みどりに道長し　【同　―全集書翰・新五子稿】

不二おろし十三州のやなぎ哉　【同　―遺　稿】

柳にもやどり木はあり柳下惠　【同　―遺　稿】

門前の嫗が柳糸かけぬ　【同　―遺　稿】

やなぎから日のくれかゝる野道哉　【同　―遺　稿】

三尺の鯉くゝりけり柳影　【同　―遺　稿】

青柳（あをやぎ）

青柳や芹生の里のせりの中　【天明二年―句　集・名所小鏡】

禁城春色曉蒼く

青柳や我大君の艸か木か　【年代考證―句　集】

桃（もゝ）

三月七日發句會羅雲亭

商人を吼る犬ありもゝの花　【安永二年―百池遺稿・句　集】

桃の花ちるや任口去てのち　【年代考證―續桃の實・遺　稿】

さくらより桃にしたしき小家哉　【年代考證―句集】

家中衆にさむしろ振ふもゝの宿　【同―句集】

喰ふて寢て牛にならばや桃花　【同―句集・新五子稿】

交へ折て白桃くるゝうれしさよ　【同―新五子稿】

雨の日や都に遠きもゝのやど　【同―新五子稿】

初ざくら

旅人の鼻まだ寒し初ざくら　【同―句集・題林集】

櫻

曉臺が伏水・嵯峩に遊べるに伴ひて

夜桃林を出てあかつき嵯峩の櫻人　【安永五年―句集・題林集】

馬下りて高根の櫻見つけたり　【安永年中―句集】

吉野

花に遠く櫻に近しよしの川　【天明二年―句集】

嵯峨ひと日閑院樣のさくら哉　【年代考證―句集】

手まくらの夢はかざしの櫻哉　【同―句集】

風入馬蹄輕

木の下が蹄のかぜや散さくら　【同―句集】

門口の櫻を雲のはじめかな　【同―新五子稿】

山守の冷飯寒きさくらかな　【同―題苑集・遺稿】

櫻ひと木春に背けるけはひ哉　【同―遺稿】

ちるは櫻落るは花のゆうべ哉　〔年代考證―遺稿〕
さくら散て刺ある草の見ゆる哉　〔同―遺稿〕
たのまれてさくら見に行男かな　〔同―全集〕

糸櫻

ゆき暮て雨もる宿やいとざくら　〔同―句集・題林集〕
いと櫻灯は孤の書院哉　〔同―新五子稿〕

櫻狩

一片花飛減却春

さくら狩美人の腹や減却す　〔同―句集〕

山ざくら

哥屑の松に吹れて山ざくら　〔安永九年―句集・連句會草稿〕
剛力は徒に見過ぬ山ざくら　〔年代考證―句集〕
暮んとす春をゝしほの山ざくら　〔同―句集〕
錢買て入るやよしのゝ山ざくら　〔同―句集〕
まだきとも散りしとも見ゆれ山櫻　〔同―句集〕
みよし野ゝちか道寒し山櫻　〔同―句集〕
海手より日は照つけて山ざくら　〔同―句集〕
飢鳥の花踏こぼす山櫻　〔同―新五子稿〕
噎にも散てめでたし山ざくら　〔同―題苑集〕
人間に鶯鳴や山ざくら　〔同―遺稿〕

平地ゆきてことに遠山櫻哉　【年代考證―遺稿】

さびしさに花咲ぬめり山櫻　【同　―遺稿】

象頭山

象の眼の笑ひかけたり山櫻　【年代考證―落日庵句集】

遲櫻（おそざくら）

生田の森にて

足弱の宿かる爲歟遲櫻　【天明年中―新雜談集・新五子稿】

風聲のおり居の君や遲櫻　【年代考證―新五子稿・蕪亭畫賛集附錄】

柏木のひろ葉見するや遲櫻　【同　―遺稿】

花（はな）

題花

百とせの枝にもどるや花の主　【寶曆二年―双林寺千句】

花の香や嵯峨のともしび消る時　【安永六年―花七日・句集】

花に來て花に居眠るいとま哉　【安永九年―連句會草稿・句集】

石高な都よ花のもどり足　【安永九年―連句會草稿・新五子稿】

花に舞はで歸さにくし白拍子　【安永九年―連句會草稿・句集】

居風呂に後夜きく花のもどりかな　【安永九年―句集・連句會草稿】

花ちりて身の下やみやひの木笠　【天明二年―花鳥篇】

花下に聯句して春を惜む

祇や鑑や髭に落花を捻けり　【天明三年―五車反古】

祖翁百回大會

空にふるはみよしのゝ櫻嵯峨の花　【天明三年―風羅念佛】

祇や鑑や花に香炷ん草むしろ　【天明三年―遺稿】

門子の二三子すり物すとて、余に書畫をもとむ。固辭すれどもゆるさず、さはとて漫に寫して與へぬ

花に暮て我家遠き野道かな　【年代考證―摺物・句集】

日暮るゝほど嵐山を出る

嵯峨へ歸る人はいづこの花に暮し　同―句集】

花の御能過て夜を泣ク浪花人　【同―句集】

高野を下る日

かくれ住て花に眞田が謠かな　【同―句集】

玉川に高野ゝ花や流れ去　【同―句集】

なら道や當皈ばたけの花一木　【同―句集】

ねぶたさの春は御室の花よりぞ　【同―句集】

なには人の木や町にやどりゐしを訪ひて

花を踏し草履も見えて朝寢哉　【同―句集】

花ちるやおもたき笈のうしろより　【同―句集】

阿古久曾のさしぬきふるふ落花哉　【同―句集】

花ちりて木間の寺と成にけり　〔年代考證―句　集・新五子稿〕

よしのを出る日は雨かぜはげしくて

雲を呑て花を吐なるよしの山　〔同　―新五子稿・書　翰〕

花にくれぬ我住む京に歸去來　〔同　―遺　　稿〕

清輔は花にも帒を烏帽子哉　〔同　―遺　　稿〕

下やしき僧都の花も隣けり　〔同　―遺　　稿〕

花に來て繪をつくる嫗哉　〔同　―遺　　稿〕

みよし野に花盜人はなかりけり　〔同　―遺　　稿〕

花ざかり六波羅禿見ぬ日なき　〔同　―遺　　稿〕

かり寢するいとまを花のあるじ哉　〔同　―遺　　稿〕

みやこの花のちりかゝるは、光信が胡粉の剝落したるさまなれ

又平に逢ふや御室の花ざかり　〔同　―畫　賛・遺　稿〕

草臥てねにかへる花のあるじかな　〔同　―文　集・蹊口探序〕

花影上欄干山影入門など、すべてもろこし人の奇作也。されど只一物をうつしうごかすのみ。我日のもとの俳諧の自在は渡月橋にて

月光西にわたれば花影東に歩むかな　〔同　―四　季　文　集〕

短冊はわすれてもよし花と鯛　【年代考證—書簡】

身に更に散かゝる花や下り坂　【同　—遺稿】

ちりつみて筏も花の梢かな　【同　—遺稿】

烏帽子脱て升よと計る落花哉　【同　—遺稿】

大文字筆

散花の反古に成や竹はゝき　【同　—全集】

花の山

鶯の適〳〵啼や花の山　【安永九年—連句會草稿】

花の雲

鞭石翁の五十回忌に

花の雲五色の雲のうはがさね　【安永六年—全集】

大井川の上流に遊びて、陶弘景が詩を感ず

ゆく水にちればぞ贈る花の雲　【年代考證—全集】

花曇

花曇り朧にちかきゆふべかな　【同　—新五子稿】

明和八年辛卯春三月、京師に夜半亭を移して文臺をひらく日

花守

花守の身は弓矢なきかゞし哉　【明和八年—續一夜松後集・から檜葉】

雨日嵐山にあそぶ

花衣

筏士や蓑をあらしの花衣　【安永九年—雪の聲・句集】

花見

傾城は後の世かけて花見哉　【安永九年—連句會草稿・句集】

やごとなき御かたのかざりおろさせ給ひて、かゝろさびしき地にすみ給ひけるにや

小冠者出て花見る人を咎けり　【年代考證―句集・十家類題集】

花見戻丹波の鬼のすだく夜に　【同　―遺稿】

三月十日召波亭

宋屋老人、予が書ける松下箕居の圖を壁間にかけて、常に是を愛す。さればこそ忘年の交りもうとからざりしに、かの終焉の頃はいさゝか故侍りて、餘所に過行、春のなごりもうかりけるに、やがて一周に及べり。今や碑前に其罪を謝す。請、君、我を看て他世上人となすことなかれ。

花の幕

花の幕兼好を覗く女あり　【明和六年―夏より・句集】

松の花

線香の灰やこぼれて松の花　【明和三年―香世界・夏より】

梨の花

甲斐がねに雲こそかゝれ梨の花　【年代考證―句集】

梨の花月に書よむ女あり　【同　―句集】

長き日にましろに咲ぬなしの花　【同　―全集】

椿

あぢきなや椿落うづむにはたずみ　【同　―句集】

ある隱士のもとにて

古庭に茶筌花さく椿かな　【年代考證―句集】
王人の座右にひらくつばき哉　【同―句集】
椿落て昨日の雨をこぼしけり　【同―遺稿】
はら〳〵と霰降り過る椿哉　【同―遺稿】

嘆息此人去　蕭條涂泗空

沓おとす音のみ雨の椿かな　【同―全集】

海棠

海棠や白粉に紅をあやまてる　【同―遺稿】

躑躅

つゝじ野やあらぬ所に麥畑　【安永三年―氷餅集・いしなとり】
つゝじ咲て石移したる嬉しさよ　【安永六年―句集】
近道へ出てうれし野ゝ躑躅哉　【年代考證―句集】
つゝじ咲て片山里の飯白し　【同―句集】
岩に腰我頼光のつゝじ哉　【同―句集】

大文字山といふ題をとりて

大文字や谷間の躑躅もへんとす　【同―月居七部集附錄】
石工の指やぶりたるつゝじ哉　【同―遺稿】
大原や躑躅の中に藏たてゝ　【同―遺稿】
道を取て石をめくればつゝじ哉　【同―書稿】

加久夜長帶刀はさうなき數奇もの也けり。古曾部の入道

はじめてのげざんに、引出物見すべきとて、錦の小帶をさがしもとめける風流などおもひ出つゝ、すゞろ春色に堪へず侍れば

山吹（やまぶき）

山吹や井手を流るゝ鉋屑　【天明三年―句集・几董初懷紙】

藤（ふぢ）

月に遠くおぼゆる藤の色香哉　【安永九年―新五子稿・連句會草稿】

柴の戸にあけくれかゝるしら雲ないつむらさきの雲に見なさむ

法然の珠數もかゝるや松の藤　【天明三年―五車反古・新五子稿】

人なき日藤に培ふ法師かな　【年代考證―句集】

山もとに米踏ム音や藤のはな　【同　―句集】

うつむけに春うちあけて藤の花　【同　―句集】

藤の花あやしき夫婦休けり　【同　―新五子稿】

菜の花（なのはな）

三月廿三日卽興

菜の花や月は東に日は西に　【安永三年―宿の日記・續明烏】

なのはなや笋見ゆる小風呂敷　【年代考證―句集】

菜の花や鯨もよらず海暮ぬ　【同　―句集】

菜の花や皆出拂ひし矢走舟　【同　―句集】

菜の花に僧の脚半の下りけり　【同　―新五子稿・題苑集】

なのはなや晝ひとしきり海の音　【年代考證―遺稿】

菜の花や油乏敷小家がち　【同―遺稿】

なの花や法師が宿はとはで過し　【同―遺稿】

なの花や遠山鳥の尾上まで　【同―遺稿】

菜の花や摩耶を下れば日のくるゝ　【同―遺稿】

蕗の臺

莟とはなれもしらずよ蕗のとう　【同―句集・狭蓑集】

芹

これきりに徑盡たり芹の中　【明和年中―句集・八題集】

古寺やほうろく捨るせりの中　【年代考證―句集】

古道にけふは見て置根芹哉　【同―新五子稿】

蓬

裏門の寺に逢着す蓬かな　【同―句集】

蕨

折もてる蕨しほれて暮遲し　【安永九年―連句會草稿・句集】

わらび野やいざ物焚ん枯つゝじ　【年代考證―句集】

三月菜

よし野出て又珍らしや三月菜　【同―新五百題】

菫

居りたる舟を上ればすみれ哉　【同―句集】

骨拾ふ人にしたしき菫かな　【同―句集】

加茂の堤はむかし文祿のころ、防河使に命ぜられて、あらたにきづかれたり。さてこそ桃花水の愁もなくて、庶民安堵のおもひをなせり

薺花（たゞなのはな）　加茂堤太閤様のすみれかな　【年代考證―書簡】

花咲て菫もすさめぬ薺かな　【安永六年―書簡】

琴心挑美人

三味線草（さみせんさう）　妹が垣根三味線草の花咲ぬ　【安永九年―几董初懐紙】

末黒薄（すぐろのすゝき）　暁の雨やすぐろの薄はら　【年代考證―句集】

海苔（のり）　海苔掬ふ水の一重や宵の雨　【安永九年―新五子稿 連句會草稿】

若和布（わかめ）　草の戸や二見のわかめもらひけり　【年代考證―新五子稿】

夏之部

時候

卯月（うづき）　巫女町によきゝぬすます卯月哉　【安永六年―新花摘】

雲裡房に橋立に別る

短夜（みじかよ）　みじか夜や六里の松に更たらず　【寶暦六年―句集】

五月廿日栖玄庵ニ而烏西興行

みじか夜や地蔵を切て戻りけり　【明和六年―夏より】

四月十八日於二七觀音寺一探題

みじか夜や眠らず守る翁丸　【明和八年―高德院發句會・句集】

嵯峨吟行

みじか夜の闇より出て大井川　【安永二年―帋袋】

短夜や浪うち際の捨篝　【安永三年―句集・書簡】

四月十二日夜半亭

短夜や淺瀨にのこる水の月　【安永四年―月並發句帖】

みじか夜や淺井に柿の花を汲ム　【安永五年―書簡】

みじか夜や曉早き京はづれ　【安永五年―書簡】

みじか夜や八聲の鳥は八ツに啼　【安永六年―新花摘】

みじか夜や葛城山の朝曇り　【安永六年―新花摘】

みじか夜や足跡淺き由井の濱　【安永九年―連句會草稿・新五子稿】

短夜やいとま給るしら拍子　【天明三年―五車反古・句集】

みじか夜や毛むしの上に露の玉　【年代考證―句集・獨喰】

短夜や同心衆の川手水　【同―句集】

みじか夜や枕にちかき銀屛風　【同―句集】

短夜や芦間流るゝ蟹の泡　【同―句集】

みじか夜や二尺落ゆく大井川　【同―句集】

みじか夜や小見世明たる町はづれ　【同―句集】

東都の人を大津の驛に送る

短夜や一ツあまりて志賀の松 〔年代考證―句集〕

みじか夜や伏見の戸ぼそ淀の窓 〔同―句集・題林集〕

みじか夜や芒生添ふ垣のひま 〔同―新五子稿・題苑集〕

みじか夜の闇となりたる廿日かな 〔同―新五子稿〕

みじか夜や金も落さぬ狐つき 〔同―遺稿〕

短夜やおもひもよらぬ夢の告 〔同―遺稿〕

みじか夜や吾妻の人の嵯峨どまり 〔同―遺稿〕

明易し

よすがら三本樹の水樓に宴して

明やすき夜をかくして東山 〔同―句集〕

明安き夜や住のえのわすれ草 〔同―新五子稿〕

明安き夜や稻妻の鞘走 〔同―遺稿・題苑集〕

暑

六月八日召波亭

病人の駕の蠅追ふ暑かな 〔明和五年―夏より・新五子稿〕

六月十五日不夜庵ニ而八文舍興行

日がへりに兀山越るあつさかな 〔明和六年―夏より・句集〕

百姓の生キてはたらく暑かな　【明和年中―書翰】

居りたる舟に寢てゐる暑かな　【年代考證―句集】

端居して妻子を避る暑かな　【同　―句集】

凉し

神宮寺

凉しさや鐘をはなるゝかねの聲　【安永六年―美はしら・句集】

題四山亭

すゞしさをあつめて四つの山おろし　【天明三年―四山集】

すゞしさや都を竪にながれ川　【年代考證―句集・新五子稿】

凉しさに麥を月夜の宇兵衛哉　【同　―遺文・句集拾遺】

汐煙きえて山より日は凉し　【同　―新々五百題】

夏山

夏山や神の名はいさしらにぎて（原註）白幣　【安永六年―新花摘】

夏山や京盡し飛鷺ひとつ　【安永六年―新花摘】

夏山や通ひなれたる若狹人　【年代考證―句集】

夏山やうちかたむいてろくろ引　【同　―遺稿】

夏野

六月廿五日召波亭

鮒ずしの便リも遠き夏野哉　【明和五年―夏より・新五子稿】

討はたす梵論つれ立て夏野かな　【安永六年―新花摘】

おろし置笈に地震なつ野哉　【年代考證―句集】

行ゝてこゝに行ゝ夏野かな　【年代考證―句　集】

貴方の長櫃通るなつ野かな　【同　―新五子稿】

丹波の加悦といふ所にて

夏川（なつかは）

夏河を越すうれしさよ手に草履　【同　―句　集】

五月十六日召波亭

清水（しみづ）

水晶の山路更行清水哉　【明和五年―夏より・新五子稿】

石切の鑿冷したる清水かな　【安永二年―新　選・句　集】

落合ふて音なくなれる清水哉　【安永三年―句　集・宿の日記】

二人してむすべば濁る清水哉　【年代考證―句　集・蔦もみぢ】

我宿にいかに引べきしみづ哉　【同　―句　集】

丸山主水がちいさき龜を寫したるに、賛せよとのぞみければ、仕官縣（懸）命の地に榮利をもとめむよりは、しかじ尾を泥中に曳んには

錢龜や青砥もしらぬ山清水　【同　―句　集】

石工の飛火流るゝしみづ哉　【同　―遺　稿】

しづかさや清水ふみわたる武者わらじ　【同　―遺　稿】

世に流れ出ては濁るか山清水　【同　―全集畫賛】

駿河なる葛人・文母の兩子、みやこの暑さをいとひと

ひて、踊りのいそぎあはたゞしければ

夏(なつ)

見のこすや夏をまだらの京鹿子　【年代考證─全集】

天文

五月雨(さみだれ)

五月廿日栖玄庵ニ而鳥西興行

五月雨や御豆の小家の寢覺がち　【明和六年─夏より・遺稿】

さみだれや田ごとの闇と成にけり　【安永六年─新花摘・句集】

床低き旅のやどりや五月雨　【安永六年─新花摘】

うきくさも沈むばかりよ五月雨　【安永六年─新花摘】

ちか道や水ふみ渡る皐雨　【安永六年─新花摘】

さみだれや鳥羽の小(原注)徑路を人の行　【安永六年─新花摘】

さみだれに見えずなりぬる徑(コミチ)哉　【安永六年─新花摘】

五月雨や滄(アノ)海を衝(ツク)濁水　【安永六年─新花摘】

さみだれや水に錢ふむ渡し舟　【安永六年─新花摘】

濁江に鵜の玉のをや五月雨　【安永六年─新花摘】

揩(カトケ)あえぬはだし詣りや皐雨　【安永六年─新花摘】

さみだれや鵜さへ見えなき淀桂　【安永六年─新花摘】

皐雨や貴布禰の社燈消る時　【安永六年―新花摘】

小田原で合羽買たり五月雨　【安永六年―新花摘・句集】

閼伽桶に何の花ぞもさつきあめ　【安永六年―新花摘】

あか汲て小舟あはれむ五月雨　【安永六年―新花摘】

さみだれの大井越たるかしこさよ　【安永六年―新花摘・句集】

五月雨の堀たのもしき砦かな　【安永六年―新花摘】

丸山主水が畫たる蝦夷の圖に

昆布で葺軒の雫や五月雨　【安永六年―新花摘】

さみだれや大河を前に家二軒　【安永六年―句集・書簡】

帋燭して廊下過るやさつき雨　【安永九年―連句會草稿・新五子稿】

さみだれのかくて暮行月日哉　【安永年中―新五子稿・寂栞】

さみだれのうつぼ柱や老が耳　【年代考證―句集】

湖へ富士をもどすやさつき雨　【同　―句集】

さみだれや佛の花を捨に出る　【同　―句集】

さみだれや名もなき川のおそろしき　【同　―遺稿】

夕立（ゆふだち）

夕立や足のはへたる明俵　【明和年中―書簡】

夕立や草葉を掴むむら雀　【安永五年―續明烏・句集】

白雨や門脇どのゝ人だまり　【年代考證―句集】

雙林寺獨吟千句

ゆふだちや筆もかはかず一千言　【年代考證—句集】

風薫る

六月二十日竹洞亭

高紐にかくる兜やかぜ薫る　【明和五年—夏より・新五子稿】

宮嶋

薫風やともしたてかねついつくしま　【年代考證—句集・題林集】

雲の峰

六月十日娥眉亭兼題

廿日路の背中にたつや雲の峰　【明和三年—夏より・句集】

娥眉亭兼題

飛のりの戻り飛脚や雲の峯　【明和三年—夏より・新五子稿】

寅六月　烏西興行

雨となる戀はしらずや雲の峰　【明和七年—夏より・句集】

六月三日於智恩院中高德院兼題

蛤に口を明すな雲の峰　【明和八年—高德院發句會】

普化去りぬ匂ひのこりて花の雲　と聞えしは晉子がいためる雲中庵の句也。玄峰居士にはひのこりて花の雲　とふりしは、雪中菴三十三回の集編りける時、宗阿翁獨吟なごりの花の句也。其比や膝前に筆をとりて、師の半臂

たすけ、もゝさくらの編集なれり。されや、日月とゞむべからず、飛雲の眼を過るごとく、頓テ又亡師の三十三回にいたれるにおどろく

花の雲三たびかさねて雲の峯　【安永三年――つかのかげ・昔を今】

揚州の津も見えそめて雲の峯　【年代考證――句　集】

雲のみね四澤の水の涸てより　【同　――句　集・題林集】

曠野ゆく身に近づくや雲峰　【同　――遺　稿】

雲の峰に肘する酒呑童子哉　【同　――遺　稿】

夏の月

五月六日大來堂興行

堂守の小草ながめつ夏の月　【明和五年――夏より・句　集】

遠淺に兵舟や夏の月　【天明三年――五車反古・新五子稿】

夜水とる里人の聲や夏の月　【年代考證――句　集・題　叢】

ぬけがけの淺瀬わたるや夏の月　【同　――句　集】

河童の戀する宿や夏の月　【同　――句　集・題林集】

石陣のほとり過けり夏の月　【同　――遺　稿】

殿守のそこらをゆくや夏の月　【同　――遺　稿】

賊舟をよせぬ御船や夏の月　【同　――遺　稿】

寐ぐるしき伏やを出れば夏の月　【同　――全　集・畫　賛】

人事

祇園會（ぎをんゑ）

ぎをん會や僧の訪よる梶が許　【年代考證―句集・題林集】

祇園會や眞葛原の風かほる　【同―句集】

七日

草の雨祭の車過てのち　【同―句集・題林集】

祭（まつり）

夏神樂（なつかぐら）

裸身に神うつりませ夏神樂　【同―句集・題林集】

若禰宜のすが〳〵しさよ夏神樂　【同―新五子稿】

七月一日召波亭

御祓（みそぎ）

灸のない背中流すや夏はらひ　【明和六年―夏より・句集】

つくばふた禰宜でことすむ御祓哉　【年代考證―句集】

出水の加茂に橋なし夏祓　【同―句集】

鴨河のほとりなる田中といへる里にて

ゆふがほに秋風そよぐみそぎ川　【同―句集】

木薬の俤流るゝ御祓川　【同―遺稿】

灌佛（くわんぶつ）

灌佛やもとより腹はかりのやど　【安永六年―新花摘】

卯月八日死ンで生るゝ子は佛　【安永六年新花摘】

灌佛ははだかをしめすはじめ哉　【年代考證―新五子稿】

練供養（ねりくやう）
夏書（げがき）

大佛のこれがならるゝ八日哉　【年代考證―新五子稿】

ねり供養まつり見なる小家哉　【安永六年―新花摘】

味噌汁を喰ぬ娘の夏書哉　【安永二年―新選・新五子稿】

たもとして掃ふ夏書の机哉　【安永六年―新花摘・新五子稿】

雲裡叟、武府の中橋にやどりして、一壺の酒を藏し、一年の粟をたくはへ、たゞひたごもりに籠りて、一夏の發句おこたらじとのもふけなりしも、遠き昔の俤にたちて

なつかしき夏書の墨の匂ひかな　【安永六年―桐の影】

夏百日墨もゆがまぬこゝろかな　【年代考證―句集・題林集】

日を以て數ふる筆の夏書哉　【同　―句集】

施米（せまい）
幟（のぼり）

六月二十日竹洞亭

腹あしき僧こぼし行施米哉　【明和五年―夏より・句集】

木がくれて名譽の家の幟哉　【安永六年―新花摘】

家ふりて幟見せたる翠微哉　【安永六年―新花摘】

粽（ちまき）
藥の日（くすりのひ）
大矢數（おほやかず）

浪花の一本亭に訪れて

粽解て芦吹風の音聞ん　【年代考證―句集】

藥園に雨ふる五月五日かな　【安永六年　新花摘】

若楓矢數の籌もみぢせよ　【安永六年―新花摘】

少年の矢數問寄る念者ぶり　〔安永六年—新花摘〕
ほの〴〵と粥にあけゆく矢數かな　〔安永六年—新花摘〕
大矢數弓師親子もまいりたる　〔安永六年—新花摘〕

虫干（むしぼし）

虫干や甥の僧訪ふ東大寺　〔明和年中—句集〕

土用干（どようぼし）

六月廿五日召波亭
いさゝかな料理出さん土用干　〔明和五年—夏より・遺稿〕

更衣（ころもがへ）

絹着せぬ家中ゆゝしや衣更　〔寶曆十年—古選・句集〕

四月十日召波亭
衣がへ人も五尺のからだかな　〔明和六年—夏より・遺稿〕
更衣身にしら露のはじめ哉　〔安永六　—新花摘〕
ころもがえ母なん藤原氏也けり　〔安永六年—新花摘〕
更衣矢瀬の里人ゆかしさよ　〔安永六年—新花摘〕
辻駕によき人のせつころもがへ　〔年代考證—句集〕
大兵の廿チあまりや更衣　〔同　—句集〕
ころもがへ印籠買に所化二人　〔同　—句集〕

眺望
更衣野路の人はつかに白し　〔同　—句集〕
痩臑の毛に微風あり更衣　〔同　—句集〕

御手討の夫婦なりしを更衣　〔年代考證―句集〕
更衣いやしからざるはした錢　〔同―句集・題林集〕
更衣金ぷく輪の鞍置ん　〔同―新五子稿〕
更衣むかしに遠きやみ上り　〔同―新五子稿〕
一渡し越べき日なり衣がへ　〔同―新五子稿〕
かりそめの戀をする日や更衣　〔同―題苑集〕
更衣いわけなき身の田虫哉　〔同―遺稿〕
ころもがへうしと見し世も忘兒　〔同―遺稿〕
二十五のあかつき起や更衣　〔同―遺稿〕
ものくるゝ人來ましけりころもがへ　〔同―遺稿〕
更衣布子の恩のおもさ哉　〔同―遺稿〕
更衣狂女の眉毛いわけなき　〔同―遺稿〕
更衣塵うち拂ふ朱の沓　〔同―遺稿〕
衣がへやをら力はあるものを　〔同―書翰〕

袷(あはせ)．

小原女の五人揃ふてあはせかな　〔安永六年―新花摘〕
袷着て身は世にありのすさび哉　〔天明二年―忘れ花〕
たのもしき矢數のぬしの袷哉　〔年代考證―句集・題林集〕

しれるおうなのもとより、ふるきゝぬのわたぬきたるに、

ふみ添てなくりければ
橋のかごとがましきあはせかな　【年代考證―句集】
那須七騎弓矢に遊ぶ袷かな　【同―新五子稿・春亭畫賛集附錄】
ゆきたけもきかで流人の袷かな　【同―新五子稿】

薄羽織（うすばおり）

なき人のあるかとぞ思ふ薄羽織　【安永六年―新五條集】

扇（あふぎ）

六月二十日竹洞亭
主しれぬ扇手にとる酒宴哉　【明和四年―夏より・遺稿】
五月十六日於東寺與の坊探題
暑き日の刀にかゆるあふぎかな　【明和八年―高德院發句會句集】
目に嬉し戀君の扇眞白なる　【安永三年―題苑集・遺稿】
雁宕久しくおとづれせざりければ
有と見えて扇の裏繪おぼつかな　【年代考證―句集】
とかくして笠になしつる扇哉　【同―句集】
渡し呼草のあなたの扇哉　【同―句集・題林集】
古あふぎ二本さしたる下部かな　【同―新五子稿】
戀わたるかまくら武士の扇哉　【同―遺稿】
ゆくすゑはあくたにふれる扇かな　【同―全集】

團扇（うちは）

五月十六日召波亭
繪團のそれも清十郎にお夏かな　【同―句集】
手すさみの團畫ん草の汁　【明和五―夏より・句集】

褌に團扇さしたる亭主かな　【安永二年―新選】

木刀も請べき猛首の團かな　【年代考證―新五子稿】

突さして團わするゝ俵かな　【同―新五子稿】

任口に白き團をまゐらせん　【同―遺稿】

後家の君黄昏皃のうちはかな　【同―題苑集・遺稿】

風鈴（ふうりん）

風鈴や花にはつらき風ながら　【同―全集】

掛香（かけかう）

かけ香や何にとゞまるせみ衣　【同―句集・題叢】

掛香や啞の娘のひとゝなり　【安永二年―新選】

かけ香やわすれ皃なる袖だゝみ　【年代考證―句集】

かけ香や幕湯の君に風さはる　【同―全集】

簟（たかむしろ）

六月二日大來堂兼題

弓取の帶の細さよたかむしろ　【明和三年―夏より・句集】

細脛に夕風さはる簟　【年代考證―句集・新五子稿】

椽はなへ世を遁れ皃たかむしろ　【同―全集】

晉人の尻べた見えつ簟　【同―全集】

六月三日於㆓智恩院中高德院㆒探題

竹婦人（ちくふじん）

天にあらば比翼の籠や竹婦人　【明和八年―高德院發句會・遺稿】

花頂山に會して探題

〔補遺〕龐居士はかたい親父よ竹婦人　〔年代考證—句集〕

抱籠（だきかご）

抱籠やひと夜ふしみのさゞめごと　〔同—全集〕

晝寢（ひるね）

蝿いとふ身を古郷に晝寢かな　〔同—句集〕

汗（あせ）

汗入れて妻わすれめや藤の茶屋　〔同—書簡〕

川床（かはとこ）

床涼笠置連哥のもどりかな　〔天明三年—五車反古〕

葛閒が魂をまねく

河床や蓮からまたぐ便にも　〔年代考證—句集〕

川床に憎き法師の立居かな　〔同—句集〕

納涼（すずみ）

網打の見えずなり行涼かな　〔同—句集〕

加茂の西岸に榻を下して

丈山の口が過たり夕すゞみ　〔同—句集・題林集〕

殿原は細工めさるや夕すゞみ　〔同—新五子稿〕

涼舟舳にたち盡す列子哉　〔同—遺稿〕

法師ほどうらやましからぬものはあらじ。人には木のはしのやうにおもはれてとは、こゝろえぬ兼好のすさびならずや

自剃して涼とる木のはし居哉　〔同—書簡〕

我影を淺瀬に踏てすゞみかな　〔同—書簡〕

似た僧のしばしとてこそ夕涼　【年代考證―全集】

蚊遣(かやり)

四月十八日於二七觀音寺一兼題

腹あしき隣同士の蚊遣哉　【明和八年―高德院發句會・新選】

垣越て墓の避行かやりかな　【安永三年―句集】

浴して蚊やりに遠きあるじ哉　【安永九年―新五子稿・連句會草稿】

燃立て兒はづかしき蚊やり哉　【安永九年―新五子稿・連句會草稿】

蚊やりしてまいらす僧の坐右かな　【年代考證―句集】

嵯峨にて

三軒家大坂人のかやり哉　【同　―句集】

蚊遣して宿りうれしや草の月　【同　―新五子稿】

蚊遣火や柴門多く相似たり　【同　―新五子稿】

學する机の上の蚊やりかな　【同　―新五子稿・遺稿】

いざゝらば蚊遣のがれん虎溪まで　【同　―遺稿】

いとまなき身に暮かゝるかやり哉　【同　―遺稿】

一日のけふも蚊やりのけぶりかな　【同　―新五子稿・遺稿】

雨にもゆる鵜飼が宿の蚊遣哉　【同　―遺稿】

蚊帳(かや)

六月三日於二智恩院中高德院一兼題

あら涼し裾吹蚊やも根なし草　【明和八年―高德院發句會・句集】

兒白き子のうれしさよまくら蚊帳　【安永六年―新花摘】

草の戸によき蚊帳たるゝ法師かな　【安永六年―新花摘】

僧とめて嬉しと幮を高う釣　【安永九年―連句會草稿・新五子稿】

あらたに居をトしたるに

釣しのぶ幮にさはらぬ住居かな　【年代考證―句集】

蚊屋の内にほたる放してアヽ樂や　【同―句集】

尼寺や能キ幮たるゝ宵月夜　【同―句集】

蚊屋を出て内に居ぬ身の夜は明ぬ　【同―句集】

諸子比枝の僧房に會す。余ハいたづきのために此行にもれぬ

蚊屋つりて翠微つくらむ家の内　【同―句集】

蚊屋の中に朧月夜の内侍かな　【同―遺稿】

やすき身を先知れ蚊帳の出入より　【同―書簡】

早苗（さなへ）

五月六日大來堂興行

山颪早苗を撫し行衛哉　【明和五年―夏より・遺稿】

お（原註）獺その住む水も田に引ク早苗哉　【安永六年―新花摘】

水古き深田に苗のみどりかな　【安永六年―新花摘】

田植（たうゑ）

離別たる身を踏込て田植哉　【明和七年―ト發句集・句集】

けふはとて娵も出たつ田植哉　【安永六年―新花摘】

泊りがけの伯母もむれつゝ田うへ哉　【安永六　―新花摘】

參河なる八橋もちかき田植かな　【安永六年―新花摘】

午の貝田うた音なく成にけり　【安永六年―新花摘】

（原註）獺　おそを打し翁も誘ふ田うへかな　【安永六年―新花摘】

鯰得てもどる田植の男かな　【安永六年―新花摘・句集】

雨ほろ〳〵曾我中村の田植哉　【年代考證　新五子稿・題叢】

おくひなり席がましき田植哉　【同　―新五子稿】

見わたせば蒼生よ田植時　【同　―遺稿】

早乙女（さをとめ）

早乙女やつげのおぐしはさゝで來し　【安永六年―新花摘】

田草取（たくさとり）

葉ざくらの下陰たどる田草取　【安永六　―新花摘】

雨乞（あまごひ）

六月廿五日召波亭

大粒な雨はいのりの奇特かな　【明和五年―夏より・句集】

夏日

雨乞に曇る國司のなみだ哉　【年代考證―句集・題叢】

負腹の守敏も降らす旱かな　【同　―句集】

麥秋（むぎあき）

麥秋や鼬啼なる長が許　【安永六年―新花摘】

麥秋や遊行の棺ギ通りけり　【安永六年―新花摘】

辻堂に死せる人あり麦の秋 〔安永六年―新花摘〕

麦秋や狐のゝかぬ小百姓 〔安永六年―新花摘〕

麦の秋さびしき皃の狂女かな 〔安永六年―新花摘〕

病人の駕も過けり麦の秋 〔年代考證―句集〕

麦秋や何におどろく屋根の鶏 〔同 ―新五子稿・遺稿〕

麦秋やひと夜は泊る甥の法師 〔同 ―遺稿〕

飯盗む狐追ひうつ麦の秋 〔同 ―遺稿〕

麦刈(むぎかり)

兎足三周の正當は文月中の四日なるを、卯月のけふにしゞめて・追善いとなみけるに申遣す

麦刈ぬ近道来ませ法の杖 〔安永四年―句集〕

麦刈て瓜の花まつ小家哉 〔安永六年―新花摘〕

麦刈て遠山見せよ窓の前 〔年代考證―遺稿〕

麦刈に利き鎌もてる翁哉 〔同 ―遺稿〕

麻刈(あさかり)

麻を刈レと夕日このころ斜なる 〔安永六 ―新花摘〕

あふみ路や麻刈あめの晴間哉 〔年代考證―新五子稿〕

眞菰刈(まこもかり)

水深く利鎌鳴らす眞菰刈 〔同 ―句集・題林集〕

資酒(こざけ)

酒を煮る家の女房ちよとほれた 〔安永六年―新花摘〕

六月六日召波亭

甘酒(あまざけ)

愚痴無智の醴造る松が岡　【明和五年—夏より・句集】

箱根にて

あま酒の地獄もちかし箱根山　【年代考證—句集】

一夜酒(ひとよざけ)

御佛に晝備へけりひと夜酒　【同　—句集・題林集】

鮓(すし)

五月十六日於二東寺奥の坊一兼題

鮓漬て誰待としもなき身哉　【明和八年—高徳院發句會・句集】

鮓つけてやがて去ニたる魚屋かな　【安永六年—新花摘】

鮒ずしや彦根の城に雲かゝる　【安永六年—新花摘・句集】

鮓おしてしばし淋しきこゝろかな　(原註)壓　【安永六年—新花摘】

鮓を壓す我レ酒醸す隣あり　【安永六年—新花摘】

鮓をおす石上に詩を題すべく　【安永六年—新花摘】

すし桶を洗へば淺き游魚かな　【安永六年—新花摘】

貝しらけのよね一升や鮓のめし　(原註)精　【安永六年—新花摘】

卓上の鮓に目寒し觀魚亭　【安永六年—新花摘】

鮓の石に五更の鐘のひゞきかな　【安永六年—新花摘】

寂寞と晝間を鮓のなれ加減　【安永六年—新花摘】

蓼の葉を此君と申せ雀鮓　【年代考證—句集】

なれ過た鮓をあるじの遺恨哉　【同　—句集・題林集】

鮓桶をこれへと樹下に床几哉　【年代考證—句集】

夢さめてあはやとひらく一夜鮓　【同—遺稿】

木の下に鮓の口切るあるじ哉　【同—遺稿】

水の粉

六月八日召波亭

水の粉もきのふに盡るやどり哉　【明和四年—夏より】

水の粉やあるじかしこき後家の君　【年代考證—句集】

葛水

葛水や鏡に息のかゝる時　【安永八年—葛の翁】

葛水に見る影もなき翁かな　【安永八年—葛の翁】

宗鑑に葛水給ふ大臣かな　【年代考證—句集】

葛を得て清水に遠きうらみ哉　【同—句集】

葛水や入江の御所にまふずれば　【同—新五子稿・遺稿】

葛水にうつりてうれし老のかほ　【同—新五子稿・袖草紙】

心太

ところてん逆しまに銀河三千尺　【同—句集】

川狩

五月十六日召波亭

川狩や歸去來といふ聲す也　【明和五年—夏より・句集】

雨後の月誰ソや夜ぶりの脛白き　【安永六年—句集・書簡】

月に對す君に唐網の水煙　【年代考證—句集】

鴨河にあそぶ

川狩や樓上の人の見しり兒　【年代考證—句集】

鵜飼

見失ふ鵜の出所やはなの先　【明和年中—書簡◦新五子稿】

老なりし鵜飼ことしは見えぬかな　【安永五年—さびしたり◦句集】

しのゝめや鵜をのがれたる魚淺し　【年代考證—句集】

鵜舟

夜やいつの長良の鵜舟曾て見し　【安永六年—遺稿】

鵜川

六月十五日不夜庵ニ而八文舍興行

誰れ住みて樒流るゝ鵜川かな　【明和六年—夏より】

五月十六日於ニ東寺奥の坊ニ兼題

朝風に吹さましたる鵜川哉　【明和八年—高徳院發句會 新五子稿】

殿原の名護屋兒なる鵜河かな　【安永六年—新花摘】

照射

射干して囁く近江やわたかな　【安永六年—新花摘】

鵜舟漕ぐ水窮まれば照射哉　【年代考證—句集◦題林集】

わが宿にもの忘れ來て照射哉　【同　—遺稿】

火串

葉を落て火串に蛭の焦る音　【安永六年—新花摘】

宿近く火串もふけぬ雨のひま　【安永六年—新花摘】

雨やそも火串に白き花見ゆる　【安永六年—新花摘】

谷風に付木吹ちる火串かな　【安永六年—新花摘】

兄弟のさつお中よきほぐしかな　【安永六年—新花摘】

動物

紫野に遊て、ひよ鳥の妙手を思ふ

時鳥（ほとゝぎす）

時鳥畫に鳴け東四郎二郎 【寶暦二年―菅の風・句集】

四月四日句會不藏庵

岩倉の狂女戀せよ時鳥 【安永二年―百池遺稿・五車反古】

時鳥待や都の空だのめ 【安永五年 津守舟・續明烏】

ほとゝぎす哥よむ遊女聞ゆなる 【安永六年―新花摘】

耳うとき父入道よほとゝぎす 【安永六年―新花摘】

笧たく矢數の空をほとゝぎす 【安永六年―新花摘】

名乘〳〵雨しの原のほとゝぎす 【天明二年―名所小鏡・句集】

探題實盛

鞘走る友切丸やほとゝぎす 【年代考證―句集】

ほとゝぎす平安城を筋違に 【同―句集】

子規柩をつかむ雲間より 【同―句集】

春過てなつかぬ鳥や杜鵑 【同―句集】

稻葉殿の御茶たぶ夜や時鳥 【同―句集】

箱根山を越る日、みやこの友に申遣す

わするなよほどは雲助ほとゝぎす　〔年代考證―句　集〕

哥なくてきぬ〴〵つらし時鳥　〔同　　―句　集〕

留守に居る人たゞならねほとゝぎす　〔同　　―新五子稿〕

松浦の文かく夜半や時鳥　〔同　　―新五子稿〕

時鳥琥珀の玉をならし行　〔同　　―新五子稿〕

はしたなき女嬬の嚏や杜鵑　〔同　　―遺　稿〕

大人なる男の子起けり時鳥　〔同　　―遺　稿〕

失ふた杖も闇の夜時鳥　〔同　　―全　集〕

足あとを字にも見られずかんこ鳥　〔明和六年―平安廿歌仙・句集〕

閑古鳥（かんこどり）

四月十日召波亭

うへ見えぬ笠城の森や閑古鳥　〔明和六年―夏より・句　集〕

四月十八日於七觀音寺兼題

諫子鳥櫻の枝も踏んでゐる　〔明和八年―高德院發句會・句集〕

飯櫃の底たゝく音やかんこ鳥　〔安永二年―新　選・句　集〕

自在庵主、杜鵑・布穀の二題を出して、いづれ一題を發句せよとあり。されば雲井にはしりて王侯にまじはらんよりは、鶉衣被髪にして山中に名利をいとはんには

狂居士の首にかけたか鞨鼓鳥　〔安永五年―寫經社集・句　集〕

山人は人也かんこどりは鳥なりけり　〔安永五年―句集・俳諧品彙〕

ごつ〳〵と僧都の咳やかんこ鳥　〔安永六年―新花摘〕

閑古鳥歟いさゝか白き鳥飛ぬ　〔安永六年―新花摘〕

かしこにてきのふも啼ぬかんこどり　〔安永九年―連句會草稿・蕪五子稿〕

閑居鳥寺見ゆ麥林寺とやいふ　〔年代考證―句集〕

むづかしき鳩の禮義やかんこどり　〔同―句集〕

かんこどり可もなく不可もなくね哉　〔同―句集〕

花なくてかくれよき木やかんこ鳥　〔同―遺稿〕

榎から榎に飛ぶやかんこどり　〔同―遺稿〕

なに喰ふてゐるかも知らずかんこ鳥　〔同―遺稿〕

金掘る山もと遠しかんこどり　〔同―遺稿〕

親もなく子もなき聲や閑古鳥　〔同―題苑集・遺稿〕

かんこどり昨日もこゝに來啼ぬる　〔同―遺稿〕

わが捨しふくべが啼かかんこ鳥　〔同―遺稿〕

鞨鼓鳥木のまたよりや生れけん　〔同―遺稿〕

羽いろも鼠にそめつかんこどり　〔同―遺稿〕

閑こ鳥招けども來ず柊には　〔同―遺稿〕

青鷺（あをさぎ）

夕風や水青鷺の脛をうつ　〔安永三年―常盤・宿の日記〕

五月廿七日八文舍興行

水鷄（くひな）　てうちんを消せと御意ある水鷄哉　【明和五年―夏より・新五子稿】

關の戸に水鷄のそら音なかりけり　【年代考證―句集・題林集】

蝙蝠（かはほり）　かはほりのかくれ住けり破れ傘　【安永六年―新花摘】

かはほりやむかひの女房こちを見る　【年代考證―句集・發句手爾波草】

初鰹（はつがつを）　朝比奈が曾我を訪ふ日や初がつを　【安永六年―新花摘】

初鰹觀世太夫がはし居かな　【安永六年―新花摘】

六月二十日竹洞亭

鮎（あゆ）　鮎くれてよらで過行夜半の門　【明和五年―夏より・日發句集】

蟾（ひき）　月の句を吐てへらさん蟾の腹　【年代考證―全集】

四月十二日夜半亭

蝸牛（かたつぶり）　蝸牛の住はてぬ宿やうつせ貝　【安永四年―月並發句帖・句集】

五月廿七日八文舍興行

東へも向磁石あり蝸牛　【明和五年―夏より・落日庵句集】

蹇の三熊もふでやかたつぶり　【安永六年―新花摘】

關越るいざり車や蝸牛　【安永六年―新花摘】

點滴にうたれて籠る蝸牛　【天明三年―五車反古】

でゞむしやその角文字のにじり書　【年代考證―句集】

こもり居て雨うたがふや蝸牛　【年代考證—句集・題林集】

かたつぶり何おもふ角の長みじか　【同　—新五子稿・遺稿】

雨にとまる玉水の宿のかたつぶり　【同　—新五子稿】

簑虫はちゝとも啼を蝸牛　【同　—遺稿】

でゞむしや角を力の遠歩行　【同　—全集】

毛虫（けむし）

袖笠に毛むしをしのぶ古御達　【安永六年—新花摘】

朝風に毛を吹れ居る毛むし哉　【安永六年—新花摘】

我水に隣家の桃の毛虫哉　【安永六年—新花摘】

孑孑（ぼうふり）

ぼうふりの水や長沙の裏借家　【安永六年—新花摘】

蚊（か）

六月八日召波亭

晝を蚊のこがれてとまる德利哉　【明和五年—夏より・遺稿】

古井戸や蚊に飛ぶ魚の音闇し　【明和七年—其雪影・日發句集】

うは風に蚊の流れゆく野河哉　【年代考證—句集】

蚊の聲す忍冬の花の散ルたびに　【同　—句集・新五子稿】

蠅（はへ）

七月一日召波亭

雪信の蠅うち拂ふ硯かな　【明和六年—夏より・句集】

蠅のなき菴をたゝくや病上り　【年代考證—全集】

蠅打て留主居ながらや病上り　【同　—全集】

うたゝ寢の皃に離騷や蠅まれ也　〔年代考證―全集〕

蠅散て且ゥ白しや盆の糊　〔同　―全集〕

螢

五月六日大來堂興行

狩衣の袖の裏這ふ螢かな　〔明和五年―夏より・句集〕

書窓懶眠

學問は尻からぬけるほたる哉　〔明和九年―其雪影・新選〕

摑みとりて心の闇のほたる哉　〔安永九年―連句會草稿〕

さし汐に雨の細江のほたる哉　〔年代考證―遺稿〕

飛蟻

白道上人のかりにやどり給ひける草屋を訪ひ侍りて、日ぐるゝまでものがたりしてかへるさに申侍る

飛蟻とぶや富士の裾野ゝ小家より　〔同　―句集・發句手爾波草〕

蟬

蟬も寢る頃や衣の袖疊　〔寶曆年中―全集〕

六月二日大來堂兼題　蟬

半日の閑を榎の木に蟬のあり　〔明和三年―夏より〕

六月廿五日召波亭

鳥稀に水亦遠し蟬の聲　〔明和五年―夏より・新五子稿〕

馬南剃髮　三本樹にて

脫かゆる梢もせみの小河哉　〔安永二年―句集〕

大佛のあなた宮様せみの聲　【年代考證―句集】

蟬鳴や行者の過る午の刻　【同　―句集】

蟬鳴や僧正坊のゆあみ時　【同　―句集・題林集】

蟬なくや行人絕るはし柱　【同　―新五子稿】

せみ鳴やきのふは二日三日の月　【同　―新五子稿】

わくら葉に取ついて蟬のもぬけかな　【同　―遺稿】

ひるがへる蟬のもろ羽や比枝おろし　【同　―遺稿】

植物

若葉(わかば)

四月十日召波亭

やどり樹の目を覺したる若葉哉　【明和六年―夏より・遺稿】

不二ひとつうづみ殘してわかばかな　【安永二年―明烏・句集】

四月四日句會不藏庵

道灌の岡見しづかに若葉哉　【安永二年―百池遺稿】

淺間山畑の中の若葉かな　【安永二年―新選・遺稿】

おちこちに瀧の音聞く若ばかな　【安永六年―新花摘】

山畑を小雨晴行わか葉かな　【安永六年―新花摘】

般若讀む庄司が宿の若葉哉　【安永六年―新花摘】
夜走りの帆に有明て若ばかな　【安永六年―新花摘】
谷路行人は小さき若葉哉　【安永六年―新花摘】
淺河の西し東シす若葉哉　【安永六年―新花摘】
山に添ふて小舟漕行若葉かな　【安永八年―そのしをり・句集】
蚊屋を出て奈良を立ゆく若葉哉　【年代考證―句集・不二煙集】
窓の燈の梢にのぼる若葉哉　【同―句集】
絶頂の城たのもしき若葉かな　【同―句集】
若葉して水白く麥黄ミたり　【同―句集】
蛇を截てわたる谷路の若葉哉　【同―句集】
たかどのゝ灯影にしづむ若葉哉　【同―新五子稿】
今はたゞ獨活もくはれぬ若葉哉　【同―新五子稿】
金の間の人もの言はぬ若葉哉　【同―新五子稿・遺稿】
峰の茶屋に壯士餉す若葉哉　【同―遺稿】
出家して親王ます里の若葉かな　【同―遺稿】
岸根行帆はおそろしきわかば哉　【同―遺稿】

柿若葉

茂山や扨は家ある柿わか葉　【同―新五子稿】

葉櫻

葉ざくらや草鹿作る兵等　【安永六年―新花摘】

葉ざくらや南良に二日の泊客　【安永六年—新花摘】

葉櫻や碁氣になりゆく奈良の京　【年代考證—遺稿】

櫻の實（さくらのみ）

四月十二日夜半亭探題　實櫻

來て見れば夕の櫻實となりぬ　【安永四年—月並發句帖・句集】

圓位上人の所願にもそむきたる身のいとかなしきさま也

實ざくらや死のこりたる菴の主　【年代考證—句集】

若楓（わかかへで）

三井寺や日は午にせまる若楓　【安永六年—新花摘・句集】

若楓學匠書ミに(原註)虫めをさらす　【安永六年—新花摘】

若楓まづしき賤の掃さうじ　【年代考證—新五子稿】

箒目にあやまつ足や若楓　【同　—遺稿】

笋（たけのこ）

四月四日何會不藏庵探題

笋や甥の法師の寺訪はん　【安永二年—百池満稿・句集】

笋や五助畠の麥の中　【安永六年—新花摘】

笋や垣のあなたは不動堂　【安永六年—新花摘】

堀喰ラふ我たかうなの細きかな　【安永六年—新花摘】

笋を五本くれたる翁かな　【安永六年—新花摘】

笋の藪の案内やをとしざし　【年代考證—句集】

筍や柑を惜む垣の外　【同　—遺稿】

竹の皮脱

若竹

脱捨てひとふし見せよ竹の皮　【年代考證―常盤の香】

若竹や夕日の嵯峨となりにけり　【安永三年―瓜の實・句集】

わかたけや橋本の遊女ありやなし　【安永五年―續明烏・句集】

若竹や十日の雨の夜明がた　【安永六年―新花摘】

若竹や是非もなげなる芦の中　【安永六年―新花摘・明烏】

わか竹や横雲のあちこちに見ゆ　【年代考證―新五子稿】

若竹や曉の雨宵のあめ　【同―新五子稿】

夏木立

休ミ日や鷄鳴村の夏木立　【明和六年―夏より】

五月廿日栖玄庵ニ而烏西興行

いづこより礫うちけむ夏木立　【年代考證―句集・題林集】

酒十駄ゆりもて行や夏こだち　【同―句集】

花か實か水にちり込夏木立　【同―新五子稿・遺稿】

かしこくも茶店出しけり夏木立　【同―遺稿】

動く葉もなくておそろし夏木立　【同―遺稿】

とろゝ汲む音なしの瀧や夏木立　【同―遺稿】

魚くさき村に出けりなつ木立　【同―新五百題】

木下闇

賣卜先生木の下闇の訪れ皃　【安永六年―新花摘】

橘

橘やむかしやかたの弓矢取　【安永六年―新花摘】

牡丹（ぼたん）

たちばなのかはたれ時や古舘　〔年代考證―句集・題林集〕

牡丹散てうちかさなりぬ二三片　〔安永二年―新選・付合小鏡〕

ちりて後おもかげにたつぼたん哉　〔安永五年―句集・題林集〕

牡丹切て氣の衰ひしゆふべ哉　〔安永五年　寫經社集・句集〕

日光の土にも彫れる牡丹かな　〔安永六年―新花摘〕

不動書く琢摩が庭のぼたんかな　〔安永六年―新花摘〕

金屏のかくやくとしてぼたんかな　〔安永六年―新花摘〕

南蘋を牡丹の客や福西寺　〔安永六年―新花摘〕

ほうたんやしろがねの猫こがねの蝶　〔安永六年―新花摘〕

ぼたん有寺行過しうらみかな　〔安永六年―新花摘〕

やゝ廿日月も更行ぼたむかな　〔安永六年―新花摘〕

山蟻のあからさまなり白牡丹　〔安永六年―新花摘・句集〕

方百里雨雲よせぬぼたむ哉　〔安永六年―新花摘〕

詠物の詩を口ずさむ牡丹哉　〔安永六年―新花摘〕

山蟻の覆道造る牡丹哉　〔安永六年―新花摘〕

蟻垤

蟻王宮朱門を開く牡丹哉　〔安永六年―新花摘〕

廣庭のぼたんや天の一方に　〔天明三年―五車反古・句集〕

波羅舌本吐紅蓮

閻王の口や牡丹を吐んとす　【年代考證—句集】

寂として客の絶間のぼたん哉　【同—句集】

地車のとゞろとひゞく牡丹かな　【同—句集】

こと草も刈捨ぬ家のぼたんかな　【同—新五子稿・遺稿】

虹を吐いてひらかんとする牡丹哉　【同—遺稿】

みじか夜の夜の間にさけるぼたん哉　【同—遺稿】

日枝の日をはたち重ねてぼたん哉　【同—全集書畫】

題學寮

芍薬（しやくやく）

芍薬に帋魚うち拂ふ窓の前　【安永六年—新花摘】

一八（いちはつ）

一八やしやがちゝに似てしやがの花　【安永六年—新花摘】

六月二日大來堂兼題

晝顔（ひるがほ）

ひるがほや町に成行杭の數　【明和三年—夏より・新五子稿】

晝がほやこの道唐の三十里　【年代考證—句集】

六月十五日不夜庵ニ而八文舍興行

夕顔（ゆふがほ）

夕顔の花噛む猫や餘所心　【明和六年—夏より・句集】

ゆふがほや黄に咲たるも有べかり　【年代考證—句集・題林集】

夕がほや行燈提し君は誰ぞ　【同—新五子稿】

夕兒や武士ひとこしの裏つゞき　〔年代考證—遺稿〕

夕顔や竹燒く寺のうすけぶり　〔同—遺稿〕

芥子の花

けしの花籬すべくもあらぬ哉　〔安永三年—句集・新五子稿〕

百合の花

かりそめに早百合生ヶたり谷の房　〔年代考證—句集・題林集〕

朱硯に露かたぶけよ百合花　〔同—全集〕

山梔子花

口なしの花さくかたや日にうとき　〔安永六年—新花摘〕

卯の花

金の扇にうの花書たるに句せよとのぞまれて

白かねの花さく井出の垣根哉　〔安永六年—新花摘〕

うの花や貴布禰の神女の練の袖　〔安永六年—新花摘〕

うの花のこぼるゝ蕗の廣葉哉　〔年代考證—句集・題林集〕

うの花や庵へ寢に來る小商人　〔同—新五子稿〕

かの東皐にのぼれば

茨の花

花いばら古郷の路に似たる哉　〔安永三年—五車反古・句集〕

四月十二日夜半亭探題茨の花

路斷て香にせまり咲ク茨哉　〔安永四年—月並發句帖・句集〕

愁ひつゝ岡にのぼれば花いばら　〔年代考證—句集〕

山吹の卯の花の後や花いばら　〔同—遺稿〕

柚の花

柚の花や能酒藏す塀の内　〔安永六年—新花摘〕

柚の花やゆかしき母屋の乾隅　【安永六年―新花摘】

柿の花

澁柿の花ちる里と成にけり　【安永六年―新花摘】

柿の花きのふ散しは黄ばみ見ゆ　【安永六年―新花摘】

虫のために害はれ落ッ柿の花　【年代考證―句集】

米侯一周忌

樒の花

ゆかしさよしきみ花さく雨の中　【安永六年―新花摘】

合歡の花

蝮の鼾も合歡の葉陰哉　【年代考證―句集】

虎雄が世を早うせしを悼

雨の日やまだきにくれてねむの花　【同　―新五子稿】

述懐

椎の花

椎の花人もすさめぬにほひ哉　【安永五年―寫經社集】

魚赤たのふだる人の七回忌追福のために、しれるどちの發句を乞て手向くさとなすも、則讃佛乘の因なるべし

椶櫚の花

梢より放つ後光やしゆろの花　【安永六年―新花摘】

六月八日召波亭

林檎

わくらはの梢あやまつ林檎哉　【明和五年―夏より・新五子稿】

五月廿七日八文舍興行

青梅

青梅に眉あつめたる美人哉　【明和五年―夏より・五車反古】

青梅や微雨の中行飯煙 〔安永六年―新花摘〕

青むめやさてこそしりぬ豐後橋 〔安永六年―新花摘〕

青梅や捧一心の人垣を間(ケン) 〔安永六年新虚栗集〕

青うめをうてばかつ散る青葉かな 〔年代考證―句集〕

青梅に打鳴らす齒や貝(ハイ)のごと 〔安永六年―遺稿・書簡〕

玉卷芭蕉(たまきはせを)

洛東芭蕉庵落成日

耳目肺腸こゝに玉卷ばせを庵 〔安永五年―句集〕

蓮(はす)

六月廿五日召波亭

吹殼の浮葉に煙る蓮見哉 〔明和五年―夏より・句集〕

五月十六日召波亭

白蓮を切らんとぞ思ふ僧のさま 〔明和五年―夏より・句集〕

座主のみこのあなかまとて、やをらたち入給ひける、いとたうとくて

羅に遮る蓮のにほひ哉 〔年代考證―句集〕

律院を覗きて

飛石も三ッ四ッ蓮のうき葉哉 〔同―句集〕

蓮の香や水をはなるゝ莖二寸 〔同―句集・題林集〕

佛印のふるきもたへや蓮の花 〔同―遺稿〕

蓮池の田風にしらむ葉うら哉　【年代考證―遺稿】

戸を明けて蚊帳に蓮の主人哉　【同　―遺稿】

杜若

かきつばたべたりと鳶のたれてける　【同　―句集】

宵〱の雨に音なし杜若　【同　―句集】

貧乏な御下やしきや杜若　【同　―新五子稿】

澤瀉

六月二十日竹洞亭

おもだかは水のうらかく矢尻かな　【明和五年―夏より・新五子稿】

河骨

河骨の二もとさくや雨の中　【年代考證―句集・題林集】

蓴菜

ぬなはとる小舟に（原註　歌）うたはなかり鳬　【安永六年―新花摘】

採蓴を諷ふ彦根の傖夫哉　【年代考證―句集】

藻の花

藻の花や小舟よせたる門の前　【安永六年―新花摘】

藻の花や片われからの月もすむ　【年代考證―句集・題林集】

路邊の刈藻花さく宵の雨　【同　―句集】

題　湖

藻の花や藤太が鐘の水ばなれ　【同　―遺稿】

浪華の舊國あるじして、諸國の俳士を集めて、圓山に會莚しける時

萍

うき草を吹あつめてや花むしろ　【安永二年―句集・几董遺稿】

五畳庵の主河朔の飲をしたひ、居を洛東にうつす。左に楊を下せば鴨の川風に衣をふるひ、右に檻によれば、白河の下流に足を濯ぐ。宗祇法師のすさみにも、住めば京なるその中に京ある住居なりけり

浮草の花押わけて月の宿　〔明和六年―句集拾遺〕

穂麦

大魯・几董などゝ布引瀧見にまかりてかへるさ途中吟

春や穂麦が中の水車　〔安永六年―句集〕

洛東芭蕉庵にて

蕎麦あしき京をかくして穂麦哉　〔天明三年―五車反古・句集〕

旅芝居穂麦がもとの鏡たて　〔年代考證―句集〕

麦

狐火やいづこ河内の麦畠　〔同―句集〕

嵯峨の雅因が閑を訪て

うは風に音なき麦を枕もと　〔同―句集〕

長旅や駕なき村の麦ほこり　〔同―句集・新選〕

狐火や五助畠の麦の雨　〔同―遺稿〕

麻

しのゝめや露の近江の麻畠　〔同―句集〕

初茄子

几董子より初茄子を贈りたまひければ

夢よりも貰ふ吉事や初茄子　〔同―全集〕

瓜の花

雷に小家は燒れて瓜の花　【明和年中―句集・題林集】

あだ花は雨にうたれて瓜ばたけ　【年代考證―句集】

六月二日大來堂兼題

瓜

我園の眞瓜も盜むこゝろ哉　【明和三年―夏より】

七月一日召波亭

瓜小屋の月におはすや隱君子　【明和六年―夏より・句集】

畫賛

こと葉多く早瓜くるゝ女かな　【安永八年―句集・連句會草稿】

みちのくの吾友に草扉をたゝかれて

葉がくれの枕さがせよ瓜ばたけ　【年代考證―句集】

青飯法師にはじめて逢けるに、舊識のごとくかたり合て

水桶にうなづきあふや瓜茄子　【同―句集】

兵どもに大將瓜をわかたれし　【同―遺稿】

蓼

しのゝめや雲見えなくに蓼の雨　【同―句集】

砂川や或は蓼を流れ越す　【同―句集・發句手爾波草】

鄉君の曉起や蓼のあめ　【同―新五子稿】

草いきれ

草いきれ人死居ると札の立　【同―句集】

慶子、病後不二の夢見けるに申遣す

夏雜　降かへて日枝を廿チの化粧かな　【年代考證―句集】

見世のはし居もおのづから、闌臺萬里の涼を得べし

襟にふく風あたらしきこゝちかな　【同　―全集】

秋之部

時候

初秋　初秋や餘所の灯見ゆる宵のほど　【年代考證―句集】

秋來る　秋來ぬと合點させたる嚏かな　【同　―句集・題林集】

秋立　秋たつや何におどろく陰陽師　【同　―句集】

秋立や素湯香しき施藥院　【同　―句集】

てる雨や我に怺たつおもひあり　【同　―題叢】

七月四日大來堂

今朝の秋　温泉の底に我足見ゆる今朝の秋　【明和五年―夏より・新五子稿】

七月三日兼題

貧乏に追付れたり今朝の秋　【明和八年―高徳院發句會・句集】

病起

暁ごしに鬼を笞うつ今朝の秋　【天明二年―五車反古】

硝子の魚おどろきぬけさの秋　【年代考證―遺稿】

うちはして燈けしたりけさの秋　【同―遺稿】

女郎花二もと折りぬ今朝の秋　【同―遺稿】

今朝の秋朝精進のはじめかな　【同―遺稿】

方空子に申つかはす

きぬ〲の詞すくなよ今朝の秋　【同―題苑集】

御佛のなを尊さよけさの秋　【同―書簡】

末枯(うらがれ)

九月廿七日召波亭

うら枯や家をめぐりて醍醐道　【明和五年―夏より・新五子稿】

うら枯やからきめ見つる漆の樹　【年代考證―句集・題林集】

うら枯の中に道ある照葉かな　【同―新五子稿】

八朔(はつさく)

八月朔日五席庵兼題

八朔や扨明日よりは二日月　【明和七年―夏より・句集】

夜長(よなが)

九月十六日田福亭

山鳥の枝踏かゆる夜長かな　【明和六年―夏より・秋山家】

長き夜や通夜の連哥のこぼれ月　【年代考證―句集】

ながき夜や物うき官(冠)者が北枕　【同―新五子稿】

常燈の油尊き夜なが哉　【年代考證―遺稿】

肌寒（はださむ）

肌寒し己が毛を嚙木葉經　【寶曆年中―遺文】

身に入（みにしむ）

身にしむや横川のきぬをすます時　【年代考證―句集】

身にしむや亡妻の櫛を閨に踏　【同　―句集・題林集】

夜寒（よさむ）

山家にやどる

猿どのゝ夜寒訪行兎かな　【寶曆年中―古今短册集・百歌仙】

八月十四日召波亭

欠〱て月もなくなる夜寒哉　【明和六年―夏より・其雪影】

おとこぜのうは着めでたき夜寒かな　【安永二年―全集】

手燭して能ふとん出す夜寒かな　【安永二年―新選・石の月】

起て居てもう寢たといふ夜寒哉　【安永五年―几董丙申句帖・句集】

夜を寒し寐心とはむ呉服町　【安永五年―四季文集】

夜を寒み小冠者臥たり北枕　【天明二年―五車反古】

壁隣ものごとつかす夜さむ哉　【年代考證―句集・題林集】

盗人の屋根に消行夜寒かな　【同　―新五子稿】

獨夜擁爐睡

きり〱す自在をのぼる夜寒哉　【同　―古今墨蹟集・發句手鑑】

巫女に狐戀する夜さむ哉　【同　―遺稿】

書綴る師の鼻赤き夜寒哉　【年代考證—遺稿】

はなたれて獨碁をうつ夜寒哉　【同　—遺稿】

貧僧の佛をきざむ夜寒哉　【同　—遺稿】

秋寒し（あきさむし）

三井の山上より三上山を望て

秋寒し藤太が鏑ひゞく時　【天明二年—句集・書翰】

秋の暮（あきのくれ）

結城の鴈宕が所藏に、破笠が畫たる猿丸太夫の圖あり。
そのかたち如レ此、その畫に賛せよとのぞみければ頓て

我が手にわれをまねくや秋の暮　【寶曆年中—畫賛・百歌仙】

八月廿七日安井前字圓方ニ而鳥西興行

あちら向に立鴫斗秋のくれ　【明和六年—夏より】

門を出れば我も行人秋のくれ　【安永二年—句集・新五子稿】

門を出て故人にあひぬ秋のくれ　【安永二年—遺稿・書翰】

老懷

去年より又淋しひぞ秋のくれ　【安永五年—五車反古句集】

秋のくれ佛に化る狸かな　【安永六年—新花摘】

父母のことのみおもふ秋のくれ　【年代考證—句集】

弓取に歌とはれけり秋の暮　【同　—句集】

淋し身に杖わすれたり秋の暮　【同　—句集・新五子稿】

秋の暮辻の地藏に油さす　〔同　―句　集〕

さびしさの嬉敷もあり秋のくれ　〔同　―遺　稿〕

人は何に化るかもしらじ秋のくれ　〔同　―遺　稿〕

訓讀の經をよすがや秋の暮　〔同　―遺　稿〕

一人來て一人をとふや秋の暮　〔同　―遺　稿〕

かぎりある命のひまや秋のくれ　〔同　―遺　稿〕

燈ともせといひつゝ出るや秋のくれ　〔同　―遺　稿〕

鳥さしの西へ過けり秋の暮　〔同　―遺稿・書簡〕

鳥

飛盡す鳥ひとつづゝ秋の暮　〔同　―全　集〕

秋の灯

秋の燈やゆかしき奈良の道具市　〔同　―句　集〕

秋の夜

枕上秋の夜を守る刀かな　〔安永二年―新　選〕

九月朔日烏西亭

秋の夜の燈を取越の筧哉　〔明和五年―夏より・遺稿〕

探題消燈

住ムかたの秋の夜遠き燈影哉　〔天明二年―遺稿・書簡〕

秋の夜や古き書よむ南良法師　〔年代考證―遺　稿〕

夜半の秋

甲賀衆のしのびの賭や夜半の秋　〔安永二年―句集・題叢〕

子鼠のちゝよと啼や夜半の秋　〔安永二年―句集〕

丸山氏が黒き犬を畫たるに讃せよと望みければ

おのが身の闇より吼て夜半の秋　〔年代考證―句集〕

軒に寢る人追聲や夜半の秋　〔同・―題苑集〕

妙義山

秋の山　立去ル事一里眉毛に秋の峰寒し　〔年代考證―句集〕

秋の野　野路の秋我後ロより人や來る　〔同・―題苑集〕

八月十四日召波亭

花野　廣道へ出て日の高き花野かな　〔明和六年―夏より〕

松明消て海すこし見ゆる花野哉　〔年代考證―遺稿〕

八月廿七日安井前宇圓方ニ而興行

秋の水　二またに細るあはれや秋の水　〔明和六年―夏より〕

田におちて田を落行や秋の水　〔年代考證―遺稿〕

八月廿七日安井前宇圓方ニ而鳥西興行

秋の旅　靑墓は晝通けり秋の旅　〔明和六年―夏より〕

同

定宿の持佛覗くや秋の旅　〔明和六年―夏より〕

追剝を弟子に剃けり秋の旅　〔年代考證―句集〕

暮の秋（くれのあき）

跡かくす師の行方や暮の秋　【年代考證―句集】

ある方にて

くれの秋有職の人は宿に在す　【同―句集】

いさゝかなを(原註)價いめ乞れぬ暮の秋　【同―句集・題林集】

行秋（ゆくあき）

九月廿七日召波亭

行秋やよき衣著たるかゝり人　【明和五年―夏より・句集】

秋惜む（あきをしむ）

秋おしむ戸に音づるゝ狸かな　【明和六年―平安廿歌仙】

戸をたゝく狸と秋をおしみけり　【年代考證―新五子稿・遺稿】

秋（あき）

九月十四日大來堂興行　古人烟舟亭をおもふ

去來去り移竹うつりぬいく秋ぞ　【明和五年―夏より・句集】

身の秋や今宵をしのぶ翌も有　【安永年中―秋風六吟歌仙・句集】

秋たま〳〵躑躅はなさく滋賀の里　【天明二年―名所小鏡・遺稿】

故人にわかる

木曾路行ていざとしよらん秋ひとり　【天明二年―五車反古・水薦苅】

須磨寺にて

笛の音に波もより來る須磨の秋　【年代考證―句集】

打よりて後住ほしがる寺の秋　【同―遺稿】

目に見ゆる秋の姿や麻衣　【同―書簡】

夕がらす秋のあはれを告にけり　〔同　―全　集〕

洛東ばせを庵にて

冬近し　冬ちかし時雨の雲もこゝよりぞ　〔同　―句　集・題林集〕

天文

八月十日夜半亭探題　二日月

二日月　雨そゝぐみくさの隙や二日月　〔安永四年―月並發句帖〕

三日月　鳥盡てかくるゝ弓か三日月　〔年代考證―全　集〕

待宵　まつ宵や女あるじに女客　〔同　―遺　稿〕

月　山の端や海を離るゝ月も今　〔安永五年―句　集〕

所思

宗祇我を戀ふ夜眉毛に月の露を貫(スク)　〔安永六年―新虚栗集〕

琵琶湖

湖の月やよ望に降雪歟とぞ　〔安永八年―連句會草稿・遺稿〕

となせの瀧

水一筋月よりうつす桂河　〔　代考證―句　集〕

月天心貧しき町を通りけり　〔同　―句　集〕

庵の月主をとへば芋堀に　【年代考證―句集】

鯉長が醉るや、嵬峩として玉山のまさに崩れんとするがごとし。其佛今なを眼中に在て

月見ればなみだに碎く千ゝの玉　【同　―句集】

松しまの月みぬ人やうつせ貝　【同　―新五子稿・題叢】

月の安秋津が嶺の高きかな　【同　―遺稿】

五六升芋煮る坊の月夜哉　【同　―遺稿】

盃に月を碎くや夜もすがら　【同　―句集拾遺】

月になく鳴呼現在の父戀し　【同　―全集】

名月（めいげつ）

八月四日兼題

名月や兎のわたる諏訪の海　【明和八年―高德院發句會・水篶苅】

同

名月や雨を集めた池の上　【明和八年―高德院發句會】

名月や露にぬれぬは露ばかり　【安永五年―遺稿書簡】

名月や夜を逃れ住む盜人等　【安永五年―書簡】

名月やかしこき物は人ばかり　【安永五年―書簡】

名月にゑのころ捨る下部哉　【年代考證―句集】

名月や夜は人住ぬ峰の茶屋　【同　―句集】

雨のいのりのむかしをおもひて

名月や神泉苑の魚躍る　【年代考證―句集】

名月や今朝見た人に行違ひ　【同　―新五子稿】

名月や秋月どのゝ艤　【同　―新五子稿】

今日の月

仲丸の魂祭せむけふの月　【安永五年―句集】

盗人の首領哥よむけふの月　【安永五年―遺稿・書簡】

櫻なきもろこしかけてけふの月　【安永年中―新五子稿・雁風呂】

かつまたの池は闇也けふの月　【年代考證―句集】

花守は野守に劣るけふの月　【同　―句集】

番屋ある村は更たりけふの月　【同　―遺稿】

月今宵

月今宵あるじの翁舞出よ　【安永五年―月の夜・句集】

忠則古墳、一樹の松に倚れり

月今宵松にかへたるやどり哉　【年代考證―句集】

月今宵めくら突當り笑ひけり　【同　―句集拾遺】

八月二日召波亭

月見

身の闇の頭巾も通る月見かな　【明和五年―夏より・句集】

梨の木に寄てわびしき月見哉　【年代考證―新五子稿】

月見ぶねきせるを落す淺瀬哉　【同　―新五子稿】

月の友

良夜訪ふ方もなく、訪來る人もなければ

中〳〵に獨なればぞ月を友　【安永五年—續明烏・から檜葉】

興盡た雪にもこりず月の友　【年代考證—全集】

雨の月

探題雨月

旅人よ笠嶋かたれ雨の月　【同—句集】

既望

九月廿六日倚松亭探題

十六夜も落るところや須磨の波　【明和七年—夏より】

いざよひや鯨來初し熊野うら　【天明二年—名所小鏡・遺稿】

後の月

九月十一日召波亭

かじか煮る宿にとまりつ後の月　【明和五年—夏より・新五子稿】

廣澤

水かれて池のひづみや後の月　【年代考證—句集】

山茶花の木間見せけり後の月　【同—句集】

十月の今宵はしぐれ後の月　【同—句集】

十三夜の月を賞することは、我日のもとの風流也けり

唐人よ此花過てのちの月　【同—句集】

三井寺に緞子の夜着や後の月　【同—遺稿】

後の月賢き人をとふ夜哉　【同—遺稿】

後の月鳴たつあとの水の中　【年代考證―遺稿・書翰】

主從の心やすさよのちの月　【同　―書翰】

湖南の水樓に後の月見んと、前の日よりたれかれうちかたらひて、そゞろおもひ立ける。さなきだに秋の空のさだめなければ、いかに今宵の清夜を見過し侍らんと、三井の何がし上人の書屋にあり

三井寺や月の詩つくる踏落し　【同　―全集・遺稿】

十三夜の月を見ずして、十二日に登山しければ斯く申しける也

十三夜（や）

泊る氣でひとり來ませり十三夜　【同　―句集・題林集】

秋（あき）の空（そら）

秋の空昨日や雀を放ちたる　【同　―遺稿】

秋（あき）の聲（こゑ）

帛を裂琵琶の流や秋の聲　【天明三年―から檜葉・文集】

秋（あき）風（かぜ）

八月三日峒厚琴堂興行　安井前いとやにて

秋風におくれて吹や秋の風　【明和五年―夏より】

かなしさや釣の糸吹あきの風　【安永年中―新雜談集・句集】

秋の風書むしはまず成にけり　【年代考證―句集・題林集】

金屏の羅は誰ヵあきのかぜ　【同　―句集】

秋風や干魚かけたる濱庇　【同　―句集】

秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者　【年代考證―句集】

おもひ出て酢作る僧よ秋の風　【同　―遺稿・題苑集】

いざよひの雲吹去りぬ秋の風　【同　―遺稿】

秋風に散や卒都婆の鉋屑　【同　―遺稿】

唐黍のおどろきやすし秋の風　【同　―遺稿】

畫賛

秋風のふたゝび倒す障子哉　【同　―句集拾遺】

硝やこれも籟秋の風　【同　―全集】

秋の霜

秋の霜うちひらめなる石のうへ　【同　―遺稿】

秋雨

九月十一日召波亭

秋雨や水底の草を踏わたる　【明和五年―夏より・句集】

九月十日夜半亭席題

秋雨や我菅簑はまだ濡さじ　【安永四年―月並發句帖・遺稿】

秋の露

旅人の火を打こぼす秋の露　【年代考證―遺稿】

露

ものゝふの露はらひ行弭(ユハヅ)かな　【同　―句集・題林集】

狩倉の露におもたきうつぼ哉　【同　―句集・題林集】

市人の物うちかたる露の中　【同　―句集】

篠かけや露に聲あるかけはづし　【同　―遺稿】

鍋釜もゆかしき宿やけさの露　【年代考證―遺稿】

ほろ〱と啼く山鳥や露の珠　【同―高野圖會】

山伏をのがれて露の聖かな　【同―題苑集】

紅の露折〱る御垣守　【同―全集】

七月廿二日夜半亭兼題

白露（しらつゆ）

白露やさつ男の胸毛ぬるゝ程　【安永四年―月並發句帖・句集】

探題

白露の篠原へ出る檜原哉　【安永五年―新五子稿・几董丙申之句帖】

白露や茨の刺にひとつゞゝ　【年代考證―句集・袖草紙】

白露や家こぼちたる萱のうへ　【同―遺稿】

しら露の身や葛の葉の裏借家　【同―文集賛】

朝露（あさつゆ）

朝露やまだ霜しらぬ髪の落　【同―句集・新五子稿】

草の露（くさのつゆ）

殿原のいづち急ぞ草のつゆ　【同―新五子稿】

舎利となる身の朝起や艸の露　【同―遺稿】

霧（きり）

霧はれて高砂の町まのあたり　【同―遺稿】

人をとる淵はかしこ歟霧の中　【安永二年―新選・遺稿】

朝霧（あさぎり）

朝雺や村千軒の市の音　【年代考證―句集・新五子稿】

朝霧や杭打音丁〻たり　【同―句集】

朝霧や畫に書く夢の人通り　【年代考證—遺　稿】

天の川

きく川に公家衆泊けり天の河　【安永二年—名所小鏡・遺稿】

初汐

初汐に追れてのぼる小魚哉　【年代考證—句　集・題林集】

初潮や旭の中に伊豆相摸　【同　—題　苑　集】

稲妻

八月二十日八文舍

いな妻や波もてゆへる秋津島　【明和五年—夏より・遺　稿】

八月朔日五席庵兼題

稲妻や二打三打鍬澤　【明和七年—夏より・新　選】

稲妻やはし居うれしき旅舍り　【安永二年—書　翰】

八月十日夜半亭

いなづまや堅田泊りの宵の空　【安永三年—月並發句帖・句　集】

いな妻の一網うつやいせのうみ　【安永年中—句　集】

稲妻にこぼるゝ音や竹の露　【年代考證—句　集・題林集】

いな妻や秋津島根のかゝり舟　【同　—遺　稿】

いな妻や佐渡なつかしき舟便り　【同　—遺　稿】

かな河浦にて

いな妻や八丈かけてきくた摺　【同　—句　集】

八月十四日山吹亭

野分（のわき）

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな　〔明和五年―夏より・句集〕

岡の家の海より明て野分哉　〔安永五年―几董丙申之句帖 新五子稿〕

門前の老婆子薪貪る野分かな　〔年代考證―句集〕

梺なる我蕎麥存す野分哉　〔同―句集〕

市人のよべ問かはすのはきかな　〔同―句集・題林集〕

客僧の二階下り來る野分哉　〔同―句集〕

恙なき帆柱寐せる野分かな　〔同―新五子稿・遺稿〕

野分やんで鼠のわたるながれかな　〔同―新五子稿〕

底のなひ桶こけ歩行野分哉　〔同―新五子稿〕

棒つひて庄屋どの見舞野分哉　〔同―新五子稿〕

船頭の棹とられたる野分かな　〔同―遺稿〕

鴻の巣の網代にかゝる野分かな　〔同―新五子稿・遺稿〕

妻も子も寺でもの喰ふ野分哉　〔同―遺稿〕

西須磨を通る野分のあした哉　〔同―遺稿〕

關の火をともせば滅る野分かな　〔同―遺稿〕

まづ二ッ瓦ふくもの野分哉　〔同―遺稿〕

曉の家根に矢のたつのわき哉　〔同―遺稿〕

山賊のさとしてすぐる野分かな　〔同―句集拾遺〕

人事

梶の葉　梶の葉を朗詠集のしほり哉　【年代考證—句集・題林集】

願の糸　戀さま〴〵願の糸も白きより　【同　—句集・題林集】

八月二十日八文舍

魂祭　徹書記のゆかりの宿や玉まつり　【明和五年—夏より・遺稿】

太祇が一周忌に

魂かへれ初裏の月のあるじなら　【明和九年—題苑集】

あぢきなや蚊屋の裾踏魂祭　【年代考證—句集・題林集】

魂祭王孫いまだ歸り來ず　【同　—遺稿】

ありし世のちなみに水をそゝぐ

魂棚　魂棚をほどけばもとの坐敷哉　【同　—驥道編新花摘・句集】

燈籠　高燈籠消なんとするあまたゝび　【天明二年—都枝折・句集】

秋夜閑窓のもとに指を屈して、世になき友を算ふ

とうろうを三たびかゝげぬ露ながら　【年代考證—句集】

高燈籠總檢校の舟の宿　【同　—遺稿】

切籠　穢多むらに消殘りたる切籠哉　【同　—題苑集】

しだり尾の切籠掛たり宵の秋　【同　—題苑集】

攝待（せったい）

攝待にきせるわすれて西へ行　【年代考證――句集・題林集】

攝待へよらで過行狂女哉　【同　――遺稿】

七月朔日五席庵

攝待や菩提樹陰の片びさし　【同　――遺稿】

踊（をどり）

月更て猫も杓子も踊かな　【明和七年――夏より】

七月三日兼題

うき草の誘ひ合せておどり哉　【明和八年――高徳院發句會・句集】

細腰の法師すゞろに踊かな　【安永二年――五車反古　新五子稿】

ひたと犬の鳴町過て躍かな　【安永五年――續明烏・句集】

英一蝶が畫に贊望れて

四五人に月落かゝるおどり哉　【年代考證――句集】

錦木の門をめぐりておどり哉　【同　――遺稿】

看病の耳に更行躍かな　【同　――遺稿】

あけかゝる躍も秋のあはれ哉　【同　――遺稿】

大文字（だいもんじ）

十六日の夕、加茂河の邊りにあそぶ

大文字やあふみの空もたゞならね　【年代考證――句集】

相阿彌の宵寢起すや大文字　【同　――句集・新五子稿】

銀閣に浪花の人や大文字　【同　――遺稿】

衝突入

つと入やしる人に逢ふ拍子ぬけ　【年代考證―句集・題林集】

つと入や納戸の暖簾ゆかしさよ　【同―遺稿】

二三軒つと入しゆく旅の人　【同―遺稿】

牛祭

角文字のいざ月もよし牛祭　【安永二年―新選・題林集】

城南寺祭

腹あしき僧も餅くへ城南神　【年代考證―題林集】

地藏會

地藏會やちか道をゆく祭り客　【同―遺稿】

案山子

雲裡房、つくしへ旅だつとて我に同行をすゝめけるに、えゆかざりければ

秋かぜのうごかして行案山子哉　【寶暦十年―句集】

我脚にかうべぬかるゝかゞし哉　【寶暦年中―百歌仙・句集】

八月十四日山吹亭

錦する秋の野末の案山子かな　【明和五年―夏より・新五子稿】

九月朔日五席庵

簑笠の助どのゝ田の案山子哉　【明和七年―夏より】

八月四日兼題

新田に國常立の案山子かな　【明和八年―高德院發句會】

姓名は何子か号は案山子哉　【安永二年―句集・書簡】

水落て細脛高きかゞし哉　【安永三年―句集・書簡】

三輪の田に頭巾着て居るかゞしかな　【年代考證―句集】

武者繪贊

御所柿にたのまれ皃のかゞし哉　【同―句集】

人に似よと老の作れるかゞし哉　【同―新五子稿】

木曾どのゝ田に依然たるかゞしかな　【同―新五子稿】

畠主のかゞし見舞て戻りけり　【同―新五子稿・遺稿】

折盡す秋にイむ案山子哉　【同―遺稿】

笠とれて面目もなき案山子哉　【同―遺稿】

花鳥の彩色のこす案山子哉　【同―遺稿】

錦する野にこと〳〵とかゞし哉　【同―遺稿】

稲かれば化をあらはすかゞし哉　【同―遺稿】

鳴子（なるこ）

家ありや煙のつとふ鳴子繩　【同―題苑集】

ちかづきの鳴子ならして通りけり　【同―題苑集】

秋されや我身ひとつの鳴子引　【同―遺稿】

引板（ひた）

山陰や誰呼子鳥引板の音　【同―句集　新五子稿】

あなくるし水つきんとす引板の音　【同―新五子稿】

毛見（けみ）

毛見の衆の舟さし下せ最上川　【同―句集】

稲刈（いねかり）

秋多き稲をとく刈翁哉　【安永九年―連句會草稿】

稲かりて小草に秋の日のあたる　【年代考證―新五子稿・遺稿】

したゝかに稲になひゆく法師哉　【同―遺稿】

伏見やき

刈稲の神に仕ふや土の恩　【同―全集】

九月十六日田福亭

落し水（おとしみづ）

雨乞の小町が果やおとし水　【明和六年―夏より・其雪影】

八月十日夜半亭兼題

落し水田ごとの闇となりにけり　【安永四年―月並発句帖・津守舟】

村〱の寝ごゝろ更ぬ落し水　【年代考證―句集・題林集】

足あとのなき田わびしやおとし水　【同―遺稿】

落し水柳に遠くなりにけり　【同―遺稿】

たなはしはゆがみなりなりおとし水　【同―全集】

わたつみやたばこの花を見て休ム　【安永五年―几董丙申之句帖・句集】

綿取（わたとり）

わたとりや犬を家路に追かへし　【年代考證―新五子稿】

薬掘（くすりほり）

徳本の門も過たり薬ほり　【同―遺稿】

薬堀けふは蛇骨を得たりけり　【同―遺稿】

新酒（しんしゆ）

鬼貫や新酒の中の貧に處ス　【同―句集】

升飲の價は取らぬ新酒哉　【同―遺稿】

砧

九月十日夜半亭兼題

きぬた聞に月の吉野に入身かな　【安永四年—月並發句帖】

八月十四日山吹亭

憂人に手をうたれたるきぬたかな　【明和五年—夏より・新選】

迷子を呼べば打止む碪哉　【明和七年—日發句集・新五子稿】

おちこちおちこちとうつ砧かな　【安永二年—新選】

旅人に我家しらるゝきぬた哉　【安永二年—新五子稿】

貴人の岡に立ち聞く砧哉　【安永二年—遺稿・書翰】

憂我にきぬたうて今は又止ミネ　【安永五年—續明烏・新虚栗集】

我則、あるじゝて會催しけるに

小路行ばちかく聞ゆるきぬた哉　【年代考證—句集・新五子稿】

石を打狐守夜のきぬた哉　【同—句集・題林集】

異夫の衣擣らん小家がち　【同—新五子稿】

聲深き庄司がもとのきぬたかな　【同—新五子稿】

枕にと砧よせたるたはれかな　【同—遺稿】

なつかしき忍の里のきぬた哉　【同—遺稿】

霧ふかき廣野に千ゝの砧哉　【同—遺稿】

この二日きぬた聞えぬ隣哉　【同—遺稿】

比叡にかよふ麓の家の砧かな　【年代考證―題苑集】

鹿笛

鹿笛を偽り鳴らす山屋形　【安永五年―書簡】

下り簗

ゆく秋の所〲やくだり簗　【安永二年―新五子稿・題林集】

しか〲と主訪來ず下り簗　【安永二年―新五子稿】

崩れ簗

獺の月に啼音やくづれやな　【年代考證―遺稿】

もの云はで繕ふていぬ崩れ簗　【安永二年―全集】

捨扇

狩衣の袖より捨る扇かな　【年代考證―遺稿】

秋の蚊帳

秋の蚊屋主じばかりに成りにけり　【同　―題苑集】

駒迎

駒迎ことにゆゝしや額白　【同　―句集・題林集】

角力

八月二十日八文舍

夕露や伏見の相撲ちり〲に　【明和五年―夏より・句集】

負まじき角力を寐物がたり哉　【明和七年―日發句集・明烏】

古鄕の座頭に逢ぬすまふ取　【安永二年―新選・遺稿】

飛入の力者あやしき角力かな　【年代考證―句集】

春夜に句をとはれて

日ごろ中よくて耻あるすまひ哉　【同　―句集・獨吟】

組あふて物打かたる地どりかな　【同　―新五子稿】

あたまうつ家に歸るや角力取　【同　―題苑集】

訪ひよりし角力うれしき端居哉 【年代考證—遺稿】

夜角力の草にすだくや裸虫 【同　—遺稿】

よき角力出て來ぬ老の恨哉 【同　—遺稿】

角力取つげの小櫛をかりの宿 【同　—遺稿】

ふたつ三つよき名望まるすまひ取 【同　—遺稿】

ちかづきの角力に逢ぬ縛師 【同　—全集】

花火

八月三日歸厚琴堂興行　安井前いとやにて

物焚て花火に遠きかゝり船 【明和六年—夏より・續明烏】

花火せよ淀の御茶屋の夕月夜 【年代考證—句集】

花火見えて湊がましき家百戸 【同　—遺稿】

動物

鹿

九月廿六日倚松亭雜題

鹿寒し角も身に添ふかれ木哉 【明和七年—夏より・句集】

九月三日雜題

櫻さへもみぢしにけり鹿の聲 【明和八年—高德院發句會・遺稿】

窓の灯を山へな見せそ鹿の聲 【安永二年—新選・句集】

小男鹿や角遠近にひとつゞ 〔安永五年―蓮華會集・翁　衣〕
三度啼て聞えずなりぬ鹿の聲 〔安永五年―句　集・書　翰〕
たち聞の心地こそすれ鹿の聲 〔安永五年―遺　稿・書　翰〕
折あしく門こそ叩け鹿の聲 〔年代考證―句　集〕
雨中の鹿といふ題を得て
雨の鹿戀に朽ぬは角ばかり 〔同　―句　集〕
鹿啼てはゝその木末あれにけり 〔同　―句　集・句　稿〕
茶畠の霜夜は早し鹿の聲 〔同　―句　集・題林集〕
殘照亭晩望
鹿ながら山影門に入日哉 〔同　―句　集〕
ある山寺へ鹿聞にまかりけるに、茶を汲沙彌の夜すがられぶらで有ければ、晉子が狂句をおもひ出て
鹿の聲小坊主に角なかりけり 〔同　―句　集〕
戀わたる鹿や伏猪の枕もと 〔同　―題　苑　集〕
秋の佛と云題に
鹿の寄下駄のあまりの佛かな 〔同　―題　苑　集〕
山守の月夜野守の霜夜鹿の聲 〔同　―遺　稿〕
鹿啼や宵の雨曉の月 〔同　―遺　稿〕

けものを三つ集て發句せよといへるに

猪の狸寐いりや鹿の戀　【年代考證　遺稿】

小男鹿や僧都が軒も細柱　【同　―遺稿】

卯の花のゆうべにも似よ鹿の聲　【同　―遺稿】

戀風はどこを吹たぞ鹿の聲　【同　―遺稿】

初雁

はつかりに羽織の紐をわすれけり　【同　―新五子稿】

雁

九月十日夜半亭席題

一行の雁や端山に月を印す　【安永四年―月並發句帖・句集】

紀路にも下りず夜を行雁孤ッ　【安永五年―五車反古・書翰】

八月四日探題　番匠

雁啼や舟に魚燒く琵琶湖上　【年代考證―新五子稿】

啄木鳥

手斧打音も木ぶかし啄木鳥　【明和八年―高德院發句會題苑集】

鴫

九月十日夜半亭兼題

鴫たつや行盡したる野末より　【安永四年―月並發句帖】

竹溪法師、丹後へ下るに

たつ鴫に眠る鴫ありふた法師　【年代考證―句集】

鴫立て秋天ひきゝながめ哉　【同　―句集・題林集】

鴫遠く鍬すゝぐ水のうねりかな　【同　―新五子稿・遺稿】

鵙(もず)

此森もとかく過けり鵙おどし　〔年代考證―句集〕

草茎を失ふ百舌鳥の高音かな　〔同　―新五子稿〕

鶉(うづら)

八月朔日五席庵探題

鶉野や聖の笈も草がくれ　〔明和七年―夏より〕

小百姓鶉を取老となりにけり　〔年代考證―句集〕

鶺鴒(せきれい)

せきれいの尾や橋立をあと荷物　〔寶暦七年―全集・畫賛〕

鵯(ひよどり)

鵯のこぼし去ぬる實のあかき　〔年代考證―遺稿〕

山雀(やまがら)

山雀や榧の老木に寢にもどる　〔同　―句集・題林集〕

渡り鳥(わたりどり)

わたり鳥こゝをせにせん寺林　〔同　―句集〕

小鳥來る音うれしさよ板びさし　〔同　―句集〕

わたり鳥雲の機手のにしき哉　〔同　―句集・題林集〕

鱸(すずき)

百日の鯉切盡て鱸かな　〔同　―句集・題林集〕

釣上し鱸の巨口玉や吐　〔同　―句集〕

九月十日夜半亭席題

鱸得てうしろめたさよ浪の月　〔同　―遺稿〕

沙魚(はぜ)

沙魚を煮る小家や桃のむかし顏　〔安永四年―月並發句帖〕

薩埵宮にのぼりて

沙魚釣の小舟漕なる窓の前　〔年代考證―句集・題林集〕

江鮭（あめのうを）　月に漕ぐ呉人はしらじ江鮭　〔天明二年―常盤の香・書簡〕

瀬田降て志賀の夕日や江鮭　〔年代考證―句集・題林集〕

落鮎（おちあゆ）　鮎落ていよ〱高き尾上かな　〔天明三年―文集宇治行〕

鮎落て宮木とゞまる麓哉　〔年代考證―遺稿〕

鮎おちて焚火ゆかしき宇治の里　〔同―遺稿〕

河鹿（かじか）　かじか啼袖なつかしき火打石　〔同―遺稿〕

加茂川のかじかは知らず都人　〔同―遺稿〕

七月四日大來堂

虫（むし）　古御所や虫の飛つく金屛風　〔明和五年―夏より〕

八月三日歸厚琴堂興行　安井前いとやにて

茨野や夜はうつくしき虫の聲　〔明和六年―夏より〕

虫賣のかごとがましき朝寐哉　〔年代考證―句集・題林集〕

むし啼や河内通ひの小でうちん　〔同―句集〕

蛼（こほろぎ）　蛼や相如が絃の切るゝ時　〔同―遺稿〕

蓑虫（みのむし）　みのむしや秋ひだるしと鳴なめり　〔同―句集・題苑〕

蓑虫や笠置の寺の麁朶の中　〔同―遺稿〕

蜻蛉（とんぼ）　日は斜關屋の鎗にとんぼかな　〔同―句集〕

とんぼうや村なつかしき壁の色　〔同―新五子稿〕

染あへぬ尾のゆかしさよ赤とんぼ　【年代考證―新五子稿・遺稿】

とんぼうやいつまでたゝぬ玉がしは　【同　―全集】

秋の蚊（あきのか）

秋の蚊の人を尋るこゝろ哉　【同　―遺稿】

植物

紅葉（もみぢ）

川かげの一株づゝに紅葉哉　【寛保三年―西海春秋】

九月十日夜半亭探題

君に根を託（マヽ）て色こき紅葉哉　【安永四年―月並發句帖】

紅葉して寺あるさまの梢かな　【安永九年―連句會草稿・新五子稿】

或女の應擧の猿の畫をかゝせて讃望けるに、立圃が口質に倣ふとて

初もみぢお染といはゞたつた山　【年代考證―新雑談集・新五子稿】

高雄

西行の夜具も出て有紅葉哉　【同　―句集】

ひつぢ田に紅葉ちりかゝる夕日かな　【同　―句集】

谷水の盡てこがるゝもみぢ哉　【同　―句集・題林集】

よらで過る藤澤寺のもみぢ哉　【同　―句集】

むら紅葉會津商人なつかしき　〔年代考證――句　集〕

折えたる紅葉扨しも横びらき　〔同　――新五子稿・遺　稿〕

紅葉見の岩に水取捎哉　〔同　――遺　稿〕

山くれて紅葉の朱をうばひけり　〔同　――遺　稿〕

このもよりかのもも色よき紅葉哉　〔同　――遺　稿〕

紅葉見や用意かしこき傘二本　〔同　――題苑集・遺　稿〕

黄葉

黄にそみし梢を山のたゝずまゐ　〔同　――遺　稿〕

櫻紅葉

紅葉してそれも散行櫻かな　〔同　――新五子稿〕

蔦紅葉

打かへし見れば紅葉す蔦の裏　〔同　――新五子稿〕

枯枝に麗龍見たり蔦紅葉　〔同　――句集拾遺〕

柳散

神無月はじめの頃ほひ、下野の國に執行して、遊行柳とかいへる古木の影に、目前の景色を申出はべる

柳ちり清水かれ石ところ〴〵　〔寶暦二年――反古衾・古　選〕

銀杏

稚子の寺なつかしむいてう哉　〔安永二年――句　集・題林集〕

いてふ踏てしづかに兒の下山かな　〔安永二年　題苑集・遺　稿〕

子供氣に寺おもひ出るいてうかな　〔安永二年――全　集〕

おもしろや葉に柄をすげてちるいてう　〔安永二年――全　集〕

裂けた歟と見る葉も交るいてう哉　〔安永二年――全　集〕

椎（しひ）

椎拾ふ横河の兒のいとま哉　〔年代考證―句集・題林集〕

幻住菴に曉臺が旅寢せしを訪ひて

丸盆の椎にむかしの音聞む　〔天明二年―句集・書簡〕

梅嫌（うめもどき）

折くるゝ心こぼさじ梅もどき　〔天明二年―忘れ花・句集〕

梅もどき折や念珠をかけながら　〔年代考證―句集〕

鵯のこぼし去ぬる實の赤き（※）

鵯のうたゝ來啼や梅もどき　〔同　―遺稿〕

柿崎の小寺尊し梅もどき　〔同　―遺稿〕

梅もどき鳥ゐるさせじと端居哉　〔同　―遺稿〕

栗（くり）

九月十一日召波亭

栗めしや根ごろ法師の五器折敷　〔明和五年―夏より〕

栗備ふ惠心の作の彌陀佛　〔年代考證―句集〕

柿（かき）

澁柿ややがて帋子の歸り花　〔同　―新五子稿〕

春や老木の柿を五六升　〔同　―遺稿〕

木槿（むくげ）

朝皃にうすきゆかりの木槿哉　〔同　―句集・題林集〕

修理寮の雨にくれゆく木槿哉　〔同　―遺稿〕

芙蓉（ふよう）

桐の葉はおち盡すなるを木芙蓉　〔同　―遺稿〕

官女

日を帶て芙蓉かたぶく恨哉　〔同　―全集〕

萩（はぎ）

八月二十日八文舎

子狐の何にむせけん小萩原　【明和五年―夏より・句集】

薄見つ萩やなからん此邊り　【安永二年―このほとり・句集】

黄昏や萩に鼬の高臺寺　【安永二年―新選・名所小鏡】

茨老すゝき瘦萩おぼつかな　【年代考證―句集】

白萩を春わかちとるちぎり哉　【同―句集・題林集】

萩咲て玉田横野へわかれ行　【同―新五子稿・題叢】

岡の家に畫むしろ織るや萩の花　【同―遺稿】

うき旅や萩の枝末の雨をふむ　【同―遺稿】

萩の月うすきはものゝあわれなる　【同―書簡】

菊（きく）

九月十六日田福亭　山家の菊見にまかりけるに、あるじなる老翁に句を乞はれて

菊の露受て硯の命哉　【明和六年―夏より・句集】

九月三日兼題

煎藥をしらぬ山家や菊の花　【明和八年―高德院發句會】

菊作り汝は菊の奴かな　【安永二年―句集】

二本づゝ菊まいらせん佛達　【安永二年―新五子稿・遺稿】

あさましき桃の落葉よ菊畠　【年代考證―句集】

村百戸菊なき門も見えぬ哉　【年代考證―句集・千秋集後編】

いでさらば投壺まいらせん菊の花　【同　―句　集】

日でりどし伏水の小菊もらひけり　【同　―句　集】

西の京に宿もとめけり菊の時　【同　―新五子稿】

長櫃にうつ〳〵たる菊の香哉　【同　―遺　稿】

けふ匂ふ觀世の辻子や菊の花　【同　―全　集】

白菊（しらぎく）

白菊や庭に餘りて畠まで　【安永二年―新　選】

白菊の一もと寒し清見寺　【安永二年―几董丙申之句帖】

菊に古笠を覆たる畫に

白菊や呉山の雪を笠の下　【年代考證―句　集】

しらぎくやかゝるめで度色はなくて　【同　―新五子稿】

黄菊（きぎく）

手燭して色失へる黄菊哉　【同　―句集・題林集】

ほき〳〵と二もと手折黄菊哉　【同　―遺　稿】

女郎花（をみなへし）

とかくして一把に折ぬおみなへし　【明和七年―日發句集・新選】

女郎花そも莖ながら花ながら　【安永二年―句　集】

里人はさともおもはじをみなへし　【年代考證―句　集】

猪の露折かけてをみなへし　【同　―句集・新五子稿】

桔梗（ききやう）

きちかうも見ゆる花屋が持佛堂　【同　―句　集】

修行者の徑にめづる桔梗哉　【年代考證―遺稿】

蘭

七月廿二日夜半亭兼題

此蘭や茂作が庭にきのふまで　【安永四年―月並發句帖・句集】

夜の蘭香にかくれてや花白し　【年代考證―句集・題林集】

蘭夕狐のくれし奇楠を炷む　【同―句集】

蘭の香や菊より暗きほとりより　【同―遺稿】

朝顔

淵水湛如藍

朝がほや一輪深き淵のいろ　【同―句集】

朝皃や手拭のはしの藍をかこつ　【同―句集・題林集】

鷄頭花

にしき木は吹たふされて鷄頭花　【同―句集・題林集】

鷄頭の根に睦まじき箒哉　【同―題苑集】

鷄頭の花のはちするいつまでも　【同―句集拾遺】

野菊

なつかしきしをにがもとの野菊哉　【同―句集・題林集】

子狐のかくれ皃なる野菊哉　【同―新五子稿・題苑集】

曼珠沙花

曼珠沙華蘭にたぐひて狐啼　【同―遺稿】

葛

葛の棚葉しげく軒端を覆ひければ、晝さへいとくらきに

葛の葉のうらみ皃なる細雨哉　【同―句集・題林集】

天狗風のこらず葛のうら葉哉　【同―遺稿】

荻（をぎ）

追悼

荻芒穗に顯はるゝ後光哉 〔安永二年―鄙村生涯追善集〕

二見形文臺の讃、此器は祖翁の好みにして、殊に筆がへしこそ、千々の心はこめられけめ

濱荻によせては浪の筆がへし 〔年代考證―新五子稿〕

荻の風いとさう〴〵敷男哉 〔同 ―遺稿〕

線香やますほのすゝき二三本 〔天明三年―文集追慕辭〕

薄（すゝき）

山は暮て野は黄昏の薄哉 〔年代考證―句集・品彙〕

垣ね潜る薄ひともと眞蘇枋なる 〔同 ―句集〕

永西法師はさうなきすきもの也し 世を去りてふたとせに成ければ

秋ふたつうきをますほの薄哉 〔同 ―句集〕

辨慶贊

花すゝきひと夜はなびけ武藏坊 〔同 ―句集・門清水物語〕

花薄刈のこすことはあらなくに 〔同 ―遺稿〕

追風に薄かりとる翁かな 〔同 ―遺稿〕

地下りにくれゆく野邊の薄哉 〔同 ―遺稿〕

油斷して嵐にあふな花すゝき 〔同 ―句集拾遺〕

九月三日探題 化物づくし

尾花　雪隠の秋におどろく尾花哉　〔明和八年―高徳院發句會〕

蓼の穗　甲斐がねや穗蓼の上を塩車　〔年代考證―句集・新五子稿〕

蓼の穗を眞壺に藏す法師哉　〔同―遺稿〕

たでの穗に乾けるしほをたしむかな　〔同―書簡〕

塩淡くほたでを嗜む法師哉　〔同―書簡〕

蓼の花　三徑の十歩に盡て蓼の花　〔同―句集・題林集〕

下露の小萩がもとや蓼の花　〔同―遺稿〕

黄に咲は何の花ぞも蓼の中　〔同―遺稿〕

芦の穗　芦の穗に沖の早風のあまり哉　〔同―新五子稿〕

芦の花　芦の花漁翁が宿のけぶり飛ぶ　〔同―遺稿〕

七月廿二日夜半亭探題

掛稻　かけ稻に鼠啼なる門田かな　〔安永四年―月並發句帖・題苑集〕

斗文、父の八十の賀をことぶくに申贈る

稻かけて風もひかさじ老の松　〔年代考證―句集〕

かけ稻のそらどけしたり草の露　〔同―新五子稿・遺稿〕

落穗　落穗拾ひ日あたる方へあゆみ行　〔同―句集・題林集〕

中々に落穗拾はずや尉と姥　〔同―遺稿〕

新米（しんまい）

油買て戻る家路のおちほかな　【年代考證—題苑集】

新米の坂田は早しもがみ河　【同　—句集】

新米に假居の君のもどりかな　【同　—新五子稿】

新米にまだ草の實の匂ひ哉　【同　—新五子稿・題苑集】

今年米（ことしごめ）

九月廿七日召波亭

熊野路や三日の粮の今年米　【明和五年—夏より 新五子稿】

大高に君しろしめせことし米　【年代考證—新五子稿・題苑集】

唐黍（たうきび）

古寺に唐黍を焚く暮日哉　【同　—遺稿】

蕎麥（そば）

八月十日夜半亭

歸去來酒はあしくもそばの華　【安永三年—月並發句帖】

題白川

黒谷の隣はしろしそばのはな　【安永五年—句集・書簡】

落日の潜りて染る蕎麥の莖　【天明三年—五車反古・句集】

故郷や酒はあしくとそばの花　【年代考證—句集】

宮城野ゝ萩更科の蕎麥にいづれ　【同　—句集・水篶苅】

道のべや手よりこぼれて蕎麥花　【同　—句集】

ひとり大原野ゝほとり吟行しけるに、田畸荒蕪して千ぐさの下葉霜をしのぎ、つれなき秋の日影をたのみて、は

つかに花の咲出たるなど、ことにあはれ深し

水かれ〳〵蓼歟あらぬ歟蕎麥歟否歟　〔年代考證―句集・題叢〕
秋はものゝそばの不作もなつかしき　〔同　―句集・題林集〕
蕎麥刈てゐるや我ゆく道のはた　〔同　―遺稿〕
根に歸る花や吉野の蕎麥畠　〔同　―遺稿〕
柿の葉の遠くちりきぬ蕎麥畠　〔同　―遺稿〕
一つ家のかしこ皃なッ蕎麥の花　〔同　―題苑集〕

追善

小角豆
十七年さゝげは數珠にくり足らず　〔寶暦八年―戴恩謝〕

零餘子
うれしさの箕にあまりたるむかご哉　〔年代考證―句集題林集〕

七月三日探題

蕃椒
錦木を立てぬ垣根や唐がらし　〔明和八年―高德院發句會・句集〕
俵して藏め蓄へぬ番椒　〔安永五年―句集〕

探題

餉にからき涙やとうがらし　〔年代考證―句集〕
氣みじかに秋を見せけり唐がらし　〔同　―新五子稿〕
御園もる翁が庭や番椒　〔同　―遺稿〕
うつくしや野分のあとのとうがらし　〔安永五年―遺稿〕

茸

君見よや拾遺の茸の露五本　【天明三年―文集宇治行】

几董と鳴瀧に遊ぶ

茸狩や頭を擧れば峰の月　【年代考證―句集】

こゝろにくき茸山越る旅路哉　【同―新五子稿・題苑集】

茸狩や似雲が鍋の煮るうち　【同―遺稿】

松露

茯苓は伏かくれ松露はあらはれぬ　【同―句集】

若煙草

蘊て下葉ゆかしきたばこ哉　【同―句集】

瓢

順禮の目鼻書行ふくべかな　【寶暦年中―松島道の記・句集】

八月十日夜半亭兼題

葉に蔓にいとはれ顔や種ふくべ　【安永四年―月並發句帖・遺稿】

腹の中へ齒はぬけけらし種ふくべ　【年代考證―句集】

四十にみたずして死んこそめやすけれ

あだ花にかゝる恥なし種ふくべ　【同―句集】

人の世に尻を居へたるふくべ哉　【同―句集】

鬼灯

鬼灯や清原の女が生寫し　【同―句集】

芭蕉

物書に葉うらにめづる芭蕉哉　【同―句集】

敗荷

さればこそ賢者は富まず敗荷　【同―遺稿】

竹の春

おのが葉に月おぼろなり竹の春　【同―全集】

秋雜　花紅葉終にしほ木の夕烟　〔年代考證―全集〕

冬之部

時候

初冬

十月八日八文舍

初冬や日和になりし京はづれ　〔明和五年―夏より。句集〕

冬やとしよき裘得たりけり　〔安永五年―張瓢。題苑集〕

初冬や香花いとなむ穢多が宿　〔年代考證―新五子稿〕

初冬や訪んとおもふ人來り　〔同　―新五子稿〕

今朝の冬　百姓に花瓶賣けり今朝の冬　〔同　―新五子稿〕

神無月　宗任に水仙見せよ神無月　〔同　―句集・題林集〕

冬至

十月廿四日召波亭

書記典主故園に遊ぶ冬至哉　〔明和五年―夏より・句集〕

新右衛門蛇足を誘ふ冬至かな　〔年代考證―句集〕

貧乏な儒者とひ來る冬至哉　〔同　―遺稿〕

冬の山　めぐり來る雨に音なし冬の山　〔同　―全集〕

冬川（ふゆかは）

冬川や佛の花の流れ來る　〔年代考證―遺稿〕

冬川や孤村の犬の獺を追ふ　〔同―遺稿〕

冬の夜（ふゆのよ）

鋸の音貧しさよ夜半の冬　〔安永九年―連句會草稿・句集〕

飛彈（驒）山の質屋とざしぬ夜半の冬　〔年代考證―句集〕

冬ざれ（ふゆざれ）

冬ざれや北の家陰の韮を刈　〔天明三年―五車反古・句集〕

冬ざれや小鳥のあさる韮畠　〔年代考證―句集〕

冬ざれて韮の葉喰ひけり　〔同―遺稿〕

ふゆざれや韮にかくるゝ鳥孤つ　〔同―全集畫賛〕

うかぶ瀬に遊びて、むかし栢莚が此所にての狂句を思ひ出て、其風調に倣ふ

小春（こはる）

小春凪眞帆も七合五勺かな　〔同―句集・書翰集〕

枯野（かれの）

畠にもならで悲しきかれ野哉　〔安永二年―新選・遺稿〕

春夜樓會

むさゝびの小鳥はみ居る枯野哉　〔年代考證―句集〕

大とこの糞ひりおはすかれの哉　〔同―句集〕

子を捨る藪さへなくて枯野哉　〔同―句集〕

息杖に石の火を見る枯野哉　〔同―句集〕

馬の尾にいばらのかゝる枯野哉　〔同―句集・題林集〕

寒

蕭條として石に日の入枯野かな　【年代考證―句　集】

山をこす人にわかれて枯野かな　【同　―新五　稿・題苑集】

石に詩を題して過る枯野哉　【同　―新五子稿・遺　稿】

三日月も畏にかゝりて枯野哉　【同　―遺　稿】

眞直に道あらはれて枯野かな　【同　―狭蓑集・十家類題集】

郢月泉のあるじ、巴人庵の門に入て、予とちぎり深き人なり。とし来の冬中の五日、なきひとの數に入ぬときゝて

耳さむし其もち月の頃留り　【安永元年―阿　誰　追　善】

十月十日夜半亭探題鼠

寺寒く樒はみこぼす鼠かな　【安永三年―月並發句帖・句　集】

大魯が病の復常ないのる

瘦臑や病より起ッ鶴寒し　【安永七年―句　集】

泰里が東武に歸を送る

嵯峨寒しいざ先くだれ都鳥　【安永八年―句　集】

漁家寒し酒に頭の雪を燒　【年代考證―句　集】

易水にねぶか流るゝ寒かな　【同　―句　集】

皿を踏鼠の音のさむさ哉　【同　―句　集・題林集】

故人曉臺、余が寒爐を訪はずして歸鄕す。知、是東山西野に吟行して、荏苒として晦朔の代謝をしらず、歸期のせまりたるをいかむともせざる成べし

牙寒き梁の月の鼠かな 〔年代考證──集〕

我を厭ふ隣家寒夜に鍋を鳴ラす 〔同──句集〕

借具足われになじまぬ寒哉 〔同──新五子稿〕

井のもとへ薄刄を落す寒哉 〔同──新五子稿〕

水鳥も見へぬ江わたるさむさ哉 〔同──新五子稿、遺稿〕

眞金はむ鼠の牙の音寒し 〔同──遺稿・題苑集〕

雪舟の不二雪信が佐野いづれか寒き 〔同──遺稿・句帖〕

師走(しはす)

うぐひすの啼や師走の羅生門 〔同──句集・題林集〕

蜉蝣ひとつ障子に羽打師走哉 〔同──題叢・題苑集〕

炭賣に日のくれかゝる師走哉 〔同──遺稿〕

年の暮(としのくれ)

題沓

石公へ五百目もどすとしのくれ 〔同──句集〕

笠着てわらぢはきながら

芭蕉去てそのゝちいまだ年くれず 〔同──句集〕

面影のかはらけ〱としのくれ 〔同──新五子稿・夏衣〕

電の戸棚もあるやとしの暮　【年代考證―新五子稿】

年の波
近江路や軒端によする年の波　【同　―全集】

十二月十四日山吹亭

行年
行年の脱けの衣や古暦　【明和五年―夏より】

行年や氷にのこすもとの水　【明和八年―明和辛卯春歳旦帖】

行年の女歌舞妓や夜の梅　【安永二年―春慶引・五車反古】

ゆく年の瀬田を廻るや金飛脚　【年代考證―句集・題林集】

行としのめざまし草や茶釜賣　【同　―遺稿】

節分
としひとつ積るや雪の小町寺　【同　―句集・發句手爾波草】

除夜

除夜
いざや寝ん元日は又あすのこと　【同　―遺稿】

天文

郊外

冬の月
静なるかしの木はらや冬の月　【年代考證―句集・題林集】

石となる樟の梢や冬の月　【同　―遺稿】

のり合に渡唐の僧や冬の月　【同　―書翰へ

寒月（かんげつ）

十一月四日田福亭

寒月や門を敲けば沓の音　〔明和五年―夏より・遺稿〕

寒月に薪を割寺の男かな　〔明和七年―日發句集・新五子稿〕

寒月や僧に行合ふ橋の上　〔安永二年―新選〕

霜月廿日夜半亭兼題

寒月や陽炎見ゆる檜原　〔安永四年―月並發句帖〕

感偶

寒月や門なき寺の天高し　〔年代考證―句集〕

寒月や鋸岩のあからさま　〔同―句集〕

寒月や枯木の中の竹三竿　〔同―句集〕

寒月や衆徒の群議の過て後　〔同―句集〕

寒月や開山堂の木の間より　〔同―新五子稿〕

寒月や小石のさはる沓の底　〔同―遺稿〕

寒月や〔ママ〕谿を茶に汲む峯の寺　〔同―全集〕

寒月や松の落葉の石を射ル　〔同―全集〕

凩（こがらし）

十月廿三日山吹亭

凩や覗て逊る淵の色　〔明和五年―夏より・遺稿〕

木がらしや碑をよむ僧一人　〔明和七年―全集〕

こがらしや廣野にどうと吹起る　【安永二年―遺稿】

こがらしや荻も薄もなくなりて　【安永二年―全集】

凩やこの頭までは荻の風　【安永二年―句集】

凩や何に世わたる家五軒　【安永二年―新選・句集】

大魯が兵庫の隱栖を几董とゝもに訪ひて、人〻と海邊を吟行しけるに

凩に鰓吹るゝや釣の魚　【安永六年―句集】

木がらしや釘の頭を戸に怒る　【天明二年―書翰】

こがらしやひたとつまづく戻り馬　【年代考證―句集】

こがらしや畠の小石目に見ゆる　【同―句集】

こがらしや岩に裂行水の聲　【同―句集】

木枯や鐘に小石を吹あてる　【同―句集】

木がらしや小石のこける板びさし　【同―新五子稿】

こがらしや野河の石をふみわたる　【同―遺稿】

こがらしや炭賣ひとりわたし舟　【同―遺稿】

初時雨

みのむしの得たりかしこし初しぐれ　【同―百池存稿・句集】

初しぐれ眉に烏帽子の雫哉　【同―句集・題林集】

たえ〴〵の雲しのびずよ初時雨　【同―遺稿・書翰】

時雨（しぐれ）

九月廿七日召波亭

楠の根をしづかにぬらす時雨哉　【明和五年―夏より・句集】

一わたしおくれた人にしぐれ哉　【明和七年―日發句集・新五子稿】

九月廿六日倚松亭兼題

迯水の迯そこなふて時雨哉　【明和七年―夏より】

時雨るゝや山かいけちて日の暮るゝ　【明和七年―書簡】

談林一變蕉流起而未能絶其[illegible]猶藕折糸不斷号曰藕糸體

しぐれ松ふりて貝の通ふ琴の上　【明和八年―夜半亭月並小摺物・百池存稿】

賀越の際、婦人の俳諧に名あるもの多し。姿嫩く情の癡なるは女の句なれば也。これな老婆體と云、○樂天得詩必語老婆子不解則更句尋尚淺近

しぐるゝや山は帶する隙もなし　【明和八年―夜半亭月並小摺物】

感遇（ことば書 暑す）夜行

蓑虫のぶらと世にふる時雨哉　【明和八年―夜半亭月並小摺物・蕪村句集】

化そうな傘かす寺のしぐれかな　【明和八年―夜半亭月並小摺物・新五子稿】

芭蕉忌　一辨香

時雨音なくて苔にむかしをしのぶ哉　【安永三年―ゑぼし桶・新五子稿】

木兎の頰（ツラ）に日のさす時雨哉　【安永三年―書簡】

几董會當座　時雨

老が戀わすれんとすればしぐれかな　〔安永三年―書簡〕

九月十五日夜半亭

夕時雨闇（シャミ）に蓑の雫かな　〔安永三年―月並發句帖〕

手にとらじとても時雨の古草鞋　〔安永五年―全集〕

古傘の婆娑と月夜の時雨哉　〔安永年中―句集・書簡〕

半江の斜日片雲の時雨かな　〔天明二年―遺稿〕

しぐるゝや我も古人の夜に似たる　〔年代考證―句集〕

夕時雨蟇ひそみ音に愁ふ哉　〔同―句集〕

浪花遊行寺にて、ばせを忌をいとなみける二柳庵に

蓑笠の衣鉢つたへて時雨哉　〔同―句集〕

時雨るゝや簔買ふ人のまことより　〔同―句集・題林集〕

虹竹に手向侍る

來迎の雲をはなれて時雨かな　〔同―新五子稿〕

榎時雨して淺間の煙余所にたつ　〔同―新五子稿・遺稿〕

禪寺の廊下たのしめ北時雨　〔同―新五子稿〕

又嘘を月夜に釜のしぐれ哉　〔同―新五子稿〕

釣人の情のこはさよ夕しぐれ　〔同―新五子稿・遺稿〕

窓の灯の佐田はまだ寝ぬ時雨哉　〔年代考證―新五子稿〕
鶯の竹に來そめてしぐれかな　〔同―新五子稿〕
水きはもなくて古江の時雨哉　〔同―新五子稿・遺稿〕
朔日のまことがましきしぐれかな　〔同―題苑集〕

時雨　雨ふればやがて巣の中にすりこむおかしさに

みの虫のしぐれや五分の智惠袋　〔同―百池存稿〕
目前を昔に見する時雨哉　〔同―遺稿〕
鷺ぬれて鶴に日のさすしぐれ哉　〔同―遺稿〕
海棠の花は咲ずや夕時雨　〔同―遺稿〕

題朝時雨

雲のひまに夜は明て尙しぐれ哉　〔同―遺稿〕
子を結ぶ竹に日ぐるゝ時雨哉　〔同―遺稿〕
もの置て堅田へ歸る時雨哉　〔同―遺稿〕
蓮かれて池あさましき時雨哉　〔同―遺稿〕
しぐるゝや長田が館の風呂時分　〔同―遺稿・書簡〕
窓の人のむかしがほなる時雨哉　〔同―書簡〕
鹽わかる上をからくも行時雨　〔同―句集拾遺〕
時雨るゝや用意かしこき傘二本　〔同―句集拾遺〕

古河をふみわたる身にしぐれかな　【年代考證―全集】
夕しぐれ車大工も來ぬ日かな　【同―全集】
下戸ならぬこそ宵〳〵のしぐれ哉　【同―全集】
子を遣ふ狸もあらん小夜しぐれ　【同―全集】
宿軒にとしふるしぐれ哉　【同―全集】
時雨るゝやとあるところに鷺一つ　【同―全集】

初霜

初霜やわづらふ鶴を遠く見る　【同―遺稿】

霜

晉子三十三回

擂盆のみそみめぐりや寺の霜　【元文四年―書翰・句集】

十月廿四日夜半亭兼題

置霜の朝日くろふや牧の駒　【安永四年―月並發句帖】

几董と浪華より歸さ

霜百里舟中に我月を領す　【年代考證―句集】
朝霜や鈔を握るつるべ繩　【同―句集題林集】
たんぽゝのわすれ花あり路の霜　【同―句集】
松明ふりて舟橋わたる夜の霜　【同―遺稿】
野の馬の韮をはみ折る霜の朝　【同―遺稿】
我骨のふとんにさはる霜夜哉　【同―遺稿】

氷（こほり）

衛士の火もしら〳〵霜の夜明かな　【年代考證―全集】

十月廿三日山吹亭

山水のへるほど減りて氷かな　【明和五年―夏より・五疊敷】

貧居八詠

氷る燈の油うかゞふ鼠かな　【年代考證―句集・題林集】

貧居八詠

齒豁（アラハ）に筆の氷を噛ム夜哉　【同―句集・霜月十三日】

在英は一向宗にて、信ふかきおのこ也けり。愛子を失ひて悲しびに堪えず、朝暮佛につかふまつりて、讀經をこたらざりければ

らうそくの涙氷るや夜の鶴　【同―句集】

文机の肱も氷のひゞきかな　【同―遺稿】

眞夜半や氷の上の捨小舟　【同―題叢】

手拭も豆腐も氷る横川哉　【同―書簡】

霙（みぞれ）

古池に草履沈ミてみぞれ哉　【明和七年―句集・題林集】

霰（あられ）

霜月廿日夜半亭探題

岩に篠にあられたばしる小手さゝ原　【安永四年―月並發句帖】

一しきり矢種の盡るあられ哉　【年代考證―句集・題林集】

玉霰漂母が鍋をみだれうつ　【安永年中―句集】

玉あられうけるや富士の手邊より　【年代考證―新五子稿】

深草の笠しのばれぬあられ哉　【同　―新五子稿・題叢】

初雪の出來そこなふてあられ哉　【同　―新五子稿】

初雪

十月朔日會主不藏亭

初雪の底をたゝけば竹の月　【明和七年―高德院發句會・新選】

平安

はつ雪や消ればぞ又草の露　【安永三年―ゑぼし桶・續明烏】

初雪や上京の人よかりけり　【年代考證―新五子稿】

雪

十一月四日田福亭

宿かさぬ火影や雪の家つゞき　【明和五年―夏より・句集】

雪拂ふ八幡殿の內參　【明和七年―全集】

春坂子のいせ詣したまふを見送りて

遙拜や我もふしみの竹の雪　【天明二年―小摺物】

雪の旦母家のけぶりめでたさよ　【安永二年―遺稿・書簡】

鍋提て淀の小橋を雪の人　【安永六年―新花摘】

貧居八詠

愚に耐よと窓を暗す雪の竹　【年代考證―句集】

雪白し加茂の氏人馬でうて　【年代考證―句集】
雪の暮鴫はもどつて居るような　【同―句集】
焚火して鬼こもるらし夜の雪　【同―新五子稿】
いさり火の燒のこしけむ巖の雪　【同―新五子稿】
一二寸降もてゆくや雪千里　【同―新五子稿】
烈々と雪に秋葉の焚火かな　【同―新五子稿】
山里や雪にかしこき臼の音　【同―新五子稿】
念比な飛脚過行深雪かな　【同―新五子稿・遺稿】
雨の時貧しき蓑の雪に富り　【同―新五子稿・遺稿】
雪消ていよ／＼高し雪の亭　【同―四季文集】
つなぎ馬雪一双のあぶみ哉　【同―遺稿】
住吉の雪にぬかづく遊女哉　【同―遺稿】
雪國や粮たのもしき小家がち　【同―遺稿】
雪の戸に格をあて行木履哉　【同―遺稿】
嵐雪にふとんきせたり雪の宿　【同―遺稿】
樂書の壁をあはれむ今朝の雪　【同―遺稿】
邯鄲の市に鰒見る雪の朝　【同―遺稿】
木屋町の旅人とはん雪の朝　【同―遺稿】

古道と聞ばゆかしき雪の下　【年代考證―遺稿】

おもふこと有て

雪を踏て熊野詣のめのと哉　【同―雪翁】

水と鳥のむかし語りや雪の友　【同―全集】

風呂入に谷へ下るや雪の笠　【同―全集】

雪見(ゆきみ)

いざ雪見容(カタチヅクリ)す蓑と笠　【安永二年―五車反古 題林集】

大雪(おほゆき)

大雪と成けり關のとさし時　【安永二年―新選 新五子稿】

大雪や上客歩行ていりおはす　【年代考證―遺稿】

十一月三日兼題

雪折(ゆきをれ)

雪折や雪を湯に焚釜の下　【明和八年―高德院發句會・句集】

雪折やよしのゝ夢のさむる時　【天明三年―雪の翁・句集】

雪折も聞えて暗き夜なりけり　【年代考證―遺稿】

十二月十四日山吹亭

吹雪(ふぶき)

雪宿かせと刀投出す吹雪哉　【明和五年―夏より・句集】

人事

御火焚といふ題にて

御火焼(おほたき)　御火焚や霜うつくしき京の町　【年代考證―句集・題林集】

御火たきや犬も中〳〵そゞろ皃　【同　―句集】

十夜(じふや)　あなたうと茶もだぶ〳〵と十夜哉　【明和六年―五畳敷・句集】

油灯の人にしたしき十夜かな　【年代考證―新五子稿】

傳燈の光をかゝげて、古里虹が三十三回の遠忌をとぶらふに申つかはす

御命講(おめいこう)　御影講の蓮やこがねの作り花　【天明二年―里虹追善】

十月廿三日山吹亭

冬籠(ふゆごもり)　變化すむやしき貰ふて冬籠　【明和五年―夏より】

戸に犬の寐がへる音や冬籠　【明和七年―日發句集・其雪影】

屋根ひくき宿うれしさよ冬ごもり　【明和七年―新五子稿】

霜月廿日夜半亭兼題

冬ごもり壁を心の山に倚　【安永四年―月並發句帖・句集】

いねぶりて我にかくれん冬ごもり　【安永五年―夢鶯除元・句集】

松島で死ぬ人もあり冬籠　【天明二年―新五子稿・遺稿】

冬籠燈-光虱の眼を射る　【天明三年―五車反古】

冬ごもり燈下に書すとかゝれたり　【年代考證―句集】

勝手まで誰が妻子ぞ冬ごもり　【同　―句集】

冬ごもり佛にうときこゝろ哉　【年代考證―句集】

桃源の道の細さよ冬籠　【同　―新五子稿・遺稿】

冬籠母屋へ十歩の椽づたひ　【同　―新五子稿・遺稿】

鍋敷に山家集あり冬籠　【同　―新五子稿・遺稿】

禁足のはじめなりけり冬籠　【同　―新五子稿】

賣喰の調度のこりて冬籠　【同　―新五子稿・遺稿】

冬ごもり心の奥のよしの山　【同　―遺稿】

冬ごもり妻にも子にもかくれんぼ　【同　―遺稿】

信濃なる下男置けり冬ごもり　【同　―遺稿】

苦にならぬ借錢負ふて冬ごもり　【同　―全集】

爐開

九月廿七日召波亭

爐開や裏町かけて一住居　【明和五年―夏より】

爐びらきや雪中庵の霰酒　【年代考證―句集】

口切

十月朔日會主不藏亭

口切や喜多も召れて四疊半　【明和七年―高德院發句會・遺稿】

几董にいざなはれて、岡崎なる下村氏の別業に遊びて

口切や五山衆なんどほのめきて　【年代考證―句集】

口切や小城下ながら只ならね　【同　―句集・題林集】

口切や梢ゆかしき塀隣　【年代考證―新五子稿・遺稿】

口切や湯氣たゞならぬ臺所　【同　―新五子稿】

口切の隣も飯のけぶり哉　【同　―遺稿】

十一月四日田福亭

火桶(ひをけ)

火桶炭團を喰ふ事夜毎〳〵にひとつヅヽ　【明和五年―夏より・遺稿】

老女の火をふき居る畫に

小野ゝ炭匂ふ火桶のあなめ哉　【年代考證―句集】

われぬべき年もありしを古火桶　【同　―句集】

裙に置て心に遠き火桶かな　【同　―句集】

桐火桶無絃の琴の撫ごゝろ　【同　―雁風呂 嶋谷氏藏短册】

炬燵(こたつ)

腰ぬけの妻うつくしき炬燵哉　【明和七年―日發句集】

讃州高松にしばらく旅やどりしけるに、あるじ夫婦の隔なきこゝろざしのうれしさに、けふや其家を立出るとて

巨燵出て早あしもとの野河哉　【安永二年―句集・新選】

宿かへて炬燵うれしき在どころ　【年代考證―新五子稿・題林集】

いんで來る人むづかしき火燵哉　【同　―新五子稿】

埋火(うづみび)

埋火や終には煮る鍋のもの　【明和七年―籬の華・句集】

うづみ火や我かくれ家も雪の中　【年代考證―句集】

埋火のありとは見えて母の側　【年代考證―新五子稿】

埋火やものそこなはぬ比丘比丘尼　【同　―遺稿】

埋火や春に消行夜やいくつ　【同　―遺稿】

うづみ火も我名をかくすよすが哉　【同　―遺稿】

炭團

團炭法師火桶の窓から窺けり　【安永二年―新選・句集】

炭

炭うりに鏡見せたる女かな　【安永二年―句集】

庵買て且うれしさよ炭五俵　【年代考證―新五子稿】

炭俵ますほのすゝき見付たり　【同　―新五子稿】

悼文霞

白炭の骨にひらくや後夜の鐘　【同　―遺稿】

炭取

貧居八詠

炭取のひさご火桶に並び居る　【同　―句集】

炭竈

炭竈にたちよる花のあるじかな　【同　―新五子稿】

炭がまの邊しづけき木立哉　【同　―新五子稿】

十月廿三日山吹亭

炭燒

炭燒に汁たうべてし峯の寺　【明和五　―夏より】

雪沓

雪沓をはかんとすれば鼠行　【明和七年―遺稿】

召波居士七周の追善に招魂のこゝろを申侍る

雪車(そり)　いざ雪車にのりの旅人とく來ませ　【安永五年―武藤氏藏短册】

十一月三日兼題

頭巾(づきん)　春やむかし頭巾の下の鼎疵　【明和八年―高德院發句會】

霜月十日會

眇なる醫師わびしき頭巾哉　【安永　年―月並發句帖・遺稿】

我頭巾うき世のさまに似ずもがな　【安永五年―續明烏・句集】

頭巾二つひとつは人に參らせむ　【安永五年―蓮華會集】

さゞめごと頭巾にかづく羽折哉　【安永年中―句集】

頭巾着て聲こもりくの初瀨法師　【年代考證―句集】

町はづれいでや頭巾は小風呂敷　【同　―句集・題林集】

引かふて耳をあはれむ頭巾哉　【同　―句集】

みどり子の頭巾眉深きいとをしみ　【同　―句集】

紫の一間ほのめくづきんかな　【同　―新五子稿】

暗の夜に頭巾を落すうき身哉　【同　―遺稿】

路ちの闇親子除合ふ頭巾哉　【同　―遺稿】

北に向人はまづしき頭巾哉　【同　―全集】

なまめきてざしある僧の頭巾哉　【同　―全集】

十一月廿四日召波亭

紙衣(かみこ)

縫ふて居る側に紙子を待身哉　【明和五年—夏より】
めし粒で紙子の破れふたぎけり　【年代考證—句集・題叢】
此冬や帋衣着ようとおもひけり　【同　—句集】
老を山へ捨し世も有に紙子哉　【同　—句集】
實盛が紙子は夜のにしきかな　【同　—新五子稿】
紙子着て用そこ／＼に歩行けり　【同　—新五子稿】
宿老の紙子の肩や朱陳村　【同　—遺稿】

足袋(たび)

十二月十四日山吹亭
眞結の足袋はしたなき給仕哉　【明和五年—夏より・題苑集】
足袋はいて寢る夜ものうき夢見哉　【年代考證—句集】

衾(ふすま)

かしらにやかけむ裾にやふるぶすま　【寶曆年中—霜月十三日・明烏】
霜月廿日夜半亭探題
鬼王が妻にをくれし衾かな　【安永四—月並發句帖・遺稿】
沙彌律師ごろり／＼とふすま哉　【年代考證—句集・新五子稿】
貧居八詠
紙ぶすま折目正しくあはれ也　【同　—句集】
藁ひとつ鼠のこぼす衾かな　【同　—新五子稿・遺稿】
糊ひきて焚火得させむ古ぶすま　【同　—全集】

蒲團（ふとん）

孝行な子供等に蒲團ひとつゞゝ　十月八日八文舍　【明和五年—夏より・新五子稿】

大兵の假寢哀れむふとん哉　十月八日八文舍　【明和五年—夏より・新選】

東山の麓に住どころトしたる一音法師に申遣す

嵐雪とふとん引合ふ侘寢かな　【安永四年—句集】

いばりせし蒲團ほしたり須磨の里　【天明二年—忘れ花・句集】

古郷にひと夜は更るふとんかな　【年代考證—句集・題林集】

虎の尾を踏つゝ裾にふとんかな　【同—句集】

能ふとん宗祇とめたるうれしさよ　【同—新五子稿・遺稿】

都人にたらぬふとんや峯の寺　【同—新五子稿】

唐くさに牡丹めでたきふとんかな　【同—新五子稿・題苑集】

あたまからふとんかぶればなまこかな　【同—新五子稿】

麥蒔（むぎまき）

麥蒔や百まで生きる皃ばかり　【同—句集・題林集】

麥蒔の影法師長き夕日かな　【同—新五子稿・遺稿】

夜興引（よこひき）

夜興引や犬のとがむる塀の内　【同—句集・題林集】

夜興引の袂佗しきはした錢　霜月廿日夜半亭探題　【同—題苑集・遺稿】

納豆汁　朱にめづる根來折敷や納豆汁　【安永四年―月並發句帖】

入道のよゝとまいりぬ納豆汁　【年代考證―句集・新五子稿】

朝霜や室の揚屋の納豆汁　【同―句集・題林集】

網代　鳥鳴て水音くるゝあじろ哉　【同―新五子稿・題林集】

貧居八詠

蕎麥湯　我のみの柴折くべるそば湯哉　【同―句集・題林集】

霜月廿日夜半亭探題

玉子酒　いざ一杯まだきににゆる玉子酒　【安永四年―月並發句帖】

藥喰　しづ〳〵と五德居へけり藥喰　【年代考證―句集】

藥喰隣の亭主箸持參　【同―句集】

くすり喰人に語るな鹿ヶ谷　【同―句集】

妻や子の寢皃も見へつ藥喰　【同―句集・題林集】

客僧の狸寢入やくすり喰　【同―句集】

藥喰芦(盧)生を起す小聲哉　【同―題苑集】

袿衣の妻もこもれりくすり喰　【同―遺稿】

鉢叩　ならし來て我夜怜め鉢叩　【寶曆年中―古選・句集】

木の端の坊主の端や鉢たゝき　【明和六年―平安廿歌仙・五畳敷】

夕顔のそれは髑髏か鉢たゝき　【明和七年―高德院發句會・其雪影】

鉢たゝきこれらや夜の都なる　【天明二年―都の枝折】

一瓢のいんで寢よやれ鉢たゝき　【年代考證―句集】

花に表太雪に君あり鉢叩　【同　―句集】

西念はもう寢た里をはち敲　【同　―句集】

守信とふくべにかけよ鉢叩　【同　―あか冠・新五子稿】

終に夜を家路にかへる鉢たゝき　【同　―新五子稿・遺稿】

夜泣する小家も過ぬ鉢たゝき　【同　―新五子稿・題苑集】

子を寢させて出行闇や鉢たゝき　【同　―遺稿】

墨染の夜の錦やはちたゝき　【同　―遺稿】

寒念佛（かんねぶつ）

十一月廿四日召波亭

細道になり行聲や寒念佛　【明和五年―夏より・三發句集】

極樂の近道いくつ寒念佛　【年代考證―句集】

挑灯の猶あはれなり寒念佛　【同　―新五子稿】

寒垢離（かんごり）

寒垢離や上の町まで來たりけり　【同　―句集・題林集】

寒ごりやいざまいりそふ一手桶　【同　―句集】

寒ごりに尻をむけたりつなぎ馬　【同　―新五子稿・題苑集】

寒聲（かんごえ）

寒聲や古うた諷ふ誰が子ぞ　【同　―句集・題林集】

十一月四日田福亭

梅幸は優伎の英雄なり。そも〳〵大石が精忠、日本が節義、能二士の肝腸を探りて其志氣にせまる。見るもの左に袒ぎ毛髪を空にす。訥子・薪水再生すとも三舍を避べし。いでや花飛鳥去月行もみぢする頃、又顔見世といへる造化の尻持出來りて我徒に助力す。むかし其角が下邳の圯橋に勇みたるや、たゞちにやむべきにあらねば、例の若者等に四更を約して、こゝかしこの扉を拳つぶるゝばかり打たゝきけるに、醉中南柯の夢いまだ覺ず、されば曉の霜に跡つけたる晋子が信にそむき、かの嵐雪が嬾にならひて、寢たるすがたのにくさげなるに、東嶺既拂曙雲

顔見世（かほみせ）　顔見世や蒲團をまくる東山　〔明和五年―夏より・句集〕

かほ見世や既うき世の飯時分　〔年代考證―句集〕

題　戀

皃見世や夜着をはなるゝ妹が許　〔同　―句集〕

旅立や皃見世の火も見ゆるより　〔同　―遺稿〕

顔みせの幕に夜半のあらし哉　〔同　―新五百題〕

煤掃（すゝはき）　煤掃や調度すくなき人は誰　〔安永三年―津守舟・新五子稿〕

すゝ拂や塵に交る夜のとの　〔年代考證―全集〕

年守（としもり）
年守や乾鮭の太刀鱈の棒　【明和　年―句明和辛卯春歳旦帖集】
とし守夜老は尊く見られけり　〔安永五年―續明烏・句集〕

十二月十四日山吹亭

年木樵（としきこり）
おとろへや小枝も捨ず年木樵　〔明和五年　夏より・句集〕
樵捨るとし木の枝に雀かな　〔年代考證―遺稿〕

年の市（としのいち）
面影のかはらけ〳〵としのくれ　〔同―文集・新五子稿〕

節季候（せきぞろ）
節季候や皃つゝましき小風呂敷　〔同―新五子稿・題林集〕
節季候着たり裏しろ面白　〔同―題苑集〕

柊さす（ひらぎさす）
柊さすはてしや外の濱びさし　〔安永三年―津守舟〕

雜魚寢（ざこね）
にしき木の立聞もなき雜魚寢哉　〔年代考證―句集・題林集〕

寶船（たからぶね）
寶ぶね慶子が筆のすさびかな　〔同―新五子稿〕

十二月十四日山吹亭

古暦（ふるごよみ）
年の内の春ゆゝしさよ古暦　〔明和五年―夏より〕
御經に似てゆかしさよ古暦　〔年代考證―句集・題林集〕
櫻木の板もやかれて古暦　〔同―遺稿〕
闇の夜に終る暦の表紙哉　〔同―遺稿〕
十日まり日和つゞきて古暦　〔同―全集〕

年忘（としわすれ）

古暦流れ留りて紙屋河　【年代考證―全集】

古暦踏や三島の宿はづれ　【同　　―全集】

春泥舍に遊びて

靈運もこよひはゆるせとし忘　【安永三年―句集・題林集】

小僧等に法問させてとし忘　【年代考證―新五子稿】

動物

鷹（たか）

十一月四日田福亭

物云ふて拳の鷹をなぐさめつ　【明和五年―夏より】

鴨（かも）

佐保川に鴨の毛捨るゆうべ哉　【年代考證―遺稿】

鴛鴦（をしどり）

鴛や池におとなき樫の雨　【明和七年―全集】

里過て古江に鴛を見付たり　【年代考證―句集】

をし鳥や鼬の覗く池古し　【同　　―新五子稿】

鴛や國守の沓もにしき革　【同　　―新五子稿】

鴛や花の君子はかれてのち　【同　　―遺稿】

寒苦鳥（かんくてう）

貧居八詠

かんこ鳥は賢にして賤し寒苦鳥　【同　　句集・題林集】

冬鶯（ふゆうぐひす）

冬鶯むかし王維が垣根哉　〔天明三年―から檜葉〕

うぐひすや何ごそつかす藪の霜　〔天明三年―から檜葉〕

千鳥（ちどり）

うかれ越せ鎌倉山を夕千鳥　〔寶曆三年―反古衾〕

十月八日八文舍

磯千鳥あしをぬらして遊びけり　〔明和五年―夏より・續明烏〕

甘棠居にやどりて

千どり聞夜を借せ君が眠るうち　〔安永五年―全集〕

一條もどり橋のもとに、柳風呂といふ娼家有。ある夜太祇とともに此樓にのぼりて

羽織着て綱もきく夜や川ちどり　〔年代考證―句集〕

風雲の夜すがら月の千鳥哉　〔同―句集・題林集〕

打よする浪や千鳥の横ありき　〔同―句集〕

加茂人の火を燧音や小夜衛　〔同―句集〕

浦千鳥草も木もなき雨夜哉　〔同―新五子稿・遺稿〕

渡し呼女の聲や小夜ちどり　〔同―新五子稿・遺稿〕

湯あがりの舳先にたつや村千鳥　〔同―新五子稿〕

むら雨に音行違ふ千鳥かな　〔同―新五子稿〕

便舟のこたへつれなき千鳥かな　〔同―新五子稿〕

鎧着て瀬を汲夜や村千鳥　【年代考證―葎亭畫贊集附錄】

聽へらすむかしながらの千鳥哉　【同　―全　集】

四ツの海に足る歟たらぬのちどり哉　【同　―全　集】

淡路島

島山や夜着の裾より朝千鳥　【同　―全　集】

水鳥（みづとり）

水鳥や提灯遠き西の京　【安永二年―新　選】

水鳥や百姓ながら弓矢取　【年代考證―句　集・題林集】

水鳥や舟に菜を洗ふ女有　【同　―句　集】

水鳥や枯木の中に駕二挺　【同　―句　集】

かぜ一陣水鳥白く見ゆるかな　【同　―新五子稿・題苑集】

水鳥の居所替る倲かな　【同　―新五子稿】

水鳥や朝めし早き小家がち　【同　―新五子稿】

水鳥を吹あつめたり山おろし　【同　―新五子稿】

水鳥やてうちんひとつ城を出る　【同　―遺　稿】

水鳥や夕日江に入る垣のひま　【同　―遺　稿】

水鳥や巨椋の舟に木綿うり　【同　―遺　稿】

鰒（ふぐ）

十月三日兼題

缶鼓て鰒になき世の人とはん　【明和八年―高德院發句會・句集】

鈍の面ラ世上の人を白眼ム哉　【明和八年—百池存稿・明烏】

音なせそ敲くは僧よ河豚汁　【明和八年—百池存稿・新選】

雪の河豚鮟鱇の上にたゝんとす　【安永二年—新選】

十月廿四日夜半亭兼題

ふぐ汁や己等が夜は朧なる　【安永四年—月並發句帖・遺稿】

十月八日八文舍

鰒喰へと乳母はそだてぬ恨かな　【明和五年夏より・新五子稿】

鰒汁の我活てゐる寢覺哉　【明和七年—日發句集・其雪影】

鰒汁の宿赤〳〵と燈しけり　【年代考證—句集】

秋風の呉人はしらじふぐと汁　【同—句集】

袴着て鰒喰ふて居る町人よ　【同—句集】

海のなき都はこはしふぐと汁　【同—新五子稿】

ふぐ汁の亭主と見えて上座哉　【同—新五子稿・遺稿】

逢はぬ戀おもひ切夜やふぐと汁　【同—新五子稿・遺稿】

妹が子は鰒くふ程になりにけり　【同—新五子稿】

玉川の哥口すさむ鰒の友　【同—遺稿】

鰒の贊先生文を揮はれたり　【同—遺稿】

その昔かま倉の海や鰒やなき　【同—遺稿】

望月のその如月に鰒はなし　【年代考證―遺稿】

河豚汁や五侯の家の戻足　【同　―遺稿】

鰒汁の君よ我等よ子期伯牙　【同　―遺稿】

鰒と汁鼎に伽羅を焚火哉　【同　―遺稿】

杜父魚（かくぶつ）

杜父魚のえものすくなき翁哉　【安永年中―句集】

乾鮭（からざけ）

倣素堂

乾鮭や琴に斧うつひゞきあり　【安永五年―明烏・句集】

から鮭に腰する市の翁かな　【安永五年―句集】

漫興

佗禪師乾鮭に白頭の吟を彫　【安永六年―新虚栗集・句集】

からざけや帶刀殿の臺所　【年代考證―句集】

からざけや鳶もすさめぬ市の中　【同　―新五子稿】

乾鮭の骨にひゞくや後夜のかね　【同　―新五子稿】

からざけの片荷や小野の炭俵　【同　―新五子稿・遺稿】

からざけや小野ゝ芒も枯て後　【同　―題苑集・遺稿】

から鮭や判官殿の上り太刀　【同　―遺稿】

風呂敷にから鮭と見しは卒都婆哉　【同　―遺稿】

鷹が峯に遊びて樵夫の家にやどる

寒山に木を伐て乾鮭を烹る　【年代考證—遺稿・書翰】

十月廿三日山吹亭

生海鼠（なまこ）

大鰒そしればうごく生海鼠哉　【明和五年—夏より】

おもふこと言はぬさまなる生海鼠哉　【明和年中—新五子稿・書翰】

海鼠にも鍼こゝろむる書生哉　【安永二年—遺稿】

十一月廿四日召波亭

鯨（くぢら）

彌陀佛や鯨よる浦に立給ひ　【明和五年—夏より】

几董判句合

鯨賣市に刀を皷（ナラ）しけり　【年代考證—句集・題林集】

突とめた鯨が眠る峯の月　【同—新五子稿】

既に得し鯨は逃て月ひとつ　【同—新五子稿・遺稿】

山颪一二の銛の幟かな　【同—題苑集・遺稿】

手取にやせんと乗り出す鯨舟　【同—遺稿】

植物

洛北にあそぶ

冬木立（ふゆこだち）

鷺に美をつくすらん冬木立　【寶曆年中—百歌仙・句集】

十一月廿四日召波亭

みよしのやもろこしかけて冬木立　【明和五年　夏より・遺稿】

里ふりて江の鳥白し冬木立　【安永二年―遺稿書翰】

霜月十日會

冬木立家居ゆかしき麓哉　【安永三年　月並發句帖・遺稿】

斧入て香におどろくや冬こだち　【年代考證―句集・題林集】

冬こだち月に隣をわすれたり　【同　―句集】

この句は夢想に感ぜし也

二村に質屋一軒冬こだち　【同　―句集】

このむらの人は猿也冬木だち　【同　―句集】

乾鮭ものぼる景色や冬木立　【同　―遺稿】

落葉

伐たをす木は其儘の落葉哉　【寶曆二年―反古衾】

十月八日八文舍

屋ねふきの落葉踏なり閨の上　【明和五年―夏より・遺稿】

十月五日召波亭

落葉して遠くなりけり臼の音　【明和六年―夏より・遺稿】

十月三日當坐　遠くて近きもの

礫を手で點頭す落葉哉　【明和八年　高德院發句會】

細道を埋みもやらぬ落葉哉　【明和七年—日發句集・新五子稿】

西吹ばひがしにたまる落葉哉　【安永五年—續明烏・句集】

待人の足音遠き落葉哉　【年代考證—句集】

菊は黄に雨疎かに落葉かな　【同—句集】

古寺の藤あさましき落葉哉　【同—句集】

往來待て吹田をわたる落ば哉　【同—句集】

長生の舍をうづむ落葉哉　【同—新五子稿】

茶俵を捨る所もおち葉哉　【同—新五子稿・遺稿】

舂臼のこゝろ落つく落葉哉　【同—新五子稿・遺稿】

乘ものを靜に居る落葉哉　【同—新五子稿・遺稿】

（マヽ）隋葉を拾ひて紙に換たるもろこしの貧しき人も、腹中の書には富るなるべし。さればやまとうたのしげきことのはのうち散たるをかきあつめて捨ざるは、我はいかいの道なるべし

柿落葉（かきおちは）

もしほ草柿のもと成落葉さへ　【安永七年—句集】

人々高尾の山ぶみして一枝を贈れり。頃は神無月十日まり老葉霜に堪ず、やがてはらはらうち散たる、ことにあはれふかし

冬紅葉

爐に燒て煙を握るもみぢ哉 【安永三年―ゑぼし桶・句集】

冬の梅

冬の梅きのふやちりぬ石の上 【年代考證―句集】

八朔梅髣髴として冬至梅 【同 ―題苑集】

鶯の逢ふて戻るや冬の梅 【同 ―遺稿】

大星力彌の賛

引よせてとらまへ見るや冬の梅 【同 ―句集拾遺】

寒梅

寒梅を手折ひゞきや老が肘 【安永九年―連句會草稿 はいかい袋】

寒梅や熊野の溫泉の長がもと 【天明二年―名所小鏡・遺稿】

鐵骨といふは梅の枝を寫する書法也

寒梅や火の迸る鐵より 【年代考證―句集】

寒梅やうめの花とは見つれども 【同 ―遺稿】

早梅

早梅や御室の里の賣屋敷 【同 ―句集】

歸り花

屋根ふきがふしんな顏や歸り花 【同 ―新五子稿】

焚火してひやさぬ庭や歸り花 【同 ―新五子稿】

讃岐別丈石

片枝は雪に殘して歸り花 【同 ―落日庵句集】

木ひとつに飛花落葉やかへり花 【同 ―遺稿】

薄枯てまねかずとても歸り花 【同 ―全集】

霜月廿日夜半亭探題

枇杷の花　枇杷の花鳥もすさめず暮にたり　【安永四年―月並發句帖・句集】

石蕗の花　咲べくもおもはであるを石蕗花　【年代考證―句集・題林集】

茶の花　茶の花や黄にも白にもおぼつかな　【安永二年―新選・句集】

茶のはなや石をめぐりて路を取　【年代考證―句集】

陶弘景賛

冬牡丹　山中の相雪中のぼたん哉　【同―句集】

十一月四日田福亭

寒菊　寒菊を愛すともなき垣根哉　【明和五年―夏より】

寒ぎくや日の照村の片ほとり　【年代考證―新五子稿】

寒菊やいつを盛りの莟がち　【同―新五子稿】

水仙　水仙や寒き都のこゝかしこ　【安永年中―句集・題林集】

古丘

水仙に狐遊ぶや宵月夜　【天明三年―五車反古】

水仙や美人がうへをいたむらし　【年代考證―句集】

水仙や鵙の草莖花咲ぬ　【同―句集】

九月十五日夜半亭

枯尾花　狐火の燃へつくばかり枯尾花　【安永三年―月並發句帖・句集】

枯尾花野守が鬢にさはりけり　〔安永三年―遺稿・書簡〕

金福寺芭蕉翁墓

我も死して碑に邊せむ枯尾花　〔年代考證―句集〕
千葉どのゝ假家引ヶたり枯尾花　〔同―句集・題林集〕
秋去ていく日になりぬ枯尾花　〔同―遺稿〕

草枯（くさかれ）

草枯て狐の飛脚通りけり　〔安永五年―蓮華會集・句集〕
日あたりの草しをらしく枯にけり　〔年代考證―新五子稿〕

葱（ねぎ）

葱買て枯木の中を歸りけり　〔同―句集〕
ひともじの北へ枯臥古葉哉　〔同―句集・題林集〕
うら町に葱うる聲や宵の月　〔同―新五子稿〕
葱洗ふ流もちかし井手の里　〔同―遺稿〕

韮（にら）

霜あれて韮を刈取翁かな　〔同―句集〕
物あれて韮にかくるゝ鳥孤つ　〔同―全集〕

大根（だいこ）

大根の畫讚

武者ぶりのひげつくりせよ土大根　〔同―句拾遺〕

冬雜（ふゆざふ）

寒夜

鐘老聲饑て鼠榓（シャミ）を食（ハミ）こぼす　〔安永六年―新虛栗集〕
花散月落て文斯にあら有がたや　〔年代考證―文集〕

口合縮入いせ物語

道べたの御公家は馬にのられけり　（年代考證―狐の茶袋）

狐火や髑髏に雨のたまる夜に　（同―句集）

海士の家の鷗にしらむ夕哉　（同―全集）

雪月花つゐに三世のちぎりかな　（同―全集叢書）

蕪村俳句異同考

蕪村俳句異同考

春の部

三椀の雑煮かゆるや長者ぶり（句集）
三ツ椀の雑煮かへるや長者ぶり（狭蓑集）
三椀の雑煮かゆるや亭主ぶり（全集）

閑帳の錦たれたり春の夕（句集）
閑帳のにしきたれけり春のくれ（品集）
閑帳のにしき垂たり春の暮（題苑集）

うたゝ寝のさむれば春の日くれたり（句集）
うたゝ寝のさむれば春も暮にけり（品集）

居風呂に棒の師匠や春のくれ（遺稿）
居風呂に棒の師匠やおぼろ月（印譜）

山彦の南はいづこ春の暮（遺稿）
山彦の南はいづち春の暮（題苑集・句集拾遺）

春の夜や宵あけぼのゝ其中に（明烏・句集）
春の夜や宵曉の其中に（句帖）

けふのみの春を歩行て仕廻けり（日發句集・新選）
けふの此春を歩行て仕廻けり（品集）
一日の春を歩いて仕舞けり（書簡）

行春や横河へのぼるいもの神（句集）
行春や横河を登るいもの神（句草紙）

ゆく春や逡巡として遅ざくら（句集）
行春の逡巡として遅ざくら（花鳥篇）

また長ふなる日に春の限りかな（句集）

末長う成る日に春の限かな　（獨吟）

春雨や同車の君がさゝめごと　（遺稿）

ゆく春や同車の君のさゝめごと　（全集短册）

春雨や小磯の小貝ぬるゝほど　（句集）

春雨に小磯の小貝ぬれに鳬　（雪翰）

春雨や鶴の七日を降くらす　（臥央初懷紙）

春雨や鶴の七日をふりたらす　（遺稿）

草霞み水に聲なき日くれ哉　（句集）

草霞み水にちりなき夕かな　（題叢）

草霞み水に聲なき夕かな　（題林集・類聚）

陽炎や名もしらぬ虫の白き飛　（句集）

陽炎や名のしれぬ虫白う飛　（題林集）

命婦よりぼた餅たばす彼岸哉　（句集）

命婦よりぼた餅たばす亥子哉　（題林集）

たらちねの抓までありや雛の鼻　（五車反古）

たらちねのつまゝずありや雛の鼻　（句集）

たらちめの包ます有や雛のはな　（題林集）

畑打や我家も見えて暮かぬる　（新五子稿）

畑うちや我宿も見えて暮かゝる　（題苑集）

畑打や我家も見えて暮れかゝる　（句集拾遺）

古河の流引つゝ種ひたし　（連句會草稿）

古河の流を引つ種ひたし　（句集）

古河の流を引や種ひたし　（題苑集）

留主守て鶯遠く聞日哉　（新五子稿）

留主守の鶯遠く聞日哉　（遺稿）

日は日くれよ夜は夜明ヶよと啼蛙　（句集獨吟）

夜は夜明よ日は日暮よと啼蛙　（新雜談集）
大津繪に糞落しゆく燕かな　（句集）
大津繪に糞こぼし行つばめ哉　（題林集）
雉打て歸る家路の日は高し　（五車反古・句集拾遺）
雉打て戻る家路の日は高し　（新五子稿）
きじ鳴や坂を下りの驛舍　（句集）
きじ鳴や坂を下りのたびやどり　（書簡）
野邊の梅白くも赤くもあらぬ哉　（夏より）
野路の梅白くも赤くもあらぬ哉　（遺稿）
しら梅に明る夜ばかりとなりにけり　（から檜葉・常盤の香）
しら梅の明る夜斗と成にけり　（家譜後拾遺）
水に散て花なくなりぬ岸の梅　（遺稿）

水にちりて花なくなりぬ崖の梅　（書簡）
一筋も弃たる枝なき柳かな　（春慶引）
一筋も捨る枝なきやなぎ哉　（新五子稿）
捨やらで柳さしけり雨のひま　（句集）
捨やらで柳さしけり雨の中　（品彙）
小冠者出て花見る人を咎けり　（句集）
小冠者出て花折人を咎けり　（十家類題集）
哥屑の松に吹れて山ざくら　（句集）
哥屑の松に吹れて遲ざくら　（連句會草稿）
飢烏の花踏こぼす山櫻　（遺稿）
烏飢て花踏こぼす山ざくら　（新五子稿）
祇や鑑や髭に落花を捻けり　（五車反古）

祇や鑑や髭にちる花握りけり　(千家類題集)

花ちりて木間の寺と成にけり　(句集)

花散てもとの山家と成に凫　(遺稿)

馬下りて高根の櫻見つけたり　(句集)

きのふけふ高根の櫻見へにけり　(新五子稿・題苑集)

菜の花や皆出拂ひし矢走舟　(遺稿)

菜の花にみな出仕舞ひぬ矢橋舟　(題苑集・句集拾遺)

なの花にみな出しまふや矢橋舟　(題叢後篇)

これきりに徑盡たり芹の中　(句集)

是切に氷付たり芹の中　(八題集)

莟とは汝もしらずよ蕗のとう　(句集・狹蓑集)

つぼみとは汝もしらずやふきの薹　(題林集)

海苔掬ふ水の一重や宵の雨　(連句會草稿・新五子稿)

海苔掬ふ水の一重や朧月　(題苑集・句集拾遺)

春の雨日暮むとしてけふも有　(几董初懷紙)

春雨や暮なんとしてけふも有　(題林集・品彙)

陽炎や簣に土をめづる人　(句集)

かげろふや簣に土を愛す人　(書翰)

陽炎やひそみもあえず土龍　(遺稿)

陽炎にしのびかねてや土龍　(書翰)

初午や物種賣に日の當る　(句稿)

初午やもゝたね賣に日の當る　(都枝折)

歩行〳〵ものおもふ春の行衛哉　(新五子稿)

おき〳〵にものおもふ春の行衛哉　(遺稿)

畠うつや鳥さへ啼ぬ山かげに　（句　集）

耕や鳥さへ啼ぬ山陰に　（狹　蓑　集）

居風呂に後夜きく花のもどりかな　（句　集）

居風呂に後夜きく花の歸哉　（書　翰）

筏士や蓑をあらしの花衣　（雪　の　聲）

筏士の蓑やあらしの花衣　（またら鴈集・句集）

旅人の鼻また寒し初ざくら　（句　集）

旅人の鼻迄寒し初ざくら　（題　林　集）

ゆき暮て雨もる宿やいとざくら　（句　集・題林集）

ゆき暮て雨もる宿や散櫻　（千　家　類　題　集）

夏の部

みじか夜の闇より出て大井川　（露　袋・句集拾遺）

短夜の闇よりあけて大井河　（新　五　子　稿）

短夜や眠らず守る翁丸　（高徳院發句會）

みじか夜を眠らでもるや翁丸　（句集・發　毛爾波草）

短夜や浪うち際の捨篝　（句　集）

短夜やさゞらなみよる捨篝　（書　翰）

短夜や淺瀨にのこる水の月　（月　並　發　句　帖）

みじか夜や淺瀨にのこる月一片　（遺　稿）

飯盜む狐追ひうつ麥の秋　（遺　稿）

飯盜む狐追ふ聲や麥の秋　（題苑集　句集拾遺）

五月雨や御豆の小家の寢覺がち　（夏　よ　り）

さみだれや美豆の寢覺の小家がち　（遺　稿）

さみだれや田ごとの闇と成にけり　（新　花　摘）

落し水田ごとの闇となりにけり　（細草紙・津守舟）

高紐にかくる兜やかぜ薫る　（夏より）

高紐にくゝる兜やかぜ薫る　（新五子稿）

雨となる戀はしらずや雲の峰　（夏より）

雨と成戀はしらじな雲の峰　（句集・題叢）

花の雲三たびかさねて雲の峰　（つかのかげ）

花の雲三重に襲ねて雲の峰　（昔を今）

石切の鑿冷したる清水かな　（新選）

石工の鑿冷したる清水かな　（句集）

落合ふて音なくなれる清水哉　（句集）

落あふて音なくなりし清水哉　（新五子稿・宿の日記）

水晶の山路更行清水哉　（夏より）

水晶の山路わけゆく清水哉　（新五子稿・遺稿）

草の雨祭の車過てのち　（句集）

草の雨あふひの車過て後　（新五子稿）

味噌汁を喰ぬ娘の夏書哉　（新選）

味噌汁をくはぬ女の夏書哉　（新五子稿）

葉うら〳〵火串に白き花見ゆる　（新花摘）

雨やそも火串に白き花見ゆる　（新花摘）

絹着せぬ家中ゆゝしや衣更　（古選）

絹着せぬ家中ゆゝしき更衣　（句集）

鯰得てもどる田植の男かな　（新花摘）

鯰得て歸る田植の男かな　（句集・題林集）

水深く利鎌鳴らす眞菰刈　（句集）

水ふかく利鎌ならすまこも哉　（題林集）

葛水にうつりてうれし老の皃　（新五子稿）
葛水にうつして嬉し老が皃　（袖草紙）
葛水にうつらで嬉し老が皃　（題林集・句集拾遺）

なれ過た鮓をあるじの遺恨哉　（句集）
なれ過てすしを主の遺恨哉　（題林集）

主しれぬ扇手にとる酒宴哉　（夏より）
主しれぬ扇手とりに酒宴哉　（遺稿）

渡し呼草のあなたの扇哉　（句集）
渡し待草のあなたの團哉　（題林集）

かはかほりやむかひの女房こちを見る　（句集・發句天爾波草）
かはほりやむかひの女房こちに居　（品彙）

こもり居て雨うたがふや蝸牛　（句集）
こもり居て雨うかゞふや蝸牛　（題叢）

蚊の聲す忍冬の花の散たびに　（句集）
蚊の聲や忍冬の花の散毎に　（新五子稿）

袖笠に毛むしをしのぶ古御達　（新花摘）
袖笠に毛虫をしのぶ古御厨子　（句集拾遺）

蚊屋を出て奈良を立ゆく若葉哉　（句集・不二煙集）
蚊帳を出て奈良を立けり夏木立　（新五子稿・都枝折）

茂山や扨は家ある柿わか葉　（新五子稿）
茂山やさては家有柿もみぢ　（題林集・句集拾遺）

出家して親王ます里の若葉かな　（遺稿）
出家して親在す里のもみぢ哉　（新五子稿）

笋や五助畠の麥の中　（新花摘・句集拾遺）
狐火や五助畠の麥の雨　（遺稿）
白かねの花さく井出の垣根哉　（新花摘）
白かねのうの花も咲や井出の里　（新花摘）
ゆふがほや竹燒く寺のうすけぶり　（遺稿）
夕顏に竹燒寺のけぶりかな　（題苑集・十家類題集）
たちばなのかはたれ時や古館　（句集）
たちばなの片われ時や古館　（題林集）
吹売の浮葉に煙る蓮見かな　（夏より・句集）
吸売のうき葉に烟る蓮哉　（新選）
雷に小家は燒れて瓜の花　（句集）
雷に小家燒れけり瓜の花　（書翰）

足あとを字にも見られずかんこ鳥　（平安廿歌仙）
足跡を字にもよまれず閑居鳥　（句集・題林集）
湖へ富士をもどすやさつき雨　（句集）
湖へ富士をもどす歟さつき雨　（全集）
手すさみの團畫ん草の汁　（夏より・句集）
手すさみに團畫ん草の汁　（題叢）
いさゝかな料理出さん土用干　（夏より）
いさゝかな料理出來たり土用干　（遺稿）
夜やいつか長良の鵜舟曾て見し　（遺稿）
身やいつか長柄のうぶね曾て見き　（書翰）
山颪早苗を撫し行衞哉　（夏より）
山颪早苗を撫て行衞哉　（遺稿）

あふみ路や麻刈あめの晴間哉　（新五子稿）
あふみのや麻刈あめの晴間哉　（書簡）

水の粉もきのふに盡るやどり哉　（夏より）
水の粉のきのふに盡ぬ草の菴　（句集）

かしこにて昨日も啼ぬかんこどり　（連句會草稿）
かしこにてきのふも聞ぬ閑居鳥　（新五子稿）

飯櫃の底たゝく音やかんこ鳥　（新選）
食次の底たゝく音トやかんこ鳥　（句集）

蝸牛の住はてぬ宿やうつせ貝　（月並發句帖）
蝸牛の住はてし宿やうつせ貝　（句集）

蝱のなき菴をたゝくや病上り　（全集）
蝱打て留主居ながらや病上り　（全集）

うは風に蚊の流れゆく野河哉　（句集）
うは風に蚊の流れゆく小川哉　（名所千題集）

半日の閑を榎の木に蟬のあり　（夏より）
半日の閑を榎やせみの聲　（句集）

鳥稀に水亦遠し蟬の聲　（夏より）
鳥まれに水また赤し蟬の聲　（新五子稿）

朝風の毛を吹見ゆる毛むしかな　（新花摘）
朝風に毛を吹れ居る毛むし哉　（新花摘）

いづこより礫うちけむ夏木立　（句集・題林集）
いづこより礫うちこむ夏木立　（袖草紙）

鄕君の曉起や蓼のあめ　（新五子稿）
人妻の曉起や蓼の雨　（全集）

秋の部

秋來ぬと合点のいたる噓哉　（新題）
秋來ぬと合点さしたる噓かな　（題林集）
猿どのゝ夜さむ訪行兎かな　（古今短冊集）
猿どのゝ夜寒訪ふ兎かな　（百歌仙）
あちら向に立鴫斗秋のくれ　（夏より）
こちら向にたつ鴫はなし秋のくれ　（蓮華會集）
あちらむきに鴫も立たり秋のくれ　（句集）
あちらむきに鴫も立けり秋の夕　（題叢）
淋し身に杖わすれたり秋の暮　（句集）
淋し身の杖わすれたり秋の暮　（書翰）
淋し身に杖わすれたり秋の夕　（題叢）

山鳥の枝踏かゆる夜長かな　（夏より・秋の山家）
山鳥の枝ふみかへるなが夜かな　（題苑集）
いさゝかなをいめ乞れぬ暮の秋　（句集）
いさゝかな價乞はれつあきの暮　（題林集）
秋おしむ戸に音づるゝ狸かな　（平安廿歌仙）
秋おしむ戸におとづるゝ砧かな　（新五子稿）
秋の夜の燈を取越の筧哉　（夏より）
秋の夜の燈を呼ぶ越の筧哉　（遺稿）
冬ちかし時雨の雲もこゝよりぞ　（句集）
冬近し時雨る雲もこゝよりぞ　（題林集）
中〳〵に獨なればぞ月を友　（續明烏）
中〳〵にひとりあればぞ月を友　（句集）

湖の月やよ望に降雪歟とぞ　（連句會草稿）
水の月やよ望に降る雪かとよ　（遺　稿）
月天心貧しさ町を通りけり　（句　集）
名月に貧しき道を通りけり　（新五子稿）
庵の月主をとへば芋堀に　（句　集）
名月やあるじをとへば芋堀に　（全集畫賛）
名月や雨を集めた池の上　（高德院發句會）
名月や雨を溜たる池のうへ　（句　集）
泊る氣でひとり來ませり十三夜　（句　集）
とまる氣でひとりきませり后の月　（題林集）
かじか煮る宿にとまりつ後の月　（夏より）
鰍煮る宿にとまりつ后の月　（新五子稿）

呼べば來ます心やすさよのちの月　（書　簡）
主從の心やすさよのちの月　（書　簡）
魚さけて心やすさよのちの月　（書　簡）
かなしさや釣の糸吹あきの風　（句集・新雜談集）
江渺ゝ釣の糸吹あきの風　（新雜談集・句集拾遺）
浦寂し釣の絲吹秋の風　（全集畫賛）
浪悠ゝ釣の糸吹秋の風　（大和名所圖會）
金屛の羅は誰ヵあきのかぜ　（句　集）
銀屛のうすものは誰か秋の風　（全集短冊）
市人のよべ問かはすのはきかな　（句集・新五子稿）
市人の物うちかたる野分哉　（新々五百題）
恙なき帆柱寐せる野分かな　（新五子稿）
恙なき帆柱寢かすのわきかな　（遺　稿）

棒つひて庄屋どの見舞野分哉　（新五子稿）
棒突て庄屋を見舞ふ野分かな　（題苑集・句集拾遺）
野分やんで鼠のわたるながれかな　（新五子稿・句集拾遺）
野分して鼠のわたる潦　（遺稿）
古郷の座頭に逢ぬすまふ取　（新選・句集拾遺）
故里の坐頭に逢ふや角力取　（遺稿）
物焚て花火に遠きかゝり船　（夏より・續明烏）
物焚て花火に遠しかゝり船　（題林集）
家ありや煙のつとふ鳴子縄　（題苑集・句集拾遺）
家ありや烟のつたふかゞし縄　（新五子稿）
稻かれば小草に秋の日のあたる　（遺稿）
稻かりて小草に秋の日のあたる　（新五子稿）

石を打狐守夜のきぬた哉　（句集）
石を打狐きく夜のきぬたかな　（題林集）
石をうちて狐守る夜の砧かな　（品突）
旅人に我家しらるゝ砧かな　（新五子稿）
旅人に我夜しらるゝきぬた哉　（仝集）
わたとりや犬を家路に追かへし　（新五子稿）
わたとりや犬を家路に追まはし　（題苑集　句集拾遺）
綿とりや犬を家路に追戻し　（題葉）
ひたと犬の鳴町過て躍かな　（續明烏）
ひたと犬の啼町越えて躍かな　（句集）
高燈籠消なんとするあまたゝび　（郁枝折・句集）
あまたゝび消なんとする高燈籠　（題葉集）

細腰の法師すゞろに踊かな　（五車反古）
細腰の法師すゞろにおどりけり　（題苑集・句集拾遺）

三度啼て聞えずなりぬ鹿の聲　（句集）
三たび啼いて聞えずなりぬ雨の鹿　（書翰）

たち聞の心地こそすれ鹿の聲　（遺稿）
立聞のこゝ地也けり鹿の聲　（書翰）

鴫立て秋天ひきゝながめ哉　（句集・題叢）
鴫立て秋天たかきながめかな　（題林集）

沙魚釣の小舟漕なる窓の前　（句集）
沙魚つりの小舟漕よる窓の前　（題林集）

瀬田降て志賀の夕日や江鮭　（句集）
瀬田降て志賀の夕やあめの魚　（題林集）

みのむしや秋ひだるしと鳴なめり　（句集）
蓑虫の秌ひだるしと啼なめり　（題叢）

虫賣のかごとがましき朝寐哉　（句集）
虫うりのかごとがましき晝寐かな　（題林集）

紅葉見や用意かしこき傘二本　（遺稿）
しぐるゝや用意かしこき傘二本　（句集拾遺）

折えたる紅葉扱しも横ひらた　（新五子稿）
折得たる紅葉さてしも横ひらき　（遺稿）

村百戸菊なき門も見えぬ哉　（句集）
村百戸菊なき門はなかりけり　（千秋集後編）

二本づゝきくまゐらせん佛達　（新五子稿）
二本づゝ菊まゐらする佛達　（遺稿）

萩咲て玉田横野へわかれ行　（新五子稿・句集拾遺）
萩にくれて玉田横野へわかれゆく　（遺稿）

とかくして一把に折ぬおみなへし　（日發句集・新選）
とかくして一把になりぬをみなへし　（遺稿）

此蘭や茂作が庭にきのふまで　（月並發句帖）
この蘭や五助が庭に昨日まで　（遺稿）

朝皃や手拭のはしの藍をかこつ　（句集）
蕣や手拭のさきの藍をかこつ　（題林集）

蓼の穂を眞壺に藏す法師哉　（遺稿）
蓼の穂を眞壺にたしむ法師哉　（書簡）

水かれ〴〵蓼歟あらぬ歟蕎麥歟否歟　（句集）
水かれ〴〵蓼かあらぬかそばの花　（題叢後篇）

かけ稲に鼠鳴なる門田かな　（月並發句帖）
かけ稲に鼠のすだく門田哉　（遺稿）

折くるゝ心こぼさじ梅もどき　（忘れ花・句集）
折くるゝ心ほどよし梅もどき　（題林集）

しか〴〵と主訪來ず下り簗　（新五子稿）
しか〴〵と主も訪來ずくだり簗　（全集）

小百姓鶉を取老となりにけり　（句集）
小百姓椋鳥とる老となりにけり　（題林集）

貧乏に追つかれけりけさの秋　（句集）
貧乏に追付れたり今朝の秋　（高德院發句會）

甲賀衆のしのびの賭や夜半の秋　（句集）
甲賀衆のしのびの術や夜半の秋　（題叢）

人をとる淵はかしこ歟霧の中　（新選・句集拾遺）
人をとる灘はかしこか霧の海　（遺稿）

夜半から猫も杓子もおどりかな　（畫贊）
月更て猫も杓子も踊かな　（夏より）
爺も婆も猫も杓子もをどり哉　（句集拾遺）

錦する秋の野末のかゞしかな　（新五子稿）
錦する野にこと〳〵とかゞし哉　（遺稿）

畠主のかゞし見舞て戻りけり　（新五子稿）
畠ぬし案山子に逢て戻りけり　（遺稿）

ゆく秋の所〳〵やくだり簗　（新五子稿・句集拾遺）
行秋や處〳〵に下り簗　（所名集）

わたつむや烟草の花を見て休ム　（句集）
綿取やたばこの花を見て休む　（題林集）

稚子の寺なつかしむいてう哉　（句集）
子供氣に寺なつかしむいてう哉　（全集）

故郷や酒はあしくもそばの花　（句集）
歸去來酒はあしくもそばの花　（月並發句帖）

冬の部

冬やことしよき裘得たりけり　（張瓢・遺稿）
けさの冬よき毛衣を得たりけり　（句集拾遺）

石公へ五百目もどすとしのくれ　（句集）
張良が五百目もどす師走かな　（しばふく風）

冬ざれて韮の羹喰ひけり　（遺稿）
腐儒者韮の羹喰ひけり　（遺稿・畫贊）

冬ざれや北の家陰の韮を刈　（五車反古）
冬木立北の家かげの韮を刈　（全集書簡）
しぐれ松ふりて鼠の通ふ琴の上　（夜半亭月並小摺物）
しぐるゝや鼠のわたる琴の上　（句集）
古傘の婆娑と月夜の時雨哉　（句集）
古傘の婆娑としぐるゝ月夜哉　（書簡）
禪寺の廊下たのしめ北時雨　（新五子稿）
禪林の廊下うれしき時雨哉　（遺稿）
鶯の竹に來そめてしぐれかな　（新五子稿）
鶯の竹に來そめてしぐれけり。　（題苑集・句集拾遺）
雪折もきこえて暗き夜なりけり　（遺稿）
雪折も聞えてくらき夜なる哉　（題苑集・句集拾遺）

雪の戸に格をあて行木履哉　（遺稿）
雪の戸にカクを當行足駄哉　（全集）
雪の戸にカクを當行弓矢取　（全集）
古池に草履沈ミてみぞれ哉　（句集）
古池に草履沈みてみぞれけり　（全集）
こがらしや畠の小石目に見ゆる　（句集）
木がらしや畑にちいさき石も見え　（新五子稿）
山水のへるほど減りて氷かな　（夏より・五疊敷）
山水の減る程へつて氷けり　（新選）
桃源の道の細さよ冬籠　（新五子稿）
桃源のろぢの細さよ冬ごもり　（遺稿）

口切や喜多も召れて四疊半 （高德院發句會）
口切や北にも召れて四疊半 （遺稿）

白炭の骨にひらくや後夜の鐘 （遺稿）
乾鮭の骨にひゞくや後夜のかね （新五子稿）

頭へやかけん裾へや古衾 （句集）
かしらにやかけむ裾にやふるぶすま （明烏・霜月十三日）
頭へやかけん裾へや紙衾 （題林集）

寒ごりに尻をむけたりつなぎ馬 （新五子稿・題苑集）
寒ごりに尻背けたる繋馬 （遺稿）

とし守夜老は尊く見られけり （續明烏）
とし守夜老は尊くみへにけり （題林集）

炭俵ますほのすゝき見付たり （新五子稿）
炭團ます穗の芒見つけたり （句集拾遺）

鰒汁の我活ている寐覺哉 （日發句集・其雪影）
鰒喰て我生てゐる寐覺哉 （獨喰）

海のなき都はこはしふぐと汁 （新五子稿）
海のなき京おそろしやふぐと汁 （遺稿）

缶鼓て鰒になき世の人とはん （高德院發句會）
甍うつて鰒になき世の友とはむ （句集）

かんこ鳥は賢にして賤し寒苦鳥 （句集）
閑子鳥は貧にして賤し寒苦鳥 （題苑集）

茶の花や黄にも白にも覺束な （新選）
茶の花や白にも黄にもおぼつかな （句集）

引よせてとらまへ見るや冬の梅 （句集拾遺）
とらまへてひきよせ見るや冬の梅 （全集靈贊）

鶯に美を盡してや冬木立　（句集）
鶯に美をつくすらん冬木立　（百歌仙）
葱買て枯木の中を歸りけり　（句集）
葱買て枯木の中を歸るかな　（題苑集）
眞金はむ鼠の牙の音寒し　（遺稿）
鐵をはむ鼠の牙の寒さかな　（題苑集・句集拾遺）
炉開や裏町かけて一住居　（夏より）
炉びらきや裏町かけて角やしき　（遺稿）
蕭條として石に日の入枯野かな　（句集）
てら〳〵と石に日の照枯野かな　（題苑集・句集拾遺）
枯尾花野守が鬢にさはりけり　（遺稿）
柴刈の鬢に障るや枯尾花　（題苑集・句集拾遺）

鴨遠く鍬すゝぐ水のうねりかな　（新五子稿）
鍬洗ふ水のうねりや鴨一羽　（遺稿）
宗任に水仙見せよ神無月　（句集）
宗任に水仙見せて神無月　（題苑）
ゆく年の瀬田を廻るや金飛脚　（句集）
行年の瀬田へまはるや銀飛脚　（題林集・所名集）
寒月や衆徒の群議の過て後　（句集）
寒月や衆徒の群議の濟て後　（題林集）
物負て堅田へ歸るしぐれ哉　（書簡）
物置て堅田へ歸るしぐれ哉　（遺稿）
水ぎはもなくて古江の時雨哉　（遺稿）
水降もなくて古江のしぐれ哉　（新五子稿）

宿かせと刀投出す吹雪哉　（夏より　やどり木）
宿貸に刀投出す吹雪哉　（題林集）

團炭法師火桶の窓から窺けり　（新選）
炭團法師火桶の穴より窺ひけり　（句集）

宿かへて炬燵うれしき在どころ　（新五子稿）
宿かへの炬燵うれしき在どころ　（全集・題林集）

煤掃や調度すくなき人は誰　（津守舟）
煤掃や調度すくなき家は誰　（遺稿・書翰）

鶯や國師の沓も錦革　（遺稿）
鶯や國守の沓も錦革　（新五子稿）

屋根葺の落葉を踏や閨のうへ　（遺稿）
屋ねふきの落葉踏なり閨のうへ　（夏より）

節季ゆや皃つゝましき小風呂敷　（新五子稿）
節季ゆや面つゝまれぬ小風呂敷　（題林集）

（編者曰、『蕪村俳句類聚』に引用した著書のうち、文字に異同あるものを一目瞭然たらしめる爲めに、本考を附載したのである。從つて一二字の相違はあつても明かに誤寫と思はるゝもの及び類聚に採錄しない疑問の句には、たとへ異同があつても之を除外してある。）

蕪村句集（ぶそんくしふ）

上・下

几董著

洛、夜半亭蕪村老人、とし頃海に對し、山に嘯き、花に眠、鳥に寐覺て、句を吐事十万八千、その秀たるものは、ひとの耳底にとゞまり、諸集にあらはる。惜むべし去年の冬、衰病終に夜臺に枕して一字不說。高弟几董、頓て金波羅華をつたへて、門人のため一集を撰、書肆佐棠にちからをあはせて、ことし小祥忌辰の永慕とす。はた予と亡叟とまじはりひさしきまゝに、遙に武江に告てそれが序を需む。予、又わすれめや旧識五十余年。

雪中庵 蓼太

蕪翁句集 巻之上

几董著

春之部

ほうらいの山まつりせむ老の春

日の光今朝や鰯のかしらより

三椀の雜煮かゆるや長者ぶり

離落

うぐひすのあちこちとするや小家がち

鶯の聲遠き日も暮にけり

うぐひすの麁相がましき初音哉

鶯を雀歟と見しそれも春

畫賛

うぐひすや賢過たる軒の梅

鶯の日枝をうしろに高音哉

うぐひすや家内揃ふて飯時分

鶯や茨くゞりて高う飛ぶ

うぐひすの啼やちいさき口明て

禁城春色曉蒼々

青柳や我大君の艸か木か

若草に根をわすれたる柳かな

梅ちりてさびしく成しやなぎ哉

捨やらで柳さしけり雨のひま

青柳や芹生の里のせりの中

出る杭をうたうとしたりや柳かな

草菴

二もとの梅に遲速を愛す哉
うめ折て皺手にかこつ薫かな
白梅や墨芳しき鴻臚館
しら梅や誰むかしより垣の外
舞〳〵の場もふけたり梅がもと
出べくとして出ずなりぬうめの宿
宿の梅折取ほどになりにけり

擂子木で重箱を洗ふがごくせよとは、政の嚴刻なるをいましめ給ふ。賢き御代の春にあふて

隈〳〵に殘る寒さやうめの花
しら梅や北野ゝ茶店にすまひ取
うめ散や螺鈿こぼるゝ卓の上
梅咲て帶買ふ室の遊女かな
源八をわたりて梅のあるじ哉
燈を置ヵで人あるさまや梅が宿

あらむつかしの假名遣ひやな。字儀に害あらずんばアヽまゝよ

梅咲ぬどれがむめやらうめじややら
しら梅の枯木にもどる月夜哉
小豆賣小家の梅のつぼみがち
梅遠近南すべく北すべく

早春

なには女や京を寒がる御忌詣
御忌の鐘ひゞくや谷の氷まで
やぶ入の夢や小豆の煮るうち
藪いりやよそ目ながらの愛宕山
やぶいりや守袋をわすれ草
養父入や鉄漿もらひ來る傘の下
やぶ入は中山寺の男かな

人日

七くさや袴の紐の片むすび
これきりに徑盡たり芹の中
古寺やほうろく捨るせりの中

几董とわきのはまにあそびし時

筋違にふとん敷たり宵の春
肘白き僧のかり寢や宵の春
春の夜に尊き御所を守身かな
春月や印金堂の木間より

春夜聞レ琴

瀟湘の雁のなみだやおぼろ月
折釘に烏帽子かけたり春の宿
公達に狐化たり宵の春

もろこしの詩客は千金の宵をゝしみ、我朝の哥人はむらさきの曙を賞す

春の夜や宵あけぼのゝ其中に
女倶して内裏拜まんおぼろ月

菜盗む女やは有おぼろ月
よき人を宿す小家や朧月
さしぬきを足でぬぐ夜や朧月

野望

草霞み水に聲なき日ぐれ哉
指南車を胡地に引去ル霞哉
高麗舟のよらで過ゆく霞かな
橋なくて日暮んとする春の水
春水や四條五條の橋の下
足よはのわたりて濁るはるの水
春の水背戸に田作らんとぞ思ふ
春の水にうたゝ鵜繩の稽古哉
蛇を追ふ鱒のおもひや春の水

西の京にばけもの栖て、久しくあれ果たる家有けり。今は其さたなくて

春雨や人住ミて煙壁を洩る
物種の袋ぬらしつ春のあめ
春雨や身にふる頭巾着たりけり
春雨や小磯の小貝ぬるゝほど
瀧口に燈を呼聲や春の雨
ぬなは生ふ池の水かさや春の雨

夢中吟

春雨やもの書ぬ身のあはれなる
はるさめや暮なんとしてけふも有
春雨やものがたりゆく簑と傘
柴漬の沈みもやらで春の雨
春雨やいざよふ月の海半
はるさめや綱が袂に小でうちん

ある隱士のもとにて

古庭に茶筌花さく椿かな
あぢきなや椿落うづむにはたずみ
玉人の座右にひらくつばき哉
初午やその家〳〵の袖だゝみ
はつむまや鳥羽四塚の鷄の聲
初午や物種うりに日のあたる
莟とはなれもしらずよ蕗のとう

ある人のもとにて

命婦よりぼた餅たばす彼岸哉
そこ〳〵に京見過しぬ田にし賣
なつかしき津守の里や田螺あへ
靜さに堪えて水澄たにしかな
鴈立て驚破田にしの戸を閉る
雁行て門田も遠くおもはるゝ
歸る鴈田ごとの月の曇る夜に
きのふ去ニけふいに鴈のなき夜哉

郊外

陽炎や名もしらぬ虫の白き飛

かげろふや簣に土をめづる人

芭蕉菴會

畑うつやうごかぬ雲もなくなりぬ
はた打よこちの在所の鐘が鳴
畑打や木間の寺の鐘供養

小原にて

春雨の中におぼろの清水哉
日くるゝに雉子うつ春の山邊かな
柴刈に砦を出るや雉の聲
亀山へ通ふ大工やきじの聲
兀山や何にかくれてきじのこゑ
むくと起て雉追ふ犬や寶でら
木瓜の陰に皃類ひ住ムきゞす哉

琴心挑ニ美人一

妹が垣根さみせん草の花咲ぬ
紅梅や比丘より劣る比丘尼寺
紅梅の落花燃らむ馬の糞
垣越にものうちかたる接木哉
裏門の寺に逢着す蓬かな
畑うちや法三章の札のもと
きじ啼や草の武藏の八平氏
きじ鳴や坂を下リの驛舍

西山遲日

山鳥の尾をふむ春の入日哉

遲キ日や雉子の下りゐる橋の上

懷舊

遲き日のつもりて遠きむかしかな
春の海終日のたり〳〵哉
畠うつや鳥さへ啼ぬ山かげに
耕や五石の粟のあるじ皃
飛かはすやたけごゝろや親雀
大津繪に糞落しゆく燕かな
大和路の宮もわら屋もつばめ哉
つばくらや水田の風に吹れ皃
燕啼て夜蛇をうつ小家哉

無爲庵會

曙のむらさきの幕や春の風
野はかまの法師が旅や春のかぜ
片町にさらさ染るや春の風
のうれんに東風吹いせの出店哉
河内路や東風吹送る巫女が袖

几董が蛙合催しけるに

月に聞て蛙ながむる田面かな
閣に座して遠き蛙をきく夜哉
苗代の色紙に遊ぶかはづかな
日は日くれよ夜は夜明ケよと啼蛙
連哥してもどる夜鳥羽の蛙哉
獨鈷鎌首水かけ論のかはづかな

うつゝなきつまみごゝろの胡蝶哉
曉の雨やすぐろの薄はら
よもすがら音なき雨や種俵
古河の流を引つ種おろし
しのゝめに小雨降出す燒野哉

加久夜長帶刀はさうなき數寄もの也けり。古曾部の入道はじめてのげざんに、引出物見すべきとて、錦の小袋をさがしもとめける風流などおもひ出つゝ、すゞろ春色にたえず侍れば

山吹や井手を流るゝ鉋屑
居りたる舟を上ればすみれ哉
骨拾ふ人にしたしき菫かな
わらび野やいざ物焚ん枯つゝじ
野とゝもに燒る地藏のしきみ哉
つゝじ野やあらぬ所に麥畠
つゝじ咲て石移したる嬉しさよ
近道へ出てうれし野ゝ躑躅哉
つゝじ咲て片山里の飯白し
岩に腰我頼光のつゝじ哉

上巳

古雛やむかしの人の袖几帳
箱を出る皃わすれめや雛二對
たらちねのつまゝずありや雛の鼻
出代や春さめ〴〵と古葛籠
雛見世の灯を引ころや春の雨
雛祭る都はづれや桃の月
喰ふて寢て牛にならばや桃花
商人を吼る犬ありもゝの花
さくらより桃にしたしき小家哉
家中衆にさむしろ振ふもゝの宿
几巾きのふの空のありどころ
やぶいりのまたいで過ぬ几巾の糸

風入馬蹄輕

木の下が蹄のかぜや散さくら
手まくらの夢はかざしの櫻哉
剛力は徒(あだ)に見過ぬ山ざくら

曉臺が伏水・嵯峨に遊べるに伴ひて

夜桃林を出てあかつき嵯峨の櫻人
暮んとす春をゝしほの山ざくら
錢買て入るやよしのゝ山ざくら

糸櫻賛

ゆき暮て雨もる宿やいとざくら
哥屑の松に吹れて山ざくら
まだきとも散りしとも見ゆれ山櫻
嵯峨ひと日閑院樣のさくら哉

みよし野ゝちか道寒し山櫻
旅人の鼻まだ寒し初ざくら
海手より日は照つけて山ざくら

　吉野

花に遠く櫻に近しよしの川
花に暮て我家遠き野道かな
花ちるやおもたき笈のうしろより
花の御能過て夜を泣ク浪花人
阿古久曾のさしぬきふるふ落花哉

　高野を下る日

かくれ住て花に眞田が謠かな
玉川に高野ゝ花や流れ去
なら道や當皈ばたけの花一木

　日暮るゝほど嵐山を出る

嵯峨へ歸る人はいづこの花に暮し
花の香や嵯峨のともし火消る時

　雨日嵐山にあそぶ

筏士の蓑やあらしの花衣
傾城は後の世かけて花見かな
花に舞ハで歸るさにくし白拍子
花に來て花にいねぶるいとま哉

　なには人の木や町にやどりゐしを
　訪ひて

花を踏し草履も見えて朝寢哉
居風呂に後夜きく花のもどりかな
鶯のたま〲啼や花の山
ねぶたさの春は御室の花よりぞ

　一片花飛減却春

さくら狩美人の腹や減却す
花の幕兼好を覗く女あり

　やごとなき御かたのかざりおろさ
　せ給ひて、かゝるさびしき地にす
　み給ひけるにや

小冠者出て花見る人を咎けり
にほひある衣も疊まず春の暮
誰ためのひくき枕ぞはるのくれ
閨帳の錦たれたり春の夕
うたゝ寢のさむれば春の日ぐれたり
春の夕たえなむとする香をつぐ
花ちりて木間の寺と成にけり
苗代や鞍馬の櫻ちりにけり
甲斐がねに雲こそかゝれ梨の花
梨の花月に書ミよむ女あり
人なき日藤に培ふ法師かな
山もとに米蹈ム音や藤のはな
うつむけに春うちあけて藤の花

　春景

菜の花や月は東に日は西に

なのはなや筝見ゆる小風呂敷
菜の花や鯨もよらず海暮ぬ

春夜盧會

爐塞て南阮の風呂に入身哉
爐ふさぎや床は維摩に掛替る

暮春

ゆく春や逡巡として遲ざくら
行春や撰者をうらむ哥の主
洗足の盥も漏りてゆく春や
けふのみの春をあるひて仕舞けり

召波の別業に遊びて

行春や白き花見ゆ垣のひま
春をしむ座主の聯句に召れけり
行春やむらさきさむる筑羽(ば)山
まだ長ふなる日に春の限りかな
ゆく春や横河へのぼるいもの神

ある人に句を乞はれて

返哥なき青女房よくれの春
春惜しむ宿やあふみの置火燵

夏之部

絹着せぬ家中ゆゝしき更衣
辻駕によき人のせつころもがへ
大兵の廿チあまりや更衣
ころもがへ印籠買に所化二人

眺望

更衣野路の人はつかに白し
たのもしき矢數のぬしの袷哉
痩臑の毛に微風あり更衣
御手討の夫婦なりしを更衣

しれるおうなのもとより、ふるき
ゝぬのわたぬきたるに、ふみ添て
をくりければ

橘のかごとがましきあはせかな
更衣いやしからざるはした錢
鞘走る友切丸やほとゝぎす
ほとゝぎす平安城を筋違に
子規柩をつかむ雲間より
春過てなつかぬ鳥や杜鵑
ほとゝぎす待や都のそらだのめ

大徳寺にて

時鳥繪になけ東四郎次郎
岩倉の狂女戀せよ子規
稻葉殿の御茶たぶ夜や時鳥

箱根山を越る日、みやこの友に申
遣す

わするなよほどは雲助ほとゝぎす
哥なくてきぬ〴〵つらし時鳥

草の雨祭の車過てのち
牡丹散て打かさなりぬ二三片

波翻舌本吐紅蓮

閻王の口や牡丹を吐んとす
寂として客の絶間のぼたん哉
地車のとゞろとひゞく牡丹かな
ちりて後おもかげにたつぼたん哉
牡丹切て氣のおとろひし夕かな
山蟻のあからさま也白牡丹
廣庭のぼたんや天の一方に

柴庵の主人、杜鵑・布穀の二題を出していづれ一題に發句せよと有。されば雲井に走て王侯に交らむよりは、鶉衣被髪にして山中に名利をいとわんには

狂居士の首にかけた歟鞨鼓鳥
閑居鳥寺見ゆ麥林寺とやいふ
山人は人也かんこどりは鳥なりけり
食次の底たゝく音トやかんこ鳥
足跡を字にもよまれず閑居鳥
うへ見えぬ笠置の森やかんこどり
むつかしき鳩の禮義やかんこどり
閑居鳥さくらの枝も踏で居る
かんこどり可もなく不可もなくね哉

探題 實盛

名のれ〳〵雨しのはらのほとゝぎす
かきつばたべたりと鳶のたれてける
宵〳〵の雨に音なし杜若

雲裡房に橋立に別る

みじか夜や六里の松に更たらず
鮎くれてよらで過行夜半の門
みじか夜や毛むしの上に露の玉
短夜や同心衆の川手水
みじか夜や枕にちかき銀屏風
短夜や芦間流るゝ蟹の泡
みじか夜や二尺落ゆく大井川

探題 老犬

みじか夜を眠らでもるや翁丸
短夜や浪うち際の捨篝
みじか夜やいとま給る白拍子
みじか夜や小見世明たる町はづれ

東都の人を大津の驛に送る

短夜や一ツあまりて志賀の松
みじか夜や伏見の戸ぼそ淀の窓
卯の花のこぼるゝ蕗の廣葉哉
來て見れば夕の櫻實となりぬ

圓位上人の所願にもそむきたる身のいとかなしきさま也

寶ざくらや死のこりたる菴の主

しのゝめや雲見えなくに蓼の雨

砂川や或は蓼を流れ越す

蓼の葉を此君と申せ雀鮓

三井寺や日は午にせまる若楓

あらたに居をトしたるに

釣しのぶ幮にさはらぬ住居かな

蚊屋を出て奈良を立ゆく若葉哉

窓の燈の梢にのぼる若葉哉

不二ひとつうづみ殘してわかばかな

絕頂の城たのもしき若葉かな

若葉して水白く麥黃ミたり

山に添ふて小舟漕ゆく若ば哉

虵を截てわたる谷路の若葉哉

蚊屋の內にほたる放してア、樂や

尼寺や能キ幮たるゝ宵月夜

あら涼し裾吹蚊屋も根なし草

蚊屋を出て內に居ぬ身の夜は明ぬ

よすがら三本樹の水樓に宴して

明やすき夜をかくしてや東山

古井戸や蚊に飛ぶ魚の音くらし

うは風に蚊の流れゆく野河哉

蚊やりしてまいらす僧の坐右かな

嵳峩にて

三軒家大坂人のかやり哉

蚊の聲す忍冬の花の散ルたびに

諸子比枝の僧房に會す。余はいたづきのために此行にもれぬ

蚊屋つりて翠微つくらむ家の內

若竹や橋本の遊女ありやなし

筍の藪の案內やをとしざし

若竹や夕日の嵯峨と成にけり

筍や甥の法師が寺とはん

けしの花籬すべくもあらぬ哉

垣越て蟇の避行かやりかな

嵳峩の雅因が閑を訪て

うは風に音なき麥を枕もと

長旅や駕なき村の麥ほこり

病人の駕も過けり麥の秋

旅芝居穗麥がもとの鏡たて

洛東のばせを菴にて、目前のけしきを申出侍る

蕎麥あしき京をかくして穗麥哉

狐火やいづこ河內の麥畠

大魯・几董などゝ布引瀧見にまかりてかへさ途中吟

舂や穗麥が中の水車

丹波の加悅といふ所にて

夏河を越すうれしさよ手に草履
なれ過た鮓をあるじの遺恨哉
鮓桶をこれへと樹下に床几哉
鮓つけて誰待としもなき身哉
鮒ずしや彦根が城に雲かゝる

兎足三周の正當は文月中の四日なるを、卯月のけふにしゞめて、追善いとなみけるに申遣す

麥刈ぬ近道來ませ法の杖
かりそめに早百合生ヶたり谷の房

かの東皐にのぼれば

花いばら故郷の路に似たる哉
路たえて香にせまり咲いばらかな
愁ひつゝ岡にのぼれば花いばら

洛東芭蕉菴落成日

耳目肺腸こゝに玉巻ばせを庵
青梅に眉あつめたる美人哉
青うめをうてばかつ散る青葉かな
かはほりやむかひの女房こちを見る
夕風や水青鷺の脛をうつ
たちばなのかはたれ時や古館

浪花の一本亭に訪れて

粽解て芦吹風の音聞ん
夏山や通ひなれたる若狭人

述懐

椎の花人もすさめぬにほひ哉
水深く利鎌鳴らす眞菰刈
しのゝめや露の近江の麻畠
採蓴を諷ふ彦根の傖夫哉
藻の花や片われからの月もすむ
路邊の刈藻花さく宵の雨
虫のために害はれ落ッ柹の花

浪華の舊國あるじゝて諸國の俳士を集めて、圓山に會莚しける時

うき草を吹あつめてや花むしろ
さみだれのうつほ柱や老が耳
湖へ富士をもどすやさつき雨
さみだれや大河を前に家二軒
さみだれや佛の花を捨に出る
小田原で合羽買たり皐月雨
さみだれの大井越たるかしこさよ
さつき雨田毎の闇となりにけり

青飯法師にはじめて逢けるに、旧識のごとくかたり合て

水桶にうなづきあふや瓜茄子
いづこより礫うちけむ夏木立
酒十駄ゆりもて行や夏こだち
おろし置笈に地震なつ野哉

行〻てこゝに行〻夏野かな

みちのくの吾友に草扉をたゝかれて

葉がくれの枕さがせよ瓜ばたけ

離別れたる身を踏込で田植哉

鮓得て歸る田植の男かな

狩衣の袖のうら這ふほたる哉

一書生の閑窓に書す

學問は尻からぬけるほたる哉

でゝむしやその角文字のにじり書

蝸牛の住はてし宿やうつせ貝

こもり居て雨うたがふや蝸牛

雪信が蠅うち拂ふ硯かな

書賛

こと葉多く早瓜くるゝ女かな

閑の戸に水雞のそら音なかりけり

蝮の鼾も合歡の葉陰哉

蠅いとふ身を古郷に晝寐かな

春泥舍、東寺山吹にて有けるに

誰住て樒流るゝ鵜川哉

しのゝめや鵜をのがれたる魚淺し

老なりし鵜飼ことしは見えぬ哉

騒原の名古屋兒なる鵜川かな

鵜舟漕ぐ水窮まれば照射哉

夏百日墨もゆがまぬこゝろかな

日を以て數ふる筆の夏書哉

慶子病後不二の夢見けるに申遣す

降かへて日枝を廿チの化粧かな

馬南剃髪、三本樹にて

脱かゆる梢もせみの小河哉

石工の鑿冷したる清水かな

落合ふて音なくなれる清水哉

丸山主水がちいさき龜を寫したるに賛せよとのぞみければ、仕官縣(ママ)命の地に榮利をもとめむよりは、しかじ、尾を泥中に曳んには

錢龜や青砥もしらぬ山清水

二人してむすべば濁る清水哉

我宿にいかに引べきしみづ哉

草いきれ人死居ると札の立

晝がほやこの道唐の三十里

ゆふがほや黄に咲たるも有べかり

夕兒の花噛ム猫や餘所ごゝろ

律院を覗きて

飛石も三ツ四ツ蓮のうき葉哉

蓮の香や水をはなるゝ莖二寸

吹殻の浮葉にけぶる蓮見哉

白蓮を切らんとぞおもふ僧のさま

河骨の二もとさくや雨の中

座主のみこの、おなかまとてやたらたち入給ひけろ、いとたうとくて

羅に遮る蓮のにほひ哉

夏日 三句

雨乞に曇る國司のなみだ哉

貧腹の守敏も降らす旱かな

大粒な雨は祈の奇特かな

夜水とる里人の聲や夏の月

堂守の小草ながめつ夏の月

ぬけがけの淺瀨わたるや夏の月

河童の戀する宿や夏の月

瓜小家の月にやおはす隱君子

雷に小家は燒れて瓜の花

あだ花は雨にうたれて瓜ばたけ

あるかたにて

弓取の帶の細さよたかむしろ

細脛に夕風さはる簟

箱根にて

あま酒の地獄もちかし箱根山

御佛に晝供へけりひと夜酒

愚痴無智のあま酒造る松が岡

寫居

半日の閑を榎やせみの聲

蟬鳴や行者の過る午の刻

蟬啼や僧正坊のゆあみ時

かけ香や何にとゞまるせみ衣

かけ香や唖の娘のひとゝなり

かけ香やわすれ兒なる袖だゝみ

雁宕、久しくおとづれせざりければ

有と見えて扇の裏繪おぼつかな

とかくして笠になしつる扇哉

繪團のそれも淸十郎にお夏かな

手ずさびの團畫かん草の汁

渡し呼草のあなたの扇哉

七日

祇園會や眞葛原の風かほる

ぎをん會や僧の訪よる梶が許

加茂の西岸に榻を下して

丈山の口が過たり夕すゞみ

綱打の見えずなり行涼かな

すゞしさや都を竪にながれ川

葛圃が魂をまねく

河床や蓮からまたぐ便にも

川床に憎き法師の立居かな

涼しさや鐘をはなるゝかねの聲

鴨河にあそぶ

川狩や樓上の人の見しり皃

雨後の月誰ゝや夜ぶりの脛白き

月に對す君に唐網の水煙

川狩や歸去來といふ聲す也

雙林寺獨吟千句

ゆふだちや筆もかはかず一千言

白雨や門脇どのゝ人だまり

夕だちや草葉をつかむむら雀

施米　水粉

腹あしき僧こぼし行施米哉

水の粉のきのふに盡ぬ草の菴

水の粉やあるじかしこき後家の君

旅意

廿日路の背中にたつや雲の峰

揚州の津も見えそめて雲の峰

雨と成戀はしらじな雲の峰

雲のみね四澤の水の涸てより

飛蟻とぶや富士の裾野ゝ小家より

日歸りの兀山越るあつさ哉

居りたる舟に寢てゐる暑かな

探題　寄扇武者

暑き日の刀にかゆる扇かな

宗鑑に葛水給ふ大臣かな

葛を得て清水に遠きうらみ哉

端居して妻子を避る暑かな

花頂山に會して探題

龐居士はかたい親父よ竹婦人

虫干や甥の僧訪ふ東大寺

ところてん逆しまに銀河三千尺

宮島

薫風やともしたてかねついつくしま

裸身に神うつりませ夏神樂

つくばふた禰宜でことすむ御祓哉

灸のない背中流すや夏はらへ

出水の加茂に橋なし夏祓

鴨河のほとりなる田中といへる里にて

ゆふがほに秋風そよぐみそぎ川

蕪村句集上卷終

蕪翁句集　卷之下

几董著

秋之部

秋來ぬと合点させたる嚔かな
秋たつや何におどろく陰陽師
貧乏に追つかれけりけさの秋
秋立や素湯香しき施藥院
初秋や餘所の灯見ゆる宵のほど
　秋夜閑窓のもとに指を屈して、世になき友を算ふ
とうろうを三たびかゝげぬ露ながら
高燈籠滅なんとするあまたゝび
　七夕
梶の葉を朗詠集のしほり哉
戀さま〴〵願の糸も白きより
つと入やしる人に逢ふ拍子ぬけ
あぢきなや蚊屋の補綴魂祭
魂棚をほどけばもとの座敷哉
　十六日の夕、加茂河の邊りにあそぶ
大文字やあふみの空もたゞならね
相阿彌の宵寢起すや大文字
攝待にきせるわすれて西へ行
　英一蝶が畫に贊望れて
四五人に月落かゝるおどり哉
ひたと犬の啼町越えて躍かな
萍のさそひ合せておどり哉
　かな河浦にて
いな妻や八丈かけてきくた摺
いな妻の一網うつやいせのうみ
いなづまや堅田泊りの宵の空
稻妻にこぼるゝ音や竹の露
　春夜に句をとはれて
日ごろ中よくて恥あるすまひ哉
飛入の力者あやしき角力かな
夕露や伏見の角力ちり〴〵に
負まじき角力を寢ものがたり哉
　遊行柳のもとにて
柳散清水涸石處々
小狐の何にむせけむ小萩はら
薄見つ萩やなからむ此ほとり
山は暮て野は黄昏の薄哉
女郎花そも莖ながら花ながら
里人はさともおもはじをみなへし
　永西法師はさうなきすきもの也し。

世を去りてふたとせに成ければ

秋ふたつうきをますほの薄哉
茨老すゝき痩萩おぼつかな
猪の露折かけてをみなへし
白萩を春わかちとるちぎり哉
垣ね潜る薄ひともと眞蘇枋なる
きちかうも見ゆる花屋が持佛堂

澗水湛如藍

朝がほや一輪深き淵のいろ
朝皃や手拭のはしの藍をかこつ
夜の蘭香にかくれてや花白し
蘭夕狐のくれし奇楠を炷む

辨慶贊

花すゝきひと夜はなびけ武藏坊
しら露やさつ男の胸毛ぬるゝほど
ものゝふの露はらひ行弰かな

妙義山

立去ル事一里眉毛に秋の峰寒し
白露や茨の刺にひとつづゝ
狩倉の露におもたきうつぼ哉
市人の物うちかたる露の中
身にしむや横川のきぬをすます時
身にしむや亡妻の櫛を閨に踏
朝露やまだ霜しらぬ髮の落

葛の棚葉しげく軒端を覆ひければ、晝さへいとくらきに

葛の葉のうらみ皃なる細雨哉
朝皃にうすきゆかりの木槿哉
朝霧や村千軒の市の音
朝霧や杭打音丁々たり
ものゝ焚て花火に遠きかゝり舟
花火せよ淀の御茶屋の夕月夜
八朔や扨明日よりは二日月
初汐に追れてのぼる小魚哉

となせの瀧

水一筋月よりうつす桂河
虫賣のかごとがましき朝寢哉
むし啼や河内通ひの小でうちん
みのむしや秋ひだるしと鳴なめり
蠹て下葉ゆかしきたばこ哉
小百姓鶉を取老となりにけり
鬼灯や清原の女が生寫し
日は斜關屋の鎗にとんぼかな

良夜とふかたもなくに、訪來る人もなければ

中〳〵にひとりあれば月を友
名月にゑのころ捨る下部哉
身の闇の頭巾も通る月見かな

月天心貧しき町を通りけり

忠則古墳、一樹の松に倚れり

月今宵松にかへたるやどり哉

名月や雨を溜たる池のうへ

名月やうさぎのわたる諏訪の海

探題 雨月

旅人よ笠嶋かたれ雨の月

月今宵あるじの翁舞出よ

仲丸の魂祭せむけふの月

名月や夜は人住ぬ峰の茶屋

山の端や海を離るゝ月も今

鹿の月主なとへば芋堀に

かつまたの池は闇也けふの月

僊長が醉るや、嵬峩として玉山の
まさに崩れんとするがごとし。其
俤今なを眼中に在て

月見ればなみだに砕く千々の玉

花守は野守に劣るけふの月

雨のいのりのむかしをおもひて

名月や神泉苑の魚躍る

探題 雁字

一行の雁や端山に月を印す

紀の路にも下りず夜を行雁ひとつ

雨中の鹿といふ題を得て

雨の鹿戀に朽ぬは角ばかり

鹿寒し角も身に添ふ枯木哉

鹿啼てはゝその木末あれにけり

菜畠の霜夜は早し鹿の聲

三度啼て聞えずなりぬ鹿の聲

殘照亭晩望

鹿ながら山影門に入日哉

ある山寺へ鹿聞にまかりけるに、
茶を汲沙彌の夜すがらねぶらで有
ければ、晋子が狂句をおもひ出て

鹿の聲小坊主に角なかりけり

折あしく門こそ叩け鹿の聲

老懐

去年より又さびしひぞ秋の暮

父母のことのみおもふ秋のくれ

あちらむきに鴫も立たり秋の暮

猿丸太夫賛

我がてに我をまねくや秋の暮

門を出れば我も行人秋のくれ

弓取に哥とはれけり秋の暮

淋し身に杖わすれたり秋の暮

故人に別る

木曾路行ていざさしよらん秋ひとり

かなしさや釣の糸吹あきの風

秋の風書むしはまず成にけり

金屛の羅は誰ヵあきのかぜ

秋風や干魚かけたる濱庇

古人移竹をおもふ

去來去り移竹移りぬいく秋ぞ

順禮の目鼻書ゆくふくべ哉

腹の中へ歯はぬけけらし種ふくべ

四十にみたずして死んこそめやすけれ

あだ花にかゝる恥なし種ふくべ

人の世に尻を居へたるふくべ哉

我足にかうべぬかるゝ案山子哉

武者繪賛

御所柿にたのまれ皃のかゞし哉

姓名は何子か号は案山子哉

三輪の田に頭巾着て居るかゞしかな

山陰や誰呼子鳥引板の音

雲裡房、つくしへ旅だつとて我に同行をすゝめけるに、えゆかざりければ

秋かぜのうごかして行案山子哉

水落て細脛高きかゞし哉

故郷や酒はあしくとそばの花

宮城野ゝ萩更科の蕎麥にいづれ

道のべや手よりこぼれて蕎麥花

落る日のくゝりて染る蕎麥の莖

題白川

黒谷の隣はしろしそばのはな

なつかしきしをにがもとの野菊哉

綿つみやたばこの花を見て休む

三徑の十歩に盡て蓼の花

甲斐がねや穂蓼の上を鹽車

沙魚釣の小舟漕なる窓の前

百日の鯉切盡て鱸かな

釣上し鯉の巨口玉や吐

ひとり大原野ゝほとり吟行しけるに、田疇荒蕪して千ぐさの下葉霜をしのぎ、つれなき秋の日影をたのみて、はつかに花の咲出たるなど、ことにあはれ深し

水かれぐ蓼歟あらぬ歟蕎麥歟否歟

小鳥來る音うれしさよ板びさし

此森もとかく過けり鵙おどし

山雀や榧の老木に寝にもどる

竹溪法師丹後へ下るに

たつ鴫に眠る鴫ありふた法師

鴫立て秋天ひきゝながめ哉

わたり鳥こゝをせにせん寺林

わたり鳥雲の機手のにしき哉
瀨田降て志賀の夕日や江鮭
駒迎ことにゆゝしや額白
秋の暮辻の地藏に油さす
秋の燈やゆかしき奈良の道具市
追剝を弟子に剃けり秋の旅
秋雨や水底の草を踏わたる

丸山氏が黑き犬を畫たるに讃せよ
と望みければ

おのが身の闇より吼て夜半の秋
甲賀衆のしのびの賭や夜半の秋
枕上秋の夜を守る刀かな
身の秋や今宵をしのぶ翌もあり

我則あるじゝて會催しけるに

小路行ばちかく聞ゆるきぬた哉
うき人に手をうたれたる砧かな
遠近をちこちとうつきぬた哉
うき我に砧うて今は又止ミね
石を打狐守夜のきぬた哉
鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉
門前の老婆子薪貪る野分かな
埜なる我蕎麥存す野分哉
市人のよべ問かはすのはきかな
客僧の二階下り來る野分哉

三井の山上より三上山を望て

秋寒し藤太が鏑ひゞく時
角文字のいざ月もよし牛祭
うら枯やからきめ見つる漆の樹
物書に葉うらにめづる芭蕉哉

斗文、父の八十の賀をことぶくに
申贈る

稻かけて風もひかさじ老の松

廣澤

水かれて池のひづみや後の月
山茶花の木間見せけり後の月
泊る氣でひとり來ませり十三夜
十月の今宵はしぐれ後の月

十三夜の月を賞することは、我日
のもとの風流也けり

唐人よ此花過てのちの月
日でりどし伏水の小菊もらひけり

山家の菊見にまかりけるに、ある
じの翁、紙・硯をとうでゝほ句もと
めければ

きくの露受て硯のいのち哉
いでさらば投壺まいらせん菊の花

菊に古笠を覆たる畫に

白菊や呉山の雪を笠の下

手燭して色失へる黄菊哉
村百戸菊なき門も見えぬ哉
あさましき桃の落葉よ菊畠
菊作り汝は菊の奴かな

高雄

西行の夜具も出て有紅葉哉
ひつぢ田に紅葉ちりかゝる夕日かな
谷水の盡てこがるゝもみぢ哉
よらで過る藤澤寺のもみぢ哉
むら紅葉會津商人なつかしき

須磨寺にて

笛の音に波もより來る須磨の秋
雨乞の小町が果やをとし水
村〳〵の寢ごゝろ更ぬ落し水
毛見の衆の舟さし下せ最上川
新米の坂田は早しもがみ河
落穗拾ひ日あたる方へあゆみ行

山家

猿どのゝ夜寒訪ゆく兎かな
壁隣ものごとつかす夜さむ哉
欠〳〵て月もなくなる夜寒哉
起て居てもう寢たといふ夜寒哉
夜を寒み小冠者臥たり北枕
長き夜や通夜の連哥のこぼれ月
山鳥の枝踏かゆる夜長哉
子鼠のちゝよと啼や夜半の秋
秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者
秋はものゝそばの不作もなつかしき

幻住菴に曉臺が旅寢せしを訪ひて

丸盆の椎にむかしの音聞む
椎拾ふ横河の兒のいとま哉

探題

餉にからき涙やとうがらし
俵して藏め蓄へぬ番椒
折くるゝ心こぼさじ梅もどき
梅もどき折や念珠をかけながら
にしき木を立ぬ垣根や番椒
稚子の寺なつかしむいてう哉

几董と鳴瀧に遊ぶ

茸狩や頭を擧れば峰の月
茯苓は伏かくれ松露はあらはれぬ
うれしさの箕にあまりたるむかご哉
鬼貫や新酒の中の貧に處ス
栗備ふ惠心の作の彌陀佛
にしき木は吹たふされて鷄頭花

ある方にて

くれの秋有職の人は宿に在す
いさゝかなを（原註）價いめ乞れぬ暮の秋

行秋やよき衣きたる掛ゥ人
跡かくす師の行方や暮の秋
　洛東ばせを庵にて
冬ちかし時雨の雲もこゝよりぞ

冬之部

みのむしの得たりかしこし初時雨
初しぐれ眉に烏(ママ)帽子の雫哉
楠の根を靜にぬらす時雨哉
時雨るゝや簑買ふ人のまことより
しぐるゝや鼠のわたる琴の上
古傘の婆娑と月夜の時雨哉
しぐるゝや我も古人の夜に似たる
夕時雨蟇ひそみ音に愁ふ哉
　人〳〵高尾の山ぶみして一枝の丹楓を折れり。頃は神無月十日まり、老葉霜に堪えず、やがてはら〳〵と打ちりたる、ことにあはれふかし
炉に燒てけぶりを握る紅葉哉
初冬や日和になりし京はづれ
居眠ゥて我にかくれん冬ごもり
冬ごもり壁をこゝろの山に倚
冬ごもり燈下に書すとかゝれたり

勝手まで誰が妻子ぞ冬ごもり
冬ごもり佛にうときこゝろ哉
　東山の麓に住どころトしたる一音法師に申遣す
嵐雪とふとん引合ふ侘寢かな
いばりせしふとんほしたり須磨の里
古郷にひと夜は更るふとんかな
かしらへやかけん裾へや古衾
大兵のかり寢あはれむ蒲團哉
扇の尾を踏つゝ裾にふとんかな
　十夜
あなたうと茶もだぶ〳〵と十夜哉
　浪花遊行寺にてばせを忌をいとなみける二柳庵に
簑笠の衣鉢つたへて時雨哉
夜興引や犬のとがむる塀の内
枇杷の花鳥もすさめず日くれたり
茶の花や白にも黄にもおぼつかな
茶のはなや石をめぐりて路を取
咲べくもおもはである石蕗花
　几董にいざなはれて、岡崎なる下村氏の別業に遊びて
口切や五山衆なんどほのめきて
口切や小城下ながら只ならね

炉びらきや雪中庵の霰酒

狐火や髑髏に雨のたまる夜に

一條もどり橋のもとに柳風呂とい
ふ娼家有。ある夜、太祇とともに
此樓にのぼりて

羽織着て綱もきく夜や川ちどり

風雲の夜すがら月の千鳥哉

磯ちどり足をぬらして遊びけり

打よする浪や千鳥の横ありき

水鳥や百姓ながら弓矢取

里過て古江に鴛を見付たり

水鳥や舟に菜を洗ふ女有

加茂人の火を燧(キル)音や小夜衞

秦里が東武に歸を送る

嵯峨寒しいざ先くだれ都鳥

早梅や御室の里の賣屋敷

宗任に水仙見せよ神無月

うかぶ瀨に遊びて、むかし栢莚が
此所にての狂句を思ひ出て、其風
調に倣ふ

小春凪眞帆も七合五勺かな

冬の梅きのふやちりぬ石の上

千葉どのゝ假家引ヶたり枯尾花

たんぽゝのわすれ花あり路の霜

老女の火をふき居る畫に

小野ゝ炭匂ふ火桶のあなめ哉

われぬべき年もありしを古火桶

うづみ火や終には煮る鍋のもの

炭うりに鏡見せたる女かな

裾に置て心に遠き火桶かな

炭團法師火桶の穴より覗ひけり

讃州高松にしばらく旅やどりしけ
るに、あるじ夫婦の隔なきこゝろ
ざしのうれしさに、けふや其家を
立出るとて

巨燵出て早あしもとの野河哉

腰ぬけの妻うつくしき巨燵かな

沙彌律師ころり〳〵とふすま哉

鋸の音貧しさよ夜半の冬

飛彈山の質屋とざしぬ夜半の冬

春夜樓會

むさゝびの小鳥はみ居る枯野哉

大とこの糞ひりおはす枯野哉

水鳥や枯木の中に駕二挺

子を捨る藪さへなくて枯野哉

草枯て狐の飛脚通りけり

狐火の燃へつくばかり枯尾花

息杖に石の火を見る枯野哉

金福寺芭蕉翁墓

我も死して碑に邊せむ枯尾花

馬の尾にいばらのかゝる枯野哉

蕭條として石に日の入枯野かな

　大魯が病の復常ないのる

痩脛や病より起ッ鶴寒し

待人の足音遠き落葉哉

菊は黄に雨疎かに落葉かな

古寺の藤あさましき落葉哉

往來待て吹田をわたる落ば哉

　（こし）隋葉を拾ひて紙に換たるもろこし
　の貧しき人と、腹中の書には富る
　なるべし。さればやまとうたのし
　げきことのはいうち散たるをかき
　あつめて捨ざるは、我はいかいの
　道なるべし

もしほ草柿のもと成落葉さへ

西吹ヶば東にたまる落葉かな

鰒汁の宿赤〳〵と燈しけり

ふぐ汁の我活ヰて居る寢覺哉

秋風の呉人はしらじふぐと汁

音なせそ叩くは僧よ鰒じる

河豚の面世上の人を白眼ム哉

髪うつて鰒になき世の友とはむ

袴着て鰒喰ふて居る町人よ

　宰英は一向宗にて、信ふかきおの
　こ也けり。愛子を失ひて悲しびに
　堪えず、朝暮佛につかふまつりて、
　讀經をこたらざりければ

らうそくの泪氷るや夜の鶴

　大魯が兵庫の隱栖を、几董とゝも
　に訪ひて人ゝと海邊を吟行しける
　に

凩に鰓吹るゝや鉤の魚

こがらしやひたとつまづく戻り馬

こがらしや畠の小石目に見ゆる

こがらしや何に世わたる家五軒

凩やこの頃までは荻の風

木枯や鐘に小石を吹あてる

こがらしや岩に裂行水の聲

　晋子三十三回

擂盆のみそみぐりや寺の霜

麥蒔や百まで生る皃ばかり

初雪や消ればぞ又草の露

初雪の底を叩ば竹の月

　題七歩詩

雪折や雪を湯に焚釜の下

雪の暮鴫はもどつて居るような

うづみ火や我かくれ家も雪の中
いざ雪見容（カタチヅクリ）す蓑と笠
鍋さげて淀の小橋を雪の人
雪白し加茂の氏人馬でうて
雪折やよし野ゝ夢のさめる時
漁家寒し酒に頭の雪を焼
朝霜や室の揚屋の納豆汁
入道のよゝとまいりぬ納豆汁
朝霜や劔を握るつるべ縄
宿かさぬ火影や雪の家つゞき

几董と浪華より歸さ

霜百里舟中に我月を領す

故人曉臺、余が寒炉を訪はずして歸郷す。知、是東山西野に吟行して、荏苒として晦朔の代謝をしらず。歸期のせまりたるをいかむともせざる成べし

牙寒き梁の月の鼠かな

陶弘景賛

山中の相雪中のぼたん哉
町はづれいでや頭巾は小風呂敷
引かふて耳をあはれむ頭巾哉
みどり子の頭巾眉深きいとをしみ
めし粒で紙子の破れふたぎけり
此冬や帋衣着ようとおもひけり
老を山へ捨し世も有に紙子哉
我頭巾うき世のさまに似ずもがな
さゞめごと頭巾にかづく羽折哉
頭巾着て壁こもりくの初瀬法師

題戀

皃見せや夜着をはなるゝ妹が許
かほ見せや既うき世の飯時分

かの曉の霜に跡つけたる晋子が信に背きて、嵐雪が懶に倣ふ

皃見せやふとんをまくる東山
新右衛門蛇足を誘ふ冬至かな
書記典主故園に遊ぶ冬至哉
水仙や寒き都のこゝかしこ
水仙や美人かうべをいたむらし
水仙や鵙の草茎花咲ぬ
冬ざれや小鳥のあさる韮畠
霜あれて韮を刈取翁かな
葱買て枯木の中を歸りけり
ひともじの北へ枯臥古葉哉
易水にねぶか流るゝ寒かな
皿を踏鼠の音のさむさ哉

郊外

靜なるかしの木はらや冬の月

冬こだち月に隣なわすれたり

この句は夢想に感ぜし也

同一句

二村に質屋一軒冬こだち
このむらの人は猿也冬木だち
鶯に美な盡してや冬木立
斧入て香におどろくや冬こだち
鳴らし來て我夜あはれめ鉢叩
一瓢のいんで寢よやれ鉢たゝき
木のはしの坊主のはしやはちたゝき
ゆふがほのそれは髑髏歟鉢敲
花に表太雪に君あり鉢叩
西念はもう寢た里なはち敲

御火焚といふ題にて

御火焚や霜うつくしき京の町
御火たきや犬も中〳〵そゞろ皃
足袋はいて寢る夜ものうき夢見哉
宿かせと刀投出す雪吹哉
寺寒く樒はみこぼす鼠かな
杜父魚のえものすくなき翁哉

貧居八詠

愚に耐よと窓な暗す雪の竹
かんこ鳥は賢にして賤し寒苦鳥
我のみの柴折くべるそば湯哉

紙ぶすま折目正しくあはれ也
氷る燈の油うかゞふ鼠かな
炭取のひさご火桶に並び居る
我な厭ふ隣家寒夜に鍋な鳴ラす
齒谿に筆の氷な噛ム夜哉
一しきり矢種の盡るあられ哉
玉霰漂母が鍋なみだれうつ
古池に草履沈ミてみぞれ哉
山水の減るほど減りて氷かな

倣素堂

乾鮭や琴に斧うつひゞきあり
から鮭に腰する市の翁かな
からざけや帶刀殿の臺所
詫禪師乾鮭に白頭の吟な彫

鐵骨といふは梅の枝な寫する畫法也

寒梅や火の迸る鐵より
寒梅な手折響や老が肘

感偶

寒月や門なき寺の天高し
寒月や鋸岩のあからさま
寒月や枯木の中の竹三竿
寒月や衆徒の群議の過て後
寒声や古うた諷ふ誰が子ぞ

細道になり行聲や寒念佛

極樂の近道いくつ寒念佛

寒垢離や上の町まで來たりけり

寒ごりやいざまいりそふ一手桶

几董判句合

鯨賣市に刀を鼓（ナラ）しけり

しづ〳〵と五徳居えけり藥喰

藥喰隣の亭主箸持參

くすり喰人に語るな鹿ヶ谷

妻や子の寢皃も見えつ藥喰

客僧の狸寢入やくすり喰

春泥舍に遊びて

靈運もこよひはゆるせとし忘

にしき木の立聞もなき雜魚寢哉

おとろひや小枝も捨ぬとし木樵

うぐひすの啼や師走の羅生門

御經に似てゆかしさよ古暦

としひとつ積るや雪の小町寺

ゆく年の瀨田を廻るや金飛脚

とし守夜老はたうとく見られたり

題沓

石公へ五百目もどすとしのくれ

とし守や乾鮭の太刀鱈の棒

笠着てわらぢはきながら

芭蕉去てそのゝちいまだ年くれず

村句集下卷終

夜半翁常にいへらく、發句集はなくてもありなんかし、世に名だゝる人の其句集出て、日來の聲譽を減ずるもの多し、況汎〻の輩をやと。しかるに門派に一人の書肆ありて、あながちに句集を梓にちりばめむことをもとむ、翁もとよりゆるさず。翁滅後にいたりて、二三子が書とめおけるをあつめて、是を前後の二編に撰分ヶて、小祥・大祥二忌の追福のためとすと也。其志又淺からずといふべし。されば句集を世に弘うすることは、あなかしこ翁の本意にはあらず、全く是をもて此翁を議すべからずといふ事を田福しるす。

天明四甲辰之冬十二月

京寺町通五條上ル町
書肆　汲古堂　佳棠

蕪村發句解

松窓乙二説

蕪村發句解序

句は註解を加ふべからず、いかにといふに、はじめ作者の無念相中より出て、言外の言・意外の意つくすべからざるところあればなり。されどからやまとの故事などは、その出所を慥になして、初山ぶみのともがらの花の奥たづね入べき道のしほり、あらまほしきわざ也けり。こゝにむかしの齋藤の別當におとらざる老武者あり。えみしの封疆(疆)をしづめ給ふ君侯につかへまつりて、すはやといはゞ鬢髭をば、すみにてそめん、のどにはあらじと云たてるものから、よもの海浪しづけきめでたき御世のためしには、たゞ長劍をたゝきて、はいかいのほ句をうたふのみ。一日社裏の何がしきたりて、夜半翁の故事によりて作れる句どもをぬき出て、いかにさとしてんとこひたるに、今はむかし不忘山にすめる天狗の坊のおはして、夢ものがたりのごとく、ときさとされしがあるに、いさゝか私の了解をもそへて例の筆まめに書與へたるを、こたび板にゑりて世に公にせんとす。おのれもかの坊の羽風にさそはれて、岩城の二ツ箭の岳・越の彌彦山などに飛かけり、一日遊つるゆかりもあれば、空礫のはづるゝかはしらず、そのはしにしるすヿしかり。

癸巳秋九月　　一具道人

蕪村發句解

松窓乙二説

梅窓布席筆受
斧柯社中校刻

琴心挑美人

妹が垣根さみせん草の花さきぬ

司馬相如が故事なり。さみせん草は薺のこと、またぺん〳〵草とも云。

うら門の寺に逢着すよもぎかな

賈嶋が還俗して儒者になりたるを、戴叔倫といふ人がそしりて、僧房ニ逢着ス款冬花・出レ寺ヲ吟行スレバ日已ニ斜ナリ・十二街中春雪遍シ、馬蹄今去入ニル誰家ニといふ詩をつくりたり。款冬花は路の臺の事、十二のちまたは帝京也。其角三百員の内の句に、馬蹄今秋をさそはゞ誰が家　といへるも此詩より出たり。

畑打や法三章の札のもと

漢の高祖の咸陽に入し時の故事、又頼朝の鴻業をたてられし時代も考合すべし。

はた打や鳥さへ鳴かぬ山かげに

一鳥不レ啼山更ニ幽ナリ。これ王荊公が詩なり。耕とせず、畑うつと俗に遣ひて、詩をこなしたるを味ふべし。

獨鈷鎌首水かけ論のかはづかな

顯昭は律僧にて、獨鈷をもちて和歌の古事古説をあげて論辯せり。寂連(蓮)法師は鎌首をもたげて、二人對座するどにいさかひしたる事、井蛙抄にみえたり。

加久夜長帶刀はさうなき數寄もの也けり。古曾部の入道はじめてげざんに・引手物見すべしとて、錦の小袋をさがし求ける風流など思ひ出て・こゝろ春色にたへず侍れば・

山ぶきや井手をながるゝ鉋屑

古曾部といふ所に能因法師住り、長柄の橋の鉋屑は帶刀、井手の蛙の乾物の古事は能因也。

哥屑のまつにふかれて山ざくら

古今集に〽糸によるものならなくに別路のこゝろぼそくもおもほゆる哉、とあるを哥屑といひ、新古今集には〽冬の來て山もあらはに木の葉ふり殘る松さへみねにさびしき、とあるをうたくづといへり。哥屑の松といふは新古今のかたなるべし。

花に遠くさくらに近し吉野河

花とさくらと分別のこと、此句をもて考へ味ひしるべし。

一片花飛テ減ニ却ス春ヲ

さくら狩美人の腹や減却す

一片花飛て減ニ却ス春ヲ・といふは、唐の杜子美が詩句、一片花が飛べば一週だけ春がへるといふ心也。却字は忘却・失却等の却字とおなじく熟字なり。

苗代や鞍馬のさくらちりにけり

やの字にこゝろを付べし。

春景

菜の花や月はひがしに日は西に

なの花、竹の子みゆる小ぶろしき

此二句は洛外のけしき。

菜の花や鯨もよらず海くれぬ

南海道・西海道の浦〱、兵庫のうら、すべて菜の花あり。我みちのくの田舍の趣向にのみなづむ人は、うたがふ處あらん。

炉ふさぎや床は維摩にかけかはる

維摩居士は一丈四方の室に、大衆を集て說法ありしよし、維摩經にみゆ。一丈四方がすなはち方丈なり。

知れるをうなのもとより、ふるき絹の綿ぬきたるに、文をそへておくりければ

橘のかごがましき袷かな

橘のうたには、多くむかしをしのぶ事を香によせて讀り。かごはかこつけにて、香のひゞきをふくめり。

ほとゝぎす繪になけ東四郎二郎

四郎二郎は古法眼が俗名なりけらし。

岩くらの狂女戀せよほとゝぎす

つれ〲草より出たり。岩くらには瀧ふたつありて、狂氣のものをこの瀧に打せ侍れば、狂氣しぜんとさむるよし。湯治場のごく小屋がけしてとまる所ありしとぞ。

廣前のほたむや天の一方に

文選の詩中に、相去ニ万余里各在ニ天ノ一方ニ。

山人は人なり閑古鳥は鳥なりけり

かく作りたる意を考べし。

みじか夜や芦間ながるゝ蟹の泡

此句は見やう大事也、くちづから申べし。

探題 老犬

みじか夜を眠らで守やおきな丸

清少納言、枕草帋に犬を翁丸とよびし事を書り。

蓼の葉を此君と申せすゞめずし

すゞめ鮓は鮒鮓のをなり。なべては小鮒ずしをすゞめ鮓といふ。晉の王子猷が竹を愛して此君といひしをあり。

窓の灯の梢にのぼるわかば哉

保よしが〽寺町や夜のわか葉に灯かげさす　と作りたるあり。されば寺町も夜もこまかに斷るに及ばず。別して寺町は誰も置たがる五文字なれば、ゆだんあるべからずと、大世界なるに氣を付て見るべし。

うはかぜに蚊の流れゆく野川哉

繪に書ときはこの余情は、なにを書べきやと工夫して、上風の五文字より見るべし。蚊のみ流るけしきは書おくまじ。

老なりし鵜飼をしはみえぬかな

二人してむすべばにごるしみづかな

〽としいはぬ鵜飼の翁身を耻る、また、濁してはすむをみて居るしみづ哉、秋田の五明が句也。此句は伊勢風の作を重る句法にて、老なりしより中七・下五迄實境也。又、二人してむすべば濁る、頓流直下の作と、濁しては澄をみて居のこしらへものとを見て、常人と大家のけぢめをしるべし。

瓜小屋の月にやおはす隱君子

世亂しとき官人の漂泊して、瓜小屋におはせし事などおもひよせたる作なり。唐詩選に、靑門去テ種レ瓜作りたり。是等相像(想)してふかく味ふべし。

愚痴無智のあま酒つくる松が岡

松ヶ岡は鎌倉の尼寺也。英勝寺といふ。愚痴無智の尼とひゞかせたる梅翁の句法也。法然上人の一枚起請に、無痴の尼入道ともいへり。

祇園會や僧の訪寄る梶が許

七夕やよみ歌きゝて梶が茶屋、其角なり。祇園茶見せの梶女とて哥よみなり。大雅堂の妻玉瀾はその孫にあたるとか。

飛蟻とぶや不二の裾野の小家より

宗鑑に葛水たまふ大臣かな

何某堂上の、宗鑑が姿をみればがきつばた、とわりしに、吞んとすれば夏の澤水、宗鑑也。深草元政上人、扶桑隱逸傳を著すとき、宗鑑をも入るべかりしを、此脇に凡俗の氣ありとて載せざりしとかや。されど此事非なりといふ説もあり。

戀さま〴〵ねがひの糸もしろきより

墨子に白き糸の潔きも、いろ〳〵に染なすに順て色を變ず。人の心もと白く尊き物なれども、いろ〳〵の期にふれて本然の

氣質を失ふといためるとあり。

　柳ちり清水かれ石ところ〴〵

よみくせに所〳〵は下をつめてよむなり。あさな〳〵もあさなさなと吟ずべし。

　女郎花そも莖ながらはなながら

蝙蝠も假名に書ときは、かはほり也。かな字のごとくよむ事あるべからず。また、をみなへしも同前也。なへしとはよむべからず。

　永西法師はさうなきすきものなりし、世を去て二とせに成ければ

　秋ふたつうきをます穗の薄哉

つれ〳〵草に眞蘇枋（マソホ）の薄、一寸穗（マスホ）のすゝきの事、このふたつは万葉家の說よろしとぞ。近ごろなをくはしく論じたる書あり。

　狩くらの露に重たき靭かな

狩くらといふは、狩するために作りたる假家などをいふべし。

　身にしむや横川の衣をすます時

すますとは洗ふをなり。

　あさがほにうすきゆかりの木槿かな

蕣は朝の間、木槿は槿花一日榮とて、朝に咲てゆふべに凋むゆへに、うすきゆかりありとつくりたり。俗俳のたのしみ所にあらず。

　花火せよ淀の御茶屋の夕月夜

夕月夜と置、淀と置たるにて味ふべし。

　なか〳〵にひとりあればぞ月を友

もし〳〵居ればぞとあらば、中〳〵風韵なかるべし。あればぞのてにはこれ大事なり。

　月天心貧しき町を通りけり

詩ニ月至ニ天心處一あり。江のまん中の意なり。天心は更たるけしき、月更てとありては俳諧なし。

　古人移竹を思ふ

　去來去り移竹うつりぬいく秋ぞ

去來の風調をしたひし人ゆへ、この句あるか。また移竹も嵯峨に卜居せる歟。去・移の二字のはたらきに氣をつけべし。

　三徑の十步に盡て蓼のはな

蒲翁といふ人、三徑をひらきて松・菊・竹を植たり。その故事を用て我ものに作りなしたり。

　甲斐が根や穗蓼のうへを塩車

甲州へは駿河より塩運送するなり。

百日の鯉きり盡てすゝき哉

つれ〴〵にあり。つきてみるべし。

甲賀衆のしのびの賭や夜半の秋

前太平記に甲賀衆の事有。江州の甲賀山より出たり。また伊賀甲賀の侍はしのびの術を得たると、世に傳ふところなり。

秋寒し藤太が鏑ひゞくとき

時の字見やうあり。

日でりどし伏見の小菊貰ひけり

此句活ッにして見るべし。

いでさらば投壺まいらせん菊の花

投壺は禮記にありて壺を置て矢をなげこむ事なり。三才圖繪には壺うちと假名をつけたり、京都その外、ちかきとし專ら流行したる事あり。

高雄

西行の夜具も出てある紅葉哉

西行の花見に高雄の文覺をたづれし故事、井蛙抄にあり。

門前の老婆子薪貪る野分かな

長き夜や通夜の連歌のこぼれ月

老婆子は唯老婆の事也。子は男女の通稱なり。また長き夜の句は、なが〳〵しくなれば口づから申べし。

鬼貫や新酒の中の貧に處す

鬼貫は伊丹の人也。處すとは、どつかりと尻を居て居る姿、貧にくるしまざるていなり。

浪花遊行寺にて、芭蕉忌ないとなみける二柳菴に

蓑笠の衣鉢傳えて時雨哉

六祖檀經にある故事、六祖惠能大師也。六物の內、三衣一鉢を以テ第一とす。

泰里が東武へかへるをおくる

嵯峨寒しいざ先くだれみやこ鳥

へいざのぼれ嵯峨の鮎喰に都鳥、貞室なり。さがの桂川は鮎の名物、かつらあゆと哥にもよめり。

小野の炭匂ふ火桶のあなめ哉

秋がぜのふくにつけてもあなめ〳〵小野とはいはじ芒生けり、と云哥有。

炼風の呉人はしらじふぐと汁

呉の張翰といふ人、都へ官につきてありしが、世の亂れん事をはかり、秋風のふくにつけて・故郷の鱸の鱠・蓴菜の風味がなつ

かしいとて高官を辭して皈りたる事あり。吳には松江の鱸とて名物也。李白が詩に、此行不レ爲ニ鱸魚ノ鱠一自ラ愛ニ名山一ヲ入ニ剡中一ニ。ともつくれり。

蓑虫の得たりかしこしはつしぐれ

楠の根をしづかにぬらすしぐれかな

古傘の婆娑と月夜のしぐれかな

はじめの二句、見つけてそのまゝ作たる也。楠は常盤木にて大木のある物也。また古傘の婆〻は、詩にうごくかたちにつくれり。

玉あられ漂母が鍋をみだれ打

韓信に食をあたへし蟫母が事、漂の字は面授にとくべし。

妻や子の寐皃もみえつくすり喰

他人の宿にには萩な植おかし風吹度に哀そへける、慈鎭。身にしみし荻い音にはかはれども柴ふくかぜは哀也けり、西行。涙の間や小貝にまじる萩の塵、はせをなり。

雪しろし加茂の氏人馬傳打テ

馬に乘て通るを、うてといふ。馬にてうたせたまふなと物がたりにあり。上は加茂の字、下は鴨の字なり。

故人曉臺、予が寒帅を訪ずして歸郷す。知ぬ、是東山西野に吟行して、荏苒として晦朔の代謝をしらず。歸期のせまりたるをいかんともせざる成べし。

牙寒き梁の月のねづみかな

白は日也、黑は月也。月白の鼠の事、佛説にみえたり。又、荏苒は月日のせまるをしらざるかたちと見るべし。

陶弘景贊

山中の相雪中のぼたんかな

陶弘景は晉代の人也。松風を愛して、華陽山に隱居して陶隱居といふ。帝より政の決定しがたき事ある時は、使者を以て問せられて決し給ひしより、時の入山中の宰相と呼べり。

かの曉の霜に跡つけたる晉子が信にそむき、嵐雪が嬾に效ふ

皃見せやふとんをかぶる東山

へ皃みせや曉いさむ下邴(邳)の橋、晉子が句也。漢楚軍談に委し。張良が故事也。へふとん着て寐たるすがたや東山、嵐雪が句也。

新右衛門蛇足をさそふ冬至かな

蜷川新右衛門、一休禪師の法を信じたる人。曾我の蛇足は畵人なり。武門の入にして一休の畵の師也。

花に表太雪に君あり鉢たゝき

京に表具屋太兵衛といふ風流の老人ありし事、畸人傳に委し。

閑古鳥は賢にしていやし寒苦鳥

寒苦鳥佛說也。

黄鳥の啼や師走の羅生門

羅生門などいふ事をつくる手本になる句也。〽春の雨屋根なくなりぬ羅生門、尙白也。

年ひとつつもるや雪の小まち寺

雪の字、大きによろし。

角文字のいざ月もよし牛祭

牛祭は太秦祭也。九月十一日より十三日まで也。又、牛祭誦卷物などいふ古謡あり。つれ〴〵草に角文字の哥あり。いざは、まつり見にさそふ意也。

倣二素一堂

乾鮭や琴に斧うつひゞきあり

〽浮葉卷葉この蓮風情過たらん、祖翁曰、素堂が句。蓮と音に讀ざれば一句の手がらなきに以たりとぞ。考るに〽琴に斧うつといへる趣相同じ。

秋の雨庭淋しう降いでゝ、窓のもとにひとり灯火をかゝげ物なつかしき折から、粟飯原長彥、夜半叟が句の故事にあづかるものを拔書してとひ來たり、是に註し得させよと乞ふに、われ子期にあらざれば、いかでか伯牙が琴の音をしらん。われ能因にあらざれば、何をもてか帶刀がかんなくずにむくひてん。たま〳〵先師の茗話にときしめされたることのはし〳〵を思ひ出て、それに蛇足をそへて、あからさまに蕪村句解と題したるは、いと鳴呼なるわざなりかし。あわれ、見ん人、子期・能因のちからをそへて瓦石の聲をして玉振ならしめ給へ。

天保癸巳秋九月

棲雪廬　布席

蕪村連句選集

蕪村連句選集

勝峰晋風編

西海春秋　寛保三年作

江霜庵田鶴樹の著『西海春秋』は紀行・歌仙・發句文章讃の上中下三册に分れてゐる。その中巻歌仙に阿誰の發句、田鶴樹の脇、第三よりは蕪村・阿誰の兩吟、句の花が田鶴樹、擧句は朱令といふ順になつて、此の巻が出てゐる。そして四人同坐の作でなく首尾の二句は文音で成り、實際は蕪村・阿誰の對坐吟である事が推定される。田鶴樹は淺見氏、淡々の門人で蕪村とは關係ないが、『西海春秋』は寛保三年の紀行で、發句の部に「關東下總連中」として阿誰は十句、蕪村は「川かげの一株ヅヽに紅葉哉」の一句揭げてあるから、當時蕪村は下總關宿の箱嶋阿誰亭に寄寓中、此の歌仙を合作して阿誰より田鶴樹の許に寄稿したのである。『西海春秋』の板行は吳洋の跋にある寛延二年であらう。（帝國圖書館本）

歌仙

紅葉のとぎれ／＼や瀧の音　（關東下總）阿誰
　我を礫に群れし山雀　田鶴樹
月の芋武家は物毎やさしくて　蕪村
　打付書の裏も金屏　仝
大雪の梢の奥も木ずゑ也　阿誰
　鰤賣聲も宿に入相　蕪村
ウ
懐の子やわすれけん立くらみ　阿誰
　泊り合せて翌は佳例日　蕪村
古川に水引一把小引出し　阿誰
　うらから見た歟おつかない文　蕪村
逢はぬ戀待戀までは美しき　阿誰
　破風の鼬に梟が飛ぶ　蕪村
しつかりと燧をつかむ病ほうけ　阿誰
　巽の雨の口の先へ降　蕪村

山法師かゝる時節やうかゞはん　阿誰
花かいらきに秋の野の袖　蕪村
月白し小家に笛を吹そらし　阿誰
長き夜すがら鮎は落行　蕪村
ニ
目鏡踏む距(カヽト)のこゝろさびしくて　阿誰
押繪の榮は島の千載　仝
先祖の日娘二人の髪結はん　蕪村
穢多村かけてはやる疱瘡　阿誰
白米のつめたき土にこぼれぬる　蕪村
寒に入らふとおもふ刻限　阿誰
關の戸を或夜きつねの敲きけり　蕪村
都方とは嵯峨歟醍醐歟　阿誰
梅酒をたしむ阿耆梨のざくろ鼻　蕪村
とある所の明き小蔀　阿誰
朝の月重き一葉やかたつぶり　蕪村
海の濁の立浪もなし　阿誰
ウ
開山は眞壁平四郎入道歟　仝
南京近く殊更の空　蕪村

市に出て苦しき餅の賣殘　阿誰
四角に物をたゝむ老耄　蕪村
聊も狀は詭らぬ花の國　田鶴樹
摘ば匂ひの手に殘る古茶　浪花 朱令

反古衾　寶暦二年前

蕪村の俳諧發祥の地として下總の結城地方はかろ〳〵しく看過されない。結城の雁宕は先師巴人の同門であり、關宿の阿誰も蕪村の行脚に好意を寄せて居た。『反古衾』は李井の序に「爰に雁宕・阿誰のつくれるあり」とて共編のように書いてあるが、阿誰の手で板行されたものであらう。『反古衾』の歌仙五巻中、蕪村の同坐せる三卷には百萬が必らず加はつてゐる。百萬は百萬坊旨源として著名な江戸の俳諧師で、其角の五元集の板下を蕪村に頼んだといふ新花摘の記事も、多分この歌仙を

行つた頃の事で、百萬も蕪村も同時に關宿で落ち合つたのであらう。此の三歌仙は同時の興行と見て、『反古衾』所載の順序のまゝ載せる事とした。なほ『中興俳諧名家集』の解題を參照されたい。（晋風文庫本）

其の一

神無月はじめの頃ほい、下野の國に執行して、遊行柳とかいへる古木の影に、目前の景色を申出はべる

柳ちり清水かれ石ところ〲　蕪村
　馬上の寒さ詩に吼る月　李井
茶坊主を貰ふて歸る追出しに　百萬
　さらり〲と納屋の鰷(コノシロ)　村
大汐に足駄とられし庭の面　井
　枕かいつて起す邯鄲　萬
餘(ウ)所へ出ぬ土用の中も冬に似て　萬
　陳皮一味に藥研ごし〲　井
墨の手で拭ふ泪の手習ひ子　仝
　死ンだ雀を竹に埋けり　萬
萩すゝき鯷の塒(コエ)に色ぞよき　仝
　休意とついて樂〲の秋　井
釜の坐にやつを隱して後の月　仝
　酒で嗽も床のたしなみ　萬
三途川たばこに醉ふて渡る也　仝
　花には去らぬ毛氈の蛇　井
山吹に莚下ゲたる厠の戸　仝
　つれ〲讀の笠も幾春　萬

二

橋守が人形賣も古風なり　井
　振らする跡へふらぬ大名　阿誰
清水も十日の上野をさらに　萬
　唐縮緬をすみ染の尼　井
松風と共に經る世のゆがみ形リ　誰
　面ンをかぶつて掛乞に逢ふ　萬
酒毒とて中盆ほどに出來にけり　井
　眠るうなひに神おはします　誰

夕蟬に土間で糸とる藁庇　萬
　泣せて戀をしたる說經　井
月影を横ともおもふ仇まくら　誰
　鎧のうへに米を背負ッ露　仝
ウ
道閉る戎境の岩もみち　萬
　徒折敷て坐禪する僧　井
剃刀に反古の文字の鑄付て　誰
　波も俗なる湯屋の彫物　萬
芝居見む花にひと云し雨のひま　井
　小鮎を詰てぬぐふ重箱　誰

蕪村二句　李井十四句　百萬十三句
阿誰七句

其の二

漁泊

夕やけや何歟降べき冬の雲　百萬
　大根ばたけに舟人の路　蕪村
二十年酒うる家をおとづれて　李井
　胡蝶に似たり團子取ル犬　萬
杖つきに植木貰はん春の月　村
　出かはり近き門の小廝　井
ウ
鉢米メを臍土器にあはれなり　萬
　余りの事に迯ぬ盜人　村
松風も不二より落す甲斐の城　井
　襷をかけて神ウン書フミを書く　萬
馬鹿聟の馬の駈出すどよみにて　村
　しはすの市に棒も侍ふ　井
雪隱にヱヘンの聲もかくれ里　萬
　乾のかたと浮ぶうらかた　村
ましら鳴く女房達と連ふしに　井
　月やむかしの雛どもを燒く　萬
池上の塔詠やる花の雲　井
　春待得たる川崎の溫デ泉ユ　萬
ニ
長持に注連いかめしき大神樂　同
　草のはづれに豆腐賣る門　井
行燈のこゝろと闇き五月雨　同
　史記一冊をとらまへて寐　萬

常うたぬ薛の碁盤音絶て　萬
戰國の世に建チし古寺　井
五六里はおこしさへなき松の濱　仝
眉にしらるゝ傾城の旅　萬
縮緬は角ドだちかぬる頬かぶり　仝
お講の霜に並ぶ珠數鄽　井
埒もない喧硴に月のしらみ鬼　仝
冬瓜ばかりも跡の入る舟　萬
沖に吹く鯨の汐も露しぐれ　仝
紀の路に減らす山伏の杖　井
蘇生した亭主の敲く已が門ド　萬
一番鷄に起る粥焚　井
かまはねば鼠あたけぬ花の春　萬
扇子投込む禮もしたしき　阿誰

百萬 十六句　蕪村 五句　李井 十四句
阿誰 一句

其の三

むかし或翁はうば玉の夜のまくらに女の名を付て、老の疑覺をゝゞされけるとなん、予も又、寒夜のつれ／＼にこの物を愛して

前うしろありや火桶の撫ごゝろ　李井
客の頭巾のかゝる折釘　百萬
古池に蛸の雫のしづむらん　蕪村
もの呼ぶこだま日は落に兎　井
駕舁の袖ふる影も薄月夜　萬
問屋衆中の提重に菊　村
行秋に足袋の白きも初心也　井
千疊鋪に一寸の釋迦　萬
唐人に詠むで聞カする家の凪　井
旭の外は何もなき海　萬
强飯に寒き濱名もわすれめや　井
鷹おとなしう帽子着て居る　萬
そこら中吉次が目見金ぞかし　同
やはり眉をも敲く檢校　井

春の夢赤前垂の膝まくら　仝
影繪おぼろに信田妻やる　萬
惜そうに寺ひらかるゝ花ざかり　仝
薪をくらふて足引の犬　井
二 探出す蛸の天窓の鳶からす　萬
ねりは手傘でわたる祭禮　井
振袖を抱た男のよろ／＼と　萬
みだれし鬢にきぬ／＼の酒　井
白菊とぜうもう灶(タキ)も利とりて　萬
忘れしシテに耳こすりする　井
虛空(アホゾラ)を天狗と來ぬる國いくつ　萬
木の葉落しに靑錆の塔　井
案内の錢取からにかき消へて　仝
塩屋に入つて鯛を煮さする　萬
文臺に足が成ろふ賦けふの月　仝
しら鷄頭もいつ迄の色　井
ウ 呼出して狸を見する秋の暮　仝
破レ障子になくて有る不二　萬
煤掃に草摺切るゝ古具足　井
ごつちやに成し我子乳母が子　萬
神主へ三百疋の花の宿　井
彌生でしいる十二盃　萬

李井十七句　百萬十七句　蕪村二句

雙林寺千句　寶暦二年作

貞徳の百回忌に際し而笑堂練石が發企となつて、貞門点者隆志・丈石・普及・乾峰の賛助を得、寶暦元年十一月十四日鳥羽の實相寺にて

懐舊之誹諧

探梅の花のかほりや百かへり　寄風公
雪にめぐみの屆く野の末　練石

以下の百韻を營み、翌二年東山双林寺閑阿彌亭にて、三月十三日より同十五日に至る三日間法樂千句を興行したのである。蕪村は第二の鶯の卷百韻名殘の表二句目及び第三柳の卷

百韻二の裏十三句目と名殘の表十一句目に、三句を詠じて居るに過ぎないが、乾氏より『雙林寺千句』のすき寫し本、頴原氏より同抄本を借覽したので、蕪村出詠の百韻二卷を全部掲げる。（大阪北田彥三郎氏藏本）

其の一
三月十三日 **第二 鶯**

此法や百さえづりの鳥はもの　隆志
川ぞひ柳みどり第一　丈石
氣にあはぬ人ももてなす櫻にて　林石
はなしのたねは咄なりけり　普求
高狩の馬を乘こむ玉だすき　一方
鶯のそよぎの殘る熊笹　和汐
月纔うつすほどほる庵の池　春雄
はつしほ時かしめりある簀　乾峰
ウ 竃馬の鬚に關羽も耻ぬらん　八百彥
頭巾は錦唐めいた杖　練石
大梧とはいふ斗にて戀すてふ　執筆
夜と晝との戀意わかるゝ　蛾庵
人は巡蚊にせがまれて戀つくし　津風
下樋の音の寒き下闇　花里
横ふりにひたと狂ひし砂土圭　湖面
至つた齋さなくさみと見え　澤名
老らくの中に淋しき富士の夢　唯有
加增地殊に新月の色　信也
山雀の來てはくゞりし桔槹　里橋
姿は秋もわくら葉で過　文也
窓ふかく手向る花は道の恩　信舟
蝶の香はらふ(マヽ)高臺寺垣　其梢
二 遠眼鏡ちく〳〵かくす夕霞　岩成
社と御所のわかる染搭　了山
撞出す時をわすれし郭公　蘭香
寐覺涼しく庭にさく雫　岡雄
只水に不自由しますと瀧て(マヽ)釋　春人
僕にむさしを習ふ墨賣　文門
泣内も形見の金のつかひやう　稻信

物がたりあるふり袖の泥　其柳
念者氣に切てくれたる冬椿　家風
五辛きびしく神てたつ僧　千歌
相談はのいた狐のやり所　志風
蘭の菊のといそがしき我　在睦
朝日までしらりと出來す月の歌　豐秋
さびてもよきは鮎と庵室　萩里
ウ
百とせの夢を問あふむら雀　嘉石
緋ちりめんとはよまぬ下紐　田隺樹
寐過した日は物毎にはづかしく　和汐
田樂法師夕立に亂離　八百彥
鎌持てうなぎを料る在祭　歸厚
水かきあらん河ごしが足　蛾菴
帆は沖に陸は驛路のすゝ振ひ　春海
枇杷葉ずれどふりむかぬ禪　吳帆
斧さげて峯の松風きり落し　珍之
二條の后樣はみななれ　田隺樹
部屋〴〵は髮結たつる秋の月　練石

白きを見ればむさいあさがほ　可行
をどり子も花の稽古に晝ねぶり　嘉石
ぬつけりすつけりお氣に入なり　湖南
三
時〴〵は養生となる不養生　蛾菴
あふ夜のみやげ螢一疋　隆志
鏡臺にうしろを見せて旅出立　柱山
首玉は金襴の墨染　田隺樹
尼寺の念佛はとかく小哥めき　可行
四方は初雪吹そろふ綿　歸厚
青山の中を飛出る鹿の聲　一石
つばくら去てわたる色鳥　乾峰
御車のあとにをくれし朝別　春海
づしへなげ込鐘入の文　吳帆
噂より掘出して來るかほよ花　信舟
藻と月の間追ふてくゞる鵜　八百彥
折〴〵は北から吹も自南來　田隺樹
今度の瘧三貫目減　柱山
三ウ
丸腰につり髭あつて拍子ぬけ　皈厚

立はつゝほり座すはほつしり　風狀
八重霞難波の痕は瓦ぶき　田福
ながめせし間にふける兒鳥　乾峰
請出されしばし出口の忘草　練石
何をかたちに盲目の夢　隆志
渇仰のけしきと見ゆる筋痛氣　蛾菴
時雨を背に負て芦刈　珍之
早う暮はやう明たる舟の中　玉芝
十八物の外に道の記　風狀
なぐさみは狆にねぶらす痰の瘤　一方
下戸と上戸のわかる手皷　松夢
恥かしき聲を狂はす花の月　毛越
雲雀の飛だあとでうなづく　嘉石
ナ
わらひ兒あらまほしきは涅槃像　田荏樹
留守をたのまれ我庵は留守　蕪村
總領の發明なるに法はづれ　信也
是界にそゝのかされ銀山　田福
飛越も數に入らん八十瀬川　八百彥

其の二

裏もやうにてすそにむら霧　春海
憂が中乳のはる朝の露時雨　一方
鷄頭ひとりたてる若後家　丈石
影法師みなうつぶきし亭の月　風狀
炭團は黑うせゝり出され　和汐
降雪を鹽とはいはじ長次郎　田荏樹
木魚の腹も日に三度へる　虹竹
無人聲管暖寮の音ばかり　蛾菴
洗じた松のしげる逼塞　珍之
ウ
印判屋手があがつたが不出來なる　馬逸
口おしながらふつと寢がへる　湘南
肝心の恨を殘し夜はあけて　信舟
あたら地黄を鯉にはねられ　吳帆
おもひ出す事ばかり有つくも髮　田荏樹
詩を書汚す寮の覇王樹　乾峯
手でもあく鎖に科なし神の花　杜山
三月盡はあとへ指折　松夢

三月十三日 第三 柳

中垣の柳どちらが前うしろ　丈石
桃はしだれて花の夭々　林石
余所からは此邊もさぞ霞むらん　普求
わんぱく太郎帶はもつほり　一方
屆ものいぬる荷車呼かけて　和汐
かたげ加減にすへてはる傘　春雄
ゆふ月にすねた形なる日向菊　乾峯
馬糞をはけば叉鹿の糞　八百彥
ウ
詠内に峰は雲をく初あらし　練石
來ぬにきはめて常の物着る　隆志
手爐の火のかこち淚にきゆる音　執筆
諷誦あげさふと局からたつ　凉花
花欄欄のくもりながらに晝過て　柳水
鮓のおもしのこける汐時　玉芝
來る使者を奏者より先狆が鳴　鱸松
すむ月影も丸の內町　貞右
秋の風松の琴柱やはづすらん　可行
しのんだ足のあとに露霜　守大
朔日の鏡に直すねたみ皃　巨江
眞實を非にまげて孝行　閑我
富榮ふ家は世上の花なれや　虛舟
いつも得意のつばくらめ來る　都十
ニ
石うすのしめりも春の雨もよひ　如鶯
藝持ながら內氣なる人　百尺
肩ぬげばおそろしきまで力瘤　砦枝
あたら馳走によい風がない　馬逸
南天も松も鉢植建つまり　四青
秋を感ずる今入の所化　曉雪
三ケ月の歌こそほそくからびたれ　馬十
田刈の前に小豆ひく村　左右
大水に殘りし家は古めきて　狸洞
駿河小判をしる人ぞなき　此道
誰呼て高雄薄雲こむらさき　石鎧
あだし心の奇楠すがり行　英丸
腰かけて千とせも經なん中敷居　塵生

火達はひらけ猫の代となる　丈士

二ウ

土佐紙は蔑暮使の炭の籠　田奄樹

御力持の石にきりはく　柱山

才過て丸額からおとなぶり　嘉石

襷よ帶よさほよ衣桁よ　風狀

待夜半や蚊にせがまるゝ枕あり　珍之

つゝめど人になれた文づら　可行

献立の夕日にそよぐ山おろし　春海

辻堂の繪馬つゝきわる鵲　八百彥

佛手柑と神道者から名付そめ　風狀

丹波のよし野月も下手くそ　田奄樹

おしむ秋日暮の事とおもはるゝ　春雄

茶碗に乘てありく仙人　丈石

寢て戻る爲にして置く花の宿　蕪村

春もわづかにかぶら大根　毛越

三

角文字にむかし歪うあたゝかき　虹竹

料理人來て塵多く出來　普求

閑はるゝ日よりも先へ氣がつまり　玉芝

紺と木綿になつて八ッ立　風狀

橘の香にむせびたる旅やつれ　八百彥

すそする馬に付るゆふ四手　一方

人をよぶ手をたゝき次出入儒者　柱山

案ずる事のおほき世ざかり　練石

ちら〳〵と朝日の產し帆かけ舟　梨風

七月の風ばせを破らず　春人

清書のなをる度〳〵松に蔦　御錦

鹿聞なりと關所おゆるし　丈士

うつ〳〵と玉兎の眠るつくり水　乾峰

吸もの出來て碁盤あづかる　花鈴

三ウ

ありがたく囉ふた女房いやになり　田奄樹

遁世するは夜な〳〵の夢　玉芝

むく瓜に六角堂の物がたり　隆志

大阪近しねぢた鉢卷　柱山

目じるしの梢はかれて無事の舟　鼠角

氣輕な人の肥滿おかしき　春雄

いのられてのいた狐がへた〳〵と　和汐

戀にもくちず名哥埋もる　御錦
うたがひの中に立たるみをつくし　春海
こん／＼／＼とにくいやつめや　八百彥
夕皃の宿替はこぶ供烏帽子　隆志
人がらをとる露の五郎兵衛　田福樹
京の繪の花は御忌から納涼迄　丈石
むこにたゝかれ大悟する月　嘉石
ナ
腹あしの師の鉢洗ふきり／＼す　普求
舟橋へひた／＼と秋風　虹竹
うつとしい代りほどなる柿紅葉　一方
慇懃になり給ひ不機嫌　田福樹
惟光がひとつを早うなづきて　林石
脉見せる間を傾城の實　其秋
戀ばなし百仕て見んと思ひきや　隆志
みさをといふ字いとゞ貴とし　春人
四角なる道はふまざる竹荷ひ　春雄
握拳で後世のたねまく　珍之
餘所目には普賢菩薩も雲の峰　蕪村
拜領やしきかんこ鳥啼　乾峰

楊弓の稽古しまへば月は出て　花鈴
秋よりはやく秋をしる嵯峩　可行
ウ
女郎花ふみこかしつゝ手負猪　練石
ほれたが因果忠義わするゝ　田福樹
しつけ苧の契はもろき一夜づま　春人
敦賀の風は三國にもふく　丈石
あまかつと成て付そふ乳兒弟　因石
音もおかしき産綱の鐶　毛越
すら／＼と五日／＼の花くばり　虹竹
御殿の霞彌生たつ空　一石

遺墨

寶暦五年作

蕪村は支・麥の徒と内心は卑めたが、決して其の徒と交際しないような狹量でなかつた。美濃派の雲裡坊との風交に徵しても知られよう。「短夜や六里の松にふけたらず」は雲裡坊に橋立で別るゝ時の吟であり、又、別にその

橋立で雲裡坊の詠んだ發句で行つた歌仙が殘つてゐる。卷中の作者竹溪は丹後宮津の見性寺の住職で、蕪村はその寺に三年滯在したのである。ろ時雨は同じく眞照寺の住職鷺十（十ジフと時雨ジフ音通）である。碧梧桐氏の紹介によると、歌仙の全卷は蕪村の筆蹟で美濃紙大の紙に書いてあるさうで、それも一度滿尾した後に更に修正したらしく、吟松の脇句及び蕪村自身の附句にも二句貼紙をして訂正してあるさうである。（丹後加悅吉田利兵衛氏藏）

乙亥夏皐月廿八日

歌仙

はし立や海に一刷毛青嵐　雲裡
　杖も預かる夏陰の宿　吟松
あらいよき洗濯ものゝうれしくて　蕪村
　たよりを問へばまた二三度も　桂龍
てうちんは持たせた斗宵の月　竹溪
　露ほど呑て詩にも下手也　桃溪

藏建る場を菊畠に買取らせ　ろ時雨
　下の關から時つけの狀　鷺時雨
勘當も母の手前は疾（トク）免りて　催馬
　耳の遠いも有がたい僧　尺布
待ぼうけ默つてもどる時鳥　南波
　砂地は草もない小松原　裡
帆も月も一ぱい持てみなと入　龍
　二階は事に成た初鮭　溪
ふり袖に秋の模様を散めかし　松
　長者夫婦の中のよい顏　村
觀音の前にゆらりと花の瀧　鷺
　塵の網出て雲雀高〳〵　波
肱枕椽の日うけのあたゝかさ　馬
　なぐさみに成孫も三人　尺
薩摩から系圖を問につがもない　柏
　加減と言ッパ生姜一片　龍
雇人も井戸の淺いをよろこんで　村
　干ものに世話やかすばら〳〵　竹

草臥(クタビレ)て神も晝寝の祭り過　雲
瀧(タキ)をせゝれば谷のほたる火　松
息杖の連が追〳〵およぎつく　時雨
きよろりと嘘をついたてんかん　村
御談義も仕舞に丁度月も出て　時雨
窓(マド)からくゞる新そばのかざ　馬
寢ころんでもの案れば一葉散　龍
請出る筈の間違つた文　尺
目づかひに峰兀したき朝曇り　波
芝居の太鼓またたゝく也　雲
花に來る客に緣者はなかりけり　村
霞の內も外も春色　龍

遺墨　寶曆六年作

宮津で行つた蕪村の連句として別にもう一卷、やはり蕪村の眞蹟のまゝ傳へられたが、其の所在を失して、今はそれを透き寫しにして置いたものがあるさうで、碧梧桐氏は「連衆は總て手近い宮津の同人のみであるから、かやうな會合は必ずしも年に一回のみでなかつたであらう」といつて居るのは同感である。前卷の雲裡坊は既に分袂後であるから、此の中に入つてゐないが、吟松・鷺十、その他二三の出入はあるけれど、大概宮津の人たちである。(丹後宮津眞田芝英氏藏)

寶曆六歲丙子晚春
歌仙　晚視亭

うぐひすや笠に脚伴の無分別　桂龍
何がなしほに若布二三把　吟松
朧月客は隣の夜着かりて　蕪村
子どもの世話にまた猫の世話　鷺十
土橋のあぶなう見ュる雨上り　建山
諷をしへになれば町から　東陌
藤柄のはやつた事も二十年　柏溪

はだかでくればなりやらうなり　龍
陸なれば遠いに船のうら向　陌
朝時を鷄のふれる道端　同
召ませと互にかぶる兀仲間　松
無筆で濟で通る金持　巴
四疊半表がへして松の月　十
臥見の城の光る稻妻　村
琉球の人は何と歟旅の秋　陌
巻いても着ても兎角ちりめん　龍
眞直な道を曲ッで花もどり　巴
夏の嘘つく植木屋が春　陌
さしで口女房しからぬ長閑さよ　建山
使へ投てわたす百兩　十
糸鬘に只今成た更衣　村
痞のくすり富士を見て來い　同
精進日に守本尊の指おられ　陌
きのふの娘けふは傾城　十
誰やらに似たとて急に痩らるゝ　陌
いとつれ〴〵の桐壺に雨　龍
寢はぐれの又寢はぐれる雁の聲　陌
登れば月も登るのり合　巴
さや走る刀も秋の日に寒し　村
和睦の風のかはる手の裏　山
氣みじかな庄屋に村はつかはるゝ　十
神名帳に乘た古宮　山
駕居へる芝へ跡からたばこ盆　十
花はまだなる笄のきさらぎ　陌
たま〳〵に訪れて浪の暖き　村
山の屛風に霞む薄墨　執筆

東風流　寶暦六年前

支・麥の徒が地方に流行して、江戸の俳諧はやゝ其の壓迫を惑じて來たので、沾德系統の紫隱春來が慨然として「誹と蓄麥は關東に止れ

り」と稱した芭蕉の遺語により、江戸俳諧の爲め『初學抄』の著者德元をはじめ、貞門・談林・花門に限らず、いやしくも江戸に生活した故人の發句に依つて脇起し歌仙を行ひたるものゝ其の一卷である。第五編に宋阿、即ち蕪村の師の發句で春來が脇を承け、下館の大濟・蕪村・結城の雁宕・江戸の存義の一順で成立してゐるが、興行の場席は江戸とも下總とも判然しない。『東風流』八册の板行は寶暦六年であるから、此の脇起し五吟はそれより以前、しかしさう古くない時代の作である事が推定される。（帝國圖書館本）

哥僊

おもふことありや月見る細工人　宋阿
聲は滿たり一寸のむし　春來
行く水に秋の三葉を引捨て　大濟
朝日夕日に森の八棟　蕪村
居眠て和漢の才を息ふらん　雁宕
出るかと待ば今米を炊　存義
椽はなの立小便に海すこし　來
ゆふぐれなゐをしたむ雷　濟
魁ん恩賞うすき老の身を　村
すゝりあげたる下手の長泣　宕
そゝのちの野上は風の音ばかり　義
いくとせ兀て鼯鼠に毛もなし　來
錢塔の二文落又五文落　濟
根にうつぼ木の命ありたけ　村
浪人の智惠の鏡もかき曇　宕
信濃につゞく新潟の月　義
百疋の花を角力のあやにとる　來
赤とんぼうの染あへぬ尻　宕
渡し場に各〱駒を引立て　村
乞食坊主といはゞいはねの　濟
玉水も廓の軒の一つらに　義
けふは女の家あるじかな　來
踏馴し我碓にはなれかね　宕

いづくをさしてつら當の旅　　義
しかももとの草履にあらず藁草履　　來
をぼつかなくも慈悲心と啼　　村
猿丸の顔をかば茶に彩色て　　濟
五節の舞の君が呉服屋　　宕
冬の月岩もる水も東むき　　村
松葉焚らむ一しきりづゝ　　濟
ウ
そだつ程そだちて瘤は古びけり　　義
發願文をしみ〴〵と聞　　來
南降る障子の帋の息づかひ　　村
痒さをしのぶそら寐入にて　　義
すり鉢に花も朧のとろゝ汁　　宕
しだれて筒に袖はらふ藤　　濟

戴恩謝

寶曆八年作

蕪村と同じく巴人門の宋屋が「風薫れ十七年の戴恩謝」と亡師の恩を謝して、一門の作者と行つた連句及び追慕の發句を一集としたもので、「戴恩謝」の外題は宋屋の句から出てゐる。脇起しの方は歌仙の一折のみで、蕪村は「其石町の春の入相」の附句で、巴人の江戸石町に夜半庵を結んで「我宿とおもへば涼し夕月夜」の發句に對し、かぎりなき思慕の情を寄せてゐる。「風薫れ」の卷は百韻の中で、作者の一順七十八句のみを揭げて下略となつてゐる。蕪村は初裏の花に「餅好の大名通る花の山」と詠んでゐるのみである。乾木水氏の好意で、大正十三年六月原本を透き寫しにして送られたので、本文はそれに據つたのである。（大阪北田紫水氏藏）

其の一

石町なる夜半亭を靜なる座臥と定め

我宿とおもへば涼し夕月夜　　亡師
流れをしたふ梅檀の陰　　宋屋

山幽過る驛路の鈴さえて　千扇
足る事につき無事に寄友　宗専
樂しみも朝寐晝寐は嶞(惰)弱なり　蝶夢
大字一枚そこらみな水　嘯山
ウ
造り樹も我代に成て延次第　如礫
石に角なくまん丸な苔　稻太
月の連觀音堂に指を折　盛仕
身には入ずや相撲取ども　武然
淋しさのあつまる雁の國境ひ　故郷
あとを拜んでそつと通路　楚雀
流るゝはもとへ戻して願ほどき　婦山
枕屛風に書捨る恩　以文
撓みたる身を帆にかけて花百里　雁宕
其石町の春の入相　蕪村
鶯にとぶらひ聲はなかりけり　几圭
額に皺も見へず永き日　雁宕
(原文)下略

其の二

亡師慈明忌一順

風薫れ十七年の戴恩謝　宋屋
座香をなしてしぼる帷子　宋専
嶺聳(ミネソビ)へ今川の名と分るらん　宗是
程よく續く舟曳が道　嘯山
朝寐好こまり入たる鷄の聲　東明
露いろ〳〵に草をうつさせ　武然
重着に樓よりおりる月の人　盛仕
虫も膝折ぬりものゝ上　鈴賀
ウ
春日野をはだしで歩行京土産　千扇
逆てあはざる夢を評判　仙漁
ながらへて重ひおもひのちから事　可焉
久しき垢を拭ふ姿鏡　志樂
返り聞腰はほうがらほとゝぎす　流鶯
流にあそびこゝろ凉しき　徒遊
須磨の浦淋しからざる繪空ごと　西和水
犬ひく沙汰のなき狩は虎　羅職
見ぬ時は名にこがれけん藪(ヤブ)の月　宋里

礎に合す賤が念佛　桃苔
藏付に上座の分る臺所　雙鳬
撫られた損たゝかれてしる　稻太
餅好の大名通る花の山　蕪村
江戸紫の塵もそめ込　柳山

二
やぶ入と出世咄をわたし守　汶上
女の疵をいふも老たり　顧山
編笠の燒印消て朱雀口　魯州
櫛にまじはる辻占の神　琴之
濁り江を除くや鳥の水遊び　婦松睡
餞迄にむすぶ裂熨斗　花兄
福耳と譏られながらちから有　富染
稻の最中に弓矢携へ　楚雀
何ゆへぞ音なき月の水車　荊玉
扨短氣とは見へぬ秋風　婦山
摺墨のゆがみ加減も物の果　陶泉
さかづきの書に分る八景　淡水
櫻戸に昔ながらのもらひ苗　毛越
篭うぐひすにふへる天文　天山

二ウ
しら魚のざこ寐を皿に一つまみ　長流
耻かしひ事は分別の外　一蓮
鉄漿筆に山梔子の歯を染替て　魯水
賤が伏屋と聞は文躰　和扇
正直のかうべに髮のはやり髷　楚豪
都のこゝろ知て丸腰　澗水
よあしは世の戯れと鳥帶　鈴音
法躰しても土俵迠顏　墨雅
詠習ふ御弟子は月の豊上り　百絮
手づから炊ぐ鹿聞の粥　謝鄉
雲水を速に心を養はれ　桃咲
古き掟のすはる礎　富水
まかなくに言葉の花や咲續く　壺角
雛をかしづく子共大將　連玉

三
投鞘の邪魔をして行几巾　烏曉
口舌になつて訛り顯はれ　富冠
襲の居はれば牡丹吹しづめ　共鎭

氣のゆきたけもためす夏陰　雁夫
町川へ浴に下りたる放れ鷺　可候
望み叶ふて灯す土器　社山
折〱の異見も老が問藥　里鶴
年足幾つ枝たれし松　机山
雪深くして名ニ高き梅匂ふ　故鄉
たま〱千鳥萢に客來る　瓢泉
傾城の果ともみへず小薙刀　鉄夫
反古に交り起請衰へ　鶴助
入月の影を拱く西の空(ソラ)　寛留
顔もあからむ白粉の花　其銘
名(ウ)水とわかれて落る田の境(サカヒ)　文峯
加增弘めに妻も一さし　移石
歴〱を聟と覺へて草の窓　墨士
端五の垣根龍も風ふく　鶴房
聲かけて蟬の抱付宮ばしら　孤山
檜原がおくを杣が近道　富外
奏者使者瀧の流るゝ口上手　鱸遊
大家に癖の多き物入　湖掌
片腕の風ひやゝかに刀鍛冶　買友
鱸の口を覗く鵜　楓坡
塗沓に月のさし入今出川　千雪
譯やあるらん白砂に幣　助耕
榾折ば減るにもあらず花の友　雅因
こゝろを誘ふ御忌の撞捨　鉄鐸

(原文)下略

鳥帽子塚　寶暦十一年作

橋立で別れを惜んだ雲裡坊は寶暦十一年四月故人となつた。渡邊氏、獅子門の棟梁として支考の後、美濃派を弘通する上に功があつた。近江の芭蕉遺跡、無名庵に國分山の椎の木を移し植て、有椎老人と号した事など、奇特な行ひが尠くない。雲裡坊の一門で京都に在住した由只の發企で追善の俳諧が行はれ、蕪村

もその中に交つてゐるが、歌仙一順十六句に過ぎない。明和二年板の『烏帽子塚』に載つてゐる。（晉風文庫本）

追善歌仙一巡

啼捨の跡も追はれすほとゝぎす　皇都連 東無舍 山只
　胸撫おろす月もみじか夜　蘆角
手習ひに外の事まで呵られて　巫山
　箒やすめば舞もどる塵　似水
乘懸のうへに鼾はめづらしい　巴臼
　雨のたまりを板なげて置　蕪村
節句さへ忘れて居れば重の内　文十
　世につながれて山科の秋　一丸
月影に舍人は先へ馳て來る　子鳳
　そよとも吹かぬ樅の大木　百尋
假橋は暑ならべたやはらかさ　鳥文
　人のきはらぬ侍のひれ　只蘭
雛あはせ拜むといふて大事なし　鳥六
　餅は灸に草を揃る　羽鱗
山寺の誰も留守なり花盛　安里
　問はずに來たがやはり近道　和角

五疊敷　明和五年作

江戸の河上庵泰里が明和五年十月、京に入つて五條通西洞院西入ル町に旅寓を定め、五條の音通によつて五疊庵と號し、蕪村・太祇の江戸座系統の人々と交際して、明和六年板行した『五疊敷』に此の二歌仙が收めてある。『河上庵發句集』（文化五年板）で見ると、「江戸に生れ男とうまれはつ松魚」の江戸ッ兒振りな發揮してゐる泰里が、「あづまの言癖を耻て」など含羞んで、同じく江戸から上洛した圖大と共に六吟を試みたのである。潁原・乾兩氏の筆寫本を借覽して校合したが、兩氏の著書に孰れも發表されてある。（京都寺村助右衞門氏藏）

其の一

都の人〻に對話のおりから、おのがあづまの言辭を耻て

物いふもむさし鐙や冬ごもり　泰里[五疊庵]
かゝる雪空あのひがし山　嘯山
さつくりと飛こす岸の砂落て　五雲
くちばみを干ス百年の家　蕪村
惣〳〵のひと夜蒸れて明の月　圖大
剃刀序いざ誰にても　執筆
傘の橋に音して吹れゆく　嘯山
町の奢りを見する葬禮　泰里
翠丸痒き身を學校にあり侘て　蕪村
瓢簞酒に年をしむ也　圖大
いつ磨くものともなくて鐘の聲　五雲
松黑〳〵と古き陵　嘯山
けふも又毛見の馳走にまはり道　圖大
夕月かけて十三夜なる　蕪村
家造に秋をわするゝ茨木屋　泰里
相場にかゝる後家の大膽　五雲
花に來て荒人神や祈るらし　嘯山
落日遲き毛氈のいろ　圖大
仕舞雛藏まで送りまいらせん　五雲
聟になる子のよい若衆なる　嘯山
油斷せぬ元龜の頃も戀ありて　泰里
四六の文を戰すらん　蕪村
賑に松風ひゞく深山寺　圖大
猿にひとしき從者遣ひぬる　泰里
羊羹の麻衣まくる手づからに　蕪村
のこる暑はたつた一時　五雲
晝見ゆる月見うしなふことはあれど　太祇
干潟風ふく江の島の秋　仝
荷はせた鐵さい棒のいかめしや　嘯山
しばらく〳〵頰被りぬつ　仝
積物の白きを見れば夜ぞ更て　五雲
戶さゝぬ御代や殖るゑのころ　泰里
山法師心しづかに老にけり　蕪村

麥飯くふて立て徘徊　仝
木の下に掃溜てある花の雪　圖大
東風やはらかに來ぬる廢庭　五雲

泰里六句　嘯山七句　五雲七句
蕪村七句　圖大六句　太祇二句
執筆一句

其の二

木のはしの坊主のはしや鉢たゝき　蕪村
始て法の道を踏む霜　泰里
淺く汲む水の柄杓のならはしに　太祇
持くさらしの臺子なりけり　圖大
さす月のためにもあらず藏の窓　五雲
みだるゝ方が萩の見どころ　執筆
ウ ぶら／＼と秋を出歩くお大名　泰里
親孝行の家の日あたり　蕪村
首玉に一際猫の愛增して　圖大
枕たてつゝ來ぬ夜恨る　五雲
手に繰りて疾く見る文ぞはしたなき　太祇
まだ陸奥は軍最中　泰里
ありがたや十日の雨に田植して　蕪村
諸肌脱に凉とる月　圖大
椽先に干わすれたる山歸來　五雲
相傘ねたき仇書のさま　太祇
花嫁と和子が成りしかても扨も　泰里
そなたの空や春の行方　蕪村
ナ かゝる野にとが／＼しきは雉子の聲　圖大
すは御大事から尻に醫者　五雲
蠟燭の漸く燈る明りさし　太祇
酉の下刻は寒の入也　泰里
あざなへる繩のどしと口ずさみ　蕪村
灘行船の風のまに／＼　嘯山
打切た死骸どんぶり投込で　仝
戀ならなくに東雲の人　圖大
祈るにもあやにく遠き神やしろ　太祇
尾花のしら髮山にはらける　嘯山
鼻唄も一ふし月の武者執行　蕪村
夢みたやうにさめる酴醾漉　五雲

ウ
居風呂のあまりぬるさに風引て　泰里
　南無阿彌陀佛〳〵　嘯山
人買の伸びも欠びも悋氣也　圖大
　洗濯ものを潜る近道　蕪村
土佐駒を飼給へかし花の頃　嘯山
　三月になつて凧あげる風　太祇

蕪村七句　泰里六句　太祇六句
圖大六句　五雲五句　嘯山五句
執筆一句

明和辛卯春　明和八年作

蕪村の文臺開き後に配本した歳旦帖である。歳旦、聖節、東君の三は歳旦の嘉例とされる三つ物である。「鳥遠く」及び「風鳥」の二卷は蕪村と其の一派との歌仙である。碧梧桐氏の覆刻を企つる以前、京都の小山氏の許で原本を一見して、折角の歌仙に缺丁のあるのを甚だ惜しく思つたが、乾氏は寺村家保存の『紫狐庵聯句集』によつて其の缺を補ひ、『蕪村と其周圍』にこれを發表したので、連句の全き姿に接する事を得たのである。即ち「鳥遠く」の卷は初裏四句目より三の表折立まで十句、「風鳥の」の卷は初裏四句目より二の表十一句まで二十句の缺丁を補つた譯である。後の卷に作者名の記してないのはやゝ慊らないが、これは全く致し方ない。原本の体裁は碧梧桐氏の覆刻本によつて遺憾なく接し得らるゝ。歳旦帖は多く前年歳末に用意して置き、新年知己に配本する例であるが、蕪村時代には正月以後にも持越してゐるので、此の歳旦帖の連句は必らずしも前年の作と斷定する譯にいかないから、こゝには明和八年作として置いたのである。（京都小山源治氏藏本）

其の一

歳旦

かづらきの帋子脫ばや明の春　蕪村

夜の細工を見せる蓬萊　召波
獨活の香に近づく悪魔なかりけり　子曳

・聖節

比叡愛宕風渡るなり花の春　子曳
三條五條雲に掛鋼　蕪村
じだらくな宿直侍の長閑にて　召波

東君

音なしに春こそ來たれ梅一つ　召波
二つみつ葉の匂ふ裏道　子曳
てうちんにつり鐘凧や霞らん　蕪村

其の二

春興

鳥遠く日に〳〵高し春の水　子曳
人やすみれの一すじの道　蕪村
紅毛の珍陀葡萄酒ぬるみ來て　太祇
几千疊敷と云べし　几董

狩ぎぬの袖も身にそふ朝の月　馬南
萩から起る風は折ゝ　執筆
ウ
枝川に江鮭を見つけし小百姓　村
役にさゝれた刀わするゝ　曳
なま長い兒へさしこむ夕日影　董
返事など書樂屋譯なき　祇
たつた今盗んだ伽羅を盗れて　南
生駒の山や筑波山なる　村
御厩の嘉三太物に小さし出　曳
あやなき闇に古い挑灯　董
折得たる花もこゝろに任せざる　祇
蝶うち拂ふ寺の俎板　南
とかくして几巾の糸卷く暮の月　董
ほし店仕舞殘念な兒　曳
鐵の棒八十三斤にあつらへて　村
あまた女を奪ふ强盗　祇
居る拼夢は跡なくさめに鬼　南
蚊に一味して降かねる雲　董

屋根裏に鍬打かけて休メおく　祇
　麁相いたした大事ござらぬ　村
藪醫者の何を工夫の長雪隱　曳
　書出し入と書れたりけり　祇
高足駄氷の下を流れ去　南
　鳥居幽に月は筋違　曳
寄方の小膀をねらふ猿眼　村
　粒とり傳ふ八束穗の米　南
芋毛ほどの髮直白にとろつへき　董
　山平は山の端ナの平八　祇
引上た網にたかれば馬の沓　曳
　翌も日和と鳴ル太皷哉　南
幕串の足らぬ所に花一木　村
　蜂に燕に宮殿樓閣　董

其の三

春興か仙

風鳥の喰ラひこぼすや梅の風　蕪村
　名もなき虫の光る陽炎　田福

明キのかたわするゝ斗春たけて　斗文
　留主居ながらに翌は寢に來い　自笑
二口月月を友とは申されず　太祇
　あの峰この嶺秋の隅ょ　烏西
賢人に新酒一樽ねぶらせて　鐵僧
　帷幕のうちへ金を借ッ込　羅雲
松明を下タてに出よ山おろし　貫山
　住持と見しは本尊也けり
二八ばかり長者夫婦の共中に
　手なんどつたなからぬ媟
口なしにへだての垣のうらなくて
　おも家に遠くやはらかな飯
元信も三とせはこゝに大德寺
　鐘は霞に花は葉ごしに
關の戸の居風呂こぼす朧月
　角をおとした鹿の尻ごみ
草鞋に斧のむね打五ッ六ッ
　庄司が宿の般若聞へる

そよ〳〵と餘所を降した薫也
　卑賤の相で一睡の夢
鞘走る劒は何を見付けん
　葛おしわけて壁に詩を書
月を待けはひもにぐし裏坐敷
　中居が釣た沙魚はぴんしやん
義盛に和田の身の上ひよろついて
　ひそかに御意を江間の小四郎
漏刻の水も澄きる丑の時
　松に琥珀の風氷る聲　宇梅

二ウ

禪僧に折ふし逢ふも藥也　後且
　蕎麥と悟つたすとゝんのとん　金龍
一ヶ村みな正直な家來筋　岱山
　氏子と中のよい御託宣　猫帳
住メば京こと更花のみやこ人　竹護
　春のにしきは柳から織ル　召波

春慶引　明和八年作

蕪村と同じ巴人門の宋屋嗣席として俳諧点者となつた武然は、年々『春慶引』と名附る歳旦帖を出して居た。明和九年の『春慶引』は「聖節　其中で常につかふをはつ硯　武然」を巻頭に知己及び一門の發句・連句をあつめてある。その中に端作りに歌仙と置いて此の七吟連句が載てゐる。武然は望月氏、蓮日庵、又、方寓山人の号があり、京御幸町通丸太町に住し、貞門系統の舊点者とも蕪村一派とも交際して居たのである。本歌仙の作者竹護は後の嵐山、馬南は大魯、猶、多少といひ、五雲といひ、孰れも蕪村・太祇の親近者なので、この一巻は蕪村系統の色彩が強い。（和露文庫本）

歌仙

歳はいはかくし題なり衣くばり　多少
　春をまつ氣のうち揃ふ友　武然

うつす松望む處へ枝たれて　竹護
にへたつ釜のあらいさぎよや　馬南
銀屏にうき雲わたる月の前　蕪村
よんべはじめて雁を聞候　五雲
ウ故郷の噺にこぞる船の秋　春武
供あつかひも絲割符衆　少
法の場掃除は常の事にして　然
置失ひし篳篥の舌　護
朝の雨そこら濡して晴にけり　南
合歡に吹るゝ鬼鹿毛の汗　村
新らしき忍びがへしのするどさよ　雲
おもひ切夜のひとつ雷　武
覗の前阿房に成てくらす也　少
華見にまかる船のこしらへ　南
入方を忘れて殘る春の月　護
けふも雲雀のあがる平城　然
ナ德本は百姓駕籠にゐねぶりて　村
有つき早い日蓮の筆　少

婿禮も師走のどつさくさ紛れ　雲
よい機嫌じやと笑ふ十炷　執筆
こはり腹廣き座しきにイみて　南
此近邊の山ほとゝぎす　村
化そふな榎茸たつ五月雨　少
平家の寺の跡の有さま　雲
船ごに上つて豆腐捜すなり　然
破れ太鼓の時も違へず　南
御在國こは珍らしの月見臺　雲
茶道ひとりの秋の夜すがら　武
ナウ身に馴ぬ袷にむしの聲かれて　南
寶づくしの彫物にあく　村
我ゝが氏の神とはいかめしき　少
盛ならべたる處强飯　然
植込んで春も奥ある華の宿　村
往來の音も斷ず永き日　筆

紫狐庵聯句集　明和九年作

乾氏の解説によると寺村家の『紫狐庵聯句集』に前に擧げた『明和辛卯春』の手稿の次に、翌年即ち『明和壬辰春』として蕪村の三つ物及び春興「陽炎の」卷と「朧月」の卷と二歌仙を掲出してあるさうで、前年のと同じく歳旦帖を出したのだらうと推定して居る。「陽炎の」卷の作者竹護の嵐山は系統不鮮明であるが、馬南の大魯・几董・子曳の三人はちやき〳〵の高弟であるから、乾氏の説の如くであらう。「朧月」の卷は無記名の爲め獨吟のように疑はれるがさうではない。やはり連中との合作で記名を省略したのだらう。乾氏の「蕪村と其周圍」から轉載したのである。（京都寺村助右衛門氏藏）

其の一

明和壬辰春

神風や霞に歸るかざり藁　蕪村
え方にむかふ闢の戸びらき

其の二

山葵生ふ岩ほも辛くしたゝりて

春興

陽炎の木づたふ梅のすはえ哉　子曳
遠かた人を我窓の春　蕪村
手の奴足に二日の灸すへて　竹護
强てすゝめの飯を喰きる　馬南
盃も入さの影と成にけり　几董
霧に埋る小家四五軒　執筆
秋深く門田の水の落のこり　村
邪魔を預ける木綿風呂敷　曳
むつかしの夫婦なりしが老にける　南
すがた海老屋はよき浮名ぞや　護
氣違の同じ處にたそがれて　董
施行が濟〆ばほろ〳〵と降　村
これやこの難波の四天王寺也　曳
隙さへあれば箒はなさぬ　南
神さびるやうにと穗垣眞柴垣　護

有合せたる有明の月　斗文
猿叫ぶ秋の山邊を花靱　南
　我住里は柿のもみぢば　董
瓢簞のうき身苦のなき小傾城　曳
　箸のこけたる事も灰占　護
扨是より源氏廿チに成給ふ　村
　醫者を替たりや酒のめと云ふ　南
いや寒みあられのとやむ音すなり　董
　一條もどり橋で小便　曳
弓取のけふも財布を打はたき　護
　あはや只今落る田樂　村
閉講とべたと障子に書れけり　南
　風よく薫る布の綻む　董
とろ〳〵と合歡の葉ごしの二日月　護
　馬もろともに御宿申さん　南
伊豆の波引ヶば相撲にどうと打　董
　いさしら雲のかくす金山　村
定紋の幕にかゞやく夕日影　曳
　硯持せて墨優に摺る　護
鐘の聲寢て見る花の枕にも　村
　世をあたゝかに暮す凉及　南

其の三

朧月大河をのぼる御舟哉　蕪村
　千もとの柳四五本の、松
織物も半ばに春やたちぬらん
　胸あはぬまで懐の書
棟梁の眠りを覺すことなかれ
　しづかに聞ば苔のしたゝり
葉櫻に老の弓取紫して
　草鞋ながらの繼句半折
冷飯もありのすさみの二人前
　六疊四疊かりにるにけり
能きぬを着つゝ夢にや通ふらん
　言下に悟る美僧來哉
風の研へらしつる五劍山
　夜はくま〳〵にのこる金の間

正使より副使の文の花やかに
　矢剣の橋や水ぬるむころ
春雨も海老にるほどよ三日の影
　頭陀をかくして留る桃青
斧の音碓の音鞠の音
　日和がようておそい晝食
川普請奉行の杖に蛇のきぬ
　不かつかう成る無本寺の門
赤下手の鶴の巣ごもり吹かけて
　瘡はかいても二萬石買
すり鉢の底へ受行有馬山
　新参者の夜なべほのめく
商ひもあはぬ昔がましどやもの
　和泉河内へ通ふ近道
鶏を箕であふぎ込暮の月
　持佛の扉ぎいと秋風
ウやゝ寒く疝氣睾丸へとぢこもり
　隣村でも二子産けり
狼藉に繪馬に繪むまを打つけて
　らうそくをつぐ筒井一來
草臥た花見戻りのよいさつさ
　そりや又そこに苗代の水

其雪影　明和九年作

几董が其の父几圭の十三回追善に梓行した『其雪影』中の一歌仙である。蕪村・几董・竹護の三吟で起して、擧句の花に至つて馬南が顏を出してゐる。勿論几圭の追善の爲め興行したのではないが、連句の技倆に於ては、蕪村をして後生恐るべしの嘆を發せしめた几董が中軸になつての歌仙であるから、蕪村の捌いた若しくは一坐した連句の中では傑れたものゝ一つである。（大阪水落庄兵衛氏藏本）

欠〳〵て月もなく成夜寒哉　蕪村

秋しづかさに謡一番　几董
やへ葎酴醿漉賣も見かぎりて　竹護
遠-山高く遠-山低し　村
細風に水主も烏帽子を着たりけり　董
日記も扇に書てことたる　護
究竟のこのした陰よ藤若葉　村
魚荷の蛸を所望して見る　董
逗留ものらりくらりの惟然坊　護
よい葬禮に大津八町　村
冬空の七ツも聞ず夕ぐれて　董
なれ衣濯ぐ波のうね〱　護
戀ぐさの何をたねにや云よらん　村
ともし火消へて春の夜の月　董
憎まるゝ烏も花の森へゆく　護
獨活の苦みも大原三唫　董
用の有時は童（ワハベ）の見へぬ也　村
疱瘡神の小言はじまる　護
ナ土佐駒に光輝く鞍鐙　村
五日の風のわたる葉ざくら　董
かはらけの干間うつくし狭莚に　護
書記も典司も放参の体　村
狸とはしりつゝも又碁を圍　董
身は人質のとしも去ヌめり　護
一奏わすれぬ我を憐て　村
戀哥と見ゆる盞の裏　董
ゆく水に月流れとてや竹床几　護
貧乏村に鹿を追ふ聲　村
肌寒う和尚の疝氣揉で居る　董
けふは術が二人まで來た　護
ウ長家中晝飯時と成にけり　村
降そゝくれて仕舞八専　董
綻びも男の縫ふた旅ごろも　護
今に懇意を捨ぬ大晋　村
花二代またく色香のおとろへず　馬南
すぐな流にみつ楽川茸　執筆

春慶引　安永元年作

安永二年の『春慶引』は前年と同一体裁の武然とその一派の歳旦帳で、墨刷のさし繪と色刷の模樣畫などを插んでゐる。その歌仙の一卷は蕪村の發句で武然の脇、竹護は嵐山と改め、五雲は必化の別號で前年の卷と同じく如はり、馬南の代りに几董が新規に入つてゐる。此の六吟を試みたのは發句の題から見て前年の歳暮であると思はるゝが、明和九年は十一月安永と改元されたので、こゝでは改元後の作と見て置く。（和露文庫本）

歌仙

行年の女歌舞妓や夜の梅　蕪村
　すがたを忍ぶばかり寒聲　武然
二十荷と十荷と魚荷群ゝて　多少
　丸木の椽のそのみそのまゝ　必化
曇りても晴ても月の名は高し　嵐山
　秋おもしろく書よごす日記　几董
ウ初雁のわづかに人をなぐさめて　然
　草履でゆけば沓で出向ふ　村
白妙に散盡したる檎の花　董
　いかさま夜やり日やり番匠　山
かまびすき世や常釜を耆とは　少
　呑子羽織の燧から俗　然
きぬ〴〵の寒さもともに殘る月　村
　すは春色も廿日過から　少
塔中の普請も華の咲迄に　然
　雷に裂れたあとの寄生　董
あらがねの土に汚れて二三代　山
　白刹うらやみたまふ藤房　村
ナ折ふしの祠詣でを腹へらし　少
　一艘つなぎ捨し裏門　然
片脚で寐かゝる鶴に山おろし　村
　翌の法問誦して見るなり　山
とほし火のもとに火鉢が消へて有　董

かゝる師走の果に長尻　少
觸狀も曾我中村は垣隣　山
木綿を着れば暑き初秋　董
抱子より負ふ子の拜む三日の月　化
質屋も見ゆる里の露霜　村
讀うりのつまる所は戀にして　然
占ひく櫛のたしなみを出す　山
ナウ
更過てどちへもつかぬ鐘の聲　董
のがれ所や山崎の町　少
返し遣る傘に狂歌を書付て　村
獨按摩の手長あし長　然
華に暮はなに明たる方百里　山
春の錦に配るつばくら　執筆

紫狐庵聯句集　安永二年作

現存する『明和辛卯春』と同然に、歳旦帖として配本されたであらう三つ物及び歌仙二卷で、寺村家で乾氏の發見した『紫狐庵聯句集』に記してあるさうで、「蕪村と其周圍」にあるものを其のまゝ輯載したのである。三つ物の發句は蕪村の全集類に見當らないもの、春興の四吟歌仙は別として、「松下の」卷には作者名がないので獨吟のようでもあるが、連衆の名を手寫して置かなかつたのであると見るのが妥當であらう。（京都寺村助右衞門氏藏本）

其の一

安永癸巳

錦木のまことの男門の松　蕪村
ねよげにみゆる三符の福はら
千金の夜は泥引にくれかねて

其の二

春興

紅梅や笑へばかくす猿の尻　良佐
春の夜深き御伽奉公　蕪村

雪解の空にしられぬ音聞て　嵐山
橋なきよしを駕へ尋る　几董
晝日中敲く門あり月の友　村
柳に早く秋は來にけり　佐
ウ
玉祭る比にも神は在つゝ　董
情がましき明星が茶屋　山
綻の無心に娘の名を問て　佐
ほたんに十日遲い芍藥　村
待鳥は啼ぬに扨もぎやう〳〵し　山
所望して來る船頭の味噌　董
此邊に住む金持と御覧ぜよ　村
人こそしらね月は朧に　佐
行春の曉寒き花の宵　董
蛙鳴たつ公家の本陣　山
牛馬の行來とめよと奉行して　佐
近き淺間を餘所に見る也　村
ナ
八句の腰をのさんとたつか弓　山
都ことばの女十人　董
空灶の空恐ろしく小夜更て　村
風颯々とあられたばしる　佐
手負猪旅僧靜に身をかわし　董
たゝきあつめて百石の村　山
横にさす朝日の中の茶の畑　佐
岸こぐ舟に角倉殿　村
連歌にはおもしろ過た趣向也　山
夜半に物喰ふ秋と成ぬる　董
露の月在番城の木間から　村
麓へ遠き雁の道筋　佐
ニウ
晒干す邊りは風も白妙に　董
あそぶ事には男一疋　山
無理やりに刀さゝせて追下ッし　佐
千秋樂の出そこない也　村
八重に咲梢は母屋の花盛　山
乙鳥の巣に並ぶ蜂の巣　筆

其の三

松下の障子に梅の日影哉　蕪村
道あるさまやつくし生ふ庭
すり鉢を主客の間にきつたので
硯の庭を拂ふ羽箒
くれの月脊戸へ出れば宵の月
蚊にこがれ飛秋のかはほり
鮎漉て水上遠くおもふ也
玄番が山の薪代る音
物數奇の餘り一字を閑碁して
比は卯月のあま茶〲
牡丹見て又芍藥の物をなし
これ唐土の傾城の文
便船中ッ大き過たる船ながら
人家はるかに月は朧に
遲ざくら香にせまりたる花咲て
春眠たしと歩をうつすらん
能キ衣みな弟子共に得させぬる

明智自制札を書ス
皐月雨雲と見るべき雲はなし
普陀落山に近く漕寄る
握り飯天より給ふ心地して
俄ふしんの屛二十間
愛聟の馬から落るびんなさよ
しげき立居の女かしこし
琴の裏など淺間しき荒削り
時雨にともす古道具市
小坊主は沙汰ある狸ござんなれ
聯句に罷る宇都の宮守
晝過ぬ七ッさがりぬけふの月
古酒一德利新酒一樽
毛見の慈悲山を懸て目八分
竹をめぐりて濁江の魚
鑄直した鐘のうなりの氣に入ず
圓座に眠る半日の閑
もとの名は金持と聞花の主

汲ぬ井に鳴蛙老たり

几董遺稿　安永二年作

『蕪村一代集』の編纂に多大の後援をされた川西和露氏の藏架する几董遺稿の第三册、「安永癸巳の春、又草稿を改めて、あらたに筆を試」と發端に記してあるものに收めてある。此の歌仙を記す前に

遠きちかき國〳〵の諸子とともに、東山禁睡虎亭にて一日俳諧催されける時

言草の葉末も動く青嵐

連衆八
みちのく 呑溟　仙臺 丈芝
武州 西羊　越後 一音
浪花 旧國　京 蕪村

右にて歌仙俳諧なり

と几董は備忘的に當時の事を記してゐる。本文は和露氏の所有となる以前遠藤小五郎氏から借覽筆寫し、乾氏その他にも貸與したものに據つたのである。（和露文庫本）

諸國の騷客にいざなはれて、下河原の邊なる睡虎亭に會す

萍を吹あつめてや花むしろ　蕪村
涼しくやどる月の川面　呑溟
勅使にも女翁の罷出て　舊國
撰びし廿三日めでたき　丈芝
初雪の客さりげなき朝ぼらけ　几董
脊戸を明れば見ゆる近道　蕪村
ウ
一つまみ木挽に能茶入て遣　呑溟
（僧）楞嚴經の外は默〳〵　國
夜の鵆啼捨ぬこそあはれなる　芝
百里あなたの旅思ふ秋　董

兼題の月に烏帽子の落かゝり　國
大キうなつて菊の口上　溟
我家のなき故郷へ歸り來て　村
水せく石のよふさゞれたり　芝
鷺一羽とまりはぐれて下りて居　溟
糊こき文をつぶやいてとく　國
花瓶の花散盡す妹が許　董
佛の日とておりにさはらす　溟
二 陽炎と千石船に何を焚　國
今の國史も笠嫌ひ也　村
鷲の羽の落散る道に杣が聲　芝
罰利生ある俗名の神　董
角入るともかはらしの金打し　一音
幸流の時の少ししほれて　國
似合しや蒲の莚に伊与簾　西羊
横日に光るふらすこの魚　溟
物喰て痩るいぬきに守りが付　芝
檀紙の反古のうや〳〵しさよ　音

宗達の屛風露けき寺の月　村
茘枝に楊枝付て出されし　羊
ウ むら雨の晴てははらり又はらり　國
畫の狐の貧しくも鳴　董
中わるき軒を並べし八庄司　村
青きをすぐる元日の松　芝
花守の祖父をことしも年男　音
一時に來る第一の風　羊

右満坐

此ほとり 一夜四歌仙　安永二年作

安永二年九月、蕪村は几董及び伊勢から上京した樗良を携へて、京都油小路の旅寓に病臥中の竹護窓嵐山を訪ひ、此の一夜四歌仙を興行したのである。嵐山は和田氏、江戸の人である。蕪村の發端の言葉に「あるじの翁は」と嵐

山の事を述べ、その病衰の爲めに「おのれには句をゆるし得させよ」とて頻りに固辭するを、ともかくも賺し拵へて四歌仙滿尾となつた次第が見えてゐる。嵐山は同月廿四日故人となり、これが生前のかたみの俳諧となつたのである。再刷本の題簽には「一夜四歌仙」とあり、「蕪村七部集」亦同然なので、題名を確證されなかつたが、川西和露氏の所藏初刷本は、

此ほとり一夜四哥仙　全

と、蕪村筆の題簽が完全してゐるので、發端の「此邊と題して」といふ語が明確になり得たのである。無爲は樗良の無爲庵、高子は几董の高井氏の略稱である。（和露文庫本）

一夜四唫發端

秋の日の暮よりくれて、いとゞ雨さへしきりなれば、窓の燈かげもなつかしき油小路なりける幽居を敲て、嵐山叟が病中をなぐさめんと、百鬼夜行のあやしきをかたり出て、かの東坡居士が物好に倣はんとすれば、あるじの翁、耳うちふたぎ、いかで四唫流行のおかしきには、とつぶやきけるにぞ、おのづから狐狸のふしどもゆかしくて、萩に薄とわけまどへば、無爲は夕の秋をかこち、高子は舟なき旅を愁ひて、とみに膝抑のはいかいとはなれり。やゝ半過行頃、おの〳〵調べの同じきをよろこび、腹つゞみ打ならし無爲菴

秋のくれ泣を此日の遊び哉

さて、あるじの翁は、このほどのいたはり猶堪べくもあらで、おのれには句をゆるし得させよ、と頭巾まぶかに引かぶり、おどろおどろに毛おひたる古きしとねの八疊には、得ものべあへざるに這のぼりつゝ、やがて鼾引音の聞ゆるは、例の狸寐るりにはあらで、そこら喰ひこぼしたるよひ茶・小豆餅の狼藉なるもうしろめたけれ。兎かくして三更の鐘響く頃ひ、四卷の哥仙なりぬ。袖にし歸りて夜明るまゝに打かへし見るに、よべの小判に引かへて、柿の古葉の古くさきに似たれど、何とやらんむかしの人のかほりもあれば、橘屋とはかりあはせよと、

あからさまに此邊と題して、橘仙堂に得させぬ。

花洛　紫狐菴蕪村しるす

四歌仙　其一

薄見つ萩やなからん此邊り　蕪村
風より起る秋の夕に　樗良
舟たへて宿とるのみの二日月　几董
紀行の模様一歩一變　嵐山
貫之が娘おさなき頃なれや　良
半蔀おもく雨のふれゝば　村
さよ更て弓弦鳴せる御なやみ　山
我もいそじの春秋をしる　董
汝にも頭巾着せうぞ古火桶　村
愛せし蓮は枯てあとなき　良
小鳥來てやよ鶯のなつかしき　董
さかづきさせば迯る縣女　山
若き身の常陸介に補せられて　村
八重のさくらの落花一片　董
矢を負し男鹿來て伏す霞む夜に　良
春もおくある月の山寺　村
大瓶の酒はいつしか酢になりぬ　董
五尺の釼打おふせたり　良
ォ滿仲の多田の移徒(徙)日和よき　村
若葉が末に沖の白雲　董
松が枝は藤の紫咲のこり　良
念佛申て死ぬばかり也　村
我山に御幸のむかししのばれて　董
迯たる鶴の待どかへらず　良
錢なくて壁上に詩を題しけり　村
灯を持出る女麗し　董
黑髮にちら〱かゝる夜の雪　良
(原註)訴うたへに負ケて所領追るゝ　村
日やけ田もとしは稻の立伸し　董
祭の膳を並べたる月　良
ゥ小商人秋うれしさに飛歩き　村
相傘せうと媼にたはれて　董
いにしへも今もかはらぬ戀種や　良

何物語ぞ祕めて見せざる　村
象浮の花おもひやる夕間暮　山
朧に志賀の山ほとゝぎす　董

其二

白菊に置得たり露置得たり　嵐山
殘そめぬるけさの月影　几董
借馬に秋を凉しくまたがりて　樗良
濃酒ありと婦の申けり　蕪村
小暗きと明キと燭の二所　董
手こねの香爐打守りつゝ　山
かくて世に四位と成ウべき身なりしを　村
野上の君が色にしづみぬ　良
中垣の障子に蠅の二ッ三ッ　山
ちかくも神のとゞろ鳴來ル　董
よき僧を乘せて去リぬるつくし船　村
戎の亂聞もかなしき　良
雪に似て寒ふはあれど窓の月　山
捨扶持曬ふ末の秋かな　村
思ひ出てうかれ出たる牛祭　董
あとさりげなき度拍子の音　山
散つくす花一蒔のながめにて　良
雨はれてやゝ暮遲き也　董
春の風呉國の貢わたり來ぬ　村
鼻へ出たる宿老の知惠　山
人〳〵の沙汰となりぬる我戀は　董
小袖賣ルとも世を恨ムまじ　良
精進のゆりし佛の忘られず　山
けふや切べき牡丹二もと　村
敵陣の和哥の書物を盜ミ來て　良
星の光の曉ちかく見ゆ　董
今はとて舟幽靈や失セぬらん　村
心ひそみて太刀をいたゞく　丶
此頃の雨後に晝見る月なれや　董
師の喪にこもる山陰の秋　良
喰ハばや百里屆し佛手柑を　山
掃除仕舞ばうぐひすの來ル　村

燈籠に火の殘たる朝霞　良
　花不レ言春深き神　董
人老ぬ人又我を老と呼　村
　泥に尾を引龜のやすさよ　良

其三

戀〻として柳遠のく舟路哉　几董
　離〻として又蝶を待艸　蕪村
のどやかに菴ひとつを住捨て　嵐山
　芥のどき身ぞ寶なる　樗良
よき程に夜はしづけき七日の月　董
　虫の選びの沙汰の近〳〵　山
古館秋の千ぐさに鎌入レて　村
　高きに登り物思ふ身の　董
なさけなや戀路の鬼に追れつゝ　良
　たとき御經を手にも得取ず　村
凩の今吹やみて初夜の鐘　山
　羽黑の鷹の礒へ落來る　良
半弓のあまり强さに弛べ居て　董
　宦袴の行儀打わすれけり　山
垣越に麥めしくるゝ櫃ながら　村
　梅の青葉に花の白妙　董
秋風の筑紫に奈良の春の月　良
　ひとり香きく夜や霞むらん　村
かけ引の中にもおもふ子の行衛　山
　名の惜しきさへかなしかりける　良
鳥邊野にかたみの衣を燒すてん　董
　良家の恩にほのめきし身は　村
此頃の酒の齒にしむ旅ぞうき　良
　尾花がもとの石に火を打　董
山賊の月夜に塚をあばくらん　村
　いづこや露の虎吼る聲　良
やごとなきかたをいぶせき我閨に　董
　都の落首文に聞ゆる　村
米五升芋三ッ四ッにとし暮て　良
　老たる人の松明ともし行　董
淀鳥羽に牛の病のはやりつゝ　村

變化退治のあとの吊ひ　良
曉の北の御門を開きけり　董
何のいそぎぞ雨の晴間に　村
おのれのみ花見男のあくがれて　良
たもとを染る春の山風　山

其四　樗良

花ながら春のくるゝぞたよりなき
やがて卯木の垣の山吹　嵐山
摺鉢の獨活のあへ物召れけり　蕪村
既滿ぬる連歌一折　几董
煤竹に十三日の月さして　山
盥をねぶる門口の牛　良
いゐにうへし旅の御僧を連かへる　董
眞野の長者の齡かたぶく　村
雨を見るために植たる槇一木　良
畫具の皿に裾引て行　山
ふるされし身はなか〳〵に嬉しくて　村
忍ばでしのぶ宵の間の月　董
上加茂の水ひやゝかに打わたり　山
萩が中なる琵琶の音聞　良
白綾の袂うるみて見ゆる也　董
ことさら宇佐の神無月にて　村
さびしさや紅葉散たへて夕時雨　良
狐釣らんと出る芦の家　董
黍團子三日の粮と見えにけり　村
遊女を隱す董のともし火　良
鋮立の手に恥かしき戀衣　董
ぬれつゝもどる猫のびんなき　村
さら〳〵と庭の木賊に風の音　良
新聖靈の給仕する也　董
能住居秋の暑さのゆかしくて　村
月を情の旅の宿かる　良
世のうへの人のほだしもいとはれし　董
頭ラおもくて居ると答へよ　村
銀の鉢にもちゐを送ラれて　良
長はしどのゝ軒の長雨　董

からたちに成ッても花の匂ふ也　村
　母の剃髪けふや祭らん　良
啼鳥我もきのふの我ならず　董
　暮の街を水流れ去る　良
花に明ヶ仰に鎖す柴の戸に　村
　主客の睡長閑也けり　執筆

安永癸巳九月發行

石の月　安永二年作

不夜庵五雲が太祇の三回忌に上梓した『石の月』に、呑獅亭で興行した脇起し歌仙として載つてゐる。詞書の太祇師云々は呑獅亭で薤やの發句を詠み、それを短冊に認めてあつたのを思ひ起して、脇起しの發句にしたといふ意味である。七吟一卷、蕪村一門及び多少を加へて句々の推移・照應ともに凡作ではない。『石の月』は『天明名家句選』に收めて置いたから參照されて欲しい。（露文庫本）

太祇師いつの秋にか有けん、我亭にて即興の短冊あり

薤やはかなさいふは跡の事　太祇居士
　人のこゝろの撓む白露　呑獅
三日月の舟もろともに棹さして　五雲
　有やなしやと振る五升樽　嵐山
親も子も鷹野の供に召れつる　蕪村
　霞こぼして雲は晴行　几董
茶にかうじたるよ詩にある住居也　多少
　宗祇をとめて輕い寐道具　吾琴
臼うたも闘のひがしは聲高に　呑獅
　杉苗匂ふ曉の雨　蕪村
千早振神に仕ふる古烏帽子　嵐山
　臺に立たる若菜見初る　五雲
人のとふまでに細りし食の味　几董
　今日で幾日の碧巖の席　多少

月朧町の中行流川　吾琴
　八聲の雞や一聲の雉子　呑獅
花は櫻さくら散ともよしの山　几董
　音色も若き法螺の厚總　吾琴
莚帆も追風うけて奇麗也　五雲
　金の箱を積かさねたり　嵐山
日來我が小太刀うれしき更衣　蕪村
　名もなき樹〳〵の立伸る頃　几董
藥鑵とはあまりの事の藥好　嵐山
　豐に翌の御幸觸來る　五雲
世の中は爰に日和の譽譏　多少
　能キ鎌ほしく思ふ百性（姓）　蕪村
錦木ゝのこけてわびしき露霜に　呑獅
　恨顏なき月の松しま　多少
句作りのおかしからざる秋くれて　几董
　すなをにはしる亭の戸障子　五雲
愍なくすしも年の老にける　吾琴
　あはや焦ぬとみゆる烑（挑）灯　几董
興盡る頃の咄しに實が入りて　多少
　朝日に消ぬる雪の玉水　呑獅
中〳〵に遠きが花の友なれや　蕪村
　摘む初むかし挽後むかし　嵐山

明がらす　安永二年作

大魯の三十三回』霜月十三日』の大魯宛手紙に蕪村は「愚老三十年前の作に、かしらにやかけむ裾にやふろぶすま　とわび寐の床に屈伸をさだめかねけり」と書いて居るから、此の兩吟の發句は蕪村の舊作である。几董の『明がらす』には「於二夜半亭一兩吟」とあるので、師弟寒爐を擁しての懷舊にふけり、「霜に聲あり我床の下」の几董の脇句も、師の意中を汲んでの作であらう。潁原氏が原本より筆寫し『中興俳諧名家集』に『明がらす』を收める際、校正をしてくれたものに據る。（京都寺村助右衞門氏藏）

於夜半亭兩唫　三十六句

頭へやかけん裾へや古衾　蕪村
霜に聲あり我床の下　几董
ふしゝげき竹を簀に組わびて　丶
日頭の狸來ずなりにけり　村
いざよひの心地更たり宵ながら　丶
風ひや〳〵と漕かへる舟　董
穢多村に續きて秋の帘　丶
施行のあとの箒塵取　村
告子に才ある聟や撰らん　丶
三たび迷へる哥の占かた　董
燈盞を鐘鳴方へかたぶけて　丶
此夜樂天江州の司馬　村
隣から雪折竹を起しつゝ　丶
立小便の答へ高〳〵　董
京橋や河内路かすむ昏の月　董
花落鳥啼開帳の損　村
とろゝ摺ル音春深く聞ゆなる　丶
山をはなれて坂にとりつく　董
鑓持の疝氣いたはる艸枕　丶
冬の日なたを見失ふたり　村
古家のひづみ直しぬ兎角して　丶
小社のぬしの付ィて狂へる　董
みじか夜を倒臥たる禿ども　丶
釣瓶に魚のあがる曉　村
奈良の鹿物くるゝやと待兒に　丶
なきあと訪ふて露にイム　董
椎の木も月洩秋と成にけり　丶
離宮尊とく守護申つる　村
いでさらばひさげ(原註)提器の酒を盡べし　丶
もし此邊にちか道や有　丶
たゞ獨り法師なる身の田を植て　村
翌も降べく雲かゝる峯　董
關札に鳶居させじとおもふらん　丶
上下着たる百性の顔　丶
ありふれた鯛の料理も花の時　丶

せみの小川の水ぬるむ春　執筆

春慶引　安永二年作

此の巻は安永三年の「春慶引」に出てゐる。一坐の顔は大してかはりないが、『さびしなり』の著者一音がめづらしく同坐してゐる。一音は嘯居士、『春慶引』の中に「人めの花手さすと折れし老木かな　越後一音」とあるように越後の人、涼袋の門人である。春堂も蕪村出座の連句にははじめてゞある。此の連句は一順づゝ七吟満尾してゐるが、歌仙を催したのは前年の暮であると推定してよい。發句の煤拂ひ・脇の氷、ともに冬季で、新年の景物でないからである。（和露文庫本）

歌仙

烏帽子着て煤拂ひたまふやしろかな　五雲
よるべの水の氷動かす　武然
朝風にふくら雀のふくれたり　春堂
秣かいつゝ宵さしつゝ　蕪村
月の庭大百姓とうち見へて　多少
無理な手を取角力なりける　几董
祿賜ふ司あらそふ秋中に　一音
兎まれかくまれはてしなの酒　雲
若き身の平家一ふし語り出て　杵
妾なるかも筋違に行　堂
黄昏の煖簾はづせば暫くは　然
節句のためしに許す棊象戯　少
ともづなは只かりそめに結ぶらん　董
月おぼろなる紅毛の顔　音
散華を案じ〳〵て寝てしまひ　堂
春やむかしのふるさとの味噌　村
あさましき淺間おろしの荒畠　音
祈れば祟る祠なりとて　然
ぐし〳〵とふるされし身の置所　雲
たゝまく欲しき芳野廣東　董

寂寞と晝飯過の眞珠庵　村
　さもあらばあれ逆剃にせん　堂
つゞけなけ山なき里のほとゝぎす　少
　しと〳〵と編蒲の小むしろ　音
施すといふはふりにし藥にて　然
　能僧あれと寺を守ッゝ　村
降雪にたゞ今植し松の色　堂
　おほんたからに冥加なき御意　雲
初鷹のしのぶの山の月なれや　董
　かねて望みのころもうつこゑ　少
鐵鉢に栗の雑りしおもしろさ　音
　記念の華のいつとなく減　然
雲盡て眼下に海の靜なる　雲
　腹干す猿のすべりしだるに　堂
是は〳〵駕籠をかゆればはなの友　村
　つゝじが中になつかしき道　執筆

紫狐庵聯句集　安永三年作

歳旦の三つ物及び蕪村・一音の兩吟歌仙である。百池手記の『紫狐庵聯句集』の安永三年にあるさうで、乾氏の『蕪村と其周圍』に發表されてゐる。氏はこれで安永三年も歳旦帖の配本された事と認定してゐるが、その次の「いざかたれ」の第三までの端物、それと『なつごろも』中の「時鳥」の卷の四吟を掲げ、いづれも夏季であるから歳旦帖の樣式と相違するので、聊か不審である。ろくろッ首の怪談で知らるゝ一音法師との兩吟はおもしろい。（京都寺村助右衛門氏藏）

其の一

安永甲午

花の春誰ソや櫻の春と秋　蕪村
　若くさの戸の二日月そも
雉子啼孤村の夕水見へて

其の二

春の夜や宵曙の其中に　蕪村

　蝶はものかは夢のうき橋　一音

いつまでか白散くさき瓶子にて　丶

　傅人(カシヅキ)よ家に久しき　村

二ふりの太刀みじかきを愛めり　丶

　遠に驛路の鈴冴る月　晋

ウ
隈笹に網代の氷魚を打覆　丶

　けふの主は小堀遠州　村

かゝる時立寄べきか姥がもと　晋

　歌に負つゝ夜を恨らん　村

かつほ木や千木に左右はなきものを　晋

　佛乘せ來る唐土の舟　村

頓て薙鷹が白髪ときたれて　晋

　三たりの聟に三ッの駒牽　村

甲斐が根の雲斜なる夕月に　丶

　あかねさすかと見しは蕎麥莖　晋

わすれ花手折らじとする匂なき　村

　身はやつしろ(（原註）八代)の紙衣を着て　晋

ナ
よしさらにさよの中山命なる　丶

　よゝと請もつ一碗の酒　村

簞毛ものゝごとく匍匐て　晋

　夜に井を浚(サク)る里人の聲　村

祟り神今は跡なく成に皃　丶

　雜魚寝に似たる戀も有しか　晋

出家して猶うつくしと人のいふ　村

　いづこへ持たる女郎花ぞも　晋

文月や大路のさまのゆかしさは　村

　常娥の二字を靈山の額　晋

風顛居士に繒の衣まいらせず　村

　紙破れて糯亂るゝ　晋

ナウ
日當のよき岡の邊に棲(スミ)かへて　村

　若殿ばらの遠箭射ル見ゆ　丶

昆布卷の鯡(ニシン)しはぶる旅なれや　晋

　佐渡の聯句に海わたるべく　村

花の夢琴に涎のかゝり皃　晋

春の曙はるの夕暮　ゝ

其の三

いざかたれ又も葵の花の友　東武 客人

あこめが床に薫る夕風　蕪村

こゝかしこ山に背かぬ亭見えて

續明烏　安永三年作

几董の『附合手引蔓』に發句と脇の体を論じて、此の一聯を引いてゐる程、快心の作とされて居たらしく、安永五年板の『續明烏』に本文の如く掲出してある。たゞし大正九年伊藤松宇氏の許で一見した寫本『几董宿の日記』には「豆腐に飽て喰ふものもなく」の樗良の附句の後に、更に韵を次いで

我袖は少しの錢に重にくて　キ

海やゝちかく石を行川　村

飛ぶ雀の羽に影うつる朝の色　良

神に仕ふる老のあき　キ

露しもの古傘を捨かねつ　村

かれを春日の里へ宿かへ　良

起いでゝ落首よみくだすおかしさよ　キ

茶に汲水の淺くてに澄ム　村

なかなかに風のなき日を散る櫻　良

暮おそしとて欄に立　キ

とあるが、『續明烏』には端作りに春興廿六句と明記して、廿六句で首尾一卷せる風になつてゐるから、「我袖は」よりは氣に入らずして捨て去つたのかも知れない。『宿の日記』の通りとすれば、歌仙三十六句滿尾してゐる譯である。（大阪水落庄兵衛氏藏）

春興　廿六句

菜の花や月は東に日は西に　蕪村

山もと遠く鷺かすみ行　樗良

渉し舟酒債貧しく春くれて　几董
　御國がへとはあらぬそらごと　村
脇差をこしらへたればはや倦し　良
　簑着て出る雪の明ぼの　董
仁和寺を小松の里と誰かいふ　村
　戀しき人の馬繋ぎたり　良
葺わたす菖蒲が軒をしのぶらん　董
　雨にもならずやがて燈ともす　村
尺八の稽古ぐるりと並び居て　良
　賊とらへよと公の觸　董
早稲刈て晩稲も得たる心也　村
　天氣の續くあふみ路の秋　良
門前の舟とき出す月の昏　董
　弟子の僧都はよき衣着て　村
花の中家中の衆に行あひぬ　良
　歌舞妓のまねのはやる此春　董
永き日や蒔繪の調度いとはしき　村
　御法の道に心よせつゝ　良

古郷の妻に文かくさよふけて　董
　若大將に賴まれし身の　村
酒一斗牡丹の園にそゝぎけり　良
　日は赫奕と佳墨を摺ル　董
翌はゝや普陀落山を立出ん　村
　豆腐に飽て喰ふものもなく　良

宿の日記

安永三年作

『續明烏』の連句は三月廿三日の晝に作つた三吟で、その夜に入つて鼎坐再び三吟を試みた一巻は、『宿の日記』に「同夜漫興」として、前の巻の次に記錄してある。『宿の日記』は寫本で奧附に「文久二壬戌初夏寫之　主人　木間佳杏」とあるから、几董自筆本が別に存在する筈だが知れない。今は和露文庫に入つた几董の遺稿十三册の世に出た時のものにも、この

寫本に該當する遺稿は見當らなかつたので、早く散佚に歸したのであらう。本文は大正九年の手寫本により、同夜漫興とあるのを三月廿三日の日附を補つたゞけである。（東京伊藤松宇氏藏）

三月廿三日夜漫興

そば花もたゝずむ山路かな　樗良
聲ひやゝかに鳥のさへづる　几董
日暮〳〵むかし顔なる春の月　蕪村
あるじの貧を愛に宿かる　良
泌る湯に筧の水をさし入て　董
土用はけふの午の刻より　村
旅に病ム虱の衣脱すてむ　良
聞てよしなき人の爭ひ　董
二筋の素矢を箙に憐みて　村
水にとぼしき雪の奥山　良
榾の火に鳥の脂の燃上り　董
狂女を寝せる親心かな　村
憂中にうせたる人の名を呼て　良
嵐にのぼる月のかなしき　董
柿の木に鳥も舍らぬ秋なれや　村
芋にかへ置く百貫の錢　良
晦ぞと人のいへるもむつかしく　董
福原の京に我家はなし　村
難波津の芦火に寒き雪の暮　良
賣て置たる瓶喰に行　董
目ざましく博奕に負てしまひ皃　村
きのふ囉ひし鎧打着る　良
曉の川浪白く水增して　董
藤の若葉の空に雨降る　村
盃を天窓にのせて輿に入　良
施主のかしらは室の何某　董
雪隱へ隣の咄し聞ゆなり　村
逢ふて募りし戀の恨みか　良
白菊にしのぶは誰か月の影　董
濁りの酒を曲りして呑む　村

雁一羽袋に入てかくし持　良
關守る人は市で見た顔　菫
谷深く老木の花や匂ふらん　村
はるの狐の鮓喰に來る　良
夜は旣に卯月にちかき星の空　菫
しはがれ聲に便舟ヲこふ　村

なつごろも　安永三年作

曉臺の門人仙臺の丈芝房が上洛した時の四吟二歌仙である。丈芝房、号は白居、『奥細道』に「こゝに畫工嘉右衛門と云ものあり」とある嘉右衛門事畫号四鶴の後裔である。『なつごろも』には此の二歌仙の後に

故人南平、此ふた卷をふところにし梓にせばやとて訪來ぬる頃は、享和二ツのとしみなづきのなかば、うちつゞく夏の日のいたくひらめき、雲うちかさなり峰つくるかげ、しのぶべくもあらず。わづかに暑をさけばやなど、菅のむしろをゆづり侘ぬ。

といふ雄淵の附記があり、丈芝房から懷紙をゆづられて南平の所持して居たものである。南平の歿後文化二年出板になつたのである。

別に『花もよひ』(晋風文庫本)には「狐形庵の祖丈芝あらし山の一句に四吟の俳諧ありしを、けふの開にふとおもひ出し、此とぢものゝ序にかへしるし侍りぬ」と前書きして、『あらし山』の卷が載つてゐる。(和露文庫本)

其の一

卯月七日　於(書落)蕪村亭ニ會
長安万戸子規一聲

ほとゝぎす南さがりに郡ぐもり　曉臺
垣のあなたをみじか夜の川　蕪村
草たかき堘(アゼ)平にならさせて　丈芝
人の履たる足駄借るなり　几董
昏の月旅あきなひを急ぐらん　村

寫本に該當する遺稿は見當らなかつたので、早く散佚に歸したのであらう。本文は大正九年の手寫本により、同夜漫興とあるのを三月廿三日の日附を補つたゞけである。（東京伊藤松宇氏藏）

三月廿三日夜漫興

イば花もたゝずむ山路かな　樗良
　聲ひやゝかに鳥のさへづる　几董
日暮〳〵むかし顏なる春の月　蕪村
　あるじの貧を愛に宿かる　良
泌る湯に筧の水をさし入て　董
　土用はけふの午の刻より　村
旅に病ム風の衣脱すてむ　良
　聞てよしなき人の爭ひ　董
二筋の素矢を箙に憐みて　村
　水にとぼしき雪の奥山　良
榾の火に鳥の脂の燃上り　董
　狂女を寢せる親心かな　村
憂中にうせたる人の名を呼て　良
　嵐にのぼる月のかなしき　董
柿の木に鳥も舍らぬ秋なれや　村
　芋にかへ置く百貫の錢　良
晦ぞと人のいへるもむつかしく　董
　福原の京に我家はなし　村
難波津の芦火に寒き雪の暮　良
　賣て置たる飩喰に行　董
目ざましく博奕に負てしまひ鬼　村
　きのふ曜ひし鎧打着る　良
曉の川浪白く水増して　董
　藤の若葉の空に雨降る　村
盃を天窓にのせて輿に入　良
　施主のかしらは室の何某　董
雪隱へ隣の咄し聞ゆなり　村
　逢ふて募りし戀の恨みか　良
白菊にしのぶは誰か月の影　董
　濁りの酒を曲りして呑む　村

雁一羽袋に入てかくし持　良
關守る人は市で見た顔　董
谷深く老木の花や匂ふらん　村
はるの狐の鮓喰に來る　良
夜は既に卯月にちかき星の空　董
しはがれ聲に便舟ヲこふ　村

なつごろも　安永三年作

曉臺の門人仙臺の丈芝房が上洛した時の四吟二歌仙である。丈芝房、号は白居、『奥細道』に「こゝに畫工嘉右衛門と云ものあり」とある嘉右衛門事畫号四鶴の後裔である『なつごろも』には此の二歌仙の後に

故人南平、此ふた卷をふところにし梓にせばやとて訪來ぬる頃は、享和二ツのとしみなづきのなかば、うちつゞく夏の日のいたくひらめき、雲うちかさなり峰つくるかげ、しのぶべくもあらず。わづかに暑をさけばやなど、菅のむしろをゆづり侍ぬ。

といふ雄淵の附記があり、丈芝房から懐紙をゆづられて南平の所持して居たものである。南平の歿後文化二年出板によつたのである。別に『花もよひ』（晋風文庫本）には「無形庵の祖丈芝あらし山の一句に四吟の俳諧ありしを、けふの開にふとおもひ出し、此とぢものゝ序にかへしるし侍りぬ」と前書きして、『あらし山』の卷が載つてゐる。（和露文庫本）

其の一

卯月七日　於華洛蕪村亭ニ會
長安万戸子規一聲

ほとゝぎす南さがりに鄙ぐもり　曉臺
垣のあなたをみじか夜の川　蕪村
草たかき垜（アヅチ）平にならさせて　丈芝
人の履たる足駄借るなり　几董
昏の月旅あきなひを急ぐらん　村

天井はらぬ家のあき風　臺
ウ
南瓜の末三ッ四ッを取つくし　嵐
巖を下りし僧のおとろへ　芝
二の宮は襁褓（ムツキ）の内に御聲あり　臺
雨はら〱と朝日匂へる　村
鳥あさる爰は飛火の森とかや　芝
道におくるゝ女いたはる　董
身に添る守本尊をよすがにて　村
ねずみ猶鳴く明がたの月　臺
こぼれたる藥のしめりひやゝかに　董
節句鱠も心ばかりぞ　芝
花咲て貧しき家を明放し　村
岡の赤埴（アカハニ）麥のよく生へ　臺
ニ
殿原の碑もによき〱と雪解ぬ　芝
口とりあしき馬を借りける　董
このごろは暮るとみへぬ目となりて　臺
かたみの衣のおもきから綾　村
おもひなき人の諷へる聲かなし　董
ねぶさく中に礒家四五軒　芝
爰かしこ遠矢の行末求むらん　村
祿いとかろき根來一統　臺
甥來しと包ミさし出す枕もと　芝
野分やみぬと雨戸明させ　董
月くらき藪にのつそり放れ牛　臺
地子ゆるされし秋もいぬめり　村
ウ
ほつ〱と刻ミ立たるあみだ佛　董
鶯にとられし子のあはれ聞く　芝
宿をかす峠の茶屋の嬉しくて　村
むかし屛風をそろ〱と引キ　臺
命なり琴に替たる花一木　芝
春日に富て蝶の眠れる　董

其の二

四月十日　於ニ几董亭ニ會

あらし山松の四月となりにけり　丈芝
袷うれしく漱ぐ水　几董
訪來ぬる人に箒をまかすらむ　蕪村

少し奥ある竹の中路　曉臺
風あれしくらき空の有明て　董
入江のかたはひしこ引く聲　芝
土瘦てあら田の稻葉黄ミたち　臺
恩地が家來人もとがめず　村
雨しづかたはめに逢へる夜の隙　芝
梳れて落る髮をかこちて　董
匂ひ來る柑子の花の覺束な　村
岩本坊の羯鼓きこふる　臺
酒給びて從者戻れし月の宿　董
にぶき刄物に木賊刈見る　芝
いつかひく野飼の若駒人馴し　臺
立まふ振りもあはれ聟がね　村
門の花淡しくも日のさし入る　芝
二聲三こへ蛙鳴く晝　董
行春や御經書寫の墨へりて　村
母君つらく關のあなたに　臺
雲きれてかすかに闇の郭公　董

地黄畑に雨乞ふるころ　芝
藪寺の賴むかたなく打かたぎ　臺
長者夫婦の歩行よりの旅　村
酒ふくべ持る男にいさみあり　芝
白雲ふかく谺するのみ　董
月弓のかゝるや吳楚の際より　村
舟のたはれの風ほそき秋　臺
露の身と己をゆるすもろ寐して　董
闇にからすの何を啼らむ　ヽ
山おろし日枝の衆寮の煤や掃　村
眞春にせよと五斗のあらよね　ヽ
こらゆれば泣よりもいと目の熱キ　芝
くらきとほしを片隅にたて　ヽ
花に問ふ古き佛の侘しさを　臺
あたゝかなれば蜥ちよろつく　ヽ

つかのかげ　　安永三年作

夜半亭巴人の三十三回忌に、京都の盛住庵淨阿が發企編集した「つかのかげ」に蕪村の發句で此の連句が收めてある。百韻の形式で名殘の裏まで完備して居るにも拘らず、そのあとに四句追吟されてゐるのは、連衆の名前を百韻中に配り足らなかつた爲めの一策であらう。蕪村の社中は几董・子曳等で蕪村はたゞ發句の作者に過ぎないが、追善の俳諧興行には必ずしも作者の自詠でなく、二三の宗匠が打寄つて代作するのが例であるから、百韻中に蕪村の代作したものも交つて居よう。或は又蕪村の社中は同時に「昔を今」を編集してゐるので、お附合に發句だけ盛住に送つて附句の方は御免をかうむつたのかも知れない。『つかのかげ』は巴人の追善集中全く世間に知れなかつたもので、和露氏から特に貸與された稀本である。附錄の巴人が江戸から奥羽へ旅行した紀行は、巴人傳中に逸す可からざる好資料である。（和露文庫本）

普化去りぬ匂ひのこりて花の雲　と聞えしは晋子をいためる雪中菴の句也。玄峯居士にほひのこりて花の雲　とふりしは、雪中菴三十三回の集編りける時、宗阿翁獨吟なごりの花の句也。予其比や膝前に筆をとりて、師の半臂をたすけ、もゝさくらの編集なれり　されや日月とゞむべからず、飛雲の眼を過るごとく、頓テ又亡師の三十三回にいたれるにおどろく。

花の雲三たびかさねて雲の峯　蕪村
涼しき時におもひ出す陰　麗水
名物記それはそれ者の囮にて　梅闘
笑ひあまりを又笑ひけり　湖岡

野路山路越へて海邊の下屋鋪　寛留
ふりよき松の月にも障らず　南圭
月の爲傘て茶に合ふ囉ひ水　和水
晝來た柴に虫の聲ゝ　呂曉
ウ
馬士唄もすなをな律の風そへて　車香
暮うるはしき湊商ひ　嵐翠
狀の端に芝居のことも見るごとく　土髪
鈴にこたへる走女針女　尺布
うつゝなやあたら肥滿を痩たがり　雁啼
すまぬ辻占聞かず兒なる　子一
挑灯の影うつり行橋の雪　孤桐
洒に中よき伊勢講の友　富水
貫ざしに衛符淸らかな晝の月　書輪
揃ふて草の秋風ぞふく　和虎
名も聲もしられぬ鳥のわたり來て　桃唉
翌法問の寮の森ゝ　止白
鉢植の櫻も時を違へずに　武然
催す雨や春もしばらく　玉指

二
長き日も知らで銀もつ賤の足　桃序
境の杭に樂書はなし　鶴齡
野鴉を嶺の木の葉の吹立て　牛行
まだ十月の筧聞ゆる　漣月
窓白し傘松丸を起さばや　儿董
書むしろも織かけて朝飯　斗文
京も過ふしみ二の橋三の橋　子曳
飲まぬをともへ代參の供　李人
大名の立ていた跡鴫がたつ　久阿
むかし作りの庭にすむ月　貞雅
夜噺しに蒲團あてがふ秋寒み　二貞
醫者の坊主の藥くさゝよ　曲室
親の名を付ぬも兄の孝行に　來雨
義理と〳〵を幸の戀　杜兄
二ウ
云号有し中とは知らずして　雲蟀
ぐつと覗けと幕を吹風　青浦
仕過しと思ふも血氣ぬけてより　竺泉
握こぶしのとくる拱　壺樂

松の塵所化部屋ひしと閉ぬる　麗白
さゞ浪はしる冬の澤水　南雅
古戰場有しむかしの雪の月　李琳
降參に來て狂哥捧る　听曉
觀音はうき世の事の世話事し　米士
宿老持て白髮ほしがる　猿角
行盡す江南の津に米問屋　和光
誘ひに寄ば喧らしい留主　芦舟
然れども盛りに近き花を見て　嘯山
すべつた跡に蓬匂ひぬ　逸壺
三
氣は空に彥星以後の鳳巾　風穿
蔀を上て物買うてゐる　里頓
若尼の樒をぬらす袖時雨　汝享
能書の文の返事仕兼る　仙木
浪のうつ度に富士迠うねらせて　可笑
笠だにおもき旅の草臥　魯行
駕舁のはなしを聞て句に作り　露友
森のこなたを横に群鷺　可好

毒忌をするも病の數のうち　梅枝
かしや札とは無筆でも讀　湖鶴
砂道を走るやうなる新談義　和扇
朧豆腐に老の齒ごたへ　豐房
渡し守錢繫ぐ比月更て　橙雨
塀ほろ〳〵と柳散こむ　蔀雨
三ウ
殘菊にまた來る秋をおもふなる　季遊
瓢の酒の友のほしさよ　窓昔
辻能の塵ほこりなき遠音にて　麥翅
松に夕日のかゞやきにけり　晚年
中〻に檜皮の軒の建つゞき　吳雪
薰籠を洩る銘も大内　河星
嬉しいといふ言の葉は神代から　長禾
指を反らして扇子折品　鳴海
月待にほたる飛かふ付書院　來川
薄茶はみごと立る珍齋　秋石
絕頂に素こびた岩のちよいと出　家輔
風雅めいたる沖の釣船　梅里

ほんのりと夜も明がたの華衣　賈友
　城の太鼓のまだ寒げなる　明宇
（名）春の雨道者と行脚相宿に　剡山
　三里の灸も日課なりとて　聽雨
なまなかに合はぬ眼鏡を貸されては　富葉
　賢さへ唐の名畫名作　迁童
質藏の二階はいつも風薫る　由地
　小き窓の長みひらたみ　鋤月
またしてはあはせ鏡の手くらがり　素光
　少しは冶遊に落るたしなみ　雲里
若盛り奉公盛り戀ざかり　文艸
　朝精進の譯はしらねど　古鳳
何所やらに白木の臺のよごれても　秦夫
　間中の床に烏帽子簏[illegible]　桂舟
物事を怠たらしぬるけふの月　文維
　手がらを見する秋の賑ひ　其風
（ナウ）在祭雪踏の音の絶間なし　花イ
　次第に近う聞し賣聲　芭來
風そよとくゞり／＼て障子まで　以樂
　低めに草のどれも奇麗な　如風
牛の子にまた人立の夕間暮　文巴
　諠（マヽ）議もせずて醉のさめぬる　李流
植置る花の種猶道廣き　宗專
　末の榮へにとゞく苗代　淨阿
（余）目見にも盃流す大書院　十拾
　干飩の箱に對の口上　有響
合羽荷の日和に濡る汗雫　鼠舌
　友連多く道の賑はひ　二零

昔を今　安永三年作

盛住の『つかのかげ』に對して、蕪村が其の一門と先師巴人の三十三回忌を營み、安永三年夏、京都の橋仙堂から出板したのが『昔を今』である。「啼ながら川越す蟬の日影哉　宋阿居

士」の遺吟によつて脇起し二卷を催し、前卷は脇句、後卷は匂ひの花の二句を詠じてゐるのみで、その他は連衆の名にふり分けてゐる。蕪村の序に先師の風に倣はず、芭蕉の寂栞を常の俳諧として居るが、此の連句は「ひたすら阿叟の口質に倣ひ」て寂栞をはなるゝを以て、追善の意をふくめ托してゐる事を切言してゐる。潁原・乾兩氏の好意にて原本の寫本二書を一覽したが、全文は乾氏の『蕪村と其周圍』に發表されて居る。(京都寺村助右衛門氏藏)

其の一

啼ながら川越す蟬の日影哉　宋阿居士
行人少にところてん見世　蕪村
衝立に談林風の發句ありて　斗文
きのふのまことけふ時雨けり　百池
二もとの榎の間の宵の月　自笑
踊をゆるす裏門の音　我則
物着せてかり寢の秋をおどろかし　致鄕
とらはれ人に心ときめく　卌魚
やりをかなたこなたへめぐらしつ　維駒
終の栖の能普請也　田福
大根の切目正しく淋しさよ　柳女
霜の廿日の曉の月　月溪
釼鍛冶貧乏神を相槌に　百池
一里の城下ひとすじの町　自笑
世悴めが京の遊女をつれて來て　我則
髪生藥春もつく〲　維駒
たれこめてとさら花のなつかしき　田福
聲のどかなる琵琶の古糸　致鄕
今みとせ小松の內府世にまさば　蕪村
甥の法師に法の名を乞ふ　宰町
麥めしを焚あやまちて泣斗　維駒
牡丹の園の草履音なき　我則
風諫の表おもしろく出來過て　卌魚
故鄕の鱸酢に踊る頃　自笑
峯の月紬にたつ人を照すらん　百池

秋冷かに山伏の珠數　田福
あつぶるひ嘘のごくにさめぬれど　月溪
戀につれなきせうと違哉　柳女
雨もりて夕いぶせき長廊下　宰町
おぼつかなくも蓁の足取　雪居
石塔をふたつ建てたる小百姓　維駒
光る茶釜を打ながめつゝ　月溪
道連はしのぶの里へかけ寄て　致鄉
鴻に夕ロの斜也けり　我則
宋阿佛句ひのこりて花の雲　几董
桃さくらてう集編て後　子曳

其の二　宋阿居士

啼ながら川こす蟬の日影哉　几董
蚋に香たく艸の上風　九湖
棟梁に烏帽子を着せて笑ふらん　魚赤
玉ちるばかり椀にもる酒　梁瓜
詩作れば歌よむ月の夜もすがら　竹裡
をみなへしなんど移植たり　雄尙
雀とる隣を憎む秋のくれ　路曳
琴彈ヶ娘いつ地行けん　萬容
見たやうな繡の小袖を賣に來て　嵐甲
師走〱と鬧もせはしや　布立
はてしなふ日醫者へ通ふ雪の朝　春蛙
よい家あれど少し上京　董湖
宵月や遠音ゆかしき松囃子　赤
是非にとしはみよし野の花　裡
手枕を已に寢たる春の雨　尙
戀する猫の晝は勞れて　曳
軒下にくゝり捨ける古襌　甲
三とせはこゝに土佐守どの　立
かくあらん子を先立し人心　蛙
なく〱受納したる白銀　湖
から紙の腰から下はうそよごれ　容
あるじの侍從䓤を捻り居　裡
さゆる夜を火桶一ッにしのびかね
野邊なつかしきまゝに蕗味噌

發心の先鎌倉をわすれたき　曳
　雁瘡かゆく鴫脚ちる頃　瓜
畫の月雲天井の神角力　赤
　禁酒を悔む秋の寂しさ　甲
とし〳〵に口やかましき宿の妻　倘
　櫛箱さがす姫が戒名　容
とく〳〵と扇の上に珠數を置　蛙
　立居不自由に老の頻數(サク)　董
しぐれたか石のぬれたる燈の光　立
　曉いさむ本陣の門　瓜
雲に花普化玄峰に宋阿居士　蕪村
　春やむかしの一夜松集　其勇

幣袋　安永三年作

安永三年四月、曉臺の門人士朗・都貢は名古屋を立つて京都に赴き、同月十四日加茂祭を見、双林寺の西行庵に吟歩し、「門阿彌亭にて、はいかいの連歌すとて」と、士朗・都貢共編の『幣袋』に此の連句を揭出してある。蕪・曉兩子一門の大一坐で仙臺の丈芝も加はり、盛大な俳席であつた事が窺はれる。本文は『曉臺七部集』によつたが、几董の「宿の日記」と對照すると少しく異同がある。（晋風文庫本）

歌仙行

夕風や水青鷺の脛をうつ　蕪村
　蒲二三反凄〳〵と生ふ　宰馬
きるべしと思ふ節(イ本(節から))より節をれて　大魯
　十日余りもおなじやどかる　士朗
一しきり雨吹はれて月の雲　几董
　つらなる山にたゞ秋の聲　都貢
かくばかり萩刈とりし(イ本(刈伏せし))人いづち　美角
　鎖あづかる(イ本(ひらける))貫之の門　曉臺
星落る方に小細き水の音　丈芝
　馬勞れしと松につなぎて　嵐甲

此邊り劍磨べき石ありや　イ本（鏡を磨べき）　都貢
　怪しき童よくものをいふ　几董
月寒く折〳〵雲丹を焚そへる　イ本（焚添し）　宰馬
　笈の佛のこけてまします　蕪村
いかにせん野渡に人なく船もみず　士朗
　世にある夫（ツマ）をたづね侘つゝ　大魯
古き緒の調べたゆべく花の前　曉臺
　春の夜やすく明てくもりし　丈芝
雉子鳴く山もと近く成にけり　嵐甲
　小家ふえたる小栗街道　宰馬
放ちやりし盗人恩を報い來て　蕪村
　吾歸依僧の兄なりといふ　イ本（僧は）　士朗
浪あらくけふも暮行船のうへ　イ本（荒き）　大魯
　閨の小雨のちどりかなしき　美角
イムはせちに戀する人やらん　几董
　ほそ堪がたのうすものゝ香ぞ　イ本（なぞたへがたの）　曉臺
供御の水あらしき布に打透し　丈芝
　有明しらむ南の庭　都貢
忍びつゝ菊折る音の聞えける　美角
　みじかき衣の裾寒き秋　嵐甲
象（キサ）の道ふ潟の汀の美しき　イ本（蚶の）　曉臺
　笘ほす暮のゆたかなりけり　イ本（笘干しわたす蚫いさぎよ）　大魯
苦き酒のよくもさばけて富し家　士朗
　しばし狐の官をあづかる　蕪村
櫻さく岡より望む峰の花　几董
　日影のどけきむら雨の中　都貢

ゑぼし桶　安永三年作

『反古瓢』の編者定雅の兄である佾月樓美角の『ゑぼし桶』に、芭蕉忌の連句中十一句を掲げてあるが、美角はその家に「暮雨宗匠などとめし十日たらずのあらまし也」と序して、芭蕉忌の献詠及び高雄山吟行その他の發句と、曉臺等との六吟歌仙を本書に收めてゐる。『ゑぼし桶』は久しく埋れて居つた蕪村關係の書と

して京都の寺村家から新に發見されたものゝ一つであるが、神戸の川西和露氏は別に一本を獲られて、「蕪村一代集」の爲め貸與されたのは、望外の仕合せで編者の喜びこれに過ぎなかつた。（和露文庫本）

芭蕉忌

甲午のとし神無月、江南のきそ寺にまゐりて枯たる花をつみ、一句の泪をそゝぐ。故翁の骸骨墳中に皈して八十年、八十年の後さらに一日柩を守る

霜に伏て思ひ入事地三尺　曉臺
一氣をふくむ初冬の感　一音
山莊の朱の文机なゝめにて　蕪村
杓にとぼしき水にわびけり　美角
浮雲の月をはなるゝ風はやみ　几董
門田の早稻の穗なみめでたき　嵐甲
箸立て粮ほどきたる小鷹がり　百池
折焚く柴の匂ひあはれむ　我則
賊に脱で得させん上一重　呑溟
母伴ひし旅のあかつき　定雅
卯花や身延のお山薄ぐもり　甘蘭

（原本）右下略

柴狐庵聯句集　安永三・四年作

百池の遺稿にあるもので乾氏の「蕪村と其周圍」には「安永四年の作たることは言ふを俟たない」とあるが、歳旦三つ物は多く前年末の作であること、ならびに「月くるみ」の卷は冬季の發句・脇であり、「浮葉卷葉」の脇起しの卷は脇・第三・四句目とも秋季であしらひ、「みのむしの」卷だけ早春なので、前年の作も混入してゐるかとも思ふ。乾氏も疑問としてゐる如く、三つ物を除いては、その他の二卷は歳旦帖に掲出されたかどうかは推定し難い。別に掲

げろ「御忌の鐘」の卷と「みのむしの」卷は或は三つ物と共に、もし同年歳旦帖が出たとすれば載つてゐるかも知れない。なほ脇起しの一卷は二十四句で了つて歌仙の約束に叶はない事も言ひ添へて置かう。（京都寺村助右衛門氏藏）

其の一

安永乙未歳旦

ほうらいの山まつりせん老の春　蕪村
金莖の露一盃の屠蘇
閣寒く樓あたゝかに梅咲て

其の二

浮葉卷葉此蓮風情過たらん　素堂
月を殘して曉の雨　蕪村
渡り鳥ゆかしや里を筋違に　卌魚
圓坐も秋の黄ばみそめたり　仝
能句ありあられ聯句の席も哉　村
身は良等の他なく召るゝ　仝
糸古き琵琶かきならすわびしらに　魚
葉落水去石や怒れる　村
日は斜佛口菴の壁の間　魚
閑にほこりて印金をたつ　村
五人前細い鱠に白きめし　魚
今牡丹も廿日あまりぬ　村
雲よりは雨こそよけれさゞめ言　魚
かしらおもしとほのめかしたる　村
在京も芝居に近き舍りして　魚
月やおぼろにぬるきすい風爐　村
盜めとは師の免されし花の枝　仝
橋下の水の春深き音　魚
落たるを拾はぬ村へ戻り馬　仝
千里あなたへ軍去りぬる　仝
風の雲吹盡す朝まだき　村
眉毛に塵のつもる開山　魚
こんにやくは命あるものゝ如くにて　村
格子の間を宵の稲妻　魚

其の三

月くるみ鐘響く雪の朝朗　道立
　千里に出る馬蹄寒けき　几董
窓深くト者の家居ゆかしくて　蕪村
　むら〳〵竹の陰しづかなり　立
時鳥暫くあつてまた一聲　大魯
　ともし火明く短夜を守　執筆
閨近きまでに高荷を積置て　董
　阿武隈川の水かさまさりぬ　村
戰は任終れども止ざりき　立
　世に譽らるゝ操はづかし　魯
玉くしげはこへの鹽を手にふれて　村
　朝日に遊ぶ篭のこま鳥　董
市中の花に嵐の折ふしは　魯
　春さへ人の訪はぬ隱家　立
健にあらぬも老はめでたけれ　董
　曇りもあへずいざ宵の月　村
大床に翌の角力を召れけり　立
　噓しば〳〵しのべども秋　魯

徒然に後世の大事を尋れば　村
　ひだるいほどにしれよ身の程　立
松島や象潟かけて駕二挺　魯
　爐も楓も若葉する頃　董
日矢數のこともしも稽古斗りにて　立
　三首書たる梶がよみかた　村
相宿の人に酒くむ雨の中に　董
　命うれしき船のつくろひ　魯
觀音の立せたまひて觀音寺　村
　麓の柳だん〳〵にちる　立
風さそふ夕の鶉聲ほそき　魯
　從者をかへして忍路の月　董
戀衣引ちがへたる引折の日　立
　いにしへぶりの盆に饅頭　村
小屛風にいさゝかたがふ膝手口　董
　宮仕のまじる連歌ひとをり　立
暮なんとして花の香のたゞならず　村
　眠らぬ蝶の露をたづぬる　魯

其の四

みのむしの古巣に添て梅二輪　蕪村
石をうつせばもゆる陽炎
曲り江に舟さし入るゝのどかさに
あやなきばかり簫を吹也
月の宵すゞろに雨のふり出し
秋こそ見ゆれ關のともし火
ウ
心行まで茸山を狩盡し
むかし顔なる坊官の妻
あはや君祭の車のりこぼれ
こまのわたりの眞桑三頭
竹椽の節さま〲にうれしくて
さそへばいやと云はぬ能因
そば切もかねて期したる腹なれば
春を愁る姨すての月
木のもとにみかさと申せ花の雨
黄門様の曲水の宴
不二箱根筑波黑髮淺間山
山ほとゝぎすあふさきるさに
ナ
垣ごしに留主を頼むとどこへやら
三斗の米を踏仕舞たり
いぬいから日和受合ふ震(ゞ)近し
もろこし舟を今や出すらん
傾城に習ふた歌をわすれ草
藥を呑で戀わたる身や
葉櫻に氣のしづまりし下屋敷
穗麥の末に鳥居赤〲
鞍つぼに和睦の使肩ぬぎて
あられたばしる玄上の琵琶
寒月や向ひあふみは猶すごし
冬の日といふ集ありにけり
ナウ
よも盡じ心便りの一德利　宇升
ものなつかしく物句ふなり　月溪
古格子外から覗く夕間ぐれ　春面
孝に成るべき土産持けり　春載
花の山の一里こなたの花盛
海遠き京に春を耕　几董

遺墨　安永四年作

東菑宛の蕪村書翰に「十日愚亭歳旦開ニ而」とあるから、この連句の正月念五日と記せると對考して、安永四年の歳旦帖に出てゐる歌仙とは思へない。歳旦開とは蓋し文臺開きの事で、その年始めての俳諧の會席の意味であらう。或は又、その年の歳旦帖の披露の會とも取れない事もない。どちらにしても歳旦帖に載せたものか否か知れない。潁原氏の全集には「今二三氏の藏するものすべてその模寫にして、蕪村の眞蹟にあらず」と斷じ、乾氏は「紫狐庵聯句集」には作者名を缺き、「二三の控へで補記した」と云つてゐるから、潁原氏の所說と同一と見てよからう。こゝには兩氏の發表によつて、文字の異同を註記して置いたのである。

歌仙

御忌の鐘ひゞくや谷の氷迄　蕪村
　はつ花の香ににほふ山もと　帯川
蝶遊ぶまがきの竹に培ひて　蘭洞
　風なつかしくのれんかけたり　李蹊
丸ごしで遠くは行じ夏の月　月溪
　めざむるばかり松魚十本　致郷
桐が谷定家の旅館建ﾃにけり　自笑
　繪に工なる僧を召る丶　我則
酒買に行やら驢馬にまたがりて　百池
　あしたに晴（イ本（晴す））つ暮にふる雪　村
みちのくの按察使の妻子（イ本（妻に倶せられこ））倶せられし　洞
　人まかせなる髪のめでたき　溪
南隣の柑子の花や落つくす　川
　雨の中なる三日の月影　笑
秋はもの丶釣針ほしきか丶り舟　郷
　彼岸まいりのぬける穢多村　溪
折とれば若木のさくら葉のみして　則
　ねぶたき春の御所を守つ丶　川
昼は朱に齒白く朗詠す　洞

天女の衣うつゝなきかな　郷
松風の吹たふひまを松の風　笑
（イ本(夜嵐の)）
手斧はじめのかりそめの音　洞
檀越と中よく語る國分寺　村
砂糖に蟻の通ふ晴天　池
有馬山ゆかたに風やかほるらん　溪
（イ本(浴衣)）（イ本(薫)）
いなとは云ぬ君が半面　則
情ある寄手の備正しくて　川
更行まゝに千鳥聞ゆる　笑
寒月に近づく雲はなかり鳧　池
彳みあへぬ石のきざはし　郷
神や在す汗して見ゆる御輿かき　洞
日てりのつゞく相馬八鄕　溪
（イ本(照リ)）
ひとり旅おもへば遠く來ぬる哉　蹊
河をへだてゝ犬のとがむる　池
花ざかり方百間の埒構　笑
（イ本(盛)）
くわほういみじく雛も一藏　則

安永乙未正月念五日

續明烏　安永四年作

京都に竜門を構へた曉臺が一日、正阿彌亭で蕪村師弟及び一音との五吟で、歌仙既に進んで一折に至つたころ、暴風雨となり雷鳴さへもの凄きまゝに中絶したなり、几董の『續明烏』に掲出された一卷である。作者の顔觸から見ると客發句・脇亭主の格で、その日は曉臺を正客として、几董の招待した會席であるらしい。蕪村もお附合ひに出坐したので、一音は相伴に誘はれたものゝ如くである。(大阪水落庄兵衞氏藏本)

洛東の正阿彌が樓上に會して

日の筋や落葉つらうつ夕眺　曉臺
人にもよらず冬の蚊柱　几董
よき酒を賣肆の軒ふりて　我則
胡の閨へ書ミもとめ去　蕪村
牧を出ていく秋駒の月にあふ　一音

露明らかに草高き原　則
夢に見し地藏を拜ム肌寒き　村
世になき夫の氏ぞ口惜し　臺
小ぶくさにさめぬ薫りをしのぶらん　音
はし居そゞろにたそがるゝ空　則
月にぬれて葬の萲秋ちかく　董
加持の奇特の帛を地にさす　音
筑羽なる萱ぶき二人屆ばや　則
罪もうれしき有職の身は　村
萢煎といふもの焦しぬる雨の日に　臺
法の因ミの一大事聞　董
花の客横川の寮に雛持て　音
すみれ摘なる透垣の下　則

巻半なる比、風雨はげしく、時ならぬ神のおどろ／＼しうとゞろき鳴にぞ、各驚て筆をさし置ぬ。

几董遺稿

安永五年作

几董の備忘的に記して置いた遺稿中、「丙申之句帖 巻五」と標題を附した一册に見えて居る。丙申は安永五年である。「花にぬれて」の巻はその年二月廿二日東山で催したので、六吟歌仙の一折で終つてゐる。呑溟は奥州の人、たま／＼曉臺と共に出席したので、この日もまた几董の取持で開かれたのだらう。「あらし吹」の巻は百韻とはし書きし、伊勢の樗良を迎へて行つた三吟であるが、百韻ならば表は八句であるべきで、歌仙の形式の表六句より記してない。（和露文庫本）

其の一

二月廿七日於二東山下一興行

雨日洛東にあそびて

花にぬれて見どころ得たり松の幹　曉臺
春にそむかぬゆふぐれの色　道立
鮎汲の小家ながらに人とめて　蕪村
薬柴に翌の麥煮る也　呑溟
霧暗く廿日の月を待出し　几董

はつかに白き山もとの萩　我則
此館に從夫奴となりて秋三とせ　立
文字はしらじと人を欺き　臺
ねもごろに朝よさ撫し牛の艶　溟
葉にちり水にうかぶ紫陽花　村
厨まで夏を宗なる月の亭　則
妬たしと人も見よやしのび寐　董
引むすぶばかりに妹が衣さけて　臺
砦〳〵に矢叫の聲　立
凩のをり〳〵雨を誘ふらん　村
瓦燒く見ゆ山門の陰　溟
うかと出て酒屋尋る春の暮　董
うぐひす老ぬ櫻ちる頃　則

右一折

其の二

百韻

あらし吹艸の中よりけふの月　楞良
霧ふり水烟山遠く路細し　蕪村
ゆく秋に心の秋や後るらん　几董
我貧讓る人さへもなし　良
三つの瓢おの〳〵愛を異にして　村
音なく來たり雪の鶯　董

寫經社集　安永五年作

自在庵道立の發企で洛東金福寺に芭蕉庵の再興を見、蕪村は宿望を遂げていたく喜び、『寫經社集』を編集したのである。その時の俳諧は道立その他の一門が、金福寺の殘照庵に會して行ひ、道立の發句、金福寺の住持松宗の脇、蕪村の第三、それよりつぎ〳〵に門下の名で歌仙を充してゐる。安永五年の四月この會を催し、五月蕪村は芭蕉庵再興記を執筆したのであつた。（帝國圖書館本）

山にかくれて浄土を修するにも

あらず、酒をゆるして社にまれく
にもあらず。蕉翁の風流をしたふ
諸子とゝもに志を同うして、こと
し卯月あらたに社をむすび、洛東
一乘寺邑金福寺の殘照亭に會する
ことゝはなりぬ。

道立

植かゝるはじめはひくき田うたかな　道立
夏もおくあるしほり戸の道　松宗
茶のにほひかしこき人やおはすらん　蕪村
車の用意いとしづかなり　田福
中河のわたりに三日の月を見て　几董
雁かあらぬか風遠き聲　瓢子
この比の秋に買置雜殼（穀）物　美角
火ともし時に客つどひ來　定雅
かりそめの雪ふりかゝる草の庵　春載
おほつかなくも早咲の梅　春面
にしきどもけふを限りと立ぬらん　方蜀
うき身に重き刀さしたる　我則
鷄も啼鐘も聞えて月は西　大魯
今や解脱の時いたる秋　眉山
文正が宿をし露のゆかりにて　月溪
わらぢ履たる兄弟の人　自笑
朝日さす花の峠にさしかゝり　正白
あぶり餅賣あづまやの春　龜郷
老の身の夏を隣に肌ぬぎて　米園
みづから刻む歸依の御佛　守一
水晶のすだれに風の色移レ　志慶
横顏見せて見違ふ船　鳴鳳
しのぶ名も今はかひなきさかしらに　霞東
靜がなみだ囉泣して　白砧
夜や霜の嵐身にしむばかり也　龜友
燎火たくなる里の神業　石友
今すこし辛き酒をと樽さげて　東瓦
西國船の怪我もきこへず　稀聲
月清く晝の暑さを忘れけり　維駒
寐ほれ聲にて明る門の戸　乙總

恭に負て何くれとなく腹あしき　霞夫
硯に筆の多き拙さ　執筆

月の夜　安永五年作

樗良の京都旅寓、木屋町三條の無爲庵で催した連句である。几董の『丙申之句帖』によると、七月廿三日無爲庵で南雅・樗良・几董の三吟を試みて居るので、「ことしの秋は」といふ前書はその頃であつた事と推し得る。此の「雲ちりて」の巻は同じく『丙申之句帖』に「無爲庵兼題八月十二日」として几董は名月の句三句詠んでゐるから、その夜の興行であつたらう。本文は『樗良七部集』から轉載したのである。（晋風文庫本）

ことしの秋は、洛に遊んとおもひ出て、木屋町の三條なる所にあやしの宿をもとめ、むしろうちたゝき、蜘の巣はらひなどして住けり。ある夜月の朗なるに、入來る人〳〵あり、とみに句を乞て誹諧連歌となす。　樗良書

雲ちりて月の動きのなき夜哉　蘭臺
雁のつばさに風おこるかも　樗良
秋の詩を蕎麥の袋に題すらん　蕪村
ことづて聞てかへる商人　集馬
とかくして出さむとする掛ッ船　月居
此ごろよわる雪の木がらし　路巧
瓶の酒毎日へりてちからなき　呑溟
旅に在かと夢におどろく　月溪
郭公心ならざる折もおり　定雅
山路過行雨の降出に　臺
裸身に佛を背負ひ奉り　美角
盡せとすゝむ一升のめし　村
くらがりへかくれて覗く戀ごゝろ　良
うすにつかへる帶の結びめ　角

（原文）末略

新虚栗　安永五年作

其角の『虚栗』を以て蕉門の開基として、その古調に倣つて俳諧の中興を提唱した樗庵麥水の新虚栗調に蕪村一派の共鳴して、此の四吟歌仙を試みたのである。それ故に卷中に漢詩の直譯的な詰屈な用語が多い。蕪村の支那趣味は秋成のいへる如く、かな書の詩人たるところにあるので、麥水の主張にはたしかに好意を持つて居り、その影響をさへ受けて居る。「六ゝ行」とは歌仙の事で、一に鯉鱗行とも稱すると同一である。（晋風文庫本）

六ゝ行

霜に嘆ず蟀髭を握りけり　大魯
菌の錦の艸がれを裁　几董
丁ゝと古院に斧を手はじめて　ゝ
身のしろ衣陽炎を着ル　魯
魚餌に飽て波間に月おぼろ　ゝ
柳に富て漕ぐ孤リ舟　董
阿爺が斧うつほ木に足をさし下す　蕪村
孝子厨に河豚を調ズ　ゝ
まぼろしの暗夜に雪をうつ礫　董
うきは五尺の身をしのぶ山　魯
三十經る次郎が胤を姙ミけん　董
茶にうたかたの粥すくひ喰ふ　村
犂を書にかへて貧にあき足らず　魯
嫦娥戸に入るを影盗む屋　董
水辛クおのれ濁酒を醸すらん　村
腹を鼓すあら旧年あり　魯
妻子見るつばくら花に溺ずや　董
春を胡の紅粉に泣ク　村
劍を磨す二月の雪を掬しけり　魯
舊惡化して蝮を狩ル　董
虱老ふ綴に香を眠らせむ　村
艸の扉へ夫迎ひ駕　魯
夕ぐれを六位の僕たをやかに　董

閑ある雲や矢に文を射ル　村
日をめづら五月雨鳥浴ミして　魯
芥を富士の夏-草が原　董
歌の聖酒に賢-者の名を咲エメリ　村
舞-入あやにせまりたる聲　魯
銀-燭の月露欄干にのぼるかも　董
秋を感ずる永郷の郎　村
綠ウ-毛を梳ケヅる野-分のあだし波　魯
旅-行万-里の雨を占フ　董
羅を乞ふ新シ-羅ラギの使わびぬらし　村
音文を織ル八葉の家　道立
花の壽南-山に風をいとふ也　全
心をしおくきさらぎの郷　全

夜半樂　安永五年作

頴笠の剝落したまゝで覆刻されたが、『から檜葉』に道立は「翁、往年夜半樂を撰し、春風馬堤曲を鼓す」とあるから、外題は『夜半樂』に疑ひないと思つて來たが、京都寺村家にある一本には、頴笠蕪村の筆で『夜半樂』と完全してゐるとの事である。覆刻本は三・五の兩丁をとぢ違つてゐるので、疎忽に見ると十五句よりないようであるが、一丁隔てゝ短句があらはれるので、その綴違ひなる事を容易に發見し得る。江戸座調で試みた蕪村の春興歌仙である。（池田稻束孟氏藏本）

祇園會のはやしものは
不協秋風音律
蕉門のさびしをりは
可避春興盛席
さればこの日の俳諧は
わかくしき吾妻の人
の口質にたらはんとて

安永丁酉春　初會

歳旦をしたり皃なる俳諧師　蕪村

脇は何者節の飯俗　月居
第三はたゞうち霞み〳〵　月溪
艤のとかくしつゝも　自笑
こゝかしこ旅に新酒を試て　百池
十日の月の出おはしけり　鉄僧
纓頭給ふぬきての身の白き　田福
廊下の翠簾や夢のうきはし　斗文
目ふたぎて聖の屎を覆らん　子曳
紀の川上にくちなはのきぬ　集馬
うの花に萩の若枝もうちそよぎ　三貫
門をたゝけば隣家に聲す　帶川
着つゝなれて犬もとがめぬ裘　致鄉
貢の使白雲に入　士恭
谷の坊花もあるかに香に匂ふ　道立
籔うぐひすの啼で來にけり　晋才
かけ的の夕ぐれかけて春の月　正白
三本傘は巽の定紋　舍六
初がつをあはや大磯けはひ坂　我則
淡き藥に身をたのみたる　故鄉
暮まだき燭の光をかこつらし　嬰夫
竹をめぐれば行盡す道　舍員
新田に不思儀や水の涌出して　菊尹
儒醫時に記す孝子の傳　賀瑞
かりそめの小くらのはかま二十年　呑獅
往來まれなる關をもりつゝ　呑周
餅買て猿も栖に歸るらん　柳女
錫とゞまれば鉢が飛出る　延年
曉の月かくやくとあられ降　維駒
金山ちかき霜の白浪　樵風
つく〴〵と見れば眞壁の平四郎　東瓦
酒屋に腰を掛川の宿　左雀
空高く怒れる蜂の飛去て　乙總
岡部の畠けふもうつ見ゆ　霞夫
花の頃三秀院に浪花人　几董
都を友に住よしの春　大魯

几董遺稿　安永六年作

「春や」の巻は浪速の二柳を客として几董亭に於ける三吟歌仙で、廿六日は安永六年の四月である。几董の『丁酉之句帖』には同月十三日浪速に赴き、布引の瀧を見、敏馬浦に杖を曳き、十九日船で京へ上つてゐる。菴中興行とあるから几董亭の連句と見てよからう。「夕風に」の巻は「四月廿七日於夜半亭興行」と記したものが、別にあるさうだから同日の作でない。又「行かぬる」の巻は几董が「二柳叟が東行のわかれに臨て再會を契」とて、

日記書てもどせと換ふる扇かな

の餞別吟があり、「五月十二日於荷葉樓郎興行探題」として二句をしたゝめ、その次に「其日之俳諧」として掲げてある。二柳が江戸へ旅立つ留別吟によつて行つた七吟歌仙である。蕪村はこゝに載する三卷には出座してゐるが、五月十日の巻は二柳・几董の兩吟で蕪村は加はらない。『丁酉之句帖』は右の四歌仙を與行の順に手記してゐる。（和露文庫本）

其の一

廿六日　菴中興行

春や穂麦の中の水車　蕪村
片山里に新茶干す頃　几董
遠騎に千貫の馬こゝろみて　二柳
人たのもしく眉攅めたる　村
反古にせし日記とり出す月の宿　キ
嵐をしのぐ雁みだれ鳴　二
鎌倉の沙汰もゆかしき身の秋や　村
醜き妹がみさほ可愛き　キ
うき戀の果は卒都婆の立すがた　二
木槿花さく六月の雨　村
打被く竹の小笠に蝸牛　キ
十とせぶりなる古郷の友　二
尻重き鍋に芦火のくゆるらし　村
津浪に殘る山伏の家　キ

春の花秋の月よき此峯を　二
金の貢汗に肩かす　村
御代なれや古き狐もなかりけり　キ
墨を流せる空に宵闇　二
案内知る酒匂の川瀬打つれて　村
有髪の僧の腰刀見よ　キ
生贄の止て祭のさゞめけり　キ
巴蜀の北の辛き大根　村
酒くるゝ人あらば敲け雪の窓　キ
別のしびず君が手を引く　二
流矢のそなたの空を恨らん　村
八郎潟に漁焚く見ゆ　キ
艸まくら越の菅蓑かた敷て　二
後の醍醐の詔ぞも　村
からうじて落鮎得たる朝の月　キ
いざ給へ我蓬生の菊　二
沽めやは露けき玉を袖にして　村
坂おし登る車近くも　キ
大徳に後の世契る尊さに　二
花まだ散らずけふも日暮るゝ　村
春の夜の夢も結ばず離宮守ル　キ
かげろふ見しや三尺の劍　二

其の二

同

夕風にそよぐ田植の額髪　二柳
紺染にほふ袖のさみだれ　キ董
兎や角としつゝ和睦の調ひて　蕪村
ねぐらの鴉あけぼのを啼　柳
落かゝる月の前なる初ざくら　キ
扱吸ものは海苔に白魚　村
爐の名残跡見やあると炭次で　柳
美童にめづる老のふるまひ　キ
はやりうた琴には得こそ合すべき　村
風ほの薫るいなの笹はら　柳
替竹輿のなくてぞしのぶ暑日に　キ
地震慎しめとうらまさに聞　村

名月を祭れる嫗月を見ず　柳
聟入ちかき宵〳〵の秋　キ
ある中に白キ扇を先捨ん　村
竹の瀝を絞るわびしさ　柳
五十年おぼろに過し春の夢　柳
其春や夢一椀の蕎麥　キ
濱やかた隅〳〵遠く簾して　村
伽羅打碎く石祟が富　柳
うらみわび蚊帳の裾を解きけり　キ
住まぬ隣の柘榴花咲　村
下々の下の客を見送る朝朗　柳
恒の産ある竹の挽屑　キ
五器洗ふ流に魚のさかのぼり　村
同じ裸の童むれよる　柳
神業の太鼓とゞろく森の月　キ
豊としるき見取場の秋　道立
鶴をひく叟嵐も身にしまで　柳
よゝと受持ッ曲物の酒　キ
散かゝる花に凱哥や唱ふらん　立
水なき川に陽炎を踏　柳
海ちかき山うちかすむ里見へて　キ
首筋いたき樓の春　執筆

其の三

其日之俳諧

留別

行かぬる魚や花藻の下やどり　二柳
夕月出よさみだれの後　キ董
ひとりして十間の半蔀揚ぬらん　蕪村
名のうれしさに名をかくしけり　百池
積ム雪や書ミ見るべしと思ふ夜に　道立
隣遙に碁を崩す音　田福
あさましく鳥の奪合ふ鳥の骨　董
いかに國阿の流傳へし　柳
傾城の木綿着たしと打歎　福
古郷のふみや筆もえらばず　村
香に匂ふ淺香の粽それながら　池

光秀既に地資(子)許しぬる　立
五石盛ル瓢作らん我庵に　柳
秋わびしさよ袷かさねて　村
入る月の光するどくさし殘リ　立
霧の明石を船走る見ゆ　福
花守もさすがに心なきならず　柳
承和の春の古き石塔　董
馬ほく／＼陽炎の上踏や來し　池
嚢かけたる肱を枕に　村
そゞろ言いひつゝいづち慾りけん　立
人あしからぬ村の麥秋　董
倉橋と聞くはあの山ほとゝぎす　柳
◎掌なる藥あやまつ　村
妹が子のいやしき家に長(オトナ)びて　董
誰哥書したとう紙ぞも　池
物怪を調ずる檀のいかめしく　立
廿あまりと見ゆる郎等　村
有明の嵐落來る九折　董
いざ笛かけて聞ん小男鹿　柳
いと萩の蒔繪の割籠露けくて　村
御感いみじき有職のさた　立
やぶれたる居士衣錦に恥ざらん　柳
音なくなりぬ上元の雪　維駒
漸十日花に眠らばいせ尾張　福
菊苗うへて秋を待なり　池

几董遺稿

安永七年作

大阪の旅寓、多分大晉亭で試みたのであらう。几董の『戊戌之句帖』に筆錄されてゐる。几董の記に「三月九日夜半翁とともに伏見より書船にて赴二浪華一」とあつて、「十三日快晴、俳諧數卷あり略」として此三吟のみを揭げてある。蕪村・几董はそれから兵庫に行き、浪華に戻り、同月廿二日「申時歸宿」するまで、師弟十四日間小旅行を試みたのである。兵庫で

は十四日五歌仙を行ひ、前後十巻以上の連句はあつたのだが、わづかに此の一巻を殘すのみなのはあきたらない。（和露文庫本）

三唫

春惜しむけふの獲や魚ふたつ　几董
　踏ば崩るゝ山吹の崖　大魯
長閑さや陸奥の使を給りて　蕪村
　早歌うたへる從者持にける　董
いろ／＼に夜の變り行月の雲　魯
　秋の淺瀬を漕わたる舟　村
稲刈て和睦調ふ向村　キ
　罪ある人の子を孕ミけり　ロ
よき衣の虱を捫る日もなくて　村
　初瀬籠の花も過行　キ
雨の跡水あたゝかに寛もる　ロ
　雉子鳴方に地震ナヘやふりけん　村
家中衆の紅裏見ゆる遂也　キ
　老し冶郎の旅に馴たる　ロ
明安き夜を片われの月なれや　村
　卯花させる車引すて　キ
舞扇泪見せじとかざすらん　ロ
　波そゞろなる由井が濱風　村
雪はれて靜に神やわたります　キ
　杉戸の胡粉日々にこぼるゝ　ロ
蛯川が妻も聯句の筆所　村
　足音なくて入給ふ誰ゾ　キ
抑やりし蚊遣燃たつ窓の下　ロ
　落盡したる澁柿の花　村
晴るゝ日に餝摩のかちん手染して　キ
　聟は隣の明くれの兒　ロ
八朔や禮にほのめく二三人　村
　いざさらしなの月にゆかまし　キ
秋風の右に傾く古烏帽子　ロ
　手斧はじめの木がくれて見ゆ　村
ゆかしさに異國の寺號襲ふらん　キ

煎茶にほふ夜の靜なる　ロ

つく／＼と我痩臑の便なさよ　村

その事かのこと筆とらせ置く　キ

都歸花唇をひらく時　ロ

萬里の海も春の夕凪　筆

ふたりづれ　安永八年作

浩瀚な隨筆『翁草』の著者其蜩庵杜口の古稀の賀に、かれて風交のある人々との兩吟を一集とした『ふたりづれ』の中、はじめの百韻は三の裏の十三句目に蕪村の附句が見えるのみであるが、『罷出た』の卷は蕪村・杜口の兩吟で、かの『葛の翁』の像を描いたのもこの時であつたらう。神澤氏、淡々系統の人で、『翁草』にある享保時代京都俳諧師の聞書は、俳諧史の資料として頗る豐富な内容である『ふたりづれ』の兩吟は狂言を見るような輕い詼諧を覺えるが、蕪村との兩吟もやはり多少のお道化氣味を内につゝんでゐる。前年竹冷文庫本から抄記して置いたが、こゝには潁原氏の寫本によつた。百韻の名殘の花及び擧句は氏の寫本にもない。(神戸潁原退藏氏寫本)

其の一

翁が年頃もうけ置し辭世の句のいたづらに、三そ三とせ埋れぬるを、けふ小車かくることぶきに披露せよかしと、二三子のすゝめにまかせ、此むしろの導師に告侍ければ　杜口口上

笈脱だ辭世まれなり千代の春　練石

人まかせなるこゝろ若餅　杜口

芦田鶴の居なじむ頃も角組て　丈石

二つよい事あれば有るもの　蘭石

音律は中／＼續く勢もなし　文也

楊子片手に煙草盆提げ　共梅

木造りを又呼戻す暮の月　百花
　角力の舞雲をつらぬく　嘯山
ウ
田刈哥訛氣ぬいて笑はせる　經童
　姉の不埒か妹の無藝　文誰
定つた緣なれ緣の遠いのも　麥里
　痩るを戀としろしめされず　羅院
かき送る文は命毛あらんだけ　丈可
　吉左右聞て參る氏神　盛住
幾めぐり池に盛りの杜若　化來
　松風が連れて來る矢叫ビ　外面
近江路へはいると喰すとし米　鳳原
　猿聞に行秋のそけ者　執筆
けふの月よう有げなる闇のゆ　乙躬
　遠侍の碁盤みつ足　菊溪
千人の膳へ降込む華の雪　馬竜
　霞む氣もなし耳もとの鐘　芽立
二
やり羽子で大坂壁の疵だらけ　古梁
　さし合ひくらぬ連哥師の內　鸞足
色外に長逗留の狹筵　春海
　摩耶の椽先キ帆の小紋散る　書掌
城跡の一番乘は木がらしや　十拾
　犬骨折て鷹が引負ひ　有響
燒物に宵の席書添てやり　現獅
　利休好ミの利休迷惑　嵐外
澤山に住めば都のひがし山　桂華
　前垂をとき捨るあけぼの　翅白
時限りは飛脚にあるを戀路にも　藍水
　夫婦比興は哥のてんがう　蟻文
鹿笛の御所に一聲夕附日　三角
　よしの丶秋もとはゞ問へかし　五耕
二ウ
宵〳〵に松茸減て厚衣　風外
　売車くわら〳〵と氣違ひ　呂文
赤栴檀ちよと頭巾脫ぐ女がた　竹牙
　かはたれ時に又見付られ　踏山
さあといふ人を初瀨の精なし　鳥卵
　十分に毛のはへた樊噲　桃里

潔し酒をも辭せず月を友　一兆
　蚊の長尻で御會延引　素秋
なくもがな何ゆへ染る梅紅葉　百谷
　氣に入文匣酢にも味噌にも　未盛
三石に三世の緣のおもてぶせ　露笛
　むかふ棧敷のもはや豈過　海門
笄に花を咲せて貴妃西施　巴調
　山吹衣きると引きる　金才
三
一とせの恨も春のとひがたみ　語三
　柴の戸明る狆の願　爲定
切捨て物の見事な大たぶさ　如流
　うつぶく方に瀧ぞ逸けき　尸元
驢馬もほし詩有琴有丁稚有　素春
　月こそ晝のほだしなりけれ　川巴
柳散り塗下駄寒き捨床几　春來
　調は律に身請する氣に　佗山
早駕籠にちらりと醫者も袖の海　其梢
　不自由な國に魚の廣大　嬰夫
人間に成て見たのもあゝ昔　魯一
　六世の孫は知らぬ浦嶋　柳之
木がくれて啼こぼしたる郭公　笋角
　卯の白妙に橫川暮れ兼　御錦
三ウ
勝手よい事はだまつて日本流　文波
　もてはやさるゝ犂がねの耳　牛行
朝もよひ紀の有常も一釣瓶　祖旦
　雛さへ寄らぬ坊の碓　二橋
足代の朽かゝりまた朽かゝり　何得
　繪圖に見たとは長き松原　渚砌
騎下に入日の殘る勢田泊　亞岱
　拾ひし舍利を鳴らす空鞘　春驢
釋尊の枝葉めでたく榮へけり　雲耕
　同じ白さも違ふ今樣　野竹
にくいほど其美しさ雪の月　光甫
　返事待間に衞たゆたふ　蟻風
ゆかしさの餘りて須磨の歸華　蕪村
　聊塵のつもる塵壺　南竹

ナ部屋住は面箱もちの氣で暮し　野童
与ふに極めて置て見直す。　丈士
よい夢がつゞいて延る夢開き　双魚
封きる迄の菰かぶりなり　可行
色〱に出ん曲持の力瘤　如角
納凉の四時にわかる人柄　魚千里
寐入ばな寐入らぬ水の音高し　魚盃
狸も無事で古う住庵　春山
妖るとは思はねばこそ身嗜み　私耕
窖もあゆむ夕ぐれ　紫洞
さらばとは垣の名のみに待連て　梅星
寐むたさうなが建仁寺様　魯文
朝の月つるむ家鴨を掃出し　佛庵
簗洩る水の秋更し音　女 倭泉
ナウ草錦覗人もある片折戸　浪華 合鳳
道を教ゆる賤の口〱　樵遲
山陰に労れし馬を休ませて　几董
八嶋の風の日ぐれ床しき　五鳳

思ひ侘せんぐりに見るふるひ文　直幹
まもりの隅に鋼の鋤鍬　與彦

其の二

烏帽子袴のさはやかなるは、よべ見し垢面郎歟。そも誰殿のむこがねにて御わたり候ぞ

罷出たものは物ぐさ太郎月　蕪村
南枝はじめてひらく頭取　杜口
春の色はたゞ朗に〱　仝
たはゝにしほる紫の幕　村
玉兎尻をくらへと入ぬらん　仝
相手きらはぬ溢れ蚊の黨　口
ウ鴨居には忘れ扇子の數見へて　丶
きのふの雨も懐舊のうち　村
とかくして字餘りの歌と成に鬼　村
いともかしこき唖のつきやう　口
帶せぬと見しは僻目贔屓贔　丶
舞子の樂屋もや〱の闇　村

燭臺は植木を買た提ヶ心　丶
氷柱の劔引そばめ月　ロ
大比叡の地築半分越年し　丶
立春在臘花聟の持参　村
屁負婆々戀も少しはこき交ぜて　丶
京なら只は置かぬ此芝　ロ
二
壹石の御朱印御戻し中たは　ロ
合ぬ眼鏡のおろか也けり　村
橘の香にかりそめの藥草履　丶
むかしの袖や猶丸かりし　ロ
上は宮の書付さへも凡ならず　丶
淀屋古庇が雪中の閑　村
猫舌の僧に茶粥を供養して　丶
塵とごおもふ拜領のもの　ロ
定めなき足がら山の雨の脚　丶
雲行客のあとの雲介　村
談林の月あり〳〵と又こゝに　村
十八さゝげ盛りたつ芋　ロ

二ウ
妹がりに氣儘炬燵の秋寒き　丶
身に添ふ闇の硯蹴こぼす　村
瘧落て罪も報ひも後の世も　丶
忘れ時〳〵おとづるゝ友　丶
贏得たり水の不自由も華一木　ロ
春くれなゐの入日山〳〵　執筆

連句會草稿　安永八年作

安永八年四月京都に一檀林を起さんが爲め、蕪村社中は几董の春夜樓に會して、その會の記録を『連句會草稿』と題したものが、几董遺稿の別冊となつてゐる。月居の序に「ことし卯月のすゑ、春夜樓にはじめて席をひらき、月の十日を定日とし、師翁をはじめ社友衆議判して、俳かい修行の學校とす」とあるが、別に定式を設け、宗匠蕪村・會頭几董・定連道立・百池・維駒・月居（十月入社）・正白の名を署してある。

その中で蕪村の出席してゐる「花見たく」の卷はその初會の六吟連句である。二の表七句目で中止されてゐる。「野の池や」の卷は第二回の連句で、これは二の表三句目までよりない。衆議判によつて、附句の訂正された個所もある。（大阪北田彦三郎氏藏）

其の一

初會　附合俳諧　衆議判

花見たく栲の老を待れけり　月居
朝とく起て箒とる夏　几董
干鰯賣ル上總の船に米積て　道立
雨もつ雲の山をはなるゝ　百池
ひかくと下の月弓ことさらに　蕪村
綿摘入し家にやどりぬ　維駒
ウ 經讀て翁に秋を泣せける　董
小姫が瘧のあせる奇しさ　居
粉雪ふる背戸の垣根の籔柑子　池
野鴉かへる雀色時　立
しのぶ身に酒債をねだる駕奴　駒
熊膽のみてすこし氣のつく　董
後にも知る聲多き相撲の場　居
半過ゆく大坂の秋　村
月の宵小肴買に出る也　董
こゝろ寛びに謠うたふて　池
うたゝ寢に羽織被ルよ花の下　立
南さがりに霞む遠里　駒
彼岸過て鐘も聞えず成にけり　村
めし急ぐなる老に仕ふる　董
針うせて露の光もゆかしさよ　池
竈馬やいどむ壁くろの月　居
秋さびて蔦這かゝる鮓の壓　董
五助を聟に取りてくやしき　池
鏑競馬の破具足をつくろはん　立

其の二

二會

野の池や氷らぬかたにかいつぶり　几董

木立まばらに旭寒けき　百池
盜人の捨たる皮籠風荒て　蕪村
主殿寮を近く召るゝ　維駒
あやにくに月すむ九月十五日　正白
酒賣舟や夜すがらの秋　道立
所せき屋敷〱のことし米　月居
とりあげ婆の道いそぎ行　正白
白雨の傘足らぬ五人連　維駒
對馬の留守の寺を守り居る　蕪村
初案（寺の留守を）
瓶の水憎き烏の嘴入れて　百池
秋まだ暑き晝過ぎの月　几董
萩すゝき己がさま〱みだれ合　正白
初案（山萩の己が儘に咲にけり）
うしろ愛宕を登る露けさ　百池
隔なき人の守を預りし　蕪村
小はづかしさに入らぬ殼風呂　董
田樂にうき世の花の埃して　百池
笊干ゝなる庭の陽炎　維駒
ナオ
啼雀巣を出てまだきのふけふ　正白
病の床を拂ふ古妻　維駒
仕もつれて爭ひ絕ぬ小商人　几董
伏見の町の暮はやき空　月居
初案（里）
油斷して手綱を馬にとられけり　丶

初懷紙　安永八年作

几董の歲旦帖は『初懷紙』の題で安永二年から年〻配本されたが、現存するものは天明七年まで八九年間の分で、それも所藏者は二三部づゝで一纏めに持つて居る人を聞かない。安永九年の『初懷紙』には「山にかゝる」の卷の五吟歌仙及び「うぐひすや」の卷、一順八句を錄してある。『連句會草稿』によると「山にかゝる」の卷は安永八年十一月二十日の例會に試みたので、「うぐひすや」の卷は安永九年正月廿日の初會の作、

恐しき世にたのみある從者もちて　董

の一句が添ふて全部九句になつてゐる。『初懷紙』の連句と對照すると二三の異同が發見される。因みに『連句會草稿』は『蕪村の俳諧學校』の標題で活字に飜刻されてゐる。

其の一

冬夜興

山にかゝる徑いくすじかれ野哉　昨非
　簑に霜を荷ふ朝〱（イ本(あけぼの)）　晋明
貴人の纓に魚のとほしくて（イ本(よき人の)）　維駒
　建明しげき戸のきしる也　柴庵
めづらしき心地す月の七日頃　明
　雁かあらぬか鳥ふたつ行　非
衣擣その夫としもなき身にて　庵
　よきものいひは聞にやさしき　駒
水蒔て涼しくしなす瓜茄子　非
　騎馬見へ來るぞかぶりものとれ　明
おの〱の年は廿チに足らざるや（イ本初案(足らずしこ)）　駒
　一夜に滿る聯句百韻　庵
花にほふ奈良の古寺閑かなる　明
　鳥の蹴てたつ砂に陽炎　非
春の水大キな船を漕よせし（イ本初案(漕よせこ)）　夜半
　重き鎧の上帶をとく　駒
傾城に酌とらせつゝ月の前　非
　いせの音頭をとぢ物にして　半
露草の花を絞ッて繪のすさび　駒
　おさなき人に灸治勸る　非
むく犬のいぶせきまでに老くれし（イ本(ほどに)）　庵
　風もそよがぬ脊戸のやれ垣　駒
放下師が鼓とゞろく雲の峯　非
　あはや羽織の袖を引裂　明
立聞の身にうつゝなき藁艸履　半
　霰たばしるあとの月しろ　庵
聲氷る水田の鳧に矢を放ち（イ本初案(鴨一羽御菩薩が池に遊しこ)）　駒
　玄番といへる若くらの聟（イ本(いひし)）　非
世盛のむかしを見せる小屑衛　庵

きのふは佛事けふは追善　半
明やすき夜を寐ざりける勞れ皃　非
戯れる馬士のあら熱しくさ　駒
懷を落ていやしき錢の音　明
松の尾かけて凍どけの道　非
初花か彼岸ざくら歟杜の中　庵
うちかすみつゝ鐘聞ゆ春　執筆

其の二

正月廿日檀林會一順

うぐひすや茨くゞりて高う飛　蕪村
山田に鋤を入るゝ陽炎　几董
西國の大名通る春くれて　道立
香具屋店の普請出來たり　百池
殘る蚊に誰も雨待夕月夜　田福
くさ木の花のむさきほど咲　維駒
石垣に水ひた〳〵と秋の風　正白
みやびならざる關守の顏　月居

桃李　安永九年作

蕪村の連句で殊に推敲に苦心したものは『桃李』の二歌仙である。『此ほとり』の如く一夜にして四歌仙を試みる達吟の蕪村が、此の脇・第三を治定する爲め、几董と書信を往來して三日を要した書翰が現存するので、碧梧桐氏の說のように『桃李』の一卷に一ヶ月半を費した事になる譯である。斯く師弟の洗錬に努めた兩吟であるから、蕪村も自信を以て此の二卷を一册子として單行したのであらう。『中興六家集』にも『桃李』の板木をそのまゝ刷つて收めてあれば、『蕪村七部集』にも載せられ、几董の『附合手引蔓』には附句々々の註釋をさへ施してある。(帝國圖書館本)

俳諧桃李序

いつのほどにか有けむ、四時四まきのか仙有。春秋はうせぬ。夏冬はのこりぬ。壹人請て木にゑらんと云。壹人

制して曰、このか仙ありてやゝとし月を經たり。おそらくは流行におくれたらん。余笑て曰、夫、俳諧の活達なるや、實に流行有て實に流行なし。たとはゞ一圓郭に添て、人を追ふて走るがごとし。先ンずるもの却て、後れたるものを追ふに似たり。流行の先後、何を以てわかつべけむや。たゞ日々におのれが胸懷をうつし出て、けふはけふのはいかいにして、翌は又あすの俳諧也。題して、もゝすもゝと云へ、めぐりよめどもはしなし。是此集の大意也。

蕪村識

牡丹散て打かさなりぬ二三片　蕪村
卯月廿日のあり明の影　几董
すはぶきて翁や門をひらくらむ　丶
蟹のえらびに來つるへんぐゑ　村
年ふりし街の榎斧入て　丶
百里の陸地とまりさだめず　董
哥枕瘧落たるきのふけふ　董
山田の小田の早稲を刈比　村
夕月に後れて渡る四十雀　董
秋をうれひてひとり戸に倚　村
目ふたいで苦き藥をすゝりける　董
當麻へもどす風呂敷に文　村
隣にてまだ聲のする油うり　董
三尺つもる雪のたそがれ　村
餌にうゆる狼うちにしのぶらん　董
兎唇の妻のたゞ泣になく　村
鐘鑄ある花のみてらに髮きりて　董
春のゆくゑの西にかたぶく　村
能登どのゝ弦音かすむ遠かたに　丶
博士ひそみて時を占ふ　董
粟負し馬倒れぬと鳥啼て　村
樗咲散る畷八町　董
立あへぬ虹に淺間のうちけぶり　村
勅使の御宿申うれしさ　董
江に獲たる簀の魚の腹赤き　村
日はさしながら又あられ降　董

見し戀の兒ねり出よ堂供養　村
つぶりにさはる人にくき也　董
十六夜の暗きひまさへ世のいそぎ　村
しころ打なる番場松本　董
駕舁の棒組足らぬ秋の雨　董
鳶も鴉もあちらむき居る　村
祟なす田中の小社神さびて　董
旣玄番が公事も負色　村
花にうとき身に旅籠屋の飯と汁　丶
まだ暮やらぬ春のともし火　董
冬木だち月骨髓に入夜哉　几董
此句老杜が寒き膓　蕪村
五里に一舍かしこき使者を勞て　丶
茶に疎からぬあざら井の水　董
すみれ啄雀の親に物くれん　丶
春なつかしく疊帋とり出て　村
二の尼の近き霞にかくれ住　丶

七ッ限リの門敲く音　董
雨のひまに救の粮やおくり來ぬ　村
弭たしむのとの浦人　董
女狐の深き恨みを見返りて　村
寐がほにかゝる髮のふくだみ　董
いとをしと代りてうたをよみぬらん　村
出船つれなや追風吹秋　董
月落て氣比の山もと露閙き　村
鹿の來て臥す我中の戶に　董
文机の花打拂ふ維摩經　村
頭痛を忍ぶ遲き日の影　董
鄙人の妻にとられ行旅の春　丶
水に殘リし酒屋一けん　村
荒神の棚に夜明の鷄啼て　董
歲暮の飛脚物とらせやる　村
保昌が任もなかばや過ぬらむ　董
いばら花白し山吹の後　村
むら雨の垣穗とび越スあまがへる　董

三ッに疊んで投ふるさむしろ　村
西國の手形うけ取小日のくれ　董
貧しき葬の足はやに行　村
片側は野川流るゝ秋の風　董
月の夜ごろの遠きいなづま　村
仰ぎ見て人なき車冷じき　村
相圖の礫今やうつらし　董
添ぶしにあすら(原註)阿修羅が眠うかゞひつ　村
甕(モタヒ)の花のひら／＼と散　董
根繼する屋かげの壁の下萠に　ヽ
巣つくる蜂の子をいのり呼　村

安永九庚子冬霜月

秋風六吟歌仙　安永年中作

蕪村眞蹟の連句草稿として嘗て『ホトヽギス』に寫眞版を以て掲載された事がある。其の一の「身の秋や」の巻は蕪村删存のまゝで、初裏八句目の「實捨たる身のやすき哉　几董」の附句のみ几董の筆で、その上に蕪村みづから「庄司が山と身とは不レ苦と被レ存候」と打越句一隔テ、前ニアル句に對して、庄司の人名に肢幹の身をこゝに詠むとも、さし合ひを嫌はずとの註記をしてゐる。その他の巻は推敲の痕なく合せて五歌仙になるが、其の五の「秋萩の」巻は二の表七句目までゝ、それ以下を鈌き、歌仙に十一句不足してゐる。本文は初め掲載した「ホトヽギス」が見あたらないので、潁原氏の全集により、傍『蕪村の俳諧學校』に再錄したものを參照した事を一言したい。（大阪水落庄兵衛氏藏）

其の一

身の秋や今宵をしのぶ翌も有　蕪村
月を拂へば袖にさし入　月溪
鞍鐙露けく駒をすゝませて　自笑
餅召さずやと聲ひくめたる　田福

旅やどり古き家名のうれしさは　百池
　暮行空の雪ふりぬべく　春面
煙たつ竹田の邊り鳴わたる　几董
　明心居士の姪や世にます　自笑
聲だみて物うち語る雨の日に　月溪
　(原註)究竟くきやうの菖かつみ葺てよ　蕪村
桁(ケタ)走る鼠弦(ユヅル)を餌にはみし 初案(はみこ)　田福
　庄司が山の祟(出)なす神　百池
笈負てゆらりと水を越ぬらん　春面
　實捨たる身のやすき哉　几董
　(庄司が山と身とは不苦と被存候)
能きぬも着つ又あしきゝぬも着つ　百池
　暮をうらみてちりがての花　田福
月朧物見車のおもたくて　自笑
　山なだらかに春の水音　月溪
あちら村の寺は鐘つく彼岸也　几董
　うか〳〵米を舂へらしたり　蕪村
びんぼうを苦にせぬ人に身をよせて　百池
　黑い羽折をけふも着て出る　春面

光陰の矢矧の橋や掛かわり　月溪
　朝鮮人のなきがらを守る　田福
松明の(原註)火屑ほくずこぼるゝ涼しさよ　春面
　一二の木戸の山ほとゝぎす　自笑
練の袖聲なき泪かゝるらん　蕪村
　灶絶ふ伽羅やいづらかほれる　几董
夜すがらの風に明行閨の月　百池
　露に鼬の小魚はみ去　春面
秋の情扇に脩の筆すさみ 初案(筆立こ)　自笑
　越みちのくのわかれ路の酒肆　月溪
聲かれて老の雞脛高き　春面
　なぐさめ逢つ通夜の主從　百池
花深く檜皮の廊下斜也　几董
　比は彌生のやゝ十日過　田福

(編者曰、蕪村删存の附句は本文の寄註とすべきであるが、煩雑を來すのでこゝに一括して記す事とした)
身の秋や——(初案)かなしさや釣の糸吹秋の風
月な拂へば——(初案)露霜からで草のおとろひ

鞍鐙——(初案)朝の月鳳輦遠く拜むらん
旅やどり——(初案)いほやすく古き家名の宿とりて
能きぬも——(初案)隣から留主の扉をさしよせて
幕をうらみて——(初案)花はきのふに散仕舞たり
月朧——(初案)恨あるそなたの空よ朧月
びんぼうな——(初案)びんぼうな主に三世のちぎりして
練の袖——(初案)かきあけてけはひほのめくをくれ髮、とあるを(再案)けはゝでは中／＼夫の皃も見じ、とし更に(三案)練の袖の句に治定しあり。
灶絕ふ——(初案)佛の化身戀に沈みて

其の二

夕がほも扇も終に秋の風　大阪 二柳
露の烏帽子をまぶかにぞ着る　蕪村
江に臨む臺を月の明くれに　嘯我
聲なき鳥のしげく下りたつ　魯文
かねて斯ゝ馬塞る遠かたや　麥水
孤村の家に雪の簑買フ　百非
一たびは君が御代にと人しれず　亀友
いたゞく造酒の雫とく／＼　桃喬
牡丹花咲て四月のうらゝかさ　守大
伏水の城にもろこしの客　李康
傪のきらひに白きいる焚ん　有鳳
身のいやしきをかこつ初瀬女　二柳
かへりごとおのれめでたき歌よみて　蕪村
半輪圓きおもひなす影　麥水
菓子盆に生浦なしめづらしく　魯文
國司の弓矢秋寒き袖　嘯我
夕日さす山のこゝらに花植ん　桃喬
五歩せめて此床几置く春　亀友
祭とて壬生の里人行かよひ　百非
蓬が宿に醉て戀する　守大
曉のかやりにむせぶ別れかな　李康
風呂敷着たるむら雨の下　有鳳
かゝる世にかゝる聖のあれば有て　二柳
盗人ふたり夜を守りて住む　蕪村
さゝのくまひのくま水の片岸に　麥水

金おとせし主たづねける　魯文
　觀音の甍見かへる朝ぼらけ　嘵我
しぐれの鳩の嘴をたはるゝ　桃喬
うなひ子の色ある木の葉拾ひつゝ　龜友
　丹波路遠き三日の夕月　百非
かはほりのおとろふる音霧煙る　守大
　學びに痩て藥ほる僧　李康
錦織る蜀輪に小家がち　有鳳
　翌の軍の手配さだむる　二柳
灯すれば身に影くらき花のもと　蕪村
　凡夫いくらの陽炎を經し　麥水

其の三

餘處の夜に我夜をくるゝ礁かな　大阪 大魯
　殊更秋の脊戸口をもる　蕪村
殘る月わすれ皃なる桐の木に　米候
　笏に何やら記されにけり　守一
凱陣のおの〳〵名のる聲すみて　東菑
　沖よりしらむ家鴨の羽はゞき　志慶
錦木に霜置ける迄立つくし　霞東
　又針折るゝなれぎぬぞうき　魯
物學びしつゝ日本へ歸るらん　村
　玉なげうてば波の鎭る　菑
さりげなく遠の山もとしぐれ降　慶
　御領ゆたかに鵠の下り居る　几董
此道や三度遊行の札受て　菑
　味噌も女房も風を引たり　候
夕ぐれの烟おさまる蚊屋の月　一
　富士を見た日は早う宿とる　東
花とさすさくらを酒の鄙心　董
　むかし雛の目なら鼻なら　村
春の夜の鼠灯を恨む聲　魯
　奥の間深き家のおところへ　慶
物狂ふ女錦を着るに堪ず　候
　哥をさゞめの琵琶を舟漕〻　董
雨ほろ〳〵朽ぬ音降るみなし栗　村
　人にかまはぬ我寺の月　魯

身の秋の三斗の年貢仕廻たり　東
　百里となりは國を爭ふ　候
光りものまだ暮やらぬ山のかひ　慶
　盗んでもどる馬に踏れた　一
隔住む弟あやしき成長ッ　魯
　佛法ちかくわたり來にけり　村
かつみ生ふ沼も旱の野につゞき　董
　羅をのがれて鳥高く飛　慶
斜なる和田が屋しきの堺普請　一
　閏二月も半過たり　東
木の間より花見ぬ人を橋に見る　芙蓉花
　春に狂ひの皃黒ふなる　畜

其の四

乾鮭をしはぶりて我皮肉かな　名古屋 曉臺
　爐に氷とく硯匂へる　蕪村
しら梅の朝日に細く咲出て　几董
　のこる月より霞そめけり　大魯
春の旅刀わすれし人遠き　我則
　降れる門に語りイゝ　月居
牛の子の拳透す寒空に　魯
　鷲や蹴ぬらん鳥叫ぶ聲　董
むづかしとひそみても世はむづかしや　臺
　よし野殿より御題給はる　村
杉の雨從者の烏帽子に雫して　居
　我待やどや細きともし火　則
月更て小家の礎聲恨む　村
　戎入れじと秋守る老　一
劒磨ぐ山したゝりの冷かに　居
　花片々と石の明王　董
春おしむ念者法師につれ立て　村
　むかしかのこのあたゝかな袖　居
吉川の城下しづかに夕日影　董
　鷄買て馬につけ行　則
丁々と聞ゆるは碑を打歟何　居
　うの花深く雪の谷水　楞良
山伏の頬にくさげに息絶て　董

矢剱の長が法事最中　村
寒菊に結びて文を屆けり　良
白き衣きてまぎれよる戀　董
後夜の雨うつほ柱のゆかしさは　村
廬山の雲や月うづむらん　良
秋の興禁酒の僧に酒を乞　則
まだき冬なる山茶花の咲　居
曉にうぐひすの子の初音して　良
二の瀬の醫師を送る市原　則
碓を怠りがちに踏くらし　村
丸裸にて發心をする　董
花咲て鎧の朽る君が代に　良
行人路をゆづる春の野　居

其の五

秋萩のうつろひて風人を吹　いせ樗良
イめばなを夕身にしむ　几董
白鵰をはなつ雲間に月見へて　蕪村
馬上の友を呼もどしけり　良

三伏の旦涼しき茶一碗　董
類聚國史足らぬゆかしさ　村
罪に逢し翁が宿を訪らへば　良
かしこき姫の只泣になく　董
酒進む上座の鬼のあてやかに　村
しだれざくらの花結びあげ　良
千部滿て香のかほれる春の庭　董
かたいが五器にもゆる陽炎　村
我旅のうさを語らん人もなくて　良
波打よする石に詩を書　董
うしろざまにとつはい頭脱捨し　村
老てめでたき母の舞の手　良
物の榮は夜こそよけれ月の秋　董
露たはゝなる菊をかゝぐる　村
野分せし美人の墳を尋ねかね　良
恨を諷ふ琵琶の一曲　董
假ノ館（ミタチ）ともし火足らぬ春の夜に　村
藤の花ちるにごり江の隅　〻

蛙呑む蛇あさましと礫して　董
紀の路を奈良へ出る道連　丶
此家の狂女世になく成ぬらん　村

初懷紙　天明二年作

春夜樓は几董の庵号であるから、天明二年正月その亭で催した連句を『初懷紙』に發表したのである。道立の發句で脇句の晋明は几董である。蕪村は第三を詠じてゐる。恐らく歌仙の形式で運んだのであらうが、こゝには出坐の一順よりない。歳旦帖、必ずしも前年末の配本に限らない事は、此の『初懷紙』にその年正月の連句を收めてゐるので例證されよう。

正月廿一日　於春夜樓中
俳諧之連歌

涕かみて梅を尋るづきん哉　道立
殘る雪ちる春の山かぜ　晋明
苞の獨活ゆかりの色のゆかしくて　蕪村
うらなき人の刀みじかき　百池
湯上りの月凉しさよ七日頃　月居
北の屋かげのわすれ草さく　佳棠
子に乳をゆだねて犬の眠らむ　正巴
たとき聖に二度めぐり逢　之兮
川に添て濃酒を賣村はづれ　我則
ふるき榎の枝たはゝなる　熊三

花鳥篇　天明二年作

或人が梅翁宗因の短册を得て、蕪村に脇句を所望したので、蔚勃としてこゝろ動き、「言下に一言を吐」さらに門生に韵をつがせて、歌仙一卷をなしたので、花櫻帖の後に附する事とした蕪村の『花鳥篇』の序で當時のことが窺はれる。宗因の發句に對し蕪村は名殘の裏

に「宗因もきのふ江戸からのぼられて」と追懐し、呑獅の擧句に「たしかに聞〻ときじの二聲」とあるのが脇起しの體に叶つてゐる。『一夜四歌仙』の附錄による。（和露文庫本）

ほとゝぎすいかに鬼神もたしかに聞　宗因
ましてやまぢかきゆふだちの雲　蕪村
江を襟の山ふところに舟よせて　几董
又や通辭の袖ひかへつゝ　百池
藥種干す匂ひのこりて月夕　佳棠
藏かと見ゆる露の家〔造〕　金篁
荻萩のおどろきやすし西の京　湖柳
變化逐うつ夜にみやびして　湖嵓
むらさきのさむるも夢のゆくゑなる　田福
呉楚の際に雨うらむ雲　我則
弩を枯野の末にこゝろみて　之兮
飯をにぎらば大ィにすべし　是岩
聲だみて江湖頭の尊とさよ　熊三
柳はみどり花は紅ゐ　正巴
御車の軒端を蜂のうかゞひて　維駒
我ゆく春や戀せずて過　吾琴
みごもりに影沈たる朧月　月居
古の林の夜落る枝　管鳥
顯密の僧なりし身を武者修行　紫洞
麥さへ喰へば泊ておく村　銀獅
さみだれにひよんなしばゐを貰て來て　自笑
うしや鏡の蓋を踏割ル　佳棠
遠く見てかり寢の皃を愛スらん　春坡
卜部の家をつぐ子也けり　几董
まめの粉の指あやまてる小豆餅　雪居
そとは見せじときぬかづけ置　老雨
秋出たる狀を師走に投込て　蕪村
三番船の鰤のすて賣　丶
はら〳〵とあられの中に朝の月　百池
うれしや藁を焚仕廻たり　魚赤
藍瓶へ肩の手拭落かゝり　春坡

ことしは多いだんぢりの數　松化
宗因もきのふ江戸からのぼられて　蕪村
長雪隱もよいほどが有　宰町
俯あふぐさくらの木末花のもと　道立
たしかに聞〻ときじの二聲　呑獅

初懷紙　天明三年作

正月廿一日は几董亭の嘉例俳諧日と見えて、前年の連句も同日であるが、その他の『初懷紙』も同日興行のものが載つてゐる。これも其の日の歌仙のうちから、出席者の一順のみを揭出したのであるらしいが、句數は初裏の八句までゝ都合十四句である。蕪村は此の年の十二月故人となつたので、几董の『初懷紙』にはこれを名殘りとして、以後その作を見る事が出來ないのである。

正月廿一日於二春夜樓一興行

俳諧之連歌

夕附日すみれの影も尺ばかり　正巴
春ゆく水や岡山の裾　几董
いる蛸を塩ものうりの商ふて　道立
兒の黑子も兄によく似た　維駒
たはれたる連哥始る月待に　之兮
荻の御殿の夜のしら露　我則
垣たふす野分の筋の恐しく　春坡
念佛唱ふる船頭の妻　松化
此日ごろ三升の酒を酢にしたり　佳棠
雨疎ければ晝も蚊をうつ　百池
かゝる地にすくせいかなる遊女して　是岩
夢に逢たる人のつれなき　月居
二千里の外とは見へじ花に月　蕪村
うごかぬ水に小舟さす春　執筆

風羅念佛　天明三年作

曉臺の發願で天明三年三月十一・十二の兩日、近江の幻住庵で芭蕉百回忌の俳諧法會を行ひ、同十四日洛東圓山に席をうつし、十五・十六の兩日に三席をかさねて、十七日には蕪村も出席して第三を試みてゐる。同廿三日金福寺芭蕉庵に於ける俳諧を以て、一七日の法會を果したのである。此の日は菴主として蕪村の列坐せるは勿論である。『風羅念佛』は曉臺が右百回忌記念に梓行したので、其の第一法會之卷にこゝに載せた連句二卷が出てゐるのである。靈前各詠の中に、

祖翁百回大會

空にふるはみよしのゝ櫻嵯峨の花　夜半翁 蕪村

と、法會の卷に錄してある。（晋風文庫本）

其の一

（三月）同十七日同所

追善之俳諧　正式

花咲て七日鶴見る麓かな　曉臺
水行かたに春や滿らん　蕪村
飜へせ永和九年の唐衣　桃睡
いとさゝやかに兮角(ツノカミ)の兒　志好
しなひあふ小笹がもとの雫して　百池
田鼠わたる岡山の裾　呂丘
打濕る月の且の雲丹の臭(カザ)　如瑟
肩もあらはにやゝ寒の空　五雲
提して酒をたまはる角力取　春坡
左の大臣入おはします　熊三
うき中に當意の答めでたさよ　銀獅
卯の花垣にはさむ玉章　湖陸
雲のへり雨こぼし行時鳥　東窓
出船をいそぐ奈良の商人　管鳥
とぼしする用意かしこき僕倶して　臥央
狐鳴なる露のしのはら　舞閣
秋の風墨の袂の綻びし

撰者もがなと月をよみ置　　執筆　月居

其の二

（三月）同廿三日四明洞下金福寺於芭蕉庵興行

追善之俳諧　正式

花ざかり奇特や日〻に五里六里　　曉臺
降ラずて霞む雲の尻兀　　蕪村
鳳巾の糸心行迠のばすらん　　湖柳
鄰の家の從弟むつまし　　熊三
替てとる酒と肴に歌よみて　　湖嵒
萩みるほどの世話しけりける（ママ）　　道立
乙鳥鳴秋空既に月夕　　元室
鱸に箸を立る舷　　江艸
左手に烏帽子のかけ緒結びつゝ　　雪居
後オクれて道を走る惟光　　几董
ほとゝぎすなけの情の曉や　　桃睡
空だのめなる花罌粟の雨　　月居
しのぶ間を優婆夷のもとに身をよせて　　我則

小原黒木の煙わびしら　　春坡
行年の餅米五升塩松魚　　維駒
とろ〳〵と鳴城の九ッ　　臥央
杉高き月に鴉の飛わたり　　計之
露霜あるゝ刀禰の川崖　　羣闕
ちゝはゝに綴ころもや打ぬらん　　是岩
よき武者一騎門に彳　　佛仙
黒眉に梨花散まぶる夕あらし　　橘仙
春の小鳥のからごゑに啼　　松宗
爐塞で船を催す二三人　　田福
雑魚鮓たしむ幽庵が棚　　五雲
おもしろき霧の月夜となりにけり　　德野
奈良のあたりの芒穗に出る　　舞閣
老夫婦高きに登る杖曳て　　管鳥
ことしも纒カツ頭薄いろの衣　　之兮
米おほき岐阜の富貴は淋しくて　　執筆　百池
松にならひし椎の木もあり

五車反古　天明三年作

其の一門に才を惜まれた俊髦召波の故人となつて後、遺子維駒をたすけ、几董の編集した『五車反古』中の脇起し二卷である。「曲水や」の卷は蕪村第三を詠みて三吟の歌仙完備してゐるが、「冬ごもり」の卷は一順一折である。前者は卷頭をかざり、後者は卷軸にすわつて居るので、『五車反古』の連句でも白眉の作である事が頷かれる。殊に「冬ごもり」の卷は蕪村存命中のものでは、恐らく最後の連句であらう。たゞ一句しか詠んでは居ないが、――（和露文庫本）

其の一

脇起俳諧　春

曲水や江家の作者誰〳〵ぞ　春泥舍召波
　唐士使かへり來し春　維駒
のこる月山なき空に霞らん　蕪村
　時の皷を打しまふたり　田福
藻舟漕ぐ男の髪もみだれたる　駒
　三日の粮の用意かしこき　村
仙之（定カ）のしるべも今は跡なくて　福
　鵲巣くふみんなみの松　駒
まどゐして深き軒端の尊さよ　村
　祈の僧の眼とぢたる　丶
あらぬ戀中〳〵人に語らまし　駒
　吾妻ぶりなる哥ぞかはゆき　福
花かつみ刈とるほどもなかりけり　村
　夕日斜に葬の行見ゆ　駒
珠數挽の二間間口を住なして　丶
　丹（ニ）をべた〳〵と大津繪の鬼　福
かへり花ひくき梢のにほふらん　丶
　小春の月の雨暗き夜に　村
亡（ナキ）妻の子を懷に通ひ來し　丶
　けぶりたえぬる香の名はそも　駒
ひか〳〵と室の揚屋の銅盥　丶

響ｷくほかに杭ｾうつ音　福
胡蘿蔔の花は咲ずもありぬべし　福
下福島の鮓なるゝ比　村
入口に人妨の晝寐して　駒
隣に耻よしうとめの聲　福
齋料の米こぼしたる苦しさに　村
おもたき傘を返す日もなき　駒
月の宵狐や僕を旬ｻﾝ(勾)引ﾋけむ　ゝ
露踏しだく艸の裏門　執筆
菊合兩六波羅のほのめきて　福
頭ﾗ童ｶﾑﾛﾆ齒豁ｱﾗﾊﾅﾘ　村
夢三夜犠をやめよと御詫宜(宣)　駒
二十年來洪水もなし　福
うたげして花の日なたに老夫婦　村
遠ききゞすに近き雉子鳴　駒

其の二

脇起俳諧　冬

冬ごもり五車の反古のあるじ哉
ひとり寒夜に甁うつ月　維駒
郊外何焚やらん煙して　鐵僧
流のするゝの水はふたすぢ　臥央
枝伐て一のまぶしを定むらし　蕪村
甥の太郎が先口を利ｸ　百池
新宅の夏を住よきはしら組　也好
水打そゝぐ進物の鯛　春坡
裂やすき糸のみだれの古袴　正巳
妻ﾒを奪ひ行夜半の暗きに　之兮
ちら〳〵と雪降ﾙ竹の伏見道　道立
小荷駄返して馬嘶ふらん　我則
なく〳〵も棺を出す暮の月　自笑
よからぬ酒に胸を病ﾑ秋　佳棠
小商ひ露のいく野ゝ旅なれや　湖柳
燕來る日の長閑也けり　湖嵒
反古ならぬ五車の主よ花の時　几董
春やむかしの山吹の庵　田福

右一巡捻香

はいかい袋　天明年中

大江丸の『はいかい袋』は享和元年の板本であるが、蕪村・蓼太の二子に親炙した人なので、その中に

いつのとしの秋にや。雪中庵・夜半亭往來の哥仙あり。ことしつちのとひつじの秋冬は、ふたりの翁の遠忌にめぐれば、追善のひとつにもと、とりいでこゝに記す。

と前文を記して掲げてある。つちのとひつじは寛政十一年で蕪村の十七回、蓼太の十三回に相當してゐる。又此の兩吟は飛脚問屋の大江丸が兩者の文通を届け合つたのであるが、「此一卷、ひさしく物にひめをきしかば、むしばみて文字のゆきかひもさだかならぬを、九二庵のぬし、はやくよりうつしをき申されしをもて正す」と註記してゐる。（和露文庫本）

わかゝりしときは、武江にして

俳林の花をあらそひ、實をもとめ、今は關山をへだてゝ、いつあふさかのあなたこなたに、たがひの老情を申遺しける

君と我月にうつらば嘸泣む　蓼太
ゆめのゆきゝも二千里の秋　蕪村
くづの葉に荻のうは風吹添へて　仝
かど守ひとり履つくりゐる　太
歷ゝのなでしとみゆる古火桶　仝
祕曲つたゆる息なゝめなり　筆
ウ
つくし舟唐土ぶねに漕ならひ　村
廿日あまりの夜半の雨風　仝
女にもまがへる宮を背に負ひ　仝
引ばなびかむ袖に御經　仝
朝まだき戸ざせる三輪の山陰に　太
五合ばかりの米のしら水　仝
からき目に夜釣の友のこりながら　仝
髪に霜をく母のくり詞　仝
在すかとかざりて鎧ほし兜　仝

月をかさねしはつ春の餅　仝
花むこも雪中庵の三ッ物に　村
　小舟つけたるむめの片町　仝
てら／＼とむらさめ遠きにしの空　仝
　頓寫の施物引あまる迄　仝
傳なる藤太が袴脛こへて　仝
　いばらの花の匂ふ大原　仝
澁あへる夏の炭櫃の冷じさ　太
　こがねに富る僧あはれなり　仝
なきあとの公事に成たる甥二人　仝
　たちながらこそ雪のにしき木　仝
神の矢のひとすぢ思ひ初玉ひ　仝
　庄司がやどの鶏の羽たゝき　村
大水の三尺落しあさの月　仝
　いこまの山の淡き秋霧　仝
攝待に古郷の人のこしかけて　仝
　土藏もたてしとかたる嬉しき　仝
天草の亂より後は時津風　太
　狀につばさのなき斗也　仝
としぐ＼の花にとおもふ夜半亭　仝
　やせ臑いさむ千艸の比　仝

右往來哥仙、大江丸執行て滿尾したり。

新雜談集　天明年中

蕪村・几董の二人相携へて攝津大石の士川亭に投じた時、士川の舍弟士巧・士喬と五吟歌仙を行ったのである。安永七年三月は遲櫻の季節に恰當するが、几董『戊戌之句帖』には此の前文の二句とも見えないので、その年の事とするには躊躇される。別の時の旅行であらう。『新雜談集』は天明五年の開板で、前文に「ひとゝせ」とあるので蕪村生前としても、いつの年であるか明瞭しない。（大阪水落庄兵衞氏藏本）

士川は攝灘のあいだに、さうな

き俳諧の好人也。ひとゝせ夜半
叟とかの地に遊びける時、生田
の森にて
　足引の宿かる爲與源櫻　蕪村
猶ゆふづく夜のほど、花の邊り
を徘徊し侍りけるに

月の明き夜は賴あるさくら哉　几董
　樓の灯による胡蝶一片　士川
酲とけやらぬ春もやゝ過て　蕪村
　劍うつ日の朝淨めせん　董
淺井汲徑うれしき山下に　川
　垣根ながらのきふり花咲　村
しのぶ身を隣の聟にほしがりて　董
　戀の連哥に胸つぶれたり　川
梅酒やとくりの底にわすられし　村
　調度數ある丈山の庵　董
水無月へ越えても晴れぬ皐月雨　川
　船訪ふべくとおもふ島守　村
嘗聞名利をにくむ人やらむ　董
　琵琶かきならす秋草の上　川
流矢の水に落つゝ行月や　村
　雁たつあとに猿(マシラ)聲有　董
麓邊や夕暮の風に花の散　川
　春たのしさに小家建たる　村
君と我苣の酢みそに酒二升　董
　うたゝ夜を寐ぬ曉のかね　士巧
遠篝見えずなりたる山の端に　村
　ほさちを拜む有がたやそも　董
室の津や時雨に添ふる波の音　巧
　ねまきのまゝで戀に朽なむ　村
いゐの香の胸に痞るびんなさよ　董
　小草花さく前栽のくま　巧
月の夕狐を叱るおきな丸　村
　僧都と秋を語る淋しさ　董
土釜に茶を煮る薬柴折くべて　士喬
　今は天平寶字何年　村
からうじて唐土の書ゝ盜來し　董

春日のどかにすみよしの浦　喬
花の雲にほひあまりて南す　村
菫は引ぬ行幸の道　董
盃の流るゝかたへ鶴下りて　喬
白きといへる咏物を賦ス　川

續一夜松後集　天明年中

几董の『續一夜松後集』は天明五年の出板で、蕪村歿後三年になるが、それに「古夜半亭いまぞかりける比、三吟の表あり」とて、百池・蕪村　几董の表六句を掲げてある。なほ几董は語をついで「今一夜松の時におひて、佳棠ともに首尾し侍る」と述べ、蕪村の代りに佳棠を三吟の一人として歌仙滿尾となつて居る。參考の爲めに初裏以下も省略せずに載せて置く。（和露文庫本）

國を去て三月花に故人有　百池
春ものうしと布衣を脱らん　蕪村
雨雲の降もさだめぬとまり狩　几董
川音響く闇の十六夜　池
歸さの童子に秋を諷はせて　村
紅葉手折つ擔ふ酒甕　董
棟上のあとは烏帽子も蹴ちらかし　佳棠
源家榮えて奈良の賑ひ　池
遊女すら手の書ざまにしのばしく　董
戀のよすがに絹五百疋　棠
玉といふ椿咲たる雪の中　池
僧ひれふせる一棒の下　董
入唐のおもひ堪べくあらぬ哉　棠
荒盡したる海の新月　池
蕎麥切の外は物なき秋の宿　董
露の垣穗に茶を啜つゝ　棠
ゆつたりと人日ごろの人心　池
袖よりかすむ放下師が舞　董

鏽のこんとうなるや春の風　棠
　馬の灸を居へしまふたり　池
勾引（カドヘ）さる旅の女を助ばや　董
　雨の小笠に身を細うして　棠
影うつる障子をしばしふし拜ミ　池
　土器めぐる陣のあかつき　董
おくれじと巴陵の粟を運ぶらん　棠
　風に向ふて鳥さはぐ秋　池
參ッなき彼岸の談義月かけて　董
　火ともすかたに砧うち出す　棠
はだしにて歩行せらるゝ舟上ッ　池
　命はかなき康賴の母　董
朝夕のけぶりにふるゝ古屛風　棠
　うき世小路にとしは暮ゆく　池
飲明てまた口を切孤かぶり　董
　去てもよきと睡る强盜　池
老夫婦あるじいまさぬ花守て　棠
　戀させじとや猫繋ぎ置　執筆

常盤の香　天明年中

紫曉が蕪村の十七回忌に『常盤の香』を編集する際、近江の靑雲居騏道から寄稿した連句の斷片である。騏道はこれに就き「むかし園城寺にて風詠したる一卷、三師はとく物故し給ひ、我ひとり存せり。ことし蕪叟十七回忌の靈前に向ひ諷經にかへんといふ。靑雲居」と註記してゐるが、そのことしといふは寛政十一年である。（大阪水落庄兵衞氏藏本）

薩埵宮にのぼりて

月に漕ぐ呉人はしらじ江鮭　蕪村
　あぼしにならふ笘の秋ざれ　曉臺
窓近き荻の茂り葉うらがれて　几董
　雨になるべき風起りけり　騏道

（原文）下略

机ずみ　寶暦七年

宋屋の古稀の賀に出板された『机ずみ』後編に、宋屋引墨の附句を一列に掲げた中に蕪村のが一句ある。句のかしらの「細道」は賦物にこの二字を取つて作句した事である。そして宋屋の三笠山の点印のところに出てゐるから、机墨庵印譜によつて此の一句百五十点である事が知られる。（近江本願寺藏本）

細道　追剝に故郷の錦してやられ　蕪村

花の友　天明年中

三宅嘯山の著で天明四年に出板された『花の友』には、前の『机ずみ』には附句たゞ一つを記されたゞけであるのに、蕪村の附句を四句も掲げてあり、嘯山あたりの点取の巻にも、蕪村の出詠した事が知らるゝので興味を覺える。たゞし前句附ではない。歌仙なり百韵なりの中から、前句と共に拔抄したものである。（和露文庫本）

居合腰思ひの外な疝氣持
蕎麥に呼るゝ闕の人ゝ　蕪村

裂ながら行戀衣なる
文盲な噺聞ゆる艸の菴　仝

鐚ひか／＼と道のべの錢
跡に先に成るますら男を訝りて　蕪村

年程に心も連て行物か
朝鮮責も入らぬ事いの　蕪村

蕪村文集

蕪村文集

いそのはな　延享二年作

下總結城の晋我を悼んで蕪村の試みた俳躰詩である。晋我は早見氏、北壽は隱居後の号である。延享二年正月二十八日故人となつた。晋我五十回忌にその子桃彥の板行した『いそのはな』(寬政五年板)に「庫のうちより見出るまゝ右にしろし侍る」として本文を掲げてある。延享時代既に蕪村と号してゐた一證左でもある。(帝國圖書館本)

北壽老仙をいたむ

君あした去ぬゆふべのこゝろ千々に
何ぞはるかなる
君をおもふて岡のべに行つ遊ぶ
をかのべ何ぞかくかなしき
蒲公の黄に薺のしろう咲たる
見る人ぞなき
雉子のあるかひたなきに鳴を聞ば
友ありき河をへだてゝ住にき
へげのけぶりのそと打ちれば西吹風の
はげしくて小竹原眞すげはら
のがるべきかたぞなき
友ありき河をへだてゝ住にきけふは
ほろゝともなかぬ
君あしたに去ぬゆふべのこゝろ千々に
何ぞはるかなる
我庵のあみだ佛ともし火もものせず
花もまいらせずすご〴〵と彳める今宵は
ことにたうとき

釋蕪村百拜書

古今短册集　寶暦元年作

京都の毛越が貞德以來、古今俳諧の名ある人

の短册を輯めて、二帖の『古今短册集』を板行した跋文に、江戸から蕪村の書送つたものである。天青堂の覆刻本があるが、私の藏本には

古今短册集　前編全二卷出板
右後編追刻御句御加入可レ被レ下候
但前編之作者除レ之
　京師　大專菴毛越

と別紙に刻した今いふちらしが挿入してある。嚢道人の別号は、此の跋文で知る事を得たのである。（晋風文庫本）

余、平生二三子と古今誹諧の異同を論じて、かたはら春秋に入。今や誹諧に覇たる者、各其風旨を異にし、彼を誇り是をなみし、肱はり頬ふくれて自宗匠と徇へ、或は豪富を鼓吹し、孤陋を馳驅し、多く未練の句をならべて撰に備ふ。織者目を翳てすつ。はては西念坊が夜の衾に糊せられ、刻心尼が醬の瓶にまつわる、恥べからざらむや。おもふに雄才の子興て、かならず一匡の功をなすもの出む、夫ちかきにあらん歟。其唇いまだかわかず、大夢子が古今短册集出。大にいにしへの名流を集め、ちかく當時の同盟を會す。まことに其風詠聲あるがごとく、その芊澤うごくがごとし。こゝにおいて人始て誹諧の美をしり、風雅の德を仰ぐ。たとはゞ首山葵丘の盛なる森然として見るべし。穴かしこ、余が論むなしからず、はた毛越を稱して、誹管仲と呼て論中の盟主となさむ歟。毛越笑て余に跋をもとむ。余曰、我於レ子亦管鮑の交あり、辭すべからず。つゐに此言をもつて書。

寶暦辛未冬　東都嚢道人蕪村誌

夜半亭發句帖　寶暦四年作

阿師は夜半亭巴人である。其の十三回忌に蕪村と同門結城の雁宕、阿誰・大濟と志を合せて巴人の句集を編み、これが出板を企てゝ蕪村の跋を求めたるに對し、此の一文を書送つた

ので、巴人追善に『一羽烏』を編まんとして成らざりし事などを述べてある。『夜半亭發句帖』は寶暦五年の出板でその跋に附いてゐる。（帝國圖書館本）

阿師沒する後、しばらくかの空室に坐し、遺稿を探て一羽烏といふ文作らんとせしも、いたづらにして、歷行する事十年の后、瓢々として西に去んとする時、雁宕が離別の辭に曰、再會興宴の月に芋を喰事を期せず、倶に乾坤を吸べきと。其言をよしとして翅書さへまめやかにせざりしに、ことし追悼編集の事を告來るにぞ、さすがに涙もろく、齋園扇の上に酬書し侍る。跋とすやしらず、捨るやしらず。

釋　蕪村

天の橋立賛　寶暦七年作

蕪村の在丹中に百川と邂逅した舊緣によつて、彼の天の橋立の圖に此の文を賛したのである。百川は彭城（サカキ）氏、八僊觀は別号である。通説によると、百川は寶暦三年八月歿した事になつてゐ　が、蕪村との袂別が「丁丑九月」であるならば、同七年に相當するので、歿年に疑ひを挾まなくてはならぬ。尤も後日の賛とすれば問題でない。碧梧桐氏の『蕪村とは誰か』による。（攝津池田小林一三氏藏）

八僊觀百川、丹靑を好んで明風を慕ふ。嚢道人蕪村、畫圖をもてあそんで漢流に擬す。はた俳諧に遊んで、ともに蕉翁より絲ひきて、彼は蓮二に出で蓮二によらず、我は晋子にくみして晋子にならはず。されや竿頭に一歩をすゝめて、落る處はまゝの川なるべし。又、誹諧に名あらむことを求めざるも同じ趣なりけり。されば百川いにしころ、この地に遊べる歸京の吟に、

橋立を先にふらせて行秋ぞ

わが今の留別の句に、せきれいの尾や橋立をあと荷物。彼は橋立を前駈として、六里の松の肩を揃へて平安の西にふりこみ、我は橋立を殿騎として洛城の東に歸る。共

にこの道の酋長にして、花やかなりし行過ならずや。

丁丑九月　嚢道人蕪村書レ於二閑雲洞中一　印　印

木の葉經　寶暦年中作

弘經寺は下總結城にあり、木の葉經は一にむじな經ともいひ、同寺に保存されてゐるさうである。此の遺文は京都に寓居して後、たま〳〵閑泉亭にて導師の老僧の事から、木の葉經の奇談を思ひ出してしたゝめ置いたのであらう。乾氏の『蕪村の新研究』による。（京都和田秋蒼氏舊藏）

しもつふさの檀林弘經寺といへるに、狸の書寫したる木の葉の經あり。これを狸書經と云て、念佛門に有がたき一奇とはなしぬ。されば今宵閑泉亭に百萬遍をずきやうせらるゝにもふで逢侍るに、導師なりける老僧、耳つぶれ

聲うちふるひて、佛名もさだかならず、かの古狸の古衣のふるき事など思ひ出て、愚僧も又こゝに狸毛を嚙て、

肌寒し己が毛を嚙木葉經

洛東間人　嚢道人釋蕪村

鬼貫句選　明和六年作

太祇の考訂本『鬼貫句選』は、その後梓行された『七車』で見ると、同書の抄本である事が解るが、太祇は「七車といふ家の集は、世にあらはれねばよしなしや」と知らず、蕪村も跋文に「もしは草こゝかしこにかき集めて」と太祇の苦心を語るのみで、『七車』の抄本とは知らなかつたらしい。（晋風文庫本）

鬼貫句選跋

五子の風韻をしらざるものには、ともに俳諧をかたるべ

からず。こゝに五子といふものは、其角・嵐雪・素堂・去來・鬼つら也。其角・嵐雪おの〳〵其集あり。素堂はもとより句少く、去來はおのづから句多きも、諸家の選にもるゝこと侍らず。ひとり鬼貫は大家にして、世に傳る句まれ也。不夜菴大祇としごろこの事を嘆きて、もしほ草こゝかしこにかき集めて、數百句を得たり、たとはゞ滄海に網して、魚をもとむるがごとし。なをもれたるものいくばく歟侍らん。さるを鬼つら句選と題して、はやく世の好士につたへむと、例の氣みじかなる板もとは八文字屋自笑也。

于時明和己丑春正月　　三菓軒蕪村書

平安二十歌仙　　明和六年作

去來から芭蕉に教示を求めた書翰に、芭蕉の返事をしたゝめたものを見て、太祇の感激し、蘭古・嘯山と三吟にて明和三年十一月より同四年九月まで會合廿回にして、歌仙廿卷を成就した。蕪村その意氣に感じ出板をすゝむると共に、此の序文を書與へたのである。（大阪水落庄兵衛氏藏本）

三吟

鶯に朝日さす也竹格子　　浪化

雛の道具を取出ス春　　去來

又

雛のほこりを拂出ス春

又

袷ばなりを取出ス春

又

いそがし事も先仕舞春

又

めつた吹する衣更着の風

又

小いそがしさも埒明る春

隨分あんじ候へども出不レ申候。あと方もし能句出候はゞ、又々申べく候。此内雛のほこりの句可レ仕やと存候。とかく御了簡可レ被レ下候。

是ヨリ蕉翁ノ書ナリ　小いそがしさも埒明ル春

此句ヶ樣ニ仕候而は

ゆるりと春なかまへたる庭

此中素牛集に、はるの句たのぞまれ候而即席

鶯(の)雀よけ行枝うつり

いかゞくるしかるまじきや。とかく手ぬるくなり候而きのどく〳〵。以上。

史邦との三吟はいかゞ成行候や。あたら三吟にて候。何ぞニいたし申度候。

蕉翁ニ去來一紙兩筆ノ書ハ、向某ヨリ𠮷居傳來ス。𠮷、又、長松下隱古ニ譲ル。𠮷ハ古ガ叔父ナリ。向某ハ去來ガ通家也。

右一紙兩筆のふみは、長松下の藏るところにして、げに稀有のものなり。其比、去來はさうなき作者にして、蕉翁もこのおのこ欺きがたしと、つぶやかれけるとぞ。さある人のかゝる脇なむどせんに、いとたやすかるべきを、自らの臆にことはりかねてや、翁の沙汰をこひもとめにける。殊勝の事にこそ侍れ。さてこそ翁も、かくやなどひねり直れけるも、なをこゝろゆかずや侍りけむ。「禮者うすらぐ春のしづかさ。と砥並山には聞へにける。一日太祇・嘯山、長松下を訪らひ、この書をひらき見て、いにしへの人の道に深切なること、かばかりに侍れば、すゞろ懷古の情にたえず。やがて三吟の發端となりて、廿チの席をかさねて、はたちの歌仙なりぬ。しかはあれど、其角が月に嘯く体にも倣はず、嵐雪が花にうらめる姿にも擬せず。まいて今の世にもてはやす蕉門とやらむ質を、もはらにするにもあらず。たゞ己がこゝろのさま〴〵に、思ひ邪なきをのみたとぶ成べし。もとより三子の意に得たりとする俳諧にもあらねば、人の見んこともいとくるしとて、草稿のまゝにて、橘仙堂が棚架に打すてありけるを、あたら三吟なり。なんぞにしたまへと序して、三子を催すものは、

三菓散人　蕪　村　書

貞室眞蹟鑒定

明和七年作

江戸の泰里が京都に五疊庵を結んだ時、その手に入れた貞室の貞德終焉の記眞蹟を見て、

蕪村が太祇・嘯山と共に其の奥書に書いた鑑定書で、本文は國書刊行會本『三十幅』にも收めてあるが、故水落露石氏の『聽蛙亭雜筆』による。（肥前伊萬里前田寅之助氏藏）

これは〳〵鳥羽田にあさるかりがねの、ふみたがふべくもあらぬ貞室翁の眞跡なりけり。泰里のぬし、このみちのすき人にてあなれば、かうやうのたときもの數もつくさずひめおかれける。まことに煙雲の眼を過るには似もやらず、蝶鳥の花に集る類ひなりかし。それが中にもこれらや奇しき一のたからなるべし。

明和庚寅水無月　蕪村鑒定

其雪影　明和九年作

几董の父几圭の十三回忌追善『其雪影』の序文である。几圭は京都の人、宋是と号して蕪村と同門である。蕪村はこの著のありふれた追善集めかぬを賞してゐるが、まことに然り。『蕪村七部集』のなかでも特にすぐれた内容である。『其雪影』には蕪村筆几圭の畫像が載つてゐる。（大阪水落庄兵衛氏藏本）

序

今や上侯伯より下漁樵におよぶまで、俳諧せざるものなし。それが中に一家をもて、世に稱せらるゝことはきはめてかたし。京攝の際、三四指を屈するだにもいたらず。そも〳〵三四者は誰、几圭其大指を領せり。圭、はじめ巴人菴の門に遊びて、その眞卒に倣はず。かたはら半時菴の徒に交りて、非贅牙に化せられず。たとはゞ小説の奇なることをもてたくみに姿情を盡せり。ひとり俗談平話ばは、諸史のめでたき文よりも與あるがごとし。圭去りて又圭なるもの出ず。人或たま〳〵人情世態のおかしき句を得れば、則云、圭流也と。こゝにおいて一家の論盡ぬ。ことし十三回、其子几董、小冊子を編て父の魂を祭る。世の追善集つくれるにはやうかはりて、あながち紫雲青

蓮の句をもとめず、ひとへに弄花醉月の吟を拾ふ。魚肉・蘋蘩雜俎にして供するものゝごとし。余曰、さはよし、又、父が意也。かの闇室にこもり、せうじいとまめやかに、手、念珠をはなたず、稱名こと／＼しく尼法師にこび仕へて、あやしく着ふくれたらんよりは、雞骨床を支ゆれどもかたちかじけ、眼うちくぼみたるかたにこそ、もろこしの識者は與みし侍れ。几董之此篇其幾乎。

明和壬辰秋　　夜半亭蕪村書

太祇句選　　明和九年作

太祇の句稿のおびたゞしさに、その句集の撰選を托された嘯山萑亭も雅因宛在も當惑してゐるので、蕪村は「構はずはじめのところを出せばよいでないか」とすゝめ、取敢ず前編として板行する事となつたので、此の序文に事のよしを記したものである。後編は安永六年五雲の選で出板されたが、それには蕪村の序跋ともにない。（晋風文庫本）

太祇曾而小言すらく、青丹よしなら漬と云んより、なら茶と云んこそ俳諧のさびしみなれ。焦遂が五斗はそちにさはがし。蕉翁の三斛こそ長く靜にして鉄杵を鍼に磨し、點滴の石を穿つをしへにも叶て、我業の卒る時もありなむ。かりにもおこたりすさむべからずとて、佛を拜むにもほ句し、神にぬかづくにも發句せり。されば祇が句集の艸稿を打かさね見るに、あなおびたゞし、人の彳める肩ばかりにくらべおほゆ。げにやいせのはま荻のおきふしにもふんでをはなたず、勃窣として口よりいづるにまかせ書おけるものにしあれど、なにはのあしのいづれ刈すつべきも見へねば、萑亭・宛在の撰者も眼つかれ、こゝろまどひて、まめやかにゑらみ得べうもあらじかし。余二子にいふ、さはつべき期あらめや。大かたにこそあらまほしけれ。たゞ四時のはじめごとに出せる五六帋がほどをゑらみ取て初稿と題し、木にきざみて世にひろうし、二稿・三稿といへるものは、年を經てもほるとぐべき

わざなれとすゝめければ、二子もうけひて、かしこうこそ申つれ。さらば其ことを世にことはり聞へよとあるにぞ、やがてしりへにかいつく。

明和壬辰九月　蕪村書

遺文　明和年中作

雨風烈しき夜の俳諧もどり、小提灯を吹き消されて困惑した蕪村・太祇の二人が、いきくと描かれてゐる。蕪村のかしこげな言葉を、「何馬鹿な」で一蹴した太祇の面目殊に躍つたるものがある。頴原氏の全集に掲げたものによる。（京都藤井培屋氏藏）

師走の廿日あまり、ある人のもとにて太祇とともにはいかいして、四更はてに歸りぬ。雨風はげしく夜いたうくらかりければ、裾三のづまでかゝげつゝ、からうじて室町を南に只はしりに走りけるに、風どゝ吹落て小とぼしの火はたと、けぬ。夜いとゞくらく、雨しきりにおどろくしく、いかゞはすべきなどなきまどひて、

蕪村云

かゝる時には、馬でうちんと云ものこそよけれ。かねて心得有べき事也。

太祇云

何馬鹿な事云な。世の中のことは馬でうちんが能やら、何がよいやら一つもしれない。

太祇がはいかいの妙、すべて理屈にわたらざる事、此語のごとし。かのよし田の法師が白うるりといへるものあらば、といへるに伯仲すべし。

夜半寫

此ほとり　安永二年作

此の發端の文は「蕪村連句選集」の中に『此ほとり』全編を掲げたので重複するが、文集とし

ての體裁と便宜を思つて再錄したのである。
前に云ひ忘れたが『此ほとり』の發端の文は几董の板下で、再刷の『一夜四歌仙』も勿論同一である。

一夜四唫發端

秋の日の暮よりくれて、いとゞ雨さへしきりなれば、窓の燈かげもなつかしき油小路なりける幽居を敲て、嵐山叟が病中をなぐさめんと、百鬼夜行のあやしきをかたり出て、かの東坡居士が物好に倣はんとすれば、あるじの翁、耳うちふたぎ、いかで四唫流行のおかしきには、とつぶやきけるにぞ、おのづから狐狸のふしどもゆかしくて、萩に薄とわけまどへば、無爲は夕の秋をかこち、高子は舟なき旅を愁ひて、とみに膝押のはいかいとはなれり。やゝ半過行頃、おの／＼調べの同じきをよろこび、腹つゞみ打ならして無爲菴

秋のくれ泣を此日の遊び哉

さて、あるじの翁は、このほどのいたはり猶堪べくもあらで、おのれには句をゆるし得させよ、と頭巾まぶかに引かぶり、おどろおどろに毛おひたる古きしとねの八疊には、得ものべあへざるに這のぼりつゝ、やがて臼引音の聞ゆるは、例の狸寐ゐりに

はあらで、そこら喰ひこぼしたるよひ茶・小豆餅の狼藉なるもうしろめたけれ。兎かくして三更の鐘響く頃ひ、四卷の哥仙なりぬ。袖にし歸りて夜明るまゝに打かへし見るに、よべの小判に引かへて、柿の古葉の古くさきに似たれど、何とやらんむかしの人のかほりもあれば、橘屋とはかりあはせよと、あからさまに此邊と題して、橘仙堂に得させぬ。

花洛　紫狐菴　蕪村しるす

也哉鈔　安永三年作

上田秋成が俳号無腸で著作した『也哉鈔』の序文である。つむじまがりの秋成は蕪村の序を得たのち、どうした理由か發行を肯ぜず、折角板木は彫上つてゐながら、蕪村歿後、天明七年に至つて漸く發行を許諾したのである。
假名づかひなどに無頓着をよそほひ、「どれがむめやらうめぢやゝら」と諷刺した蕪村が、切字に就いて一見識を持つて居たのは異とせねばならぬ。(晉風文庫本)

序

夫、切字をしらんと要せば、まづ切字となづけたるは、いかなる字義ぞと眼をつくべし。さて其むねをさとりえて後、切字といふ目は、字義あたらずといふ事をしるべし。されば我門には切字とはいはず、しばらく是を斷字といふ。猗口受有。切字はありてなきもの也。なくて有もの也。切字ありてきれぬ句有、なくて切るゝ句あり。此妙境に入て字ゝ切字ならざるはなし。夫が中に、也哉の二字をおく事、きはめてたやすからず。いにしへの名ある集にも、あやまち少からず。まして今の世の人のつくり出さん句は、いはでも知べし。爰に我友無腸居士なるものあり。津の國かしまの里にかくれ栖ミ、客を謝して俗流に交らず。ふかくやまとの國ぶりにふけり、人しらぬ古き書をさへさがし見ずといふことなし。もとより俳諧をたしみて、梅翁を慕ふといへども芭蕉をなみせず。おのれがこゝろの適ところに隨ひて、よき事をよしとす。まことに奇異のくせもの也。此ごろ一本を著し、其門生二三子余にしめす。（す）ゝなはち也哉抄となづく。其說數條、おの〳〵古き書によらざるなく、たま〳〵さとしやすからんことをおもひて、みづからの論を加ふといへども、つゆも古人のゝりにもとらず、憶說といふべからず。余つら〳〵よみゝて、たどむきを抛げていふ、是不朽の書也。二三子はやく木に上して、同志の人の間につたへよ。二三子諾す。すなはち序を余に乞。余いふ、わが言贅也といへども、理おのづから明らか也。更に序して花をもとむべからず。二三子とくされ。ともにはかれ。

干時安永甲午孟春下浣　平安　夜半亭蕪村誌

几董書

昔を今　安永三年作

月居閲『蕪村文集』（文化十三年序）に此の序文は出てゐるが、原本は寺村家から發見さるゝまで所在を知られなかつたもので、既に『蕪村連句選集』中に述べた如く、巴人三十三回忌の追善

集である。乾氏の發表した『昔を今』から本文を取つて『蕪村文集』と對校を試みたのである。文集には「耳つぶして」の次にある「おろかなるさまにも見えおはして」の一句を脫してゐる外、格別の違ひはない。（京都寺村助右衛門氏藏）

亡師宋阿の翁は業を雪中菴にうけて、百里・琴風が跫と鼎のごとくそばだち、ともに新意をふるひ、作家の聞えめでたく、當時の人ゆすりて、三子の風調に化しけるとぞ。おの〳〵流行の魁首にして、尋常のくわだて望むべききはにはあらざめり。師や昔、武江の石町なる鐘樓の高く臨めるほとりに、あやしき舍りして市中に閑をあまなひ、霜夜の鐘におどろきて、老のねざめのうき中にも、予とゝもに俳諧をかたりて、世の上のさがごとなどまじらへきこゆれば、耳つぶしておろかなるさまにも見えおはして、いといと高き翁にてぞありける。ある夜危座して予にしめして曰、夫俳諧のみちや、かならず師の句法に泥むべからず、時に變じ時に化し、忽焉として前後相かへりみざるがごとく有べしとぞ。予、此一棒下に頓悟して、やゝはいかいの自在を知れり。されば今我門にしめすところは、阿叟の磊落なる語勢にならはず、もはら蕉翁のさびしほりをしたひ、いにしへにかへさんことをおもふ。是外虛に背て、內實に應ずるなり。これを俳諧禪と云ひ傳心の法といふ。わきまへざる人は、師の道にそむける罪おそろしなど沙汰し聞ゆ。しかするに、今このふた卷の歌仙は、かのさびしほりをはなれ、ひたすら阿叟の口質に倣ひ、これを靈位に奉て、みそみめぐりの遠きを追ひ、强て師のいまぞかりける時の看をなすといふことを、門下の人々とゝもに申ほどきぬ。

遺文　安永三年作

寺村家に藏するもので、乾氏の解說によると、巴人の『桃櫻』を編集する時、京都の俳人に送つた書翰の說明として蕪村の書いたもので、

此の文章のつぎに其角・嵐雪・巴人三者の坐像を描き添へてあるさうである。『つかのかげ』の蕪村發句の前書きと殆んど同然である。（京都寺村助右衛門氏藏）

此ふみはむかし阿翁、東武の石町といへるところの夜半亭にて、其角・嵐雪の三十三回の追善の集あめりける時、都の何がしかたへの文通也。其集は桃さくらとぞいへりける。余其頃夜半亭にありて、此擧にあづかる。則余が句

すり鉢のみそみめぐりや寺の霜

とかの集に見ゆ。のち余平安に住して、又阿翁の三十三回の遠忌をつとめて、むかしを今といへる小冊子をあむ。

普化去りぬにほひのこりて花の雲　嵐雪

右は晋子、世を遯したるを悼る句也。

玄峰居士匂ひのこりて花の雲　宋阿

右は雪中菴三十三回追善獨吟哥仙、なごりの花の句也。

花の雲三重にかさねて雲の峰　蕪村

右は宋阿翁三十三回追善哥仙の發句也。日月梭のごとし、又後の人これを見て、誰か感慨を生ぜざらんや。

紫狐庵蕪村

芭蕉翁付合集　安永三年作

蕪村は全く芭蕉に心醉して「三日、翁の句を唱へざれば、口、むばらを生ずべし」と此の自序にも叫んでゐる。本文は別に掲げる通りであるから、こゝに語るを要しないと思ふ。

（晋風文庫本）

はいかいの繼句をまなばんには、まづ蕉翁の句を諳記し、付三句のはこびをうかゞへしるべし。三日、翁の句を唱へざれば、口むばらを生ずべし。されど翁の句〳〵、ひろく諸集にありて見やすからず。よてこれを抄出してこれを約かにし、道にこゝろざしあるものあれば則与ふ。門下の小子つゐに木に刻みて、書寫の勞をはぶくといふ。

安永甲午中秋　平安　紫狐庵蕪村誌

寫經社集

安永五年作

蕪村の宿願で、道立がその發企者となつて成就された京都金福寺内芭蕉庵再興記である。『寫經社集』は『中興俳諧名家集』に收めて置いたから參照されたい。その頃、蓼太は江戸深川に芭蕉庵を再興したので、それに對抗する氣味合ひもあつて、蕪村の發奮したものであらう。（帝國圖書館藏本）

洛東芭蕉菴再興記

四明山下の西南一乘寺村に禪房あり、金福寺といふ。土人口ー稱して芭蕉菴と呼。階前より翠微に入ること二十歩、一塊の丘あり、すなはちばせを庵の遺蹟也とぞ。もとより閑寂玄隱の地にして、綠苔やゝ百年の人跡をうづむといへども、幽篁なを一炉の茶煙をふくむがごとし。水行雲とゞまり、樹老鳥睡りて、しきりに懷古の情に堪ず。やうやく長安名利の境を離るゝといへども、ひたぶるに俗塵をいとふとしもあらず。雞犬の聲籬をへだて樵牧の路門をめぐれり。豆腐賣る小家もちかく、酒を沽ふ肆も遠きにあらず。されば詞人吟客の相往來して、半日の閑を貪るたよりもよく、飢(ウヱ)をふせぐもふけも自在なるべし。抑、いつの比よりさはとなへ來りけるにや。草かる童・麥うつ女にも芭蕉庵を問へば、かならずかしこを指す。むべ古き名也けらし。さるを人其ゆへをしらず。竊に聞、いにしゑ鉄舟といへる大德、此寺に住たまひけるが、別に一室を此ところに構へ、手自雪炊の貧をたのしみ、客を謝してふかくかきこもりおはしけるが、蕉翁の句を聞ては泪うちこぼしつゝ、あなたうと、忘機逃禪の郷を得たりとて、つねに口ずさみ給ひけるとぞ。其比や蕉翁、山城の東西に吟行して、淸瀧の浪に眼裏の塵を洗ひ、嵐山の雲に代謝の時を感じ、或は丈山の夏衣に薰風萬里の快哉を賦し、長嘯の古墳に寒夜獨行の鉢たゝきを憐み、あるは、薦を着てたれ人います。とうちうめかれしより、きのふや鶴をぬすまれし。と孤山の風流を乖ひ、大日枝の麓に杖を曳ては、麻のたもとに曉天の霞をはらひ、白河の山越して湖水一望のうちに杜甫が背を決(サキ)、つゐに辛崎

の松の朧ゝたるに一世の妙境を極め給ひけん。されば都徑徊のたよりよければとて、おり／＼此岩頭に憩ひ給ひけるにや。さるを枯野ゝ夢のあとなくなりたまひしのち、かの大德ふかくなげきて、すなはち草堂を芭蕉庵と號け、なを翁の風韻をしたひ、遺忘にそなへたまひけるなるべし。雨をよろこほひて亭に名いふなど、異くにゝもさるためし多かるとぞ。しかはあれど、此ところにて蕉翁の口號也と世にきこゆるもあらず。ましてかい給へるものゝ、筆のかたみだになければ、いちじるくあらそひはつべくも覺えね。住侶松宗師の曰、さりや、うき我をさびしがらせよ。とわび申されたるかんこどりのおぼつかなきは、此山寺に入おはしてのすさみなるよし。此ころまで世にありし耆老のふみのみちにも心かしこきが、ものがたりし侍りし。されば露霜のきえやらぬ墨の色めでたく、年月流去、水くきの跡、などかのこらざるべき。さるを無功德の宗風こゝろ猛く、不立字の見解まなこきらめき、佛經聖典もすてゝ長物とす。いかでさばかりのものたくはへ藏むべきなんど、いとさう／＼しき狂漢のためにいたづらに塵壺の底にくち、等閑に紙魚のやどりとほろびにけむ、びんなきわざ也などかなしみ聞ゆ。よしや、さは追ふべくもあらず。たゞかゝる勝地にかゝるたとき名ののこりたるを、あいなくうちすてをかんこと、罪さへおそろしく侍れば、やがて同志の人ゝをかたらひ、かたのごとくの一艸屋を再興して、ほとゝぎす待卯月のはじめ、をじか啼長月のすゑ、かならず此寺に會して、翁の高風を仰ぐことゝはなりぬ。再興發起の魁首は自在菴道立子なり。道立子の大祖父坦菴先生は、蕉翁のもろこしのふみ學びたまへりける師にておはしけるとぞ。されば道立子の今此擧にあづかり給ふも、大かたならぬすくせのちぎりなりかし。

安永丙申五月望前二日　　平安　夜半亭蕪村愼記

さびしをり　安永五年作

嘯居士一音の著「さびしをり」の序である。題

笠は「左比志遠理」と萬葉假名で記し天・地・人の三卷である。許六・去來の『問答抄』の書拔・紙衾の記、その他蕉門に關する雜抄な上卷とし、中・下の卷は一音が諸國行脚中、知己となつた人々の發句を收めてある。白雄の遺稿『寂栞』とは全然別箇な内容である。蕪村の序文を凸版にて複寫し、更に活字に飜刻してこれに添へたのは、蕪村の筆蹟をつたへる一端にもと思つてゞある。（帝國圖書館本）

いでやはいかいの道千々にわかれて、ともしびくらきしづがなかせのわくべくもあらず、浪風あらきつりのいとのうけえられぬことのみ多かる。そが中にばせをの翁のゝ給ひけむ、ことばは俚俗にちかきも、こゝろは向上の一路に遊ぶべしとぞ。これや一貫のをしへにして千古の確言なるをや。しかはあれど、さびしをりてふことをさとりしらざれば、句をつくり出すをかたくなんありとて、此一條はのべたまひけるにや。まことに蕉門の閫奥は此ふみにとゞまりて、他にもとむべきことはあらじかし。世人さびといふはさびしきをいひ、しをりとは一句のなよらかなるをいふとのみこゝろうるは、ひがごとにや侍ん。言をもて說うることかたし、意をもてさとすべきことにこそ。されば其玄妙を了解したるどち、むかひかたらんには、老のまさにいたるをもしらず、のちの世の一大事をもわするゝばかりうれしきわざになん侍れ。我友、はなひの居士なるもの、さある友の多く出こんことをねがひて、往ところにして此旨を説しめさゞることなければ、おのづからかゝるたときふみのひめおくべきことかたくなり行まゝに、書肆何がし耳とく聞とりて、やがて木にゑりて公にすることゝはなりぬ。見ん人等閑におもふべからずと、平安の紫狐庵において蕪村書。

蕪村書翰集　　安永五年作

武藤山治氏の覆刻した「蕪村書翰集」はもと播

州高砂岸本家にあつたのださうで、都合十九通ある中に此の一文がまじつてゐる。その病臥したのは大魯の生存中の事で、甘棠居大阪高麗橋の苧屋吉右衞門亭に投じたのは、その病ひの快方に向つてからであらう。（武藤山治氏藏）

十月五日舟を浪花の芦陰舍によす。舟中よすがら風におかされ、こゝち例ならず侍れば、都の夕なつかしく、客情やるかたなきに、かの隻履を手にして西天に去給ふためし、愚なる身には尊くもうれはしく侍りけるに、志慶・東蕃の兩子、湯藥のことなど、まめやかにものし給りければ、病ひとみにおこたり、夢の回りたるごとく覺て、

手にとらじとても時雨の古艸鞋

甘棠居にやどりて

千どり聞夜を借せ君が眠るうち

病　蕪村

春泥發句集　安永六年作

蕪村の畫俳一如の離俗說で、召波との問答中にこれを述べ、『夜半茗話』から引用した事を斷つてゐるが、『夜半茗話』の知られざる以上、此の『春泥發句集』の序文を唯一のものとしなければならぬ。春泥舍は召波の別号、黑柳氏、明和八年十二月歿したので、其の子維駒が七回忌に梓行したのが『春泥發句集』二卷である。（京都藤井紫影氏藏本）

柳維駒、父の遺稿を編集して、余に序を乞。序して曰、「余曾テ春泥舍召波に洛西の別業に會す。波すなはち余に俳諧を問。答曰、俳諧は俗語を用て俗を離るゝを尙ぶ、俗を離れて俗を用ゆ、離俗ノ法最かたし。かの何がしの禪師が、隻手の聲を聞ケといふもの、則俳諧禪にして離俗ノ則也。波頓悟す。却問、叟が示すところの離俗の說、其旨玄なりといへども、なを是工案をこらして、我よりしてもとむるものにあらずや。しかじ彼もしらず、我も

しらず、自然に化して俗を離るゝの捷徑ありや。答曰、あり、詩を語るべし。子もとより詩を能す。他にもとむべからす。波疑敢問、夫、詩と俳諧といさゝか其致を異にす。さるを俳諧をすてゝ詩を語れと云、迂遠なるにあらずや。答曰、畫家ニ去俗論あり。曰、畫去レ俗無ニ他ノ法一多讀レ書則書卷之氣上升、市俗之氣下降矣。學者其愼旃哉。それ畫の俗を去だも、筆を投じて書を讀しむ。況、詩と俳諧と何の遠しとする事あらんや。波すなはち悟す。或日又問、いにしゑより俳諧の數家、各ゝ門戸を分ち、風調を異にす。(原板うゝ木)□いづれの門よりして歟、其堂奥をうかゞはんや。答曰、俳諧に門戸なし、只是俳諧門といふを以テ門とす。又是畫論曰、諸名家不ニ分レ門立ロ戸、門戸自在ニ其中一。俳諧又かくのごとし、諸流を盡シてこれを一嚢中に貯へ、みづから其よきものを撰び、用に隨て出す。唯自己ノ胸中いかんと顧るの外他の法なし。しかれども常に其友を撰て、其人に交るにあらざれば、其郷に至るとかたし。波問、其友とするものは誰ッや。答、其角を尋ね、嵐雪を訪ひ、素堂を倡ひ、鬼貫に伴ふ。日ゝ此四老に會して、はつかに市城名利の域を離れ、林園に遊び山水にうたげし、酒を酌て談笑し、句を得ることは專ラ不用意を貴ぶ。如レ此する事日ゝ、或日又四老に會す。幽賞雅懷はじめのごとし。眼を閉て苦吟し、句を得て眼を開く。忽、四老の所在を失す。しらず、いづれのところに仙化し去るや。恍として一人自佇む。時に花香風に和し、月光水に浮ぶ。是、子が俳諧の郷也。波微笑す。つゐに我社裏に歸して句を吐くこと數千、最、麥林・支考を非斥す。余曰、麥林・支考、其調賤しといへども、工みに人情世態を盡ス。さればまゝ支・麥の句法に倣ふも、又工案の一筋ならざるにあらず。詩家に李・杜を貴ぶに論なし、猶、元白をすてざるが如くせよ。波曰、叟、我をあざむきて野狐禪に引ことなかれ。畫家に呉張を畫魔とす。支・麥は則俳魔ならくのみ。ます〳〵支・麥を罵て、進て他岐を顧ず、つゐに俳諧の佳境を極む。おしむべし、一旦病にふして起ッことあたはず、形容日ゝにかじけ、湯藥ほどこすべからず。預め終焉の期をさし、余を招て手を握て曰、恨らくは叟ともに流行を同じくせざることをと。言終て涙(言)潸然として

泉下に歸しぬ。余三たび泣て曰、我俳諧西せり。我俳諧西せり。」右のことばは、夜半茗話といふ冊子の中に記せる文也。夜半茗話は余が几邊の隨筆にて、多くもろ〳〵の人と討論せしことを雜錄したるもの也。しかるに其文を共まゝにて、此集の序とするとは、まことに故あり、此文を見て、波子が淸韻洒落なるや、其ひとゝなりを知て、その句のいつはりなきことを味ふべし。かの扉の皮を引かふたる羊に類すべからずといふことを、洛下の夜半亭に於て六十二翁蕪村書。

于時安永丁酉冬十二月七日

芦陰句選　安永八年作

不遇に一生を終つた門人大魯の爲め、その句集の序文として書いたのである。大魯は芦陰舍、安永八年京都で客死したので、此の序はその年の執筆である。「遺稿は出さずもあらなん」とてこれを制し　しかも肯かれずして集成るや「遺稿出すべし」とこれを嘆じたる如才なさ、蕪村の處世術に要を得たるを知るべきである。（和露文庫本）

むかし丹波のくにゝ、大なる璧もたるおきな有けり。そのたまうちにひかりをかくして、ゆかしさ云んかたなし。人、其玉を百貫にかはんといふ。翁おもふやう、かくてだに有を光まさば、あたひなを、かぎりあらじとおもひて、百貫にはえぞとてうらず。さて夜に日にすりみがきけるほどに、はつかに瑕あらはれ出ぬ。おきな、あさましとまどひて、いよゝすりみがくにしたがひ、きず大に玉はまめばかりになりぬ。はじめかはんと云し人も、今ははなおほひつゝさたなくなりけるとぞ。されや大魯が門流、芦陰遺稿といふものを出さんとして、序を予にもとむ。予が曰、遺稿は出さずもあらなん。いにしへより作者のきこえあるもの、遺稿出て還（却）て生前の聲譽を減ずるものすくなからず。大魯はもとより攝播維陽の一大家と呼れて、我門の嚢錐なりし。さればその佳句秀吟は、人

おの／＼膾炙す。たれか遺稿の出るを期せんや。はた遺稿を出して、かの玉もたる翁に倣ふことなかれ。門流肯ず。ひそかに草稿をあつめて、几董に託して校合せしめ、彫刻半ばにいたる。しかしてふたゝび序を予にもとむ。こゝにおいてやむべからず、取てその草稿を閲す。予嘆じて曰、遺稿出すべし。遺稿出て人いよ／＼その完璧をしるべし。是大魯が身後の榮、ます／＼そのひかりを加ふるに足らん。門流微笑して去。このこと又序とすべし。

安永己亥孟冬　　夜半翁識

桃李　安永九年作

蕪村・几董の歌仙二巻を收めて『桃李』と題したので、此の序は『蕪村遺句選集』中に入れて置いたが、體裁と便宜の上からこゝに再錄したのである。（晉風文庫本）

俳諧桃李序

いつのほどにか有けむ、四時四まきのか仙有。春秋はうせぬ。夏冬はのこりぬ。壹人請て木にゑらんと云。壹人制して曰、このか仙ありてやゝとし月を經たり。おそらくは流行におくれたらん。余笑て曰、夫、俳諧の活達なるや、實に流行有て實に流行なし。たとはゞ一圓廓に添て、人を追ふて走るがごとし。先んずるもの、却て後れたるものを追ふに似たり。流行の先後、何を以てわかつべけむや。たゞ日々におのれが胸懐をうつし出て、けふはけふのはいかいにして、翌は又あすの俳諧也。題してもゝすもゝと云へ、めぐりよめどもはしなし。是此集の大意也。

蕪村識

葛の翁　安永年中作

其蜩庵杜口は寛政十一年故人となつたが、その追善集に「いつのとしにや、夜半亭蕪村、此の圖書をものして蜩翁に贈らる。こたび捜し求てこれを見るに、老師の行狀のあらましをしるされたり。よて冊子の序に冠しむ」とし

て蕪村筆蹟のまゝを載せてある。（名古屋石田元季氏藏本）

張九齡は明鏡の裏に白髮を憐み、丈山はきよき流に老の面影を恥。こゝにひとりの隱士あり、いづれのところの人といふことをしらず、常に葛てふものをたしめば、人呼て葛の翁といふ。もとより青雲權貴の地をいとひて、龍山公の御前に侍らざれば、おのづからかきつばたの秀句を遁れ、資朝の卿に逢奉らざれば、むくいぬのそしりもなし。只、生前一盃の葛水、身後の榮譽にかへなまし。されば清濁明晦のさかひ、是不是いづれぞや。しかじ、きよからんよりは、むしろ濁らんには、明らかならむよりは、はたくらからんには。

葛水や鏡に息のかゝる時

葛水に見る影もなき翁かな

此意を了解したるものは誰、

其日くらしの翁有。このことをのぶるものは誰、夜半亭蕪村也。

蕪村筆其蜩像—（葛の翁所載）

遺文　　安永年中作

其蜩の爲めに描いた葛の翁賛とは別に「右は先師夜半翁草稿也。資朝の卿に逢奉し、西大寺の上人を書て、師翁直蹟の證とす　月溪迪」といふ極め書を附したもので、須原氏の全集から轉載したのである。私も稲束氏の許で一

見した覺えがある。（攝津池田稻束孟氏藏）

宿昔青雲志　蹉跎白髮年
誰知明鏡裏　形影自相憐

張九齡

わたらじなせみのおがはのきよければ
老の波そふかげぞはづかし　丈山

貧しく老さらぼひたる身の貧朝の卿に逢奉らば、いかゞ見給ふらんと、いとはづかしくと物にかくれ侍る

葛水に見る影もなき翁かな

又

葛水や鏡に息のかゝる時

遺文

安永年中作

蕪村のものを讀むと、どこか倨傲な性格的印象をうけるが、此の自贊の遺文を見て果せる哉と苦笑を禁じ得なかつた。歌人公任の作よりは、おれの發句の方がうまいとは、隨分思ひきつた自贊でないか。自分を信ずる力の強い者でなくては、いへない言葉である。潁原氏の全集による。（京都寺村助右衛門氏藏）

嵐山雨中花と云題にて門人儀
雨すり物しける時

筏士の簑やあらしの花ごろも　蕪村

右の句を申遣しける。そのゝち程經て、袋草子をよみ侍りけるに、御堂道長公大井河遊覽の時、詩哥の舟を雙べ、各被レ乘ニ堪能之人一ヲ。而シテ御堂被レ仰云、四條大納言は何レの舟に可レ被レ乘哉。大納言云、可レ乘ニ和哥船一云々。此度

へ朝まだきあらしの風の寒ければちるもみ葉をきぬ人ぞなき　下略。また後悔あり。乘ニテ詩ノ舟ニ一是ほどの詩つくりたらましかば、名はあげてまし云々。四條大納言公任也

蕪村云、はいかいほど、さるがしこきものはあらじ。わづか十七字にて三十一字のこゝろをも自在に云縮るもの也。公任卿のあらし山のうたよりも、みのやあらしの花ごろもと云たる、風情まさりて覺ゆ。嵐

山下の風雨に簑毛の吹そよめきたるに、さくら花の雨にうたれて散着たる有さま、眼中に奇景を得たりと云べし。公任卿のうたを取てしたる發句ならばこそ。かつてしらで作り出せる句なれば、一しほしたり皃にて、我はいかいの倚きとを覺侍る。穴かしこ、他門の人には申べからざると也。

花鳥篇　天明二年作

『此ほとり』の再刷本『一夜四歌仙』の附錄から取つて本集に收めて置いたが、序文だけこゝに再錄したのである。『花鳥篇』の單行本は今以て發見されない。(和露文庫本)

郭文が勝具なければ、鬼貫が禁足にはくみしやすきにや。みよしのゝ山ぶみも、かり寢のゆめにたどり、あらしのやまの春のゆくゑだにしらぬゑびすごゝろのいとさう〴〵しければ、せめて朝夕荳扉におとづるゝ人の花さくらの吟詠を、ほくのはしにかいつけ、一帖にものして臥遊のよすがにもとおもひたちつゝ、とかくするほどに春煙眼を過ぎ、綠樹窗を蓋ひ、荏苒として去つくす日にゆふべをかこち、蕭條とふりくらす雨に曉をしらず。おこたりがちなる老の身をうらみて、ひとり几上に肘する折ふし、ある人梅翁のたんざくを得て、この句にわきせよと云ひおこせたるを取上げ見れば、手澤淋漓として雲外の一聲睡をさまし、言下に一句を吐、所謂狗尾をもて貂に繼だるこゝちするを、門下の二三子、第三・第四とつゞけゆくまゝに、やがて三十六句にみちぬ。いとよし花櫻の後へに附して、則花鳥篇と題号して、我疎懶の罪を謝することしかり。

壬寅皐月　蕪村識

新撰四季俳題正名　天明二年作

露石文庫に『俳題正名』の藏する事を聞き知つてゐるが、まだ一見する機會を得ないので、此の序文も潁原氏の全集から轉載したのである。鷺喬は山本氏、伏見の人で蕪村一門の俳書によく現はれて來る。此の序は『蕪村文集』

にも載つてゐる。（大阪水落庄兵衛氏藏本）

はいかいの去きらひのことは、諸書にあらはしてその法そむくべからず。しかれども俳諧は活物也。時に臨て其法を背くも又法とす。付々に疎密あり、句に輕重あり、一卷の緩急・句行の浮沈を相顧て、或おもてきらふものを七句に免じ、字去のものを五句に禁ずる事有。法は四時のごとし、去嫌の扱ひは風雨寒暖のごとし。變化極りなし。神釋祭奠の正名、草木鳥獸の正字をしらざる時は、その變に應ずることかたし。伏水の鷺喬、俳題正名を著す。一たびこれをひらけば、かの去嫌の取捨掌をさすがごとし。まことに俳諧の正字通也。鷺喬は夫、白鹿洞の人歟。

天明壬寅夏六月　　夜半亭蕪村識

五車反古　天明三年作

脇起しの發句「冬ごもり五車の反古のあろじ哉」から、題名を取つた春泥舍召波の十三回忌集である。序するにみづから病夜半と署してゐるので、その病臥する久しき、ことし十二月物故すべき宿命は既に此の時、豫言されてゐたのである。編者維駒は「春泥發句集」に記した如く召波の遺子である。（和露文庫本）

維駒、父の十三回忌をまつるに、集ゑらみて五車反古といふ。ふかき謂あるにあらず、父の冬ごもりの句によりて號けたる成べし。はた父の筆まめに書あつめたるものを、よゝとねぢこみたる袋の紐ときて見れば、贈答の詩の稿有、或は花に來たれといふ天狗のふみあり、今宵の雪をいかにやなどそゝのかす高陽の徒の手紙有。又は云すてたる哥仙の半〱ばかりにして、ところ〲墨引たるあり、其裏には多く人の句も、みづからの句もかいつけたり。それをとかく爪揃して、今の世の人の句も打まじへ、ならべもてゆくほどに上下二冊子となりぬ。序を余にもとむ。余病ひにふして、月を越れども起ことあたはず、筆硯の業を廢することひさし。故をもて其ことを不レ果、

これこま、忌日のせまりちかづくをかなしみ、しば／＼來りもとむ。余曰、明日を待チて稿を脱せむ。明日すなはち來る、病ます／＼おもし。又曰、明日を待て稿を脱せむ。維こま、終に卒業の期なきを悟て、竊に草稿を奪ひ去、余も又追はず、他日そのことを書して序とす。

病夜半題

蕪村文集　天明三年作

太祇の不夜庵は京嶋原にあつて、五雲がその遺庵を守つてゐた。天明三年太祇の十三回忌を營むにつき、蕪村も招かれて不夜庵に至り、追慕の一句を手向けた詞書である。忍雪・其成共編の『蕪村文集』に掲ぐる以外に所見がない。（晋風文庫本）

追慕辭

太祇居士が十三回追善の俳諧にまねかれける日、風雨ことに烈しかりければ、かくては道のほどいかにやなど、人のせちにとゞめけるを、蓑笠や有、とく得させよと云罵りて、こと／＼しき老の出立いとおかしく、からうじて不夜菴にいたりぬ。かの登蓮法師が風流とは品かはりたると、こゝろざしの誠はなどか恥べきにやと、頓て佛前に向て

線香やますほのすゝき二三本

蕪村文集　天明三年作

宇治の田原には門人奥田毛條が住んでゐたから、その招きで秋の茸狩に行つたのだらう。頴原氏の説によると『夜半亭蕪村遺稿全一冊』と題した稿本には、天明癸卯九月と記してあるといふから、癸卯即ち同三年の事であるのに疑ひない。『蕪村文集』には文化・天保の二板本あるが、内容に變りがない。

宇治行

宇治山の南、田原の里の山ふかく茸狩し侍けるに、わかきどちはえものを貪り先を争ひ、余ははるかに後れて、こゝろ靜にくま〴〵さがしもとめけるに、菅の小笠ばかりなる松だけ五本を得たり。あなめざまし、いかに宇治大納言隆國の卿は、ひらたけのあやしきさたはかいとめ給ひて、など松茸のめでたきことはもらし給ひけるにや。

　君見よや拾遺の茸の露五本

最高頂上に人家見えて高ノ尾村といふ。汲鮎を業として、世わたるたよりとなすよし。茅屋雲に架し、斷橋水に臨む。かゝる絶地にもすむ人有やと、そゞろ客魂を冷す。

　鮎落ていよ〳〵高き尾上かな

米かしといへるは、宇治河第一の急灘にして、水石相戰、奔波激浪の飛がごとく、雲のめぐるに似たり。聲山谷に響て人語を亂る。銀瓶乍破テ水漿迸リ、鐵騎突出シテ刀鳴、四絃一聲如裂帛と、白居易が琵琶の妙音を比喩せる絶唱をおもひ出て

　帛を裂琵琶の流や秋の聲

摺物年代考證

碧梧桐氏が菱田氏の許から借り來られた時、摺物を一見したが、山と積れた薪を前景とした家の構へを描き、此の文章を記してあつたと記憶してゐる。書も畫も蕪村の板下である。

（攝津芦屋菱田是助氏藏）

花とりのために身をはふらかし、よろづのことおこたりなる人のありさまほど、あはれにゆかしきものはあらじ。

　花を踏し草履も見へて朝寝かな　蕪村

右の句は、四條ちかきわたりなる木屋町に、なには人の旅やどりして有けるを訪ひての口號なるを、おりふし梅女がもとよりのふみのはしに、初ざくらのほ句かいつけて、みやこの春色いかに見過し給ふやなど、ほのめきこへければ、其かへりごとするとて、筆のつゐでに寫してをくりぬ。

隱口塚　年代考證

大和初瀨の人、何來の發企で初瀨寺の境内に芭蕉の句碑をいとなみ、その記念に出板した「隱口塚」の序であるが、板本はいまだ發見されない。「諸國翁墳記」には

　籠口塚　初瀨にあり　何來社中建之

　　春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

とあるが、建立の年代は記してない。（蕪村文集による）

隱口塚序

こもりくの初瀨の堂の片隅に、まきもくのひの木笠うちしきて、ゆかしき春の旅寐姿は、よきもの見たるよし野の勞れを休んとなるべし。されば其吟魂のおり〳〵この境にやどり來まさむことを願ひて、草をくさぎり土をかきあつめて、一基の碑をいとなみ建るものは、やまとの好士何來なり。そのはじめに筆をたてゝ、手むけの句を奉るものは、平安の蕪村なり。蕪村百拜して書。

　草臥てねにかへる花のあるじかな

蕪村文集　年代考證

遲日亭は下村春坡の号である。蕪村の門人で京都の富商、その饗宴の善美を盡した事はもとよりであらう。此の一文は春坡の宴樂に列して、蕪村の歡を謝せるものである。

宴樂序

遲日亭の主人卓下をまほけ、諸子を引て宴す。磁器・玉盤・猩脣・駝峰・窮山之珍・蝎水之錯、盡く具せずといふことなし。日午より夜半にいたりて、よく蚕食すべからず。我黨只うらむ、便々たる腹中、文雅の貯なきことを。纔に題を分ち、俳歌をうたふて詩賦に換へ、庭に歩し月に嘯く、豈仙家の歡に讓るべけんや。

　月の句を吐てへらさん蟾の腹

蕪村文集　年代考證

土器を賣つて年越えのたつきとする老翁の賛で、蕪村みづから其の姿を描いて、上に此の文と句を題賛したものがあつたのであらう。『新五子稿』にはこの句「面影のかはらけ〳〵としのくれ」となつてゐる

土器賣賛

深草のほとりにとしひさしく、かくれすむあやしき翁ありけり。手づからかはらけをつくりて、いつもとしの末には、みづから荷ひいでゝ、みやこの町〳〵をひさぎありくのみ。常は何いとなむともなく、草のとぼそふかくかきこもりて、その齡いくばくといふことをしらず。昔時より老にして今も老なり。かのしらはしの翁のたぐひにやあらむ、いとゆかしきことなり。

おもかげもかはらけ〳〵年の市

蕪村文集　年代考證

元文のむかしとすると、蕪村が巴人の許に身を寄せた二十一から二十五の青年時代である。それより四十余年にしてその描いた俳仙群會の賛をなしたので、芭蕉が「竹の子や幼きときの繪のすさみ」の心境と通ずるものがある。

俳仙群會の圖賛

守武・貞徳をはじめ、其角・嵐雪にいたりて、十四人の俳仙を書きてありけるに、賛詞をこはれて、

此俳仙群會の圖は、元文のむかし余弱冠の時、寫したるものにして、こゝに四十有餘年に及べり。されば其拙筆いまさら恥べし。何ぞ烏有とならずや。今又、是に賛詞を加へよといふ、固辭すれどもゆるさず。則、筆を洛下の夜半亭にとる。

花散月落て文斯にあら有がたや

蕪村文集　年代考證

此の賛はあながち世にありし事とせず、蕪村の空想として見ても面白い。穎原氏の紹介によると、京都内藤氏の藏に、月溪が法師と女とを描き、その賛に蕪村のこの文と句を賛せるものがあるさうで、雪洞蕪村賛と署名されてゐるといふ。

狐の法師に化たる畫賛

むかし五條わたりに、なまめける法師に倶せられたりけるをうな有けり。世のそしりをいとひて、みそかなるところに住けり。いろおとろひて、かの法師かよはずなりけり。女いといと身をうらみてゆく衛なくなりけり。

　しら露の身や葛の葉の裏借家

右はきつねの法師に化たる畫に賛をこはれて、とみにかいつけやりける。

蕪村文集　年代考證

いつの年の事か、めぐまれざる蕪村の境涯は歳旦の句さへ思ひ設けぬ折しも、夢中に老翁より松を植ゑよとのすゝめを受け、此の歳旦の說を執筆したのである。大津村田利兵衛氏の藏する遺文はやゝ異なるところがあるので、穎原氏の全集によつて此の文の次に揭げる。

歳旦說

ことしは歳旦の句もあらじなどおもひゐけるに、臘月廿日あまり八日の夜のあかつきのゆめに、あやしき翁の來りていふやう、おのれはみちのくにの善正殿にたのまれまいらせて、京うちまいりし侍るおきななるが、よきついでなればそこに奉るべきものゝ侍れば、こゝにまほで來ぬとて、ひらつゝみときて、根松のみどりなるをふたもとうでゝ、これを御庭のいぬゐの隈に植おき給はゞ、かぎりなきよろこびをも見はやし給はんといひつゝ、かいけちて見えずなりぬ。ゆめうちおどろきても、此翁に

むかひかたるやうにおぼえて、かの武隈の古ごとおもひ出られてかくは申侍る。

我門や松はふた木を三の朝

ことしは歳旦の句もあらじとおもひ過けるに、臘月廿八日のあかつきの夢に、老たるおのこの來りていふやう、おのれはみちのくにの前正殿にたのまれまいらせて、大うちまいりし侍るおきた也。そこに奉るべきもの丶侍れば、ことにまうで來ぬとて、ひらつゝみときて、根まつのみどりなるをとうでゝ、これをいぬゐの庭の砌に植置給はゞ、いく千代のさかえをも見はやし給ふべしと云つゝ、かいけちて見へずなりぬ。ゆめおどろきても、たゞ此翁と物うちかたるやうに覺て、かの武隈の古ことなどおもひ合せて、かくは申出侍る。

我門や松はふた木を三の朝　　蕪村

せいぼ

うぐひすの啼や師走の羅生門　　同

蕪村文集　年代考證

鰐に見込まれて舟動かず、人々泣き惑ひつゝ貫を海に投ずると見て、夢さめたる後に一句を得て、此の文を執筆したのである。『蕪村文集』の以外に所見ない。

夢説

夢に播磨がたに舟をうかぶ。風おもむろに浪あらそはず、悠々たる春光、其興いふばかりなし。さあるほどに此舟つゆもうごかず、只、鐵索をもて金軸に繋ぎたるがごとく、舟子ども、とかくすれどやりぬべくもあらず。思ふに鰐てふもの丶ねたく見入たるにこそと、舟中の人々たゞ泣になきつ、おの〳〵身にそふ寶をときて海中に投じ、かの魚の執はらさせよなどひそめき聞ゆるに、夢うちおどろきて、

帆風のふどし流さん春の海

蕪村文集　年代考證

俵藤太が龍宮にて、乙姫から貰ひ戻つた口碑のある螺貝の盃に、徳野の所望でその銘を書き與へたのである。徳野は太祇の不夜庵社中の一人で嶋原の亡八である。

螺盃銘

むかし〱うら島が子、龍のみやこに至りて乙姫に配偶す。あらぶる眷族、賀を献ず。おの〱かしらに鱗甲をかざりとす。それが中に大なる貝をいたゞくもの有。光輝人を射る。浦島子、心に是を欲す。終に得て水の江の浦にうかぶ。浪花のうかぶ瀬是なり。後又、乙姫、俵藤太を迎て宴す。玉盃を出して酒をすゝむ。藤太其盃の美なるを愛す。別に臨て、乙姫許多の寶を將て藤太を送る。其貝すなはち其一つなり。傳て今徳野が家に藏む。予に其銘を乞ふ。予おもふ、浦島が子は與謝の海に得たるをもてうかぶ瀬といふ。藤太、鳰のうみにこれを得たり。それ浮巣と呼ん歟。一盃一盃又一盃、長く子が家に傳てしらず幾萬盃ぞ。

俳諧四季文集　年代考證

蕪村の雪洞の別号があつた事はなり〱見受ける落款で知られるが、此の文章には自ら「我むかし雪洞とよびし事もあれば」と稱してゐる。『四季文集』は五春莊井眉の編纂で文化八年刊行されてゐる。

雪亭の號を與ふる辭

名をつくる事は有のまゝこそよけれ。萬吉も早世し、一兵衛も百の親父になる。さればもの忌ざるぞたのもし。今名を乞はれてつくるに、我むかし雪洞とよびし事もあれば、すぐに雪亭と號。これ折ふし雪の降日によばれて、一碗の酒のうへなり。

雪消ていよ〱高し雪の亭　夜半翁

十一月廿九日

おとゝひ既句を書かへりしに、又持來りて印を乞。醉中のはづかしさもかへり見ずおして遣す。

〔頭註〕蕪翁句集拾遺　年代考證

奥羽地方を行脚した時代の印象を、後年回想して作つたのであらう。『句集拾遺』は秋聲會の編輯で本文の如く掲出されてゐるが、大津吉住氏の藏する畫賛は字句に異同があるので潁原氏の全集によつて誘註して置く。

出羽の國より陸奥の方へ通りけるに、山中にて日くれければ、辛うじて九十九袋（ヤシヤフクロ）といへる村（里）にたどりつきて、宿りもとめぬ。夜すがらごと〱と、物の音のひゞくあり（イものゝひゞく音し）ければ（イけれど）、あやしくて立いで見るに、古寺の廣庭に老たるをのこの麥をつくにてありけり。予もそこら徘徊しけるに月孤峯の頂をてらし（イ影を倒し）、風千竿の竹を吹て、朗夜のけしきいふばかりなし。此をのこ晝の暑さをいとひて、かくいとなむなめりと、やがて立よりて、名は何といふぞと問へば宇兵衛と答ふ。

涼しさに麥を月夜の卯兵衛哉

遺文　年代考證

俳諧の点者で生活を扶けた蕪村は、俗宗匠のように点取者の損德を問題にして居たらしい。新古の趣向と句作を論じて、点者側の辯解を試みた一文がこれである。（大阪土屋剛吉郎氏藏）

點に損德（ソン）の論あり。抑作者の意にあたらしくて、判者の耳に古きものあり、又判者はめづらしく聞ども、句主のかたには古しとおもふ有。或は吾妻には舊作にして、都

には新意と聞へる句ありて、句主に損徳あれば、判者に誹謗を遁るゝことかたし。蕉翁・其・嵐の徒出るともいかんともすべからず。是判者の一大厄也。こゝに一二をあげてしばらく其事を解。

百合花よべの露をやしたみけむ

折とれば百合から雨のこぼれ皃

右二句、作者のかたにはあたらしかるべけれど、判者のかたには古し。一とせ余が判の百哥仙合に通り發句せよと、社中よりのぞまれければ、

朱硯に露かたぶけよ百合花

この句、よべの露をしたむ趣向にいさゝか似たり。又東武の蝸名が句に

雨露の桔梗は花のつぼ深き

此句、後の折とればの句に匠意同じと云べし。右二句ともに、句主はかつてしらずし給へれば、自らの意にあたらしとおもはれんもむべなり。判者は古しとおもふも又むべ也。

さみだれや蟹のぬけ行琴の反

さみだれのふりくらしたるつれ〴〵に、琴なんどしめやかにひきわづらへるさま、そこら調度のたゝずまい、海邊水鄕の家居つぎ〴〵しき後園の致景など、おもひやられ侍る。されば我都には殊にめづらしき趣向にて、判者の耳にはいとゞめでたくぞ侍る。しかるに同卷に

さみだれや猫のくゝりし琴の友

とあれば、其地にては有ふりたる趣向としられ侍るなれど、判者の耳にあたらしければ、やむことを得ず點を加へ侍る。

其角が句に

みじか夜や隣へはこぶ蟹の足

穴(アナ)寒しかくれ家いそげ霜の蟹

いづれも蟹のおかしみを得たり。琴をぬけ行蟹、いさゝかけじめなき心地し侍る。右二題の論にて、餘はなぞらへしるべし。もとより判者孤陋寡聞なれば辨者のみ多かめれど、唯、罪ゆるし給んことを願ふと云。

蕪村書

遺文年代考證

蕣驛の壁さへ朧につゝまれて、内裏なまめか出る大宮人のさま、春の月夜の景情に蕪村をして、秋よりは春の此の感銘を强からしめたる一文である。碧梧桐氏の『蕪人蕪村』による。

（京都楢木間某氏藏）

もろこし我朝にも、秋の月を賞づる名どころはあまた侍るに、などて春月は等閑に見過し侍りにけむ。禁城の南門の邊りよりあふぎ見れば、如意が嶽のすこし南なる山のいたゞきより、きさらぎ十日あまりの月ほのかにさし出て、柳おぼろに梅のおぼつかなくかほり來るなど、すべてやるかたなきこゝちせらるに、何がしの大臣にやおはすらめ、内よりまかで給ふが前もはらはで、やをら行過給ふなど、ことにやんごとなき。

女倶して内裏拜ん朧月

（蕾風曰、小林一三氏藏の書贊には「女倶して内裡拜ん春の月」とあり、「青柳や我大臣の草か木か」を併せ記してあるさうである。）

遺文年代考證

蕪村の鍬を描いた墨繪に贊をした文で、鍬の柄のところに、

鍬の柄にとまりて蝶の工夫かな　呑獅

の贊があるさうである。潁原氏の全集による。

（大阪土居剛吉郎氏藏）

鍬の圖贊

此ほど必化の不夜菴に、茶番といへることをもてはやせり。多く哥書・物語、或は小うた・淨るりなどの要文によりて、各其物を出す。あるが中に今宵は呑獅あるじして、國性爺と題せり。ことに興あるさまなれば、翁もしばしの歸路をわすれて、

蛤にたゝれぬ鴫や春の暮　夜半翁

遺文年代考證

芭蕉の「まづ頼む椎の木もあり夏木立」の短册に添へた極め書である。淡彩にて杖を曳く翁の像を描き、その下に此の文章を記してあるさうである。頴原氏の全集による。（大阪水落庄兵衛氏藏）

湖南の幻住庵廢して、洛東のばせを庵興る。榮枯地をかゆるならひ、まことに時あるにや。まづたのむのたん册は翁の眞跡にて、大津の好事それがし家に珍藏して、世の人もよくしれるものなり。さるを今はからずも湖柳子が手裏に歸したること、又翁の感應によれる歟、あな尊と。

蕪　村　書

二見形文臺

蕪村の文臺に賛したもの、又はその作り方・描き方を示したものゝ中で、其の一は京都寺村家にあり、蕪村が門人百池に附與したものである。其の二は京都金福寺に藏する文臺の賛で、裏に「芭蕉庵什物　天明壬寅夏四月我則寄附之」と記してある。其の三は京都金田氏舊藏の文臺に「波紋をうつし」はその表、「嵯峨の落柿舍の」はその裏に記してあり、別に次に添書があるさうである。

波紋を寫し雙石を摸し便面に梅或は松を畫くを法とす。今こと〴〵く其繁を省き疎を尙ぶの又是蕉門の一變。

便面は扇のこと也

雙石は二見の石也

蕉門の流行ます〳〵さびしなりを尙ぶ。是則畫家云ふ、繁を省き疎を尙ぶものと致きを一にす。

此の三通は孰れも頴原・乾兩氏の紹介せるものによつたのである。

其の一

二見形文臺

長一尺九寸三歩

鏡板横一尺一寸
厚四分五厘
小口埋木カマボコ形ニ
但ヒラ共ニ丸メテ

（註、こゝに文臺の繪あり）

高三寸五分
板足横一尺六歩
厚四分五厘
小口埋木前ニ同ジ
カマボコ形ニシテ
足ノひき込小口ヨリ三分見付ヨリ二分
足ノつなぎ竪一寸五分横一寸六分
足ニ海鼠すかし長八寸六分ロ程五分跡先一寸三分
筆かへし埋トヲ尋ニノベ中高一分ヨコニ小縁ノフトサ程ニシテ次第ニホソウケヅリツケ跡先二三分ホド鏡板ナシナリ

右圖は芭蕉翁の物數寄也。其故は西行談笑に二見の浦に住給ひし頃、扇を文臺として和歌を詠じ、その際には一生いくばくならず、來世ちかきにありといふ文を口ずさみ給るよし、風雅にはこれらのさびをうらやみ、道義にはそれらの結縁をしたへばとぞ。さて此形の用とするは、其足の角たゝ疊にそひたる心地よく、硯箱もつねよりは小ぶりに筆のつかえぬをかぎりとす。蓋の裏に海松と蛤とをかけり。されど硯箱は定法にあらず、大かたはあるにまかすべし。扇の繪は梅か若松也。おほくは木地に墨繪なれど、あさくぬりたるも又あるべし。中比より先師のうら書多し。松か梅かの發句なり。

蕪　村

其の二

雙石を畫き波紋を寫し、便面に梅或松を模するを法とす。

今ことごとく其繁を省て、疎を尙ぶと云。

蕪　村（花押）

其の三

波紋を寫し雙石を模し、便面に梅或は松を畫くを法とす。

今ことごとく其繁を省き疎を尙ぶ、又是蕉門の一變。

平安　夜　半　翁（花押）

嵯峨の落柿舍のほとりなる民家の庭に、年經たる桐の木有けり。牛をもかくしつべきほどの圍み也けり。それをとかくもとめ得て二見がたの文臺三ッつくりたり。一ッはみちのくの人と、つくしの人にわかちゆづれり。一ッは我家の靑氈にもかへじと藏しもちけるを、門人路景口には

得云はで、こゝろに欲するかほばせのやるかたなくて、
終に得させ侍りぬ。

澁かき

落柿舍の垣ねにたよりあれば、かくは冠せたり。あまがきのあまきよりは、陽炎の府にたつ紙の衣の蜀錦にもまさりぬべし。

六十七翁　蕪　村（花押）

芭蕉 其角 嵐雪 點印論　年代考證

几董が俳諧の点式に就いて論じた天明六年板の『点印論』に、「右は古夜半亭の壁書なるを、今爰に附錄して跋とす」として、此の全文を掲出してある。京都の寺村氏に蕪村筆のまゝ今現におりて全文異同なく、終りに夜半亭の落款があるとの事である。俳席に於ける蕪村の嚴乎たる風丰を見るべく、俳席の掟書もいろ／＼あるが、これほど嚴勵なるものは嘗て見ない。

取句法

一其角之豪壯、嵐雪之高華、去來之眞卒、素堂之洒落、各可法、麥林支考雖句格賤陋、各〻爲一家、亦有可取者

一包括諸家者蕉翁也。而其角嵐雪伯仲蕉翁者居半、麥林支考之徒十而一而已

一世有稱蕉門者。特不知蕉翁之風韻其所吐句、倘所論不脫支麥之俗習。稱之伊勢流或美濃流可也、豈得曰蕉門乎、人號曰田舍蕉門知言哉。

一意匠體也。而於則用也。雖而於則調聲意匠卑俗者不足取、譬若使蹇人穿金甲持花戟人見則曰盛哉而敵兵咫尺白刄臨頭。居然俟死者、徒是塡溝之具耳。然則意匠善而於則不調可乎、而於則不調則理不通、還是喩有啞人懷胸天地經緯之才欲說秦楚圖縱橫而

不能說撫心指口吶々然止者。亦無所用。

一知俳諧之大道無他。嘯月賞花使遊心於塵寰之外常友蕉翁其嵐之流亞。專以脫俗氣爲最。

一選句之法、席上各曰其志專討論不可憚他門或而諛或屏息而退誹他者。不容再出席。

抜巻及び句評

蕪村の抜巻は往々にして見掛けるが、たゞ点式を施してあるのみでなく、抜句に簡潔な評語があるので一入の趣味を添へる。その完全したものは東京椿本福松氏の許にあり、又、東京加賀豐三郎氏、藏するものを碧梧桐氏と共に一見したが、右の二卷とも筆寫を憾つたので、こゝには潁原氏の全集に揭ぐるものを揭ぐるに止むる。其の一は連句の卷で攝津池田稻東孟氏の藏するもの、其の二は發句の抜卷にて藤井紫影氏の所見にて『江戶文學研究』に紹介せるもの、其の三は几董の句に對する蕪村の評語で、京都河合長藏氏の舊藏にて『ホトヽギス』に寫眞版を以て挿入されてゐるものである。

其の一

可仙

雁なくや病て行つる夜に似たり

　落散紙にしばしおく露

晝の月汁賣家にこしかけて

　錢の相場を女ふれ來る

　　賣といふ句に錢など付るはあしゝ、一句よければ

ゆふ立の古傘は骨ばなれ

　藪からつゞく杉のむらはへ

ウ明星の曉ちかくきらめきて

一重帶にて出るけいせい

灸すへるこれも思ひの煙也
障子に羽打蠅の冬ざれ
瓢たんに並て絲瓜つり置し
伏見の秋や深草の露

〔春蕪鳥啼〕

月の夜を蜴の法師の寺にねて
笄や蜴の法師の寺訪はん　蕪村

近來蕪村口眞を奪ふ句多し
蕪村早ヶ句集を出して陳腐をのがるべし

ふく箏簗や誰か悲しむ

〔路傍樫〕

長陣の寄手へ送る柳樽

句作今少し

二疋の馬の揃ふ鈴おと

打にしも鳴物を聞こと也

郷人に吉野の奥の花とはむ

〔路傍樫〕

風呂も硯も春の水筋

二ウ

〔春蕪鳥啼〕

子雀に佛のめしを打くれて

〔春蕪鳥啼〕

古き小袖のさむるむらさき

〔春蕪鳥啼〕

はゝ木ゝの暖簾の陰に見へかくれ

〔春蕪鳥啼〕

夷講とて艫たゝく音

〔春蕪鳥啼〕

付よろし

聲だみてかたる浄留理笑ふらむ

〔路傍樫〕

河内通ひの木綿商人
辻〳〵に金拾しと札はりて

〔春蕪鳥啼〕

吉原の句にもあれど

湯衣ながらに門涼する
雷は東にはれて暮の月

路傍樓

枯てひさしき榎伐べき

わづかなる錢かぞへる渡し守

牛博勞の牛引つれし

つもるべき程にもあらぬ雪ふりて

べきちかし

春待顔に羽子をつく也

春霊鳥啼

小豆撰ル窓の日影も西あかり

野傍樓

獲したりと魚くれてゆく

花落て重き草履をぬぎすてん

春霊鳥啼

たゝみし几巾の兎角かたむく

漫考夜半

其の二

おふた子の聞なれて寝るきぬた哉

よき句なれどもかの鹽辛きといふ趣向ならん歟

古寺や飼ふともなしに紅葉鳥

もみぢ鳥俳かいには不レ好

一夜さは不自由も雅なり鹿の聲

雅なり不好　うれし

橋よりも梢見下す紅葉かな

漢畫山水を見る如し

さび鮎やまだ起々の渡し守

起々の渡し守のきげんには、遊鮎よりは若あゆのかたしかるべからん

爪青き野飼の駒や草の露

おかしき案じ所珍重

娘の子橋にまたせてもみぢ哉

高雄楓橋と成とも題たくては聞えず

茸狩や花には行ぬ所まで

よき句なれど趣向古き心地す

牛部やに蓑虫の鳴や後の月

今の世の蕉門の流行體也

飽までも拾ふ木の實や京の兒

蕉流にはあらねど。

其の三

船見ゆる麓を埋む若葉哉

此趣向此間中若葉に案入候へども、とかく□□□出來かね候。此句もいまだ得たりとは申されず候

四五間の庭にうれしき若葉哉

ヶ樣の句が當時はよきに成て、もてはやし候へども、我等は左のみ取不レ申候。

大竹の葉に吹るゝや蝸牛

句は此方宜候へども、芭蕉に乘てそよぎけりと云趣向もあれば。

竹深し笠にこぼるゝかたつぶり

此句は小さき見付所なれども、おもしろく候。併上品の句にてはなく候。

妖怪繪卷　寶暦年中作

碧梧桐氏の『畫人蕪村』によると、長さ一丈余の横卷で、別に落款はないやうであるが、紛ふべくもない蕪村の筆ださうである。潁原氏はその妖怪の圖の中六枚の寫眞版を全集に掲げてゐる。丹後宮津黒田芝英氏の舊藏で、兩氏とも寫眞によつたのである。眞蹟は大阪の北田彦三郎氏の所有に轉じ、乾氏の解説を附して、コロタイプ刷の卷物となし、近く頒布するさうである。乾氏より此の複製卷物を見せられたが、本集に繪だけ再掲を希望し、氏の承諾を得てゐるが、卷物未着のため止むを得ず、碧梧桐氏及び潁原氏の紹介された文章を左に掲げる事とした。

榊原どのゝ古屋敷に、夜ナ〳〵猫またあまた出ておどりけるが、のちには人をなやましけるにつき、榊ばらどのの家臣稻葉六郎大夫、鐵砲にて向ひけるに彼猫またちつと

もおどろかず、胴ばらをたゝいてこゝをうてと云ければ、稻葉心にくゝおもひ、五十目玉を中だめに打けるに、猫又の腹より玉返りして、中〳〵打事あたはざりけるとぞ。

おれがはらのかわをためして見おれにやん〳〵

稻葉六郎太夫

小笠原何がしどのゝ座敷に林一角法師泊りけるに、夜更て數百人の足音して踊る體に聞えける故、ふすまを押明うかゞひけるに、數千の赤子あつまりて一角坊をなやまし、行がたしれず也けるとぞ。

林一角坊

出羽の國横手の城下、蛇の崎の橋うぶめのばけもの。

闕口五郎太夫、雨のふる夜此ばけものに出合、太刀をさ□□りけるとぞ（イニ□□行けるとぞ）。其後ろぶぞが島合戰の時、甚手がらをあらはしけるとぞ。佐竹の家中に今にその子孫有。

山城駒のわたり、眞桑瓜のばけもの。

大阪木津、西瓜のばけもの。

鎌倉若宮八幡、いてうの木のばけ者。

遠州見つけの宿、夜なきばゝ。その家にうれいあらんとする時、此ばけもの門口に來りなきけるとなり。人又その聲を聞て覺ず（イニ思はず）なみだをこぼしけるとぞ。かゝる事二三度に及びて、その家にかならずうれい事有しと也。

京、かたびらが辻ぬつほり坊主のばけもの。めはなもなく、一ツの眼、尻の穴に有りて光ることいなづまのごとし。

三俳僧の賛　　寶曆年中作

蕪村の在丹時代の友だち、無縁寺の兩巴、眞照寺の鷺十、見照寺の竹溪の三人を圖して、戯れに三人を揶揄する言葉を賛したのである。線香で燒き取つたので、全文は讀み得られないが、その燒き殘したところを拾つて見ると、

有馬……少シおかんの氣味がある。

和尚何やらしたゝかとれた様子じやな
うら山しいわい（こゝに用巴を描く）
和尚めを……むいめにある……お*

△一回忌菩提也
及至法界平等利益　**敬白**

とある。圖と共に碧梧桐氏の『畫人蕪村』による。（丹後宮津黒田芝英氏書藏）

遺文　明和六年作

蕪村と泰里と明和六年十二月十六日、京都の空也寺に詣り、二世定盛法師の遺像を拜し、泰里の所願にて同木像を寫し、これに蕪村の贊した文章である。泰里の「鉢叩きおの〳〵夜の首途かな」は此の時の吟である。乾氏の『蕪村と其周圍』による。（京都寺村助右衛門氏藏）

空也上人の八百年忌の法事おがみに、かの寺に詣でけるに、第二祖定盛法師の木像ことにすそうなれば、寫とりて得させよと、泰里子のもとめにしたがひ、臨寫してを

*へさせてく……しかしあ……が上……
心いつて……しをし……るおぞいやつ
しやクン〱（こゝに數十を描く）
御兩君御出か……いかに〱……いや
じややはり……て長く細……たのしみ
たい（こゝに竹溪を描く）
貳枚ともにからふきまんすいとうじや
南無阿彌陀佛經曰 念佛衆生攝取不捨 爲雲太信士。△

くり侍る。

抑、空也のおどり念佛とて、古きひさご打ならし和讃聲おかしく、ひよこ〱とおどりもて行ことは、二祖定盛法しよりはじまりける也。されば今の鉢たゝきも定盛の二字を本冊にしるして、おの〱襟にはかけ侍るなり。空也上人は加茂の明神より玉りける鰐口の片われを、大ィなるしゆもくして打たゝき、ひたぬる（ぶカ）に念佛したまひけるとぞ。其古き遺像も侍り。はた、わに口の片われも、かの寺の一の寶とて拜ませける。又、今ひとつの片われの鰐口は、今も加茂の社におさめ有けるよし、いちじるきことにて、いと尊くおぼえ侍る。

蕪村寫二於落日庵中一

遺文　明和八年作

仲の好い太祇や鶴英の歿した明和八年の秋、簑虫の西へ東へ吹かるゝを見て、感傷的に此

の一文を草したが、十年の後百池が草稿をつき向け、其の署名を求めたものである。乾氏の「蕪村と其周圍」による。(京都寺村助右衛門氏藏)

諸虫啼つくして三徑荒に就ぬ。それが中に蓑虫といへるものゝ、木の葉引かふて逸(マヽ)としてふかくふかくかくれ住ムあり。身に玉むしの光をかざらず、聲に鈴虫の色をこのまざれば、人に捜し得らるゝの愁ひもなく、北吹けば南へぶらり、西吹ば東へぶらり、物と爭はざれば、風雨に害はるゝかなし(み)(び)もなし。只一縷のいとはかなきも、かれがためには千錬の鐵索にもまさり侍らん。おもふに此秋や太祇去り、鶴英うせぬ。かの輩は世にいと名高く、常に九回の腸に苦しみさ(マヽ)は天年にいとはれけるなるべし。蓑虫よ、我汝に與ミせん。穴かしこ、東隣の老嫗にも去らるゝことなかれ。

みの虫(も)(の)ぶらと世にふる時雨哉

時雨　雨ふればやがて巣の中にすりこむおかしさに

みの虫のしぐれや五分の智惠袋

しぐれ松ふりて鼠の通ふ琴の上

しぐるゝや鼠のわたる琴の音

みのむしの得たりとかしこし初しぐれ

賀越の際、婦人の俳諧に名あるもの多し。姿弱く情の癡なるは、女の句なれば也。今戯れに其風調に倣ふ

しぐるゝや山は帶するひまもなし

河豚

缶(ホトギ)鼓て鰒になき世の人とはん

鰒の面ラ世上の人を白眼むかな

音なせそ敲くは僧よ河豚汁

蕪村書 花押

此書はむかし我かいやりすてたるものにて、紙屑籠の底に有けるを、百池目ばやく取おさめて、後十とせ斗過て是に名をかいつけよとせがみければやがて

蕪村書翰集

蕪村書翰集

蕪村書翰集　　武藤山治氏藏

河東碧梧桐氏の談によると、此の書翰集一卷は播州高砂岸本家の舊藏であつたが、その親戚長谷川氏に讓られ、更に吉川氏より武藤氏の愛藏に移つたので、碧梧桐氏より一覽を望まれた武藤氏は書翰の價値の大なるを知つて複製を企圖し、大正八年審美書院からコロタイプ刷の卷物として同好者に配本されたのであるといふ。碧梧桐氏の蕪村研究は此の書翰集解説を武藤氏に約した結果ださうで、私も同氏より一卷惠贈を受けたのである。書翰は大魯宛三通、正名宛六通、正名・春作宛三通、東菑宛四通、布舟宛一通、無宛名一通、都合十八通である。卷物は「夜色樓臺雪萬家　謝寅書」と題した淡墨の一枚畫があり、次に

いにしへ柏莚が此榎にあそべるをおもひ出て戲にかれが句法に倣ふ

小春凪眞帆も七合五勺かな　　蕪村

右らかふ瀬晩眺

とある紙鑿を收めて、つぎ〳〵に十八通の書翰と遺文二通が複寫されてゐる。こゝには卷物の順序を變更して、宛名〳〵によつて一括して掲出するが、年代を調べる便宜の上からの排列に過ぎない。

大魯宛

めき〳〵と寒く相成候。御家内無ニ御障一めでたく存候。拙家みな〳〵無爲くらし申候間、御安意可レ被レ下候。先日は獨吟すり物おびたゞしく御登せ、處〻配分いたし候。御句どもいづれもおもしろく、於ニ京師一甚大評判、於ニ愚老一愉悦之至に御座候。別而きぬた・蟇の曲御秀吟存候。きぬたは古き樣に候へども、我夜をくるゝと申所、甚宜珍重に御座候。二ツの古さとも巴人ニ先作在レ之候へども、少も等類無レ之めでたく承候。愚老とかく風塵に

くるしみ、例の通句も無レ之無念に御座候。漸

水落て細脛高き案山子哉

枯尾花野守が鬢に障りけり

白髮相憐の意ニ候。

狐火の燃つくばかりかれ尾花

是は塩からき樣なれども、いたさねばならぬ事ニて候。御鑒察可レ被レ下候。

几董會當坐　時雨

老が戀わすれんとすればしぐれかな

しぐれの句、世上皆景氣のみ案候故、引違候而いたし見申候。眞葛がはらの時雨とは、いさゝか意匠違ひ候。

右いづれもあしく候へども、書付ぬも荒凉ニ候故、筆の序にしるし候、餘は期ニ重便一候。頓首

九月廿三日

大魯樣　　蕪村

別啓

每〻乍ニ御面倒一又例の革足帋ほしく御座候。娘も手習ニ參候故、はかせ申度候。

拙が足は少ヶ候。

九もん八歩くらいニて能候。

おくのが足形は別ニ相下ゕ候間、足袋やへ御仰付可レ被レ下候。御めんどうながら奉願候。以上

大魯宛

御返書相達忝拜覽、御渾家御淸寧めでたく存候。拙いづれも無爲くらし申候。御安意可レ被レ下候。

小すり物とやら、いまだ拙かたへはとゞき不レ申候。

一御發句いづれもめでたく承候。

一ちか頃無理成哉留之事、御尤と被レ存候。拙句ニも折〻有レ之候、連哥者流やかましく可ニ相申一と存候へ共不レ妨候。

わたの花たま〳〵蘭に似たる哉　素堂

春の水ところ〴〵に見ゆるかな　鬼貫

老なりし鵜飼ことしは見えぬかな　蕪村

右之類はいづれも不レ苦歟と覺申候。先頃拙句ニ

きのふけふ高根のさくら見ゆるかな

これ等は無理歟と存候へども、かまはず致置候。見事哉と申留、御尋いかにもあしく可レ有レ之候。しかれ共愚老はくるしからず存候。

美哉(ミゴトカナ)

洋々平美哉盛也　悠哉

などの類はずいぶんと可レ然候。見事も和俗のとばにては、見ー物ー事と申心に候や。左候へばあしく候。愚意ニハ美ナル哉の事と存候。連哥者流は漢學無レ之人多候故。却而俳諧士よりは不さばけ成論も時々有之候。しかし世ニ論ニ預り候てにはは、いらぬ物に御座候。

一伏水柳女小すり物呈覽いたし候。婦人の句ニしては洒落ニ候。ふしみにては柳女が大將ニテ候、男子も及びがたく候。これらも愚社中ニテ候故、大慶いたし候。

一春帖追ずり出來次第相下可レ申候。おもしろき御趣向もいはゞ、二三日滯留ニて下坂いたし、はいかいも仕度候。とかく卑賤之句法はあしく御座候。

御內室樣へもよろしく御心得可レ被レ下候。ともゝよくく御傳言申上候。几董へ御傳言相心得申候。四五日逢不レ申候。かしこ

三月廿八日

芦陰主人　　紫狐

大魯宛

一昨日は御書簡忝拜覽、御安寧珍重存候。しかれば急成すり物、愚句初冬の吟、御入用の由御仰越候所、此節畫用のみニ取かゝり候而、絕誹ニ而一句も得不レ申候。しかれ共愚句なくてならぬとの御あふせ故、無理にうめき出候句を書付候。

杜夫魚のゑものすくなき翁かな

玉あられ漂母が鍋をみだれ撲(ウツ)

急案にてすぐれず候へども書付候、短景草々、かしこ

十一月二日

大ろ樣　　しこ

正名宛

朶雲飛來先以御安全被レ成ニ御暮ー珍重存候、愚老無爲ニ候。むすめ事はいまだはかぐしく無レ之、御察可レ被レ下候。

一紙料之義御厚情忝、几董への爲替大金ニ候へ共、此方ゟ相渡可レ申候、左樣思召可レ被レ下候。

一ちよ良下坂御出會被レ成、御はいかいも有レ之、蚊しま法師も出合のよし、佳興さぞと想ひやられ候。樗良發句題を出候所不雅成由、文章家のさたさも可レ有レ之存候。

一御句いづれもよろしく候。扨今更の句評の事、樗良も蚊しまも御氣に入らず候よし、いかさま兩法師の添削のごとく無レ之候而、隨分よろしき御句と存候。愚評は只〻

今更に……我に添

是にて至極と存候。しかと御極メ被レ成可レ然存候。しかし蚊しま法しへは御さたなし可レ然候。

一先達而被レ遣候御句帳も、とくと見候而、評いたし候上可レ申と存候處、とかくけしからぬ多用ニ而、一日〱と延引に及申候。右句帳の内、殊外能句ども多く相見え申候。愚老氣質かねて御案内の通、少も訣言などを吐候きたな心は無レ之候。

一蚊しま坊へ此書狀遣申候。御達可レ被レ下候。御內意被ニ仰下ハ、御眞實の至わすれがたく候。

一小すり物よろしからぬ物なれ共、坐右ニ有ニまかせ候。御內樣へもよく〱御心得可レ被レ下候。春作樣御かはりなく候哉、書同然ニ御傳可レ被レ下候。紅楓の時も近より候。又〻被ニ仰合一御上京相待候事に御座候。妻もくれ〱御言傳申上候。時下風塵艸々。頓首

九月六日　　蕪村

まさな樣

老懷

去年より又寂しひぞ秋のくれ

いそがしく候て、發句は得不レ申候。

まさな宛

彌御安全被レ成ニ御座一奉レ賀候。愚老無爲、むすめ事も此三四日は甚こゝろよく、手の自在も大かたニよく成候て、琴のけいこもちとづゝ、はじめ申体に御座候間、御安意可レ被レ下候。每々御尋被レ下、母子ともニ御深情忝がり申候。

一御發句どもおもしろく承候。

心やすさよ後の月

初五御そうだん、是はなんほど可レ有レ之候。いそがしく候故、つら〳〵案見不レ申候、先ヅハ

呼べば來ます心やすさよのちの月

主從の…………

魚さげて…………

或は

喰ものも有にまかせつ後の月

元來趣向おもしろく候ゆへ、案候はゞいかほども有レ之事ニ候、猶御再案被レ成可レ被レ下候。

一ばせを葉の繕ひぶしん、少も小細工成事は無ニ御座一候。宋人の詩意のおもむき有レ之甚珍重ニ候。

一寫經集先達道立子ゟ被レ進候ニ付、愚老方ゟ上ゲ候は餘り有レ之候由、いづかたへなり共遣候樣被ニ仰下一、御丁寧忝存候。左候はゞ赤羽かたへ被レ遣可レ被レ下候。袋紙には書付可レ有レ之候故、袋なしに被レ遣可レ被下候。乍ニ御面倒一奉レ願候。此程申すて候中左ニ、

紀の路にもをりず夜を行雁ひとつ

(墨消)(南)紀は日のもとの南方のかぎり、なをそれにもをりず、只一羽友を尋ねて、いづちをさして啼わたることにや、千萬里の波濤、孤雁のあはれをおもひつゞけ候。

起てゐてもう寢たと云ふ夜寒哉

近來の流行、めつたニしさいらしく句作り候事、無念の事ニ候、それ故折〻はかくもいたし見せ申候。

たはら(俵)して收メたくはえ(蓄)ぬ番椒

うつくしや野分の後のとうがらし

廿日洛東金福寺寫經會題 鹿

三たび啼て聞えずなりぬ雨の鹿

立聞のこゝ地也けり鹿の聲

鹿笛を僞りならす(鳴)山屋形

探題 山城の名所づくし

白河

黑谷の隣は白しそばの花

一休の白河黑谷隣、紫野丹波近

右の語を用ひ申候。

其外あれこれいたし候へ共、おもひ出不レ申候。尙あとより。蚊しま法師・春作樣へも宜奉レ願候。御內樣へも、かしこ

九月廿二日　夜半

まさな樣

正名宛

今日もすぐれぬ空なれども、無理になだへ出足仕候。どなた樣へも宜御申達可レ被レ下候。扨

可惜落花君勿掃墨消(此字を消して)「是は拂字ニテ候墨消、拂字ニ御書添可被下候)

とかくこゝろ落付申さず候故、何もかもあやまりがちに御座候。旧國子へ御出被レ成候はゞ、其旨宜御申傳可レ被レ下候。なだの歸路ニちよと御めにかゝり候て、御物がたり可レ仕候。先以此間御やつかい御せは御禮も難ニ申盡一候。御內樣へよく／＼被レ仰可レ被レ下候。以上

三月十二日　蕪村

正名樣

まさな宛

彌御安全奉レ賀候。愚老無レ恙廿二日歸京仕候。なだゟ浪花へ立歸候節、御禮旁御尋可ニ申上一と存候處、扨も京腹へ鮮魚おびたゞしく給候故歟、旅宿にて大腹下り、漸、字一子の御藥にてちくと快、廿一日夜舟ニ罷登候。其節貴家へも御尋可レ申と存候所、よしのへ御兄弟御同伴にて御出被レ成候よし承及候ニ付、さしひかへ上京仕候。まことにいつも／＼浪花滯留のせつは御やつかいに罷成、御厚意かたじけなく御禮も難レ申御座候。御內政樣・春作樣へもよろしく／＼御禮被ニ仰達一可レ被レ下候。手前內ノものもくれ／＼御禮申上候。先ヅ御禮旁御起居御尋申度如レ此ニ御ざ候、餘は期ニ後便之時一候。以上

三月廿四日　蕪村

まさな樣

まさな宛

扨も／＼御うと／＼しく相過候。能天氣ニは候へども、よほど秋冷身にこたへ候。御安全御くらし被レ成めでたく存候。愚、かはらず消日仕候。日外は御狀被レ下候處、御答も不ニ申上一無賴の至御免可レ被レ下候。近日浪花下りの事も御座候ゆへ、其節はどふぞ御尋申上、つもる御物

がたりも仕度、たのしみ申事に御ざ候。されども不時之晝用共出來候故、いかゞ可レ有レ之や無二覺束一候。御内室樣にもとくと御本復被レ成候よし、めでたき御事ニ御ざ候、よろしく御傳可レ被レ下候。宿の者くれ〴〵御言傳申上候。
一御風雅もひさしく不レ承候。いかゞ候や御ゆかしく存候。京はからず道立子・几董、其外社中打より候而たのしみ、御噂など申出候。曉臺も此ほど上京にて大津へも罷越候。久ゝ御上京のさたも無二御座一候。ちと思召たち奉レ待候。春作樣へもよく〳〵御傳可レ被レ下候。
餘り御ゆかしく且御起居御尋如レ此御ざ候、尙期二追便一候。不具

九月廿一日　　夜半

まさな樣

正名宛

扨も打絕御安否もうけ給らず候。さむさしきりニ候へども、御安靜被レ成二御座一候や、御ゆかしく候。愚老も此ほどは持病の胸痛、よほどこまりはて申候。しかし持病の事とさわぎ不レ申候。其後御上京も無二御座一候哉。さても〳〵浪花も蓼(寥)ゝとして、一向風雅のさたも不レ聞へ候。京師はまだ息が通ひ候歟と存候。道立子折節御うはさ申出候。餘り御遠ゝしく候故かくのごとくに候。扨も近年畫と俳とに諸方ゟせめられ、ほとんどこまり申事ニ候。春作樣よろしく奉レ賴候。無腸御出會も御座候はゞ、御傳可レ被レ下候、此方妻・むすめ、くれ〴〵御致聲申上候。以上

十月五日　　夜半

正名樣

物負て堅田へ歸るしぐれ哉
蓮枯て池あさましき時雨哉
しぐるゝや長田が館の風呂時分

右昨日會にいたし申候。いづれもあしく候。

正名・春作宛

其のちは御物遠打過候。さても霖雨こまりはて申候。き境もさぞと察入申候。先ゝ御兩君御安全被レ成二御暮一めでたく存候。愚老かはらずくらし申候。其後は一向御書

通にも預らず候故、いかゞと存候。御寺の御用に而、御ひまなく候はんと存候。〇大魯一件、嘸御聞被成候半と存候。かねて御察候通ニ而、なを行する無覺束事にきのどく仕候。
御風雅いかゞに候や、久しく御作もうけ給らはず候。愚老も只〱書にせめられ候へども、日々疎懶に打くらし、筆をとり候事甚うとましく、それ故書もはかどり不申、びんぼう神の利生いちじるく有がたく存候。
一春作様、御たのみの畫もいまだ落成不仕、延引のだん御免可被下候。やがて揮毫御めにかけ可申候。
一むすめ事も先方爺〻、專ら金もふけの事のみニ而、しほらしき志し薄く、愚意ニ齟齬いたし申候事共多候ゆへ取返申候。もちろんむすめも先方の家風しのぎかね候や、うつ〱と病氣づき候故、いや〱金も命ありての事と不便ニ存候而、やがて取もどし申候。何角と御親(切)節に思召被下候故、御しらせ申上候。
御令内樣へもよろしく御傳可被下候、愚妻もくれ〲御致聲仕候。かはる事無之候へども、御起居御尋申上たく如此御座候。餘は期後便候。頓首

皐廿四日　蕪村

まさな様
春作様

さみだれや大河を前に家二軒
涼しさや鐘を離るゝ鐘の聲

右は當時流行の調ニては無之候。流行のぬめりもいとはしく候。

雨後の月誰ぞや夜ぶりの脛白き

右いづれもおもしろからぬ句なれど、折から書付候。

さても無腸はいかゞ御入候や、絶ておとづれもなく候。御ゆかしく候。宜御傳可被下候。

正名・春作宛

其後は御物遠に罷過申候。寒冷相募候處、御安全被成ニ御暮めでたく存候。愚、無爲ニくらし申候。
一先頃は預ニ御懇書、殊ニ御すり物さりとはおもしろく候。とかくけしからぬはいかい御上達と、几董とも御噂申

出候。當時浪花第一の俳家と被レ存候。愚、諸事ニ甚い
そがしく、其上短日にて一向はかどり不レ申候。訪來人
は朝から晩迄綿々として、さりとは邪魔成事ニ而こま
りはて申候。御察可レ被レ下候。
一春作樣へ申上候。いつぞや句合の序の事いまだ案不レ申
候。遲り候故御免可レ被レ下候。いそがしき事、あだか
も泥中の蓮のごとくニ候。其上筆を取候事いやにて、
諸國文通等閑ニ相成、錢箱かたげて呵られ申斗ニ候。し
ばらく御待可レ被レ下候。
一まさな樣御内かた樣へもよろしく奉レ賴候。内ノもの
もくれ〴〵御傳言申上候。此書繪筆にてしたゝめ候。
よめがたく候はんと存候。何事もあとゟ〱。かし
こ

十月廿七日　蕪村

まさ名樣
春作樣

水仙や寒き都のこゝかしこ
古傘の婆娑としぐるゝ月夜哉

何やら發句も四五句いたし候へども、急ニおもひ出され
不レ申候。

正名・春作宛

兩三日は春雨しきりニおもしろき天氣御座候。まことニ爾
來打絶御無音ニ罷過候、彌御安全被レ成ニ御座一奉レ賀候。
しかれば

花　さくら

右二題の内、いづれ成共御工案、二月中旬迄御登せ被レ下
度候。花櫻の帖を出申度候。御社友の御句ども御取集メ、
早々御登せ被レ下度候。右御たのみ申たく如レ此御座候。
宿の者もくれ〴〵御傳言申上候。以上

正月廿六日　夜半

正名樣
春作樣

春雨や暮なんとしてけふも有
遲キ日や雉子の下り居る橋の上

右句おびたゞしく候へ共、書付候事わづらはしく候。略
候。以上

東菑宛

扨も此ほどは存外の長滯留、殊に病中何角と御やつかいの至、御德蔭を以テ微恙早速平常ニ復候而大慶仕候。歸菴後隨分堅固ニは候へども、扨おびたゞしく用事重りこまり申候。乍二筆末一御內政樣・春作樣へもよろしく御禮被二仰達一可レ被レ下候。此度は數狀したゝめ候ニ付、吉の樣へ別ニ不二申上一候、やがて御上京被レ成候はゞ、貴顏寛〻御禮可二申上一候。

一貴家ニ而仕候愚句、此度したゝめ候て進覽仕候。

一梅女へ遣候書は、跡〳〵相下可レ申候間、かねて左樣ニ御傳可レ被レ下候。先御禮延引ニ及候ニ付、草〻如レ此ニ御座候。頓首

十月十八日　蕪村

東菑樣

東菑宛

先日は預ニ御懇書一候處、其節は愚宅ニ三十四五人の客來、京師無双の箏（筝）の妙手、又ハ舞妓の類ひ五六人も相交、美人だらけの大酒宴にて鷄明ニ至り、其四五日前後は亭主大草臥、只泥のごとくニ相くらし申候。それ故早速御返事も不二申上一御察可レ被レ下候。扨も先頃御出京の節、又御尋も可レ有二御座一哉と心待いたし候所、御さたなく御下坂、嘸御用しげき故とは存候へども遺恨不レ少候。愚老も此節、蓊地閣ニ畫ニ取かゝり候て、一向發句も出不レ申、殺風景ニくらし申候。

一高尾行の御書物つく〴〵拜吟、扨もおもしろく承り申候。春作樣・蟹先生へもよく〳〵御傳可レ被レ下候。殊ニ後世の道の霜夜、近來之秀作と存候。

一梅女かたへ拙畫贊の物をくり申度、心がけ居候處、とかくいそぎの物を揮毫いたし、ほとんどつかれ候て日〻〻延引、御逢被レ成候はゞよろしく御申譯置可レ被レ下候。程なく相下可レ申候。

一乍二御世話一一鼠子御便候はゞ、此書狀御達可レ被レ下候。

一芦陰舍いかゞ候や、久しく御出會も無レ之御樣子いぶかしく存候。とかく御すてなく御鼓吹被レ成被レ遣可レ被レ下候、愚老において御たのみ致候。御內政樣へよく〳〵被二仰達一可レ被レ下候。愚妻かたへ御傳書忝がり申候。餘

は追々、先御返事延引御斷のためあら〳〵かしこ

十二月十三日

東　菑　様　　　紫　狐

東　菑　宛

兩君只今御上着之由、御草臥奉察候。御書面のおもむき承知、卽大魯かたへ手紙遣候間、早〻もたせ被遣可然候。手前下女病氣ニ而宿へ下り、無人無是非候。何事後刻拜眉可申承候。以上

五月十六日

衣の棚竹や町上ルにしかわ

吉もんじ屋長右衛門

大魯右之所ニ居申候間、早〻手紙もたせ可被成候。

とうし様　　ぶそん

東　菑　宛

志慶子への一通早〻御達可被下候　蚊鳴居士へ書狀遣不申候。御會被成候はゞよろしく奉願候。あとゟ書通と御申可被下候

御風邪の由、我等も同病相あはれむべき事ニ候。併、氣遣なき病ひにて安心仕候。御家內無御殘御引被成候はんと存候。流行の病ひは人先ニ仕舞候が手柄ニ候。

一今日几董〆申來候は、大魯書通有之候。東菑様と雅俗とも絕交いたし候との事、是は此程蛟しま法師上京にてあら〳〵承候。さも可有御事とは存候へ共、左様ニ急ニ絕交とは驚入申候。もちろん芦陰法師不埒は嘸と存候へ共、しばらくも御懇意被成候御義に候へども、何とぞ思召かへられ、今一度和平を御調ひ被下候はゞ、於愚老大慶の至ニ御座候。此義くれ〳〵春作様幷ニかしまのおやぢとも御相談被成被下度候。

一とりかひ來月ニ至り、中旬〆前ニ何とぞほしく御座候。併、高價ニ候はゞ、かならず御無用に被成可被下候。此ほどの相場は甚不敢當の事ニ候、さばかり貴き事惜きとり貝と存候。

一むめ文此程相達申候。貴君御男ぶりも至極ニ候故、何ぞおかしきもの揮毫も仕候はゞ、御慰進上可仕と心がけ罷在候。御近作承りたく候。はいかい大御上達恐入候。かしこ

二月十八日

東菑様　　　　　　　　　　　　　　　紫狐菴

別荘法師が花も隣也

花咲て雀もすさめぬ薺かな

雁行て門田も遠くおもはるゝ

舞まひのにはもふけたり梅がもと

みのむしの古巣に添て梅二輪

つゝじ咲て石移したるうれしさよ

いづれも病後、あしきは御免〳〵。

春作様・御令内様へもよろしく御傳可レ被レ下候。

布舟宛

新春の嘉祥めでたく申收候。彌御安全被レ成御迎陽珍重存候。愚老無爲ニ加ニ馬齡一申候。其後は御互ニ音信不通のありさま、いかゞ御風雅無ニ覺束一存候。

一當春興帖どふぞ御句加入所望申候。早ゝ春興御句御登せ被レ下度候。甚いそぎ申事ニ候。

一愚老門人召波遺稿出板ニ付、一部進上仕候。寛ゝ御覽可レ被レ下候。京師ニハめづらしき俳者にて有レ之候處、

今は古人ニて、愚老半臂を殺れ候心地ニ候。

一當春中はどふぞ、貴境へも遊行可レ仕とこゝろがけ候。

一李樹子・瓜京子へもよろしく御傳聲可レ被レ下候。

一暮櫻亭の額字、延引ながら此度相下候。何事も春永に可ニ申承一候。かしこ

孟春十六　　　　　　　　　　　　　　　蕪村

布舟様

無宛名

せいぼ　　　　　　　　　　　　　　　　蕪村

靈運もこよひ容せとしわすれ

すゝはきや調度すくなき家は誰

春興

梅折て皺手にかこつかほりかな

紅梅や比丘より劣る比丘尼寺

鶯や比叡をうしろに高音哉

うぐひすの高音、あたらしき心地ニ候

塊にむちうつ梅のあるじかな

陽炎や簣(アジカ)に土を愛す人

陽炎にしのびかねてや土龍

雉子啼や坂をくだりのたびやどり（客舍）

うぐひすの枝末を摑む力哉

しづへ、篠枝とも書候へ共、世人に通じかね候ほん、やはり俗に枝末と書たるが可ﾚ然歟。

指南車を胡地に引去霞哉

此句けやけく候へども折ふしは致度候。去ﾙと云字にて霞、とくと居り候歟。

等閑に香炷ｸ春の夕哉

春宵の姿情、所を得たる歟

右いづれも御評判いかにと相待申候。かゝる風塵中ニハ奇特之至と思召可ﾚ被ﾚ下候。かしこ

十二月廿六日　　蕪村

（晋風曰、武藤氏藏『蕪村書翰集』には右十八通の外に浪速の旅寓にて臥床せる文、及び陶弘景の詩に感じて作れる發句の二紙簽あるが、一は『俳句類聚』に一は『文集』に採錄したので、こゝには省いて載せなかつた。）

又波居士に宛たる蕪村翁の墨蹟

田中寸紅堂氏藏

大正八年の夏、田中氏の手に入れた蕪村の遺墨二十五点をコロタイプ刷にして、右の標題を附して配本した中に、書翰の体をなせるもの十六通を、揭出の順序によつて再錄したのである。召波の名宛あるは十二通で、全く宛名のなきは四通である。併しその孰れも蕪村から門人春泥舍召波に宛てたものに疑ひない。三月廿二日附の書翰に「愚老ひろめの事も無ﾚ滞濟候」とあるので、蕪村の夜半亭立机の年、明和七年とすれば、召波は翌八年十二月故人となつてゐるから、此の書翰はすべて明和七・八年のものと見る說に同意して好い。

一、春泥宛

尚〳〵わらびの根、御堀らせ被ニ差置一可ﾚ被ﾚ下候

春雨甚おもしろき光景ニ候。しかれば先日御ものがたり

朔日ニ又ゝ馬南ニ

の人形被ㇾ下置一忝、小兒雀躍仕ㇾ候。

一くし貝御惠投、別而好物の品大慶仕ㇾ候。たのみ申度候

一朔日御會の事得意仕ㇾ候。

一愚老ひろめの事も無ㇾ滯相濟候間、御安心可ㇾ被ㇾ下候。いづれ近日□參可ㇾ得二貴意一候。以上

三月廿二日

再白、おいつ樣へも可ㇾ然御傳聲可ㇾ被ㇾ下候。宿の者へ御傳書忝がり申候。以上

春泥先生　　三菓

二、無宛名

嵯我の吟は定而御聞可ㇾ被ㇾ下略仕候。

見失ふ鵜の出所や鼻の先

これも雅因亭探題にて申候所、案棒候故入二御聞一候。餘期二(拜顏)面晉一候。頓首

五月二日

三、召波宛

華亭後園の筍御配賦被ㇾ下忝、實、雪中にまさり候心地御座候。扨、御哥仙並御句共、明日出點可ㇾ仕候。今日多用艸々貴答御免可ㇾ被ㇾ下候。以上

五月六日　　蕪村

召波君

四、春泥宛

御つゞき被ㇾ成宜御座候由、めで度存候。ずいぶん保重第一に御座候。しかれば御藥の義に付、竹老人へ五日の品可ㇾ被ㇾ遣由、何時ニ而も御勝手次第に可ㇾ被ㇾ遣候。手帋相添可二差遣一候。

一、御句ども引墨仕候、いづれも引墨の御句おもしろく承得候。餘期二拜眉一萬々。頓首

十月廿一日

春泥樣　　夜半

五、春泥宛

昨日者御苦勞忝存候。三ッ物、坐右拂へば目に初霞。のかた可ㇾ然被ㇾ存候。それに御極可ㇾ然候。大竹雨子へ御傳聲申聞せ候。雨子ももどり御立寄可ㇾ申と被ㇾ申候。何事も期二拜顏一候。頓首

十二月十一日

春泥様　　蕪村

六、春泥宛

昨日者御出席被レ下おもしろく候。しかれば旨原評並ニ両吟詠草もたせ落手、御句いかにも可レ然候。跡、付見可レ申候。

一御到來の由、見事の松茸被レ掛ニ貴意一忝被レ存候。早速賞味可レ仕候。五席菴どふぞ御出席可レ被レ下候。餘は期ニ拜面一候。頓首

九月十一日　　蕪村

春泥様

七、召波宛

昨夜鐵僧社中と會ニテ、不夜菴主も出席ニ付、雁宕書、則不夜房へ相渡候。さだめて不夜房より貴家へ相屆可レ被レ申候。先日者毎々御馳走ニ罷成、終日相たのしび大慶仕候。且、仲英詩もたせ被レ下慥落手仕候。夜前も不佞句なし。五日ニハ何とぞと存候得ども、時節多用心もとなく候。只御身ノ上うらやましく被レ存候。以上

七月二日

召波様　　蕪村

八、召波宛

如レ右故此間者菴亭殘念〻、御句共とのほか御出來の方御座候。則△の多少ニテ甲乙判然タリ。眉山への手帋、早速御屆もたせ被レ下辱被レ存候。廿七日鼓舌亭、どふぞ出席仕度候。畫三昧おのづから誹腸薄ク罷成候。何事も期ニ拜眉一候。頓首

十七日　　落日庵

波君

九、春泥宛

夜前者御出被レ下候所草〻、今日もかはらぬもやうにて、途炭の苦しみニ而候。御ホ句此たびはいづれも善美いたし候。則、引墨仕入ニ御覽一候。御うら山しく被レ存候。拙老などは一向無レ之、苦吟いたし申事ニ被レ存候。何事も貴面。已上

五月廿八日

阿の名產被ニ下置一、今日早速たのしび可レ申と大慶仕候。

以上

春泥様　　　　　　　　夜半

十、無宛名

一自笑、露すり物一向さた不レ承ゆ。御句中ニテ御座ゆ露のすり物などは、世人ニあたらぬ物ニテ、錢ヲ入、すりちらかすは損のかたニテゆ。いかゞ自笑ニ承り可レ申ゆ。拙老此間は寺の書壁ニ往來致ゆ而、只今歸宅草々及ニ御答一ゆ。已上

八月十七日

十一、無宛名

百姓の生キてはたらく暑かな

雷に小屋燒れけり瓜の花

夕立や足のはへたる明俵

虫干や甥の僧訪ふ東大寺

右此ほど仕ゆ。あしくゆ得共書付ゆ。小松君可レ然御傳達可レ被レ下ゆ。以上

六月廿一日

十二、召波宛

秋冷御平寧被レ成ニ御座一奉ニ恭慶一ゆ。しかれば先頃御草稿いまだ愚評不ニ相加一、そのまゝに差置ゆ。北野參詣の節持參可レ仕ゆ。延引御宥恕奉レ希ゆ。且、釜座御有幸(マヽ)ニ付、昨日不夜御不參と奉レ察ゆ。此間は兎や角塵用諫懶相過ゆ。縷々期ニ拜眉ニ可レ申(二字不明)ゆ。頓首

八月廿五烏

召波君　　　　　　　　落日庵

十三、召波宛

秋暑甚ゆ處、御無爲ニ御しのぎ被レ成ゆ由傳承、めでたくぞんじ奉ゆ。まことニ先日は御蔭德を以、奇なる物共拜見大慶仕ゆ。殊ニ終日御馳走ニ罷成、おもしろく罷歸ゆ。共後御禮ながら參申度存ゆへども、兎角世ニくるしみ半日ノ閑を得がたくゆ。近々どふぞ可レ得ニ貴意一ゆ。已上

七月廿日

尙々おいつ樣へも宜奉レ願ゆ。

召波君　　　　　　　　老雲

十四、無宛名

昨日は朝飯後より大腹痛ニテ、粥ニ養れ罷有、扨々殘念至極

存候。今日は平生ニ相成候。何卒北野參りちよと御訪申
上度罷有候。
一、ホ句共則引罷仕候。愚も二三句案じ候得共、いづれ
も御連中へはいかぬ句故、御さた不レ申候。しかし海鼠は

思ふと云ぬさまなるなまこ哉

此海鼠はよく候。まぎらかしの風情ニて
はなく候。

畠にもならで悲しき枯野哉

是は案場驪辛シ。

十五、召波宛

過日は得ニ寛話一大慶仕候。彌御平安奉レ賀候。今日は雈亭
雅會殘念被レ存候。しかれば雛屋孫兵衛殿へ用書差遣申
候。近頃乍レ憚早ゝ相届候様ニ、小童へ被レ命被レ下候は
ゞ、辱次第ニ御座候。何卒明日相届候様ニ奉レ願候。昨日會
日を取ちがへ雈亭へ罷越、偶坐半日の閑ヲ得候而、却而
雅興、薄暮歸宿仕候。しかし愚句いつもながら別而昨日
は拙作、甚遺恨御座候。餘は期ニ拜顏一候。頓首

召波君　落日庵

十六、春泥宛

先(刻)刻者御帋上、折節近所へ罷出卽答不ニ申上一候。

沖ノ小舟

至極おもしろく被レ存候。ぬけがけは百池句ニ最早出候。
殘念御座候。
一竹老人へ御文被レ遣候由、則、私手帋も被レ遣可レ被レ下
候。方金三百疋ニ而宜御座候。拙老も少ゝ胸痛、今晩は
御見舞不ニ申上一候。折角御保養御引こもり可レ被レ成候。
以上

十月廿一日

小兒事御尋被レ下忝被レ候。當分のいたみニ而御座
候。

春泥様　夜半

霜月十三日　靑彥編

大魯の三十三回忌に靑彥の編集した『霜月十

三日」は、文化七年の出板であるが、そのはじめに蕪村から大魯に宛てた書翰が一通、眞蹟の通り摸刻されてゐる。古俳書に蕪村の書翰の紹介されたのは、これが嚆矢であらう。私は嘗てその全文を紹介した事があるが、こゝに收むるものも亦、その時の覆刻により二字不明の個所は、キ子大魯をさすであらうと推讀した。露石氏の『聽蛙亭隨筆』にもその二字は不明となつてゐる。

寒氣はげしく候。御壮健御くらしめでたく存候。愚老無爲消日いたし候。〇御句あまたいづれもおもしろく承候。とかく兵庫はキ子相生(性)之地と被レ存候。浪花御住居の時よりは、けしからぬ超乘(頂上)ニて候。當地社中みな／＼御噂申出候。有が中にも

　足を折て頭に餘すふとんかな

　　愚老三十年前の作に、かしらにやかけむ裾にやふるぶすま。と、わび寢の床に屈伸をさだめかね候。足を折て坊主あたまを憐たる才覺、愚が及びがたきところに候。

　ともし火に氷れる筆を焦哉

　　愚句ニ、齒(露)あらはに筆の氷を噛夜哉。と、貧生獨夜感をつぶやき候。子も又寒灯に狸毛を焦したるあはれ、忘がたなく候。よき兄弟と存候。

几董・道立君も無事に候。御家內宜しくたのみ上候。此ほどは句は無レ之候。あとより可二申上一候。かしこ

　十二月二日　　　夜半

大魯サマ

蕪村文集

其獨亭忍雪
醉庵其成　共編

安永六年の春興『夜半樂』から、春風馬堤曲の一篇を抄して「蕪村文集」に收め、それに添へて此の書翰を蕪村自筆のまゝ摸刻してある。

『蕪村文集』は書肆菊舎其成が、月居の門人宰町に編集を托し、稿成つて紛失した爲め、忍雪と共編で其成の出板したのであるから、此の書翰は偶然其成の手に入つたのを附載したのであらう。

春もさむき春にて御座候。いかゞ御暮被レ成候や、御ゆかしく存候。しかれば春興小冊漸出板に付、早速御めにかけ申候。外へも乍ニ御面倒一早々御達被レ下度候。延引に及候故片時はやく御届可レ被レ下候。

一、春風馬堤曲　馬堤は毛馬塘也 則余が故園也

余幼童之時、春色清和の日ニは、必友どちと此堤上ニのぼりて遊び候。水ニハ上下の船アリ、堤ニハ往來の客アリ、其中ニハ田舍娘の浪花ニ奉公して、かしこく浪花の時勢粧に倣ひ、髮かたちも妓家の風情をまなび、（蠹）傳しげ太夫の心中のうき名をうらやみ、故鄕の兄弟を恥いやしむもの有。されども流石故園ノ情ニ不レ堪、偶親里に歸省するあだ者成べし。浪花を出てより、親里迠の道行にて、引道具ノ狂言座元夜半亭と御笑ひ可レ被レ下候。實は愚老懷舊のやるかたなきより、うめき出たる實情ニて候。當春ノ狀は同盟の社中斗にて、他家を交ず候。それ故伏水の諸家をも洩し申候。御出會候節其御噂被レ成、諸子腹立なき樣に被ニ仰譯一可レ被レ下、桃ニハ下り候て、寬々御物がたり可レ仕候。數狀したゝめ老眼つかれ艸々、かしこ

二月二十三日　夜半

与謝蕪村

大野洒竹氏編

大野洒竹氏の『与謝蕪村』は研究資料とて多からぬ時代にあつて、『蕪村句集』を主として『文集』『新花摘』から檜葉』の數書を參照して、ともかくも蕪村の傳記をまとめ得た点に於て、氏の技倆の凡手でない事が察せられる。その中に載せた書翰は江戸の槫川宛、たゞ一通のみであるが、今日その所在を知られない。別に竹の屋主人も『手紙雜誌』に紹介してゐる。

守愚公並に古來菴へ文通仕候に付、序がましく候へども、御安否御尋申候。さても二十有余年音信も打絕、まことに異併（イ本（異代））の心地に御座候。しかるに圖大・泰里しばらく在京にて艸屛（一字讀めず）（イ本（咫尺に））一人に候故、日夜出會むかし物語申出、しきり（イ本（しきりに））御なつかしく申され（イ本（居候計也））、當春は何とやら（イ本（やらん））御上京もあらんと、いづれも相待候所、音なく成行遺恨不ㇾ少候。どふぞ秋か來春などは、是非御催可ㇾ被ㇾ成候。先、申さんは御令室樣、御風雅御度郢吟うけ（イ本（御郢吟））給り、偖々不ㇾ堪ㇾ感賞ㇾ、この方社中のものども、甚だ下風をしたひ申事に御座候。御目にはかゝらず候得へども、田夫人へも可ㇾ然御致聲奉ㇾ希候。鷄口子は前かた京師にて存じ度（イ本（得御意候））るかと覺申候。其節は雁宕なども在京の時かにて候。よく〳〵御（イ本）（御申達可被下候）う（三字不明）候。かはること無ㇾ御座ㇾ候へども、御起居御尋申上たく如ㇾ此御座候。便の節一筆の御返事も被ㇾ下候はゞ、再面會の心地とありがたく存候。不具

五月十三日

四季

一日の春を歩いて仕舞けり

春雨に小磯の小貝ぬれにけり

西行は死そこなうて袷哉

不二ひとつ埋み殘して若葉哉

手すさみの團書ん草の汁

春過てなつかぬ鳥や杜鵑

雨乞の小町がはてやおとし水

口切や五山衆なんどほのめきて

山鳥の枝ふみかゆる（イ本（ふ））夜長かな

紙があまり候故、右に書添候。御笑覽可ㇾ被ㇾ下候。

京　蕪村

樓川樣

聽蛙亭隨筆

水落露石氏遺稿

蕪村に關する諸文献の蒐集と其の紹介者として、大阪の故水落露石氏は忘れてならぬ人物である。氏の遺稿は嗣子京二氏によつて編纂され、大正十年『聽蛙亭隨筆』の名を附して

出版になつた。その中に故人の生前蕪村の書翰を「ホト・ギス」その他に發表したものを收めてある。几圭宛一通、(几圭の二字讀みがたく別人なるやも知れずといへり)大魯宛一通、几董宛三通、柳女宛一通、(柳如とせしは培屋氏の誤)士川宛一通、青荷宛二通、菰堂宛一通、大雅堂宛一通、合せて十一通である。書中誤植と思はるゝ個所で書翰の現存するものは、碧梧桐氏及び穎原氏の再び紹介されたもので訂正し得たが、大雅堂宛の一通は僞筆說もある。しかし、露石氏の見て眞なりとした心證を尊重して再錄したのである。

几圭宛

きのふは俄に梅亭と高雄へ參り、太秦より時雨なんぎいたし候。

　木枯や鐘に小石を吹きあてる

　こがらしや岸に裂ゆく水の聲

歸路は香鳥樓に昇り、佳興あまた御座候。拜顏の節御物語申候。月居いまだ歸り不レ申、集も近々出板仕度申居候。曉臺書狀御受取可レ被レ下候。扨は是若、愚老を茶に呼び可レ申事、是は御斷可レ被レ下候。先は早々如レ此御座候。以上

　二十日　夜半

　几圭樣

大魯宛

御返書相達拜見、御安全御くらし、其上日々入門の人も有レ之候よし、芽出度存申候。家内のものどもへも、御懇御申越され喜び、尙拙老より宜く御傳へ申上候樣にと申事に御座候。

一あしのかけ跋の事、御氣に入候よし大慶仕候。此間無爲庵も上京にて物語致候。あしのかけ序跋を具足致候は、甚うつとう敷候故、やはり序ばかりにて、跋はいらぬものと存候。いかにも跋なきが可レ然候。右の跋を序に御用ひなされ候て、隨分調ひ申候。跋かいてよともとむと申す處に、序かいてよともとむと書替候て至極に候。尤も序は一本亭かゝれ候よし傳承候。一本亭も狂歌の先生の由、さ候て俳諧の序にはとり合ひ如何

と存候。一本亭序をかゝれくるしからぬ事に候故、愚が序の次にまたかゝれ候て可レ然存候。畢竟一本亭の御せわの事に候故隨分可レ然候。いか樣とも御思召次第に候へども、無爲の了簡もおもしろく候故、御相談に及び申候。愚、發句亦別にかいつけ遣申候。

瓜小家の月にやおはす隱君子

春雨や人住て煙壁を洩る　（一字にて可書）

甲賀衆のしのびの賭や夜半の秋

ホトギ
缸打て鰒になき世の人とはん　（假名を可付）

右の四句又御加入宜く御賴申上候。洩といふ字にて御書き、る、と、おくり假名御付可レ被レ下候。缸といふ字、莊子にはどのほとぎといふ字を昔有レ之候哉不レ覺候。莊子にあるホトギといふ字御吟味、假名付被レ成御出し可レ被レ下候。尙追ゝ可レ承候。取込草々申上候。

十月廿一日　　紫狐庵

大ろ樣

几董宛

昨日句會御缺座、御病婦並にやぶ入にて、嘸御なんぎ察入候。昨日孚升・香載・月溪・白紐にて相勧、はやく仕まひ候て花頂山の花見に同伴いたし、甚佳興御噂申居候。

御發句おびたゞしく御示案愚意書付候。

一無膓發句まゐり候由、すりものゝ事はいかゞ可レ致哉、御めにかゝり御相談可レ仕候、しかしいらぬもの歟。

一曉臺上京、早速四五日已前愚老方へ尋來に預り、其後曉子も香溟より細書にて候へども、□□□參りかね候。今日は御尋可レ申と存候所、曉臺も伏見の桃にゆくやう倲承り候故、さしひかへ申候。曉子右風邪故、早速几董子御尋申がたく候間、上京いたし居候趣を、几董子へしらせて給り候樣にと申來候。例の丁寧家懇情の人と存候。

東木や町松原下る二丁目
北村やしき　香溟馬陵
表札　竹内新四郎

右の通の表札有レ之候由。

一昨日雨谷見え候て、すり物御屆申候。

一布舟へ去年中の發句、愚評並に返書遣し候間、御便り

に御下し可ㇾ被ㇾ下候。

一一兩日中に御尋可ㇾ被ㇾ下候。已上

二月廿一日　　蕪村

尙ゝ御家內樣へよろしく御傳可ㇾ被ㇾ下候。

几董樣

曉臺とゝもに、東野西山の表に
吟行して

夜桃林を出て曉嵯峨のさくら人

几董宛

けふ（イニ今日）檀林會御つとめ被ㇾ成候よし、めでたき御事に候。愚老腹瀉いまだ不ㇾ調不參、扨々殘念の至に御座候。道君其外御出席の御方へよろしく御傳へ可ㇾ被ㇾ下候。先日よりかたく禁酒にて、一向俳情も取失ひ候、されども口をしく候故、今朝左の句案じゆ。御社中衆議判御たのみ申候。

ほだて　秋暮

塩淡くほだてを嗜む法師哉

蓼の穗を眞壺にたしむ法師哉

嗜を又蔵すともいたし見申候、いづれ歟。

たでの穗に乾けるしほをたしむ哉

甲斐がねやほだてのうへを塩車

秋のくれ

鳥さしの西へ過けり秋暮

淋し身の杖わすれたり秋のくれ

秋の句等（イニ秋のくれなど）は深く案候はゞ、よき句も可ㇾ有ㇾ之候へども病中叶ひがたく候。

一湖柳樣御たのみの物二幅、御達可ㇾ被ㇾ下候。四暢の圖の內を揮毫いたし申候、是は得意の物にて候。湖柳樣へもよろしく御致聲可ㇾ被ㇾ下候。

一御神事のせつはけしからぬ御馳走、おどろき入候。御令內へもよく〳〵御禮御仰せ（イニ謝仰）可ㇾ被ㇾ下候。近日快方（イニ氣）を得候て、御見舞御ものがたり可ㇾ致候（イニと申のこし候）。以上

八月二十四日　　夜半

几董樣

几董宛

昨日浪花正（名カ）　御越し物語承り候處、貴所には不例の由、いかゞ御（座候カ）や、けしからぬ熱の由傳聞、近來は度々熱、

或は筋骨のいたみ御なやみ、是も大事のことに候間、日來御保養專一に御座候。

一十六日後、無爲庵會有レ之候半と存候。愚老儀日限有レ之讃どもにて、寸陰を惜みしことに御座候。關白樣へ上り三幅對むづかしき物どもにて、甚こまり申事に候。右の體故愚老は當に成不レ申候。御連中へもその段御傳へ可レ被レ下候。乍レ然七ツ過にはちよとなりとも參り候て、百句計も點いたし度候。それも又一興に候。

相變る事も無レ之候へども、御不沙汰御尋まで態々如レ斯に御座候。

御口上にて御樣子承り度候。以上

神無月十三日　　夜半

几董樣

尙ゝみなし栗此者へ御かし可レ被レ下候。題發句見合度もの有レ之候故、ほしく候。

柳女宛

春の部

なつかしや朧夜過て春一夜

朧夜過て

今宵はわけておぼろ成ルは、春のなごりを惜むゆへかとの御工案おもしろく候。されどもこれにては朧夜の過ギ去ることになりて、過不足の過ニはならず候。

なつかしや殊に朧の春一夜

右のごとくにておだやかに聞え候。それを又更におもしろくせんとならば、

なつかしや朧の中の春一夜

桃にさくらに遊びくらしたる春の日數のさだめなく、荏苒として過行興象也。心は朧ゝたる中に、たつた一夜の春がなごりおしく居ルやうなと、無形の物を取りて、形容をこしらへたる句格也。又右の案じ場より一轉して

春一夜ゆかしき窓の灯影哉

まだ寢もやらぬ窓中の灯光は、春の行衞をおしむ二三友なるべし。これら秋をおしむ句にてはあるべからず。賈島ガ詩ニ

三月正當三十日　風光別我苦吟身
勸君今夜不須睡　未到曉鐘猶是春

三月盡の御句甚おもしろく候故、却ていろ〳〵と愚考を

書附け御めにかけ申候。近頃の御句と被レ存候。

四月二日　　夜半

柳女樣

（晉風曰、右の書翰は碧梧桐氏の紹介によると、大阪土居剛吉郎氏の現藏で春の部「なつかしや」の發句は柳女の句で目出度しいとの事である。本文もこの一通は碧梧桐氏の紹介せるものに據る。）

士川宛

（攝津池田　稻束孟氏藏）

彌御安靜被ニ御座成一奉ニ珍重一候。しかれば先日以ニ書狀一略得ニ貴意一候。定而御披見被レ下候半と被レ存候。此度愚老門人月溪、貴境遊歷仕候。しばらく足を休メ候樣に御取持被レ下候はゞ、於ニ愚老一大慶の至に被レ存候。前以得ニ貴意一候通、此月溪と申者は至而篤實の君子にて、中〳〵大魯月居がごときの無頼者に而は無ニ御座一候間、少も無ニ御心置一御出會可レ被レ下候、愚老きつと御請合申人物にて御座候。もちろん畫は當時無双の妙手に而候。御なぐさみに畫も被ニ仰付一可レ被レ下候。はいかいもよほどおもしろくいたし候。横笛なども上手にて候。彼是器用成おのこにて、別而畫は愚老も恐るゝ斗の若者に而候。大魯・月居に御手こり被レ成候所へ、又候添狀仕候も愚老面目もなき仕合に候へども、此月溪は左樣の者にては無レ之、大魯・月居が穢れを洗ひ申度候。くれ〴〵御仰合御皷吹被レ下候はゞ忝奉レ存候。右可レ得ニ貴意一かくのごとくに御座候。尙以ニ書中一追ゝ可レ得ニ貴意一候。以上

九月十四日　　夜半

士川樣

（晉風曰、此の書翰の本文は潁原氏の全集による。）

靑荷宛

一そば粉風味けしからぬことに御座候。又た幸便に御惠み可レ被レ下、今暫時そば粉も持合せ候故、遲ゝと御贈り可レ被レ下候。尙後便、頓首。

夜半

靑荷子

靑荷宛

一先日は又た蕎麥粉御惠み被レ下、早速賞味いたし候。けしからぬ風味不レ堪ニ雀躍一候。

木がらしや釘の頭を戸に怒る

半江の斜日片雲の時雨哉

松島で死ぬ人もあり冬籠

いかい事句は有レ之候へ共、思ひ出しがたく候。

青荷様　夜半

菰堂宛

三月十日より十二日迄、粟津義仲寺に於て俳諧執行

蕉翁百年忌法事

願主尾州暁臺

三月十三日より十六日迄、四日の間洛東双林寺に於て興行

都合一七日

右の俳諧有レ之、共節は被ニ仰合一御上京可レ被レ成候。何もむづかしき式法も無レ之、常の通の俳諧にて御座候。尤も諸國より上京、右の俳諧に逢候人〻の雑用費は、皆暁臺よりまかなひ候心算に御座候。誠に治世俳諧の盛事に有レ之候。是非御上京可レ被ニ成下一候。且、時節も皇都花の最中に候間、彼是以て是非〳〵御上京希上候。以上

三月二日　夜半

孤堂様

大雅堂宛

各々三五がすゝめ、もだしがたく鳥渡拝顔、夕方すゞみ今にわすれがたくおもしろく、又〻今夜も願くは一力へ向、御出かけ被レ下候はゞ珍重〻〻。月渓・月居の兩子は粗肴の用意、御薬も

大極上〻、飛切の米の油用意させろつもりに候。何卒御内政玉瀾の君も、ほむらなく御同道被レ下候様に祈るものならし。

葛水にうつらで嬉し老の皃

祇園會や木瓜花咲く處まで

酒百薬長

酒百悪長

酒はたゞのまねば須磨の浦さびし（この歌は徳利の霊の中にかけり）

すぐればあかし波風ぞ立　奇妙一首

御一笑御出門あるか、いやか、善悪左右共御返事奉レ願候。

月渓宅ゟ　蕪村

東山
大雅堂主人玉几下

蕪村書翰

河東碧梧桐氏考證

永く埋沒された蕪村關係の文献資料の發見者として、碧梧桐氏の努力はなみ大抵でなかつた。私は氏の發見、氏の研究に對して直接知るところがあるので、殊に氏の眞摯な態度

に推服する点が深い。氏の紹介した蕪村の書翰は、個人雑誌「碧」に、武藤山治氏の『蕪村書翰集』の考證を試みたのが最初であるが、同書翰集は既に掲出したので、氏が其の後『蕪村書翰』と題して實際に鑑別されたものを主として、『碧』及び引つゞき『三昧』に解說した分をこゝに再錄したのである。氏の疑問とされたもの數通は再錄を見合せ、曉臺宛その他五十余通を一括して、宛名順によつて掲げる。大正十三年六月より同十四年二月に至る『碧』同年七月より十二月に至る『三昧』所載のものである。碧梧桐氏の不審とし、或は誤植と思はるゝところのある二三通は、その他の人が見て判讀し得たものを參照して、これを註記して置いた。

曉臺宛　（名古屋　森本善七氏藏）

寒さはげしく御座候處、彌々御安全被レ成二御座一めでたく奉レ存候。拙老無爲相過候。爾者先達者乍二御返書一、くわしく預二花牘一忝拜受、無二御隔意一御胸懷御佪□被レ下、いまだ不レ得二書意一候共、實に百世の知己と欣慕仕候。

一此たびいせの樗良しばらく在京にて、嵐山と申老人の方に而一夜哥仙仕候。則これを刻して小冊を出し申候。御慰に呈覽候。尤はいかいは曾而御氣には入まじく存候へ共、先相下申候。春中御上京も被レ成候はゞ、御面談に何角討論も仕度所願に御座候。爾かたも申上候歟とぞんじ申候。拙老はいかいは敢て蕉翁の語風を直ちに擬候にも無レ之、只心の適するに隨、きのふにけふは風調も違ひ候を相樂み、尤ヘンジヤクが醫を施し候樣に、所々に而氣格を違へ致候事に御座候。此たびのはいかいも愚眞面目の所には無二御座一候。賢兄實にはいかいの伯樂、此所御鑒察可レ被レ下候。來春御上京も被レ成候はゞ、なをとくと御物がたり申上度候。京師一向はいかいを知たる人地をはらつて無二御座一候。近來御秀作も候はゞ御聞せ被レ下度候。

一仙臺の丈芝子、定而貴境に滯留と奉レ存候。別に書進不レ申候間、能々御致聲可レ被レ下候。年內預二御書一候はゞ本望の至に御座候。

いざ雪見容（カタチヅクリ）す蓑と笠

雪の旦母屋のけぶりのめでたさよ

里ふりて江の鳥白し冬木立

右よろしからず候へ共書付申候。かへすがへす金玉御をしみなく御聞せ被レ下度候。何事も追々可レ得ニ貴意一候。短景折節多用草々。かしく

霜月十三日　　蕪村

曉臺　主盟

曉臺・士朗宛　（名古屋　渡邊喜兵衛氏藏）

先頃は不思議成御上京、よろこばしき事に御座候。寒氣の節三君御無恙にて御歸鄕被レ成、めでたく奉レ存候。しかし餘り草々たる御滯留にて、殘念の事共筆紙に盡がたく候。殊に暮雨叟はあとに御殘被レ成候つもりに候處、さたなしに御同行、さりとはつまらぬ被レ成かたと、道立・我則・月居・これ駒など打寄罵申候。別而道立・月居・これ駒はいづれも一會宛の亭主をつとめ、三會はおもしろく可レ樂とかねておもひ居候所に、いか成事にやと恍惚として夢の心地、甚遺憾の躰に候。

一士朗君被ニ仰置一候もの共、此たび揮毫相下申候。龍門の二字も下申候。是は餘り拙き物に候間、御用ひ御無用に可成（被成カ）被レ下候。

一宰馬子・最平子・大野屋の主人、求馬公へもよろしく御致聲可レ被レ下候。かねて御たのみの畫者不日に相下可レ申候。

一おくの細道の卷、書畫共愚老揮毫仕候物、近々相下可レ申候。御覽可レ被レ下候。是れは兩三本もしたゝめ候而、のこし置申度所願候。貴境は文華の土地に候故、一本はのこし申度候。併紙筆の費も有レ之候故、宰馬子などの財主の風流家にとゞめ申度候。

一閣毛君へ別に書狀上不レ申候。くれぐれ御傳聲可レ被レ下候。とかく筆不性御あはれみ可レ被レ下候。此せつ畫用せはしく、發句は一向不レ得レ意、何事も追々可レ得ニ貴意一候。かしく

十月廿一日　　蕪村

暮雨主盟　士朗國手

茶の花や石をめぐりて道を取

又春の句にしては

道を取て石をめぐればつゝじ哉

かくのごとくふれ候はん歟と猶豫いたし候。つゝじにては只の親父に相成可申か、雨子の御高論相待可ㇾ申候。

(晋風曰、此の書簡には戯畫を描き込んであるさうで、碧梧桐氏の註記全文を借用して附載する。氏曰く、此手紙の末に戯畫があつて「蕪村寫ニ於雪楼中ニ」とある。曉臺――女を右手にかゝへてゐる――士朗――頭を丸めた法躰にしてゐる――と、今一人の三人が片手を擧げて踊つてゐる圖である。さうして曉臺の上に「ヨウこちの〳〵からめ有ら歟、尾張名古屋は士朗でもつ」と文句を添へ、士朗の上には「朱樹臺を已來やくたいと改マシヨ、口合でまいろう、久村キヤウトイ〳〵」とあり。今一人の上に「歯の痛みもとんとわすれた」とある。今一人が手紙にある三名中――道立、月居、維駒――の一人か、それとも蕪村自らを描いたのか判然しない。――)

大ろ宛　(四日市　九鬼健一郎氏藏)

御すりもの只今相達、さて〳〵おもしろきしゆかう、ことに御令愛の二章、鳳毛おのづからめでたく存候。されども貴子老鮮之□□これも又めでたき御事、末たのもしく存候。

一念珠御せわの至奉ㇾ存候。右念珠、一音法師方に入用の方在ㇾ之由、先達一音噂ニ付、この度とくと頼遣候間、直に一音坊へ御わたし可ㇾ被ㇾ下候。ゐらざるものを調置候てこまり申候。

一愚老このほどは發句も例ながら無ㇾ之口おしく候。漸

私語頭巾にかづく羽織哉

眇(スガメ)なる醫師わびしき頭巾哉

冬木だち家居ゆかしき麓哉

浪花益々はいかい盛にて御座候。めでたく〳〵うら山しく候。尚あとより寛々と可ニ申上一候。頓首

十一月十六日　蕪村

大ろ様

大魯宛　(神戸　川西和露氏藏)

秋冷相催候。御安康被ㇾ成ニ御暮一めでたく存候。拙無ㇾ恙候。先頃は預ニ御書一忝、ことに御すり物毎々御句どもおもしろく、社中とも御噂申出、於ニ愚老一よろこばしき事に御座候。愚此間は何も無ㇾ之候。無爲庵此ほど登京、四五日滞留、例のはいかいいたし、たのしみ申候。又冬はのぼり可ㇾ申と申候。其節は浪花へも參り可ㇾ申との事に候。曉臺はいかい出來被ㇾ爲ㇾ成候由、几董ものがたりに候。

我等は左は不レ存候。曉臺も又しれものと存候。相替事無レ之候へども、御安否御尋旁々如レ此に御座候。餘期ニ重便一候。以上

九月六日

門を出れば我も行人秋のくれ

菊つくり汝は菊の奴ヤツコ哉

此間は例の風塵句も無レ之、おかしからず候へども書付候

大魯様　蕪村

几董宛　（大阪　土居剛吉郎氏藏）

昨日幸便ニ手紙差出候。定而相達可レ申と存候。十日ニハ是非御出可レ被レ下候。

一曉臺へ書狀、大かた貴子よりも御狀御出可レ被レ成と存候。一所ニ御下シ可レ被レ下候。狀ちんハわり合ニ被レ成可レ被レ下候。以上

正月五日

うぐひすを雀かと見し夫も春

几董様　紫狐庵

几董宛　（大阪　土居剛吉郎氏藏）

啼ながら河越す蟬の日影哉

行人少に心太店ミセ

大津繪に談林流の發句有て

きのふのまことけふ時雨けり

二もとの榎の間の宵の月

踊をゆるす裏門の音

ウ

物着せてかり寢の秋をおどろかし

とらはれ人に心トきめく

やり水をかなたこなたへめぐらしつ

終の栖スミカの能普請也

大根の切目正しく淋しさよ

霜の廿日の曉の月

鍛冶貧乏神の相槌に

一里の城下一筋の町

世悴めが京の遊女をつれて來て

髮生藥春もつく〱

たれためて（空白）

聲のどかなる琵琶の古糸

今三とせ小松の内府世にまさば
　麪の僧都に法の名を乞ふ
麥めしを焚そこなふて泣斗
　ぼたんの園の草履音なき
風諫の表おもしろく出來過て
　故郷の鱸酢に躍る頃
嶋の月舳にたつ人を照すらん
　秋ひやゝかに山伏の珠數
あつぶるひ嘘のごとくにとめぬれど
　戀につれなきせうと達哉
雨もりて夕いぶせき長廊下
　おぼつかなくも墓の足取
ナウ
石塔を二つ建たる小百姓
　光る茶釜を打ながめつゝ
道連はしのぶの里へかけ寄つて
　鴻に夕日の斜也けり
（墨消）匂ひのこりて花の雲
　桃さくらてふ集編て後

右の通あらましつゞり置候、序文も出來候。明日御めにかけ可レ申候。なほとくと吟味可レ致候。

几董子　　夜半

几董宛　（神戸　川西和露氏藏）

御物遠相過候。彌御無難被レ成二御暮一めでたく存候。愚老も無事に候。
一二柳・無腸、書狀先頃飛來の處、打わすれ延引に及申候。御免可レ被レ下候。
一大魯表六句、御付御下被レ成候や。
一伏見柳女すり物に貴句加入の義、所望申來候。何ぞ御書付可レ被レ下候。
一無爲庵句も加入いたしくれ候樣ニと申來候。久しく無爲に逢不レ申候ゆへ、近頃の句も不レ承候。御覽の句候はゞ、一處に御書付可レ被レ下候。伏水甚いそぎ居申候。
何事も拜眉と申殘候。以上
　九月廿八日
來月發句會
　題　木がらし　ふとん

几董樣　　夜半

几董宛　（大阪　北田彦三郎氏藏）

さむく相成候。御壯健被レ成ニ御凌ニめでたく存候。御賢兄御病氣段々御快候よし、まづ〳〵御安心珍重の御事ニ候。

一すり物草稿愚意書付候。なを思召も候はゞ、再應御相談ニ可レ被レ遣候。文章至極よろしく候。先夜御ものがたり道すがら（マヽ）いたし候。冬の月案じ見申候。左ニ

　古傘の婆娑としぐるゝ月夜哉

月婆娑と申事は、冬夜の月光などの、木々も荒蕪したる有さまに用ひ候字也。秋の月ニハ不レ用、冬の月ニ用ひ候字也と南郭先生被レ申候。それ故遣ひ申候。ばさと云響き古傘ニ取合よろしき歟と存候。何ニもせよ人のせぬ所ニて候。

嵐甲いたみおもしろく候。急成事故添削もそこ〳〵ニい（イニ（い）たし（たしゅ）橋仙へ相渡申候。御尋（イニ（いさゐ））は御めにかゝり。以上

　几董様　　　夜半

几董宛　（攝津池田　豊嶋眈一氏藏）

夜前の歌論愚老勝也。今日も源氏物語見申候。我則之偏屈者こまり入候。おもはず老痛を發し今日はくたびれ申候。夜前之燒物大一（イニ（ほ））之事也。此者に御渡し可レ被レ下候。桃すもゝ寫しとり被レ成候哉、早々見度候。三番目の句、してと直し可レ被レ下候。

此少婦、先日妻の供いたし、貴家にて治三良とやら申人美男のよし、歸後執心のよし承候。夫故態々遣し申候。是縱情の仁心也。追付ひるめし燒物早々可レ被レ下候。

　短冊はわすれてもよし花と鯛

三月十二日　　　夜半

几董主人

几董宛　（攝津池田　小林一三氏藏）

此ほどの御會不坐、甚殘念（イニ（御ざ候））いたし候。愚老所勞も最早よろしく候。御安意可レ被レ下候。

　冬こだち月骨髓に入夜哉　　几董

　杳音寒き柴門の外

　此句老杜が寒き腸

　杜詩を諷へば寒き唇

右三句いづれ可レ然や、御定メの上第三あんじ可レ被レ申候。

無けいのおもひもよろしく候へ共、とかくワキしみたれ候方ニ而、一巻引立申間敷候。右の冬木だちは實ニ杜子美が語風有レ之候。早々御返書相待申事（イニ小事）御座候。以上

夜はん

七月廿三日

キ董様

春夜宛　（伊勢　前川素泉氏藏）

御無爲御くらし被レ成めでたく候。此間雨吟わきいかゞ御定候や、其節申残候。

ぼたんちりてうち重りぬ二三片　蕪村
卯月廿日の有明の月　几董

右のワキ甚よろしく、第三御案可レ被レ成候。さのみ骨を折らずして、いさぎよきワキ體にて、愚句も又花いばらよりはさらりとして、ぼたんのかた可レ然候。

冬木立月骨髓に入夜哉　几董
此句老杜が寒き腸　蕪村
五里に一舍かしこき使者を勞ひて　同

右のワキ・第三に相極候。四句・五句早々工案可レ被レ成候。とかく表は餘りむづかしきは見倦いたす物故、さら〱といたす方よろしく、冬木立の句は悲壯なる句法にて、實に杜子美がおもむき有レ之候。それ故直に右のワキ付候。第三の意はもろこしにて、隣國或は遠き境などへ使をつかはし、諸侯のむつびをいたすおもむき也。五里々々ほどに休み茶店などを置て、使をもてなす光景にて候。右二句共に尋常の句法にてはなく、くわしき事は筆談につくしがたく、猶期ニ面語一候。以上

七月廿五日　夜半

春夜主人

几董宛　（攝津池田　小林一三氏藏）

こゝろよき天氣にて御座候。今ぶく明廿五日に相定候よし、此ごときの天氣に候はゞ是非出杖をこゝろがけ候。

一山崎宗鑑の所にて、かきつばたの發句し給ひける大臣の御名覺不レ申候。何大臣何公と御書付可レ被レ下候。雜談集の内にしかと有レ之歟と覺申候。御見出し此便りに御書付可レ被レ下候。急々文章ニ入用の事ござ候。無ニ御失念一直に御書付、愚妻に御渡可レ被レ下候。御めんど

うながら賴申候。
一兩吟、昨日百池より相とゞき申候。いかにも仰のごと
く四五句いたし替可レ然候。

いとをしと代りてうたをよみぬらん
九日は菊の盛なりけり

いつぞ、この句より御案じ替被レ成間敷や。此菊の句、あ
しらいとは申ながら、前の寄、さほど二無レ之やと存候。
やり句はこと更、寄のよろしきが可レ然候。しかし、あし
き句にも無レ之候故、やはり居置べきや、今一應おぼし
召うけ給りたく候。
能とか（イニ能登どのと）ゝあと博士の句、しかとつかまへたる付句にては
無レ之候へども、どこやら付たる心地に候故、あとあんじ
可レ被レ下候。何事も明日芭蕉庵にて御物語と申殘候。以上

九月廿四日　夜半

几董様

几董宛　（大阪　砂原馨石氏藏）

加久夜長帶刀はさうなき數奇も
の也けり。古曾部の入道はじめ

てのけざんに、（イニ田）引手物見すべき
とて、錦の小袴をさがしもとめ
ける風流などおもひ出つゝ、す
ゞろ春色に堪ず侍れば

山吹や井出を流るゝ鉋屑

右の句ことば書ともに御加入可レ被レ下候。

几董様　夜半

きのふ見し萬歳に逢ふや嵯峨の町
傀儡の赤き頭巾やうめの花　右　蕪村

几董宛　（大和上市　澤井清三氏藏）

彌御安寧被レ成二御暮一めでたく存候。しかれば四暢の圖
早速御見せ被レ下、幸望の人見え候故、及二相談一候處餘り
懇望ニも無レ之候や、以の外下直成思ひ入ニ御座候。中ゝ埒
の明ぬ事ニ御座候故。右四暢の圖直ニ御返却いたし候。御
落手可レ被レ下候。表具等はよろしく相見え候へども論ニ
不レ及、只ゝ畫のおもしろき物ヲほしがり被レ申候。此四
暢の畫ハ南宗の畫法にて、素人は餘り取らぬ物ニ御座候。
それ故相談出來がたく殘念の至に御座候。先方へよろし

く御取なし被ニ仰遣一可レ被レ下候、餘ハ期ニ而上一御物がたり。以上

五月廿四日

二白、廿一日御會、是非出席とたのしみ居候所、家內のこらず梅亭へ呼れ候而、愚老は留守をつとめ居申候。甚殘念の事ニ御座候。二十六日於ニ金福寺一段ゝ可レ得ニ御意一候。以上

几董樣　　　　蕪村

几董宛　　（大和上市　澤井淸三氏藏）

御かわりなくめでたくぞんじ申候。御句ども引墨いたし候。尙御工案可レ然候。几董・うせいなどは猪名川のごとくニさた致候故、一番おもしろき手の句見申度と、諸子もおもふと二御座候。餘期ニ而上一候。頓首

五月廿五日

几董樣　　　　蕪村

几董宛　　（大和上市　澤井淸三氏藏）

九湖子のふすま受取置申候。畫ののぞみ是又承知いたし候。飮中八仙はちとむづかしき物ニ而候故、急ニハいかゞニて候。好事の輩往來いたす所故、目をおどろかす物をと御望ニ候へ共、早卒に畫候物ニハ、さほどおもしろき事はいたしがたく候。とかく心安き物ならでは出來不レ申候間、其段御申達可レ被レ下候。愚老も今日は風邪の心地ニ而、少ゝ惡風の心地、明日などは、いかゞ可レ有レ之候や無ニ覺束一候。不快ニテ候はゞ八日迄の間ニハ、中々あひかね可レ申候間、是又御申達可レ被レ下候。何事も貴面御物がたり。艸ゝ頓首

十月三日

几董樣　　　　蕪村

几董宛　　（大和上市　澤井淸三氏藏）

御物遠御ざ候。近ゝ御下灘御心いそがしく候半と存候。しかれば十三日金福寺魯(マヽ)追善の法會、欠席の人

百池　月溪　自笑

月居　雲良　田ふく

此方の社中、右の分は不座と申さたニ候。維駒子も日來大魯とハ不和ニ候故、出席無ニ覺束一候。左候へば甚不連と被レ存候。松宗師例のごとく多人數と被レ存候而、こしら

へ等おびたゞしく仕込られ候ては甚きのどく候。此旨かねて金ぶくへ被二御達一可レ然存候。もちろん愚老なども此節風塵中と申、老足旁出席計がたく候。何分宜御相談可レ成候。何事も近ゝ御めにかゝり可二申解一候。已上

十月四日　夜半

几董様

用書

几董宛　（大阪　土居剛吉郎氏藏）

昨日は御ことほぎ目出たき御事、しかし御出坐なく殘念の至に御座候。

一橘仙堂へ御便り御座候はゞ、早ゝ參候樣に御仰遣可レ被レ下候。すり物の相談相極め申たく候。無二御失念一御たのみ申候。以上

十七日

さても／＼さむき事に御ざ候　寒中御ィ養専一に御座候。

几董様　夜半

几董宛　（大阪　土居剛吉郎氏藏）

昨夜は御馳走歸路□例の佳棠同行ニ而、ふくゐんにしばらく三更ニ歸菴、扨ゝくたびれ申候。

一翁のたんざくもたせ遣候。御落手可レ被レ下候。よき様ニ御取はからひ、何事も御まかせ申候。足下の御了簡しだひ、いか様共御頼申候。今朝ゟ下婢ひま入延引に相成申候。

一蓼太の狀は今明日中したゝめ遣可レ申候。たんざく御いそぎゆへ先づさし遣候。以上

二月廿五日　夜半

几董様

春夜宛　（京都　内藤琪士氏藏）

おくの細道一卷出來いたし候。御熟覽可レ被レ下候。是は春泥舍・士川のよりはおもしろく候。湖南の屏風、内ゝ御噂申置候ニ、乍二御世話一賢道迄御通達可レ被レ下候。畫の具夥入甚、惑仕候。柳のワキ、離々としてまた蝶を待草。是はいかゞ哉。月居いまだ便無レ之、兎角不屆者こまり入候。兵庫灘の摺物いまだ橘仙より不レ參候。貴子よりも

御催促可レ被レ下候。此少女御見しり置可レ被レ下候。漸一人拘申候。

ほとゝぎす待や都の空だのめ

――平安城を筋違に

いつぞやの蕉翁短尺いかゞ相成候哉、先方へ御尋可レ被レ下候。宇治田原へ遣し申度候。

廿三日　　夜半

春夜様

几董宛　（攝津池田　小林一三氏藏）

今日は快霽と被レ存候。昨日者雷鳴恐怖御察可レ被レ下候。一くの義、先づ今日は歸宅いたし可レ申哉と人遣申候。段ゝ御陰にて快方におもむき候よし、大慶の至に御座候。貴家滯留も甚こゝろよくゆよし申事に御座候故、又ゝ三五日も御留メ被レ下、御せわ可レ被レ下候。今日はちよと罷歸り申候も、又保養にも可ニ相成一候故、御歸し可レ被レ下候。それ共直に居つゞけに居可レ申候はゞ、いか様共御計意可レ被レ下候。彼是御せわ、かたじけなき次第に御ざ候。御内様へもくれぐ御禮被レ仰可レ被レ下候。いそぎ候故草ゝ申殘候。以上

六月廿八日　　蕪村

几董様

九湖・几董宛　（大阪　北田彦三郎氏藏）

今宵角力びらき珍重ニ存候。ずいぶん罷出可レ申と存候處、不夜・呑獅ゟ今晩茶番興行、拙老上客ニいたし度由、五雲房使者にて被レ參候。御存の通の譯故、あのかた云のべがたく罷越候。扨ゝ遺恨の至ニ被レ存候。依レ之御行司へ花一枚進上いたし候。これニ而御宥恕可レ被レ下候。御連中へのこらず可レ然御申譯可レ被レ下候。明日手がらのほど一見可レ仕とたのしび居申候。以上

廿八日　　夜半翁

九湖様

几董様

几董宛　（京都　中野羊我氏藏）

前夜は御馳走忝奉存候。「御推量 御老苦奉レ推候。檀林會正白子より「さしたる義もなく殘念

便次第相定メ可レ申候。
「承知候

摺物之句

さむしろに錢置く花のわかれ哉
「おもしろし、御きはめ可レ被レ成候

彌此句に定可レ申候。如何御尋申入候。今明日にはいづれ參會可レ申候。早々頓首　「かならず御出待入候

三月十五日　几董子　夜半

夜半宗匠

（晉風曰、右の書翰は几董から蕪村宛のものに、蕪村が返事を書き込んだので、碧梧桐氏が「一通で二樣の用を達してゐる」といつてゐるように、頗るめづらしい。六號活字が几董の手紙、やゝ大きな活字で示した傍書が蕪村の返事である。宛名の夜半宗匠には棒を引いてあるさうである。）

春坡宛　（大阪　土居剛吉郎氏藏）

殘暑甚御座候へ共、御淸安被レ成ニ御暮一奉レ賀候。爾者暑中御尋として、王餘魚五御めぐみ被レ下、別而此節の美味忝賞味仕候。自ニ此方一御ぶさた打過候段御免可レ被レ下候。尙拜顏御禮可ニ申上一候。已上

七月九日　蕪村

再白、先日は御枉駕被レ下辱被レ存候。

春坡樣

春坡宛　（大阪　砂原馨石氏藏）

夜前はいつもながら御馳走、おどろき入斗に御座候。及ニ深更一御勞れ被レ成候半と被レ察候。早速御禮參上可レ仕候へども、例の無賴延引に及候段御宥恕可レ被レ下候。尾州の諸子も甚感賞、道すがら御噂申出られ候。何事も寛々拜顏萬謝ゝゝ。以上

三月廿一日

尙々歸路御駕迄御仰付被レ下、御厚情別而不レ淺被レ存候。御辭義も可ニ申上一と存候へども、老足ことに夜更ケ故、大慶不レ斜存候。

春坡樣　夜半

春坡宛　（大阪　北田彦三郎氏藏）

彌御壯健被レ成ニ御座一奉レ賀候。御噂の句帖もたせ被レ遣（イニ、もたせ被下ゆはこ）卽書付進上仕候。

一たばこ入、御めんどうの御事ニ被レ存候。出來次第御達

被レ下候はゞ辱被レ存候。少々いそぎ候義有レ之候。先方御さいそく被レ成下候而、早々出來を願候事ニ候。何事も拜顏。以上

四月二日

尙〻しばゐ已來御めにかゝり候歟と覺申候。わすれ申候。御禮も申つくしがたく面白い事に被レ存候。たしか御めニかゝり候歟と覺申候故、御禮此所ニ略仕候。

蕪村

春坡樣

春坡宛　（西宮　潁原退藏氏藏）

今日は餘寒扨もはげしき御事ニ御座候。ことニ御微恙切角御保護可レ被レ成候、御やくそくの茶臺御惠投被レ下、忝々御厚意辱被レ存候。近日參御禮可ニ申上一候。以上

正月十七日

蕪村

春坡樣

月溪宛　（攝津池田　岡田利兵衞氏藏）

朝暮扨もさむく相成候。彌御安康御くらしめでたく存候。愚老はじめみな〳〵爲無ニ渡世いたし候。御休意可レ被レ下候。

一先日歌仙二卷、早速點いたし相下可レ申と存候處、ことの外多用、且のら旁以延引ニ及候段御免可レ被レ下候。扨々無性ニ成候て方々よさいそくニ預り、日々呵られくらしニ候。御憐察可レ被レ下候。歌仙おもしろく候。

一俳名の事被ニ仰越一此度書付相下候。御氣ニ不レ入候はゞ、又々案じ可レ申候。當分先ッ此內にて御用可レ被レ成候。

一ホ句おびたゞしく、いづれもおもしろく候。其內引墨の句珍重ニ候。大ニ御上達めでたく存候。

一灘・兵庫のかた、御遊歷の思召たち有レ之候よし、いかにも可レ然候。此間士川氏かたへ書狀出置候。尙御出立の時節、又々書狀遣可レ申候間御案內可レ被レ成候。今日（イニ可レ然）はこれこまへ追悼のはいかいニ只今よ罷出候。取込候故草々申のこし候。以上

九月朔

夜半

月溪樣

良夜

さくらなきもろこしかけて今日の月　　蕪村

近年蕉門といふてやかましき彊、いづれ

もまぎらかしの句のみいたし候て、片はらいたき事ニ候。それ故愚老ハ右の様成句をわざといたし候。

田兄へよろしく御致聲可レ被レ下候。別書進申度候へどもかはらぬ事故相止メ候。十三夜ハ金福の會のよし、さた有レ之候。どふぞ其節は上京可レ被レ成様ニ御申達可レ被レ下候。

佳棠宛　（東京　加賀豊三郎氏藏）

御物いみ中、何角御せわ忝被レ存候。御書面のおもむき一々相心得申候。○賀瑞手紙落手○月並二ツ集候故、幸便御屆申候○十日にはどふぞ御潔齋も相濟候義故、御出席可レ被レ下候。以上

九月六日　夜半

佳棠様

佳棠宛　（大阪　砂原馨石氏藏）

御再翰拜覽、

只今服五亭迠罷こし居申候。尤月居も伏水行を相止、是迠出張いたし居申候。嵐山ハ所詮遲ク候故斷申候。百池ハいかゞや無ニ覺束一候。以上

花に遠くさくらにちかしよし野河

よし野を出る日、風はげしく雨しきりにして、滿山の飛花春を餘さず

雲を呑て花を吐なるよしの山

いづれもすぐれ不候へども、御尋ニ付申上候。

書にいわく待人遲し春の雨

佳棠様　夜半

（晋風曰、此の書翰は「書にいわく」の句までで、挿入の二句は別時の書翰であるから、他の書翰の斷片のまぎれ込んだのであらうと、碧梧桐氏に云つてゐる。）

佳棠宛　（大阪　高安六郎氏藏）

扨も御物遠罷過候。いかゞ御暮被レ成候や、御起居うけ給りたく候。

まこと先日はけつかう成御菓子御めぐみ被レ下、かたじけなき御事に御座候。それよりして御目にかゝらず、御禮も申おくれ候。

一小糸かたより申こし候は、白ねりのあはせに、山水を書きくれ候様ニとの事に御座候。これはあしき物好きとぞんじ候。我等書き候ては、ことの外きたなく成候て、美人には取合甚あしく候。やはり梅亭可レ然候。梅亭は

毎度美人の衣服に書き覺候故、模様取旁甚よろしく候。小糸右の道理をしらずしての物好きと被レ存候。我等が畵きたるを見候はゞ、却而小糸後悔可レ致きのどくに候。小糸事に候ゆへ　をたのみ候ても、いなとは申さぬ候へども、物好きあしく候ては、西施に黥いたす様成物にて、美人の形容見劣り可レ申といたはしく候。二三日中に右あはせ仕立候て、もたせ遣候よし申遣候。どふぞ小糸に御逢被レ成候て、とくと御申聞せ可レ被レ下候。縷々筆談に盡しがたく候。何事も貴顏御物がたりと申殘候。以上

五月廿六日

返すゞゞ小糸もとめならば、此方よりのぞみ候ても畵き申たき物に候。右の外の畵ならば何度とも申遣候様、御申傳可レ被レ下候。此ほどは不夜ねり物へ御越被レ成候や、御ゆかしく存候。少々御閑暇之節御來訪所レ希候。金篁子へもよろしく。星曉子へも。

佳棠様　　蕪村

柳女・賀瑞宛　　（大阪　土居剛吉郎氏藏）

昨日は御細書拝覧、御安榮被レ成ニ御座一候由めでたく存候。御句共いづれもよろしく候。引墨の句殊更ニ承候。發句（マヽ）御句早卒御工案御出し被レ下、面目の到ニ候。昨日は社中故障ども多候而甚[illegible]て候。選句左ニ書付御めにかけ申候

枯尾花

岩も木もさがなく見するかれ尾花　柳女
草よりは岩といたすが姿情おもしろく候。

舟慕ふ淀野の犬や枯尾花　几董

かれをばな一把に秋をつかねけり　白笑

枯臥て風を餘處なる尾花哉　蘭洞

喰付て秋を啼虫やかれ尾花　月溪

狐火の燃つく斗枯尾花　蕪村

時雨

木兎（ツク）の頰に日のさす時雨哉　蕪村

したゞゞと漁火にしみ込しぐれかな　月溪

傘かればはたふらすみの時雨哉　蘭洞

寢餘りていとゞさびしき時雨哉　柳女

日ぐらしの里ふりこして小夜時雨　白笑

しぐるゝやかたいイむ魚の店　几董

竟宴付合のはいかい有之候へ共、しげく候故略申候。今日は一乘寺村茸狩へ罷越候故、甚心あはたゞしく草々したゝめ置候。尚追ゝ可レ得二華牘一候。頓首

九月十六日　蕪村

（晋風曰、此の書翰には左の月居の鑒定が附いてゐるさうだから附載する。）

上の件の九月十六日の文は、先師夜半翁の墨痕にて、柳女・賀瑞はくれ竹のふしみのさとなる笹部氏の母子なり。證していはく、

うづみ火に膝なつかしや五六人

月居 花押

柳女・かすい宛　（名古屋　伊藤仁兵衛氏藏）

けしからぬ寒さに御座候へ共、御安全被レ成二御凌一めでたく存候。愚老病氣も此ほどはすきとこゝろよく候間、御安心可レ被レ下候。

○金ぷく入集の御句ども落手、即左の句甚よろしく候故加入のつもりに御座候。此度は道立子の催に候故、愚老はかまひ不レ申候。

虫絶て行先おもふ夜寒哉　柳女

榾たけば天狗來ませり峰の坊　かすい

右の二句甚面白く候。乍二筆末一彌市様へも、御傳言奉レ賴候。愚老も一年〳〵と寒氣にこまり候て、只々閉關いたし廢業の體打くらし申候。宿のものへいつも〳〵御傳言かたじけなく、猶愚老よりよろしく申上候様申事に御座候。以上

十一月廿八日　夜半

柳女様

かすい様

まさな宛　（攝津池田　小林一三氏藏）

御細書かたじけなく拜覽候。御無爲御暮めでたく存候。愚老も堅固過候間、御安意可レ被レ下候。扨、月並發句御登被レ下、社中の輩もうれしがり申候。カセ木とくのうかひに相定り申候。あたらしき御趣向めでたく承り申候。

六月十日兼題

蓮　夕立

右も御工案可レ被レ下候。

ほたるの句、甚おもしろく承り候。

とち風に迷ふ…………
　甚おもしろく聞も深く被ㇾ存候。
夕風に………
　夕風といたし候へば、一句はたけ高く淸雅なるかたに候。されどもとち風のかた聞處多く候。もちろん世上へ出候には、とち風のかたが德にて候。一句の能は夕風すぐれ申候。いづれもおもしろく勝劣なく聞え申候。
うの花くだしせかれけり
　よろしく承り申候。

一御句集の自序御つくり被ㇾ成、御そうだんニ被ㇾ及、とくと拜見いたし候。扨もよく出來被ㇾ申候。中〱一字の添削を加へ候所無ㇾ之候。及びがたき文章おどろき入申候。

一昨日の我等かたの句會、いづれも佳句は無ㇾ之候故、書付不ㇾ申候。

　身やいつの長柄のうぶね嘗て見き
　靑梅に打鳴らす齒や貝のごと
　　右蕪村

甚あしく候へども書付申候。春作樣・御內政樣へもよろしく奉ㇾ願候。とりがいの事いかにも承知仕候。最早とり貝は來年の事とおもひ切申候。

　五月十一日　　　ぶそん

　まさな樣

　內のものもよろしく申上候。

正名宛　（攝津池田　小林一三氏藏）

　粟津幻住庵夜話
丸盆の椎に昔の音聞む
　幻住庵にて琵琶湖上月といふ題を得て
月に漕呉人はしらじあめの魚
　三井寺山上得皮亭よりみかみのやまをのぞみて
秋寒し藤太が鏑ひゞく時
　窓といふ字を探りて
住むかたの秋の夜遠き燈影哉

右の句どもおもしろからず候へども、當月十二日幻住庵に曉臺・臥央など淹留いたし居候を尋ねての句也。それ

故御なぐさみに書付候。かねては湖水の十三夜に遊んと約しけるに、もとより秋の空のたのみなければ、いかでこよひの清夜を見過し侍らんとて、しゐて十二日の夜三井の何がしの御坊にいたり、信圓僧都を尋ねて

　三井寺や月の詩つくるふみ落し

右の句は十三夜を、十二日の夜に登山しける故、かくは申出ける也。

　正名詞兄　　　　蕪村

士川宛　（名古屋　味岡榮二氏藏）

朶雲拜見、御安全被レ成ニ御座一奉レ賀候。愚も無爲候。

一鬼彥ほ句の事いさゐ承知、則左に

　日は日ぐれよ夜は夜明けよと啼蛙

右の句御出し可レ被レ下候。蛙は二三ケ月にわたり候物也。其中にも此蛙は晩春の致景にて候。

一御酒いつ迠も相待罷有候。

一春の句早々御登せ可レ被レ下候。御近邊御社友、兵庫邊御さいそく可レ被レ下候。

　春三季にわたる句よろしく

士喬様・士巧様へもくれぐ\奉レ賴候。

一兩日はのどかに相成、おもしろき事、洛東の烟霞こと更やるかたなく候。又々御上京奉レ待候。

　三月十日より一七日の間、蕉翁百年忌、洛の双林寺、又大津幻住庵において興行。

　　管事　　曉臺

共頃は被ニ仰合一御上京可レ被レ成候。以上

　如月四日　　夜半

　士川様

梅亭宛　（大津　吉住秀造氏藏）

存候

殊の外ニ春暖いよ／＼御別條なく御暮し珍重ニ存候。夜前は御來訪のよし、見事の鮒魚二腮被レ下忝、今日賞味いたし候。厚情(イニ難)奉レ謝候。且又よし野行の事承知仕候。先伏水の士人の物がたりニ、桃も滿花のよし承候。さあれば花も此節よりと被レ存候。外ニ我則・佳棠もおもひ立仕居候へ共、其期にいたり異變あるものニ候。貴子同行ならば千

人力と存候間、いよ〳〵旅行思召たち可レ然候。只篗一ツこそ雨の備へと被レ存候。何ごとも有のまゝにいたし同行可レ申候。〇春夜（イニ櫻ニ）樓會不参いたし候。今日小集催し出來のよし、貴子御書のよし御苦勞に候。愚老の句いづれニさだめ可レ申哉、先日不夜庵茶會ニての兩三句書付候。よきを几董へ遣可レ申候。萬々貴面御入來待（イニ(いりけ)）奉候。

草かすみ水に音なき日ぐれかかな

春雨や日ぐれんとしてけふも有

折釘に烏帽子かけたり宵の春

右三句の中任ニ尊意一候。以上

二月廿三日　　　蕪　村

梅　亭　主　人

（晋風曰、碧梧桐氏の言葉に「この手紙は前半がない」と。裂けてなくなつたのであらう。「存候」の前に必らず何か書かれてあつたに違ひない。潁原氏は書簡を疑つてゐる。）

梅　亭　宛　　（四日市　鈴木龐平氏藏）

御安全めでたくぞんじ候。大横物漸出來もたせ上候。盆前又おもしろき物書申候。此謝只今ほしく候。長良餘り高過候而風流なし、縦へかやう宜、賛ハ

嘆息此人去、蕭條徐泗空

沓おとす音のみ雨の椿かな

是を書ところ御殘し置可レ被レ下候。

五月八日　　　夜　半

梅　亭　さ　ま

（晋風曰、書翰中「縦ヘ」のつぎに、張良の立姿を描きあり、私も一見した記憶がある。）

騏　道　宛　　（大津　吉村秀造氏藏）

さむく相成候へども、御無恙御くらし被レ成珍重被レ存候。しかれば先達被ニ仰聞一きぬ地山水落成いたし候。

かけ物箱長サ壹尺六寸餘　かねさし

右ぐらいの箱を相待□□可レ被レ遣候。此方の箱ニ入候て相下可レ申存候へ共、箱方々へ遣候て甚不自由ニ候故かくのごとくニ候。扨朔暮ニ氣陰晴もはや神無月の心地ニ候〇どふぞいとまを得候て、來月中ニハ湖南行の趣向相催可レ申とたのしみ罷在候。巨洲子・漁江子・菊二子共外御社中御傳聲可レ被レ下候。何事も御めニかゝり候節。以上

九月盡　夜半

騏道樣

時雨

しぐるゝや長田が館の風呂時分

しぐるゝや山かいけちて日の暮るゝ

まだき冬の句ながら今朝いたし候故書付候。

近江屋宛　（名古屋　織田德兵衞氏藏）

寒冷相募候所、御安全被レ成ニ御座ニ奉レ賀候。しかればきぬ地漸今朝迄に出來仕候故、先づ御めにかけ申候。此書はことの外むづかしき物に御座候故、かねて被ニ仰聞一候書料などニ而は、一向間に合不レ申候ニ付、あなたの書は外にきぬ申付候。近々出來可レ仕候。夫迄しばらく御待可レ被レ下候。先ッ御やくそくの日限も段々延引に及候故、此書御めにかけ申候。御覽相濟候はゞ御返却可レ被レ下候。何事も貴顏、とくと御物がたり可レ仕候。以上

十月十七日

近江屋五兵衞樣　與謝蕪村

近江屋宛　（名古屋　織田德兵衞氏藏）

爲ニ拙書一御謝義二朱二片、忝致ニ受納一候。御丁寧の至と存候。其内御禮可ニ申上一候。以上

（閏）壬月廿八日

近江屋忠兵衞樣　與謝蕪村

近江屋宛　（名古屋　織田德兵衞氏藏）

爾來御物遠罷過候。秋暑はげしく御座候處、御壯健被レ成ニ御凌一めでたく存候。□□先達仰聞候きぬ地二幅の內、壹幅は盆前に出來いたし上可レ申□思合仕候處、中〱出來がたく候間、其旨先樣へも被ニ仰達ニ可レ被レ下候。どふぞ一幅は是非揮毫可レ仕と心がけ候處及ニ延引一候段、御察可被下候　右御斷申上度如レ此御座候。いづれもむづかしき物に御ざ候故、あはたゞしく急ぎ候而は不出來仕候。しばらく御待被レ下度候。何事も拜顏、御物がたり可ニ申上一候。以上

七月七日

二白當日めでたく存候。

近江屋五兵衞樣　與謝蕪村

近江屋宛　（名古屋　織田德兵衞氏藏）

寒中御安全被レ成ニ御暮ーめでたく存候。しかれば先達被ニ
仰聞ー候きぬ地出來に付、御丈(マヽ)へ附申候。御落手可レ
被レ下候。

一箱の書付もしたゝめ上申候。折節取入卿々如レ此に御座
候。餘は期ニ拜面ー候。以上

十二月廿四日

近江屋五兵衛樣　　與謝蕪村

近江屋宛　（名古屋　織田德兵衛氏藏）

此きぬ地の裏打、薄墨にて染候と相見え申候。薄墨の紙ニ
而、きぬ打のうら打は甚あしく候。一向唐ニハ無レ之事にて
候。隨分と白き紙にてうら打致す物にて候。墨紙にてう
ら打いたし候へば、書品甚いやしく、且又、彩色もあし
く罷成候。キのどく之事ニ御座候。右の趣水口屋樣へもと
くと仰達可レ被レ下候。以上

十二月廿四日

近江屋五兵衛樣　　蕪村

近江屋宛　（名古屋　織田德兵衛氏藏）

拙畫御謝義として方金一地、並に御一樽被ニ送下ハ、忝致ニ
拜受ー候。先樣へもよろしく御禮被ニ仰傳ー可レ被レ下候。尙
來陽貴顏可ニ申謝ー候。以上

十二月廿三日

近江屋五兵衛樣　　與謝蕪村

近江屋宛　（名古屋　織田德兵衛氏藏）

其後は御物遠罷過候。彌御壯健被レ成ニ御座ー珍重存候。し
かれば

青梅島引とき

あらきしま
細成しま　女子物

右の品御座候はゞ、乍ニ御面倒ー御見せ被レ下度奉レ賴候。
先日妻に御物がたり被レ成候ニ付、どふぞ御見せ被レ下候樣
と、妻くれぐ＼御賴申義に御座候。御事多中御めんどうニ
可ニ思召ー候へども、御賴申上候。右得ニ貴意ー度如レ此御座
候。以上

十月朔日

近江屋五兵衛樣　　與謝蕪村

馬圃宛　（名古屋　三尾氏藏）

以來御物遠相過候。時下寒氣甚候處御安全御在京のよし、めでたく被ㇾ存候。此方よりも御尋も申上たく候へども、とかく多用に暮候故、意外の御無音御免可ㇾ被ㇾ下候。御國もとの首尾もよろしきかたの由珍重存候。とかく世ニ處スルニハかんしやくの氣味なき樣に、人情ニしたがひ御くらし可ㇾ被ㇾ成候。兩節春興御工案も候はゞ、御序に早々可ㇾ被ㇾ遣候。春帖へ加入仕たく候。何事も貴顏可ニ申述一候。折節取込匆々頓首。

十二月十三日　蕪村

馬圃樣

御返書

延年宛　（大阪　土居剛吉郎氏藏）

爾來絕ニ書音一候。彌御安全被ㇾ成ニ御暮一めでたく存候。愚老去年より所勞、今以はか〳〵無ㇾ之、いづかたも意外の御無音、御察可ㇾ被ㇾ下候。併此二三日は大かた復常仕候間、被ㇾ安ニ懸念一可ㇾ被ㇾ下候。

一社中すり物御慰ニ進上申候。ちと御上京被ㇾ成候樣にと心待仕候。浪花抵子大評判、どふぞ〳〵見物ニと存罷在候。左候はゞ御尋可ニ申上一候と、たのしみ申事ニ御座候。

一樵風子へ乍ニ御面倒一御達可ㇾ被ㇾ下候。何事も追々以ニ書中一可ㇾ得ニ貴意一存候。取込草々以上

六月四日　蕪村

延年樣

如瑟宛　（京都　土橋氏藏）

御遠々しく相過候。扨もけしからぬ著ニ候處、御無恙御しのぎ被ㇾ成、珍重之御事に御座候。愚老かはらず消日いたし候。しかれば暑中御尋として見事の鮎御めぐみ被ㇾ下、早速賞味たのしみ申事に御座候。まこと打絕御風雅もうけ給らず候。いかゞ御くらし被ㇾ成候や、□おかしく候。ちと御入來所ㇾ希御座候。尙期ニ貴面談之時一候。以上

六月廿四日

我影を淺瀨に踏てすゞみかな

右鴨綠江頭にあそびていたし候。おもしろからず候へども書付候。

如瑟樣　夜半

季遊宛　（西宮　須原退藏氏藏）

其後者御疎遠罷過候。やゝ冷氣相催候處、御安全被レ成ニ御座ー奉ニ恭賀ー候。しかれば、先達御もとめのおくのほそみちの卷、出來仕候ニ付呈覽仕候。御ものずき甚よろしく候而、したゝめ候ニもこゝろよく大慶の至ニ候。

一ケ様の卷物の書は隨分洒落ニ無レ之候而は、いやしく候て見られぬ物ニ候。それ故隨分と風流を第一ニ揮毫仕候。

一卷中に女武者の像二人有レ之候。是は文章中有レ之候通、しのぶ郡鐙摺と申所ニ古寺有レ之候。其寺ニ次信・忠信兩人の内室の像有レ之候。則甲冑ヲ著し一人は弓箭を取、一人は鉾を按ヲ居申候。先年愚老松島行脚の節見置候。甚懷舊の情ニ堪ぬ所ニて候。それ故右の婦人の像をしたゝめ候。是又卷中の模様ニ相成候。蕉翁此所の發句は五月五日の發句故、右の女武者をかぶと人形ニ而、五月ニかざるものと御見違被レ成候而は、いかゞと存候ニ付くわしく書付候。

右の段々とくと御一覽可レ被レ下候。此卷は愚老も一卷ほしく候。何事も拜眉ニ御ものがたり可ニ申上ー候。以上

九月四日

季遊様　蕪村

清之助宛　（新潟　遊木爲雪氏藏）

昨日は東山へまいり、おふきにあしをそこね申候。將この間御みせ被レ下候絹地かけもの、まことの梅道人とおもはれ候。隨分御たからともなるべく候。ねがはくば寶給ふべし。猶また昨夜月溪見えられ感心いたし申候。此上諸家のちからこそ得たく候。草々頓首

四月十八日

あるおうなのもとより、衣のわたぬきたるを給りければ

橘のかごとがましき袷かな　蕪村

清之助様

（晋風曰、此の書翰は私の一見、碧梧桐氏に報じたもので、發句の詞書はあとで判讀補ひ入れたのである。）

春庵宛　（四日市　鈴木雁平氏藏）

貴翰辱拜見、彌御安康被レ成ニ御座ー欣然到奉レ存候。且先日ハ奉窺御馳走辱奉レ存候。甚酩酊恐縮仕候。夫より乘船、柳に顔をなでられて

出る杭をうとふとしたりや柳かな

漸ふしみへ落日著、観雪子方へ訪問致、社中集甚興ありと月を載歸京候。先日御恩借申候漢畫熟覽仕候。御返還申候。御落掌可レ被レ遊候。御隱居樣書畫交張御趣向御座候由、小子畫致候書蒙レ仰承知仕候。近日描上可レ申候。

大雅先生の武陵桃源圖出來候由、拜見致度候。名古屋風月孫助方書畫御覽被レ爲度由、幸近日浪花へ參候由、則書畫携候樣可レ申候。しかし僞筆多く能〳〵御鑒定、陵選方人物張平山□人圖、爭九扇面、文進柳黃鳥圖、春臺先生詩、此分みな〳〵宜敷候。京師社中みな〳〵鑒定致置候。李用風竹僞物也。尊君竹畫御好被レ成候。決而御求メ御無用に候。委細近日可ニ申上一候□□白。

晩春廿四日　　夜半亭蕪村拜

近藤春庵樣

（晉風曰、此の書翰は蕪村の書翰を、後人の臨模したので、私も一見して手記して置いたものと對校した。）

無宛名　（大阪　高安六郎氏藏）

御誂のおくの細道一卷出來仕候。是は士川へ遣し候よりは、甚見事に御座候。得と御覽可レ被レ下候。

初午や鳥羽四塚のとりの聲

はつ午や其家〳〵の袖だゝみ

右二句御評可レ被レ下候。一卷早々御望可レ被レ下候。拜顏の節可ニ申上一候。

二日　　夜半

蕪村の新研究　乾猷平氏著

大阪毎日新聞の附錄で、蕪村の書翰を趣味的に解説した文章を見たのが、私の乾氏に對する初印象である。その後氏と相知るに至つてその蕪村傳の敍述が興味を逸しないように、材料をこなす事の巧みなるに屢く惹附けられた。大正十四年六月氏の新著「蕪村の新研究」の惠送を受け、恰も寺村家に藏する蕪村文獻に就いて、氏の研究の更に一歩を進めらるべきを期待するところあつたが、既に本著に於て氏の蕪村傳作者としての新しい位置は充分に認識されたのである。こゝに再錄したのは『蕪村の新研究』引用中の書翰九通に過ぎないが、それ以外は前掲の分と重復するから除いた爲めで、勿論氏の發見した書翰は、これ

で全部ではない。其のすべてを發表される日を望んでゐる。

几董宛　（大阪　土居剛吉郎氏藏）

けしからぬ秋暑に候。いかゞ御しのぎ被レ成候や、打絶御無音寀中事に御座候。盆前御仕廻何と被レ成候や、相かはらず（イニ（ゐ））風塵御樂の事に御座候。御見舞にも參り申度候へども、事多候故、意外の御ぶさた御免可レ被レ下候。今日寺迄人遣候故、御安否御諱旁如レ此に御座候。とかく盆中御めにかゝり寛々と御物がたりと書留候。以上

七月十二日

尙々御内樣へもよろしく御賴申候。きぬも手のいたみ、さし起り（イニ（少々さし留り））候故、先頃より手前へ罷越養生を加へ、野瀨秀作殿御くすりをたべさせ申候。少々よろしき方に候故、御安意可レ被レ下候。

〇昨日雄山へも聯に發句書付漸相下し候。聯のうらおもて共に書付申候。（イニ（左に））

法師ほどうらやましからぬものはあらじ、人には木のはしのやうにおもはれて、とはこゝろえの雅好のすさびならずや

自剃して涼とる木のはし居哉

方空子に申つかはす

又

御佛のなほ尊さよけさの秋

目に見ゆる秋の姿や麻衣

几董樣　　夜半

霞夫・乙總宛　（四日市　鈴木廉平氏藏）

寒中御兩子御壯健被レ成ニ御暮ー候由、珍重の至存候。爾來御文音も絶々に候故、いかゞ御入候哉と老心おだやかならず候所、此度御懇書ども怡悦の至存候。扨ても愚老義、當年は惡星の障碍に候や、夏秋を經て病に犯され、漸く全快いたし候處、又々霜月下旬ヨリこゝろあしく、壬月ニ至り候ては以の外ニ而、とかく老病と被レ存候。只今ハ祉中鐵僧の藥に而、一兩日はよほどこゝろよく候。此體ならば春暖を得候はゞ、めき〳〵と快癒と被レ存候、當年六十歲と相成候。來本卦よりは更生いたすつもりに候、それ故はやく當年を過申度候。十五日ハ立春に候故、それから

はこちの世の中と指を屈して相待申候。

一入集の秋の句ども、御取集候て御登せ被レ下、御せわの至存候。右の集も當冬中ニハ出來のつもりに候處、右の病氣にてとかく筆硯の業もむづかしく、几邊に倚候へばねつさしゆてこゝろあしく候故、來年に相延し申候。どふぞ來春中出版いたし候樣にと願候。何事も几董にまかせ置申候。それ故御社中御句共、延引ながら隨分と間ニ合大慶いたし申候。

一靑蘿と御兩吟の歌仙ども、あら〳〵見申處候、おもしろく承候。愚評申こし候樣に被ニ仰越一候へ共、ケ樣のことハ筆談には盡しがたく候。歌仙のうち申所あまた有レ之候。靑蘿もはいかいの數少キ人と見え候處、あまた有レ之候。しかれども先ヅはあさましからぬはいかいにて候。どふぞ來夏ハ湯治の望に候故、御めにかゝり寛々御ものがたりもいたし度ものにて候。靑蘿が付かた、樗良に似たるところ相見え候。樗良が付かたも難を申候はゞいかほども有レ之候。とかく何事も中庸にはまいらぬものにて候。

一どふみても我家の几董ほどの才子はなきものにて、此程も曉臺ゟの文通ニ、北越ヨリ東都へかけ行脚いたし、雪中菴ニ滯留、俳談など席を重ね候所、とかく几董ほどの曲ものに出あはず候。行々蕉門の風格を定め可レ被レ申人と不レ堪ニ驚嘆一候。かゝる人を門人にもたれたるは、うらやましき事に候。向後はいかいの友と力にいたすは、貴翁より外に無レ之候間、此後いよ〳〵無ニ隔心一申通度候。此義許容を希候。とくれ〳〵書つゞけ申越候。曉臺は尋常の俗俳とは違ひ候て、厚き仕込ミのものに候。それらさへ几董を恐れ、三舍ヲ避候ほどの事に候。同社中の事に候故、御兩子なども御よろこびと存候故、老の長ごと御免可レ被レ下候、他見ハ必々御無用ニテ候。

一音只今木屋町松ばら上ル所に、かり座しきをいたし候。しかと京住と申ニても無レ之候。まことにかりのやどりにて候。この法師はとかく色好ミの失ッ有レ之、いづかたにも尻がすはりがたく候。又程なく轉蓬の客と被レ存候。しかし此ほどハ淸水の大悲に立願いたし、禁酒

を立て居申候。それ故先ヅはおとなしく相見え候。末はともかくもニて候。

一當年は病中ゆへ、例の春帖相休ミ申候。左様に御心得可ﾚ被ﾚ下候。併シ春ニいたり梅花帖と申ものを出候て、春帖の代りにたのしみ可ﾚ申歟と、心がけ居申候。

一先達より貴境處々御類の號ども、當年ハ卒業いたし、相下し可ﾚ申と存候所、多病にて延引、よろしく御照量可ﾚ被ﾚ下候。夫に付テハ御兩子へ、甚心外の不義理ども多く候て胸中ニよこたはり、これらも病根の一ツにて候。何事もよろしく御兩子御相談被ニ成置ハしばらく御待可ﾚ被ﾚ下候。

一有橘様へよろしく奉ﾚ願候。折々預ニ御文通ー御親節(切)の至忝存候。

一翠樹子家大人七十の賀の事、相心得申候。几董・一音へも申達、一同に相下可ﾚ申候間、其旨被ニ仰達ー可ﾚ被ﾚ下候。

一今の世行脚の俳諧者流ほど、下心のいやなるものは無ﾚ之候。其旨いかにと問ふに、行先キ〲に而金銭を貪り取たがり候。其術には他なく候。只々おのれが長を說、他人の短をかたりて、人に信伏(服)せられんことを乞願ひ、どふぞ金がほしい〱と柄杓をふらぬ斗候。それはともかくも又人をも害ひ候事多く候。邊鄙の人、はいかい未練の徒ハ、菽麥(シユク)だにわかたず古動せられて、渠がために迷され候事にて候。御兩子などは最早餘ほど御合點もまいり候事故、左様のあやまちは有まじく候半と存候、かならず〱つゝしむべき事に候。

一貴境海のあれニて魚とらずゆよし、いつにても澤山成時節御登せ可ﾚ被ﾚ下候。其中に去年中歟、乙ふさ子ゟ御贈被ﾚ下候小鴨、美味今にわすれかね候。もし御手に入候はゞ御登可ﾚ被ﾚ下候。

此書おもひの外長く相成候。御兩子ゟの書、久しぶりにて老心を慰候而、頭風も退き心地故、病床ながらうか〱と書つゞけ申候。快氣いたし候て、兩吟歌仙などの愚評をもひそかに書候て、御めにかけ可ﾚ申候。先此たびは御容捨可ﾚ被ﾚ下候。以上

壬月十一日　紫狐庵

霞　夫　様
おとふさ様

内のもの、むすめかたへ、つと〳〵に御傳書かたじけながり申候。娘も琴組入いたして、餘ほど上達いたし候。寒中も彈ならし耳やかましく候。されども無事にひと〻なり候を、たのしみ申事に候。

一當年ハ發句甚少く候。されども五句十句は有レ之候。秋中〻の愚句ども先達書付進ゆ歟と覺申候、左候へバ重復に成候故、こたびは書付ず候。

霞　夫　宛　（四日市　鈴木廉平氏藏）

一足下益御壯健奉レ賀候、愚老病氣此十日ばかり已來殊外よろしく、最早平常ニ復候間被レ安ニ懸念一可レ被レ下候。

一むすめ事二月中より左右の腕だるくいたみ候而、今にしか〴〵無レ之老心をいため候。御憐察可レ被レ下候。併氣遣なる病氣にては無レ之由、醫師被レ申候ゆへ安心いたし候。

一舊年より追々御登せ被レ成候歌仙、或は發句共、このたび愚意書付候。歌仙・付合などは中〳〵筆談にては合點まいらぬ事而已ニ候。それ故あら〳〵と書付候。愚老去年三月よりの不例にて、萬事廢置候事御照量可レ被レ下候。

一先達より被ニ仰聞一候畫幅之内

　　右　寒山茅屋　山水
三幅對　中　宗全仙人採芝之圖
　　左　深林轉路　山水

右は有橋君御たのみ

二幅對梅ニハヽ鳥

　是は華人の物數寄ニ雙幅ヲ掛テ一幅ノ畫ニ見ル法也。

右ハ誰人のたのみにや、二幅對ニ而大體成書と御注文にしたがひ候。

右五幅對此たび相下ゆ、御落手早々、それ〴〵御達可レ被レ下ゆ。

一貳十五匁八厘　有橋君絹地料
一十八匁七分五厘　二幅對ハヽ鳥絹地代

きぬ代の義、先達も御登せ被レ成候様に覺申候。いづれの絹代にて有レ之候や、病中故しかと覺不レ申候。其御地に

て御吟味被ㇾ下、いまだ成分は又々御登せ可ㇾ被ㇾ下候。
右の外ニ
三幅對　二通
極彩花鳥　一幅
芭蕉翁　一幅
右の分も不日に揮毫相下可ㇾ申候。長病後故書にせめられ候。先づ貴境の分より相片付申つもりにしたゝめ申候。
一はいかい、いかゞに候や、御發句ども久しく不ㇾ承候。
一晋も無事に候。半化も無事。
一下總闗宿の閑鷺と申者、此度芭蕉翁之塚を築候。則陽炎塚と申候。依ㇾ之陽炎の發句を集め小集にいたし候ニ付、陽炎の句を五月中旬までニ登せ候様にと申越候。御工案早々可ㇾ被ㇾ遣候。右の閑鷺は愚老舊識にて甚の豪家にて候。入料もいらぬ事に候。愚老社中より多く加入の句有ㇾ之候。
一先日の獨活、さてさてけしからぬ風味、香氣あたりをはらひ、いづれもきもをつぶし申候。
一先達乙總子たのみの畫、屛風山水揮毫いたし相下候。定て相達候半と存候。右書料ども貴子御すゝめ被ㇾ下、五月節前に御登せ被ㇾ下候様に、御心を被ㇾ付可ㇾ被ㇾ下候。御兩子方へは返納の物も有之候而、心頭にかゝり候へ共、右長病家内の困窮言語同斷に候。御察被ㇾ下候而きぬ地畫料等も御取集、早々御登被ㇾ下度候。是（他）へは云はれぬ事に候。貴子は格別故覆（腹）藏なしに申進候。乙ふさ子へもくれぐれ御取持、御ことばを被ㇾ添可ㇾ被ㇾ下候。扨もくるしき世の中にて候。
一いそがしく候而發句も無ㇾ之候。春來の愚句共、先達御めにかけ候やと存候。覺不ㇾ申候。いまだに候はゞ、幸便に被二仰遣一可ㇾ被ㇾ下候。書付相下可ㇾ申候。とかく書狀を書候事むづかしく候ゆへ、何事もあとよりおもひ出し出し可二申上一候。
妻もくれぐれ御言傳申候。以上

四月十五日　蕪村

霞夫様

大雅堂も一昨十三日古人と相成候。平安の一奇物、をしき事に候。

霞　夫　宛　　（四日市　鈴木廉平氏藏）

御細書飛來拜覽、先ゞ暑の御さはりもなく、御安寧御くらしめでたく存候。愚老無爲にくらし候。

一先達拙畵共相下候處、右御謝義として有橘公ゟ御丁寧之至かたじけなく、外に金一片、是又先方へよろしく御禮被レ仰可レ被レ下候。

一先比も一兩度書狀相下候。其內ニハ內ゞの事どもなど書加候事共有レ之候。御他見ハ御無用ニ候。其狀相屆候哉、ちよと御返事御聞セ可レ被レ下候。安心いたし度候。はなひ坊いまだ御地わたらひ無レ之候や承度候。

一此度洛東一乘寺村と申所ニ、金福寺と申禪寺有レ之候。其寺の後山ニ芭蕉菴と云舊名のゝこりたる所有レ之候。右の地へこのたび一草室を再興いたし候。もちろん石牌も建申候。

右再興の小集出申候。一順の付合も有レ之候。發句も夏季にて加入いたし候。乙ふさ子とキ子の發句覺不レ申候ニ付、ざつと代句いたし加置候。やがて出板候へゞ相下シ可レ申候。

一社中いづれも變事なく候。古池も無事ニ而はいかいめき

〱と上達いたし候。毎々御噂申出候。几董も御噂のみ申出候。此おのこ益々上達いたし候。二柳・几董・愚老、三吟のか仙なども後便ニ書寫して相下可レ申候。今明日中は祇園會にて甚取こみあら〱申殘候。近々又御たのみの畵ども相下候故、甚せつくわしく可レ得ニ御意一候。此たびは乙ふさ子へハ書遣不レ申候。よろしく御賴申候。

內のもの、むすめも無事に而、琴はけしからず上ゲ申候。御上京ならば御聞セ申たく候。內ノ者くれ〲御傳言申上候。いろ〱おもしろき事共有レ之候へども、筆ニ盡しがたく遺恨ニ候。かしこ

六月十三日　　夜半亭

霞　夫　樣

（晋風曰、此の書翰はコロタイプ刷として、口繪に揭げたから參照されたい。封じ目に別に「霞夫子　夜半」と認めてある。）

霞　夫　宛　　（四日市　鈴木廉平氏藏）

殘暑甚御座候處、彌御清榮被レ成ニ御凌一めでたく存候。愚老先ヅ無事と申たいけれども、とかく古家の修理に而、こゝを直せばかしこがゞたつき、只々藥三昧に消レ日候。

ことに三十日斗已來右ノ手しびれ候て、中風歟とおどろき藥を立かけ〳〵用ひ申候。今以我手の様に不ㇾ被ㇾ思候。しびりのきれたる心地、筆を取候ても持心よろしからず候。併中風にては無ㇾ之由、醫家皆々被ㇾ申候。安意仕候。

一先頃は有橘君共外〻の謝義ども御取揃御登せ被ㇾ下、毎々御やつかひの至、御禮難ㇾ申盡ㇾ候。又此度先達御注文の内

三幅對　中　壽星
　　　　左右　鹿

翁の像

外ニ山水二幅相下申候。先達御注文の內、極さびしき花鳥被ㇾ仰越ㇾ候。いまだ染筆不ㇾ致候。其外三幅對もいまだ出來不ㇾ申候。是等は盆後相下可ㇾ申候。

一此度相下候山水二幅ハ、北宗家の書法にしたゝめ申候。愚老持前の書法にてハ無ㇾ之候。それ故ちと不雅ニ相見え候。しかれども隨分と華人の筆意を得たる物に候。されども愚老かねて好ム處の筆意に而無ㇾ之候故、おかしからず候。足下の御取斗ひにて、其御地の田舍漢へ賣付代金御登せ可ㇾ被ㇾ下候。存の外手間は入候書共に而候。右の義御他言御無用、足下胸中にて御取計ひ可ㇾ被ㇾ下候。

一三幅對老人星鹿の畫は、專ら淸人の筆意に法り候。甚おもしろき物にて候。とくと御覽可ㇾ被ㇾ下候。

一去年中きぬ地代共御取集、御登せ被ㇾ下候歟と覺申候。いか程とり候や覺不ㇾ申候。それ故どんちやんとむづかしく候。最早きぬ地どもの思召にて宜様に御取計ひ可ㇾ被ㇾ下候。繪ぎぬ屋ニも、おびたゞしき借金、こまりはて申候。

一乙ふさ子方屛風したゝめ相下候。其後一向屆いたとも沙汰無ㇾ之候。いかゞの思召に候哉無ニ覺束ㇾ候。定而先達の御さし引等共有ㇾ之候故、其分に返濟のつもりに而候思召歟と察候。それは至極御尤に存候。しかれ共愚老義、去年中より當春へかけ長病、既に黃泉の客と存候程の仕合にて、當春へ至り候ても一向畫業打すて置候故、家內物入其外生涯の困窮御察可ㇾ被ㇾ下候。それ故先ヅ先達のさし引事はしばらく御延置被ㇾ下候而、外にも畫料等御登せ被ㇾ下候へば忝存候。左様無ㇾ之候てハ夜半亭たちかね候。御兩子の義ハ別而親交の社中と力ニ

いたし、老心を養ひ申候。此義御乖鑒被レ下、乙ふさ子とよろしく御そうだん被レ下、盆前無ニ間違一御登せ被レ下候様ニ、旱天に雲を待心地に候。

一右の體引こもり晝ニしこり居候故、はいかいの出會は此節うと〳〵しく候。二柳・半化など押よせ候へども等閑にあしらい候。一音坊此間上京御地御やうす略承候。貴子例の腹いたみの由、當年の暑隨分御自愛可レ被レ成候。發句どころにては無レ之、さてさて殺風景に候。雅事ハあとより寛々可ニ申承一候。以上

六月廿八日夜　蕪村

霞夫様

此返書どふぞ早く御聞せ、安堵いたし候様に御計ひ可レ被レ下候。おがみ申候。

有橋様へよろしく、一貫子よろしく。妻むすめ御傳言申上候。

（晋風曰、鈴木氏所藏書簡。すべて私も一見したが本文は穎原氏全集により、乾氏發表のものと對校したのである。）

無宛名　（大阪　乾猷平氏藏）

□□□椹木町□□屋與八殿迄、右之處付ニ而御登可レ被レ下候。此書付壁ニ張付ニ被ニ成置一、無ニ御失念一御登セ可レ被レ下候。

一平林氏一行もの、或はれん二三枚、御もらい可レ被レ下候、當地菴中ニ掛申度候。外（殊カ）ニ風流家に遠而所望いたされ候。何とぞ二三枚貴公御徳を以拜戴奉レ願候。一生之御たのみに御座候。大黒したゝめ御禮ニ相下可レ申候。京都所〻巡見、さて〳〵おもしろく相暮候。先頃臥見へ參上滯留いたし、□□貴公夜踊ニ御出被レ成候事、思いだし獨笑仕候。俳かいも折々仕候。いまだ何かといそがしく、取とゞめ候事も無レ之候。一兩年なじみ候はゞ、一入面白候半とたのしみ罷在候。先々平林公之黒跡かならず〳〵奉レ願候、是非〻〻相待申候。

鴛見

おし鳥に美をつくしてや冬木立

その外あまた有レ之候も略いたし候。ゆふき田洪いかゞ候や、御ゆかしく候。かしこ

霜月□二日

無宛名　（大阪　乾猷平氏藏）

御表徳文字、書にくきとの事、いかさま御尤ニ候。依レ之何ぞ能字候ハヾ書付候様御申越相心得申候。近々おもひ付候而、響キ能字有レ之候ハヾ書付御めにかけ可レ申候。其内にて御ゑらみ可レ被レ下候。

一音坊も又行脚ニ出られ候由、それ故此たびは書狀遣不レ申候。御書通之節ハ心得可レ被レ下候。

一拙老とかく世路ニ苦しみ、ホ句なく口おしく候。

姓名は何
子か号は（註、案山子の畫）
案山子かな　　蕪村

右の句、只今うめき出候故書付候。哉ハうたがひニテ候。歟と云心ニて候。此句は案山子の文章書可レ申かと存候。このあいだ郊外を吟行いたし候て、つく〴〵かれが有さまを見候ニ、富貴をしたはず、貧賤をうれひず、人のために田を守りて風雨霜雪をいとはず、此うへの隱德又有べしとも不レ覺候。實ニ巖穴の隱君子にて可レ有とおもひつゞけ候而、此ものニは性ハ何、名何、字ハ何と申べけれど、只、案山子といへる別號を以テ人の唱れば、それも又よしと淵默したる形容のおもしろければ、ふと云出したる句ニテ候。さして可レ取句ニハあらず候へども、不用意にして得たる句故書付申候。これは文章にては無レ之候。右の句の解ヲ書付候まで也。

一先達古夜半亭追悼小集相下候所、とくと御覽被レ成候半と存候。イニ（事）あの歌仙ハ蕉流ニてハ無レ之候、宋阿流ニいたしたるはいかいニテ候。それ故序文ニくわしく申ことはり候。イニ（候所）

一音坊いかゞ序文を見候哉、宋阿追悼之歌仙まことに蕉翁のいにしへを今にかへすおもむきめでたく候と申越候。これは大キ成間違ニテ候。序文とくと御見分可レ被レ下候。一音坊ニ御逢被レ成候ハゞ、右之事くはしく御傳可レ被レ下候。無ニ御失念一たのみ入候。

（晉風曰、頴原氏は大阪渡邊氏藏としてその著に掲出してゐる。字句に少しづゝ異同があるのは、讀み方の相違から來たので、こゝには寫眞版によつて見定めたのである。）

嘉右衛門宛　（丹後宮津　黒田芝英氏藏）

被レ仰候八僊觀の翁像、少の內御見せ可レ被レ下候。其他わすれ候得共、御拂可ニ相成一と思召候もの、此ものへ御見せ被レ下候。他見は不レ仕候。おりしも吐出候發句に

萩の月うすきはものゝあはれなる　蕪村

口屋嘉右衛門樣

無宛名　（攝津池田　小林一三氏藏）

長日退屈いたし候。然ハ今朝より大江丸上京いたし候。武陽のはなしも御座候。今文七大當り、よしのゝ內裏の段

御聞可レ被レ成候。然所また兵庫より鯛貰申候。

宿かさぬ火影や雪の家つゞき

木枯や何に世わたる家五軒

御約束の玉子十ばかり御こし可レ被レ下候。無腸書御届申上候。以上

七日　夜半

蕪村全集書簡篇　潁原退藏氏編

震災前藤井紫影博士の紹介で潁原氏の訪問を受けて以來、氏の學究的の研究態度に敬意を拂つて來たが、氏の『蕪村全集』出版に就き、折角氏より頼まれた序文の約を果し得なかつたので、多少疎遠になつて居た。併し俳書大系の刊行に就いては、氏は好意を持つて煩はしい私の照會に對しても、その都度〳〵回答を寄せられた。從つて『蕪村一代集』編纂には、『蕪村全集』を通じて資料の提供を受け、その便宜を得る事甚大であつた。本集に收錄した蕪村の書翰は碧梧桐氏の『三昧』所載『蕪村の手紙』が、氏の全集以後發表された以外は全部、その全集に收めてあり、私はそれを參照して――その他の俳句・連句もさうであるが――此の『蕪村書翰集』を編纂し得たのであつた。

几董宛　（大和上市　澤井清三氏藏）

此間は遠方埒もなき事、しかし宿もとにて少々用をいたしよろこび申候。

一魚尺書料御ひかへもたせ被レ遣、御やつかいの御事、慥落手忝存候。然ニ小海老風味あしきよし、かさねてよろしきを又もらひ申たく候。〇ゑびさて御せわの至。十七匁則添申候。いかにも五合ニ而よろしく候。愚ハもはや精進故。

一鳶からすの畫ぎぬ地之事、いさゐ相こゝろ得申候。同じくばこれこま子の幅を見申度候。先年書候故覺不レ申候。尤、圖式はことごとく替候てしたゝめ候へども、

おもむきを一見いたしたく候。

一筆の事被ニ仰越一候處、日々書ニ用ひ候故筆先切レ候て、中々板下などニハ一向用ひられ不レ申候。それ故遣不レ申候。殘念之事ニ候。もし月溪方ニいまだ餘分有レ之候はんか、うけ給り候て、もし有レ之候はゞ、月溪の人にて遣くれられ候樣ニ相頼可レ申候。しかし是も禿筆ニ相成候はんと察申候。

一昨日道立君より石碑ヲすりたるを五枚もらひ申候、ことの外よろしく出來、御互ニ生涯の面目よろこばしき事に御ざ候。並廻章も參候故、早々順達いたし候。

一おくのほそみち季遊子へ被ニ仰遣一御らん可レ被レ下候。

何事も貴面申のこし候。かしこ

九月十七日

尙々景物二品辱落手、うれしき事ニ候。白粘子御越被レ成候はゞ、さりとは名點者哉と譽候段御傳可レ被レ下候。何もせよ近來の佳興、又誰ぞ、御すゝめ可レ被レ成候。御內樣へもよろしく。

几董樣　　蕪村

几董宛　（攝津池田　某　氏藏）

たにざくかい付したゝめ遣候。御落手可被下候。

一大和の何來、來ル亥の春本卦の賀ニ付、すりものいたし度旨ニ而、愚句並キ子の句を乞ニ、先日書狀到達之所失念、又さいそくに預り候。無レ據成事ニ候故代句いたし、則たんざくニしたゝめ相下候、左樣御心得可レ被レ下候。

何來子が六十一の壽を賀して

年是亥子の日にさゝぐ千々の松　几董

右の通いたし遣候。愚句ハ

つちのとの亥の春、又みどり子にこまがへり、老行さきの千代の松風吹つたへて、つきせぬ宿のめでたさを、大和の國なる何來のぬしが、本卦の賀に申侍る

一字借音

大和假名いの字を兒の筆はじめ

さん用づめ成句ニ候へども、折ふしはケ樣の手妻もいたして見せるも能候。所詮賀の句に洒落も出來ぬ事ニ候。

几董樣　　夜半

東菑宛　（大阪　青木月斗氏藏）

聖春の佳景おもしろく皺を延し候。御安靜被レ成御迎陽めでたく存候。愚老無レ障加ニ馬齡一候。御華牘忝、殊ニ御やくそくの貝、おびたゞしく被レ下有がたく賞味仕候。しかし十日（愚亭歳旦開ニ而、過半（社中の人々ニ喰れ、口おしく存候。しかれ共めづらしきもの故、いづれもうれしがり申而、慰ニ老心一候。早速御禮の書上可レ申候處、いまだ舊臘の餘塵甚取込、延引御免可レ被レ下候。今日芦陰舍上京、先御禮旁如レ此御座候。尙あとゟ寬々可レ得ニ貴意一候。頓首

　正月十二日

副啓兩節春興御すり物甚感心仕候。こと更春興の御句おもしろく承候。

　紅梅や比丘より劣る比丘尼寺

春興あまたいたし候。やがて春帖にて御覽可レ被レ下候。

　東菑樣　　蕪村

霞夫宛　（攝津池田　稻束孟氏藏）

抑有橘君歿故候事、早春承りおどろき入候。早速書を以御悔可ニ申入一候處、愚老事も餘寒に中り候て、正月中旬ゟ以の外所勞、漸此一兩日復常いたし候。それ故延引に及候段御照量可レ被レ下候。さても有橘君、いかなるすくせにや有けむ、度ゝの御懇書、愚老を叔父大人などのごとく、書通の度每貴子へも風諫いたしくれ候へなどゝ、愚老をたとび給りし事共おもひ出られ、いとかなしきかぎりにて候。愚老も身安く相成候哉、近年ゟ入湯ながら下向いたし、寬々御ものがたりも可レ致と、たのしみ申候處、力もぬけ候て恍然とおもひつゞくる斗に候。このたび申わけの發句いたし遣申候間、塚の樹へ御手むけ被レ下、愚老ゟおこりを御謝可レ被レ下候。

一有橘と云名、御改メ被レ成度旨かねて御望に付、是もいかゞいたし可レ然候半歟と、御尋ね御尤に存候。

　見樹

陳子道之思亭記ニ既ニ葬テ益シ樹ニ以レ木ヲ

是は塚に樹を植て置ば、子孫共樹を見て親を忘れざるに備ふこと也。

右の文字御用ひ被レ成候而も可レ然候。もとよりひゞきも

よろしく被レ存候。されども有橋にてもよろしく候。いづれ共御賢慮次第御斗定可レ被レ成候。

一發句帖早々相下候樣に被ニ仰越一、是はしばらく愚老方に預り置候て、遠近の諸好士來訪の節書せ可レ申と存候。此帖を諸國へ遣候ては、中〱往返ひま取候て、一年や二年にては埒明申間敷候。

一愚老當春は春帖を出し、貴子御句はのぞき申つもりに候處、貴子の名無レ之候而は、甚帖面さびしく候故、やはり名を出し置候。もちろん有橋子、不幸訃未レ至前に加入いたし候つもりに候。尤當春は此方社中斗に而さいたん・せいぼは無レ之候。いづれも春興斗に候故、少も不レ妨候。御愁ひの中にも發句は折々可レ被レ成候。詩哥ともにうれいの中に多き物に候。杜甫が妙句も多くは愁のうちに候。愚老右の仕合故發句も一向無レ之候。春帖近日出し、早ゝ相下可レ申候。以上

正月晦日　　蕪村

霞夫樣

水にちりて花なくなりぬ崖の梅

此句うち見にはおもしろからぬ様に候。梅と云梅に落花いたさぬはいノ候。されども樹下に落花のちり舗たる光景は、いまだ春色も過行ざる心地せられ候。戀々の情有レ之候。しかるに此江頭の梅は水に臨み、花が一片ちれば其まゝ流水が奪て、流れ去〱て一片の落花も木の下には見へぬ、扨も他の梅とは替りてあわれ成有さま、すご〱と江頭に立るたゝずまゐ、とくと御尋思候へばうきみ出候。御噛〆可レ被レ成候。

野徑梅

梅遠近南すべく北すべく

梅がゝやひそかにおもき裘

むくつけき僕倶したる梅見哉

外にも有レ之候へ共、おもひ出かね候。何事も春帖出板の上、こま〱と申上候。以上

乙ふさ宛　　（大阪　土居剛吉郎氏藏）

老なりし鵜飼ことしは見へぬかな　　紫狐庵

すべて賛の繪をかく事、書者のこゝろえ有べき事也。右

の句に此書はとり合ず候。此書にて右の句のあはれを失ひ、むげのことにて候。か様の句には只篝などをたきすてたる光景しかるべく候。

これは門人月溪に申たることを、直ニ其席にて書つけまいらせ候。かゝる心得ハ萬事にわたることにて候。

乙ふさ子　　蕪村

(晋風曰、これは月溪の鶏飼を描ける上に、蕪村の書いたものであるさうだから、普通の書簡とは見られないが、便宜こゝに掲げる。)

柳女・賀瑞宛　(攝津池田　稲束孟氏藏)

みじか夜やさゞらなみよる捨篝
けしの花籬すべくもあらぬ哉
落合て音なくなれる清水哉
夕風や水青鷺の脛を打
花茨故郷の道に似たるかな
垣越て蟇の避行かやり哉
目に嬉し戀君の扇眞白なる

其外五七句有レ之候へども、おもひ出かね候。社中の發句帳には留有レ之候。寛々御めにかけ可レ申候。只此節は風塵御憐察可レ被レ下候。何事も遠ず貴顔御禮可ニ申上一候。已上

五月二日　紫狐庵

柳女様
賀瑞様

賀瑞宛　(伊勢松坂　長谷川氏藏)

先日は預ニ華牘一忝存候。御安全被レ成ニ御暮一珍重存候。爾後雨節御句ども御登せ被レ下、任レ仰引墨いたし御めにかけ申候。右の内宜御句を春帖へめでたく御加入可レ仕候。且御母上様御句共別而おどろき入候。拙老社中に婦人のはいかい無レ之、遺恨に御座候所、此末たのもしく大慶仕候。乍ニ慮外一御母義様へくれ〲宜御申上可レ被レ下候。尚來陽寛々御□可レ被レ下候。頓首

十二月廿九日

御すり物被レ成候ニ付追加の句、即左にしるし候。

行年や都の隅に小町寺　蕪村

尚〲拙老方へ御入門ニ付、御挨拶の御句是又忝存候。取

込候故御わきもいたしかね候。

賀瑞様

兩節表具は落手仕候。

暮雨宛　（大阪　竹原友三郎氏藏）

聖春の嘉瑞不レ可レ有ニ盡期一申收候。先以貴叟御安寧被レ成ニ御迎陽一珍重の至に存候。愚老無爲重ニ馬齢一候。まことニ舊臘は預ニ御懇書一、ことにこのわた一器、例よりはおびたゞしく御惠被レ下、けしからぬ美味、社中の酒徒へも少々づゝ(わ)あかち候而、いづれもよろこび申事ニ御座候。早速御禮旁々御起居御尋も可ニ申上一候處、とかく多用、意外の御無音御照察所レ希候。

一愚老春興の小冊おもひ付申候。どふぞ御句早く御登せ被レ下度候。士朗子・宰馬氏・牛窗子、一所に御登せ被レ下候様に御下知可レ被レ下候。右の三子、貴叟より被ニ仰達一可レ被レ下候。愚妻、むすめも無事加年仕候。くれ〴〵御傳言申上候。

先ッ年始の祝詞申上たく如レ此御座候。餘は期ニ永日一候。頓首

正月十四日　　蕪村

暮雨主盟

うぐひすのわするゝばかり引音哉

加茂の堤は、むかし文祿のころ防河使に命ぜられて、あらたにきづかれたり。さてこそ桃花水の愁もなくて、庶民安堵のおもひをなせり。

加茂堤太閤様のすみれかな

うぐひすや茨くゞりて高う飛

いづれもおかしからぬ句なれど書付候。

士朗宛　（伊勢山田　久保田初藏氏藏）

其後はうと〳〵しく罷過候。いよ〳〵御安全被レ成ニ御坐一めでたく被レ存候。まことに先頃暮雨子上京之節は、何よりの品被レ掛ニ貴意一、御懇情かたじけなく被レ存候。菴中日來不足の物にて、一入大慶仕候。暮雨叟御歸國の節、右御禮書狀さし出可レ申存候所、暮雨氏急ニ御歸國ニ而、愚老へは御さたなしに御くだり候に付むなしく打過候。其

後早速書中を以、可ㇾ得ニ貴意ニ存候内、何箇と塵用意外の御無音、且御憐察可ㇾ被ㇾ下候。相變事無ㇾ之ゆへども、右の御禮又御起居もいかゞと、艸々如ㇾ此御座候。御社友のこらずよろしく御致聲可ㇾ被ㇾ下候。別而都貢子・宰馬子など、宜御同前に御つたへ可ㇾ被ㇾ下候。余は期ニ再鴻之時一候。頓首

五月二日　蕪村

士朗様

ほとゝぎす待や都のそらだのめ

右の句は京の實景、愚老京住二十有餘年、杜鵑を聞こと纔に兩度。

又

ちりて後俤にたつぼたむ哉

牡丹切て氣のおとろひし夕哉

みじか夜や淺井に柿の花を汲ム

――や曉早き京はづれ

四明山下の古寺にあそぶ

山人は人かんこ鳥は鳥也けり

いづれもおかしからぬ句どもながら、筆序ニ書付候。貴句御便りうけ給りたく不ㇾ堪ニ鳴望一候。

菱田平右衛門宛　（攝津芦屋　菱田是佛氏藏）

寒冷相催候處、彌御無恙めでたく存候。愚老かはらず候。しかれば先達は預ニ御書通一、ことに入門御しうぎとして方金一塊、かたじけなく致ニ受領一候。其節御ホ句も御書付、御のぼせ候歟と覺申候。ホ句はいづれも甚面白うけ給り候。其節直ニ御返事申候や、いまだしや、しかと覺ず候。もしいまだ御返書も不ㇾ致候へば、疎懶の至御免可ㇾ被ㇾ下候。右、おぼつかなく候故、態々かくのごとくニ候。塵用多々艸々不備。

十一月五日　與謝蕪村

さゝ山

菱田平右衛門様

季由宛　（攝津芦屋　菱田是佛氏藏）

寒中御無爲御くらし被ㇾ成目出度存候。愚老かはらずしのぎ罷在候。御安意可ㇾ被ㇾ下候。先日は預ニ朶雲一辱被ㇾ存

候。飛脚いそぎ候に付、早速御返事も不レ申候。
一牛行集も中〳〵急には出板いたさず候。來年中寛々と御工案の句、御登せ可レ被レ下候。古好・青荷の兩子へも其段被ニ仰傳一可レ被レ下候。
御ホ句二句ともに今少し心ゆかず候。御案可レ被レ成候。最早年祟せまり候故、來陽ならではと申殘候。切角寒氣御しのぎ可レ被レ成候。かしこ

十二月十八日　夜半

季由様

おもふこと有て
雪を踏て熊野詣のめのと哉
のり合に渡唐の僧や冬の月
手拭も豆腐も氷る横川哉
右いづれもあしき句なれど書付候。

季由宛　（攝津芦屋　菱田是佛氏藏）

表徳
馭雪　珍十　片帆　社米　屛波　冠雪
陸尹　老鷺　阿啓　美井　茶僕　橘郎
菊老　樗六　豈雪　閑府　黒尹　史金
千倫　八菊　段水　印路　老芋　閑吏
暮蓼

右の内暮蓼といふ名、さび有ておもしろく候。上手に御なり被レ成候而は、別而よき名ニテ候故、相極く清書可レ致と存候。しかし思召次第早々御申越可レ被レ成候。芪堂子とも御相だん可レ成候。以上

二月六日　蕪村

季由様

暮蓼宛　（攝津芦屋　菱田是佛氏藏）

御安全めでたく存候。愚も無爲にくらし居申候。暮蓼いかにもよき名珍重に御座候。名がよく候間御出精可レ被レ成候。御句どもことの外よろしく候。添削いたし御めにかけ申候。
一すり物今日摺候て見せに參り候。甚よろしく出來、於ニ愚老一大慶の至に候。近日のこらず出來相下可レ申候。大奉書三帖すらせ申候。貴境へはいかほど下シ可レ申候や、先づ一帖相下シ可レ申候。京師並田舍おびたゞしく

配り候故、此方へは多くほしく候。御返書被ニ仰聞ニ可レ被レ下候。古貢子よろしく御傳可レ被レ下候。
大取込中早々。以上
二月十五日　夜半
暮蓼様

東瓦宛　（攝津池田　稻束猛氏藏）

御紙面のおもむきいさゐ承知、則御句共すり物に御出し被レ成候はゞ、○印の分よろしく候。
又美酒一樽御をくり被レ下かたじけなく、ちよこ〳〵おめぐみ被レ下候樣にと、已來たのしみ申事に御座候。樽此たび御返却いたし候、御受取可レ被レ下候。
一すり物追加の句、左に書付候。
鷹が峰に遊びて樵夫の家にやどる
寒山に木を伐て乾鮭を烹る　夜半翁
右の句ことば書共に、とくと御清書被レ成、御加入可レ被レ下レ成候。
十一月二十八日
東瓦様　夜半

すり物進申候。すり物たび〳〵おびたゞしく出候へども、たちまち配り仕舞候て、一枚も無レ之候。やう〳〵此一枚有合候故、進申候。

東瓦宛　（攝津池田　稻束孟氏藏）

二白、先頃奥州ノ行脚橋居房といふもの御尋候よし、愚亭はもちろん、几董・百池・月居・嘯山・五雲、其外所々尋參候。我等方も早々追立申候。此のものはかたり者に而候間、かさねて共御地などへ參候ても、必々御取合被レ成候事御無用に候。とかく行脚の俳諧師は、いづれも油斷のならぬもの斗に候間、たとへ名をば聞及び被レ成候者にても、御出合はかならず御無用に候。もちろん誰〳〵と世に呼るゝものも、組合テはいかいをいたし見申候に、いづれも皆赤下手ニテ候。虚名の徒にて取に足らぬ者斗に候。穴かしこ、御油斷有べからず候。以上
十月廿七日
すりこ木で重箱を洗ふがごとく
せよとは、政の嚴刻なるをいま
しめ給ふ、かしこき御代の春に

逢ふて

すみ／＼にのこる寒さやうめの花

夜半

東瓦様

（晋風曰、此の書翰は東瓦の遺子老橘井、扇面に板行し、「蕪村翁より亡父への文を懐舊のあまり寫しとり、好士のかた／＼へ贈り參らすとて、もしほ草其世の春ぞなつかしき　老橘井」とあると、頴原氏の註にある。私も稻束氏の許にて一覽したようにてよくは覺えず。）

士川・士巧・士喬宛　（攝津大石　松岡又左衞門氏藏）

月居　夜半亭の門人、俳諧の好士也。

芦人　西本願寺勤仕の士也。

右の兩人日ごろ中よき友ニて、折々相會して俳談す。或日、月居諸國の句を芦人に物がたりす。それが中に

篝してくらき鵜飼がうしろかな

芦人此句を聞て、扨もおもしろき句哉と嘆美す。月居云、さもこそ是は千句の卷頭に蕪叟が選出せる句なり。抑長き迷闇はいふもさら也。現世より鵜飼の翁が身ニ立添て、やがて脊中にせまり來る未來の闇路、まことに無常迅速の理りをもしらざるいとなみ、感慨いふばかりなしとて、蕪叟が秀逸にふらび出せる也と、ものがたりしければ、芦人手を打て、さてこそと嘆美し、おのれもかしこく聞得たりと、其夜の俳談は此句に盡て、おの／＼退散しけるとぞ。其後程經て、西御門主、近侍あまた集められ、四方山の御物語有ける序、右の句を御ものがたり申上ヶければ、御門主うち返し／＼御吟詠まし／＼、扨々もおもしろき句哉、いと尊し。此作者さうなき佛者なるべしと御賞嘆有て、やがて近侍の祐筆に命ぜられ、此句を記錄にとゞむべしとの御意也けるとぞ。

右のおもむき芦人、早速月居方へまいりて物がたりのよし也。されば愚老も宗門の事ニ候故、ことに有がたく、且〻選者の面目にも備へ候て落涙いたすばかりニ候。扨此たび大魯ニとくと承り候へば、士喬子の御句也と申事ニ候。おもひもよらぬ珍説に候故、書記御なぐさみニ御めニかけ候。

蕪村

士川様
士巧様
士喬様

騏道宛　（近江大津　村田利兵衛氏藏）

秋冷相催候へども、御安康御くらし被レ成奉二珍重一候。大雅堂書幅鑑定左の通也。

般若　山水

是ハ疑クハ贋作と相見え候。甚よく似せたる物ニ候。大雅社中の内、ことの外よく贋物をいたす（者）有レ之よし傳承候。恐クハそのもの歟。

行到水窮處

右ハ眞筆ニ候へども、其不出來成物ニテ候。

中秋貴境へ可レ參と心がけ候所、例のゝら共ニおだてられ、埒もなき月見いたし遺恨ニ候。御句おもしろく、拙作此せつ多用ニ付不レ得候。尚あとゟ寛々可二申承一候。取込草々以上。

八月廿日

良夜

さくらなきもろこしかけてけふの月

きぬ地山水の義先ッ相心得候、どふぞ不日ニ揮毫いたし可レ申候。其外も當年中ニハ不レ殘落成、しばらく御待可レ被レ下候。

騏道樣　　蕪村

青荷宛　（夜半翁蕪村遺稿所載）

いかい事句は有シ之候へども、おもひ出しがたく候。しかれば此たびは獨吟歌仙御登せ被レ下、早速引墨いたし相下可レ申候處、今明日は祇園會にて來客有レ之、ことの外の（紛）扮擾御察可レ被レ下候。あとの便りに下可レ申候間、飛脚被二仰付一御寄可レ被レ下候。

手燭して鮓うかがふや今朝の雨

下五猶有べく候。燭してうかがふ有さまは、いまだ明やらぬ夜ふかの雨にて可レ有レ之候。今朝としても、明やらぬ氣色あれども、どふやらしら〳〵と明たるおもむきにて候。さればいさゝか遺恨に候。今一練可レ被レ成候。

手燭してすしうかゞはん夙に起きて

かくのごとくいたして可レ然歟。此鮓の主人はよほど洒落成人物と相見え候。つとに起てといふにて其人の風流もしられ候歟。尚いくたびも〳〵御工案可レ被レ成候。李滄溟が詩をねりたる樣に有たく候。しかし餘り案入候も

あしく候。はいかいは間に髮を入れずと言教も有レ之候。又、李白が不用意、まこと、はいかいの確言にて候。今日は大取込草々御返事かくのごとく候。書餘重便。以上

六月七日　　　　夜半

青荷子

山肆宛　（夜半翁蕪村遺稿所載）

剛寒の節、御安寧被レ成ニ御凌一奉レ賀候。愚老義先頃よりとかく不快にて甚こまり罷在候。漸、昨今者起出候躰ニ而候。惡寒の心地耐がたく閉藏いたし、生を養ひ暮申候。老病の事と被レ存候。併黃泉の客と成候事は露も無レ之候。被レ安ニ懸念一可レ被レ下候。

一月並發句合、愚評則飛脚へ差遣候。病中ゆへ僻考の段も御社中へ御傳達可レ被レ下候。

一伏水宗匠家より御賴れの由、愚句加入の事本望の至に候。則書付進申候。當冬者多病故春帖も相休み候程の事故、一向發句も無レ之候。よろしく被ニ仰達一可レ被レ下候。愚老句御加入被レ下候とも、京師の宗匠家同例に御加入被レ下義は御容捨願入候。別に御出被レ下候義に候はゞ、ずいぶん忝存候。此義能々御申傳可レ被レ下候。餘は期ニ後鴻一候。頓首

正月十四日　　　　蕪村

山肆様

しら梅やいつの頃より垣の外

右の句御加入希候。

山肆宛　（夜半翁蕪村遺稿所載）

寒相募候處、御安全被レ成ニ御暮一めでたく存候。まことに先日御噂の發句合、愚評あふせにまかせ候。元來發句には高點出しがたきものに候へども、世話（マヽ）候ては與少候故おびたゞしく撰び出し候。たま〳〵能句も見へ候へども、とかく作例有レ之候而殘念候。其趣御社中へもとくと御申達所レ希候。

一かけとりの御句おもしろく承候。則愚意書加へ入ニ御覽一候。いづれ成共御極メ可レ然存候。此節多用艸々申のこし候。近々御出京奉レ待候。以上

十月廿八日

山肆様　　蕪村

(夜半翁蕪村遺稿所載)

富葉・山肆宛

剛寒御雨君御安全被レ成ニ御座一めでたく存候。しかれば景物書延引、病氣の事故御免可レ被レ下候。此三枚の內いづれとも能様に御見斗被レ下御配分可レ被レ下候。第二の景物は直々當地にて蕉雨へ相渡候。

一兩節の御句ども、又々さし替候義いさゐ被ニ仰聞一相心得申候。此節病後雜用さしつどひ艸々如レ此御座候。餘光漸々來場、めでたく可レ得ニ御意一候。

蕪村

すゝはきや調度すくなき家は誰

富葉様
山肆様

玄圃宛　(河東碧梧桐氏所報)

爾來御疎遠相過(イニ打過)候。彌御安全被レ成ニ御座一、奉ニ珍重一候。拙明日出足候。まことに滯留中は別而御懇意實に舊相識、何とぞ今一度接席仕候而、寛々御いとま乞も可レ仕存候所、そのことなく、もはや今明日計の讃州と存候得ば、山川雲物共にあはれを催申候事に御座候。兎角京師より寛々可レ得ニ貴意一候。

君義子へ此度書狀上可レ申所、此先生へは書を添進上可レ仕と存候所、歸京ニ付雜用紛々、其上何角と懷ニ憂患一事のみ多候故、不レ堪ニ揮毫一、これも所詮京より寛々可レ得ニ貴意一候。此だん別而能、君義子へ御申傳可レ被レ下候。其外(イニ外)々下屋御親子・久保先生・玄中君・移山子、御家内のこらず宜御致聲可レ被レ下候。めつたにいそがしく草々申上候。以上

卯月廿二日　蕪村

玄圃君

二白留別之卒吟御めにかけ候。これらも心中おだやかならず、雅懷蕭條、御垂聽可被レ下候。以上

(晋風曰、此の書簡は乾氏の『蕪村と其周圍』にも載せられ、それには龍野溪井彌兵衞氏藏と紹介してある。)

陸船宛　(河東碧梧桐氏所報)

爾來御疎遠罷過候處、貴簡かたじけなく拜覽、先以日々寒冷相募候へども、御家内無二御殘一御壯健被レ成二御暮一奉二恭喜一候。愚老無爲、家内のものどもゝかはらずくらし罷有候間、御安慮可レ被レ下候。

一探幽かけ物二幅、御登せ被レ成、則鑒定左のごとくに御座候。

からす　探幽齋筆

はと　是は法眼時代也

右いかにも眞筆にて御座候。書付も甚よろしく御座候。

一愚老も段々としより候て、とかく筆をとり候事ものうく相成候而、書畫ともに怠りがちにくらし申候。それ故に諸方の書音もおのづから等閑に罷成、御ぶさたのみ相過候。御憐察可レ被レ下候。乍二筆末一御令内樣・御令愛樣がたへもよく〳〵御傳可レ被レ下候。自分妻・むすめもくれ〴〵御傳言申上候。餘は期二後鴻一。以上

十月十五日　蕪村

陸船樣

楚秋宛　（京都　小林雨郊氏藏）

御疎遠相過候。彌御安康被レ成二御暮一珍重被レ存候。しかれば畫帖一覽いたし申候。一蝶・見龍と申は大うそのかは二而候。一向やくに立ぬ赤下手之畫二て候。もちろん書も見龍二てはなく候。代金壹歩位ならば御求置可レ被レ成候。一蝶の贋にても、一蝶流ニ書キ候ならば、せめて尤とも被レ存候。此畫ハ一蝶の筆意もしらぬ下手くその畫二て候目も當られぬ物二候。御もとめ被レ成候義決而御無用候。

一此間妻・むすめ御見舞申上候所、つくり物抔御案内成被レ下候よし、かたじけながり申候。御内政樣へもよろしく御禮被レ仰可レ被レ下候。尙期二貴面一候。以上

八月廿日　蕪村

楚秋樣

向桃宛　（攝津池田　稻束猛氏藏）

いまだ不レ得二拜面一候處、預華懷□致候。蕉誦さてもさむき事どもに存候へども、御壯健おくらし被レ成めでたく存候。しかればは奉納句合愚考の義、いさゐ承知いたし候。しかし當月七日頃までに點落成いたし候樣にと御申越被レ下候へ共、最早及二老年一

根氣も薄く、其上謡と俳と諸方せめられ、一向不レ得ニ閑暇一候。右の體ゆへ中〳〵七日頃には出點いたしがたく候、どうぞ中旬迠御待可レ被レ下候。且出點御案内申候はゞ、直に御上京可レ被レ成旨被ニ仰越一、それは以の外費なる事に御座候。かならず〳〵御無用に御座候。時下短景、御互に寸陰ヲ爭ひ候節に候故、是は決而御無用に可レ被レ成候。春に至り候はゞ、愚老も下坂いたし候故、御尋申候而寛々可レ得ニ芳慮一候。先、日限御斷りのため、あら〳〵かくのごとくに候。以上

七月三日　夜半

向桃樣

愚老も永々の不例、はいかいも怠り、發句も得不レ申候。

絕々の雲しのびずよはつしぐれ

息杖に石の火を見る枯野哉

佛心子宛　（京都　藤井紫影氏藏）

一蕉翁碑銘摺一枚相下申候。是はとく出來いたし候而、洛東ニ石碑を建申候。則右の碑正面ニ打碑いたし候ものにて候。文章は淸絢先生、書は永田俊平也。右の石ずりは道立子より足下へ牛房の謝恩ニ遣被レ申候筈ニ御ざ候き。いまだニ候や。それ故先づ愚老ゟ一枚進申候。

さても〳〵いそがしく候て、中〳〵發句も無レ之候。あとよりくわしく。かしこ

二月廿一日　夜半

佛心子

低い樹に鶯啼や晝下り

紅梅や黄梅とまる第三枝

おかしからず候へども書付候。

一當春帖は相休申候而、さくらのすり物出申候。貴句も加入いたし度候。少々高直に付候摺物故、社中へ費刻料余ほどかゝり申候。御望ニ候や、いかゞ〳〵。

駿河守宛　（京都　伊藤伊三郎氏藏）

御平安奉レ賀候。扨も御借や立花や九兵衛へ御かし被レ遣候事、深よろこび申候。俄ニ昨日九兵衛髪をおろし候而、梅亭と呼申候、何分其御披露可レ被レ下候。昨日法體の砌

やすき身を先知れ蚊帳の出入より

といひ遣し候。貴君にも一句御悦び遣し可レ被レ下候。名前改之事申上度、且何角御禮迠早々。頓首

卯月十日

駿河守宛

用書　　與謝蕪村

無名宛　（京都　田中王城氏藏）

金子入書狀、右はさゝ山ひし田平右衞門殿ゟ慥落手いたし、あとより返書相下可レ申候。爲レ念如レ此候。以上

十月十七日　　與謝蕪村

百池宛　（京都　寺村助右衞門氏藏）

其一

あふせのごとく昨宵はおもひよらぬ御馳走、佳興不レ斜、さては赤みそ御めぐみ被レ下、かたじけなく候。

一了爾樣ゟ一尊御をくり被レ下、別而辱、寒夜をしのぎ可レ申とたのしび申事ニ御座候。よろしく御禮あふせられ可レ被レ下候。取込艸々近日貴面御禮可ニ申上一候。以上

十月廿七　　夜半

百池樣

其二

昨日は御馳走忝存候。御大客ニ而御勞れ察入申候。扨明日あたり西の戲場、千兩のぼり見物ニ參可レ申と存、棧敷は眠獅ゟもらひ候故靑田也。只喰物之雜用斗也。雲羅・愚老・キ子三人にて可レ參哉と申合候。御同心ニ御座候ハゞ御返書相待申候。しかしいまだ眠獅かたへも不ニ申遣一候。御同心ならばとくと相極メ又々御案內可レ致候。かねて左樣に御心得。以上

六月十五日　　夜半

百池樣

其三

上巳の御祝儀白銀一封、不ニ相變一致ニ祝納一候。いづれ拜面御禮可ニ申謝一候。以上

三月朔

二白　此銀封の上書は御母堂樣之御手跡ニて候。ケ樣の事御兩親樣の御心遣ひニ被レ成候事は甚いたみ入候。向後貴子御一存に而御取斗意可レ被レ成候。

百池樣　　夜半

其四

うつ〱しき雨ニて御座候。いよ〱無爲めでたく被レ存候。來十五日月並會回章早々御達可レ被レ下候。

一昨日御出被レ成候ハヽ、鳥、扨も見事成物にて、いづれも驚嘆いたされ候。御重寶珍重被レ存候。丁爾樣へもよろしく被レ仰可レ被レ下候。御閑暇ニ候はゞちと御入來所レ希候。以上

四月十日

百池樣　　夜半

其五

夜前ハ早々。しかれば今日大町へ御出可レ被レ成段、則愚老手紙したゝめ上申候。御披見の上御持參可レ被レ成候。夜前も申候通、御病氣の義ハ一大事の義ニ御座候故、醫者ノ御すゝめ申事ハいやなるものニ御座候。當時、なら林と□□子ハ名家の事ニ候故、やはりなら林ニ成共被レ成可レ然被レ存候。何分今一應御そうだん被レ成可レ然候。是非今日中ニ醫者ニかゝらずとも、苦しからぬ御病氣ニ候故、猶、田ぶく樣などへ今日御出會の上御相談被レ成、とくと御了簡御定め被レ成候而之上可レ然御ざ候。しかれ共先々大町への手紙ハしたゝめ遣申候。餘ハ拜面ニ御物がたり。以上

九月十三日

尙々御兩親樣へも宜敷被レ仰可レ被レ下候。

百池樣　　夜半

其六

寒氣御さはりなく御暮めでたく存候。尾への便御句、則引墨いたし遣申候。尾へ御ふみのはしニ愚老言傳も、くれぐれよろしく御遣可レ被レ下候。暮雨らこのわたおびたゞしくめぐまれ候。右の答等ともいたし度候へども、此節大取込寛々返書遣可レ申と存候。先ッ貴子らよろしく被ニ仰遣一可レ被レ下候。何事も貴面。以上

十二月四日

百池樣　　夜半

其七

歲末御祝義不ニ相變一かたじけなく致ニ祝納一候。並ニ月棒(俸)是又御やつかいの至ニ被レ存候。夜前ハ御尋被レ下不レ淺存候。今日は少々こゝろよく御安意、何角御心を御付候て御尋被レ下、御親情わすれず候。何事も貴面御禮可ニ申述一候。已上

廿一日

大來堂主人　　夜半

其八

御書面のおもむき、いさゐ承知いたし申候。御隱居樣へもよろしく被レ仰可レ被レ下候。何事も御めにかゝり得ニ御意一候。取込艸々以上

八月十三日

□落手　　夜半

百池樣

其九

一昨日者得ニ寛話一大慶之至ニ御座候。しかれバ貴家へむけ參候樣ニと、御書面かたじけなく候へども、愚老いまだ町内の禮ニも不レ出、長髮の體候故遠慮ニ候故御斷申候。甚殘念ニ候。明日あたりハ町内へ可レ出候。其後ハいづかたへ成共御同携所レ希候。以上

正月三鳥

二白、みのむしの一軸小童へ相渡候。

百池先生　　夜半

其十

句帖取ニ被レ遣候。則小童へ附候。さりとハせハしき事ニ御座候。此方ニ有之候而もくるしからぬ事ニ御座候。おなごの腐ッたやうニ、せハしく取ニハおこさぬものニて候。二三日の內又ゝ入用ニ御ざ候間、御かし可レ被レ下候。何時ニても又かしてやろと昨日の御手紙候故、ぜひ二三日中ニ被レ遣可レ被レ下候。さりとハ〳〵やくに立ぬ、どこんじやうの百池成かな。アヽ

卯月廿六日　　善智識ゟ

くされおやぢめ

其十一

寒氣しきり候へども御無恙珍重の御事ニ候。愚老少々腹あしく、其一婢病氣ニ付宿へ下り候而、ことの外こまり申躰ニて候。それ故几董會もはづれ候。探題おびたゞしく、いづれもめでたく承候。御自愛可レ被レ成候。尼へ被レ遣候ても恥しからず候。

一名書苑則小童ニ附候。かたじけなく候。一婢も全快もどり候ハヾ御見舞可レ致候。ちと寒ッとも生下あたりへ徘

徊いたし度物ニ御座候。取込草々。已上

霜月廿二日　夜半

百池サマ

其十二

重九の御祝義白銀一封、不ニ相變一厚致ニ祝納一候。並ニ定連料落手、扨愚亭會も段々怠り候而きのどくニ候。節後ニハ早々於ニ雪樓ニ一會相催可レ申と存候。

一佳文すり物のおもひ立、一段可レ然事ニ御ざ候。とかく御めニかゝり御そうだん可レ申候。取込早々。以上

九月七日　夜半

百池様

其十三

御町内やかましき事出來、御心遣之事ニ御座候。

一さくらの句いづれも評を加へ候。

昨日田ぶく子も御上京ニ而、夜前ハ四ッ過迄咄し草臥艸々御返事。以上

夜半

百池様

其十四

一昨日者御出席かたじけなく候。しぐれの御發句、餘り秀逸も見えず候。引墨の句ども大ていニて候。御用ひ可レ被レ成候。

一今宵暮時より參上可レ得ニ御意一候。御隱居様へもよろしく御申可レ被レ下候。以上

正月十四日　夜半

百池様

其十五

御腫物いかゞや御ゆかしく存候。しかれば金福寺回章御順達可レ被レ下候。○浪花の九序とぢもの御達申候。自笑へも御とゞけ可レ被レ下候。名古屋金屏風の事、隨分承知いたし居申候。何事も拜面と申殘候。以上

九月廿六日　夜半

百池様

其十六

よし野行御遠慮御尤ニ御座候。御發句愚意書付候。いづ

れもよろしからず候。只一句取べき物有レ之候。しかれ共尾州代ゟ物ニては無ニ御座一候。一両日中に罷越可レ得ニ御意一候。以上

二月十二日　夜半

百池様

其十七

扨も寒き事ニ御座候。彌御無恙めでたく存候。爾者芦陰集並すり物御屆申候。昨日は几董かた景物會、貴句出不レ申候事几董も殘念がり申候。愚老も手柄いたし罷歸候。連中卅人斗會合ニ而にぎ〱しき事に候ヰ。

十一月廿二日　夜半

百池様

其十八

か仙花引墨の内ニ而、いづれ成とも自選に可レ被レ成候。

一すり物畫御使へ附候。餘へ期ニ晤言一候。以上

□月□日　蕪

百サマ

其十九

昨日は春夜御同伴にて花頂へ御登山のよし、うら山しく存候。愚老いまだ風邪よろしからず。殘念の事に御ざ候。御句共加筆いたし候。とくと御考可レ被レ成候。いかさま又近日ニ御同携所レ希候。以上

十月十九日　夜半

大來主人

其二十

上巳御祝義、且定連不ニ相變一忝致ニ受納一候。御事多中御丁寧之至、尙御禮ハ期ニ面晤一候。以上

三月朔日　蕪村

百池様

其二十一

今日ハ骨にこたへ候寒サ、御壯健めでたく存候。しかれば寒中御尋として鳥五羽御めぐみ被レ下、御厚情かたじけなく候。御めニかゝり候て御禮可ニ申述一候。取込艸々以上。

臘月十日

尙々かけ物名印いまだ不レ致候。明日□

大來主人　謝老

其二十二

御物遠ニ御座候。中元御しうぎ南鐐一片忝致ニ受納一候。外ニ月並料、花鳥編入料たしかに落手いたし候。扨〳〵花鳥編不寄にて愚老損毛御察可レ被レ下候。

一雪樓の書付承知いたし候。此方ゟ遣可レ申候。何事も盆中に得ニ御意一候。取込匆々。以上

七月十一日　　夜御

百池様

其二十三

此ほどてうちん御恩借、早速御返可レ申候所、昨日は家内の者共連レ候て野外逍遙いたし、夜ニ入歸庵、延引御免可レ被レ下候。今日もけしからぬ快天うつ〳〵と在宿ハ毒ニて候。花頂あたり夕櫻御見物、御同心ニ候はゞ御同携可レ致候。御趣うけ給はりたく候。以上

百池様　　夜半

其二十四

此間者御物遠ニ御座候。御安全被レ成ニ御暮ハ、めでたく存候。しかれバ少々得ニ御意一御物がたり申度義御ざ候間、□□□ちよと御越被レ下度候。何も御氣遣成筋ニハ無レ之候へども、御賢慮をかり申度義御座候。いさゐハ御めニかゝり可ニ申述一候。以上。

二月廿八日

百池様　　夜半

其二十五

みな〳〵御出席に而、いづれも貴子の御出を相待被レ申候。御用候共今日ハ早ク只今御出所希候。以上

九日　　雪居御誘引

百池様　　用書　　夜半

其二十六

御神事ニハ御馳走かたじけなく候。打つゞきはげしき暑ニて候。御安全めでたく被レ存候。且御書面のおもむき承知いたし候。どふぞ御めニかゝりたき物ニ候。何事も貴面。以上

六月廿一日

百池様　　　　蕪村

其二十七

寒氣甚しく候。いかゞ御暮候や。昨夜田ぶく子・雲羅坊見え候而、夜すがら清談いたし居申候。御出ならばか仙成共可ㇾ致物を殘念〱。

月の句引墨いたし候。愚句ハ無ㇾ之、口惜き次第ニ候。何事も貴面と申殘候。以上

十六日　　蕪沙彌

阿樹老和尚

其二十八

けしからぬ御草臥のよし、さてもあさましき事ニ候。愚老などは今日も韋佗天のごとくに候○幻住の雨子、貴家へ御入のよし、よろしく〱御申傳可ㇾ被ㇾ下候。晩ほど愚亭へ御出も可ㇾ有ニ御座ㇾとの御事、是ハしばらく御容舍可ㇾ被ㇾ下候。韋佗天と申たは實ハ大ナルいつはり、中〱今日などは人ニ對して物も云ハれぬ體にて候。切角御來候ても、只欠びの外御馳走も無ㇾ之候。此旨雨公へくれ〲御達可ㇾ被ㇾ下候。もしや雨子御歸りニ候ハヾ此手がみ早々御屆可ㇾ被ㇾ下候。何事も御めにかゝり御物語と申殘候。以上。

大來堂主人　　蕪村

其二十九

明日の金福雨と相見え候。雨天にてはとても老足及びがたく候。どふぞ三本木の出張迄成ともまいり申度候。しかし三本木は何と申所へ向ヶまいることにや、いづゝ屋とほのかにうけ給り候。いよ〱左様歟、ちよと御聞セ可ㇾ被ㇾ下候。

一第三、後ほど取ニ可ㇾ被ㇾ下候。其節三本木の樓名御書付被ㇾ成可ㇾ被ㇾ下候。今日ハ家内の者共紛者のだてニ而、しばるへ罷こし、愚老一人俊寛已來あはれ御推量可ㇾ被ㇾ下候。かゝる時節ニ天よりふれかしと願事ニ候。以上。

百池様　　夜半

其三十

月居ハ所詮在宿いたすまじく候。

當節めでたく存候。扨もきびしき雨にてこまりはて申候。しかれば暮雨夜前御上京のよし、めでたく宜御心得可ㇾ被ㇾ下候。愚老少々腹のあんばいあしく候て引こもり居申

候。それ故早速御訪ひも不ㇾ致候。先以、双林精舍において法會御執行のよし、いさゐ承知いたし候。尙御めニかゝり、とくと調ジ合セ申たき物ニ候。以上

三月三日

月居方への手がみ相違可ㇾ申候。

百池様　　夜半

其三十一

此ほどはおもひよらぬ佳興、しかしう雪ハ暮雨の奥山と相しられ候。

一付廻しとくと見候て付可ㇾ申候〇津輕への卷落手〇扨々何やかやいそがしき事絶ニ言語一候。晩あたりハちよと御見舞可ㇾ申候。圓山の事などもとくと相談仕たき事ニ候。以上

三月十日

百池足下　　夜半

其三十二

彌御安靜めでたく存候。しかれバ暮雨ゟたのみのふすまの書、いそぎのもの故出來有ㇾ之候。貴家ゟ早速御下し可ㇾ被ㇾ下候。暮雨のたのみ故此節甚多用ニ候へども、外をさし置したゝめ候。切角出來いたし候物、延引ニ及候而ハ本意なく候。御察可ㇾ被ㇾ下候。其外御めニかゝり御ものがたり。以上

さかい屋三右衛門様　　夜半

無宛名　（京都　寺村助右衛門氏藏）

其一

華牘かたじけなく候。愚いまだとくと無ㇾ之候。されども東山遊びぐらひは、いとやすき事ニ御座候。扨、雲樓御誘引のおもむき、かたじけなく候。しかし雪のいやみは、此節病氣ニさはり候ゆへ御斷申候。もし外ならば御同携可ㇾ致候。雪は風上ニもいやニて候。以上

十月廿四日

其二

一昨夜はけしからぬ御馳走、近來の欝散不ㇾ堪ニ大慶一候。早速御禮ニ罷越可ㇾ申候處甚取込延引、よろしく御兩親様へも被ㇾ仰可ㇾ被ㇾ下候。且御てうちん返却候。御落手可ㇾ被ㇾ下候。何事も貴顔御禮可ニ申上一候。以上

二月廿九日

尙々今日ハ屛構定而御出席と存候。愚老も是非罷こし可レ申候。其砌可レ得ニ芳言一候。已上。

其　三

浪花ゟ御歸り被レ成候よし、御無恙珍重被レ存候。しかれば御細書のおもむき至極御尤の御事ニ候。しばらく絶誹可レ然候。其外の遊興御つゝしみ第一ニ御座候。何事も御めニかゝり候節御物がたり。以上

蕪　村

其　四

數句いづれもおもしろからず候。中にも古ざれ、酒に泣、右二句はよほど洒落ニ候。餘は取ニたらず候。猶御工案可レ被レ成候。良夜の句御尋ニ預り候。中〳〵得がたく候。以上

八月十八日

其　五

御平安御しのぎ被レ成候而めでたく存候。しかれば佳棠より、もゝすもゝ本料御達被レ下落手いたし候。御出會のせつよろしく被レ仰可レ被レ下候。御句おびたゞしき事ニ御座候。されども秀逸は見へず候。

一愚老又々例の腹瀉にてこまりはて申候。それ故寒中の御尋も不ニ申上一候。御兩親樣へもよろしく御申上可レ被レ下候。取込艸々。

廿二日

其　六

殘暑甚候へ共、彌御安靜めでたく候。しかれば尾硲より拙畵御謝義として方金三百疋辱落手いたし候。御使の節よろしく御禮被ニ仰達一可レ被レ下候。此節紛擾艸々及ニ御答一候。以上

七月廿四日

其　七

御細書いさゐ承知、いづゝ屋へ向ヶ罷こし可レ申候。第三ハ先刻几董ゟ取ニ參候故付テ遣申候。

一兩吟か仙うらうつり、明日迄御待可レ被下レ候。以上。

三月廿二日

尙々明日金ぷく、どふぞ御同道いたし度候。されども不ニ

相知レ候。御待被レ成義ハ御無用也。

了　爾　宛　　（京都　寺村助右衛門氏藏）

此程者吉辰ニ付、御薙髮無レ滯目出度御事ニ被レ存候。まことニ人間の本懷此上も無ニ御座一御義、御幸福の程御滿悅被レ察候。且御よろこびの御重の內被ニ贈下一御厚情忝、みな〳〵あやかり申上候樣ニ相寄、祝申候事御座候。隨而薄義の至ニ御座候へ共、御祝賀申上候印迄ニ此二品進上仕候。御笑納被下候ハヽ本望の至ニ被レ存候。猶期ニ拜顏之時一。已上

春　日　　　　　　蕪　村

了　爾　樣

其　二

彌御安寧被レ成ニ御座一恭喜至極被レ存候。しかれば昨日御薙髮の御祝詞申上候印迄、いさゝか成品呈上仕候處、御丁寧の御禮被ニ仰下一又其上ニ兩種被ニ贈下一扨々忝仕合被レ存候。かゝる目出たき御事ハ年中ニ百度も有せたきものニ御座候。愚も早速御よろこびニ參上可レ仕候處、此間ハ□□すぐれ不レ申候ニ付、他行成がたく意外の御ぶさた、失禮の段御免可レ被レ下候。いか樣今晚あたりちよと御祝義ニ參上仕可レ申候。余拜顏之節。頓首

了　爾　樣　　　　　　蕪　村

雪　居　宛　　（京都　寺村助右衛門氏藏）

おびたゞしき御發句とくと相考可レ申候。併只今ハ用事取かゝり不レ能ニ卽考一、一兩日中又々御人可レ被レ遣候。愚老とかく手足しびれ候而揮毫心ニ應ぜす、扨〳〵こまりはて申候。何事も拜眉と申殘候。以上

九月廿四日

二白　百池へもよろしく御傳可レ被レ下候。秋天こゝろよく候。ちと何かたへ成共同携いたしたき事ニ候。

雪　居　樣　　　　　　夜　半

佳棠外五人宛　　（京都　寺村助右衛門氏藏）

來ル十日月並會相つとめ申候。午時より御出坐可レ被レ下候。以上

兼題　　後の月

九月三日

佳　棠　樣

如瑟様　御書添ども（註、これは如瑟の筆也と）
楚秋様　奉ニ承知一候
百池様
雪居様
一眞様

尚々如瑟子へ申上候。一差も御同伴可レ被レ成候。

蕪村の手紙

河東碧梧桐氏考證

碧梧桐氏が其の發見した蕪村の書翰に解説を附して、『碧』及び『三昧』に紹介して後、更に收獲した分を大正十五年六・七兩月の『三昧』に『蕪村の手紙』として再び發表した。馬南宛その他合計十八通、孰れも世間未知のもので、潁原氏の特に蒐集に力を傾注した全集の書簡篇にも洩れてゐる。氏の手許にはその後入手された書翰資料はまだ〳〵あるであらうが、此の『蕪村の手紙』だけでも拾遺としての價値は充分であると思ふ。

馬南宛　（名古屋　青木隆之助氏藏）

餘寒甚候所、彌御案榮被レ成ニ御陵（凌）一候半とめでたく存候。愚老無事にくらし申候。御安意可レ被レ下候。

一舊臘は何角御丁寧之至存候。且被ニ仰越一候書ども段々落成次第相下可レ申候。

一音はいかいの論ども被ニ仰越一、貴子の御申の通至極ニ候。人のしらぬ古語古事などを申出候て、人をおどし候事などは以外あしき事ニ候。成ルたけは古事古語を不レ用、平生の事のみを以て句を仕立候事第一ニ候。古語古事を遣ひ候者を上手といたし候て（はゞカ）、物しり達はいづもはいれかいの上手にて可レ有レ之候。一音坊、右の癖有レ之候。甚あしく候。文章などもめつたニ古語を用ひ候却て拙く候。蕉翁の幼（幻）住庵の文、又は奥の細道、其角が類柑子などの文章、萬葉などのぬめりは毛頭無レ之候。はいかいははいかい文と申物有レ之候。此處とく

と勘辨可レ有事ニ候。先發句は

　花の雲鐘は上野か淺草か

　いな妻やきのふは東けふは西

　春の海終日のたり〳〵かな

何れくせなき様ニ御仕立可レ被レ成候。

一かの法師めつたに自負いたし候も、是又あしき事に候。甚人を害い候事ニ候。自負いたさずとても、善惡はおのづからしれる物ニ候。

一舊臘御登セ被レ成候發句、則引墨いたし相下申候。甚おもしろく候間、御出精可レ被レ成候。

一當春帖へ御加入の句、いまだ不レ參候。どふぞ早ク御集御登せ可レ被レ下候。定而春雪深く候而、飛脚遲滯と察入申候。

一家内の者幷ニむすめかたへ、每度御懇意御傳被レ下、甚かたじけながり申候。猶よろしくと申事に候。むすめ琴のけいこニこまり申候。近年は書はかゝせ不レ申候。何やら申上度事共多く、かねて胸中に貯置候へども、言ニ臨み候而はおもひ出がたく候。尚あとより寛々可ニ申承一候。御社中へよろしく御申傳可レ被レ下候。かしく

　正月十八日　　蕪村

　馬南様

几董宛　（大阪　野々村氏藏）

此ほどは伏水の佳境、さぞと相像いたし、御うら山しく存候。

一いなりのすり物もはや彫刻のよし、不レ及ニ是非一。先日之兮草稿御持参草々に見申候所、愚老句のことば書ニ

　しばらく憩ひて花下に榻を下す

とやら有レ之候。此ことば書甚てづゝニ候故、きのどくニ候。卽座ニ其事を之兮子へ可レ申の所、何やら心中に取紛候事有、失念いたし候。もし右の通に彫刻出來候はゞ、暫憩ひて、此所御削可レ被レ下候。只、花下に榻をくだすとばかりニ而よろしく候。必々無ニ御失念一早々橘仙へ御かけ合可レ被レ下御たのみ申候。

一付廻し草稿落手いたし候。是は杜口子の付られ候所にて候故、此方より杜口子へ遣可レ申候。杜口子の次が愚老にて候。

何事も御めにかゝり御物語。

昨日は家内の者共、梅亭など同行ニ而野外逍遥、夜に入歸庵いたし甚つかれ申候。草々及ニ御答一候。以上。

三月七日　夜半

几董様

几董宛　（東京　澁谷良英氏藏）

御手紙辱拜見、明日はいよ／＼岡崎俳諧承知いたし候。幸、二柳庵も今朝來噂いたし置候。麥水も、半化も、呼ニ遣し候。いづれも宗匠斗に而、發句は鬮取ニいたし候も又一興と存候。貴子ハ若役文臺御勤可レ被レ下候。しかし先ハ

花に遠くさくらに近しよしの川

是ニツキ御附置もよろしく候。猶明日はゆる／＼拜顏、萬々御物語あるべく存候。

往生七日　夜半

几董様

几董宛

良夜不レ怪清光、貴子はいかゞ御詠候哉、愚老ハ閑窓に湯豆腐を嗜申候。

中／＼にひとりあればぞ月を友

雨のいのりのむかしをおもひて

名月や神泉苑の魚躍る

いづれ御評可レ被レ下候。貴子御作いかゞ少々御きかせ、明日緩々拜顏御咄可レ被レ下候。以上

いざよひ　夜半

几董様

梅亭宛　（東京　澁谷良英氏藏）

留守中度々存候。御見舞被レ下忝、然ハ此まつ茸少々宇治山田名物ニて候ヘハ入ニ貴覽一候。□□□□鹿飛び文章も御□しく候。

絹をさく琵琶のながれやあきの聲

猶拜顏の節、ゆる／＼御面語可レ申候。以上

三日　夜半

梅亭様

如瑟宛　（名古屋　加藤霞村氏藏）

御使殊の外またせ申候。其ゆへは娘それがしにむかひ過言いたし、扨々にくき者と存候へども、骨肉の愛情ゆへ

異見眞最中、それにて使借入此譯に候。畫は明日中にしたゝめ可レ申候。御好の琴の圖、大方こんなものにてよきや、發句は　註、琴の畧畫あり

しぐるゝや鼠のわたる琴のうへ

此句可レ然候。但し

桐火桶無絃の琴の撫ごゝろ

節季ちかく候へば、何にても書遣し可レ申候。さだめし謝賓、車馬にて御おくり被レ下候はんとたのしみ申候。先日御約束の奈良茶めし、いかゞ／＼。老人のものわすれはさることなれども、貴子の如き若き人のものわすれ、近比きこへぬ事に候。禮は先日たんと言置たる事に候。禮をとりかへさんや。

いかゞ／＼萬々。已上

二月廿八日　蕪村

如瑟様

是岩宛　（東京　澁谷良英氏藏）

御手紙拜見仕候。手向の句おもしろく候。

遠山に松の煙か薄霞

芭蕉も感心いたし候。上下几董迄出し、未明より御出虚可レ然被レ存候。

往生七日　夜半

是岩様

有田孫八宛　（丹波沼貫　有田孫八郎氏藏）

芳翰拜覽、まことに爾來は御疎遠罷過候。一兩日は暑氣はげしく相成、彌御安全被レ成ニ御座一奉レ賀候。愚老も無爲ニくらし罷在候。しかれば御屏風いまだ揮毫不レ仕候。段々延引ニ及び候段、御申譯も無レ之仕合に御座候。今しばらく御待可レ被レ下候。五月已來とかく疎懶ニくらし候而、はか／＼しく畫も不レ仕、只柳巷花街ニのみうか／＼と日を費候。壯年の輩と出合候が老を養ひ候術に候故、一日に少年行御察可レ被レ下候。しかし此二三日は畫意も相催候故、處々もとめの物取かゝり候。右の體に候故、御屏風は七月中是非落成貴覽ニ入可レ申候間、とても御待ついで寛々と御心待被レ下度奉レ願候。扨昨今は祇園神事ニ付草屏ニ不相應の大客、ほとんど勞れ申候而、家内の者も甚困窮ニ及び候。御傳書の趣申聞せ候處、御懇情の段

かたじけながり申候。猶愚老かたよりよろしく御禮申上候樣ニと申事ニ御座候。御使またせ置候而、御返事草々かくのごとくニ候。又ほどなく御上京のよし、其節寛々可レ得ニ貴意一候。不備

六月八日　與謝蕪村

有田孫八樣

其二　（丹波沼貫　有田孫八郎氏藏）

御細書かたじけなく拜覽、寒氣相催候處、御安全被レ成ニ御暮一珍重存候。愚老先達より病氣ニ而、漸此ほど復常いたし候。されども老物故、しか〴〵無レ之御憐察可レ被レ下候。

一十二枚書之義、度々御仰越御尤の至ニ被レ存候。右長病且方々のたのみ物ニせがまれ候て、いまだ貴家の十二枚は落成不レ仕候。近頃御待びさしく可レ被ニ思召一候へども、年内ニ卒業とおぼしめし、今しばらく御待被レ下候はゞ忝存候。右御詫かた〴〵如レ此御座候。餘は期ニ後便一候。以上

霜月九日

二白、當年中ニは是非揮毫仕候而是可レ申候。來月ニ至リ又々飛脚御寄被レ下度候。

其三　（丹波沼貫　有田孫八郎氏藏）

今日西戯見物被レ遊候ニ付、御しらせ被レ下かたじけなく候。しかし今日は去がたき用事有レ之、殘念ながら御斷申上候。されども用事早ク仕舞候ハヾ、おそくともまいり申たく候。何事も貴面。以上。

六月二十三日

二白、先日御仰候屛風被ニ仰付一候ハヾ、椽（フチ）をうたず可レ被レ遣候。ふち有レ之候てハ邪魔にて候。

其四　（丹波沼貫　有田孫八郎氏藏）

今日御家來御尋候て、御安否うけ給リ珍重の御事存候。愚老も無爲ニくらし罷在候。爾者銀屛山水落成いたし、早速表具師かたへ相渡候。定而近々出來可レ申と存候。右の義ニ付、書狀相したゝめ、十日ニ石原氏へむけ御便仕候。いまだ書狀不ニ相屆一候や、無ニ覺束一候。何ニもせよ大かた表具師方も仕立出來可レ有レ之被レ存候。御使次第御引取被レ成樣ニ被レ存候。何事も御上京の節寛々可ニ申上一候。御

家來相待せ草々かくのごとくニ候。以上
　　八月十八日
序ニ妻もくれぐ\御傳言申上候。以上
　　　　　　　　　　　　　　　　與謝蕪村
　有田孫八様

其五　（丹波沼貫　有田孫八郎氏藏）

爾來御疎遠罷過候。秋暑はげしく御座候處、御安全被レ成
ニ御暮一奉レ賀候。しかれば先達より被ニ仰聞一候銀屏畫落
成仕候。早々御便次第御引取可レ被レ下候。たびぐ\御さ
いそくの所多用延引及候。御免可レ被レ下候。相變事無ニ
御座一候へども、右御案內旁々御起居御請申上たく如レ此
御座候。書餘御上京の節期ニ拜面一候。以上
　　八月十日
二白、右屏風當地表具屋參候ハヾ、直に相渡可レ申と存
候。いまだ此方ニ預り置候。以上

其六　（丹波沼貫　有田孫八郎氏藏）

御細書拜覽、朝暮冷々しく罷成候へども、彌御安全被レ
成ニ御凌一珍重御事に御座候。愚老先頃より腹瀉にてこま
り申候。しかし此二三日はよほどこゝろよく候。御安意
可レ被レ下候。銀屏いまだ表具屋方ニ有レ之候よし、扨も埒
の明ぬ事ニ御座候。大かた此たびは出來可レ仕と存候。
一不夜城、相かはらずにぎぐ\しき事に候。燈籠當年は
ちと不評判ニテ候。桔梗屋のとうろう、からくりなし故、
俗あたりうすくしての事と被レ存候。細工けしからぬき
れい成としニ有レ之候キ。
一貴境此節秋景御なつかしく候。どふぞいとまを得候て、
二三宿のつもりニ而、曳杖いたしたき物ニ御座候。され
ども多用故叶ひがたき事と存候。何事もやがて御上京
のふし、寛々御ものがたりと申殘候。以上
　　九月朔
　　　　　　　　　　　　　　　　與謝蕪村
　有田孫八様
妻かたへ御傳書かたじけなく御禮申上ル。

無宛名　（東京　市島謙吉氏藏）

とかくあかたれ候てきのどく、
紅を今少しうすく御すり可レ被レ成候。
草の汁の板はとかくいぢり申候ゆへ甚見ぐるしく、これ

ニ而は、外へ出しがたく被レ存候。
随分いぢり不レ申候様ニ御すり可レ被レ成候。草の汁の色もあまりこく候故、いよ〳〵きたなく御座候。
紅草の汁どもうすきほどが、却而きれいニ見へ可レ申存候。
（碧梧桐氏註、こゝに寒菊の畫を木版にて摺りあり、其の一個所より棒を引きて）
ケ様ニいぢり候ては見ぐるしく候。此板木一枚とくと吟味候而、御すり可レ被レ成候。色もあまりあはすぎ申候。
（とあり、他の一個所よりも同じく棒を引き、「此紅けし」とあり）
盆石板木四枚受取申候。板木二枚御使へ相渡申候。左様御心得可レ被レ成候。
寒菊校合甚みぐるしく御座候故、書付いたし置申候。今一應御考候而御すり可レ被レ成候。とても此通ニ而は世間へ出しがたく御座候。
紅の板は先日の様ニ少し墨を入たる方が宜敷御座候。此度のはあまりあかたれ申候。何分さいしきうすき方がきれいニ見へ可レ申候。猶御考候而、御すり今度御見せ可レ被レ成候。

夜半翁

無宛名　（東京　澁谷良英氏藏）

御手紙辱拜見仕候。是非共後刻上へ昇、緩、御咄可ニ申上一候。

たのもしき矢数のぬしの袷かな
鮒ずしや彦根が城に雲かゝる
ほとゝぎす待や都の空だのめ

摺物いづれなり共御出し可レ被レ下候。曉臺書状御受取可レ被レ下候。

廿三日　夜半

無宛名　（東京　澁谷良英氏藏）

來廿四日は初會相勤申候。御社中不レ殘御噂可レ被レ下候。尤、景物讃あまた出し申候。

題

春風　うぐひす　若草　籔梅　春の水

雛駒子・道立翁・佳棠子、右壇林へ御しらせ可レ被レ下候。右の段御たのみ旁、早々如レ此御座候。以上

上元　夜半

無宛名　（丹後宮津　黒田芝英氏藏）

能きけば桶に音を啼田螺哉

芝買ふて菫見せうぞ人の妻

いづれも此間申出候。

替事無ニ御座一候得共、先日の御答に如レ此に御座候。いさゐは文子のものがたり、御聞可レ被レ下候。頓首。

無宛名　（大阪　野々村氏藏）

今日はけしからぬ暑にて御座候。御清安めでたく存候。扨は暑中御尋として見事成御菓子辱賞味可レ仕候。御めにかゝり縷々御禮も申上度候。

一大阪よりの句料參ズ候。何句參候や、御留置可レ被レ下候。尤、貴子の御思ニ而書狀はむづかしながら御したゝめ被レ遣可レ被レ下候。此方より大阪へ相下可レ申候。

一東窓ヨリの一封御落手可レ被レ下候。

一たばこ入相心得申候。近日出來いたし候。扨〳〵いそがしく延引の段御免可レ被レ下候。尙拜面御物がたり。

以上

七月五日

雜抄

前揭以外、諸書に紹介されてゐる蕪村の書翰も亦尠くない。たゞそれらの者を無條件で再錄するには、いさゝか不安を伴ふので、內容を吟味した上で參考になるものを選擇したが、穎原氏は隨分たくさん採つてゐるから、大部分は氏の轉載せるものによつて取捨を施したのである。除外したもの決して疑はしいと斷じたのでない。私の心證上しばらく再錄を見合せたまでの事である。

近藤求馬
大野屋嘉兵衞宛　（武藤山治氏編蕪村畫集）

爾來疎濶の至に罷過候。時下寒威はげしく候所、兩位益御壯健被レ成ニ御萃一奉ニ恭賀一候。

一先達命ぜられ候蜀棧の一幀、此たび相下候。御落手可レ被レ下候。右の畫、華絹を以て揮毫いたし候。それ故甚大幅にて表粧を御加へ被レ成候はゞ、天地の裁を隨分御つめ被レ成不レ申候はゞ、床の壁上に餘り可レ申と

存候。只是華絹は天地たつぷりといたし候を好む事に候故、大幅の生絹を以てしたゝめ候。
右蜀棧自得の物にて候。平安豪族甚價を募り奪はんと欲するものおびたゞしく、價千疋を以ていづれも望み候へども、先年より御やくそく仕候儀故、貴家へ納め申候。價連城に思召候はゞ早速御返却可レ被レ成候。少も不レ苦候。愚老是迄畫料の儀不レ申候へ共、寒炉擔石空しく、殊更行先に節季といへる邪鬼をはらひ申術にて候。御憐察可レ被レ下候。
一求馬君御望の山水、不日に相下可レ申候。
一愚畫近來兩三月畫力超乘いたし、專ら市俗の氣を脫却して、たゞちに元明諸公の赤幟を奪はんと欲するに至り候。只照鑒を願ひ候。右自負不遜のことば御宥恕可レ被レ下候。元來是滑稽者流の故態、自ら不レ堪二絕倒一候。
一門人月溪も同じく蜀道揮毫いたし候。此度一所に相下候。筆料は思召次第御めぐみ可レ被レ下候。此兒畫には天授の才有レ之、終には牛耳を握るおのこと末たのもしく候。相變事無二御座一候へども、右畫幅相下申序、起居御尋旁如レ此に御座候。此節風塵草々不具。

十二月七日　謝　蕪村

近藤求馬様
大野屋嘉兵衛様

午窻宛　（武藤山治氏　蕪村畫集）

新春の吉兆不レ可レ有二盡期一申納候。先以御安全被レ成二御迎陽一めでたく奉レ存候。愚老所勞、春來復常いたし、無爲に重二馬齡一候。
一舊冬蜀棧の幅呈覽仕候處、爲二御謝義一黃金三圓二方御めぐみ、扨々過當の至かたじけなく奉レ存候。御德蔭を以節鬼を追はらひ候而、大慶の至に御座候。月溪へも方金二地早速相遺候。愚老より宜敷御禮申上くれ候樣にと、くれぐ\も申事に御座候。
一六曲屛風人物の畫の事、又々蒙レ命いさゐ承知、遠からぬ內に揮毫呈進可レ仕候。
一求馬君御もとめの山水も、絹素を輪具へかけ置候。不日に相下可レ申候。馬君へ其旨御達可レ被レ下候。此た

びは別書遣不レ申候。禮狀したため、ことの外勞れ候
故書留候。餘はあとゟ。敬具

正月六日　蕪村

午窻様

几董宛　（雜誌ホトヽギス所載）

無縁寺の日をなつかしみ梅花

莚帆に香をうつし飛岸のうめ

明日談林會相心得申候。朝飯後よりまいりかけて相極メ可レ申候。
此節いそがしき事言語道斷に候。諸方とも延しがたき請用のみ相加ルに、はいかい是も何と云事ニ候や、遠近都鄙のもとめ多くて扱もこまり候へども、さほどの奇妙もなく只々いとまを費ニ候。

一八甫の事、いさゐ相心得候。太郎七はいかにもおもしろき事と耳ニひゞき申候。御家內御催のよし、此方の者共も遣申度候。しかし相つゞき物入多くこまり候。何事も明日御相談なとげ可レ申候。以上。

九月廿日　夜半

几董様

（晋風曰、潁原氏の全集には發句二章を削除しあれど、やはりもとのまゝ添へて置た。）

几董宛　（雜誌ホトヽギス所載）

小兒微恙御尋被レ下忝存候。早速快氣安心仕候。拙老も余程能候。今少々ニ而御座候。

一御句ども甚おもしろく候。則愚意書印掛ニ御目ニ候。拙老などヘ雅俗相混候而、心中あはたゞしく相募候ニ付、工案のいとまも無レ之遺恨至ニ候。何事も期ニ拜眉ニ申候。

几董様　夜半

几董宛　（俳句に關する展覽會集所載）

きのふ又熱く今ニ平臥いたし候。摺物畫之事大延引、是は吳春をたのみ置候。定而今明日の内に出來と存候。

悲しさや釣の糸吹あきの風

いな妻の一網うつやいせの海

右二句の內に而摺物ニ御出可レ被レ下候。金福寺會之事延引も可レ然と存候。其內道君・佳棠も上京と存候。曉臺書は御届申上候。
猶一兩日の內可レ得ニ拜顔ニ候。以上

八日　夜半

几董様

百池宛　（俳句に關する展覽會集）

先夜は御來かたじけなく候、御安全御くらし被レ成めでたく存候。□□尾の歌仙御付句おもしろく候。則引墨いたし候、い

か様にも被レ成可レ被レ遣候。所詮尾と愚老とは俳風□□相違有
レ之候ゆへ、添削もいたしがたく候。
一西山たな曇り哉、留らぬ事と申事も今點不レ参候。隨分哉ニ而
留メ候事ニ候。是等の事も、さほどやかましく申程の事にも無
レ之候。

停レ車ヲ坐ニ愛ス楓林ノ暮
霜葉ハ紅也ニ於二月ノ花一ヨリモ

右の詩ノ助字ハ、紅葉ハ春ノ花ヨリも紅ヒニテうつくしといふ
ヨリ也

五文字はわすれたり
─かづらき山のたかれより
かりはらくたるからの音す也

西山のたなぐもりよりのよりは、此うたのより也。
西山のたな曇りよりしぐれ來ぬといたすと、ゝくと聞え候へ共、
それにては一句□□のごとくニ候。とかく時雨哉と申さねば句
ニならず候。
たなぐもりより降はじめたるしぐれかな、と感を起したる句
ニテ、哉、ずいぶんと留り候事也。
右のわけも筆序ニ書付候。とかく尾ノ了簡次第御直し置可レ被レ
成候、あらやかましのはいかいせんぎやな。所詮とやかくと理屈
なこねろほどの句ニても無レ之候。何事もキ面可ニ申上一候。以上

霜月十六日

何々我等が切字の取捌などを、尾ノ人へ御さたは必御無用ニ候。
此義御つゝしみ可レ被レ成候、尤御手がみなど御見せ御他言ニ
及候事は決テ御無用、ケ様の事より能キ中もあしく相成物ニ候。

百池様　　夜半

延年宛　（名家書翰集所載）

貴墨忝拜覽。寒中無ニ御障一御安全被レ成ニ御座一珍重存候。愚老
無レ難相過候。
一すり物思召立候ニ付、愚句追加の事相心得申候。左ニ書付候。

春興
篁にうぐひす鳴やわすれ時
こちの梅も隣の梅も咲にけり

冬吟
乾鮭に腰する市の翁哉

三句の内、いづれ成とも御心に叶ひ候を、御加可レ被レ下候。
一愚老儀も當月むすめ片付候て甚いそがしく、發句も無レ之無
念ニくらし申候。併良縁在レ之宜所へ片付、老心をやすんじ候。
來春は身も輕ク相成候故、よし野曳杖のおもひしきりニ候。さ
候はゞ浪花へも立寄、寛々御めニかゝり可レ申たのしびと□□
□□候。

一樵風久しく便りも無レ之候。いかゞ被二相過一候哉ゆかしく候。宜御傳可レ被レ下候。尤兩節春興の句もほしく候。よろしく〲御傳可レ被レ下候。此節世塵取紛艸々如レ斯に御座候。かしこ

十二月廿四日　蕪村

延年様

霞夫宛　（名家書翰集所載）

酷暑彌御壯健御つとめ被レ成候由、めでたく存候。愚老、ふゆともに無爲にくらし居御安意可レ被レ下候。當時御用しげく候由、おとふさよりも折々便候。□□□□とかく人はいそがしきが無事の第一に御座候。腹痛のうれひもなくなり候はんと察候事に候。然しちよこ〲と御たよりは待申候。餘り寥々、社中の翟も此霞夫はいかに〲と、百池を初めつぶやき候。愚亭此ほどは百句立發句に而おもしろき事に候。初心の翟も百句の都合二時ほどの内に滿尾、扨も奇特の事と不レ堪二感慨一。淨寫出來候て相分可レ申候。此節はことの外取込、中〲淨寫どころにて無レ之候。御發句なく候や、いかゞ〲。

蟬鳴や僧正坊の浴み時

ゆふがほや黄に咲たるも有べかり

葛を得て清水に遠きうらみかな

葛水や入江の御所にまふづれば

汗入れて妻わすれめや藤の茶屋

若爾宜のすが〲しさよ夏神樂

あふみのや麻刈る雨の晴間哉

右いづれも得意の句にて無レ之、百句立の考察こそ思ひ出候ままちよと書付候。然し中にも僧正坊のゆあみ時、いさゝか蟬の實景を得たるこゝ地に候。

内のものもくれ〲御傳言申上候。何分御たよりもあらばとおもふ事に候。かしく。

水無月二十七日　夜半

霞夫様

柳女・かすい宛　（名家書翰集所載）

朝暮秋冷相催候處、御ふたかた様御安寧御暮めでたく存候。拙かた無レ恙候。爾者爲二重九之御祝儀一白銀壹兩被レ掛二貴意一、不二相替一御厚情忝受納仕候。

一御發句あまた御見せかたじけなく候。いづれも甚よろしく御座候。添削には及不レ申候。珍重に御座候。折節、几董・百池など居合せ候て、いづれもへ吹聽いたし候處、みな〲感賞仕候。於レ僕悦怡の至に御座候。

發句會兼題

枯尾花　しぐれ

右御案被ㇾ成候而、是非御登せ可ㇾ被ㇾ下所ㇾ希候。賀瑞樣御多用に付出句も無ㇾ之遺恨に候。ちと御出可ㇾ被ㇾ成候。なしき御事に御座候。愚妻方へ毎度御傳書忝がり申候、猶宜しく御禮申上候。どふぞ秋中には罷下可ㇾ得ニ閑談ー心がけ申候。めでたくかしく。

九月十日　　夜半

柳女樣

かすい樣

もや〱とくらし而、愚句も一向無ニ御座ー候。漸二三句左に書付候。いづれもおかしからず候。

女郎花そも莖ながら花ながら

門を出れば我も行人秋のくれ

又

門を出て故人に逢ぬ秋のくれ

いづれ可然や。

貴人(アテ)の岡に立聞きぬたかな

細(ホソ)腰の法師そゞろに踊哉

姓名は何子か號は案山子哉

此かなはうたがひにて、歟と云ふこゝろに通ひ申。

子鼠のちゝよと啼や夜半の夜

みのむしのなく音よりは、まさりたる心地し侍る。

いな妻や堅田泊りの宵の空

又

稻妻やはし居うれしき旅舍り

これもいづれ可ならんや。

尙追々可ㇾ申候。已上

几董宛　（沼波瓊音氏紹介）

白せん子書、御さいそくのよし、則左之通遣申候。

かけ物　七枚

よせ張物　十枚

右いづれも尋常の物にては無ㇾ之候。はいかい物の草書、凡海内に並ぶ者覺無ㇾ之候　下直に御ひさぎ被ㇾ下候儀は御用捨可ㇾ被ㇾ下候。他人には申さぬ事に候、貴子ゆへ内意かくさず候。

一かけ物八枚遣候。是は御入用次第餘り候はゞ御返し被ㇾ下候とも、又は大略に御見斗被ㇾ下御ひさぎ被ㇾ下候とも、何分任ニ賢慮ー度候。

一一鼠かたへ今日返事いたし、一音へむけさし出候。哥仙評□御草稿御□見の所至極御尤に候、その趣にて猶文章潤色いたし相□候間、一鼠子へも右の旨御申傳可ㇾ被ㇾ下と申暮候。尤几董も同意ニテ候と書取申候。貴子よりも近〱其旨御申越可ㇾ被ㇾ成候。尙御めにかゝり愚老趣意をも御話可ㇾ被ㇾ下候。

一曉臺も書狀出可ㇾ申と存候。是も御めにかゝり御噂申度候。何

やかや取まぎれ跡先わすれ申候。いさゐは面上と申殘候。以上

月の御句、朱雀鬼おもしろく承り申候。尋常の事はおかしからず候。

愚句左に

又月今宵
名月や主の翁舞出よ

名月や夜な逃れ住む盜人等

盜人の首領歌よむけふの月

山の端や海をはなるゝ月も今

名月やかしこき物は人ばかり

名月や露にぬれぬは露斗

仲丸の魂祭せむけふの月

右いづれ可然や御評く。

何事も明日寛々可ニ申承一候。以上

八月十一日　蕪村

几董様

碧雲宛　（菅沼零折氏紹介）

貴翰辱拜見、彌々御平安被レ成ニ御座一欣然御事奉レ存候。誠先日は御影にておもしろく鬱散致候。殊の外酩酊、前後無ニ覺束一乘船、柳に顏をなでられて

出る杭をうとふとしたりや柳かな

漸ふしみへ巳の刻、僊南子へ訪候處、例の畫家集、俳事は相休、酒客と成、社中の責に應、畫を致、落日頃より歸宅おもしろき事に候。今日は□新公御尋、殊更德肴澤山送下され忝奉レ存候。且漢畫御携、駿河の客へ見せ申候。玄妙の山水故甚望に候。御免被レ下候。御閑暇御上京奉レ待候。不備

四月廿九日　謝寅蕪村

尚々御社中よろ敷御禮奉レ希候。かしく。

碧雲雅君貴下

几董宛　（嶋道素石氏紹介）

御互に月迫いたし候て、こゝろ闇時節、然ば大阪士川子の宿の名所、御書附可レ被レ下候。杉月より湖柳子へ屆物、貴子より御たのみ申入候。きのふ正巳子より金貳百疋、畫料御惠贈被レ下、辱御挨拶可レ被レ下候。

とし守や乾鮭の太刀鱈の棒

此棒にて懸鳥ども追廻し、あるひは白眼み凌可レ申と存候。

臘月二十二日　夜半

几董様

几とふ宛　（大阪　嶋道素石氏紹介）

昨夜は不レ怪清光、いかゞ御詠候哉。我等は閑窓に獨酌いたし候。御作いかゞ御聞せ可レ被レ下候。少々二日醉のきみ亂毫御免可レ被レ下候。

　八朔や偖明日よりは二日月

　名月や夜は人住まぬ峰の茶屋

良夜の句は、良叟の、嵐吹く草の中よりけふの月。是より外なく候。

　十六日　蕪村

几とふ様

百池宛　（大阪　嶋道素石氏紹介）

あふせのごとく剛寒御安靜御壽きめでたく存候。しかれば歳末御祝儀不二相變一致二祝納一候。且定連料是又忝受納いたし候。御事多中、御厚意不レ淺候。

箱の事、月居いづかたへ預け候や、只今急には見え不レ申候、とくとせんぎいたして此方よりもたせ上可レ申候。偖又句帳は來春迄御預り申置候。春に至り愚老句集、佳棠世話にて急々出版いたし申つもり候故、句帳とも引合せゑらみ申度候。あふせのごとく月居不埒何角に付き、にくき男にて勘當の弟子と相見え候。尙今晩得二面唔一萬々御禮可二申謝一候。以上

　十二月二十二日　夜半

百池様

無宛名　（大阪　嶋道素石氏紹介）

御ホ句愚意を加へ、愚老も後刻出席と心がけ候。

一霽居、先夜以來おめにかゝらず候。別に御禮の手紙遣可レ申候間、くれぐ\よろしく仰達可レ被レ下候。

一今日は佳東も出席とやらうけ給り、どうぞ御誘引候はゞ珍重の事に候。何事も後刻御物がたり申上候。

　夏山やつもろべき塵もなかりけり　半　半

　池池池池池池池池池池　半　半

　ちちちちちちちちちち　半　半

　千千千千千千千千千千　半　半

　池池池池池池池池池池

　池池池池池池池池池池

佳棠宛　（明石　横山蜃樓氏藏并紹介）

芳翰拜閱□□□御安全めでたく存候。しかれば端午の御祝儀白銀壹封、且畫料金百疋、御丁寧の至忝致二受納一候。

一唐墨料、六匁五分、是又落手仕候。

一御互に南柯の一夢さめ候時節、なかしく候。されども人間の片より候は木石にも劣り候故、折ふしはよろしく候。禮ばかりにては上下不和に候故、樂といふ物なくては天下も納らぬ物にて、和ヲ以テ和セザレバ又行ハルベカラズと、大聖孔子さ

へのたまひ置れ候。只よき程のたのしみは有たき物に候。

一螢の御句不レ堪ニ感慨一候。

逃尻の光りけふとき螢哉

何事も節後、寛々御物がたりと申残候。愚老も昨朝より胸痛の心地にて引こもり罷在候。しかし當分の持病、御安意乞。以上

五月十三日　　蕪村

佳棠様

無宛名　（明石　横山蜃樓氏紹介）

いよ〳〵御壮健めでたく奉レ存候。しかれば明日は御不座のよし、貴子御出なくては佛なき堂の心地にて候。どふぞ御くり合せ、御越被レ成候様にと願ふ事に御座候。一月の小すり物いたし度候。

奉書四ッ切

如瑟
佳棠
百池
蕪村

右の四人、句に〻早々すらせ申度候。いかゞ可レ致や御賢慮承りたく候。御意に候はゞ如瑟・百池へも被ニ仰遣一可レ被レ下候。何にもせよ、月の御ホ句早〻うけ給り度候。今日中にかため申度候。早々

八月十九日

櫻なきもろこしかけてけふの月　　蕪村

右の句な出し申度候。

青荷宛　（明石　横山蜃樓氏紹介）

此間は海ほう寺御うら山しく、しかし歸宅夜に入候と奉存候。

愚月並廿六日

（墨消）枯野

兼題　からさけ　雪

冬ごもり　歳暮

一今朝芦陰相續の人被ニ相尋一候。吉分禎吉と申若もの、至極美男にて何を見込に、芦陰へはいられ候事にやとおもふ斗に候。貴家へも此ほど御見舞被レ申候所、御他行不レ得ニ御意一の由ものがたりにて候。今日直に伏見夜舟にて下り候故、最早几董子へはまいり不レ申候間、愚よりよろしく申くれ候様との事に候。尤、道立君へも御見舞可ニ申上一候ても御下坂御留守ならん、無レ詮事に

候故、是もよく／＼御待被ㇾ下候様にとのたのみに候。
一芦陰集、右積吉持参先づ十六冊参り候。内八冊貴家へとの事に候。又々追々可二相登一よしに候。何事も一兩日中に御目にかゝり可二申述一候。以上

十二月十六日

木がらしや釘のかしらを戸に怒る

いかい事句は有ㇾ之候ても、おもひ出しがたく候。

青荷子　　夜半

几董宛　（安立球谷氏紹介）

雁　唐辛子

御安全珍重多々。この方御尋被ㇾ下度(忝カ)存候。いまだはか／＼しく無ㇾ之、大黒町の鈴木多門にかけ申候。全快可ㇾ致と申候故、安心いたし候。今日も右の醫者へ連れて参り候。

一無爲菴未だ歸京なく□□相立れ申候。
暮雨へ昨日尋ね行候處、鎖ㇾ戸有ㇾ之むなしく罷歸候。月居おもひ立至極に候故、暮雨出京ならば相催し申度ものに候。隨分物の入らぬ様にいたし候が、俳諧長久の基にて候。併し暮雨直ちに歸國と被ㇾ存候。

一明烏見申候、至極よろしく候。御返却いたし候。御清書にかゝり可ㇾ然候。

一愚集板下の事、どふで御苦勞に預り可ㇾ申と存候　一兩日中先歌仙二三卷も淨寫にかゝり可ㇾ申候、とくと草稿相認め置可ㇾ申候。さりとはむづかしくいやな事に存候。それ故一日／＼と相延申候。

一寫經集追ずり廿五冊参り候。貴家より御配り被ㇾ成候所御書付置可ㇾ被ㇾ下候。さし合ぬ様に配分いたし度候。

一雁　蕃椒　早く御出來にて、愚評左に

西に星見ゆ小田の水

是は當世句にて、とかく幾度参り候も此體多く候。諸家の作者も只此所に留り候様に被ㇾ存候。然れども格別珍敷事はなきもの故、無二是非一事に候。あしき作の句よりは先づよろしきと申物故、とかく離れがたく候。

腹の鳴る夜の方可ㇾ然候。腸に秋のしみ込と申様なる事も耳に古り候ておかしからず候。

出生てつれなしの蕃椒、めでたく被ㇾ存候。

江戸の人の句に

やさ男ぶつり／＼と唐辛子

此の句の方、詮なしよりはまさりたる心地に候。噯て詮なしは理におち、其上細か成る案場と存候。

紅の女にうとし、少ししみだれ候心地に候。雪中菴などは却つて取可ㇾ申所にて候。

何にもせよ、妙句は有まじく候故、先はよろしき方と申物にて候。

一田子への御手紙相心得申候。早速御届可ㇾ申候。致て快案の出、珍重の事に候。以上

八月廿七日

良夜とふかたもなく、とひくる人もなければ

中〳〵に獨なればぞ月を友　蕪村

月の友よりはまさりたる心地し侍り。

几董様　夜半

不二菴宛　（東京　笹川臨風氏藏）

𢪸、さむき事ニ候。彌御安全御くらし被ㇾ成、めでたく存候。愚老此ほどは持病胸痛にて甚こまり申候。大かた天年も盡申候故、やがてアッチものと覺悟いたし心細く候。先頃宇治の山ぶみいたし候故、小すり物御めニかけ候。ちと御上京御催可ㇾ然候。御なつかしく候。妻もくれ〳〵御傳言申上候。書餘追便。以上

十月三日　夜半

不二菴主盟

物負て堅田へ歸るしぐれ哉

しぐるゝや長田が舘の風呂時分

蓮枯て池めざましきしぐれ哉

いづれ歟よろしからんや、昨日の會にいたし候。

出家して親王ます里のもみぢ哉

是はちとしほからけれど、近來のまぎらかしよりはましならん歟。

几董宛　（東京　三村竹清氏藏）

昨夜の御手がみ今朝閲見いたし候。懐鈔書付いまだ佳棠へ不ニ申居ー候。はたと失念いたし候ニ付、今日かとうへ申遣候。是ハ少も違背ハ無ㇾ之筋ニ御ざ候。まいり候ハヾ便り次第相達可ㇾ申候。御せわの事共、きのどくニ存候。

一兒見せ御見物のよし、愚老も昨日かとう催ニ而見申候。

今舍柳甚おかしく、さりとは色畫師のいやみをすて候て、さく／＼といたし候所、甚荷擔ニ候。扨又岡五郎壽水ニあたりての身ぶりおかしく候。東藏ハ始終九太夫にて、横山或ハ三庄大夫(マヽ)と申ものにて無レ之候。三庄大夫などハ同じおやぢでも大ニ仕内有レ之物ニ而、威儀も無レ之候てハあしく候。眠獅ハさん／＼にて筒井半二ニも逢申候所、不出來狂言くやみ居申候。しかし、けしからぬ大入、昨日の棧敷も漸向ノ正面にて、小雛・小糸・石松などにて見申候。かとうハ用事ニ付七ッ過ニ見え候て、それまでハ愚老、山の大將、大見えにて大魯の胸中にて見物いたし候。高しの大夫なども見え候。これらも東ノ十四五間めにて見て居申候。しかし花やか成事共、まこと都の風流、田舍ニハ又夢ニも見られぬ光景ニて候。春坡子なども御出被レ成候よし、とてもの事ニ同日ならバ一しほの佳興と殘念ニ候。

一月並句合も少々集り有レ之候。我則せわにて春坡子も御手傳可レ被レ下候よし、我則被レ參候樣ニ御申傳可レ被レ下候。此度ハ田舍ハ集り不レ申候。月居いかゞ、なだ邊へ申遣置候や無ニ覺束一候。京斗ニ而少キが、我等がためニハよく御ざ候。

一月居段々諸方不埒、日々ひやうばんあしく、最早絕躰絕命の時致りし(マヽ)被レ存候。おもひの外の不埒もの絕ニ言語一、御咄いたし候て御あきれ可レ被レ成と存候。

一九日ニハいよ／＼御出席待入候。別而春坡子・之兮子など御出坐被レ下候よし、かね／＼御申被レ成候。是非御同伴可レ被レ下候。熊さま・是岩子なども御催可レ被レ下候。賢人達ハ餘りおかしからず候。道君ハ御多用ニ而所詮御出有まじく存候へ共、御定連の事故、別ニ申上候。扨もいそがしく候。艸々以上

十一月五日　夜半

几董樣

無宛名　（東京　三村竹清氏藏）

四月十四日御狀只今相達候則返書

彌御堅榮(マヽ)被レ成ニ御募一珍重御事ニ候。愚老病氣御尋被レ下御懇切の至、每／＼かたじけなく落淚いたす斗ニ候。四五日已來甚こゝろよく、此体ならばずる／＼と全快可レ仕

候。灸治も不レ絶いたし可レ申候。むすめ、はしか御尋被レ下忝存候。はしかハ最早能候へ共、雨の手がいたみ候て、琴も手習も相休ミ居申候。いろ〳〵とりやう治を加へ候へども、いまだしるしも無レ之候。併氣遣成義ニハ無レ之由、醫者衆も被レ申候故、安心いたし候。さて〳〵いろ〳〵成事共、うき世にあきはて申候。

一とら屋此度相達忝、早速賞ぐわんいたし候。むすめも甚うれしがり申候て、愚老もよろこび候。

一几董利くわいし、先日〆參□□此度相下候。御落手可レ被レ下候。

一我等方月並發句會

五月十日　兼題　二題

鵜　　青梅

うふね　鵜川

鵜つかひ　鵜の篝

其外いか樣ニも御案じ可レ被レ成候。

右發句會ハ毎月十日定日ニて候。兼題は例月二ッづゝ出候。

一題ニ二句ッヽ御案じ被レ成御登セ可レ被レ成候。是ハ發句合にて、勝負を爭ひ候ニては無レ之候。月々題を二ッ宛出して、社中いづれも發句を持集候而、席上にて壹句ッヽ手前の發句帳へしるし置候。行々〳〵は社中の發句集を出し申つもりニて候。

（晋風曰、右二通は穎原退藏氏の筆寫にて、特に、氏より示教に接し、こゝに掲出する事を得たのである。）

夜半樂

宰鳥校

目録

祇園會のはやしものは
不協秋風音律
蕉門のさひしをりは
可避春興盛席

されはこの日の俳諧は
わか〳〵しき吾妻の人の
口質にならはんとて

安永丁酉春 初會

歳旦をしたり皃なる俳諧師	蕪村
脇は何者節の飯侘	月居
第三はたゝうち霞み〳〵	月溪
艤のとかくしつゝも	自笑
こゝかしこ旅に新酒を試て	百池
十日の月の出おはしけり	鉄僧
纒頭給ふぬきての身の白き	田福
廊下の翠簾や夢のうきはし	斗文
目ふたきて聖の屎を覆らん	子曳
紀の川上にくちなはのきぬ	集馬
うの花に萩の若枝もうちそよき	三貫
門をたゝけは隣家に聲す	帯川
着つゝなれて犬もとかめぬ裘	致郷
貢の使白雲に入	士恭
谷の坊花もあるかに香に匂ふ	道立

、　敏馬浦

里や春梅の夕と成にけり　士川

夕凪や柳か下の二日月　、佳則

竹をめくれは行盡す道　舍員

路斜野すゑの寺や夕霞　菊尹

梅さくや陶つくる老が業　舍員

青柳や野こしの壁の見へかくれ　嬰夫

畠ある屋しき買たり梅の花　子曳

二日聞てうくひすに今は遠さかる　柳女

日數經てやゝ瘦梅の花咲ぬ　賀瑞

一株の梅をうつし植てあらたに春を迎ふ

けさ梅の白きに春を見付たり　鉄僧

、

深中の梅の月夜や竹の闇　月溪

蓮翹の花ちるや蘭の葉かくれに　晋才

、

たへす匂ふ梅又もとの香にあらす　旧國

籔うくひすの啼で來にけり　晋才

かけ的の夕くれかけて春の月　正白

三本傘は聟の定紋　舍六

初かつをあはや大磯けはひ坂　我則

淡き薬に身をたのみたる　故郷

暮またき燭の光をかこつらし　嬰夫

うくひすにうかれ烏のうき世哉　道立

新田に不思儀や水の涌出して　菊尹

儒醫時に記す孝子の傳　賀瑞

かりそめの小くらのはかま二十年　呑獅

往來まれなる關をもりつゝ　呑周

餅買て猿も栖に歸るらん　柳女

錫とゝまれは鉢か飛出る　延年

曉の月かくやくとあられ降　維駒

金山ちかき霜の白浪　樵風

つく〱と見れは眞壁の平四郎　東瓦

酒屋に腰を掛川の宿　左雀

空高く怒れる蜂の飛去て　乙總

岡部の畠けふもうつ見ゆ　霞夫
花の頃三秀院に浪花人　几董
都を友に住よしの春　大魯

春興

遠里に人聲こもるかすみかな　延年
汀より月をうごかす蛙かな　正白
もろこしの一里も遠き霞かな　田福
寝んとしては又雜すも居るや春の雨　維駒

、　浪花

墨の香や此梅の奥誰か家　霞東
春風や縄手過行傀儡師、志慶

、

あたゝかい笘の彼岸に頭巾かな　月居
剰松に隣れる柳かな　集馬
雪霜の古兵よ梅の花　自笑

、　浪花

寺に寝て起〱梅の匂かな　正名

、　、

春雨や隣つからの小豆飯　銀獅

、　、

植木屋の蓮翹更に黄なる哉　斗文

、　但出石

イめは誰か袖引やみの梅　乙總
うくひすや聲引のはす舌の先、霞夫

、

神風の春かせさそふ夜明かな　呑獅
蝶ゝや衛士の箒にとまりけり　呑周
几巾引や夕かすみたつ處ゝ　聲ゝ
うくひすや茶臼の傍にしゆろ箒　徳野
鶯や折よく簀戸の明はなし　文皮
うくひすに枕かへすや朝またき　婭閣
黄鳥や樹ゝも色吹眞葛原　管鳥
芹喰に雀のをり來る野川哉　春爾

、

舟遅きおほろ月也江の南　九湖

比枝下りて西坂本の梅の花　龜郷

培し樹ゝの雫や春の雨　万容

梅咲て何やらものをわすれけり　白砧

、

伊丹

草臥てもとる山路や雉子の聲　東瓦

尾張の客舎にて

茶賣去て酒賣來たり梅の花　百池

黄昏や梅かゝを待窗の人　大魯

白梅や吹れ馴たる朝嵐　几董

謝蕪邨

余一日問耆老於故園、渡澱水過馬堤、偶逢女歸省郷者、先後行數里、相顧語、容姿嬋娟、癡情可憐、因製歌曲十八首、代女述意、題曰春風馬堤曲

春風馬堤曲　十八首

○やふ入や浪花を出て長柄川

○春風や堤長うして家遠し

○堤ヨリ下テ摘芳草　荊与蕀塞路

荊蕀何妬情　裂裙且傷股

○溪流石點ゝ　踏石撮香芹

多謝水上石　敎儂不沾裙

○一軒の茶見世の柳老にけり

○茶店の老婆子儂を見て慇懃に

無恙を賀し且儂か春衣を美ム

○店中有二客　能解江南語

酒錢擲三緡　迎我讓榻去

○古驛三兩家猫兒妻を呼妻來らす

○呼雛籬外鷄　籬外草滿地

雛飛欲越籬　籬高墮三四

○春艸路三叉中に捷徑あり我を迎ふ

○たんほゝ花咲り三ゝ五ゝ五ゝは黄に

三ゝは白し記得す去年此路よりす

○憐ミとる蒲公莖短して乳を泡アマセリ
○むかしく〵しきりにおもふ慈母の恩
慈母の懷袍別に春あり
○春あり成長して浪花にあり
梅は白し浪花橋邊財主の家
春情まなひ得たり浪花風流ブリ
○郷を辭し弟に負て身三春
本をわすれ末を取接木の梅
○故郷春深し行〻て又行〻
楊柳長堤道漸くくたれり
○矯首はしめて見る故國の家黄昏
戸に倚る白髮の人弟を抱き我を
待春又春
○君不見古人太祇が句
藪入の寢るやひとりの親の側

澱河歌　三首

○春水浮梅花　南流菟合澱
錦纜君勿解　急瀨舟如電
○菟水合澱水　交流如一身
舟中願同寢　長爲浪花人
○君は水上の梅のことし花水に
浮て去こと急ヵ也
妾は江頭の柳のことし影水に
沈てしたかふことあたはす

老鶯兒

○春もやゝあなうくひすよむかし聲

安永丁酉春正月

門人　宰鳥校

平安書肆　橘仙堂板

花鳥篇

蕪村

郭文が勝具なければ、鬼貫が禁足にはくみしやすきにや。みよしのゝ山ぶみも、かり寝のゆめにたどり、あらしのやまの春のゆくゑだに、しらぬゑびすごゝろのいとさう〲しければ、せめて朝夕草扉におとづるゝ人の、花さくらの吟詠を、ほくのはしにかいつけ、一帖にものして臥遊のよすがにもとおもひたちつゝ、とかくするほどに、春煙眼を過ギ、綠樹窗を蓋ひ、花苒として去つくす日にゆふべをかこち、蕭條とふりくらす雨に曉をしらず、おこたりがちなる老の身をうらみて、ひとり几上に肘する折ふし、ある人梅翁のたんざくを得て、この句にわきせよと云ひおこせたるを、取上け見れば手澤淋漓として、雲外の一聲睡をさまし、言下に一句を吐、所謂狗尾をもて貂に繼たるこゝちするを、門下の二三子、第三第四とつゞけゆくまゝに、やがて三十六句にみちぬ。いとよし花櫻の後へに附して、則花鳥篇と題号して、我踈懶の罪を謝することしかり。

壬寅皐月　　蕪村識

花櫻帖

浦里のさくら咲けり海苔の味　　大石 士川

花をとはゞ苔ふ六十八九日　　浪花 雄山

花の瀬にうかむ筏や大井河　　延年

葛城やこゝもよし野の雲ちぎれ　　大和 何來

けふきりに垣を仕舞ば落花哉　　大石 佳則

暮おしむさくらにしばし三日の月　　胡柳

初ざくらひそかに咲る風情哉　　宇治タハラ 野菊

さりながら腹はへりけり山櫻　　丹ミヤヅ 東潞

炭がまのけぶりも消て山ざくら　　路景

我住家よしのゝ花に錢二百　　ヤマト 如氷

立よればことに一樹のさくら哉　　大和 守明

僧寺に歸る月夜の櫻かな　　正巴

つとに起て見れば花ちる麥畠　　湖嵓

月の夜は花より明てさくら哉　　ナニハ うめ

草臥た足でわたるや花の河　　大石 士喬

舟さして花にとほしき細江かな　　我則

花を見て歸るうしろや朧月　熊三
米かしぐ水にとぼしや山ざくら　佳棠
掛茶屋の抄子で拂ふさくら哉　吾琴
花に添ていさゝか逃るこてうかな　青荷
花に棹さすや夕日の片たより　女 古好
うつくしき花のさかりやきのふけふ　ことの
ゆく春の逡巡として遲ざくら　金篁
たのまれてさくら見に行男かな　春坡
ちればさく風情や雪の山櫻　心頭
掃庭に雨おもき花の雫かな　銀獅
いろ〳〵の人見る花の山路かな　女 小いと
遲ざくら廿日の月の木の間哉　管鳥
ちると見し夢もひとゝせ初櫻　几董
花の香やさくらに風のさはる時　松化
花に寢て月におどろく木陰哉　雪居
夜ざくらに梟を追ふ礫かな　是岩
鄙人の舅に供してさくら哉　舞閣
さくら咲中や樵夫が飯けぶり　宮 山ツ呼

おもひ得ぬ人伴ひてさくら狩　維駒
老て猶さくらは花にとはれける　柳女
夜ざくらや檻ちかき君が聲　ワキノハマ 桃葉
溜池のうごかぬ水にさくら哉　、附鳳
舟出して入日の前のさくらかな　大石 會雨
狩くらす花の埜を歩路哉　束助
櫻狩かの木この木の一構　まさ女
舟出して遠山ざくら見付たり　呑獅
雨の日やむかし皃なる南良の花　德野
きのふちりけふちりひぢの山櫻　文皮
雲と咲雪と散けり山ざくら　女 石松
花に來て御室を出ルや宵月夜　ナニハ 百樓
花の雲大和河内の夕けぶり　大石 紫洞
西山や花の朧に日の落る　大石 士巧
さくら陰誰に谺す山の神　、菊十
ちりがてに人待がほのさくらかな　慶子
花の浪すくひ上たき扇哉　巴江
谷水へ手は屆ずやさくら狩　雷子

散かたの花見るうつり心かな　五雲
ぬけ道やさくらちり込たまり水　之令
花もどり隣に風呂の有夜かな　尼　春洲
花さくやひたやこもりの僧がもと　仙臺　秋來
爐ふさいで見ればさくらは咲にけり　イタミ　東瓦
白雲の根をおろしけりさくら苗　眠獅
垣ごしに凉及が花を立て見る　自笑
山おろし盃へ青葉や花の栖　三角
早鮓の晝にならぬや初ざくら　和流
試のさくら咲けり一二三輪　兵ゴ　來屯
遠里の花靜さよ午の貝　、里山
良等の居所うれし花のもと　、清夫
さいつごろ植しも見たり山ざくら　百池
日和じやと魚屋云けりさくら狩　公遠
先キへ來て友にしのぶや花の山　文長
朝戸出や落花戸をうつうれしさに　婆雪
途に晴て猶せかるゝや雨の花　存固
花に來て飯くふひまや松の風　月居
夕ぐれや花を離るゝ天の原　ナニハ　正名
此道も二もと三もとさくらかな　通介
ちるは〳〵花の外には蝶ばかり　梅幸
土鳩啼夕山陰の遲ざくら　高サゴ　布舟
片袖はぬいでかたげよ山ざくら　共荅
ひとつ家に斧のひゞきや山櫻　魚赤
花ざかり人のうしろへ入日哉　田福
黄昏のおもき艸履やさくら人　梅亭
さくら咲山に住ともろくろ引　獣子
社家町の門相似たり山ざくら　里曉
獨行て物わすれせむ花のもと　ナニハ　旧國
入月のさくらよこぎる坤　幻住庵　臥央

花落花開猶未醉
還疑千日在君家

千日の酒賣は誰ッ花の蔭　道立

十字街

花に酒汗して牛のひく日哉　蓼太

登台嶺

うへもなきこの世の櫻咲にけり　曉臺

右文音の二句

一休會裏になき物

まな正月しも茶わむをしき

たく見くものいゑせにこめ得法

悲の衣つとめ放參經陀羅尼

はやるものなに〳〵

猿樂田樂のうたひもの尺八

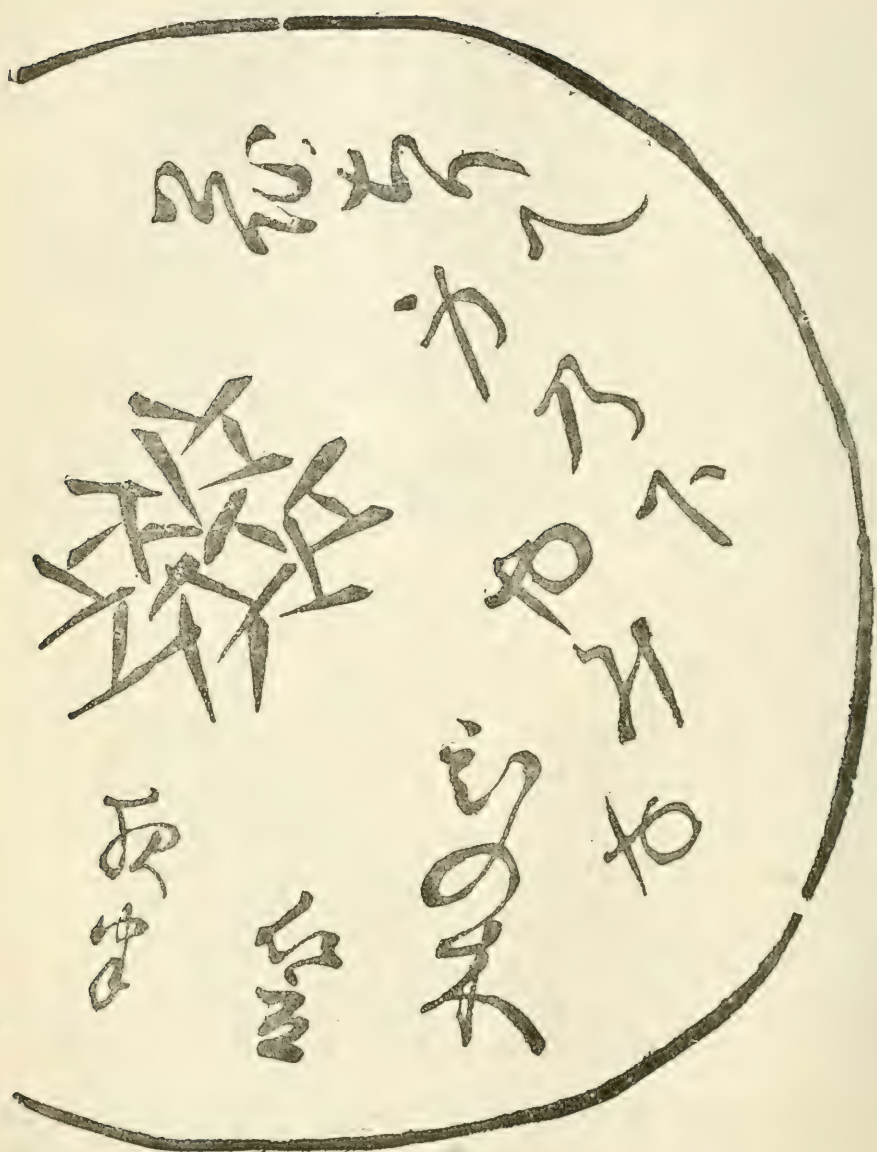
こきりこはふかぶし

傾城若俗のざふだむ

さよ〳〵さ夜ふけがたのよしかのひところ

此小哥は天下老僧の活作也。佐竹の御家にありて、疎なる饗には掛られずとかや。その一聲をこゝにうつして、焦尾桐のしらべをけふ一曲の早哥もまた艶なり。

右の文は其角が焦尾琴に有て、俳諧の一枚起證ともいふべし。さはおのれがこゝろざし賤陋にして、寂しをりをもはらとせんよりは、壯麗に句をつくり出さむ人こそこゝろにくけれ。かの伏波將軍が老當益壯といへるぞ、よろづの道にわたりて致を一にすべし。古、市河栢筵、今の中むら慶子などは、よくその道理をわきまへしりて、とし〳〵に優伎のはなやかなるは、まとに堪能の輩と云べし。

さくら見せうぞひの木笠　とよしの〻旅にいそがれし風流はしたはず。家にのみありてうき世のわざにくるしみ、そのことはとやせまし、この事はかくやあらんなど、かれておもひはかりしことゞもえはたさず。ついには煙霞花鳥に辜負するためしは、多く世のありさまなれど、今更我のみおろかなるやうにて、人に相見んおもてもあらぬこゝちす。

ほとゝぎすいかに鬼神もたしかに聞　宗因
ましてやまぢかきゆふだちの雲　蕪村
江を襟の山ふところに舟よせて　几董
又や通辭の袖ひかへつゝ　百池
藥種干す匂ひのこりて月夕　佳棠
藏かと見ゆる露の家造　金篁
荻萩のおどろきやすし西の京　湖柳
變化逐うつ夜にみやびして　湖嵓
むらさきのさむるも夢のゆくゑなる　田福
呉楚の際に雨うらむ雲　我則
弩を枯野の末にこゝろみて　之兮
飯をにぎらば大ィにすべし　是岩
聲だみて江湖頭の尊とさよ　熊三
柳はみどり花は紅る　正巴
御車の軒端を蜂のうかゞひて　維駒
我ゆく春や戀せずて過　吾琴
みこもりに影沈たる朧月　月居
古の林の夜落る枝　管鳥
顯密の僧なりし身を武者修行　紫洞

麥さへ喰へば泊ておく村　銀獅
さみだれにひよんなしばゐを貰て來て　自笑
うしや鏡の蓋を踏割ル　佳棠
遠く見てかり寢の皃を愛スらん　春坡
卜部の家をつぐ子也けり　几董
まめの粉の捐あやまてる小豆餅　雪居
そとは見せじときぬかづけ置　老雨
秋出たる狀を師走に投込て　蕪村
三番船の鰤のすて賣　ヽ
はら〳〵とあられの中に朝の月　百池
うれしや藥を焚仕廻たり　魚赤
藍瓶へ肩の手拭落かゝり　春坡
ことしは多いだんちりの數　松化
宗因もきのふ江戸からのぼられて　蕪村
長雪隱もよいほどが有　宰町
脩あふぐさくらの木末花のもと　道立
たしかに聞ヶときじの二聲　呑獅

（終）

新華摘

（しんはなつみ）

蕪村

新花つみ

八日

灌佛やもとより腹はかりのやど
卯月八日死ンで生まるゝ子は佛
更衣身にしら露のはじめ哉
ころもがえ母なん藤原氏也けり
ほとゝぎす哥よむ遊女聞ゆなる
耳うとき父入道よほとゝぎす
小原女の五人揃ふてあはせかな
更衣矢瀬の里人ゆかしさよ
　　金の扇にうの花書たる(集に)句せよ
　　とのぞまれて
白かねの花さく井出の垣根哉（うの花も咲や井出の里）
うの花や貴布禰の神女の練の袖
おちこちに瀧の音聞く若ばかな
山畑を小雨晴行わか葉かな
般若よむ庄司が宿の若葉哉

九日

夜走りの帆に有明て若ばかな
筍や五助畠の麥の中
葉ざくらや草鹿作る兵等
みじか夜や八聲の鳥は八ッに啼
日光の土にも彫れる牡丹かな
みじか夜や葛城山の朝曇り
夏山や神の名はいさしらにぎて（白幣）
籠の三熊もふでやかたつぶり
關越るいざり車や蝸牛
少年の矢數問寄る念者ぶり
ほのぼのと粥に明ゆく矢數かな

十日

若楓矢數の篩もみぢせよ
大矢數弓師親子もまいりたる
葉ざくらや奈良に二日の泊客
麥秋や馳啼なる長がもと
麥秋や遊行の棺ギ通りけり
朝比奈が曾我を訪ふ日や初がつを
麥秋や狐のゝかぬ小百姓

麥の秋さびしき皃の狂女かな
麥刈て瓜の花まつ小家哉
初鰹觀世太夫がはし居かな

十一日

殿原の名護屋(も見)[皃なる]鵜河かな
たもとして拂ふ夏書の机哉
ねり供養まつり皃なる小家哉
澁柹の花ちる里と成にけり
ほうふりの水や長沙の裏借家
不動(彫る)[書く]琢摩が庭のぼたんかな
袖笠に毛むしをしのぶ古御達
討はたす梵倫(論)つれ立て夏野かな
柚の花やゆかしき母屋の乾隅
箏や垣のあなたは不動堂

十二日

橘やむかし屋かたの弓矢取
谷路行人は小さき若葉哉
皃白き子のうれしさよまくら蚊帳
床低き旅のやどりや五月雨
若竹や十日の雨の夜明がた
金屏のかくやくとしてぼたんかな
南蘋を牡丹の客や福西寺
ほうたんやしろがねの猫こがねの蝶
ほたん有寺行過しうらみかな

十三日

やゝ廿日月も更行ぼたむかな
山蟻のあからさまなり白牡丹
方百里雨雲よせぬぼたむ哉
詠物の詩を口ずさむ牡丹哉
山蟻の覆道造る牡丹哉
草の戸によき蚊帳たるゝ法師かな
木がくれて名譽の家の幟哉
(桐)[柚]の花[や]能酒藏す屏の內
淺河の西し東ㇱす若葉哉

十四日

夏山や京盡し飛鷺ひとつ
賣卜先生木の下闇の訪れ皃
柹の花きのふ散しは黃バみ見ゆ
ロなしの花(ちろ)[さく]かたや日にうとき

ごツ〳〵と僧都の咳やかんこ鳥

堀喰ラふ我たかうなの細きかな

笋を五本くれたる翁かな

麻を刈レと夕日このごろ斜なる

藻の花や小舟よせたる門の前

閑居鳥歟いさゝか白き鳥飛ぬ

十五日

辻堂に死せる人あり麥の秋

三井寺や日は午にせまる若楓

朝風の毛を吹見ゆる毛むしかな

我水に隣家の桃の毛虫哉

鮓つけてやがて去ニたる魚屋かな

鮒ずしや彦根の城に雲かゝる

鮓おして(壓)しばし淋しきこゝろかな

(朝風に 風突く)毛を吹れ居る毛むし哉

十六日

鮓を壓す我レ酒醸(カモ)す隣あり

鮓をおす石上に詩を題すべく

すし桶を洗へば淺き游魚かな

眞(精)しらけのよね一升や鮓のめし

卓上の鮓に目寒し觀魚亭

若楓學匠書ミにめ(眼)をさらす

鮓の石に五更の鐘のひゞきかな

寂寞と晝間を鮓のなれ加減

藥園に雨ふる五月五日かな

巫女町(ミ)によきゝぬすます卯月哉　（ヨキ、ヌスマスハ絹ヲ水ニヒタス也）

十七日

一八やしやがちゝに似てしやがの花

かはほりのかくれ住けり破れ傘

篝たく矢數の空をほとゝぎす

家ふりて幟見せたる翠微哉

ぬなはとる小舟にうた(歌)はなかり鳧

酒を煮る家の女房ちよとほれた

魚赤たのふだろ人の七回忌追福のために、しれろどちの發句を(集めて / 乞て)手向くさと(す亦是 / なすも則)、讚佛場(乘)の因なるべし

十八日

桁より放つ後光やしゆろの花

青梅や微雨の中行飯煙

十九日

米侯一周忌

ゆかしさよしきみ花さく雨の中

芍藥に帋魚うち拂ふ窓の前

右題學寮

青むめやさてこそしりぬ豐後橋

若竹や是非もなげなる芦の中

春草

春草綿々不可名　水邊原上亂抽榮
似嫌車馬繁華地　纔入城門便不生

右劉原甫

蟻垤

蟻王宮朱門を開く牡丹哉

さみだれや田ごとの闇と成にけり

右の句は去年の夏云ひすてたる句也。百池・月居が日記にも書もらしたるべし。あえてよき句といふにはあらねど、いさゝかおもふしさびあれば、かいつけ侍るなり。

廿日

うきくさも沈むばかりよ五月雨

ちか道や水ふみわたる皐雨

さみだれや鳥羽の小路(徑)を人の行

さみだれに見えずなりぬる徑(コミチ)哉

五月雨や滄(アヲ)海を衝(ツク)濁水

廿一日

さみだれや水に錢ふむ渉し舟

濁江に鵜の玉のをや五月雨

擶(カヽゲ)あえぬはだし詣りや皐雨

さみだれや鵜さへ見えなき淀桂

皐月雨や貴布禰の社燈消る時

小田原で合羽買たり五月雨

閼伽棚に何の花ぞもさつきあめ

廿二日

葉を落て火串に蛭の焦る音

宿近く火串もふけぬ雨のひま

射干して囁く近江やわたかな

雨やそも火串に白き花見ゆる（うら〳〵）

谷風に付木吹ちる火串かな

兄弟のさつお中よきほぐしかな（兄弟ノサツヲ中ヨキハ狩場ノタイマツナントナリ）

あか波て小舟あはれむ五月雨

水古き深田に苗のみどりかな

廿三日

けふはとて娵も出たつ田植哉

泊りがけの伯母もむれつゝ田うへ哉

（類）おその住む水も田に引々早苗哉

参河なる八橋もちかき田植かな

此日より所労のために、よろづをこたりがちなり。發句など案じ得べうもあらねば、いく日もいたづらに過し侍る。

廿四日

さみだれの大井越たるかしこさよ

午の貝田うた音なく成にけり

（類）おそを打し翁も誘ふ田うへかな

五月雨の堀たのもしき砦かな

總得てもどる田植の男哉

葉ざくらの下陰たどる田草取

早乙女やつげのおぐしはさゝで來し

廿五日 芟、刈草也。柞、木也。詩云、載芟載柞、木コリ草カリノ注モ也。

五元集は角が自選にして、もとより自筆に淨寫して剞劂氏にあたへ、世にひろくせんとおもひとりたる物なれば、芟柞の法も嚴なるべし。さるを其集も閲するに、大かた解しがたき句のみにて、よきとおもふ句はまれ〳〵なり。それが中に世に膾灸(炙)せるは、いづれもやすらかにしてきこゆる句也。

廿六日 曲割云、合灸外、鬣クイレルト云意也。

されば作者のこゝろに、これは妙にし得たりなどうちほのめくも、いとむつかし(き)聞えがたきは、闇夜ににしき著たらん類いにて、無益のわざなるべし。

家ゝの句集を見るに、多く歿後に出せるものなり。ひとり五元集のみ現在に出せる也。

廿七日

發句集は出さずともあれなど覺ゆれ。句集出てのち、すべて日來の聲譽を減ず(ろ)(まゝ)るもの也。玄峰集・麥林集なども、かんばせなきこゝちせらるれ。況、汎ゝの輩は論ずべくもあらず。よき句といふものは、きはめて得がたきものなり。

廿八日

其角は俳中の李青蓮と呼れたるもの也。それだに百千の句のうち、めでたしと聞ゆるは二十句にたらず覺ゆ。其角が句集は聞えがたき句多けれども、讀むたびにあかず覺ゆ。是、角がまされるところ(にして)(也)とかく句は、磊落なるをよ

しとすべし。

廿九日 麥林集などはよき句もあれど、よみもて行うち、やがていとはしきこゝちせらるれ。

五元集は其角が現世に出さんとはかりたるものにて、みづから精選して、さて灰（アク）うち紙のつやゝかなるにみづから淨書し、やがて木にのぼすべきほどになりて世を去り、ほゐとげずありしを、芝神明の社僧某、其遺書を祕めおさめもちて、世にも出さず有けるを、我友百万坊旨原といふもの貴き價をつのり、とかくすかしこしらへて其書をゆづり得たり。さて余にはかりて、

五月朔

（ほゐとげず本意也）

二日 毫厘(な)（も）たがはず此書をうつし得させよといへるを、容易にうけがひつゝ、いまだ業もはじめずありけるほどに、いさゝか故ありて、余は江戸をしりぞきて、しもつふさいふきの雁宕がもとをあるじとして、日夜はいかいに遊び、邂逅にして柳居がつく波もふでに逢て、こゝかしこに席をかさね、或は潭北と上野に同行して處

（しもつふさ、下總也。）

三日 ゝにやどりをともにし、松島のうらづたひして好風におもてをはらひ、外の濱の旅寝に、合浦の玉のかへるさをわすれ、とざまかうざまとして、既、三とせあまりの星霜をふりぬ。されば

（とざまかうさま、とかうして也。）

かの百萬、いかで我師江が待べき。やがて龜成なるものに謄寫せしめ、木にゑりてつゐに世にひろうせり。今（すなはち）の世に行はるゝ五元集是なり。原本と引あはせ見るに、いさゝか秋毫のたがひもあらず。よく其角が手澤が失は(す)（ざる）ものなり。その原本、いま又海友玉峨が家におさめもてり。

（謄寫、はせ寫さしめ也、いそぎ寫せしめ也。）

五日 發句とひら句とのわいだめをこゝろ得ること、第一の修行なり。ゆるがせにおもひとるべからず。

（平句の姿なれども發句ニ成ル也。）

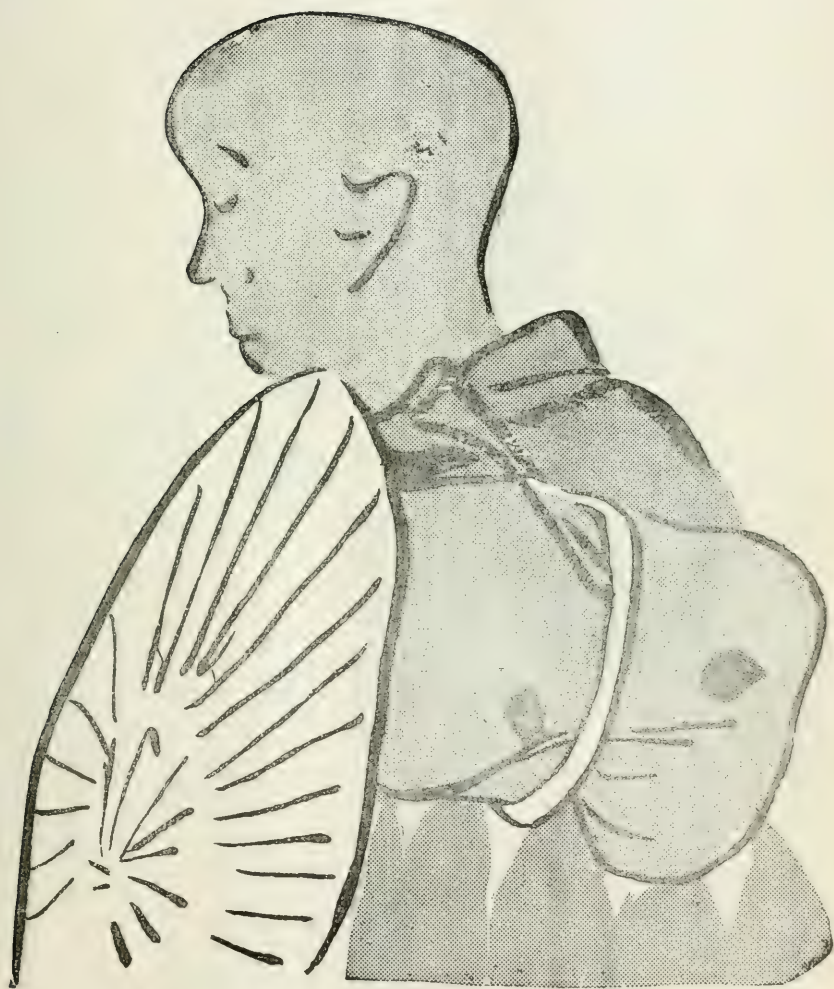
鍋提て淀の小橋を雪の人

右は蕪村が句

（發句に似たる平句也）

近江のや手のひらほどな雲おこる

右は雪堂が句也。

六日

丸山主水が畫たる蝦夷の圖に

昆布で葺軒の雫や五月雨

ある人、咸陽宮の釘かくしなりとて、短劍の鐔(ツバ)に物數奇て、腰もはなたずめで興じける。いかにも金銀銅鉄をもて花鳥を鏤めたる古物にて、千歲のいにしへも(垢す)ゆかしきものなりけらし。されど何を證として咸宮の釘かくしといへるにや、荒唐のさたなり。中〳〵に咸陽宮の釘隱と云はずば、めでたきものなるを無念の事におぼゆ。

七日

ながらの橋杭・井出のほし(干)かはず(蛙)も、今の世の人、持つたへたらましかば、あさましくおぼつかなき事に人中あざみ侍らめ。

八日

常盤潭北が所(藏)(持)したる高麗の茶碗は、義士大高源五が祕藏したるものにて、すなはち源五よりつたへて又余にゆづりたり。まことに傳來いちじるきものにて侍れど、何を證となすべき。のち〳〵はかの咸陽の釘かくしの類ひなれば、やがて人にうちくれたり。

九日

松しまの天麟院は、瑞岸寺と甍をならべて、(めでた)き大禪刹也。余其寺に客たりける時、長老(丈余ばかりなる)古き板の尺余ばかりなるを余にあたへて曰、仙臺の大(太)守中將何がし殿は、さうなき哥よみにておはせし。多くの人夫して名取河の水底を浚(サグラ)せ、とかくして埋れ木を堀もとめて、料紙硯の箱にものし、それに宮城野の萩の軸つけたる筆を添て、二條家へまいらせられたり。これは其板の余りにて、おぼろげならぬもの也とてたびぬ。

刹ハ寺ナドノコト

十日

槻の理のごとくあざやかに也。水底に千歲をふりたるものなれば、いろ黑く眞がねをのべたるやうに、たゝけばくわん〳〵と音す。重さ十斤ばかりもあらん、それをひらつゝみして肩にひしと負ひつゝ、からうじて白石の驛までもち出たり。長途の勞れたゆべくもあらねば、其夜やどりたる旅舍(タビヤ)のすの子の下に抑(かか)やりてまうでぬ。

理ハ木ノモク目也。

からうじて、辛苦して

十一日

そのゝちほどへて、結

城の雁宕がもとに潭北にかたりければ、潭北はらあしく、余を罵て曰、やよさばかりの奇物、うちすて置たるむくつけ法師よ。其物我レ得てん。人やある、たゞゆけ。と須賀川の晋流がもとに告やりたり。晋流ふみを添て、其人にをしへて、白石の旅舎を尋ね、いつ〳〵法師のやどりたるが、しか〳〵の物遺れおけり、それもと

まかでぬ、まかりぬ也。

めにまかでぬといはせければ、驛亭のあるじ、

十二日

かしこくさがし得てあたへければ、得てかへりぬ。後、雁宕つたへて、魚―鶴といへる硯の蓋にしてもてり。結城より白石までは七十里余ありて、ことに日數もへだたりぬるに、得てかへりたるけうの事也。

けう、希有也。

淡々は等閑の輩にはあらず。むかし余、蕉翁・晋

十三日

子・雪中を一幅の絹に書キて賛をもとめければ、淡々

もゝちどりいなおふせ鳥呼子とり

しもつふさ、下總也。

三俳仙の賛は古今淡々一人と云べし。今しもつふさ日光の珠明といへるものゝ家におさめもてり。

十四日

結城の丈羽、別業をかまへて、ひとりの老翁をしてつねに守らせけり。市中ながらも、樹おひかさみ草しげりて、いさゝか世塵をさくる便りよければ、余もしばらく其所にやどりしにけり。翁は酒掃のほか、なすわざもなければ、孤燈のもとに念珠つまぐりて、秋の夜の長きをかこち、余(の)（は）奥の一間にありて、何をねり詩をうめきゐけるが、やがてこうじにたれば、ふと

こうじにたれば、夜ふけたれば也。

ん引かふて、とろ〳〵と睡んとするほどに、廣椽のかたの雨戸を、どし〳〵どし〳〵とたゝく。(マヽ)物するに二三十ばかり、つらねうつ音す。

十五日

いとあやしく胸とゞめきけれど、むくと起出て、やおら戸を開き見るに、目にさえぎるものなし。又、ふしどに入りてねぶらんとするに、はじめのごとくどし〳〵とたゝく。又、起出見るにものゝ影だになし。いと〳〵おどろ〳〵しければ、翁に告ゲて、いかゞはせんなどはかり

けるに、翁曰、ござめれ狸の所爲なり。又來り

十六日　しもとハ撃ユヱンノモノ

うつ時、そこ(足下)はすみやかに戸を開て逐うつべし。翁は背戸のかたより廻りて、くね垣のもとにかくれ居て待べしと、しもとひきそばめつゝうかゞひゐたり。余も狸寢いりして待ほどに、又どし／＼とたゝく。あはやと戸を開(き出れば)翁もやゝと聲かけて出合けるに、すべてものなければ、おきなうちはらだちて、くま／″＼のこるかたなく、かりもとむるに影だに見えず。かくすること連夜、五日ばかりに及びければ、こゝろつかれて今は住うべくもあらず覺えけるに、丈羽が家のおとな(長)ゝるもの來りて云、そのもの今宵はまいるべがらず。此あかつき籔下(ヤブシタ)といふところにて、里一人狸の老たるをうち得たり。

十七日

おもふに此ほどあしくおどろかし奉りたるは、うたがふべくもなくシャツが所爲也。こよひは

いせやすく、いざやすくおはせ也。

いせやすくおはせ(よと)かたる。はたしてその

十八日

夜より音なく成けり。にくしとこそおもへ。此ほど旅のわび寢のさびしきをとひよりたる、かれが心のいとあはれに、かりそめならぬちぎりにやなどうちなげかる。されば善空坊といへる道心者をかたらひ、布施とらせつひと夜念佛して、かれがぼたひをとぶらひ侍りぬ。

　秋のくれ佛に化る狸かな

狸ノ戸ニオトヅルヽハ、尾ヲモテ扣クト人云メレド、左ニハアラズ、戸ニ背ヲ打ツクル音ナリ。

十九日

むかし丹後宮津の見性寺といへるに、三とせあまりやどりゐにけり。秋のはじめより、あつぶるひのためにくるしむと五十日ばかり、奥の一間はいと／＼ひろき座しきにて、つねにさうじひしと戸さして、風の通ふひまだにあらず。

さうじはせうじ也。

其次の一間に病床をかまへ、へだてのふすまをたてきりて有けり。ある夜四更ばかりなるに、

廿日

やまひやゝひまありければ、かはやにゆかんとおもひてふらめき起たり。かはやは奥の間の

くれゐんをめぐりて、いぬゐの隅にあり。とも

廿一日

しびもきえていたうくらきに、へだてのふすまおし明て、まづ右ッの足を一歩さし入ければ、何やらんむく〳〵と、毛のおひたるものをふみ當たり。おどろ〳〵しければ、やがて足をひきそばめて、うかゞひゐたりけるにものゝ音もせず。あやしくおどろしけれど、むねうちこゝろさだめて、此たびは左ッの足をもて、こゝなんと思ひてはたと蹴たり(けるに)露さはるものなし。いよゝこゝろえず、みのけだちければ、わなゝく〳〵庫裡なるかたへ立こえ、法師・しもべなど(うちおとろ)いたく寝こぢたるを、うちおど

寝こちたる、寝いりたる也。

廿二日

ろかして、かく〳〵とかたればみな起出つ。ともし火あまたてらして、奥の間にゆきてみるに、ふすま・さうじはつねのごとく戸ざしありて、のがるべきひまな(けれめ)もとよりあやしきものゝ影だに見えず。みな云ふ、わどのやまひにおかされて、まさなくそゞろごといふなめりと、いかりはらだちつゝみなふしたり。中〳〵にあらぬこ

廿三日

といひ出けるよと、おもなくて我もふしどにい

中〳〵あられもなきこと言出けろよとおもひて也。

りぬ。やがて眠らんとする頃、むねのうへ、ばんじやくをのせたらんやうにおぼえて、たゞうめきにうめきける其聲のもれ聞えけるにや、侶侶竹溪師いりおはして、あなあさまし、こは何

侶は友どちなり。

ごとたすけおこしたり。やゝ人ごゝちつきて、かくとかたりければ、さることこそあなれ、かの狸沙彌が所爲なりとて、妻戸おしひらき見るに、夜しら〳〵と明ヶて、あからさまに見

廿四日

認けるに、椽より簀の子のしたにつゞきて、梅の花のうちちりたるやうに跡付たり。扨ぞ先キにそゞろごと云たりとて、のゝしりたるものども、さなん有けりとてあざみあえり。竹溪師は、あはやといそぎ起出給ひけるにや、おびも結びあえず、ころもうち披きつゝ、ふくらかな

睾丸は陰嚢也。狎ミハ毛ノウエタル如ク也。

る睾丸の米嚢のごときに、白き毛種々とおひか

廿五日

(くれて)、まめやかものはありとも見えず。わ

かきより痒(カユガ)りのやまいありとて、たゞ翠丸を引
のばしつゝひねりかきておはす。其有さまいと
あやしく、かの朱鶴長老の聖經にうみたるにや
と、いとおそろしくこゝろおかれければ、竹溪
師うちわらひて、

　秋ふるや楠八疊の金閣寺　竹溪

廿六日　ひたちのくに下館といふところに、中むら兵左
衞門といへる(福者)有。古夜半亭の門人にて、俳
諧をこのみ風篁とよぶ。ならびなき福者にて家
居つぎ〳〵しく、方貳町ばかりにかまへ、前載(栽)役
園には奇石異木をあつめ、泉をひき(魚)鳥をはな
ち、假山の致景、自然のながめをつくせり。國の
守もおり〳〵入おはして、又なき長者にて有け
廿七日　り。妻は阿滿(オミツ)といふて、藤井某といへる大賈(タイカ)の
女にて、和哥のみち・いと竹のわざにもとうか
らず。こゝろざまゆうにやさしき女也けり。さ
ばかりの豪族なりけるに、いつしか家おとろひ、
よろづものさびしく、たち入る人もおのづから

（つぎ〳〵しく、美麗也。）
（假山致景はつき山なとよきけしきなり。）

うと〳〵しくなりぬ。其家のかくおとろえんと
するはじめ、いろ〳〵のもつけ多かりけり。そ
れが中にいと〳〵身のけだちて、おそろしきは、
一とせの師走、春待りやうに、もちゐいつ〳〵
よりも多くねりて、大なる桶にいくらともなく
廿八日　藏め置ぬ。そのもちゐ夜ごとに減り行きければ、
何ものゝぬすみ去けるにやとうたがひつゝ、桶
ごとに門扉(モンピ)のごとき板を覆て、そのうへに、し
たゝかなる盤石をのせ置たり。つとめてのあさ
(いかにや)とこゝろにくみて打ひらき見るに、
覆(ひ)は其まゝにて有つゝ、もちゐは半ば過へりう
廿九日　せたり。其頃あるじの風篁は、公ケの事にあづ
かりて江府にありけり。されば妻の阿滿(オミツ)、よろ
づまめやかに家をもりて、まいりつかふるもの
までにもなさけふかく、じひごゝろ有ければ、
人みないとをしと、なみだうちこぼすめる。あ
る夜春のもふけに、いつくしききぬをたち縫て
有けるが、夜いたくふけにたれば、けこどもは

（つとめては、あさごと也。）

六月朔

みなゆるしつねぶらせたり。我ひとり一間に引こもり、くま／＼かたくとざし、つゆうかゞふべき假隙（カゲキ）もなくして、ともし火あきらかにかゝげつゝ、心しづかにもの縫て有けり。漏刻聲したゝり、やゝうしみつならんとおもふおりふし、老さらぼひたる狐のゆら／＼と尾を引て、五ツ六ツうちつれだちて、ひざのもとを過行。もとより妻戸・さうじ、かたくいましめあれば、いさゝかの虚白だにあらねば、いづくより鑚（キリ）入べき。いとあやしくて、めかれもせずまもりいたるに、ひろ野などの碍（キユ）るものなきところをゆきこふさまにて、やがてかきけつごとく出さりぬ。阿滿はさまでおどろしともおぼえず、はじめのごとく物縫ふて有けるとぞ。あくる日かの家にとぶらひて、いかにや、あるじの歸り給ふことのおそくて、よろづ心うくおぼさめなど、とひなぐさめけるに、阿滿いつ／＼よりもかほばせうるはしく、のどやかにものうちかたり、

虚白、すきま也。

二日

碍るもの、さはるもののなき也。

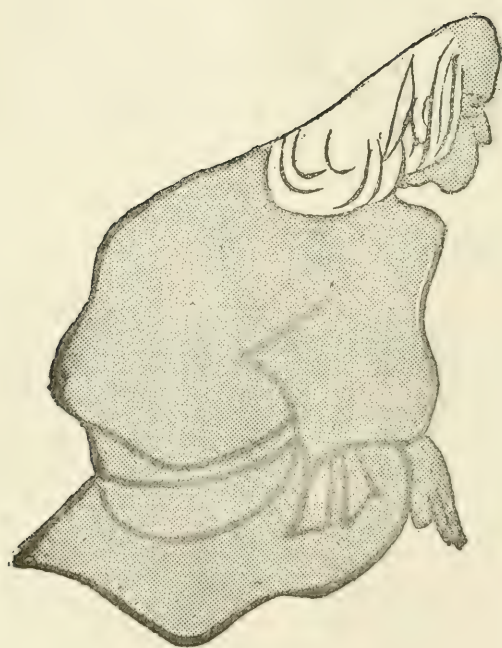
三日

よべ、かく／＼のけいありしとつぐ。聞さへゐりさむくすりよりて、あなあさまし、さばかりのふしぎ有を、いかに家子どもをもおどろかし給はず、ひとりなどかたゆべき。にげもなくも剛におはしけるよといへば、いやとよ、つゆおそろしきとも覺えず侍りけりとかたり聞ゆ。日ごろは窓うつ雨・荻ふく風のおとだにおそろしと、引かづきおはすなるに、その夜のみさともおぼさゞりけるとか、いと／＼ふしぎなること也。

かく／＼のけい、怪位也。

四日

又、晋我（介我門人）といへる翁有けり。一夜風篁がもとにやどりて書院にいねたり。長月十八日の夜なりけり。月きよく露ひやゝかにて、前栽（栽）の千ぐさにむしのすだくなど、ことにやるかたなくて、雨戸はうちひらきつ、さうじのみ引たてふしたり。四更ばかりに、はしなくまくらもたげて見やりたるに、月朗明にして宛（アタカ）も白晝のごとくなるに、あまたの狐ふさ／＼としたる尾をふ

五日

りたてゝ、廣椽のうへにならびゐたり。其影ありり〳〵とさうじにうつりて、おそろしなんどいふばかりなし。晋我も今はえぞたゆべき。くりやのかたへ、たゞはしりにはしりいでつ。あるじのふしたる居間ならんとおぼしき妻戸をうち

六日

（くわ〳〵、とく起給へ也、過急に也。）

たゝきて、くわ〳〵おき出給へと、聲のかぎりどよみければ、しもべ等めざまして、すは賊（ゾク）のいりたるはと、のゝしりさはぐ。そのものおとに晋我もこゝろさだまり、まなこうちひらき見れば、厠の戸をうち（犯）ゝ（タ）きて、あるじとくおきてたすけたばせとどよみゐたるにてぞありけり。我ながらいとあさましかりけりと、のちものがたりしけり。

七日

又、白河の城主、松本大和守殿の家士に、秋本五兵衛といへる撃劍（ゲキケンシャ）者有けり。いさゝか主君のむねに背くこと有て仕を致し、國をさりて名を醉月とあらため、俳諧をこのみ、野總の際（アヘイ）を歷遊して、こゝかしこの豪族にまじはり、漂萍飛蓬

（漂萍ハ集ル也、飛蓬ははちる也。）

のごとく住ゞどころを定めず、まことに風流の翁

八日

也けり。此翁も風篁が家の奥の間に、ふしいたりけるに廣椽の下にて、老媼の三ヶ人（タリ）ばかりつどひたるけはいにて、よすがらつぶやく聲す。何事をかたるにやと、耳そばだてうかゞひゐたるに、ひとつも聞とむべき事なし。たゞ夜いたくふけ行につけつゝ、あさましくかなしくおもはれて、夜明るまでえもいねずありけるとぞ。

九日

得たきものはしゐて得るがよし。見たきものはつとめて見るがよし。又かさねて見べく得べきおりもこそと、等閑に過すべからず。かさねてほゐ（本意）とぐる事はきはめてかたきものなり。

十日

（捧祿ハ知行也。）

梅津半右衛門ノ尉は、ある家のコヽウにて、難波の役（エキ）にも絶倫のはたらきありて感狀を給り、名譽の家也。されば捧祿も一万石を領して、かの家の元老にて有けり。俳諧をこのみて、公務のいとま其角が門に遊びて其雫といへり。角が集にも句多き人なり。此人武府在勤の事卒（オヘ）て、本

國秋田に歸らんとす。角と別離することをかなしび、角を將て行んとす。角したがふことあたはず。角が門人に柴紅といへる有。俳諧老達のものなれば、角すゝめて其雫に倍從して、秋田にくだらしめたり。されば其雫と角と書信絶ることなかりけりとぞ。それが中にめでたき文章の角がふみ有。起居寒暖を問ふことはもとより也。

十一日

次におりからの發句二三章かいつけ、さてその次の段に曰、こたび何月某の日は、義士 四十七士 或家の館を夜討して亡君のうらみを報ひ、ねんなふこそ泉岳寺へ引とりたり。子葉・春帆など、ことに比類なきはたらき有たり。かの

十二日

雨士は此日來我几邊になれて、風流の壯士なれば、わけて意氣感慨に堪ずなど、書きつゞけたり。まことにたときふみ也とて、其雫さうなく祕藏せられたり。そのころ深見新太郎といへる有。何晏・董賢も耻べきほどの美童也けり。其雫、此少年をあはれみ、蕪李の(少)ちぎりふか

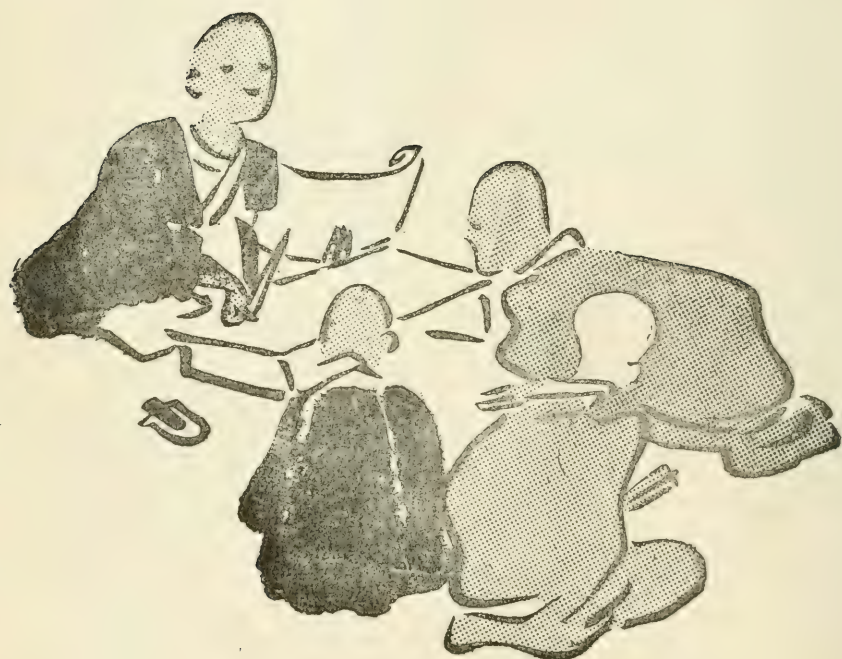
十三日

かりけり。此新太郎、はいかいを好キて丈菖といへり。かの角がふみを得まくおもひて、口にはえ云ひも出さで有しを、其雫その心を悟り、やがて其ふみを得させたり。其後年絶て淡々が弟子に麥天といへるあり。浪花より秋田に行てしばらく客居せり。丈菖、麥天がはいかいに心酔して、又そのふみを麥天にゆづりたり。それよ

十四日

り麥天東都に來り、柳原といふ色郭の地に、あやしきやどりをもとめて住けり。もとより(乏)貧しくて、衣食に給するてだても盡キ、相しる人もなければ、たのみよるべきよすがもなくてありしを、余わかゝりし時、いさゝかこゝろざしをはこびて、轍魚のうれひをたすけ、とかくして月並の俳席をもふけ、西に東に奔走して皷吹しければ、巴人・吏登・寥和・午寂などをはじめとして、たれかれあつまりけるほどに、のち〳〵は草菴にこぼるゝばかりなみ居つゝ、めでたき俳

十五日

席となれり。麥天、本意とぐべきおりを得て、

やがて默齋青峨が門に屬して、名を渭北と更め、万句の式ことゆへなく、文臺のあるじとな(りぬ)れり、おのづから作家の名高く、諸侯の門にも出入てことにときめきたり。されば渭北、故人戀ゝ情を謝せんがために、右の角がふみを余にゆづらんといふ。余曰、予が家長物なし、たゞ此ふみをもて靑氈とす、いかでたび得ん、無聊の事也

十六日

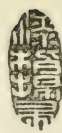
とて、ひたすら避してうけざりけり。そのゝち余は東都を去り、渭北は古人となれり。そのふみ、今誰が家に藏めけるにや、いとこゝろにくき事なり。

右は先師夜半翁自書也。翁、ひとゝせ一夏中のほ句かいつくるとて、かりそめの冊子をつくり、續花つみと題して、日毎に十章斗を記す。四月の末、病のために其業いたづらに成たり。されども六月半なるまで、日並の書つけ有にぞ、其まゝにうちすて置んことほいなしとて、病やゝ愈ての後、雲遊のむかし記得のことゞも、そこはかとなく書つらねて怠りの責をふさぎ、其後は長く等閑に成て終にそのこと止たり。翁物故の後、其冊子を解て横巻となし、聊、文章の意を畵て先師眞蹟の證とする。

天明甲辰夏佛生の日　　月溪誌

（晋風曰、本文は蕪村の草稿をたゞちに影刻したるなれば、闕存せる個所も其のまゝにて、活字に翻刻するに困難を感じ、初稿塗消のところは六號活字を用ひて（ ）の中に入れ、傍に更に小さき活字を以て、訂正されたる文字を附し置きたり。）

俳諧三十六歌僊
蕪村

俳仙集叙

いまはむかし五老井の許六、深川の芭蕉菴に初て入門せし時、翁、試に問テ曰、畫は何のため好や、風雅のためこのむといへり。風雅何のためこのむや、畫のため好といへり。是その學ぶ事二ツにして、用をなす事の一なるを深く感じ給へりと也。茲に吾が友蕪村、其兩ツながらきはめてよくせるも、またく其心なりとつね〴〵予にかたれりき。されば村沒して後、書捨置し反古の中に三十六人の俳士をえらびつ、それが俤のこゝろあてに心にうかべるにまかせて、それ〴〵の影像を寫し、をの〳〵そが得意の句ゝを、おなじ筆してかいつけたるものあり。これは是和哥者流にかつて先達の人〳〵をすぐりて、哥仙と名づけられしに倣へるならん。さればかの石川氏の隱士も、をのが好める處より唐の詩人を選出して、畫家に名だゝる探幽齋にそが肖像を描かしめ、みづから其各詠の詩を書添て梁上に安じつゝ、其山莊をさへ詩仙堂と名づけ、別号をも六ゝ山人として名乘られける。こゝに今書林猷可堂なるもの、かねて村が書畫をことに愛せる物から、こを櫻木にのぼせて、ひろく同好の人〳〵の觀に備んと也。よて予にそれが序詞を需む、今はた村が記念のなつかしければ辭するにをよばず、なにはの芦のみじかき筆とらんとして卒におもへらく、和哥なればこそ哥仙と名づけ、からうたなればこそ詩仙とはなづけぬめれ。さらば今も其例にまかせてこの册子に題目せば、よろしく俳仙集ともいはめやも。

浪花散人不二菴漫誌

寛政己未のとし春三月

おもかげをひとつそへけり朧月

嵐雪

十團子も小粒になりぬ秋の風
許六

曾良

千那

湖の水まさりけり五月雨
去来

ほとゝきす
啼や湖水の
さゝ濁り
丈艸

露川

土芳

北枝

正秀

杜國

木節

如行

舎羅

素堂

寛政十一己未年

京都書林
野田治兵衛
心齋橋筋北久太郎町
鹽屋忠兵衛
大坂書林
同 唐物町
河內屋太助

反古瓢（ほごひさご）
二篇
俳仙堂輯

反古瓢 二篇

ひがし山 俳仙堂輯

此ごろ例の瓢のうちよりめづらしき反古、五中ばかり執出しければ、やがて櫻木にのぼせ風流家に贈る事になん。

一蕪村判　几董　月居左右の句合

一曉臺　世にしる所の付句ある哥仙一巻

一樗良　名高き付句ある哥仙一巻

一俳人ならざる名家の句集

一爰に後水尾院御製あれども、御名は憚りて冊上ニ不レ出

以上

十番左右合

一番

螽　蜳に似し徑まがりて螽かな　月居

蓑虫　みの虫に竹取が宿は荒にけり　几董

蓑虫難云、汝が句は稲畦野衢の句にして、僅に汝が所在をいふのみ。

螽陳云、住所をたしかにいはゞ一句をなすべし。汝が竹取の宿も住所をいふにあらずや、古哥・物語等にはすがる木の葉柳につき、櫻の蘖にまじるなどいひならはせり。竹取が宿、據あるにや。

判云、趣や境やいひかなへたらましかば、いづれも一句の主となすべし。草螽・阜螽・螽斯、本草家の説ミ區ミなれど、判によしなければやみぬ。さて蜳に似し徑、屈曲盤回して或はかくれ或はあらはれ、早稲・晩田の穂末、名もなき草の西ふく風に起伏まで、暗にいひかなへたれど、初五字猶あるべく、意あまりて詞たらずやと申べし。

竹取が宿の蓑虫は柳櫻にすがり、秋風をたのむを陳腐と

し、荒にける高津の宮、故郷の板間にかゝるなどの古哥におもひよせて、竹取が宿と形容せるなり。併、万葉・竹取などにも翁とは申しならはしたれ、宿の本據たしかならざれば、六百番の判にならひて句合にいかゞ。初の番なればかたく〵持と申べし。

二番

秋暮　老そめて戀も切なれ秋の暮　董

野分　求得し菴に入る夜の野分哉　居

老初て身のむかしだにかなしきにといふにもとづき、戀ほど切なるものはあらじといへるに、老が身の事ゝ物ゝに親切なる。況人のきくを憚るも年過ニテ半百ニ不レ稱レ意ニといふがごく、かく老が戀の切なれども、秋のくれのそゞろものゝかなしき、眇ー々タル悲ー望如レ思ヲ何ンともの字をもて自問自答せるなり。又、草の菴ときけばいやしき名なれども世にこのもしく、求ー得タリ千ー金一ー草ノ亭、まづその坊のなつかしく、二見までたづねもやらず、一狐裘にかへていつ移徙の日も撰らばず、おのれがものになして移りける夜、折しもあれ野分のすさまじう耳を驚しける。まことに、津の國のこやの芦ふき野分してといへるさまおもひやられ侍る。しかはあれど豈夫しかり、豈夫しからんやといへば、いかにわびけんもしらず、いひおゝせぬ所あれば、秋のくれいさゝかまさり侍らんや。

三番

蕎麦花　畑ぬしの名をなつかしみそばの花　董

野菊　折とれば莖三寸の野ぎくかな　居

野をなつかしみ一夜ねにけりといへる詞をとりて、畑主が名のゆかしさ、好みて作れるならんや、きかまほしく思ふも、白妙に咲みだれたる中に、赤き茎の色だちたる香氣さへ郁ゝとして、花でもてなすと祖翁の見とがめ給ふも、げに此物に癖する人の多き故ならんかし。野草のながき根ざし、芊小篠につれてひよろ〵と伸過たる莖も、折とればわずかにみつがひとつを得たり。然るを莖三寸と決定したる、俳諧の神率といふべし。よつて至つて好めるそばなれど、野菊をもて勝れりとす。

四番

名　月　月の暮神の火をうつ隣かな　居

十六夜　いざよひや闇より後の月の雲　董

入日さす豐はた雲のけしきにてこよひ月は空にしらるゝ。或は情人怨ニ遙夜一、竟夕起ニ相-思一。と風流にとみける人の待わびたる夕まどひ、たそがれ過る頃、中垣をへだてゝ火うちの音けちくと聞ゆる。さらでだに滅レ燭ヲ憐ニ光ノ滿一ルヲといふなることよひしも、かく高らかに聞ゆるは、げにも生るを放つ神の惠みを尊みて、月並の十五日よりもとに聞とがめたる、名月をうごかさぬ手だれのわざ、又、十六夜は、江山既月を吐て雲のたゝずまるを見付たり。しかはあれどわずかにかけてといふ句によりて、闇のはじめ哉といへる好辭のうへなれば、闇より後としても十六夜の闇の手柄は薄かるべし。闇の字、暗用せば却て新意ならん、いづれふた夜の淸光、まさり劣はあらざるべし。

五　番

落　穗　毛見の衆を見送る路の落穗哉　居

薄　西行の死ぬねがひなし花薄　董

うちわびて落穗拾ふときゝませば我も田面に行ましものを。淸白の郡代・貪欲の代官、いづれにしても見送るみちの落穗、ひらふかひもあらざるべし。

山家集に、花薄心あてにぞ分て行ほのみし道の跡しなければ。其如月をねがひしは艷陽の空に愛けるや。いかなるおりにや、かこち顏なる我淚とは詠じけるぞや。いづれ花薄にてはほまれも有まじ。例の持にてや侍らん。

六　番

落　鰷　うらさびて鮎の脊みゆる川瀬哉　董

鹿　鹿啼や宵月落る山低し　居

鬼貫が句に、夕ぐれは鮎の腹見る川瀨哉。此句、鬼を兄とし、腹を脊にかへて弟たり。俗諺にいふ脊に腹の反轉なるべし。

貫之が、夕月夜おぐらの山になく鹿の、といへる五七五ニつゞめて、宵月の朦朧たるに、嵯峨たる山も低しとはいひおゝせたり。しかれども陳腐の譏まぬがれがたし。さはいへ實情たるをもて勝とや申べき。

七　番

朝寒　いゐの香にしたしくなりぬ朝寒み　董

秋夜　秋の夜やおもへば翌は佛の日　居

火入に兩手をおゝひて鼻柱をあぶり、或は左右の手を帶にはさみてふく息のかたちを見る。いかれる肩・縮る首、朝茶に一時の飢をたすけらるれども、厨下あさげのけむりにはしかず。よく秋寒き朝のけしき、題意に合し、意言外にあふれたり。又、

秋のよは、志士惜日短、愁人知夜長。たゞ我ひとりのためにながく、のこるかたなく物ぞかなしき寐ざめがちなる夜すがら、耿々殘燈背壁影に對して千思万慮の中に、翌の佛忌日を思ひ出たるさま、おもへばの四字力ありて無量の情をふくめり。尤可爲勝。

八番

女郎花　かたはらに大きな石や女郎花　居

蘭　蘭の香や風にかじけぬ花の時　董

小石まじりの岡のべに、ひよろ〳〵とたてりける女郎花の所得顏にみゆるぞ、巨石倚瀨（ママ）草といへる心ばへならんか。昔より女になぞらへて、詩にも作り哥にもよみならはせたるに、それによらずして一句なす。男まさりとや申べき。蘭衰花始白といふに反轉して、風にかじけぬ香氣をいふ。又颯爾涼風吹坐愁群芳歇といふをも含めり。然ども結末こゝろゆかずや侍らん。ふぢばかまはたおりむしのおりたえてをみなへしにはきするなりけり、といへども、男まさりの女郎花には及びがたし。

九番

燒米　燒米を養ひ君にかくしけり　董

新酒　藏あけて旅人入るゝ新酒哉　居

解を待ずして句意顯然。我子にかくすは常のことにして、おゝしそだてまいらすきびわなる君に、ふつゝかなる燒米を取合して一句の趣向とせり。定てしる、乳母が在所よりの贈り物、かねて好める故ならんかし。

富田・わきの濱などいふ所、或は三河路・伊勢路など富豪の酒家、八石入の口をたてそめし日や、旅人はさら也、馬子・雲介ともいはず、法樂になして新酒のできのよしあしをトするならん。句意の活達・豪態、下戸ながらも新酒に心うつりはべる。

〱かくのごし。五色各其色をとにす。いづれをか取、執れをか捨ん。唯其好む處に隨て漫に加ニ判ー詞ヲと云。

辛丑之中秋望前一日　　夜半亭蕪村

十番

雁　初雁や寐よくなる夜のね覺がち　董

鶉　草たかき小家の隣うづら啼　居

寐よくなる夜といふに、炎蒸にくるしみし夏夜のたへがたきまでもおもひいでゝいふにや。寐ごゝろよき秋のよのねざめに初雁の聲を聞て、よくも寐ざめける哉。しかし、今よりの秋のね覺はいかならん初雁金も啼てきにけり。今より後のと未來迄もふくみていふにや。里ばなれの小家がちなる、わけて葎・蓬生たかたかとはへ茂りたるさゝふきのあたり、おもひもけず鶉のめでたき聲を聞とがめて、猶隣ありやなしやと野づらにつゞくさまを、小家のとなりとはいふにや。伏見には町家の裏になくうづら。と古人もきゝとがめたり。左右勝劣難レ分、仍爲レ持乎。

古ー人論シテ詩ヲ曰ク、作ルノ詩之難キ、論ズルコ詩ヲ更ニ難シ。非ニ論ノ之難一、論シテ而得ルノ中正ヲ之難キ也と。我俳諧におけるもまた

附録

安永八亥年於佾月巷興行

歌仙　前書略す

みやこ人とたちまじはりぬ更衣　曉臺
ありやなしやの花探る夏　定雅
かんこ鳥まちもまうけぬ初音して　杉良
淺黃の雲の空しづかなり　美角
舟ながら三里を居る朝月に　雅
海蘿(フノリ)二十駄買入れし秋　臺
古主より菊折添し無心文　角
盆は銚釐(チロリ)に鯽一まい　良
雨寒く小雪小あられ降荒て　臺
簗も案山子も野篩にたく　雅
錦木の返事までどもくらせども　良
手に持ながら扇たづぬる　角
涼しさに秋より丸きなつの月　雅
何もてなさむもろこしの客　臺
習ひきてほろ覺へなるつくし唄　角
春はいよ〳〵死たうもなし　良
宰相も小料理召さるさくら鯛　臺
みだれ音に啼涙のうぐひす　雅
むら松に十里落來る不二おろし　角
有髮の佾のいのるもののけ　臺
産ヲ聲を鎧の袖にいだきとり　良
芋をつきさす萩の折柴　白居
月見若遊女ぢからに引ずりて　臺
門にたもとの笑ひ露けき　角
葉柳にそよめく雨の美しき　雅
何所からふくぞ夏寒きかぜ　良
小き店出して櫛田の出はなれに　居
二親の日もまいる寺なき　臺
此ごろはうたゝ寐に迯夢を見て　角
銭立どのゝ通ふかんじき　居
世とゝもに刀奈美の關の煤拂　良
一あらしよりあくるしのゝめ　角
はつ鰹うる聲若き男にて　臺
咎がましくわびし柴の戸　雅
さく花は名利の地ともしらざりき　良
人のゆきゝもにしきなる春　筆

高濱の漁村に遊ぶ

秋のくれ雨に煙のゆくゑかな　樗良
月もれいづる竹ごしの峯　趙平
花すゝき妖怪(バケモノ)とりに撰れて　宗居
酒よとついで酢をのみにけり　凡水
賦をうたひおのが天窓を叩つゝ　青坊
瀧より起る風のあけぼの　只人
鷹の羽に高根の雪や散すらん　合浦
鳥の子かさぬ香しのびかな　井
長櫃にかくれて人を恨む身は　平
死だ眞似する顔のをかしき　居
蕎麥きりをめつたにしゐる善光寺　水
枝このみして梅もらひけり　坊
鶯の花には否もとゝのはん　人
三千年のうきをつむはる　浦
うらやまし廬山の秋の月の夜は　井
虫のにしきに鹿の細ごえ　平
漸寒みありし風呂敷脊に覆ひ　居
團子もうれず坐禪して見る　水

留守かとて盲の覗くあはれさよ　仝
我子の闇を母のてうちん　人
來る年の節季日出度鬼の役　浦
伊豫のさくらに凪やきぬらん　井
しら涙の鷗は松にとまりけり　平
よろ〳〵禰宜の風を負ひ行　良
何よりも髭の長きぞ見事なる　几董
別を惜しむ咽に涙して　坊
此おもひつげの小櫛の告もせよ　人
名こその關に通ふ雁がね　浦
嵐ふくあらしの月の月のてり　平
月にあらしの嵐ふくいろ　井
おそろしやこよひ產ム子は神ならん　良
旅のやどりに離かざるべき　水
軒の桃花ないそげと吹かけて　坊
春氣に牛のわる嗅きなり　董
燒めしに連哥を書て輿にせん　浦
ぬれてをかしき紙衣の袖　筆

○

雲上より下つ方、名家の發句をこゝにひろひて余興とす。

御製

おもしろさたまらぬ春の小雪かな

同

清十郎きけなつが來て郭公

御脇　笠がよう似たみじか夜の月　後西院

大髭の御車そひて北みなみ　定家卿

ある日參殿ありける折から、公卿達庭上の花見て、發句を望給ひければ

宮人の梅にもこりずさくらかな　板倉周防守

○

ほとゝぎす啼ぬぞ鳥の風情なる　兼好

大福をこゝろの餓鬼も祝ひけり　一休

一輪は落ても見せよ玉椿　利休

下水をいづれや汲んうめ柳　宗旦

大うも小うもなし不二の月　光琳

淺きほど深きものなし春の水　大石内藏之介

雪小雪またげの股にたんまれり　大雅

長き夜は長きにつけて別れ哉　小野おつう

枯藻草誘ふ水だになかりけり　茶店かぢ

夏ながら長き夜もあろうき身哉　遊女かぢ

秋の笘屋畵にうつしては美しき　近松門左衞門

鶯や一聲二ふし三ツの朝　竹田出雲

荻の聲人のおよばぬ所なり　竹本筑後

秋の蚊や達者なものは口ばかり　窮樂

油斷なく大晦もひろ寐かな　畠中銅脉

行あたる壁にもさぞなけふの月　檢校深艸

初おもひひとりねの日の君をまつ　遊女夕霧

萍に首たけはまる野馬哉　、かせん

なき聲におもひを述ろ蛙かな　宮園鸞鳳軒

月に灯をけすは風雅なしまつ哉　森川榮介

下帶に鏡居へけりけさの春　力者源氏山

うつむけど手にはとられず藤の花　、鏡岩

浪花に名たゝる侠客うちより、句をなして点を乞

捻わけてちからためさん藤の花　奴ノ小まん

春の野や手にたつものは鬼莿　鐘ノ太兵衞

晝顔や草の中なる男伊達　朝比奈藤兵衞

幽靈は出ずさびしやけふの月　根津ノ四郎兵衛

狼の寐所見ばや木の子がり　黒舟忠右衛門

死るともかくはなるまじ雪佛　舟こし十右衛門

右の句を來山に評をたのみけるに点を斷てかく

いくつめを若水にせん水車　來山

文政七甲申年仲冬

華洛東山
俳仙堂藏板

たまも集

蕪村輯

序

花のみやこの花にも月にもなれにし風流人の、いにしへの名ある女のうつくしき句をあつめて、玉藻集となづけ櫻木にちりばめんと也。されば我にこのはし書せよと勸にいなみがたくて、三とせのやもふの枕をあけ、かの何むしの這ふごくといへる耻かしみふかきながら、筆を染ぬる頃は、やよひのはじめなりけらし。

千代尼

俳諧玉藻集

平安　夜半亭蕪村輯

春之部

ゆづり葉の莖も紅さすあした哉　イセ 園女

元日や掃ぬ嘉例も松の塵　松葉妻

あたらしう子を思ばや花の春　丹野母

松作御惠や代ゝの春　しげ

佛より神ぞ尊き今朝の春　とめ

去年の眉今朝は嬉しき霞かな　越前 簪

いざ摘ん若菜もらすな籠の内　柏原 すて

今朝見れば若菜に揃ふ地黑好　江戸 秋色

壬申の八月、神風やいせの古郷を立て、古き都のことに來りぬ。その年もあら玉の春を迎て

難波女や何からとはん事はじめ　園女

日參茶屋

長生に德あり姥がすはり餅　、

春風春水一時來

あたらしく揃かけばやあら莚　、

色紙や色好ミの家に筆はじめ　遊女 利生

ぶり〳〵を我は左に見ゆる哉　越前 愛女

鶯や手もと休めんながしもと　大津 智月

うぐひすに晝笑るゝ帽子哉　、

雀して見れば竹にもうぐひすな　紅糸

鶯や衣張つゞく枝つゞき　何某女

はごいたを子にかこつけて曬けり　乃龍妻

かうがいの中や住よきかくれ羽子　新女

梅が香や宵の別れの一ッまへ　てん

こゝろむづかしき折から、人のもとへ送り侍る

初梅や文書とを思ひたち　ヒゼン 紫青

盃やおさへて走るむめの花　梅

梅を折隣もあさき釣瓶哉　園女

はじめての梅にしらすな東風のかぜ　智月娘 錦江

日に梅よ思はず戀の筆はじめ　そめ

氣のはらぬ入相聞て梅見哉　園女

莟なる梅あたゝむる春日かな　智月

寄古今梅

さくさめの何に色こき梅の注連　園女

壬午のとし菅神御忌にあたり給ふに、古き神書を奉るとて

梅年をおよそ八百何十年　、

貫之の梅に

むめが香や慮外ながらも旅勞　、

うつくしい所がほしい梅花　三州牛久保 少女 さち

吹て來た又紅梅にあたろふ歟　紅糸

手をのべて折ゆく春の木艸哉　園女

春めきて人の心はうかぶ〳〵　木曾塚女 つや

雪汁のぬくみいそげよ苔の花　智月

春の野に心ある人の素顏哉　園女

蕗のとう峯には雪のまだ高し　梅曉女

伊奈木川

手操舟風は柳にまかせたり　園女

青柳も宗祇の髭の匂ひかな　丶

風ながら衣に染たき柳かな　尼 芳樹

大木に思へばならぬ柳哉　とめ

朝の霜土に蒲團も被されずと、子な悲しみ(し)人も、ともに流水むなし

親も子も同じ蒲團やわかれじも　秋色

初夜後夜の鐘つきやみしわかれ霜　老尼 松吟

いそがしや菫を摘ばつく〴〵し　園女

右左しれぬわらびの手さき哉　イセ みつ

しのゝめをこらへかねたる雲雀かな　ゼゝ いち

白雲を瀧へ蹴落す雲雀哉　万里

我のせて廓を出よいかのぼり　遊女 たま

すみれ摘ム袖に飛つく蛙かな　ふぢ

雉の尾のやさしくさはる菫哉　秋色

鏡石

雉子の啼鏡のおくや天の原　園女

染たらで山までそめる菫哉　丶

明野

咲ぬ間もものにまぎれぬ菫哉　丶

大和見にまかりさぶらふとて(マヽ)　丶

燕にしばし預ヶる舎かな　丶

かくいへろ我も別をおしみて

契おく燕と遊ん庭の猫　丶

猫ぬすまれて

猫の妻いかなる君のうばひ行　嵐雪妻

おもふ事伏籠にかけて朧月　遊女 のざと

其角をいたむ

明日田鶴のあすも春なし袖の月　籠口

男なら一夜寐て見ん春の山　アフミ とよ

二見

春日てる二見は誰の哥すがた　とめ

くり臺に芹匂はする女かな　響

春雨のあがるや軒に鳴雀　羽紅

形池

陽炎やおのが翅を池の水　園女

蜆とり早苗に習ふこゝろ哉　秋色

菜の花や引のこされて種大根　ブンゴ りん

蝶〳〵は花にはなれぬあいだ哉　すて

物や思ふいはでも花に蝶黄也　ふち

たのしみよ胡蝶も花の一勢　右貞女

明がたにつれてや花の鳥あつめ　田上尼

是でこそ命惜しけれ山ざくら　智月

入相の鐘に痩る歟山櫻　丶

山ざくら散や小川の水車　丶

是を見てあそこへ行ん山櫻　りん

花散りぬこれを名づけて姥櫻　尙白母

欄干に夜ちる花の立すがた　羽紅

キ角をいたむ

土の黄な蝶に手向や花の露　筐分

丶

其人の夢路も花の明り哉　辰下

花にあかぬ浮世男の憎さ哉　去來妹 千子

伊賀越

松山の間〳〵や花の雲　園女

いその宮

鳥の聲花ある方へ四方拜　園女

宮川をわたりまだ夜深し

色あひもわづかに春の夜明哉　丶

御材引

講親のはたごの馬や花かづら　丶

芭蕉翁訪れし時、のうれんの奥ものゆかし梅の花　と有し返し

時雨てや花まで殘る檜笠　丶

花の前に顏はづかしや旅衣　丶

角びしの猿の酒でも花心　丶

蒲團まで朝の寒さや花の雪　丶

舍たつとて

眠たがる人にな見えそ朝櫻　丶

追〳〵に來る人どのさくら哉　丶

尾部山

三絃の拍子にかゝるさくら哉　ヽ

奉納

櫻とは見しりながらや神路山　とめ

そも我は鐘に用なき櫻哉　秋色

花の色は乳母にはなれよ櫻町　ヽ

思夜櫻

夜ざくらや太陽(閻)様のさくら狩　園女

散たとの狀は屆つさくら狩　ヽ

君が代の日傘に成しさくら哉　辰下

我年のよるとはしらず花盛　智月

兄弟はたんだいさかへ花にこそ　ヽ

花咲て近江の舟の機嫌かひ　ヽ

あふ坂や花の梢の車道　ヽ

友憎や翌といふたが花の雨　少女 みね

こしらへて出ればほどなく櫻哉　作州 たゝ女

短尺や兒の手とゞく花の枝　京 みつ

此花に垣も結たし此道に　京文字 けん

ひとつ木のすれ散花のうき世哉　しけ

花に來てうつくしく成心かな　たつ

女とていかにあなどる花の風　響

刈捨し柴に花さく雨中哉　ヽ

落花せん耳もおどろく風の音　すて

花よりも氣にあたりぬる嵐かな　ヽ

尼になりて太秦に住ける時

花をやる櫻や夢のうき世もの　ヽ

花は世のためしに咲や一盛　ヽ

牡丹花は實に香を愛し給へりし也。酒も香あり、花も香あり。さればこそ夢といふ菴にはふして、金角の牛には乘り給ひける也。かゝる風流の身より出來れば、其とはいはんもさらにや。猶あやしきは此翁の和泉の堺を、今や主はおかぬか、主はおかぬかといひもて過させしを、おき申さんと呼入し人ありければ、それよりそこに住給ふとは

ありと也。いふは風流、よぶも風流、いまむきの題にて誹諧の發句す、にげなくはゞかりありや。

笠の圖にどれや氣にあふ春の道　園女

孫を愛して

麥藁の家してやらん雨蛙　智月

溜池に蛙生るゝぬるみかな　ゝ

其後はとに栗津の田にし哉　秋色

出代やこなたの雨もけふ斗　りん

出かはりも頭巾で行や花の頃　園女

かうがいも櫛も昔やちり椿　羽紅

沖にけふ足跡つくる汐干哉　吉次母 桃女

桃の節句を

柳まけ去年の男のとつた髮　遊女 唐士

馳走する身も我なれや雛の客　梅

桃柳かはりありくや女の子　羽紅

桃見せて泣ず尿せず婢子哉　智月

上巳

雛立て局になるや娘の子　りん

いくとせも變らぬものや雛の髮　松吟

なぶらるゝ子持ながらや雛遊び　朱芳妻

相思子

相おもふ酢貝や祝ふ雛遊　幸女

山つゝじ海に見よとや夕日影　智月

山吹の色にはあらぬなじみ哉　いく

寄拾遺款冬

山吹にいしう射たりや雀弓　園女

六田渡

山吹に川よりあがる雫かな　園女

おとこもすなるやまとしまねの月を、女はなして見んとするをあざける人もあべけれど、いさしらずといはんもいかゞ侍らん。いときなき時やり初しこきのこの、ひいふ三ッ四ッ六玉川の水のもとすへもわいだめなくして、いく瀨のわたりをなんたどりしか。さればよ

と、ちうせい駒のくつはづらをひかへて、いさゝかの所の水かひてんとて、見ずもあらず見もせぬ所〳〵を筆の鞭折、はいといふ俳諧の句に、やをらになひ出し山吹よと呼かけて、わたさぬ川をさはあらじかし。とまれかくまれすなるみちは、いなびてもいなとは人のいはせまじものをと、百丸子といへる好ものゝおのこのもとになんまいらせぬ。

山吹に馬乗出して六玉川　園女

山吹やゆらぐ筧のこぼれ水　卯七妻 春子

ゆく春のうしろ姿歟藤の花　去來妻 可南

小塩井

大炊の月出たき皃や藤の花　園女

藤やたゞ君にふれたるむすぼゝれ　〃

ぬれ筒も藤しづみたる暮の色　〃

大和路の望の春も暮にけり　智月

夏之部

四月朔日當麻寺にて

更衣みづから織らぬ罪深し　園女

おなじ日香久山にまかりて

あら美しうの花は誰更衣　〃

はや膝に酒こぼしけり更衣　〃

風流やうらに縮をかくころもがへ　大坂 久女

戀死ナば我塚でなけ郭公　遊女 奥州

眞黒上人にわかるゝ

さつぱりと衣たゝかれころもがへ　智月

何をあてに行やら闇の時鳥　りん

ほとゝぎす風鈴はづして待夜哉　尙白母

入相の響の中やほとゝぎす　羽紅

男なら追へても哉ほとゝぎす　鷗伯妻 くめ

なけや〳〵今はいつなん時の鳥　越前眞久妻 すて

居るやう也木の下闇の時鳥　〃

裏を着て寐よとの鐘か子規　秋色

山里を出ぬやまじめな郭公　宮川政由妹

遲く來るやおくてといはん田長鳥　丶

たゞ有明の月ぞ殘れると吟じられしに

哥がるた憎き人哉時鳥　智月

晝まではさのみいそがず子規　丶

妻にせよ蟻に聲なしほとゝぎす　ふぢ

啼にさへ笑はゞいかに郭公　みつ

うの花や投やりさまを細こゝろ　園女

うの花や品もかはらぬけふの花　丶

富士の根に鰹あがらで道者哉　松吟

みじか夜を長いは夢の思ひ哉　ゼ万、里

爪はづれ花耆に育つや若楓　遊女好女

産衣に夜の目もあはぬ若葉哉　りん

猿澤にて

水わか葉被着て來し人の影　園女

すけのふに見えて位のある白牡丹　久女

白牡丹子は幾人も持けれど　智月

脇ざしは落し差也牡丹見に　常女

ぬれつけて色はかはらじ杜若　祇園下河原かぢ

かきつばたいつ見んとぞ澤ながら　遊女奥州

柏の香に蚣氣遣ふ蚊やり哉　何某母

筆の鞘燒て待夜のかやり哉　尼芳樹

獨寐や夜わたる男蚊の聲佗し　智月

御乳の人添寐ややさし枕蟵　千春妻綾戸

男なき寐覺はこはい蚊帳哉　遊女花崎

手枕や月の布目の蟵の中　園女

かやごしに虹見る朝の凉かな　千雀妻

笋や皮つきこはし甲武者　智月

石竹や誰花こまを捨たらん　遊女かう

白鷺の人音聞や麥の中　ブンゴ愼女

あの中へまろびて見たき青田哉　たつ

手鞠なら散ルともあがれ飛あがれ　智月

あまだれに袖もあやめの匂ひ哉　秋色

祭ちかし入帆につゞく幟哉　園女

今朝見れば猫の踏折あやめ哉　少女花鈴

夏菊や薬とならん床の上　智月

多田院にて

金にて鑄つべき顏や合歡の花　園女

朝皃にきをひぬかした螢哉　備中松山 錦屑

三熊野へ詣ける時

螢火や愛恐ろしき八鬼尾谷　田上尼

辭世

もえやすく又消やすき螢哉　去來妹 千子

螢火を晝はいづくに池の水　イセ みつ

寐所へ扇にすへし螢かな　園女

山深みそれに名たてそ姫くるみ　丶

交りを紫蘇の染たる小梅哉　秋色

水底の影をこはがる螢かな　眞久妻

こゝで見る月さへ涼しむさし野は　紅糸

川中にとゞして見たし夏の月　園女

月影にうごく夏木や葉の光　去來妻 可南

夕立やいとしい時と憎い時　遊女 しづか

夕だちやわづかに降て田の黑み　肥前タシロ 紫白

白雨に呼出さるゝ柏かな　園女

五月雨盛りいちごの雫哉　徹士妻 留里

縫物や着もせで汚す五月雨　羽紅

五月雨や人伺公してかいつぶり　秋色

けし垣の内や硯の小町形　万里

けし咲や雛の小袖の虫拂ひ　可南

けし殘れ菊の太夫が庵の跡　ゼゝ 素糴

あるとなきと二本さしけり芥子の花　智月

なぐられてこぼるゝけしや日の移　丶

素牛を宿して

進出て瓜むく客の國咄し　園女

こゝろ見んと瓜に眉かくはし居哉　丶

はじめて召れたる御方にて

見ぬ方の御園の瓜の汗ふかん　秋色

涼しさや髮結直す朝きげん　りん

くらべあふ股の太サや庭涼み　辰下

涼しさを持あふ風の便かな　越後三條 はつ

涼風や余所の鉦鼓になむあみだ　園女

駕舁の待する森の凉哉　梅

簾さゲて誰つまならん凉舟　秋色

崎風はすぐれて凉し五位の聲　智月

凉しさや夏田の畔の晝あかり　丶

琴彈て老を噺せよ夕凉　丶

どふ見ても何やら足らぬ底淸水　秋色

氷花子餞別

石に針生姜も入ず淸水哉　丶

たそがれのものとや團ひとへ帶　なか

靜掃風軒散髮眠

卷〳〵の中に吹るゝ團扇哉　園女

香附子のたけ見渡して暑哉　紫白

負ふた子に髮なぶらるゝ暑哉　園女

氷花子餞別

歌か尾も馬上の吟の暑かな　丶

夕顏によばれてつらき暑哉　羽紅

夕がほやさすかとひ人も器量ほど　智月

すみよしにて

けふ來ても何の傳授歟夏神樂　園女

子供等にいざ京見せふ祇園會　紫塵母

虫干や具足櫃から轉び出る　遊女小源

其角をいたむ

日〳〵に諸手合せて百合の花　秋色

晝皃や雨降たらぬ花の顏　智月

蟬の羽の輕きうつりや竹の皮　園女

逢坂やいとゞせきあふ蟬の聲　智月

母の墓にて

我影のそれかと覗く落葉哉　丶

我子をいたむ

俤もこもりて蓮のつぼみかな　りん

佛めきて心おかるゝ蓮かな　秋色

蓮池や向ふの社暮深し　越前かめ

朝熊

乙女子がすべりて落よ雲の峯　その女

秋之部

來る秋のきりぎは見する一葉哉　柏原 すて

桐の葉に隱れて匂ふ茗荷哉　伊賀 てう

蜘の巣のたるみ初けり秋の風　素鞸

大内のかざり拜まん星祭　去來妹 千子

七夕の忍びながらも光かな　松吟

かけ針や舟引とめん天川　綾戸

ゆふかづら星合の濱にかけてあり　春女

おもへたゞ硯洗の後の耻　園女

見るもうし獨住居の玉祭　たつ

施餓鬼棚やあるは泪の古位牌　橋水母 性桂

魂祭種のこされし角小豆哉　かめ

朝夕に見る子見たがる踊哉　りん

兀山に秋のとりつく山もなし　園女

朝顔やのいたる人もなつかしく　遊女 花崎

蕣の咲や親にも呵られず　智月

蕣の花を見たさの丸寐哉　龜女

朝顔のはへあふ紅粉のねまき哉　卯七妻 春子

萩に來て筑摩の人か五本松　秋色

猪も抱れて萩のひと夜哉　遊女 高尾

朝露のうちにと萩の使かな　園女

風にかくせ小萩が露の置所　湖隣女

おく露は玉のやうなる小萩哉　行方妻

ほれしより氣づくしや露の玉かづら　柏原 すて

柴艸の露もちかぬるそだち哉　千子

船梁の露はもろ寐のなみだ哉　秋色

初露に風さへしめる扇哉　ゝ

垣越に誰殿やらんふぢばかま　直久妻

はせを葉の破つゞらん松の針　万里

栗の穗の實は數ならぬ女郎花　すて

身を耻よくねるとあれば女郎花　秋色

一羽飛雁に哀の寐覺かな　少女 花鈴

兄去來に供していせへ詣ける道すがら、はつ旅の心を

いせまでのよき道連よ今朝の雁　千子

箱王が指す雁や暮の鐘　秋色
名月や琴柱にさはる栗の皮　園女
寄芭蕉雨
名月や雨にひらいて文字なき葉　丶
神垣や御百度うつてけふの月　丶
名月や筆の言葉の引廻し　丶
雨後曉天晴
得た貝を吹て田みのゝ月見哉　園女
月や空にゐよけに見ゆる簾越　すて
夜明には露まで月のわかれ哉　丶
雈にもゑみて見ゆるやけふの月　たつ
天の戸のすかし物かよ三日の月　みつ
名月や浴衣引さく薄はら　んめ
名月や青うさし入蟵の中　せん
盃を取おとしけりけふの月　鼠九女つね
我年に今宵十五夜の月見哉　池浦知仲妹十五才
月はのふ淋しいでこそ哀なる　京遊女九重
てもあそべ雲が盗んでけふの月　辰下

かつら男の懐にも入や閨の月　八千代
けふの月婆とはよばぬ小町哉　秋色
楊貴妃の睦言もなしけふの月　丶
月みつと和泉式卩も恨かな　丶
名月や志賀の磯田の榎いろ　智月
二ッあらばいさかひやせんけふの月　丶
川上で茶を洗ふたぞ月の影　丶
天水にたまる月影ま一盃　丶
おろ〳〵とむかへば月の御光哉　丶
名月に鴉は聲を呑れけり　丶
立待や痒直さん臼の上　丶
居待月起て守らん枕挽　丶
寐待月舟もしづかに行次第　丶
月見れば父の礒に闇し　羽紅
御所方も夜寒につゞくきぬた哉　ふぢ
腹の立時や礎の片拍子　作州ヲエたゝ女
海邊薄
むら薄輪にはる風や帆の余り　園女

はづれ〳〵栗にも似ざる薄哉　丶

迷子の親の心やすゝき原　丶

秋の野を舞臺に見たる薄哉　万里

秋の千種のあはれなる中に

櫛さすに力なきこそ薄なれ　遊女長門

花野まで出て染たる歟立田姫　蚊市妻のさ

横乘に花野ぞゆるす牛の鞭　万里

法隆寺

二王にもより添ふ葛のしげり哉　園女

風の名の付て吹よる新酒哉　丶

縫ものにつかみそへけりきり〳〵す　紫青

古郷に哀なものよきり〳〵す　正時娘七

定まらぬ朝のくもりやきり〳〵す　んめ

年よれば聲はかるゝぞ蟋蟀　智月

ぎぼうしの傍に經よむいとゞ哉　可南

小萩の露のいたはりもむつましく
聞えける、呉猛といひし人のむか
しに思ひあはせて

秋の蚊やしかも拂はで老の伽　秋色

けうこつに誰かさはるぞ鵙の聲　たつ

梅が枝にこそ鶯は巣をくへ

鵙子をそだてあぐるや茨くろ　素羣

粟まきの跡踏つけに村雀　可南

嵐蘭子を悼む

鳴出して米こぼしけり稲雀　智月

淋しさを我もの顔や秋の鳩　丶

沙汰なしに渡りてゐるか四十雀　田上尼

やどり木に蜻蛉もかよへ捨階子　辰下

小原女や野分に向ふ抱帶　園女

山田守猿手の栗の鳴子かな　しけ

曉を引板屋にかはる妻も哉　秋色

おもしろや水の春とは引板の音　園女

亡父の七回忌をとぶらふに、我と
同じ道なる人〳〵來りければ

案山子にも哀さまけじ尼仲間　智月

とまり〳〵稲すり哥もかはりけり　京ちね

七度の花のはじめや早稻の花　智月
茅屋つむ艪もかろき世を誰が家　秋色
どの色をわけて折なんけふの菊　そめ
菊の花見に來てゐるか石たゝき　可南
菊賣や障子の外も千代の聲　松吟
同じ香に菊や匂ひて色がはり　卯七妻
白菊にうはの空なる銀化粧　秋色
賓や菊焙炉になりし人の肌　籠口
汲〆や汲〆菊の素顏のけふ來ずば　花榴

すみよし奉納の内

成仲の松の祝ひをけふのきく　園女
淋しさは素縫も同じきくの裏　尼 花千
菊の香ややれ誰やらがうしろ影　唯次妻
けふの菊朗詠集を御家流　園女
姉だけに小菊の中に殘るかや　娘 いち
菊を嚙ム菊の葉先の揃哉　辰下

重義亭にて

世の人のしらぬ花あり深山椎　園女

抱帶とかずに宿の夜寒哉　たつ
秋ひとりさへられもせぬ寐覺哉　智月

旅なれてまどろむほどになる宵を
思寐とこそ人もしりけれ。といふ
心によりて

秋の夜に寐習ふ旅の舍かな　千子
秋の夜につかはれはたすれん木哉　月峯妻
我人の合点しながら秋の空　京文字 けん

彥山に詣、同國五百羅漢を拜み侍
るとて、樵の通ひける紅葉谷とい
ふ所に入、道のほど五六里、さら
に外の梢も見えず、同行に申侍り
ける

秋の道一日悲しもみぢ谷　田上尼
かつら子の髮にさゝばや薄楓　可南

冠里公へはじめて召れ侍りて

武士の紅葉にこりず女とは　秋色
宰人の肩尖りけり秋のくれ　そめ
知てしらぬ身のほど悲し秋の暮　智月

ゆく秋や三十日の水に星の照　園女

冬之部

仰どはちがひゆへども、こなたは
まことゝ存りて

いつはりとこちは思はじ初時雨　佐渡遊女 みほの

加茂貴舟夜〻時雨けり川の音　定起卿娘 連女

だまされし星の光や小夜しぐれ　羽紅

近道を阿闍梨につるゝしぐれ哉　園女

神祇

此猿はやしろ久しき時雨哉ゝ

ときは山もとかうはいはぬ時雨かな　肥後求麻里木氏 藤戸女

兒の親の手笠いとはぬしぐれ哉　遊女 夕霧

はら〳〵と今のはたしかしぐれ哉　歩柳

蕉翁初七日をいたむ

待うけて涙見あはす時雨哉　かや

我袖の蔦や浮世の村しぐれ　遊女 薄雲

さらはへをいはふかいのふ神無月　きく

おく霜やけふ立尼の古葛籠　園女

蕉翁二七日　廟参

花桶の鳴音悲し夜半の霜　可南

木〳〵の根の獨くつろぐ霜こぼれ　智月

置あける蒔畫の松の月に霜　藤戸女

銀箔をはらはゞやがて笹の霜　辰下

月影の針もてさすか冬の空　何某母

なぐさめし琴も名殘や冬の月　万里

千鳥啼出れば雌か雄かの　遊女 いくよ

琴ほどの島のなだれて千鳥哉　錦屑

しがらみの雪踏ちらす衛かな　りん

寶晋齋のもとに馬下し侍りて

霜やけを不二の光にこゝろ儘　園女

初雪の疊ざはりやしゆろ箒　智月

初ゆきや海のきはだつ葭の上　せん

闌子、東行を送る

雪に思へ富士に向はゞ故郷の繪　園女

わざとさへ見に行旅やふじの雪　智月

佛の日誰にわかれの雪の肌　ゝ

老のねざめのかぎりなきに

雪やけや夜毎に孫が手をふかせ　ゝ

いふまいと思へど雪吹死手の旅　ゝ

雪見には殿達耻る心かな　少女さよ

少將の尼のはなしや志賀の雪　巳禰の尼

大雪や籔と〳〵の切通し　秋紅

月ならで日をやさはりの雪女　大坂透延母

此頃の雪や案山子のなれの果　尼蓬生

京の人に逢て

白からじ京の御目から江戸の雪　秋色

會者定離笹に霰や松の雪　ゆき

かはゆさや雪を負(マヽ)ねてかへる猫　ゼゞ堀江氏妻

白鷺の鳴ずば雪の一丸け　光貞妻

霜やけの手をふいてやる雪丸げ　羽紅

この足を湯屋までのさん月も雪　辰下

次郎といへるを連て、夫の夜咄しにゆきしを

我子なら供にはやらじ夜の雪　とめ

蹴あぐれど裳にたまる霰かな　遊女ときは

降にけり落ては消る玉霰　七

吹落す木の葉に包む霙哉　錦江

しみ〳〵と子は肌につく零(霙カ)哉　秋色

蕉翁二七日　廟參

打こけて指ぬき氷るなみだ哉　素蟄

待春や氷にまじる塵あくた　智月

十德の袖は涙の氷かな　秋色

幽靈に水呑せたか鉢たゝき　智月

鉢たゝき夜更て道の廣さ哉　ゝ

富士垢離や女の上の物わらひ　訓女

しれものゝ舍歟寒し椚木原　園女

米炊ば寒し雀の羽の音　せん

へんさんを着ても寒し假位牌　錦江

哥の島

とも寐して鍼立寒し戀の丸　秋色

路通に別とて

見ゆるさへ旅人寒し石部山　智月

年よれば鼠もひかず寒かな　園女

鮟鱇や沓のとなへも二葉より　秋色

わすれ花喪になく御乳の哀哉　濃州 かね

さまのよさ手から又〳〵かへり花　万里

水仙の花の高さの日影哉　ち月

いなる事ありて

冬椿神をだましに來はせぬぞ　梅曉女

岡崎村に住侍りける頃

うしなはで落穗をたくや大師講　可南

石女や人形作る千團子　キち

嵐雪三回忌　題拂子

冬枯に畢竟おとる尾花かな　秋色

あるほどの伊達仕盡して帋子哉　園女

さゆる夜のともし火凄し眉の(劍カ)釼　〃

凩やこぼれて晝の牛の聲　〃

獨居やしかみ火鉢も夜半の伽　秋色

遊戲

寄れ枕ふり海鼠になりし鼠哉　〃

御火燒の盆(盃)ものとるな村烏　智月

木がらしや色にも見えず散もせず　智月

凩を杖に突けり老の坂　〃

我形の哀れに見ゆる枯野哉　〃

芭蕉翁三七日

像の畫に物いひかくる寒さ哉　〃

四七日

冬の日や老もなかばの隠れ笠　〃

六七日

跡の月思へば氷るたゝき鉦　〃

盡七日

嚙しだく反古のはさむ生火桶　〃

酒盛や一雫にてとしの暮　〃

おしよせて鶯一羽としの暮　〃

年内立春

冬の春心の外や梅の花　〃

大江山柊しげる世なりけり　越前 ゆき

さゞ浪や落葉衣のしほり染　藤戸女

露は秋、しぐれは冬となんさだめてや、こそ〳〵と反古とり出て、火桶ひとつをはりまはす。是は何の翁ぞ。俊成・頼政をならふにもあらず、たゞひとつにて吾冬を過さむと也。春より後はといはゞ、あらばあらまし、われなばもとのつちくれこそと、もしとはゞかく答ふべき

膝もとの折敷に糊の木の葉哉　園女

閑居

葉の音に犬吼かゝる嵐哉　〃

ゆくとしや老を譽たる小町の繪　〃

籠菊があふぎも古しとしの暮　〃

大としや手の置れたる人心　羽紅

へだてゆくまゝの俤かきくらし
雪とふりぬるとしの暮かな

俊成の女とは誰としの暮　園女

荅雲扇和尚　園女

ある書の旨趣拜し申候。本求眞不求妄大道の根源、誰もぞんじ候所、憚ながらめづらしからず候。一心源頭にのぼりての所作は柳綠花紅、只其まゝにして、常に句をいひ哥につゞりてあそび申候事ニて候。無益の口業にて候はゞ、一切經も無益の口業にて候。法くさき事は嫌ひにて、所作所行は念佛と句と哥と也。極樂へ行ばよし、地獄へ入ればめでたし、そこに更ニ無分別ニ候。申たき事候へども、歩行なりがたく候まゝ御ゆるし候へかし。

和玉韻

自己ノ念其レ不レ覓ズ心　法灯已ニ耀ク一灯心
市中點々有ニ明鏡一　坌ク識ル人間清淨心

誰か見んたれかしるべき有にもあらず
無にもあらざる法のともし火

わが日の本は和哥の國にして、天地をうごかし鬼神を感ぜしめし女の哥仙、かぞふるにいとまあらずとや。其三十一文字の末葉を拾ひて五七五を並べ、花は盛に月は隈なきとのみに片よらず、花にも雪にもほとゝぎすにも、遠近の野山に心のあゆみをはこび、自在に遊ぶ人〳〵又數をしらず。夫を集め梓にゑりて、此後の人の先達になさんとは、うれしき荷擔の人なるかし。さるを此双帋にわなみが愚なるヿ葉をそへよと有、いなむにゆるしなければ、硯とうでゝ禿たる筆をとることになりぬ。

東都　田　女

安永三年
甲午八月吉日
平安書舗　安藤八左衛門梓

芭蕉翁付合集

上・下

蕪村選

はいかいの繼句をまなばんには、まづ蕉翁の句を諳記し、付三句のはこびをかうがへしるべし。三日、翁の句を唱へざれば、口むばらを生ずべし。されど翁の句〳〵、ひろく諸集にありて見やすからず。よてこれを抄出してこれを約かにし、道にこゝろざしあるものあれば則与ふ。門下の小子つゐに木に刻みて、書寫の勞をはぶくといふ。

安永甲午中秋

平安　紫狐菴蕪村誌

芭蕉翁付合集　巻之上

平安　紫狐菴蕪村選

しづかに酔て蝶をとる哥
殿守がねむたがりつる朝ぼらけ
はげたる眉を隠すきぬ〴〵　翁

つくしまで人の娘をめしつれて
彌勒の堂におもひうちふし
待よひの鐘は墮(オチ)たる草の中　翁

親と碁をうつ晝のつれ〴〵
餅作る奈良の廣葉を打合せ
贄に買るゝ秋のこゝろは　翁

二月の蓬萊人もすさめずや
姉待牛の遲き日の影

胸あはぬ越の縮をおりかねて　翁
　内外の下向しづかなりけり
既にたつ討手の使いかめしき
　一夜の契り錢かづけたる　翁
雪を持樫やさはらに露見へて
　虹のはじめは日も匂ひなき
しづみては溫泉の醒す月すごし　翁
膝琴に明の風雅を忘れざる
　涙おり〳〵牡丹散つゝ
耳うとく妹が告たる時鳥　翁
　京の月夜はさぞ躍らん
物となくものやむ人の獨寐に
　眉ぬく袖の翠簾にうつぶき　翁

　ひともじ買に雪の山道
哀さは苫やに捨し破れ網
　何やらなくて塩やかぬ浦　翁
　日のちり〳〵に野に米を刈
我庵は鷺に宿かすあたりにて
　髪はやす間をしのぶ身の程　翁
僞のつらしと乳をしぼりすて
　きえぬそとはにすご〳〵となく
影法の曉寒く火を燒て　翁
　隣さかしき町に下り居る
二の尼に近衞の花の盛り聞
　蝶はむくらにとばかり鼻かむ　翁
乘物に簾透顏おぼろなる
　いまぞ恨の矢をはなつこゝろ

盗人の記念の松の吹おれて　翁
烏賊はゑびすの國のうらかた
あはれさの謎にもとけし時鳥
秋水一斗もりつくす夜ぞ　翁
日東の李白が坊に月を見て
巾に木槿をはさむ琵琶打
うしの跡とぶらふ艸の夕暮に　翁
初雪のことしも袴きてかへる
霜にまた見る蕣の食

第三

野菊までたづぬる蝶の羽おれて　翁
奥のきさらぎを只なきになく
床ふけて語ればいとこなる男
縁さまたげの恨みのこりし　翁

口おしと瘤(フスベ)をちぎるちからなき
明日は敵に首送りせん
小三太に盃とらせひとつうたひ　翁
かぶろいくらの春ぞかはゆき
櫛箱に餅すゆるねやほのかなる
鶯起よ紙燭とぼして　翁
篠ふかく梢は柿の蔕(ヘタ)さびし
三線からん不破の關人
道すがら美濃で打ける碁を忘る　翁
まどに手づから薄様をすき
月にたてる唐輪の髪の赤枯て
戀せぬ砧臨済をまつ　翁
秋蟬の虛(カラ)に聲きくしづかさは
藤の實つたふ雫ほつちり

袂より硯をひらき山陰に　翁
　こほりふみ行水の稲妻
歯朶の葉を初狩人の矢に負て
北の御門をおし明の春　翁

四句目
らうたげに物よむ娘かしづきて
　燈籠ふたつに情くらぶる
露萩のすもふ力を撰ばれず　翁
　命婦の君より米なんどこす
まがきまで津浪の水にくづれ行
　佛喰たる魚解きけり　翁
縣ふるはな見次良と仰がれて
　五形（ゲンゲ）菫の畠六反
うれしげに囀る雲雀ちり〳〵と　翁

　晦日をさむく刀賣る年
雪の狂呉の國の笠めづらしき
　襟に高雄が片袖をとく　翁
あだ人と樽を棺に呑ほさん
　芥子のひとへに名をこぼす禪
三ヶ月の東は暗く鐘の聲　翁
　おもひかねつも夜の帶引
こがれ飛たましゐ花のかげに入

ア句
　その望の日を我もおなじく　翁
花蕣馬骨の霜に咲かへり
　鶴見るまでの月かすか也

五句目
風吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　翁
　うきははたちを越る三平（マルガホ）
捨られてくねるか鴛の離れ鳥

火をかぬ火燵なき人を見ん　翁

霧下りて本郷の鐘七ツきく
　冬待納豆たゝくなるべし
花に泣櫻の黴とすてにける　翁
　なかだちそむる七夕のつま
西南に桂のはなのつぼむとき
蘭のあぶらに卜木うつ音　翁
はやり來て撫子かざる正月に
　つゞみ手向る辨慶の宮
寅の日の旦を鍛冶の急起て　翁
　泥に心の淸き芹の根
粥すゝるあかつき花にかしこまり
　狩衣の下に鎧ふ春風　翁

ワキ
霜月や鸛(カウ)の彳ゝ(ツク)ならびゐて
　冬の朝日のあはれなりけり　翁
音もなき具足に月のうす〳〵と
　酌とる童蘭切にいで
秋の頃旅の御連哥いとかりに　翁
　庭に木曾作るこひの薄衣
夏深き山橘にさくら見ん
　麻かりといふ哥の集あむ　翁
旅衣笛に落花を打拂
　籠輿ゆるす木瓜の山あい
骨を見て坐(ソヾロ)に泪ぐみうちかへり　翁
　萱屋まばらに炭團つく臼
芥子あまの小坊交りに打むれて
　おるゝはすのみたてる蓮の實　翁

釣柿に屋根ふかれたる片庇
　豆腐つくりて母の喪に入
元政の草の袂も破ぬべし　翁
とくさ刈下着に髪をちやせんして
　檜笠に宮をやつす朝露
五句目 銀に蛤かはん月は海　翁
江戸櫻心かよはん幾時雨
ワキ 薩埵の霜にかへり見る月　翁
貝ひろいしゆく磯馴て
　酔ては人の肩に取つく
五句目 けふの賀のいで面白や祖父が舞　翁
　湊入帆のみゆる家根越し
世の中を晝に逃れたる茶の煙

妹がかしらの香やさしき　翁
かたみてふ袋のきれのはつに
　夢を占きく閨の朝風
津の國の難波と物うりて　翁
一巻の連哥をとゞむ此寺に
　苗代もえる雨こまか也
鷺の巣のいくつか花に見へ透て　翁
　西日のどかによき天氣なり
四句目 旅人の虱かき行春暮て
　はきも習はぬ太刀の鞘（ヒキハダ）　翁
月待て假の内裏に司召
　籾臼つくる杣がはやわざ
鞍置る三歳駒に秋の來て　翁

名はさま〴〵に降替る雨
入込に諏訪の涌湯の夕間暮
中にも春の丈き山伏（高）　翁
いふ事を唯一方へ落しけり
ほそき筋より戀つのりつゝ
物おもふ身に物喰へとせつかれて　翁
月見る顏の袖おもき露
秋風の船をこはがる波の音
雁行方や白子松坂　翁
千部讀花の盛りの一身田
順禮死ぬる道のかげろふ
何よりも蝶の現ぞあはれなる　翁
文かくほどの力さへなき
羅に日をいとはるゝ御かたち

熊野見たきと泣給ひけり　翁
手束弓紀の關守が頭に
酒ではげたるあたまなるらん
双六の目をのぞくまで暮かゝり　翁
假の持佛にむかふ念佛
中〱に土間に居れば蚤もなし
我名は里のなぶり物なり　翁
月夜〱に明渡る月
憎まれていらぬ躍の肝を煎
花薄あまりまねけばうら枯て　翁
唯四方なる草菴の露
一貫の錢むつかしと返しけり
醫者の藥は飲ぬ分別　翁

いろ〳〵の名もむつかしや春の草
ワキ
うたれて蝶の夢はさめぬる　翁
海松かる磯にたゝむ帆莚
月出て關屋をからん酒もちて
四句目
民の竈の烟る秋風　翁
しるしたて堀にやりたる色柏
あられの玉を振ふ簑の毛
鳥屋籠る鵜飼が宿に冬の來て　翁
火をたくかげに白髮たれつゝ
街道は道もなきまで切せばめ
松笠おくる武隈の土産　翁
草枕おかしき戀も仕習ひて
ちまたの神に祈るかねごと
お供して當なき我も忍ぶらん　翁
此世の末もみよし野に入
朝つとめ妻帶寺の鐘の聲
けふも命と嶋の乞食　翁
かじけたる花し散なと茱萸折て
朧の鳩の寐所の月
物いへば木魂にひゞく春の風　翁
剛力がけつまづきたる笹傳ひ
棺をおさむる塚の荒芝
初霜はよしなき岩を粧らん　翁
ゐびす衣を縫〳〵ぞなく
明日しめむ雁を俵に生置て
月さへ凄き陣中の市　翁
御輿は眞葛が奥にかくし入

小袖袴をおくる戒の師
我ほんの母に似たるもゆかしくて　翁
貧にはあらぬ家はそれとも
奈良の京持傳へたる古今集　翁
花に苻切る坊の酒藏
鶯の巣を立そむる羽根遣ひ
蚕種動きて箒手に取
錦木を作りて古き戀を見ん　翁
しときいはふて下されにけり
片隅に虫歯かゝへて暮の月
二階の客のたゝれたる秋　翁
はなちやる鶉の跡は見へもせず
稲の葉延のちからなき風
發心の初にこゆる鈴鹿山　翁

蔦の羽も刷ぬはつしぐれ
ワキ　一ふき風の木の葉しづまる　翁
股引の朝からぬるゝ川越えて
狸をおどす篠張の弓
五句目　まいら戸に蔦這かゝる宵の月　翁
はき心よきめりやすの足袋
何事も無言の内はしづかなり
里見え初て午の貝ふく　翁
ほつれたる去年のねござのしたゝるく
芙蓉の花のはらはらとちる
吸物はまづでかされしすいぜんじ　翁
此春も盧同が男居なりにて
さし木つきたる月の朧夜

苔ながら花に並ぶる手水鉢　翁
　雪げに寒き嶋の北風
火ともしに暮れば登る峯の寺
　時鳥皆啼仕舞たり　翁
瘦骨のまだ起直る力なき
　隣をかりて車引こむ　翁
うき人を枳殼垣よりくゞらせん
　思ひ切たたる(マヽ)死ぐるひ見よ
青天に有明月の朝ぼらけ
　湖水の秋の比良の初霜　翁
柴の戸や蕎麦ぬすまれて哥をよむ
　布子着習ふ風の夕ぐれ
押合て寐ては又たつかりまくら　翁

市中は物のにほひや夏の月
ワキ　あつし〳〵と門〳〵の聲　翁
二番草取りも果さず穗に出て
　灰うちたゝくうるめ一枚
五句目　此筋は銀も見しらず不自由さよ　翁
　只どひやうしに長き脇指
草村に蛙こはがる夕間暮
　蕗の芽とりに行燈ゆりけす　翁
道心のおこりは花のつぼむ時
　能登の七尾の冬は住うき
魚の骨しはぶる迄の老を見て　翁
　待人入し小御門の鎰
立かゝり屛風を倒す女子共
　湯殿は竹の簀子侘しき　翁

茴香の實を吹落す夕嵐
　僧漸寒く寺に歸るか
さる引の猿と世を經る秋の月　翁
　年に一度の地子はかる也
五六本生木つけたる瀦
　足袋ふみよごす黑ぼこの道　翁
追立て早き御馬の刀持
　でつちが荷ふ水こぼしたり
戸障子もむしろがこひの賣屋敷　翁
　てんじやうまもりいつか色づく
こそ〳〵と草鞋を作る月夜ざし
　蚤をふるひに起し初秋　翁
そのまゝにころび落たる升おとし

　ゆがみて蓋のあはぬ半櫃
草庵に暫居ては打やぶり　翁
　命うれしき撰集の沙汰
さま〴〵に品かわりたる戀をして
　浮世の果は皆小町なり　翁
何故ぞ粥すゝるにも涙ぐみ
　御留主となれば廣き板敷
手のひらに虱這はする花の陰　翁
灰汁桶の雫やみけりきり〴〵す
ワキ　油かすりて宵寐する秋　翁
新疊敷ならしたる月影に
　ならべてうれし十の盃
五句目　千代經べき物をさま〴〵子日して　翁

摩耶が高根に雲のかゝれる
夕飯にかますご喰へば風薫る
蛭の口處をかきて氣味よき　翁
ものおもひけふも忘れて休む日に
迎せはしき殿よりのふみ
金鍔と人によばるゝ身のやすさ　翁
町内の秋も更行明やしき
何を見るにも露ばかり也
花とちる身は西念が衣着て　翁
柴さす家のむねをからげる
冬空のあれに成たる北おろし
旅の馳走に有明しおく　翁
すさまじき女の智惠もはかなくて
何おもひ草狼のなく

夕月夜岡の萱ねの御廟守る　翁
又も大事の鮓を取出す
堤より田の青やぎていさぎよき
加茂の社は能きやしろなり　翁
物うりの尻聲高く名乘すて
雨のやどりの無常迅速
晝ねぶる青鷺の身のたふとさよ　翁
肩でやしなふ駕籠かきが親
足もとに菜種は臥て芥の花
茶を煮て廻す泊瀨の學寮　翁
むつかしや襟にさし込蜘の兒
硯法度とこひやせかるゝ
夜の雨窓のかたにてなぐさまん　翁

愚なる和尙も友を秋の萫
　高みに水を揚る箱戸樋
山鳥のわかるゝ頃はしづかなり　翁
　焦す疊にいたく手を燒
見ぬふりの主人に戀をしられけり
　姿半分かくす傘　翁
松茸を近江路からは澤山に
　そくさいな子は下〳〵に有
老たるは御簾より外にかしこまり　翁
　出駕籠の相手揃ふ起〳〵
かん〳〵と有明寒き霜ばしら
　榾堀かけてけふも又來る　翁
若黨の羽織ぬがせて假まくら
　ちいさき顏の身嗜よき

商もゆるりと內の納りて　翁
　四日の月もまだ細き影
秋來ても畑の土のひゞわれて
　雲雀の羽のはえ揃ふ聲　翁
正月の末より鍛冶の人雇
　濡たる俵をこかす分ヶ取
晝の酒寐てから醉のほかつきて　翁
　まんまと今朝は鞆を乘出す
結搆な肴を汁に切入れて
　見せより奧に家はひつ込　翁
柴栗の葉もうつすりと染なして
　國から來たる人にものいふ
鬧しう一臼搗て供支度　翁

處〳〵に雉子の啼たつ

家普請を春の手透にとり付て

上のたよりに上る米の直　翁

五句目 宵の内はら〳〵とせし月の雲　丶

此國の武仙を名ある繪(に)かゝせ

京に汲する醒井の水

玉川やおの〳〵六ッの所見て　翁

芭蕉翁付合集卷之上終

芭蕉翁付合集　卷之下

紫狐菴蕪村選

藪越シはなす秋の淋しき

御頭へ菊もらはるゝめいわくさ

娘をかたふ人にあはせぬ　翁

奈良通ひおなじつらなる細基手

ことしは雨のふらぬ六月　翁

預けたる味噌取にやる向河岸

ひたといひ出すお袋の事　翁

終宵尼の持病を押へける

こんにやく斗殘る名月　翁

初雁に乘懸下地敷て見る

露を相手に居合ひとぬき　翁

町衆のづらりと醉て花の陰

門で押るゝ壬生の念佛　翁

東風かぜに糞のいきれを吹まはし　丶

たゞるるまゝに肱わづらふ
江戸の左右向ひの亭主登られて　翁
こちにもいれどから臼を借す
方〳〵に十夜の内の鐘の音　翁
桐の木高く月さゆるなり
門しめてだまつてねたる面白さ　翁
ひろふた金で表がへする
初午に女房の親子振舞て　翁
又此春もすまぬ牢人
法印の湯治を送る花盛り　翁
なはてを下りて青麥の出來
どの家も東の方に窓を明ヶ
魚に喰あくはまの雜水　翁
千鳥啼一夜〳〵に寒ふなり
未進の高のはてぬ算用　翁
隣へも知らせず嫁をつれてきて
屛風の陰にみゆるくわし盆　翁

空豆の花咲にけり麥の緣
ワキ　晝の水鷄のはしる溝川　翁
上張を通さぬほどに雨降て
そつと覗けば酒の最中
五句目　寐處に誰も寐てゐぬ宵の月　翁
晩の仕事の工夫するなり
姉をよい處からもらはるゝ
僧都のもとへ先文をやる　翁
風細う夜明烏の啼わたり
家の流れた跡を見に行
鱠汁わかひ者よりよくなりて　翁
枯し柳を今におしみて
雪の跡吹はがしたる朧月
ふとん丸げてものおもひゐる　翁

不屆な隣と中のわるふなり
　はつち坊主を上へあがらす
（泣）云事のひそかに出來し淺ぢふに　翁
　客を送りて提る燭臺
今の間に雪の厚さを指て見る
　年貢すんだとほめられにけり　翁
息災に祖父のしらがのめでたさよ
　堪忍ならぬ七夕の照り
名月の間に合せたき芋ばたけ　翁
横雲にそよ〳〵風の吹出す
　晒の上に雲雀囀る
花見にと女子ばかりが連立て　翁
片はげ山に月を見る哉

好物の餅を絶さぬ秋の風
　割木の安き國の露霜　翁
網の者近づき舟に聲かけて
　星さへ見へず二十八日
ひだるきは殊に軍の大事也　翁
　肩癖にはる湯屋の膏薬
上をきの干菜刻もうはの空
　馬に出ぬ日は内で戀する　翁
綛(かせ)買の七ッばかり（さがり）を音づれて
　塀に門ある五十石取
此嶋の餓鬼も手を摺月と花　翁
　吹とられたる笠取に行
川越の帯しの水をあぶながり
　平地の寺のうすき藪垣　翁

丁物を日なたの方へいざらせて
　塩出す鴨の苞ほどくなり
算用に浮世を立る京ずまゐ　翁
　無筆の好む状の跡さき
中よくて傍輩合のかり(い)はらひ
　壁をたゝきて寐せぬ夕月　翁
風やみて秋の鴎の尻さがり
　鯉の鳴子の綱をひかゆる
ちらはらと米の揚場の行戻り　翁
雪の松おれ口みれば尚寒し
　日の出るまへの赤き冬空
第三
下(ゲ)着を一舟濱に打明て　翁
　苗の雫を舟になげ込
朝風に向ふ合羽を吹たてゝ
　追手のうちへ走る生もの　翁
さかやきに暖簾すりあふ月の秋
　崩て渡る椋鳥の聲
耕作の事をよくしる初嵐　翁
　豆腐あぢなき信濃海道
尻敷の縁取ござも敷破り
　雨の降日を書付にけり　翁
炮烙のもちにくるしむ蝿の足
　薗を刈あけて門にひろぐる
切麦であちらこちらへ呼れあふ　翁
　お旅の宮のあさき宵月
うそ寒き言葉の釘に待ぼうけ
　袖にかなぐる前髪の露　翁

あれ〳〵て末は海行野分かな
ワキ　鶴の頭をあぐる粟の穂　翁

菜種ほすむしろの端や夕涼み
ワキ　螢逃行あぢさゐの花　翁

寒菊の隣もありやいけ大根
ワキ　冬さし籠る北窓の煤　翁

春風や麦の中行水の音
ワキ　かげろふいさむ花の糸口　翁

霜寒き旅寐に蚊やを着せ申
ワキ　古人かやうの夜の木がらし　翁

秋の暮行先〳〵の苫や哉
ワキ　荻にねようか萩にねようか　翁

しるべしてみせばやみのゝ田植哥
ワキ　笠改めむ不破の五月雨　翁

奥庭もなくて冬木の梢かな
ワキ　小春に首を動くみのむし　翁

時雨てや花迄残る檜木笠
ワキ　宿なき蝶をとむる若草　翁

蔵のかげかたばみの花めづらしや
折てやはかん庭の箒木
第三　七夕の八日はものゝさびしくて　翁

藁もちよりて屋根葺にけり

木の葉ちる榎の末も神無月
つて待かぬる嶋のくひもの　翁

石籠もあらはれ出る夜の月

簑をくむとて寐ぬわたし守
火ぶりして歸るおのこは何者ぞ　翁
切籠おりかけすごき夕暮
さま〴〵の香かほりけり月の影
人一代の戀をとふ秋　翁
懐に脇指さしてまた出る
早咲の梅を我身にたとへたり　翁
下戸をにくめる雪の夜の亭
明やすき夜をますらが腹立て
ふみきやさする松のともし火
何を鳴行時鳥やら　翁
蓮の卷葉のとけかゝる頃
笈摺もまだあたらしく懸連て
遊行の輿を拜む尊さ　翁

秋立て又一しきり茄子汁
薄(ウス)縁(ベリ)たゝく僧堂の月
分別の外を書かるゝ筆のわれ　翁
産月までも輕きおも影
うき事を辻井に語る隙もなし
絈(カセ)買客のかへるきぬ〴〵　翁
大かたは同じやうなる舟印
力に似せぬ礫かゐなき
ゆるされて女の中の音頭取　翁
雁がねもしづかに聞ばからびずや
酒しゐ習ふ此頃の月　翁
第三 藤ばかま誰窮(屈)窟にめでつらん　丶
理をはなれたる秋の夕暮
瓢簞の大きさ五石ばかりなり

六句目

風にふかれて歸る市人　翁

何事も長安は是名利の地　丶

醫の多きこそ目ぐるほしけれ

いそがしと師走の空に立出て　翁

獨せわやく寺の跡とり

此里に古き玄番の名をつたへ　翁

足駄はかせぬ雨のあけぼの

きぬ〳〵やあまりかぼそくあでやかに　翁

風ひき給ふ聲の美し

手もつかず晝の御膳もすべりきぬ　翁

物いそくさき舟路なりけり

月と花比良の高根を北にして　翁

雲雀囀る頃の肌ぬき

破れ戸の釘うち付る春の末

見せはさびしき麥のひきはり　翁

家なくて服裟につゝむ十寸鏡

ものおもひゐる神子の物いひ　翁

人去ていまだ御座の匂ひける

初瀬に籠る堂の片隅　翁

時鳥鼠のあるゝ最中に

垣穗のさゝげ露はこぼれて　翁

あやにくに煩ふ妹が夕ながめ

あの雲はたがなみだつゝむぞ　翁

行月のうはの空にて消さうに

砧も遠く鞍にいねぶり　翁

秋の田をからせぬ公事の長びきて

さい〳〵ながら文字問に來る　翁

いかめしく瓦庇の木薬屋

馳走する子の痩てかいなき　翁

花の頃談義參りもうらやまし

田螺を喰て腥き口　翁

坊主がしらの先にたゝるゝ

松山の腰はつゝじの咲わたり

六句目

焙爐の炭をくだす川舟　翁

祝ひ日の冴かへりたる小豆粥
　ふすま掴で洗ふ油手
掛乞に戀のこゝろを持せばや　翁

　正氣散のむ風のかるさよ
目の張に先千石はしてやりて
　きゆる斗に鐙をさゆる　翁

踏まよふ落花の雪の朝月夜
　那智の御山の春遲き空
弓はじめすぐり立たるむすこども　翁

　吹もしこらず野分しづまる
革足袋に地雪踏重き秋の霜
　伏見あたりの古手屋の月　翁
玉水の早苗ときけば懷しや

　我ガ跡からも鉦鼓うち來る
山伏を切てかけたる關の前　翁

　さらり〳〵と霰降なり
乘物で和尙は禮にあるかるゝ
　たてこめてある道の大日　翁

簱揚て水田も暮るゝ人の聲
　蓮片荷に鯨さげゆく
不斷たつ池鯉鮒の宿の木綿市　翁

洗足に客と名のつく寒さ哉
　綿館並ぶ冬さむき里（冬むきの里）
第三
鶺鴒階子の鎰を傳ひ來て　翁

　築地長閑に典藥の駕
相國寺牡丹の花の盛りにて
　椀の蓋とる蕗に竹の子　翁

西衆の若黨つるゝ草枕
　昔咄に野良泣する
きぬ〴〵に宵の踊の菪を着て　翁
　ふたりの柱杖あと先につく
乘掛の挑灯しめす朝颪
　汐さしかゝる星川の橋　翁
村は花田づらの草の青みたち
　塚のわらびのもゆる石原
薦僧の師に廻りあふ春の末　翁
　又まねかるゝ四國ゆかしき
朝露にぬれわたりたる藍の花
　よごれしむねにかゝる麥の粉　翁
馬方を待戀つらき井戸の端

　月夜に髮を洗ふ揉出し
火とぼして砧あてがふ子共達　翁
　高觀音に辛崎を見る
今はやる單羽織を着つれ立
　奉行の鎗に誰もかくるゝ　翁
葭垣に木やり聞ゆる塀の內
　日はあかふ出る二月朔日
初花に伊勢の蚫のとれそめて　翁
　あらたに橋を踏そむるなり
緣さす六田の柳堀植て
　掛菜春めく打大豆の汁　翁
みやこをば去年の行脚に思はれて
　兒にまたるゝ釋迦堂の暮
咲初てしのぶたよりも猿すべり　翁

水つきの稲のしづくに肩重し
　はえ黄みたる門前の坂
皮剝(カハハギ)の物煮て喰ふ宵の月　翁
苅かぶや水田の上の秋の雲
　暮かゝる日に城(花)かゆる雁
第三 衣うつ麓は馬の寒がりて　翁
　しばし見送る我客の笠
さし汐の門の柱に打よせて
　窓を明れば壁に入虹　翁
年わすれ盃に桃の花書ん
　膝にのせたる琵琶の凩
第三 宵の月よく寐る客に宿かして　翁
名月のもやう互にかくしあひ
　一卩でもなき梨子の切物　翁
玉味噌の信濃にかゝる秋の風　ヽ
此宿をわめひて通る鮎の鮓
　青田うねりて夕立の風　翁
平めなる石を敷たる行水場　ヽ
　來てうからかす去年の傍輩
參宮といへば盗もゆるしけり
　につと朝日に迎ふ横雲　翁
蒼みたる松より花の咲こほれ
　四五人通る僧長閑なり
薪迄町の子供のけいこ能　翁
葉隱れをこけ出て瓜の暑さ哉
　野松に蟬のなき立る聲
第三 歩荷持手ぶりの人と咄しして　翁

むこと舅のなをる挨拶
御局の里下りしては涙ぐみ
ぬつた箱より物のだし入　翁
先工夫する蚊帳の釣やう
才はりの傍輩中に憎まれて
燒焦したる小妻もみ消す　翁
半分は鎧はぬ人も打まじり
船追のけて蛸の喰飽き
宵闇はあらぶる神の宮遷し　翁
燒山こへの雲の赤はげ
打起す畠も花の木陰にて
つらも長閑に鶴の卵わる　翁
さつぱりと鱈一本に年くれて
夜着たゝへ置長持の上
灯の影めづらしき甲待　翁
尻目に通ふ翠簾の女房
いかやうな戀もしつべきうす霙
琵琶をかゝえて出る駕物　翁
一筋も青き葉のなき薄はら
篠ふみ下る箱根路の坂
宗長のうき寸白も筆の跡　翁
新麥はわざとすゝめぬ首途哉
ワキ　まだ相蚊帳の空はるか也　翁
第三　馬時の過て淋しき牧の野に　丶
四五千石の松のたて山
方〳〵へ醫者を引づる暮の月
蹄の左法誰もおぼへず　翁
盆過の頃から寺の普請して　丶

畠はあれて山くずのはな　翁

日光へたんから下す秋の頃

くれ〳〵頼む弟の事　翁

夕風に蒲生の家も敗れ行　翁

物にせばやとさする天目

花のあるうちは野山をぶらつきて

藤くれかゝる黒谷の道　翁

帷子は日〳〵にすさまし鵙の聲

ワキ　籾壹升を稻のこき賃　翁

蓼の穗に醬のかびをかぎ分て

夜市に人のたかる夕月

五句目　木刀の音きこへたる居あひ拔　翁

二階はしごのうすき裏板

寒さふに藥の下をふき立て

石丁なれば無緣寺の鐘　翁

手細工に雜箸ふときかんなくづ

呼かへせどもまけぬ小鰹

肌寒き隣の朝茶のみ合て　翁

ほしがるものに菊をやらるゝ

蓬生に戀をやめたる男ぶり　翁

濕のふきでのかゆき南氣

丹波から便もなくて啼烏　翁

節季の來れど利あげさへせぬ

雪に出て土器賣を追ちらし　翁

たゞ原中に月ぞさへける

神鳴のぴつかりとして沙汰もなき　翁

しやくりがやんで氣が輕うなる

奥の院おづ〳〵花を指覗き　翁

けさからひとつ鶯のなく

春の日に產屋の伽のつゝくりと

かはり〳〵や湯漬喰らん　翁
いそがしくみな股立を取並び
目づらもあかず霰降なり　翁
からびたる櫟林に日がくれて
佛の木地をつゝむ糸だて　翁
ごろ〳〵と臼挽出せば時鳥
そゞろに草のはゆる竹椽　翁
羽二重の赤ばるまでに物おもひ
若時から神せゝりする　翁
鷄をまた盗まれしけさの月
秋入ときの筋氣いたがる
塩濱にふりつゞきたる宵の月
無住になりし寺のいさかひ　翁
持なしの新剃刀もさびくさり
土たく家のくさききるもの
花に寝む一疊青き表がへ　翁

小性の口の遠き三月
竹橋の内よりかすむ鼠穴
馬の糞かく役もいそがし　翁
夕暮に洗濯賃をなげ込で
とはぬもわろしはゝの吊
椀かりに來れど折ふし夷講　翁
此あたゝかさ明日はしぐれむ
夜遊びの更て床とる坊子共
百里共儘舟のきぬ〳〵　翁
引割し土佐材木のかたおもひ
よりもそはれぬ中は生かへ
いふたほど跡に金なき月の暮　翁
伊勢の下向にべつたりと逢

長持に小學の仲間そは〳〵と
くわらりと空の晴るゝ青雲　翁
禪寺に一日遊ぶ砂の上
槻の角のはてぬ貫穴
濱出しの牛に俵をはこぶ也　翁
籬の菊の名乘さまなり
むれて來て栗も榎もむくの聲
伴僧はしる駕のわき　翁
削やうに長刀坂の冬の風
まぶたに星のこぼれかゝれる
引立て無理に舞するたをやかさ　翁
いさみ立鷹引すゆる嵐哉
冬のまさきの霜ながら飛

第三

大根のそだゝぬ土にふしくれて　翁

猿蓑にもれたる霜の松露哉

ワキ

日は寒けれど靜なる岡　翁
飯櫃なる面桶にはさむ火打鎌
蔦で工夫をしたる照降
おれが事哥に讀るゝ橋の番　翁
秋風渡る門の居風呂
馬引て賑ひ初る月の影
尾張で付し元の名になる　翁
春風に普請のつもりいたす也
藪から村へぬける裏道
喰かねぬ聟も舅も口きゝて　翁
何ぞの時は山伏になる
笹つとを棒に付たる挾箱
蕨こはがる卯月野ゝ末　翁

呑心手をせぬ酒の引はなし
　着かへの分は舟へあづくる
封付し文箱來たる月の暮　翁
稻妻の光て來れば筆投て
　野中の別れ片袖をもぐ　翁
もらふをまちて鳴ののつぺい
摺鉢に植て色付唐がらし
　障子かさぬる宿替の舟　翁
二夜三日の終る曉
考てよしの參りの花盛り
アゲ句
　百性(姓)休む苗代の隙　翁
　内はどさつく晩の振舞
きのふから日和かたまる月の色

　狗脊かれて肌寒うなる　翁
澁柿もとしは風に吹れけり
　孫が跡とる祖父の借錢
脇差にかへてほしがる旅刀　翁
　十里斗の余所へ出かゝり
笹の葉に小路埋ておもしろき
　あたまうつなと門の書付　翁
いづくへか後は沙汰なき甥坊主
　やつと聞だす京の道づれ
有明におくるゝ花のたてあひて　翁
水かるゝ池の中より道ありて
　篠竹まじる柴をいたゞく
五句目
鶏があがるとやがて暮の月　翁

通りのなさに見せたつる秋
盆じまひ一荷で直ぎる鮨の魚
晝寐の癖をなをし兼けり　翁

聟が來てにつともせずに物語
中國よりの狀の吉左右
朔日の日はどこへやら振舞れ　翁

一重羽織が失て尋ぬる
きさんじな青葉の頃の樅楓
山に門有る有明の月　翁

初あらし畠の人のかけまはり
水際光る濱の小鰯
見て通る紀三井は花の咲かゝり　翁

荷持ひとりにいとゞ永き日
こち風の又西に成北になり
我でに脈を大事がらるゝ　翁

後呼の內儀は今度屋敷から
喧嘩のさたもむざとせられぬ
大切な日が二日有暮の鐘　翁

雪かき分し中のどろ道
來る程の乘掛は皆出家衆
奥の世並は近年の作　翁

酒よりも肴の安き月見して
赤鷄頭を庭の正面
定まらぬ娘の心取しづめ　翁

寐汗のとまる今朝がたの夢
鳥籠をづらりとおこす松の風
大工遣ひの奥に聞ゆる　翁

米搗もけふはよしとて歸る也
から身で市の中を押合ふ　翁

古き革籠に反古おし込
月影の雪もちかよる雲の色
しまふて錢を分る駕かき　翁
夕に駕籠を借都人
命ぞとけふの連哥を懐に　翁
汐が干て砂に文書須磨の浦
日毎にかはる家を荷ひて　翁
乞食年とる楷の木の中
聖して兕ながらの月もみつ　翁
目前のけしき共儘詩に作
八ッになる子の顏清げ也　翁
ころ〳〵となるは鈍栗落し也
共鬼見たし蓑虫がちゝ　翁

枯はてゝみじかき髮の口惜き
琵琶つき立て共陰に泣　翁
龜山やあらしの山や此山や
馬上に醉てかゝえられつゝ　翁
宵の間は重なる山の月暗く
芋堀かえす小男鹿の角　翁
笠敷て嬉しく今朝となしけるよ
笈かゝへたる小僧煩ふ　翁
○
冬の砧の涙きはつく
(重出)冬の砧の涙きはつく
世の恨みいまだ六位の名によばれ　翁

芭蕉翁付合集卷之下終

安永五丙申歳九月

京都書林

橘屋治兵衛
井筒屋庄兵衛
八文字屋八左衛門
武村嘉兵衛

から檜葉（ひば）

上・下

几董編

（から檜葉　上）

夜半翁終焉記

おしてるや浪速江ちかきあたりに生たちて、とりが鳴あづまのかたに多くの春秋を送り、猶奥の隈〻遊歴しつゝ、うちひさす都を終の栖と定め、おもふ事なくてや見ましと、よさの浦天の橋立の邊りに三とせの月雪をながめ、ふたゝび花洛にかへりて、谷氏を与謝とはあらため申されし也。抑此翁無下にいはけなきより畫を好み、年をつみ、南北二宗を寫得し、終に筆あり墨あるの妙にいたれり。はた弱冠の比より俳諧に耽り、蕉翁・晋子の高邁を慕ひ、かたはら諸家の支流にわたり、縦横自在なる事集て大成すといふべし。明和のはじめ、京師に再び先師巴人の業をつぎて夜半亭と号し、花守の身は弓矢なきかゞし哉。爰において其風調をしたひ、履を倒にして門に入もの少からず。然ども元來習俗に觸るゝ事を厭ふの癖あれば、なべて世の人と交る事のものうしと、門戸を閉、晝室にこもり、はつかに同調の徒と志を通し、意を適に遊ばんとて、中〳〵にひとりあればぞ月を友。もとより老情懶隋(惰)也といへども、老テハ當ニ益〻壯ナルと恒に伏波將軍が語をつぶやき、行住座臥翫弄衣食に就ても、矍鑠タル哉是翁也と、人もうらやみ侍りけり。かねて平安の致景を愛し、東郊西山の花紅葉をも見殘さず、ことし秋のすゑ門人毛條に招かれ、宇治のおく田原といふ所に杖を引、絹壁懸河奇石怪岩に眼をよろこばしめて、帛を裂琵琶の流や秋の聲。是は白氏が四弦一聲如レ裂レ帛ヲといへるにおもひよせしとぞ。かくてその秋も過、冬枯の空もしぐれがちに、蟋蟀艸廬の戸にすだき、朝ゆふの風衣を透(トフ)す比ひより、何となく氣力安からず、腹痛老身を苦しめ、日毎に惱みがちなりければ、あはやと人〻訪ひよりて、服藥怠る事なく、介抱大かたならずもてかしづき侍りぬ。されど老病日增に篤く、醫療さま〳〵に心を用といへどもしるしなければ、おの〳〵庵中にあつまりて、かはる〳〵病床にまいり、とさまかうさま老情をなぐさめ侍けり。或時予を枕上にまねきて、此ほど病苦のねざめにも

五車反古集の序の事忘られねば、手ふるひ心まどひぬれど、からうじて筆とり置たり。とく雑駒に傳へて、父が孝養の志を欠べからずと聞えける。是ぞ生前筆の探おさめにして、いかなれば召波父子かく因縁の淺からず。かの集に洩ざる事のありがたさを今更に感じ侍りぬ。又ある夜伽のものに對して、かうやうの病に觸つゝも、好る道のわりなくて句案にわたらんとするに、夢は枯野をかけ廻るなどいへる妙境、及べしとも覺えず。されば蕉翁の豪桀(傑)なる事、今はた感に堪ざるはなど、日比にかはらぬむつまじき教の、もしかたみにやなりもせんと、ひと度は悦び、一たびは胸ふたがりけり。かくて十二月半の日來は病毒下痢して、悩み漸く愈たるに似たれども、食氣欲スル事なく、心身倦勞れて、日毎にたのみ少く見えけるにぞ、打よりて唯命運を祈るばかり也。妻娘の人々をはじめ月溪・梅亭の輩、旦暮起臥を扶て師につかふまつるの志切なるも、廿二日・三日の夜はことに打うめきておはすにぞ、いと心細く覺束なくて、病顔をうかゞひつゝ、後の事などいさゝかほのめかし聞えければ、いやとよ、つら〳〵來しかたをおもふに、野總奥羽の邊鄙にありては途に煩ひ、ある時は飢もし、寒暑になやみ、うき旅の數〳〵、命つれなくからきめ見しもあまたゝびなりしが、今此帝都に居を安じ、たま〳〵病に犯さるゝといへども、醫藥疎かならず、人々のまことを盡し、殘かたなき介抱も、いか成宿世の契り淺からざるをや、愚老が本懷足ル事をしれり。されど世づかぬ娘が行末など、愛執なきにしもあらねど、なからん後はそこら二三子が情もあるらん。よしあしやなにはの事も觀念の妨なるはと、物打かづきて答なければ、せんすべなくて蹲り居りぬ。廿四日の夜は病体いと靜に、言語も常にかはらず。やをら月溪をちかづけて、病中の吟あり、いそぎ筆とるべしと聞るにぞ、やがて筆硯料帋やうのものとり出る間も心あはたゞしく、吟聲を窺ふに、

冬鶯むかし王維が垣根哉

うぐひすや何ごそつかす藪の霜

ときこえつゝ猶工案のやうすなり。しばらくありて又、

しら梅に明る夜ばかりとなりにけり

こは初春と題を置べしとぞ。此三句を生涯語の限とし、睡れるごとく臨終正念にして、めでたき往生をとげたまひけり。母子の歎きはいふもさら也。此比よる晝のわかちなく附添ありしともがら、腸をたち足ずりをすれどもそのかひなし。やがて曉の戸敲きて斯と告るにぞ、田福・百池・我則・佳棠・如瑟・楚秋・魚官・集馬、その外親しき人ゝも須臾に馳あつまりて、生前のむつび、死別のびんなさ、かた身にいふべきこの葉もなくて、只よゝと泣惑ふばかり也。さてしもあるべき事ならねば、かねて遺言に任せ、病床の夜のものを拂ひ、きよき毛氈を敷、しとねとし、常の衣服の垢つかざるを撰びて襟かいつくらひ、居士衣を襲ひ、紗巾を冠らしめ、生る人のごとく粧ひたてゝ、頭北面西右脇臥にして香を燒、華を供じ、寺僧を迎へ各唱名念佛し、ひそかに亡體はけぶりとなしぬ。惜も世の中は年のいそぎ春のとぶきゐ待折からなれば、いとまなき人の暇をさまたげ、あるは物いまひせん人の耳うちふたぎ、きかず顔なるも本意なければとて、先病中の体にもてなし、春たちて松かざりとり拂ふ比、世の人には披露しはべりぬ。されば隣國近郷の門人は足をそらに馳あつまり、親疎となく知己舊友、草庵所せきまでとぶらひよりて、正月廿五日再葬式義信を盡し、遺骨は金福寺なる芭蕉庵の墻外にとりおさめ、かたの如き卵塔をたて、永く蕉翁の遺魂に仕へ奉らしむ。我も死して碑にほとりせん枯尾花。とかねて此山の清閑幽景をうらやまれしかば、新鶯の柳上に遊び、杜鵑の衛宇を過るより、山路の鹿・田家の雪、をのづから生業の書圖に通ひて、東嶺にのぼる月はとこしなへに法の燈を照し、前栽の艸木はとことはに匂ひて不斷の花を捧るも、かりそめならぬ奇緣也けり。されば此終焉のあらましをもて、遙に山河を隔たる同門の人々は、懷舊追慕の便ともなすべしと、愚かなる筆をとりつゝ、五七日といふ日にあたりて、此御寺に法莚を設、老師が魂を祭るものならし。

几董謹書

於洛東金福寺牌下

天明三年癸卯十二月廿六日　於夜半亭

追善之俳諧

から檜葉の西に折るゝや霜の聲　几董
　曉かなし水こほるとき　百池
おもひ出て庭籠の鳥を放らむ　田福
　裙うち拂ふ雨の下露　月溪
毛見の衆の立るゝ宵の月かけて　維駒
　謡ひとふし醉のまぎれに　我則
したゝかに頭打たる眞木柱　佳棠
　迯て鼠の何を音に鳴　毛條
土荒て畑にもならず艸の原　自笑
　御供中名和無理之介　如瑟
倉卒に飯たく寺の臺所　然者
　行まはりては帶を引るゝ　香波
中〳〵に女の智惠の淺ましや　楚秋
　所領追れてうき旅にたつ　魚官
とう〳〵と海鳴方のあり明に　鐵僧
　脚をちゞめて鳥わたる也　春香
市に出る干瓢賣の二人連　雪居
　おくれてとゞく宗因の文　集馬
とし又上野ゝ花も散過し　斗文
　芝居の太鼓遠くかすめる　三貫
頭巾着て浮世の春を見にありき　田梅
　五位に成べき身を遁れ出て　通助
恐しや宿の夫婦が低語　金篁
　寒に入夜の風あらく吹　含六
狐火に星のひかりの尊とさよ　梅亭
　醫者を迎へに野を一ッ越　一兒
背中から暑さをとふす薄羽織　嘯風
　今うつ時計七ッなるらん　人左
燒物の鯛の代りを工夫して　賀瑞
　さし出て詞多き古妻　星府
わすられて身を泣さまのあでやかさ　東瓦
　はるゝ空なき樓の雨　古貢
末咲の紫苑つく〳〵丈ヶに成　芷堂
　新綿とりて糸竪をへる　碁蓼

たそがれはうそ寒けだつ月の色　柳女
　酒屋の門の犬を蹴ちらし　幾由
ニウ
老なる敗腰うちかゞむ弱法師　百樓
　としの名残のけふも雪ふる　延年
大津のや船荷の鱈の高なぐれ　九湖
　いさかひ濟て掃立る内　魚赤
ふうはりと屛風倒るゝ秋の風　万容
　しづかに見ばや島原の月　湖柳
芭蕉葉に髣髴として芋の露　路曳
　芥に水のゆかず流れず　之兮
穢多が軒あないぶせやと目ふたぎて　春坡
　念珠くるなるふところの中　竹裏
道連に鬮のそなたで別けり　松化
　歸鴈をうづむ峯のしら雲　湖嵒
山ざくら笛に落花の曲を吹　正巴
　永き日いとゞ囚れの君　熊三
ナ
葹煎焦す臭（カザ）も頭痛にさはる也　是岩
　よしなき戀を庚申の宵　志逸

物毎に在所は口のさがなくて　杉月
　水場の早苗植ずくれ行　菱湖
青鷺の下りて横たふ藻刈舟　自珍
　足輕通ふ城の裏門　雷夫
淨るりを細き元手の香具賣　橋仙
　旅より旅に女房持ッヽ　如菊
嶋むろに朝精進を忘れたり　楚山
　今よと觸る村の判取　布立
一しぐれ天窓かゝへてはしる也　孤山
　又も修覆にむきし京橋　車葉
ほとゝぎす淀野ゝ月の遠かたに　涼瓜
　(烏)帽子着ながら睡る宮守　亀兮
ウ
おもひきや耻ある軍うち負し　游少
　伽羅を噛割歯ぶしふるへり　也竺
指を切ル心ちからに酒飲ん　鹿卜
　まだ夜深きに鐘の聞ゆる　買山
馬かたに閨の雨戸を叩かれて　共酌
　物ねぢ込し嚢紐とく　湖陸

嬰として鳥さへ花の陰に哭　道立

かへらぬ人を詩にうたふ春　子曳

右一順蒲尾

師翁、白梅の一章を吟じ終て兩眼を閉、今ぞ世を辭すべきの時也、夜はまだ深きやとあるに、万行の涙を拂ふて

明六ツと叫て氷るや鐘の聲　月溪

夜や晝や涙にわかぬ雪ぐもり　梅亭

奉哭亡師

雪はいさ師走の果のねはん哉　田福

折て悲し請看けさの霜ばしら　鐵僧

師は去ぬ白雲寒きにしの空　自笑

かなしさや猶消ぬ雪の筆の跡　維駒

雪にふして栢の根ぬらす涙かな　百池

うき時や此曉の鉢たゝき　我則

朝霜や泣腫るゝ目に風のしむ　佳棠

佛名やあくまで神も祈りつゝ　如瑟

誰聲もとゞかで悲し雪の人　田原毛條

陰たのむ松雪をれぬいかにせん　楚秋

榾火きえて骨身を透す寒哉　魚官

此身への月のかたみや笠の霜　通助

鷹翦てをの〳〵握る拳かな　集馬

殘る名の朽ぬしるしや寒の中　田梅

泣顔に皺たるゝ老となりぬ　三貫

瓶われて寒紅梅の色かなし　然者

影空し三十日にちかき冬の月　香波

凋みても名は潔し水仙花　雪居

日の影もかくれて悲し雪の雲　春香

なきがらや昔を今のかれ尾花　金篁

さればこそ師の行道や枯野はら　舍六

諸ともに鳴音や我も寒苦鳥　久米次

とり拂ふ蒲團も今朝はちからなき　良庵

文臺の壽も記念となりければ

其筆の花もなつかし冬の果　子曳

雪消えていさこや清き小松原　束助

一七日文音

その文もけふはかすみて見えぬ哉　伊丹　東瓦

おもほへぬ手向の梅に猶涙　伏水　賀瑞

おもかけも消るおもひや春の雪　浪華　百樓

淡雪のふるにつけても涙かな　、　一兄

十三里隔て寒し春の風　、　嘯風

暖に成行甲斐もなかりけり　、　人左

梅散てことさら春の寒かな　池田　星府

二七日後書信

けふとなりてものゝ悲しき柳哉　丹波　芃堂

おほろ夜や亡俤のたよりなき　、　古貢

春草に隨涙の塚となりにけり　、　碁蓼

腸に泣るゝ春の月夜哉　、　土羊

美人去て天の一方梅寒し　浪花　延年

津の國の何夢なる歎梅の春　、　樵風

たれこめて喪に入春の夕かな　丹後　路景

梁の恩はわすれじつばくらめ　淀　幾由

ともに寐し蒲團も悲し春の夢　讃岐　暮牛

おもかけの富士猶高し春の雪　信濃　路人

右句ーゝ所レ得ル遠ー近有ニリ遲速一以テ至ニ初月忌一ニ録レス之

正月廿五日葬送　春夜社中名録（録）

共枕の跡なつかしや春の草　九湖

新塚にかりの香爐や路のとう　魚赤

墓詣小松引べき野なりしを　路曳

のどかなる日の力なや野邊送　万容

世がたりやおかしがられし春も夢　游少

墨染に梅も咲べしけふ斗　凉爪

うづ高き雪も夜の間の春の夢　布立

月入て香やはかくるゝ曉の梅　正巴

春雨や繪具の皿の跡かなし　湖柳

折にあひて弔ふ比や御忌の鐘　湖畠

野送や寸馬豆人かすみけり　霞吹

鶯にけふは泣るゝ垣根哉　之兮

猿引の猿も腸を斷日かな　志逸

さびしさを猶いやましの春の雨　是岩

ゆかしさや榼に殘る去年の雪　熊三
けふ此日冴返りなく千鳥哉　春坡
花ふれや其きさらぎも遠からず　松化
群て悲し棺を送る百千鳥　橋仙
香は墨にとゞめて梅の行衛かな　自珍
此道や紅梅枯て春寂し　杉月
琴に斧し梅月更に眼を閉ン　如菊
春ながらけふは悲しき日也けり　まさ女
うぐひすも挽哥うたへよ此夕　雷夫
をしめども〳〵さて春の雪　楚山
めぐり來るけふをし春の野邊送　孤山
陽炎や香炷そふる塚の前　湖一

四七日文音

つきぬ名殘添よと春の寒哉　浪花 うめ
歸さの鴈の使やはかなごと　、竹裏

備前に在りて消息に驚く

はるさめに浮れて鳴やきり〳〵す　菱湖
今はその君來ぬ路や春の草　田原 也竺

春風や大明香の匂ひけり　伏水 買山
しらぬひの霞みて悲し朝朗　、鹿卜
今しばし恨みや消ぬる春の霜　、共韵
梅がゝにつれて西する翁哉　、湖陸

春夜先生の許より訃を告給ふに

聞し名の猶したはしや春の雨　但馬 柳水
ひとたびは逢見むものを歸雁　、百歩
驚きし句々を記念や遠霞　、因山
春の水流の末も濁りけり　、半月
白梅の散日なるらん鄙曇　、素良
鶯のはつ音に斯と聞日哉　、雲裳

右

夜半叟既厭然人世予不能白馬素車
以去聊呈挽詞代生芻之奠

紵執りて哭せり我も鶯も　道立

收遺骨廿七日

歸らめや路草青き春の野邊　金福寺 松宗和尚

羽をひそめたる雨の蝶〳〵　月溪

五六人ものうち語るあたゝかに　百池

下略

廿八日墓參

けふははやひと夜のむかし春の草　几董

友人阮道立、謹て淸酌の奠を以て、故夜半亭春星翁の靈に告て曰、嗚呼哀哉有生必有死早終非命促と。今や、翁明を棄て冥に就く、荒草なんぞ茫ゝたる。むかし翁、生業を平安の地に創起する時、人或は誦せざるをもて、いまだ信ずる事あたはず、其意趣高妙なるがゆへに、其門に入もの、その意に達せずして師に綍る。翁謝して曰、履戸に滿ッとも何の益ぞ、閉戸して自娛むと。我翁に師事するとなしといへども、其知遇を荷ふこと二十有餘年、顧許最厚し。豈はからんや、翁を山阿に送らんとは。翁往年夜半樂を製し、春風馬堤の曲を鼓す。旣曰、君は水上の梅のごとし、花水に浮みて去る事忽か也。妾は江頭の柳のごとし、影水に沈てしたがふことあたはずと。以て兆とする歟。梅柳春をまたずして朝露溘ちいたる。已亡の人可レ惜。未亡の人可レ哀。未成の人亦最可レ哀。我その哀情を讚むとすれば、漑然として俤を失ふ。これをおもひ是を想ふて、こゝろます〳〵かなしむ。神いづくにかある。尙は饗レ之。

阮道立蕭拜

春風や馬堤に駒の嗚をなす

（から檜葉　下）

鳥雀屋をめぐつて嚶々と啼、葛藟根を絶て末葉色を失ふ。平安に夜半亭蕪村子なくなりければ、俳諧の子等、妙(注)福の志を山のごつみて、台嶺のふもと金福精舍に法莚をまうくときこえしかば、とし比交游(注)忘年の情にたえず、手のものかいやり、國を出るより耳後に風を起し、其日をあてゝ洛に到り、ともに追慕のいとなみをなす。又うへもなき峯のあらし、法りは一味のともし火にかゝれば、梵聲岩にあたつて清響あり。人語水に落て烟霞を披く。これみな故人が趣なればぞ、罔兩そゞろに我を牽て對スルと視れば、幻ゝたゞ孤松高調あるのみ。

尾陽　曉臺

影とらんとすれば春の水黄也

にほひなく散ル目ぼろしの梅　几董

窓かすむ草庵集を明くれに　我則

粥めされよと人のまいれる　楚秋

犬の聲寒ささだまる月の後　道立

川のむかひも衣うち出す　然者

ウ 法の師に火桶もてなす冬近み　如瑟

ふるき内侍の世にもしらるゝ　維駒

家尻きりあはれやさしき哥をよみ　魚官

あけなんとする雨の短夜　毛條

まこも刈澤田の流道こえて　自笑

塩負ひかへる土肥の山人　佳棠

月寒きむかしを語る闘破り　臥央

常念佛に戸のたらぬ也　一差

よしなしと雀たち行濡むしろ　鉄僧

業ひ疎く唐の書ミ見る　百樓

時に感ず曉嵳峩のさくら人　松宗

夜桃林を出し酒醉　元室

二 色ありてすらり〳〵と春の風　之兮

矢落大かた揃ふ遠射　雪居

神領の貢あまれる年からや　湖柳

北うら兀し靄の笹山　楚山

潜ｯ来ぬ垣間を龜のかへる也　正巴
　むせびながらに蚊やり焚ッゝ　橋仙
うき人の死るつもりをおしはかり　買山
　戀をへだてるいほ嵜の川　月溪
月影やもみぢしてける番椒　百池
　大工左官の秋を寒がり　是岩
一俵の粟餅運ぶ入佛事　熊三
　あつばれ紋は甲斐の四ッ菱　春坡
ゆふだちに店を追るゝたそがるゝ　湖嵒
　泣子の智惠におどろかれ鬼　杉月
籠鳥の籠並べたる日あたりに　呑獅
　捨石ひとつ景につり合　銀獅
終焉の記を打誦せば花ふりて　五雲
　音樂と聞松の春かぜ　田福

熊野三山順禮のねがひとげ侍りて、爰の風景かしこの風子、見のがしがたく、ところ〴〵にとゞまり遊ぶ事、五日または十日、あるは半日の離別もありて、さま〴〵興ある事になん侍りける。されど、さだめなき草の枕の夢やぶれては、古さとのみしたはしく、かねては和哥の浦にて春を迎へばやとおもひけるが、その地に出るは師走廿八日なりけり。あくれば年の名残と聞ものから、つとめて浦づたひしつゝ、　田鶴の音にとし〴〵暮ぬわかのうら　と口ずさびて、ゆふつかた旅のやどりにかへり来れば、めづらかなる都の文あり。うれしくもなつかしくもひらき見るに、只師翁の死を告るなりけり。露ばかり覺悟なければ驚におどろき、愚かなる心より夢かとおもへば現然たり。うつゝかと見れば忙（惘）然たり。再びせうそこをくりかへせば、知友の手澤覺えあり。こはいかなる不幸の因縁なるや、日夜庵中に行かよひてかしこき教をも受し身の、いま命終の期にあはざるのみかは、百里の外にありて愁ひをともにすべき人もなく、かへらんとすればむねふたがりてあしたゝず。よしや今宵あかして明日をまたんとまくらによれば、一世の不祥一夜もしのぶにたへず。とみに紅涙の雁書を春夜先生が梧下に賍て、

縮めて手向にせばやいと柳　寄節

去年の冬病中を訪ひしに、しかじかの物がたりありしも

はや殘る雪ばかりとぞなりにける　斗雪

せち祝ふ餘所の夕や野邊送　嘯山

なきあとや梅に此世の風寒し　甫尺

夜の梅我泣なみだとばしる歟　寺田 雲裡

俳諧の釋迦にわかれて春の空　原 阿聲

惜しや梅のきのふと過し涙哉　、 作厨

君まさで都の春にひまがある　浪花 正名

わすれ梅水にこぼれて星空し　大津 巨洲

悼夜半翁

たのみある月はむなしき朧かな　元室

春の月いかにぬしなき丸硯　尾陽 闇毛

殘念の二字や吉書のあと便　、 午窓

なつかしきとのみ多し春の風　、 翠闕

春の水さればぞ琴に響なし　、 岳輅

梅に歸して翁は死ナじけふの魄　、 士朗

叟が白首美人の名を我に得たり

つくづくと我名を呼ば春寒し　羅城

七艸に草のかげなる便かな　仙臺 羅大

うめつばき唯なき人の書に戀し　寺田 秦夫

梅悲しにほひは四方にのこれども　良水

しら梅や散てものこす此葉　大坂 扉風

蓬萊の日もたちばなのむかし人　來雨

此道の飾とれたり小正月　二貞

喪中を訪ひて

鶯の春雨くと啼口哉　社燕

歸來よ柳わがねて魂呼ん　心頭

悼

魂よばん我ふし見津の梅林　伏水 鷺喬

あこがるゝ梅まいらせて涙かな　、 柳女

うき事を聞耳寒し春ながら　、 楚尺

御忌のかね身にしる春となりにけり　文誰

、

行水や名は消のこる雪ほとけ　野童

夜あらしや凌かねたる玉柳　玄兒

かれて一帋を畫て贈べしと約せしも、終に果さずして今記念と見るものもあらざれば

足跡も遺さで終の雪佛　雪下

おもかげや其餅搗の雪のころ　也好

大雅堂遠くさり、夜半亭ちかく行。のこれる墨妙に、都鄙の風子の魂を奪ふ。しかあれど土地廣うして知音まれ也。可惜。

けても消ぬ筆の命毛宵飾　大坂 万翁

再來の芭蕉も雪にやぶれけり　西宮 青魚

病床に夜半翁の命終を聞

冬ごもりたばこの煙もなつかしき　浪華 士川

殘る日をなみだにくるゝ暦哉　、佳則

おもひ出る度にはかなし枯櫻　、守明

早春訃音

おもひきや春の手紙にかゝる事　、菊十

手向にと折とるうめも散にけり　、其朋

つく〴〵とかすみ詠る西の窓　、桃葉

君去てうき世の春を減却す　浪華 士喬

千金の宵の明星かくれけり　、士巧

古翁折〳〵此地に遊ばれしも

宿申せし春やむかしにさくら人　兵庫 來屯

雁さりぬ一行物も筆の跡　、敏馬

爐によりて木地緣ぬらす涙哉　、里由

翁〳〵など歸りこぬ春の艸　、清夫

耆婆なきやねはんもまたで消る雪　、葛堵

霜消の園に露見る鶯茶　浪華不二社中 弄我

との葉にのこる苦みや露のとう　、仙處

白眼のおもかげ寒し梅花　、杜士

陽炎の日にとゞまらぬ夕かな　、馬越

臘梅の散日を枝のしづく哉　、芝山

年〳〵のかたみや花のよし野山　、白亭

天の告なりしようめにむら烏　、百貫

襦して酒手向ばや春の雨　、双魚

江や夕むなしく望ム春の雲　阿䓁鳴門 買山
海山を隔てかなし雉の聲、士然
文に書に骨は遺りて燒野哉、千子

、

只花の花の都となりにけり、大坂 白桃
白灰と成にも猛しキリン炭、芳麿
靈手箱あけてくやしき春なれや、隆巴
かくて世は花の極樂黃世界、蓼祐
夢さめて黃鐘調や花見づれ、呉三
とふ方の便やなくてみどりたつ、其堂
解る名の人にもありて春の雪、馬宥
名をぞのみのこしてはらり梅の風、如徹
障子明て鶯譽る手向かな　七十五叟 獨名

遙に　師翁を哭し奉る

ありし世のうつらば汲む雪解水　長壽 謝良
蛙啼て我に哭とや此夕　浪華 志慶

三菓老人物故、哀べし惜べし、祖師西來

栢三粒いかなればこれ年じまひ　和流
御忌くるゝ鐘に告たる名殘哉　三角
この夕春盡んとすおもひ哉　山脇氏 秋樹
君去てむなしき柳さくら哉　丹後 野耕

、

鳴呼夕春も春かは水くもる　尾䓁 計之
うめちるや塚を廻りてひとり言　南山城 下放
つむ雪のとけてつめたき流かな　梅塢
鶯の忌日〳〵に手向哉　金華
めぐりゆく七日も花の日數かな　東圃
ゆかしさのたえぬおもひや朧月　東窓
春の野邊米家の賓もうづもれぬ　南雅

日比好まれし事をおもひ出て

春寒く空にや鳶の低う啼　士髮

蕪村翁をいたみて

ちからなふ雪ふる春のゆふべ哉　田原 馬蓼
をれけるか千代をうそなる雪の松　草廬
としはのぼれ、今年はのぼらんと

おもふも、京師に此叟あればならし。あゝ夜半の我を哭しむるものは夜半亭の主人

ちからなき山の端見たりおぼろ月　東都 蓼太

吾老師夜半翁の世を辭し給ひしより、門下のおの〳〵杏檀の雨の凄きに夢を悲しび、鶴林のけぶりの黯に腸をたつて、七日〳〵と蕣行冥福をいとなむにも、只崩号哀朽に堪ざるのみ。東西遠邦の舊盟にも、雁に魚にふみをもて赴(訃)を報ずといへども、重山複水の阻千万里なれば、いまだ祭文哭詞のいたり來らざるもありぬ。さはあれども今此集は、盡七日といへるを限となして撰ミぬれば、あつまれるまゝみだりに座次をなして木にのぼしぬ。多方の諸君子、此營にもれぬるは、小祥大祥の二忌を期して、稟したまん事を希のみと、卷の終に龜手をのべてしるし侍りぬ。

天明四年甲辰孟春

門人　村百池識

夜半謝先生沒也。門生高几董鳩諸子哭歌。撰檜葉集。句ゝ咸以先生誹諧之奇稱嗟焉。吳月溪梅嵒亭謂余曰。先生鳴于描畫。波餘于誹諧。而無一言之及畫。遺恨是之謂何如。僕等授畫業于先生者。世之所識也。今也欲立筆以言其妙。悲淚洋ゝ。紙上如海。幸矣君之哭詩。都涉繪事。冀置之卷末。代僕等之筆。余謝以疣贅。不可併同社。二三子懇求。竟寫與吳嵒二生爾。

哭
謝蕪村先生

先生於文墨之伎。只獨描事之力。晩而事業愈進。唾于割畫似不似之論。終與摹寫倣倣。牽率而成者大異而自稱謝氏一家之墨。傲然與世乖張。宛如娑羅林中最後說法。六師幺魔。聽者益懼矣。今年臘月念五罹病而卒。嗚呼天殃斯人。殃斯道。建也三十年舊盟。楚惜之念。噬臍不盡。奠哭詩二章。聊舒悲痛牢騷之萬一云。

江山一墨潑生痕。晤入畫禪稱獨尊。元是天然大才子。周行七步謝蕪村。

倏作三冬臥病身。不親硯墨藥惟親。生憎風雨破圖面。沒却江山筆ゝ春。

盟弟　雨森章迪拜書

蕪村十七回

常盤の香

紫曉編

夜半亭蕪村居士、病床にありて、白梅に明る夜ばかりとなりにけり。初春と題を置べしと云終て、睡れる如く往生の素懐を遂られけるも、はや十とせあまり七とせの昔となりけり。此叟、酔中に戯れて書き、筆とりなどせられける反古迄も、在し世に十倍して、雅となく俗となく都鄙にあらそひもてはやせるも、まさに明徳のしからしむる成べし。予如き愚の至れるも又、其流をくみ傳ふる身にしあれば、古叟のちなみある人〻、あるは亡師の社盟、且は予が門に遊ぶたれかれと共に法莚を設け、かたのごく追福の志をのべいとなみ侍る事になん。

伽羅と枯し梅は常盤(磐)に匂ふ哉　紫暁
寒月低し与謝の高波　春坡
木綿織る一間にとなる舎して　熊三
麥芳しく麥藁を焚　春花
鶏うたふ午の頭の通り雨　春洲
出し絹そよぐ御幸車や　春峰
かけはしの喩もありと戀心　下方
ふた谷こして瀧に垢離かく　楚秋更 露洲
柴の戸の夜をこめてよむ無量品　甘三
世になき父母の俤に立　青峨
結搆な空となりけり霧はれて　黒人
きよろりと月の残る帆柱　狼尾
一石の古酒とられたり賭に　比良
はじめて見たる江戸の皃見世　三蝶
我形ッの屋敷を包む袖頭巾　成章
壁白〳〵と烏飛ぶ影　二雀
ともとせし花も昔に金福寺　道立
深きめぐみにぬるむ井の水　書林 橘仙堂

右一順

寛政十一年己未十二月廿五日於二春宵樓一

故夜半翁、身まかり給ひて後、東道の人しなければ、おのづから口に荊蕀を生じ、腸は風塵の廬となりて、烟霞風雲いたづらに星霜をかさねぬ。今茲季冬、翁十七回の

祥忌を春宵樓にして、追福作善のいとなみ其きこへあれば、旧識の因ミもだしがたく、(マヽ)越香を牌前に捻じ、往事を追慕する事しかり。

枯て後其草を見ず十七年　道立 拜具

捻香

うつしゐの名や佛地にも十七年　仝

夜半居士の門に入し昔、脱捨てひとふし見せよ竹の皮と教諭ありしを、ことし十七回の遠忌に又しもおもひ出て、そゞろ泪を落し侍る。

こがらしの吹盡す竹も夜もすがら　雩浦 春洲

夜半翁の遺骨を、金福寺なる芭蕉庵の墻外に納奉りしも、きのふけふのやうにおもひ侍れど、はや十七年の星霜つもれり。

昔おもふ目には朧の寒の月　春坡

与謝の翁の名徳を〱に感ず

月雪に照るや書の道書の路　熊三

松永貞德の仰られし、一時一敎の人をも師とあふぐべしと。されば与謝の翁は雪中庵世々の因あるものから、我をも余所ならぬものとて、折ふしどの敎示有し事抔、常におもひ忘れざりし。ことにことし慈明の遠忌にめぐりぬれば、

十七年霜に夜半の鐘をきく　大江丸
かゝぐれば又こほるともし火　紫暁
佳墨の菊に櫻に匂ふらん　丶
くろき羽織も常盤なるかな　丸
蝙蝠のこゐ細〱と二日月　丶
埜田や門田も水(づ)屈く也　暁
ありしより劣りし駕に乘合せ　丶
觀音様に恨みたら〱　丸
合点せぬ女のこゝろしらま弓　丶
詠までぞけふも過すこしをれ　暁
音信るゝ風いづちとも草の戸に　丶
御靈の御出つゞみちかづく　丸

近年の月であつたと近江から　丶
　牛十疋につけし新米　曉
立ながらうつ博奕にも勝負は　丶
　ひそ〳〵ならす雨袖の鐚　丸
箕輪田の鯉網提て母を訪ひ　丶
　華とはよばぬ春の來て居る　曉
淡雪の晴ればかすむ山の端や　丶
　御影供戻りを鬼の待ぶせ　丸
搦手に奇楠の狼烟をくはつと揚ヶ　丶
　連理の枝を子規たつ　曉
ひた〳〵と堤をこゆる皐月水　丶
　小五合過た西仕が聲　丸
堪忍のなる堪忍が堪忍歟　丶
　風呂屋の額のよくも出來たり　曉
夜も袖を返す往來の大江橋　丶
　仲麿にこの月が見せたい　丸
たび宿の干瓢汁も炊くれて　丶
　籾の莚にあさる鶏　曉
頓而うつす唐の戯場の地つもりや　丶
　二朱判かぞふ四十くらがり　丸
和尚にも頭巾で御目にかゝるなり　丶
　あたるよりはや行違ふ舟　曉
繪に在す其名も花の与謝蕪村　丸
　仰ばかすむ高き山〳〵　筆

薩埵宮にのぼりて

月に漕ぐ呉人はしらじ江鮭　蕪村
　あぼしにならふ笘の秋され　曉臺
窓近き萩の茂り葉うらがれて　几董
　雨になるべき風起りけり　騏道

下略

むかし園城寺にて風詠したる一巻、三師はとく物故し給ひ、我ひとり存せり。ことし蕪叟十七回忌の靈前に向ひ、諷經にかへんといふ。　青雲居

与謝の翁の昔をしのぶ

夜半の雪たゞ眞白也道しるべ　青莪

文臺にたつ佛や冬の月　露洲

蜀道の書圖を祭りて、猶此叟の風
韻をしたふ

見詰れば睡に散りぬ棧の雪　廿三

蕪村居士の十七回に
春夜叟の昔もしのばれて

から檜葉の面影かれず霜寒し　士川
　雁もふた夜の月冴て啼　紫曉
潮炊(マヽ)しの飯にも馴るゝ潮待や　丶
　咄し半を笑ひ吹出す　川
ましぐらと杜秤にかゝれる角力取　丶
　烁の小雨のはるゝともなき　曉
かしら煩む迄に木犀匂ふらん　丶
　あつ湯に洗ふ白粉の皃　川
品川に戀といふ字を覺そめ　丶
　けに子規かしましき程　曉
風わたる柏やかなめもさら／＼と　丶
　墨入直す桃青の墳　川
俳諧にこがね花咲みのゝ春　丶
　川／＼のぼる鮎も日増り　曉
四季の月四ひらの紙に望まれて　丶
　泡盛の香の翠簾をもれ來る　川
小睡に烏帽子傾く能登守　丶
　蜚を追れて木兎の啼　曉
初雪の降もとげざる竹村や　丶
　十挺立の造り千石　丶
腹な子に名を付られて耻しき　川
　薩摩南草の烟輪をふく　丶
くれんとす後の皐月の暮かねて　曉
　我身を責るわたし守哉　川
不自由さもかく面白き哥枕　曉
　念佛と中隱し藝あり　川
年忘すがきおとして歸りたり　故人竹亭
　やゝほころびて寒き梅が香　曉

師走月清少納言おもやせて　川
　闇を透見の魂も奪ふか　曉
南に西に分れてたつ鳥　ゝ
　小ざゝが中に松の常盤木　川
藥罐茶のねぢきるばかりいろぞ濃き　曉
　二日灸をあながちにやく　川
まめで居て又吊ばやと花心　曉
　蝶に燕の友も替らず　ゝ

附錄四季混雜

見はてぬに老を覺し鵜飼かな　文暢
水鷄なけさのみ寐られぬ夜でもなし　可董
はれ行と見し夢さめて朝時雨　春坡
冬の月大江の岸に蠣を割　熊三
青柳や傘に日のさす雨の中　春峰
初雁や文よむ軒の月明り　比良
春の夜や袴ながらの肘枕　三蝶
白けしに十方暮のあらし哉　春花
露草や名をよごしたる花の色　都雀
夕風はこれより見ゆる初紅葉　月峰
更衣綿ふき出せし戻り哉　土卯
春の戀短夜なれぬ恨かな　定雅
晝からの梅のみだれや風の筋　重厚
乙鳥の囀や世をうれしげに　善光寺柳莊
春の日のさしふさぎたる戶口哉　希言
鸎（テリウソ）の聲に夕づく霞かな　左皐
青柳や門さき迄は人も來る　如嵐

觀流舍に宿して
對酌の卽興　三蝶

秋の日の比叡に殘て戶ざしたり
　親子濱田の稻荷ひ行　紫曉
二羽くれし一羽の雁のあたゝかに　ゝ
　鑓の稽古のたゞ果しなき　蝶
書院さき月に落葉のちら付て　ゝ
　流るゝ水も氷初けり　曉

旅をおもふ諏訪や狐のわたる頃　丶
　今さらにゆかし脩の哥よみ　蝶
ひゞき止メば鳴り止メば又鳴る時の鐘　暁
　鐙かたけて道急ぐなり　蝶
居つゞけの果はうけ出す濃紫　暁
　小袖の伊達もふたり好し　蝶
青〱と芦分をぶね風そよぐ　暁
　月に乾し宵の白雨　蝶
神僊すみやしろ遠く人避て　暁
　いま蒸立る三石の米　蝶
もの音のかよひて花や雪と散ル　暁
　巣を守りつゝも鳥の囀り　蝶
山際の寺もあなたに霞なり　丶
　いで宗鑑をけふは訪ばや　暁
乗物の熊の毛蒲團指さして　蝶
　埃りはらひつ錺る店さき　暁
ころ〱と轉げて落る籠枕　蝶
　五七は雨か四は日照歟　暁
一頻寐られぬ夜の長ふなり　蝶
　戀は曲者肌寒きほど　暁
盃のひかりぞ殘るきぬ〲に　蝶
　南の芝居始りをうつ　暁
かさね着る羽織におもき初みぞれ　蝶
　鳶のまたるゝ杉の下枝　暁
山深くぬかづく三輪の神さびて　丶
　よごれし儘の力石あり　蝶
ざれ哥の唱哥もわかぬ酒機嫌　丶
　十は若くも見ゆる作次郎　暁
立春のあしたにひらく花暦　丶
　この面かの面も寶引の綱　筆

蜂拂ふ人愚なりけしの花　尼ケ崎　春洲
霧雨やまだ洛中は戸も明ず　丶　春臺
白帋を蟹の曳行汐干哉　江高島太田　二在
朝がほやこゝろに欲も出來ぬうち　同川嶋　里雀

菊を畫し手あぶりに賛を乞はれて

薫のにほひ添ばや霜の菊　播磨 安歩
鴈寒し闇の鵜殿の舟よばひ、布舟
雪ぞらの月夜は春に似たるかな、右契
寒ぎくや障ればうごく蝶の羽、玉屑

蟾蜍之賦

蟇よ蟇よ。爾が生たるを數ても、春雨の蕭然と黄昏るゝ頃より、浴室の流溝を出て面を傾け、食の責キをかなしむ。蛙は雲を起し雨をくだして竜のおもひをなし、紵青施紫天蛤魚と名づく。さりとて爾は形大にしてそのたくみなく、只草底に入て暑日を避、夕がほの花咲初て垣根に遊ぶ。魂むかふ火の影には擂待の茶がらをいたゞき、蚯蚓の處を窺ひ、あるは礎にいさゝかの眠を驚され、井邊に出て又その人を驚す。何すれぞ一をも喜をなさず。また憎むべき事もなく、既に月の名にかられて玉蟾・蟾光と呼る。聲の發しがたきは、かの口故に蛇にのまるといふ諺に耻てなるべし。終に雪霜の侵を感じて落葉にかくる。腹のふくれしはいかなる故ぞや。　万升舎 春花

そしられて嘘か鳴かうつら蟇

陽炎や草にとゞまる雪の魂　城南林 下方
合観(歡)も又一風情なり月今宵　藝州 可友
更衣懐にふく晝の風　仙台 柏翠
蜩や三日月白き松の影　江八幡 芳志
やがて戀にうかるゝ猫の巨燵哉　池田 蚊童
そゞろ氣やまづ柳より朧月　湖南 五來
時雨來て風そふ雲の日なみ哉　芦涯
眉の毛はのびぬもの也冬籠　其成
生駒山夕日殘してしぐれけり　橘仙

黄昏よりなには江に舟をうかべて各酔中の即興

追出せば一羽なりけり行〳〵子　友國
芦の葉分に早苗とる影　紫暁

夕風にむら／＼雲を吹込て　廿、三
翁の門ドははや月になる　國
うち被ぐ絲の帋子の衾所心　曉
小萩の露にそゝぐ五器皿　三
御たふさの烟を拜む山の寺　國
猶俤の閉る目にたつ　曉
弱／＼とつちの終の日斜に　三
時雨の笻に蚫かけたり　國
問返しても聞なれぬ人の名や　曉
都うつしの沙汰の近く　三
繪莚にはらからの子を踊らせて　國
仇ある家の酒も身に入　曉
樋をおとす水に五日の月の弓　三
何のまつりか篠に火ともす　國
九郎介に一位を賜ふ花も今　曉
江戸紫の袖かへす春　三

かく句をつぐまゝに三更の鐘すみわたれば、舟をもとの岸にもどす。

わか菜籠のゝはじめに手はこまず　江戸 春蟻
稲妻のこぼれて咲か女郎花　、午心
さゝぶねや螢出違ふかきつばた　、巣兆
夕しぐれ日のさす山の國境　、紗言
春の夜を上戸の中に明しけり　、成美
いざよひや辻に身を賣る袖の闇　、完來

良夜光なうしなふ

月の雲あなたの儘にさへならず　三刕吉田 木朶
なでしこにはげしき日影かゝるなり　甲刕 可都里
分別もなく朝がほを見てゐたり　浪華 尺艾
夕すゞみ柳の筋に人見ゆる　、升六
冬椿折手に霜の流れけり　、廿三
うつ水も露置さまや夏の菊　、巴江
いかめしき毛見の衿這ふいなご哉　、有隣
長月の闇しら菊に見られけり　、半輪
雨乞のけふはくやしき月見哉　、二柳

仲丸畫賛

月見れば是ほどの人里ごゝろ　、大江丸

厠より奇楠の香もるゝ牡丹哉　　攝津 士川
淺川や稻より戻す水の音　、士喬
時雨來て景色に富り高雄山　、士巧

浪花を登るに、淀とおぼしく夜明たり

霧の海の水底曳や淀の舟　、士流
作り人は其味しらず初茄子　、青牛
夕立や壁と落たる蔦かづら　、二松

自徹

種すてゝいよ〳〵輕きふくべ哉　　柴庵 道立
菊の香や世をいろ〳〵に住なれし　　湖南 龜梁
夕ぐれの戸口に近し秋の山　、紀友連 武松
近江路や雁啼さかる夜は深し　、太椤
澁柹に片山里の天氣かな　　馬涯連 宇洋
おもひ切て戻る戀あり子規　　攝津 芦兮
秋の色柳の枝に暮かゝる　　浪花 鱸千

薙髮せし人へ申贈る

邪魔な葉は風に掃せて冬の月　　浦凉

知れし事といへど淋しき時雨哉　　湖南 梅亭
はなれ鶴と見れば柳の梢より　　但馬 黑人
風はまだ地に落ぬなり銀河　、成章
海吹とおもひ寐し夜やなく千鳥　、狼尼
何の木か折るゝ音して野分哉　、盤礎
風か人か雪に寐ぬ夜の戸を敲　、梁岐
若鮎や流るゝ苞にすれ違ふ　、如牧
一枝は隣から見るさくら哉　　草等
菊の花酒のさかなとしぐれけり　　青裘
稻かけて姿たりけり一木松　　東武 道彥

大江・半化の兩翁と共に、長喜庵に遊びし妖夜の三吟あり。はや其ひとり罔叟は故人となりて、ことし三とせの[illegible]の故亭のしいばれて、遺稿を爰に寫し侍るにも、そゞろに泪を落しぬ

月落て五更のうづら高啼す　大江丸
しぐるゝばかり丘野邊の露　紫曉
紅キも目覺ぬ秋をたち盡し　蘭更
輕きを專に小キ脇指　丸
とだへてハ又とだへてハ能の果　曉
鳥の毛なんど多く吹散ル　更
夏の山佛をよばふ谺して　丸
鍬に光るは黄金かあらぬ歟　曉
女房の夢物がたり夜をかさね　更
まだ子をもたぬ應仁の末　丸
風雲の風にもならず雨そほつ　曉
いのれば釜の又うなるなり　更
蒲燒の陶月に取おとし　丸
舟の寐ざめの肌寒きまゝ　曉
どの村か角力の音の今聞へ　更
續くひよりの二日三日四日　丸
手折らするぬしも花なる輿の内　曉
蜂包しは誰ガ情ぞや　更

西寺の茶もりに參る夕まぐれ　丸
世並もよげに捨しいも神　曉
降かゝる雪を烏のほりかへし　更
十とせ迷へるほ句に膝うつ　丸
荅して出れどあるじ不レ言　曉
扶桑へ歸る船の纜　更
一丈の髪筋は誰ガ血を分し　丸
窺ふ燭も風さそふ也　曉
門守に待し恨をつたへ置　更
をのこは戀に愚なりける　丸
小ざゝ原夕月かゝる雨のはれ　曉
卒都婆の蔦を又ほどかばや　更
我からと虫あしもとを去やらず　丸
當にしてきし來山は留主　曉
三人の酒價もいつか盗れたり　更
たらり／＼とまた鐘が鳴ル　丸
夜の花外の明りは添ひもせで　更
起も寐もせずかたり合ふ春　曉

草くゞる清水にぬれぬ牛の鼻　播磨 五芳
沼の香の翠簾に目出度あやめ哉　、逸等
木庭山の下に船をうかべ、釣魚を煮る
箏や釜中に躍る魚の名も　、安歩
雪見舞背戸門掃て歸りけり　江舟木 圓丈
恐しき夜や明てある露の上　馬印
蹲る人かげ見えて夕しぐれ　管鳥
しぐるゝや沖は日和の眞帆片帆　女 紫蘭
牡丹にも障子越なり冬の蝶　女 磯江
入械も別頭よ諸宗無得道　八十二翁 嘯山
梅つほにみなむつましき寒かな　十六歲 雨靜
つちくれもその塊や冬牡丹　十七歲 菁山
たちばなの氏經る里や歸花　十八歲 御道
鮟鱇や都の軒の哥ぶくろ　十歲 完虎
江戸の客と共になしつぼの
五人男ともいふべからむ

冴ゝて月尖はず霜のそら　二十歲 可董
峰にひとりさびしかをれも雪の松　八十翁 大江丸
秋冬吟
日の辻も淋しき秌のはじめ哉
名に聞てけふこそ見つれわれもかう
あだ華の糸瓜に蝶のそら寐かな
秌暑や千代の古道牛續く
川音も吹上る夜をなくちどり
蕣の嫩くぐるゝ垣根かな
うば玉の夜明て三輪の煠拂
川口の雪いく筋や碇綱
紫曉

京四條通河原町西入
書林　勝田喜右衛門

（晋風曰、原本の扉に棋亭鈺鼎の疏書及び本文中に沙門月峰筆梅のさし繪がある、今こゝに畧す。大正十三年六月露石文庫本より筆寫したものにより、更に河東碧梧桐氏の筆寫本を借覽して校合するを得た。氏の好意を謝する。）

通　說

芭蕉時代の俳諧を見て——芭蕉の歿後、誤られたる芭蕉の模倣と俳道の通俗化とを見て——次に蕪村時代に眼を移すものは、恰も夜の明けたやうな爽快さと新鮮さとを感ずるであらう。蕪村時代は或意味に於て、芭蕉の俳道の正しき復興を志したものであるけれども、單に復興の爲の復興ではなくて、其上にもう一つ新しい世界を創造しようといふ意氣込みが燃えあがつてゐる、而して之を立派に實現せしめたものこそ、蕪村及び其一黨である。殊にその發句に於てさうである。私は爰に、先づ蕪村の發句を觀察しよう——。

芭蕉及び其時代の發句と、蕪村の發句とを較べて見ると、前者は水墨の世界であるが、後者は色彩の世界であり、又、前者は平面の世界であるが、後者は立體の世界であり、又、前者は靜の世界であるが、後者は動の世界であるといふ程の相違がある。此の新しい世界の開顯は蕪村の力に依て創出せられたものであつて、しかも蕪村亡き後は此の新しい世界の模倣をすら爲し得るものがなかつたといふ事實は、如何に蕪村の天才が稀代のものであつたかを證して餘りがある。私は說明の便宜の爲に、蕪村の發句の特色として左に三つの點を擧げたい。

一、取材の自由なる事　　芭蕉の所謂「さび」とは「さびしさ」と同義ではないけれども、自然を觀照する上に明徹を期する心はおのづから閑寂を好み、しぶみを愛する所から、發句の取材としては人間臭から遠い風物を取り、葛藤を離れたる單純なる感興をうたふといふ傾きになつてゐる。所が蕪村の發句では、人間臭大に可なり、人生の葛藤も面白い、何ものか句材にならざるものがあらうぞと云ふ風な行き方である。

少年の矢數問ひ寄る念者ぶり　蕪村
お手打の夫婦なりしを更衣　同
討はたす梵論連立ちて夏野哉　同
追剝を弟子に剃りけり秋の旅　同

衆道、姦通事件、敵討、盜人の發心と取材の廣くして自由なる事驚くべきである。尤も、芭蕉時代に於ても、連句の上では其取材の縱横自在なる事、めざましい程であつたけれども、發句一首の上で斯樣な濶達な振舞は思ひも及ばなかつた所である。その上、芭蕉の句は、多く一人稱的であつて、自己の體驗を詠じてゐる、そこに實感の力強さがあるのだけれども、藝術としては非常に狹い、且つ行詰り易い。此行詰りから、發句といふものが兎もすれば觀念的な知識的な非詩にすべり込み易いとすれば、寧ろ奔放なる空想を許して、純然たるロマンチックな耽美の詩境にはけ口を開いておく方が、どれだけか安全であり、且つ藝術味を豐かにする所以でもある。

蘭夕べ狐のくれし奇楠を炷ん　蕪村
鞘はしる友切丸やほとゝぎす　同

凡手のくだらない實感よりも、名人の空想の方が藝術として遙かに眞實味に富んでゐるといふ事は、俳句の上に於ても云へるのである。

二、觀察の精緻なる事　芭蕉の發句には凝視の心の澄んだものがある、諦觀の眼の冴えたものがある。けれども、其物の質の微に入り、其物の形の細を寫すといふ事は未だ充分研究されるに到らなかつたのである。單に微細を察するばかりではなく、其情趣の機軸を捉へ、其事象の中心を指すといふ行き方に於て、蕪村は實に鋭いものを見せてゐる。

牡丹散つて打かさなりぬ二三片　　蕪村
朝風に毛をふかれゐる毛蟲かな　　同
夕風や水青鷺の脛をうつ　　同
飛蟻とぶや富士の裾野の小家より　　同

「牡丹散て」の句は二三片といふ小さい事を數へたが故にのみ精緻なるのではない、牡丹といふものゝ性態を適確に寫して動かない所が精緻なのである。「朝風に」の句は毛蟲の如き嫌惡せらるべき一生物をとつて、其を之ほど美しく寫象してゐる、其毛の一本一本を銀の細い線で描いてゐる圖の精巧さを思はせる。「夕風や」の句は芭蕉の「汐越や鶴脛ぬれて海すゞし」と比べれば、その精と粗との差は明かであらう、「夕風」といふ語から水の上に漂ふ夕暮の色、小さく尖り立つ波の形、ペチョ〳〵といふ音など、さういふ感覺的のものは、芭蕉の「汐越」の句では全く味ふことの出來ぬものではないか。「飛蟻とぶや」の句は富士のやうな大景を寫して粗大に失せず、羽蟻といふ小さなものが小に失せず、配合對照の妙をきはめてゐる、是は實に好く其の焦點を捉へてゐるからである。

卯の花や庵へ寢に來る小商人　　蕪村
羽織着て綱もきく夜や川千鳥　　同

蕪村の句が複雜なる人事を取扱つてゐながら、少しも混雜を來さずに、名刀を以て兩斷したやうな冴えを見せてゐるのも、畢竟、觀察が精緻であつて、其焦點を捉へることを誤らない爲である。而して其焦點は往々、季の言葉に置かれる。右の「卯の花」「川千鳥」の如きが其である。當今の所謂、季題趣味といふものは、（季題制度の意味でなく云へば）蕪村風の行き方から其傾向を濃くしたものと云つても差支ない。

三、表現の巧妙なる事　如何に其觀察が精緻を極めても其表現が之に適隨しなければ其精緻さが生きて來ない。又、表現が表現として練達して行けば觀察もおのづから精緻とならざるをえない。宛も管てなききれ味の刀を以てすれば嘗てなき微細な解剖も出來る譯。其意味に於て表現の巧妙さは新しい世界を切つて出す上に大きな力がある。

しのゝめや鵜をのがれたる魚淺し　蕪　村

鹿ながら山影門に入る日かな　同

此魚淺しの細かさ、鹿ながらの巧みさ、芭蕉時代の作では之ほどに切込んで表現する事は能うしなかつた所である。尤も、巧妙といふ事は甲よりも乙は巧妙、乙よりも丙は巧妙といふ風な比較の語であつて、蕪村一家の特色として擧げるには不適當のやうでもあるが、私の云ひたいのは、蕪村は此の巧妙さ其物を殊に意識的に出さうとしてをり、其句を讀む者も亦、其巧妙さといふ味を味つて滿足するといふ點である。

すゞしさや鐘をはなるゝ鐘の聲　蕪　村

をちこちをちこちとうつ砧かな　同

是等の句から第一に感ずる所は「うまいな」といふ事である。其句が表象してゐる自然の感じ、若くは其自然と作者が同化してゐる感じに引付けられるのではなくて、作者が如何にも巧みに云ひ得てゐる其上手さを賞するのである。

虹を吐いて開かんとする牡丹かな　蕪　村

心太さかしまに銀河三千尺　同

斯く誇張して作つたものも、其が自然とか不自然とか感ずる前に、其表現の巧みさに蠱惑されてしまふのである。

山は暮れて野は黄昏の薄かな　蕪　村

五月雨や大河を前に家二軒　　同

是等の句は實に壯大であり、一誦して豪壯な感じさへするが、「山は」の句は山は――野はと對照して置いた言葉の巧みさから、「五月雨」の句はを――にのテニハのしまり方から其感じを出してゐるので、主として表現の巧妙さを以て生かしたものなのである。

取材の自由なる事、觀察の精緻なる事、表現の巧妙なる事――譬へば三面六臂である。彼の捉へるものが何とならざるはなく、眞に咳唾玉をなすの觀がある。斯くて蕪村は、芭蕉以後に因循し沈滯しきつてゐた俳境を引き起こして、之に新しい生命を附與した、其功績は甚大であつて、俳壇の中興といふ名は、蕪村一人に冠せしめても敢て過當でないと思ふ。上にも一言した如く、蕪村以後は、蕪村の句を味ひ得る者すら殆んど無く、されば之を模倣しようとする程の者もなく、まして之を基礎として其上に新しい金字塔を建てようとする者もなく、之ほどの蕪村の名が（一方に其畫名に蔽はれた爲もあらうが）俳壇からは殆んど埋沒されてしまひさうになつたのも不思議な位である。其を新しく認め、新しく驚き、之に新しい力を得たのが子規であつて、それから明治俳壇の革新といふ烽火が擧げられたのである。されば、今日の俳句界は傳統的に云へば蕪村に負ふ所が多く、蕪村も亦地下に微笑をして居る事であらうが、然し、明治の俳句界が結局、蕪村の模倣に終つて新時代として何等の特色を發揮し得なかつた事は、如何にも意氣地ない事ぢやと、地下の蕪村は寧ろ苦笑してゐるのではないかと思はれる。そこで、私をして云はしむれば、蕪村の發句は實に學ぶべき所が多いけれども、蕪村の發句の長所は其短所とも通ずるといふ事も亦知らねばならない。第一に、蕪村の句が取材に自由なる事は、材を取るといふ其事に一句の動機を置くやうになる、主題的になる、趣向的になる、構想的になる、對象を如何に見るかといふ事よりも、何を捉へたかといふ事に力點を置くやうになる、それでは藝術

の第一義と離れる。取材の自由なる事は何處までもさうなければならぬのではあるが、自由なればあさる氣持になる、深く潜み難いといふ弊に注意すべきである。第二に、蕪村の句が觀察に精緻なる事は、物を物として寫すといふ其事に一句の興味をかけるやうになる、其物を自分の心の中に見て其に生命を感ずるのではなく、其物には其物として見ての趣味があるとする、これ物質的な見方、趣味的な見方である、蕪村風から出發したる今日の俳句界では趣味的といふ言葉が好い意味に用ひられてゐるけれども、之は矢張り藝術としては第二義であつて、須く生命的でなければいけないのである。第三に、蕪村の句が表現に巧妙なる事は、其流を追ふものをして、餘りにも上手さを重んぜしむる弊を作る、藝術は、「藝」なのだから、所謂下手くそは問題にならないこと勿論であるが、上手にといふことを目標として、巧みに云ひこなさうといふ意識が勝つのはよろしくない。藝術の生命は感ずる事にあるのだから、其感じを活かす爲の表現でなければならない。其感じ以上のものを表現の巧みさから作り出して行くのは、技巧が勝ちすぎるといふ、蕪村にはさういふ弊もないとは云はれないのである。

以上、述べた所は、本書の「蕪村俳句類聚」を一讀する方の爲にほんのイントロダクションとしてゞあつて、蕪村の句は翫味すればする程、詩味の津々として盡きざるものを感ずるであらう。明治以後の蕪村風再興も、未だ全蕪村に亘らざる憾がなくもない。現今句作する人々はもう一層深く蕪村を研究して、もう一層蕪村に肉迫する要がありはしないか。それでこそ、蕪村のほんとうに好い所から本質的に教へられもするし、又蕪村的なる弊所といふ點も内省する事が出來る譯であらうと思ふ。本書には「蕪村俳句異同考」も附してある。之を見ると、蕪村がどういふ風に自作を推敲商量したかといふ事を通して、彼の句作上の技倆も、又、その缺點もはつきりと解るのである。

〔春雨や同車の君のさゞめごと

ゆく春や同車の君のさゞめごと

斯ういふ風に推敲してゐる。「同車の君のさゞめごと」といふ事が云ひたい、そこに此句の動機がある。それを云ふ爲に、「春雨」か「ゆく春」かどちらを置く方が有効かといふ問題を商量してゐる。從て、「行春」「春雨」などいふ言葉が趣味的に價値づけられてくる。其句が全體として生命的に盛上つてきたものでなくて、趣味的な遊び、ゆとりがあるのは此點である。

さみだれや田毎の闇となりにけり
おとし水田毎の闇となりにけり

此句の如き、上五字の置き方に依て、全然句の趣が反轉されてゐる。それ程までに作者は、動機よりも成果を重んじてゐる事が解る。蕪村の句は技巧を尊重しすぎると私が云つたのは爰にも見られる。又、出所に考證を要する所があるものだけれども、此「異同考」にないものでも、

一人來て一人を訪ふや秋の暮　（遺　稿）
一人來て一人を訪ふや冬の月

水鳥や舟に菜を洗ふ女あり　（句　集）
冬川や舟に菜を洗ふ女あり

等、克明に穿鑿したならば限りないものとなるかもしれない。但し、「一人來て」の句で面白い事は、秋の暮といふと客が自分を訪ねて來た場合にきこえ、冬の月といふと、自分が友を訪ねて來た場合にきこえる事である。此句も「一人來て一人を……」と言葉を疊んだ所に、技巧があつて、其技巧が勝ちすぎた爲に、却て作者の本當の心持が適確に

出ないのである。凡て蕪村の句は、斯く巧みさを眼目としてゐるから、作者としては、好く出來た作だけを後世に殘しておきたく、拙い句は葬つてしまひたかつたに違ひない。今日、蕪村を崇拜するあまりに、彼の遺草を掘り出して來て端から發表する事を知つたらば、彼は大に迷惑を感ずるだらうと思はれる。——彼の隨筆「新花摘」の中にも「發句集は出さずともあれなど覺ゆれ、句集出てのち、すべて日來の聲譽を減ずるもの也、玄峰集、麥林集などもかんばせなきこゝちせらるれ、況や汎々の輩は論ずべくもあらず、よき句といふものはきはめて得がたきものなり」といつてゐる——。此意味から、彼の門弟、几董が編したる「蕪村句集」は、好く彼の句を撰みすぐつてあつて、恐らく彼の遺志に沿ふたものであらう。子規が云ふてゐたかと思ふ、芭蕉の句は眞に佳きもの其十中の一二に過ぎず、蕪村の句は惡しきもの十中の一二にも足らずと。まことに、古今を通じての發句集中、粒が揃つてゐるといふ點で「蕪村句集」ほど粒の揃つてゐるものは他にないのである。然し此「蕪村句集」中にはずゐぶん難しい句がある。それは、多く古典趣味のものであつて、解らないとはつまり古典に通じないからこそ解らないのであるから、其爲に乙二の「蕪村發句解」のやうな書の出來てゐることは確かに有益である。然し、假に、斯様な古典趣味の句が全部解らぬものとして、其等の句を省いて、「蕪村句集」を讀んだとしても、蕪村の句のもつ藝術味や蕪村のえらさには少しの動搖をも來さないやうに思はれるのである。

次に、蕪村の連句として本書に輯められた「蕪村連句選集」を見ようが、此中にある蕪村の付句は發句の光彩陸離たるのに比べて、甚だ精彩の乏しい觀がある。蕪村の如き濶達自在な句作ぶりの人は、連句に於てこそ、其鬼才を充分に發揮して人を驚かすであらうと想像されるのに、事實は之に反してゐる。彼の付句は割合に平常であつて、飛躍さが足らず、其技巧も其場其場をこなしてゆくだけで、天地を一轉させるやうな活機を缺いてゐる。彼の發句的の力量か

ら推せば、之は合點のゆかぬ事である。然しながら、又考へれば、之こそ當然のやうに思はれる。といふのは、彼の發句其ものが既に連句的なのであつて、連句的の手腕を揮ふべきところを其發句に於て發し盡してゐるのだから、連句となると却て氣がぬけるといふ譯であらう。

朝日奈が曾我を訪ふ日や初鰹　蕪村

初鰹を買つて酒もりでもしようといふ前句があつて、次に朝日奈が曾我を訪ひ寄つたといふ付句をする、さういふ連句の呼吸を、此句は一句の中に片付けてしまつてゐる。

麥秋や一夜はとまる甥の法師　蕪村

麥の取入れ時で忙しい百姓家のさまを寫した前句に「甥の法師の一夜とまりて」と付けるやうな場合を獨吟的に發句としてらちを明けてゐる。發句が連句の領域へ切込んで來てゐる。それだけ發句としては進步してゐる代りに、連句の方では働きばえがしない事になつてくる。尤も、斯ういへば、芭蕉の發句にある配合的なるもの――「山里は萬歲おそし梅の花」といふ如き――も、芭蕉以前の風に比ぶれば、連句の二句を一首としたやうな味だといはれぬ事もないけれども、芭蕉時代の發句は其取材が所謂風雅なるものに限られてゐた爲め、藝術的衝動の鬱屈した心を、連句の上で思ふさま羽ばたかせるといふ氣持があつた。さうした鬱屈したものが、蕪村に到つてはかなり取除かれてしまつた其事が、蕪村一派の連句の却て活氣に乏しい所以となつたのだと私は考へるのである。

若葉が末に沖の白雲　几董

松が枝は藤の紫咲のこり　樗良

念佛申して死ぬばかり也　蕪村

×

若殿ばらの遠矢射る見ゆ　　蕪村
昆布卷の鯡しはぶる旅なれや　　一音
佐渡の聯句に海わたるべく　　蕪村

×

兎唇の妻のたゞ泣になく　　蕪村
鐘鑄ある花のみてらに髮きりて　　几董
春のゆくゑの西にかたぶく　　蕪村

×

三つに疊んで投るさむしろ　　蕪村
西國の手形うけ取小日のくれ　　几董
貧しき葬の足はやに行　　蕪村

蕪村の連句、決して惡くはない事は右に擧げた所でも解るけれども、芭蕉が猿蓑や炭俵で示したやうな七擒八縱底の働きを見た眼を以てすると、どうも見劣りされるのである。そこで私は連句よりも自由なる連作として蕪村が初めて試みた所の一體を擧げたい。

北壽老仙をいたむ

君あしたに去ぬ、ゆうべのこゝろ千々に何ぞはるかなる
君をおもふて岡のへに行きつ遊ぶ、をかのへ何ぞかなしき
蒲公の黄に薺のしろう咲たる、見る人ぞなき
雉子のあるか、ひたなきに鳴を聞けば、友ありき、河をへだてゝ住にき
へげのけぶりのはと打ちれば、西吹風のはげしくて、小竹原眞すげ原のかへるべきかたぞなき
友ありて河をへだてゝ住にき、けふはほろゝともなかぬ
君あしたに去ぬ、ゆうべのこゝろ千々に何ぞはるかなる
我庵のあみだ佛、ともし火もものせず、花もまいらせず、すご〳〵と彳める、今宵はことにたうとき

之は結城の北壽（晋我）が延享二年に歿したのを悼んだ心をうたつたものだが、發句を作らうとか和歌を作らうとかいふ形式的な技巧的な氣持を一切構へずして、たゞ眞情の口にあふれるまゝを言葉にうつし、然も一首にして云ひ盡しえず、あとからあとから湧出る心をそのまゝそのまゝ寫して行つたもので、一曲全篇としてリズミカルに感情の貫通してをるものがあつて、連句とは又別の味があり、非常に面白いものだと思ふ。其後、久しく經て安永六年に、彼は又此一體を試作してゐる。

春風馬堤曲　十八首

○やぶ入や浪花を出て長柄川
○春風や堤長うして家遠し

○堤ヨリ下テ摘芳草　荊與蕀塞路

荊蕀何妬情　裂裙且傷股

○溪流石點々　踏石撮香芹

多謝水上石　教儂不沾裙

○一軒の茶見世の柳老にけり

○茶店の老婆子儂(ワレ)を見て慇懃に

無恙を賀し且儂か春衣を美ム

○店中有二客　能解江南語

酒錢擲三緡　迎我讓榻去

○古驛三兩家猫兒妻を呼妻來らず

○呼雛籬外鷄　籬外草滿地

雛飛欲越籬　籬高墮三四

○春草路三叉中に捷徑あり我を迎ふ

○たんぽゝ花咲り三々五々五々は黄に

三々は白し記得す去年此路よりす

○憐ミとる蒲公莖短して乳を浥(アマセリ)

○むかし〱しきりにおもふ慈母の恩

慈母の懷袍別に春あり

○春あり成長して浪花にあり

梅は白し浪花橋邊財主の家

春情まなび得たり浪花風流(ブリ)

○鄕を辭し弟に負く身三春

本をわすれ末を取接木の梅

○故鄕春深し行々て又行々

楊柳長堤道漸くくれたり

○矯首はじめて見る故園の家黄昏

戸に倚る白髮の人弟を抱き我を待春又春

○君不見古人太祇が句

藪入の寢るやひとりの親の側

これは本書の「夜半樂」の中に載つてゐるし、又かなり名高いもので、めづらしくはないものだが、私は蕪村一代の集中で特に此一篇に注意して欲しく思ふが爲に、わざ〳〵爰に之を再錄したのである。近頃、連句の連作をすることが又流行しだしたやうで、其も面白いものには違ひないけれども、此「春風馬堤曲」のやうな（敢て漢詩と俳句とを組合せるとは限らぬ）一曲全體に脈絡があつて、一首々々に自由な形をとつたものゝ連作は一層近代的であり、新詩形としても、藝術的に一層有意義であらうと思ふのである。

次に、一代の俳豪蕪村が俳諧及び發句に就てどんな主張や意見を抱いてゐたであらうか——彼の作品を通して見れば、かなり高い自信と批判とを持つてゐたに違ひない——又、ずいぶん自恃してゐても決して不自然ではないのである——彼が夜半亭に揭げておいたといふ壁書の一節に

一、世有下稱二蕉門一者上、特不レ知二蕉翁之風韻一、其所レ吐句備所レ論、不レ脱二支麥之俗習一、稱レ之伊勢流或美濃派一可也、豈得レ曰二蕉門一乎、人號曰二田舍蕉門一知言哉

一、知二俳諧之大道一無レ他、嘯月賞花使レ遊二心於塵寰之外一、常友二蕉翁其嵐之流亞一、專以レ脱二俗氣一爲レ最（點印論）

こゝに「蕉翁之風韻」といふが、蕪村は江戶座の巴人の門統だから師傳的に云へばやゝ違ふ、其に就て、彼は其師巴人から次の如く敎へられたことを語つてゐる。

師やむかし武江の石町なる鐘樓の高く臨めるほとりに、あやしき舍りして、市中に閑をあまなひ……ある夜危座して予にしめして曰、夫俳諧のみちや、かならず師の句法に泥むべからず、時に變じ時に化し、忽焉として前後相かへりみざるがごとく有べしとぞ、予此一棒下に頓悟して、やゝはいかいの自在をしれり。（「むかしを今」の序）

こゝに俳諧といふのは連句を指して云ふのであるが、發句に於て彼が悟つた處も亦其と同じ心持からに違ひなく、芭蕉も云ふた如く、俳諧に古人なしであつて、必ずしも師の句法に泥まずして、自由自在に自分の個性を出してゆく事、それこそ眞に師の道を嗣ぐ麒麟兒だといふべきである。それで蕪村は、師道と背いて、芭蕉のさびしをりを慕つた譯だが、さうした自在な氣持は又其さびしをりのみを必ずしも追蹤せずして、自分の新しい世界を開拓してゆく心となつて生長したのである。彼は其壁書にも云ふてゐるやうに、「俗氣を脫する」といふ事を重んじてゐる。其に就て

彼は又斯う書いてゐる——

余曾テ春泥舍召波に洛西の別業に會す、波すなはち余に俳諧を問。答曰、俳諧は俗語を用て俗を離るゝを尙ぶ、俗を離れて俗を用ふ、離俗の法最かたし、かの何がしの禪師が、隻手の聲を聞けといふもの、則俳諧禪にして離俗ノ則也、波、頓悟す。却問、叟が示すところの離俗の說、其旨玄なりといへども、なを是工案をこらして我よりしてもとむるものにあらずや。しかじ、彼もしらず、我もしらず、自然に化して俗を離るゝの捷徑ありや。答曰、あり、詩を語るべし、子もとより詩を能す、他にもとむべからず。波疑テ敢テ問、夫詩と俳諧といささか其致を異にす、さるを俳諧をすてゝ詩を語れと云、迂遠なるにあらずや。答曰、畫家に去俗論あり、曰、畫去レ俗無二他ノ法一、多讀レ書、則書卷之氣上升、市俗之氣下降矣、學者其愼旃哉、それ畫の俗を去るも筆を投じて書を讀しむ、況、詩と俳諧と何の遠しとする事あらんや、波すなはち悟す。（「春泥發句集」序）

こゝに蕪村が「詩」といふのは漢詩を指して云ふのだけれども、之を今日云ふ所の廣義の「詩」の意になぞらへて讀むといゝ。卽ち、發句といふのも「詩」だ、詩の心持を以て句作するが好い、所謂發句らしさといふ「風雅」の概念などに捉へられてゐてはいけないと解すると面白いと思ふ。又、蕪村の俳諧が繪畫から影響を受けてゐる事の多いのは此言葉からも解るし、實際、彼が壯年時代は畫事に沒頭してゐたのであつて、俳諧は單に餘技に過ぎなかつた、晩年になつて夜半亭を繼ぎ、俳諧師としての門戶は張つたけれども、流俗に媚びる事は彼の性質として好まず、又彼の句風が決して通俗的ではない。で、彼は生活の資としては畫をかき、俳諧を以て金に代へようとはしなかつた。彼の句が眞に俗を離れ得た所以はそこにもある。但し、餘りに俗を離れすぎてゐて、彼の實生活といふものが、彼の發句の上には少しもあらはれて來ないといふ點が、當今の藝術觀からすれば、物足らないとも云へる。然し、之は藝術的の立脚

地が全く違ふ爲なので、蕪村に云はせれば、詩の生活は一つの別の世界であつて、實生活を出でゝさういふ世界に入つて遊ぶ、其こそ眞に生き甲斐のある生活だといふ事になるのである。で、蕪村の生活を見るには彼の書簡に依るより外はない。但馬出石の霞夫へ宛てたる手紙の一つに

（前略）去年中きぬ地代共御取集御登せ被下候かと覺申候……繪きぬ屋にもおびたゞしき借金こまり果申候……愚老儀去年中より當春へかけ長病、既に黃泉の客と存候程の仕合にて、當春へ到り候ても、一向畫業打すて置候故、家內物入其外生涯の困窮御察可被下候、それ故先づ先達のさし引事はしばらく延引置下候而、外にも畫料等御登せ被下候はゞ忝存候……盆前無間違御登せ被下候樣に旱天に雲を待心地に候……發句どころにては無之さてさて殺風景に候、雅事はあとより寬々可申承候、以上　六月廿八日（安永五年）

此返書どうぞ早く御聞せ安堵いたし候樣に御計ひ可被下候

おがみ申候

蕪村が當時、經濟的に餘裕のなかつた有樣は此やうな書簡が澤山にあるのでも解る。

さても苦しき世の中にて候……

と書いたものもある。彼は實生活の上では殆ど悲鳴をあげるばかりである。しかも、さうした時代に「新華摘」に見らるゝ如く悠々として俳三昧の世界に入つたりしてゐるのだから、彼の所謂、俗生活を離脫したる藝術境も驚嘆すべきものではないか。蕪村には一人の娘があつた。書簡で見ると――

娘も琴組入いたして餘ほど上達いたし候、寒中も彈ならし耳やかましく候、されども無事に人となり候をたのしみ申事に候

と父親らしい事を云ひ、或は又

むすめ事、二月中より左右の腕たるくいたみ候而、今にしか〳〵無之、老心をいため候、併し氣遣なる病氣にては無之由醫師被申候ゆへ安心いたし候

とも云ふてゐる。其娘は縁あつて片付いたものゝ、先方の家風が蕪村の氣に入らず、又娘自身にもつらいといふので離縁さしてしまつたのである。

むすめ事、先方爺々專ラ金もうけの事ニのみニ而しほらしき志し薄く愚意に齟齬いたし候事共多く候ゆへ取返申候、もちろん娘も先方の家風しのぎかね候や、うつ〳〵と病氣つき候故、いや〳〵金も命ありての事と不便に存候而やがて取もどし申候

娘は其から數年後、蕪村が歿する迄も再嫁せずにゐたのが、彼の心がゝりであつたらしい。「から檜葉」(夜半翁終焉記)に

かくて(天明三年)十二月半の日來は病毒下痢して惱ミ漸く癒たるに似たれども食氣欲スル事なく、心身倦勞れて日毎にたのみ少く見えけるにぞ、打よりて唯命運を祈るばかり也、妻娘の人々をはじめ月溪、梅亭の輩旦暮起臥を扶て師につかふまつるの志切なるも廿二日三日の夜はことに打うめきておはすにぞ、いと心細く覺束なくて病顏をうかゞひつゝ、後の事などいさゝかほのめかし聞えければ、いやとよ、つら〳〵來しかたをおもふに、野總奥羽の邊鄙にあつては途に煩ひ、ある時は飢もし、寒暑になやみ、うき旅の數ゝ、命つれなくからきめ見しもあまたゝびなりしが、今此帝都に居を安じ、たま〳〵病に犯さるゝといへども醫藥疎かならず、人々のまことを盡し、殘かたなき介抱も、いか成宿世の契り淺からざるをや、愚老が本懷足ル事をしれり、されど世づかぬ娘が

行末など、愛執なきにしもあらねど、なからん後はそこら二三子が情もあるらん、よしあしやなにはの事も觀念の妨なるはと物うちかつきて答なければ、せんすべなくて歸りをりぬ

享年六十八、時々病氣はしたやうだけれども、「もとより老情懶惰なりといへども老テ當ニ益々壯ナルと恒に伏波將軍が語をつぶやき行住座臥翫弄衣食に就ても矍鑠タル哉是翁也と、人もうらやみ侍りけり」と几董が書いてゐる如く、老境に入つても元氣だつたに違ひない、「夜半樂」(春風馬堤曲)や「新華摘」が成つたのは彼が六十二歳の時である。又、彼が發句の體風を見てもわかる、あのリズムの緊張したらう〳〵と響くやうな調子は肉體の弱い人の詠じ得る所ではないのである。(荻原井泉水)。

日本俳書大系　第八巻　終

昭和二年九月廿三日印刷
昭和二年九月廿八日發行

非賣品

日本俳書大系（8）

著作者　神田豐穗

發行者　東京市日本橋區數寄屋町一番地　神田豐穗

印刷者　東京市牛込區早稻田鶴巻町四〇三　谷口熊之助

印刷所　春秋社印刷所

發行所　東京市日本橋區數寄屋町・春秋社内
日本俳書大系刊行會
振替東京二六八七二・電話大手二一二四・二二一四